

岩手県埋文センター文化財調査報告書第20集

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書

松尾村長者屋敷遺跡(Ⅱ)

(遺構編Ⅱ)

— 本文編 —

(財) 岩手県埋蔵文化財センター

日 本 道 路 公 団

松尾村長者屋敷遺跡(Ⅱ)

(遺構編Ⅱ)

— 本文編 —

序

岩手県内には数多くの遺跡が存在することは広く知られている所であります。昭和55年3月の県教育委員会文化課調査によりますと、県下に所在する埋蔵文化財包蔵地は4,719ヶ所の多きとなっております。この数は今後分布調査の範囲の拡張によって更に増加するものと考えられます。この埋蔵文化財包蔵地は、我々の祖先が残してくれた貴重な文化遺産であります。この貴重な文化遺産を後世に守り伝える責務が我々に課せられているものと考えている所であります。

近年岩手県においても東北縦貫自動車道建設をはじめ、御所ダム建設等大型公共事業が実施され、その対象地内に多くの埋蔵文化財包蔵地が包括されております。これら対象地内の包蔵地について、事業実施以前に事業者と県文化課の間でその取扱い方を協議し、その保護につとめています。しかし事業とのかゝわりにおいて発掘調査を行ない記録保存とする所もでて参ります。

当センターにおいては、埋蔵文化財保護の立場に立って、これら事業にかゝわる埋蔵文化財包蔵地の発掘調査に取り組んで参りました。発掘調査によってこれまで数々の貴重な資料を得ております。例えば、集落址としては、都南村湯沢遺跡、松尾村長者屋敷遺跡、盛岡市つなぎⅢ遺跡、水沢市膳性遺跡等、遺構、遺物としては盛岡市科内遺跡の駄、足跡、弓、大型土偶など数多くございます。又これらの資料の整理、報告書の公刊についても職員一同一丸となって鋭意努力しておる所でございます。

今般、センター一丸の努力によって、ここに本報告書を刊行いたすことになりました。内容については不十分の点が多々あると思いますが、本報告がいささかでも関係各位の参考に供され、斯学向上の一助となれば幸甚と存じます。

最後に、委託者をはじめ関係各位に多大なご協力、ご援助を頂きまして厚く感謝申し上げます。今後のご指導、ご協力を合せてお願い申し上げます。

昭和56年2月

(財) 岩手県埋蔵文化財センター
理事長 新 里 盈

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター組織

役員

理事長	新里 盈	(県教育長)
副理事長	古館 尚一郎	(県教育次長)
常務理事	菅原 一郎	(県埋文センター所長)
理事	佐々木 益人	(県林業水産部長)
〃	土門 隆三	(県農政部次長)
〃	菊池 岩人	(県土木部次長)
〃	森 嘉兵衛	(岩手大学名誉教授)
〃	板橋 源	(岩手大学名誉教授・県立博物館長)
〃	草間 俊一	(岩手大学人文社会科学部長)
〃	小形 信夫	(前常務理事)
監事	熊谷 正男	(県文化課長)
〃	及川 久男	(県財務課長)

職員

所長	菅原 一郎	調査課長	瀬川 司男	専門員	三浦 謙一
総務課長	小笠原 喜一	主任専門員	近藤 宗光	〃	鈴木 隆英
庶務係長	岡沢 成治	〃	遠藤 勝博	〃	高橋 文夫
主事	佐藤 久四郎	〃	山口 了紀	〃	高橋 正之
〃	立花 多加志	〃	国生 尚	〃	種市 進
〃	及川 賀子	専門員	村上 達夫	〃	四井 謙吉
技能員	佐藤 春男	〃	畠山 靖彦	〃	吉田 洋
補助員	広瀬 陽子	〃	高橋 与右門	〃	工藤 利幸
〃	田鎖 光子	〃	鈴木 恵治	〃	光井 文行
〃	藤田 真弓	〃	小平 忠孝	〃	中川 重紀
		〃	大原 一則	〃	佐藤 勝
		〃	本沢 慎輔	〃	高橋 義介
		〃	田鎖 寿夫	〃	松野 恒夫
				〃	佐々木 清文

結 言

1. 本報告書は、岩手県岩手郡松尾村大字松尾第5地割大花森54他に所在する長者屋敷遺跡の1979年度発掘調査された遺構群の事実記載を収録したものである。長者屋敷遺跡の調査は、1978年と1979年の2ヶ年にわたって行なわれた。1978年度に調査された遺構群については、すでに当埋文センターから刊行された調査報告書第12集 松尾村長者屋敷遺跡（I）に収録されている。
2. この発掘調査は、東北縦貫自動車道建設に伴い、その工事施工にさきがけて遺跡の記録保存を図るため、日本道路公団の依頼と岩手県教育委員会文化課の要請と指導を得て、財団法人岩手県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は1979年4月9日～11月30日の期間行なわれた。
4. 調査面積は1979年29,000m²である。
5. 1979年の発掘調査によって検出された遺構数は次のとおりである。カッコ内に1978年度検出された遺構数を付した。

竪穴住居址	236棟（93棟）
大型ピット類	257基（92基）
陥し穴状遺構	（2基）
配石遺構	2基（1基）
焼土遺構	12基（4基）
土器埋設遺構	3基
遺物包含層	2個所
溝址	6条
巨岩塊群	1個所
“長者屋敷パターン”	1個所（1個所）

6. 1979年の発掘調査は、高橋信雄、高橋文夫、三浦謙一、四井謙吉、光井文行、佐藤 勝が担当した。また、4月9日～10月27日まで中村清也の協力を得た。
7. 調査および整理において、次の諸氏から御教示を賜った。
草間俊一（岩手大学教授）、小林達雄（国学院大学助教授）、佐藤二郎（大船渡農業高校教諭）、佐藤連蔵（松尾村収入役）、芹沢長介（東北大学教授）、町田 洋（都立大学助教授）、水野正好（奈良大学助教授）、村越 潔（弘前大学教授）
8. 発掘調査および整理にあたって、次の諸機関の御協力を賜った。

松尾村教育委員会、西根町教育委員会、日本道路公団西根工事事務所

9. 発掘作業には、田村吉男、高橋弥蔵の両氏のほか328名の方々に御協力いただいた。
10. 図版は、川村京子(室内整理事業員責任者)、浅沼幸子、浅沼光子、勝政タカ子、川村美保子、越場ミチエ、瀬川幸子、高橋不二、畠山静子、藤田美穂子、吉田律子、武蔵アサヨ、が担当して作成した。(アイウエオ順)

写真図版は上記の作業員と佐藤和也が担当して作成した。

11. 本書は高橋文夫と佐藤 勝が分担して執筆した。執筆期間は高橋が1980年9月中旬～1981年2月上旬まで、佐藤が1980年4月中旬～1981年2月上旬までを要した。文責は、それぞれの文末に氏名を付した各担当者にある。
12. 本報告書の執筆分担は次のとおりである。

I. 調査に至る経過……………瀬川 司男

II. 調査方法とその運営……………高橋 文夫

III. 検出遺構

(1) 竪穴住居址

E III区・F II区・F III区・G III区・G IV区・G VII区・H VI区・H VII区

I II区・I VI区・I VII区・J VII区・J VIII区・K VIII区・S III区・S IV区

T III区・T IV区・T V区……………高橋 文夫

E V区・E VI区・G VI区・H III区・H IV区・L VII区・N VII区・Q IV区

R IV区・S V区……………佐藤 勝

(2) 大型ピット類……………佐藤 勝

(3) 配石遺構……………佐藤 勝

(4) 焼土遺構……………佐藤 勝

(5) 土器埋設遺構……………佐藤 勝

(6) 溝址……………佐藤 勝

(7) 遺物包含層……………佐藤 勝

(8) 巨岩塊群……………佐藤 勝

13. 地形、地質、整理方法などの項目については、すでに刊行された『遺構編 I』に記載してあるため、本書では割愛した。また、当初掲載を予定していた「用語規定」の項目は『遺物編』で取扱うことにする。

14. 時間的な制約から執筆者間で十分な検討ができなかった。したがって、記載された内容については各執筆者の責任に帰する。また、竪穴住居址の柱穴配置など新たに確認されたものは『遺物編』に記載する予定である。

15. 本文中の敬称は省略した。

本文目次

序文

緒言

I. 調査に至る経過	2
II. 調査方法と組織	4
III. 検出遺構	13

(1) 竪穴住居址

E III区	13	E V区	15
E VI区	21	F II区	23
F III区	27	G III区	31
G IV区	44	G VI区	53
G VII区	61	H III区	65
H IV区	98	H VI区	98
H VII区	102	I II区	124
I VI区	124	I VII区	125
J VII区	139	J VIII区	176
K VIII区	179	L VII区	182
N VII区	182	Q IV区	184
R IV区	190	S III区	195
S IV区	197	S V区	214
T III区	232	T IV区	234
T V区	241		

(2) 大型ピット類

E III区	242	E VI区	243
F II区	244	F III区	245

F VI区249	G II区249
G III区250	G VI区253
G VII区259	H II区265
H III区265	H IV区266
H VI区267	H VII区278
I II区289	I VI区291
I VII区292	J VII区300
J VIII区302	K VIII区304
L VII区305	S III区307
S IV区308	S V区310
T IV区312		
(3) 配石遺構			
F II区313	H VII区314
(4) 焼土遺構			
G III区314	G VII区316
H III区316	H VI区317
H VII区317	I VII区317
J VII区318	J VIII区318
(5) 土器埋設遺構			
J VIII区319	K VIII区320
(6) 溝址			
H III区320	I III区322
(7) 遺物包含層324			
(8) 巨岩塊群327			
(9) “長者屋敷パターン”329			

あとがき

本 文

I. 調査に至る経過

東北縦貫自動車道建設にかかわる調査は、昭和47年4月より県教育委員会事務局社会教育課によって開始された。調査区間は一関―盛岡間約90kmで、47年度においては用地買収が先行した花巻工事事務所管内の金ヶ崎町、北上市、花巻市に所在する遺跡調査を行なった。しかし調査行程と工事行程との間に大幅な差のある事、東北新幹線関連遺跡も47年10月より開始された事も重なり、調査体制の整備が強く要望された。

この要望に答え、文化行政の強化のために昭和48年4月に県教育委員会事務局に新たに文化課が設置された。一方、東北縦貫自動車道建設、東北新幹線建設工事に刺激されたかのように、県内各地で大型開発が行なわれ、これに対応することが必要となってきた。しかし、調査は工事行程とのかゝりから厳冬まで行なわれ、文化庁主任調査官の水野正好氏を驚かせるという一幕もあった。この調査の強行は当然、整理活動、報告書作成への皺寄せとなり、一冊の報告書も刊行できない状態となっていった。

この事態の解決と恒久的な調査体制への指向から、昭和52年に財団法人岩手県埋蔵文化財センターが発足した。これによって県が行なうべき埋蔵文化財にかかわる調査は(財)岩手県埋蔵文化財センターが実施することになり、昭和53年度からは特別な調査を除いては全て実施している。

東北縦貫自動車道建設関連の調査は、県文化課と(財)岩手県埋蔵文化財センターの協議によって、年度としては昭和52年度、区間としては第5次区間の西根インターまでを県文化課が実施し、西根インター以北の第5次区間及びそれ以降実施される第7、8次区間は県埋蔵文化財センターが実施することとなった。

西根インター以北の遺跡に係わる調査経過をたどると、はじめに昭和48年度に2km幅の分布調査を関連公共調査の一環として県文化課及び学識経験者を中心に行なわれた。次に、49年に500m幅の分布調査が行なわれ、50年度に中心柱が打たれ路線発表後にルートに沿って再度分布調査が県文化課によって行なわれた。この時点において安代町越戸館が、ルート内に所在する事が判明し、ルート変更を強く要望した。このルート変更については日本道路公団が応じ破壊を免れた。ルート決定が終わり、県文化課と日本道路公団との間で協議が進み、昭和53年に(財)岩手県埋蔵文化財センターとの間で調査に関する委託契約が結ばれた。昭和53年度調査は、西根町、松尾村を中心に安代町の一部を行なう予定を計画した。

松尾村長者屋敷遺跡は、「遺構編I」で述べた様に、用地買収の関係や遺跡範囲の拡張によって調査計画を変更した。

昭和53年度調査は本線分のみを行なった。昭和53年末から公団、県文化課、県埋文センターによる三者協議を行ない調査計画の詰めを行なった。公団側は調査の早期終了を要望し、埋文センターは翌年度（昭和54年度）終了は不可能で2ヶ年の調査期間を要求した。昭和54年3月になって、作業員の大幅な増員による54年度内完了で合意し、部分引き渡しについては調査の進行に応じて協議することとした。なおその時点で、公団側より大きく四地区に分割しての引き渡し要望が出された。

調査は雪どけを待って行なわれ、南側段丘先端部及び沖積面から開始した。調査は掘り込みの土色と自然面との土色変化が判然とせず、開始当初から進行に支障をきたし、さらに予想を上回る遺構数と重複関係の為に難行した。また、前年度引き渡し路線幅が工事用道路となり工事用車輛の往来による作業員の事故等に気を配るなど調査員の心労も大なるものがあった。

分割による引き渡しは、公団、文化課、埋文センター、現場とで一応の計画に基づきながら協議を行ない引き渡しを行なった。その引き渡し基準は、(1)調査が完了すること、(2)航空写真撮影が完了している事、(3)次の調査に支障がない事であった。大規模調査のため、途中より応援調査員の増員を図った。7月～9月2名、9月～10月1名である。調査員、作業員の努力により2ヶ年に渉る野外調査を11月をもって完了した。

(調査課長 瀬川 司男)

II. 調査方法と組織

(1) はじめに

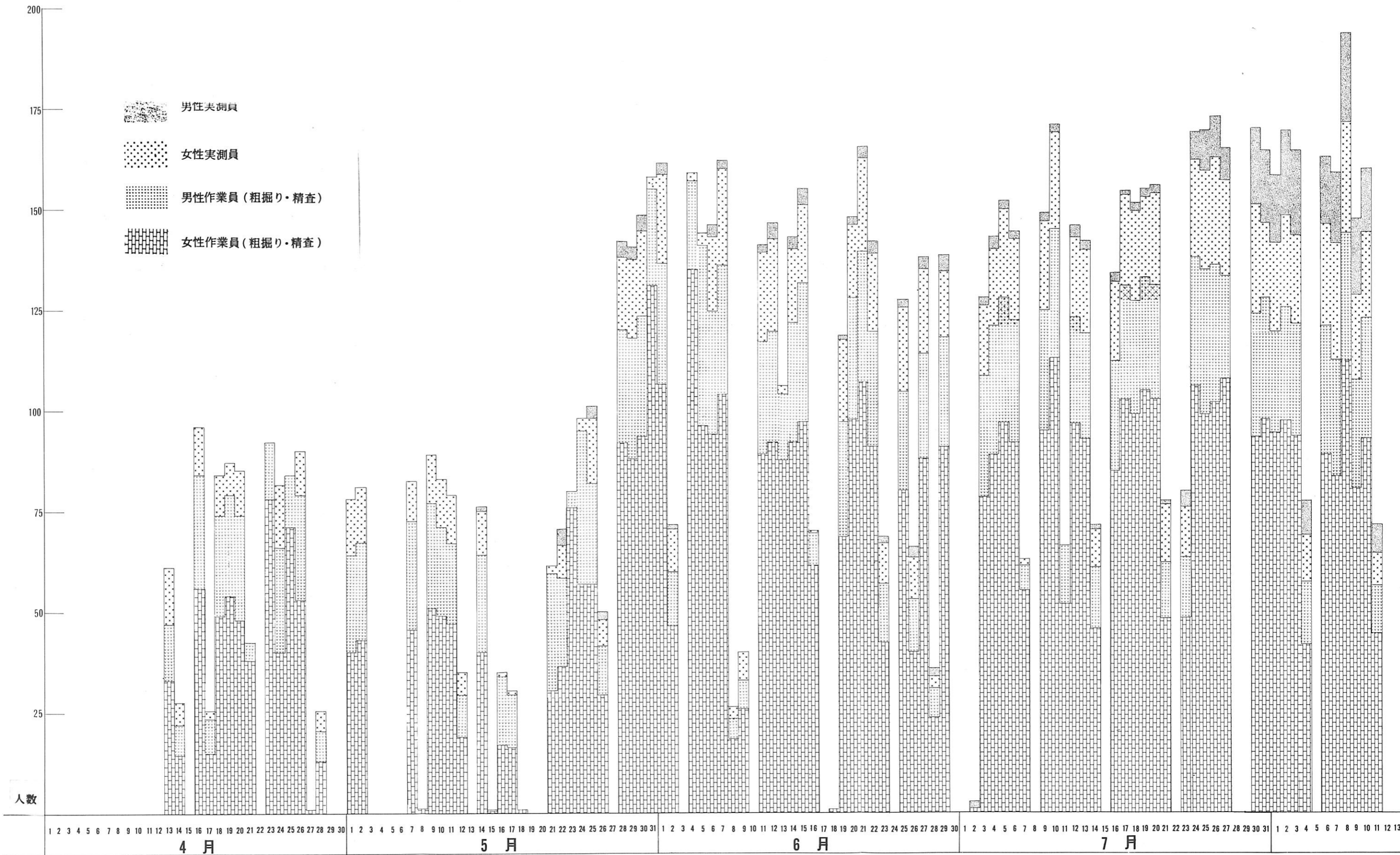
この項目では、1979年に行なわれた長者屋敷遺跡の発掘調査で展開された各種の方法について、主として野外調査に携わる調査担当者（以下、調査員と略す）の基本的な任務という観点から、その考え方や実際の側面を対象に具体的に記述することにする。調査方法や組織の内容を報告書内で具体的に述べることの必要性について、すでに筆者は湯沢遺跡の報告で触れている（高橋：1978）。湯沢遺跡に引き続き、2カ年に及ぶ長者屋敷遺跡の発掘調査でも、調査自体の大規模性からみて、そこで展開された調査方法や組織の在り方そのものが報告の一つの対象となるであろう。それとともに、常に一回性の経験である発掘調査の中で展開される各種の方法や考え方を、多数の第三者のために開放系に位置づけておくことも調査員の基本的な姿勢の一つと言えるにちがいない。

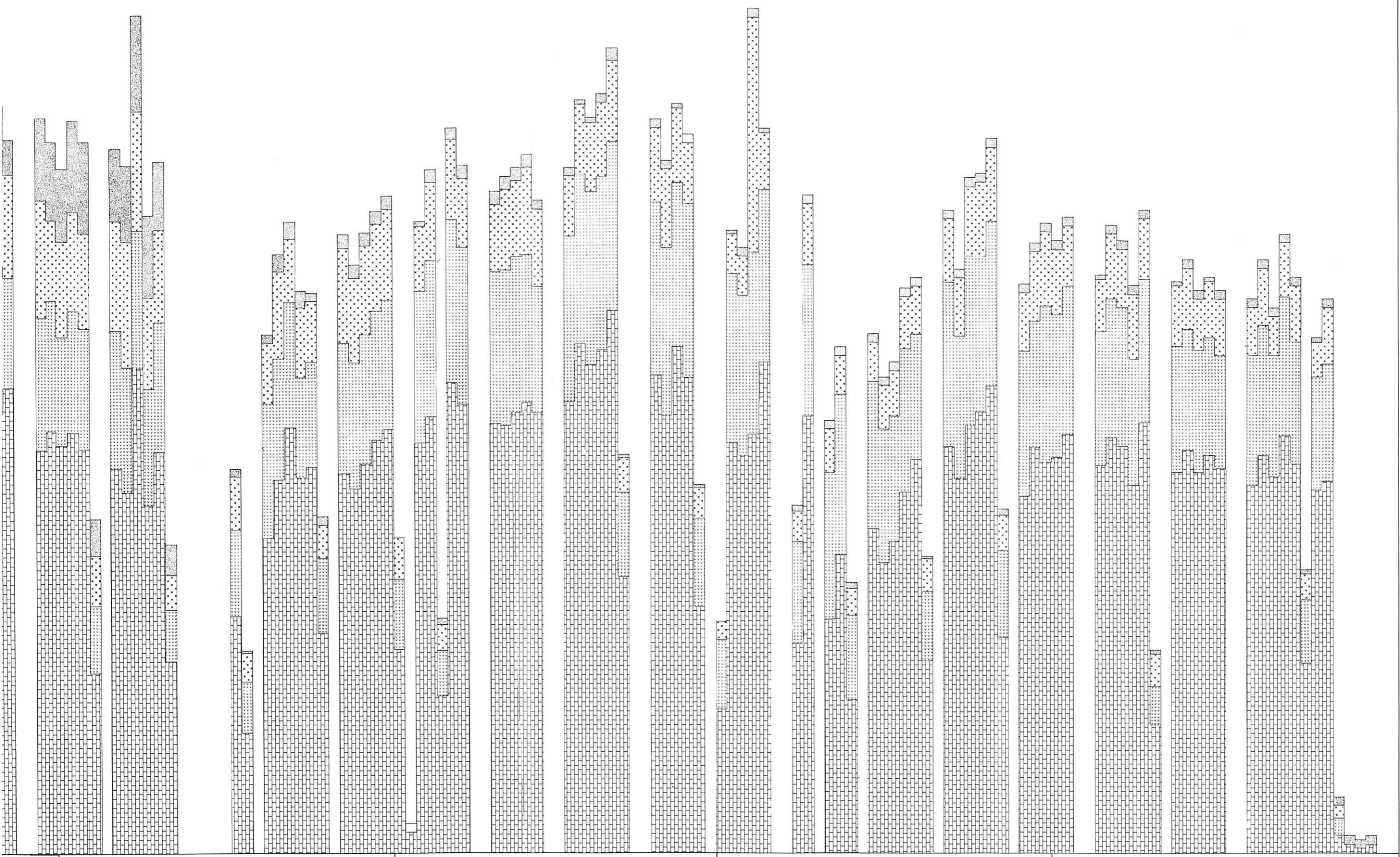
長者屋敷遺跡の発掘調査は、主に1977年の都南村湯沢遺跡での調査経験を下敷きにし、その成果と反省点を踏まえた上で行なわれた。これら2つの遺跡の調査は、現実に各地で実施されている調査の平均値を、かなりの程度にはみ出しているものであろう。この2つの調査体験を通して、遺跡からのみならず、筆者らは調査そのものからも数多くの貴重な教訓を学ぶ取ることができた。これらの教訓は、しかし、何も特別な種類のものではない。論理を押し進めてゆけば、これらの教訓や、これらの教訓を背景とした方法上の実践の多くは、おそらくフィールド・ワーカーにとってはきわめてあたりまえの事柄にすぎないものばかりであろう。例えば、そのようなものの一つに、発掘調査における調査員の本来の任務というものがある。

調査員の本来的な任務ということに関しては、ここに10人の調査員がいれば10の異った考えが提出されるかもしれない。長者屋敷遺跡調査班はこれらの点について数度の討議を重ねた上で、調査員の基本的な役割りは調査の運営的側面と情報収集的側面にあるとの共通理解に達し、その2つの側面に沿って調査を進めることにした。以下、運営面と情報収集面について、筆者らのそれらに対する考え方も混じえながら、個別的に記載することにする。

(2) 調査組織とその運営

人数の大小にかかわらず、複数の人間が集まって一つの調査を完遂しようとする時には、無駄な部分を排し効率的な運営が計られるために、先ず、調査員と作業員とを含めた人員の組織化が必要とされるであろう。殊に、大人数であればあるほど、その必要性は高まるものと言えよう。筆者らの見るかぎり、効果的な組織化がなされていないばかりに、作業員自らが個人単位で次の仕事を求めて遺跡内を右往左往しているという調査事例も多い。これでは、調査体制





27 28 29 30 31 | 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 | 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 | 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 | 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

8 月

9 月

10 月

11 月

そのものの全体の力量が半減してしまうことになる。組織化の欠如は、調査にとって否定的な要因とはなっても、決して稔りのある肯定性に転化することはない。

1979年の長者屋敷遺跡の発掘調査では、最初期の段階に、調査員と作業員とを含めた組織編成を行なった。前年に調査を経験した作業員が多数を占めていたために、この年の組織編成は比較的容易に行なうことができた。前年と同じく、作業員全員を、粗掘り班・精査班・写真班・実測班の4班に編成し、最低1名の調査員が各班の統括に当たることにした。調査の全期間を通じて、責任者である高橋信雄は、対外的な交渉や調査の基本計画の作成および調査員・作業員の全体的な統括に携った。また、田村吉男（世話人）は作業員全体の動向を掌握し、高橋弥蔵（世話人）は調査員と各班の間の連絡係をつとめた。写真班と実測班は、仕事を遂行する上である程度の高度な技術と熟練とが要求されるために人員配置は固定的なものとしたが、粗掘り班と精査班については調査の進展の状況に応じて、世話人らと相談しながら流動的に編成替えを行なった。上記の各班のほかに、遺物の水洗作業や室内整理に常に複数の作業員が専従した。なお、夏期の最盛期には、1日当たり、調査員5名・県内協力員1名・作業員200名近くが調査に従事した（作業員数については折り込みのグラフを参照のこと）。

上記が調査組織についての概要である。このように、分業体制を基本として調査が組織的かつ効率的に運営されるためには、各班の仕事の内容が明確化していることはもとより、調査員間および調査員―世話人―作業員の間で仕事に対するある程度の基礎的な合意事項が成立していなければならない。これについては調査班内部の調査員間で、機会あるごとに徹底した討論を繰り返し、運営的な面では次のようなことを確認しあった。一部は次項と重複する点もあるが、それらは、①調査地内の遺構は完全に精査すること、②効率的な運営を計るために、調査員は実測や写真撮影の仕事に直接的に従事しないこと、③指示上の混乱を防ぐために、各班に対する指示は世話人を通して、担当調査員のみが行なうこと（指示系統の一本化）、④調査員は一つの遺構にのみへばりつかず、常に全体的な把握を心がけること、⑤各担当区で疑問や問題が生じた場合には、他地区の調査員を呼集してすぐにその場でミーティングをもつこと、⑥調査員は常に作業の安全を計ること、⑦作業員間のトラブルの解決は世話人に一任すること、などの諸点である。

前記したように、調査員は、粗掘り班・精査班・写真班・実測班を分担して統括したが、主に方法の固定化を防ぐことを目的に、この分担は複数の大ブロック（30m×30mの大区画）単位で交替制とした。基本的な部分では調査方法の統一が計られていたために、調査員の交替によって調査そのものの運営に支障をきたすことはなかった。また、各作業を担当するにあたって、調査方法の展開の仕方に調査員間で大きな食い違いがみられた場合には、互いに納得のゆくまで討論を重ねた。このような食い違いおよびそれに付随する討論でチーム・ワークが乱れ

るようなことはなく、むしろそのようなことを通して調査員間の意識が緊密化され、共通の場で展開されるフィールド・ワークの方法が次第に整備されていったと言えよう。低次元的なレベルで調査員どうしの仲が悪かったために、調査区の中を通る一本の土層観察用畦を境にして、共通であるべき調査区名や層名の呼称法も異なれば調査の運営そのものも異質であったという憐れむべき調査例を、過去において筆者は実見している。仲間の調査員との意思疎通を欠く発掘調査では、いかに情報量の多い遺跡を対象としたところで、そこからは大した成果は期待できないであろう。調査員間および調査員と作業員との間でチーム・ワークがうまく取れているかどうかは、調査の成否につながる一つの鍵である。

各班の編成に際しては、日常的に作業員と接触をもっている世話人とよく相談し、作業員本人の意志を尊重した上で行なった。大半の作業員が前年の調査参加者によって構成されていたので、この班編成については別に問題は生じなかった。各班の中で、写真班と実測班には色別の腕章を配布して、遠くにいても作業員の所属がすぐにわかるようにした。作業員に対する指示は、特別な場合を除いて個人的な形では行なわずに、原則として世話人を通して、各班単位または各班内に自然発生的に生じるグループ単位で行なった。それとともに、調査員は指示内容を常に明確なものにしておくように心がけた。作業員の間であって、中心的存在としての世話人の役割りには大きなものがある。多くの場合、世話人には地元でも信用のある人物が選ばれている。大小の規模にかかわらず、この世話人の存在をないがしろにするような調査体制では、調査員と作業員との最善のチーム・ワークを維持し続けることは困難であろう。

調査の初期の段階では、4班に編成した作業員は全員が粗掘りに携ったが、遺構が検出され、精査や実測が開始されるにつれて、順次、班単位の作業を担当するようになった。この中で、粗掘り班は他の班に先行して、抜根や表土剥ぎに従事し、最終的には遺構検出の作業までをつとめた。抜根作業には、主に男子作業員が専従した。粗掘りの基本単位は3mグリッドにしたが、地表面の傾斜や凹凸および表土下位の地層の構成状態に応じて、実際には15m×15mの中区画や30m×30mの大区画単位で粗掘りの行なわれる例の方が多かった。土層観察用畦は15m毎に1本を残し、すべての断面を観察して前年度の資料との比較検討をした。また、遺構が存在しない地区では必要に応じて男子作業員を中心にして深掘りを実施し、第四系の把握に留意した。粗掘りによって検出された遺構に対しては、担当調査員の判断で、単独で検出されたものは2分割および4分割を基本とし、重複した状態で検出されたものに対してはそれらの応用で、埋土断面観察用の畦が設定された。これらはその状態で、精査班の担当調査員に引き渡された。なお、粗掘りの一部にはバック・ホーを使用した。地表面の傾斜や凹凸や木根などに災いされて、それほどの効果を上げることはできなかった。

粗掘りに先行して、カメラマンと実測班が中心となって調査地内にグリッドを設定している

が、これは前年度の座標軸をそのまま延長しているために、これについての記載は省略する。

遺構の精査には、精査班と写真班の2班が携った。精査班は主に、大型ピット類は2分割、住居址類は4分割を基本として、埋土断面観察用の畦を残して遺構を掘り上げる第一次精査の段階の作業に従事した。その際の出土遺物の取り扱いについては担当調査員の判断に委ねた。精査中に埋土から出土した遺物は、手の空いている実測班員が年月日・遺跡名・遺構名・層名を記入した上でポリ袋に収納した。床面・炉・カマドなどから出土した遺物は、原則として図面や写真などに記録されるまで、出土した状態で保存された。埋土断面観察用の畦の層序区分は担当調査員が行なった。大型ピット類の埋土については精査によって露出した断面をそのまま層序区分の対象としたが、住居址の埋土は、4分割によって残されている土層断面を詳細に吟味したのちに1本を取り外し、最終的には2分割にした状態で層序区分の対象とした。これは主に、埋土を構成する単層または葉層の起源や堆積過程についての解釈を優先させるという方向性から打ち出された処置で、経験上からみても、住居址の埋土の観察でもこの2分割で十分ではないかと考えられる。ただし、堆積状態の特異なものや大型住居址、および遺構間の重複が多い部分では、常に数本の土層断面図を作成するようにした。

第一次精査はこのように、遺構の埋土や遺物の出土状態を吟味することを主な目的となされる調査である。湯沢遺跡と同様に、遺構の絶対数に対して調査員数や調査期間の不足という制約的な条件から、各地で広く行なわれている、埋土中の遺物のポイントとレベルを計測して土層断面図に投影するという定量的な方法を採用することはできなかった。その代わりになすものとして、埋土の層相やそれと出土遺物との関係などの定性的な面では、可能なかぎりの観察と文章記録を行なった。ここからはいくつかの発想が生み出されている。精査班の担当調査員は、層序区分をしたのちに、カメラマンおよび実測班員に土層断面の撮影と図化を指示した。土層断面図の作成が終了した時点で担当者は関係図面のすべてをチェックし、内容に誤りがない場合には、土層断面観察用の畦を残した状態で遺構を、写真班と実測班を統括する調査員に引き渡した。

写真班は、2名のカメラマン（中村清也・松村公）と遺構の第二次精査班とで構成されている。2名のカメラマンは、調査のほぼ全期間を通じて写真撮影の仕事を担当した。使用器材は1セット分として、6×7cm判カメラ（1台）・35mm判カメラ（2台）・三脚・ストロボ・各種レンズ（広角・標準・接写・望遠）・各種フィルター（スカイライト・ND・R1・Y2）・各種フィルム（トライーX・プラスーX・エクタクローム-X）などを用意した。また、撮影台にはローリング・タワーを用いた。カメラマンは、調査員の指示したアングルに従って写真撮影を行なった。撮影に際しては、後の整理に混乱が生じないように、当埋文センターで作成した撮影カードに1カット1枚方式で被写体の状況を記入し、被写体の撮影前にそのカードを白黒フィルム

Field Card

No. 4

遺跡名 吉倉屋敷	遺跡番号 CY-77	・床面は平掘り。土層の厚く(2.20)と7.2.2.3.
年月日 77.7.16	記入者名 Fujino	・壁跡などは1.5.2.4.9.11.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100.
時代 縄文・弥生・古墳・中世	遺物名 土器・土偶(15)	
作業内容 試掘・掘削・調査・写真		
実測内容 平面プラン・セクション	出土遺物	
層位の事実(色調・性状・混入物)	調査所見	
<ul style="list-style-type: none"> ・前方土器群 ・土器-20(15). 土器-21(15). 土器-22(15)を20.3. 	<ul style="list-style-type: none"> 1個。石筒。粘(埋蔵工帯に存在)が認められる。 ・吉倉上。中央部には土器(埋蔵工帯)に土器が大量に存在する。 調査所見 ・土層は1.5.2.4.9.11.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100. ・土層は1.5.2.4.9.11.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100. ・土層は1.5.2.4.9.11.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100. 	
遺物調査事項	写真	25(白黒・カラー) 6×7(白黒・カラー) 4×5(カラー)
	テープ番号	

Field Card 使用例

1 a

(附) 岩手県埋蔵文化財センター

Field Card

No. 10

遺跡名 吉倉屋敷	遺跡番号 CY-77	
年月日 77.7.30	記入者名 Fujino	
時代 縄文・弥生・古墳・中世	遺物名 HDP-25(15)	
作業内容 試掘・掘削・調査・写真		
実測内容 平面プラン・セクション	出土遺物	
層位の事実(色調・性状・混入物)	調査所見	
<ul style="list-style-type: none"> ・土層は1.5.2.4.9.11.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100. ・Y2-pattern"は土層は1.5.2.4.9.11.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100. ・土層は1.5.2.4.9.11.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100. ・土層は1.5.2.4.9.11.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100. 	<ul style="list-style-type: none"> ・土層は1.5.2.4.9.11.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100. ・土層は1.5.2.4.9.11.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100. ・土層は1.5.2.4.9.11.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100. ・土層は1.5.2.4.9.11.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100. 	
遺物調査事項	写真	25(白黒・カラー) 6×7(白黒・カラー) 4×5(カラー)
	テープ番号	

2 a

(附) 岩手県埋蔵文化財センター

Field Card

No.

遺跡名 吉倉屋敷	遺跡番号 CY77	・土層は1.5.2.4.9.11.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100.
年月日 0719	記入者名 藤	・土層は1.5.2.4.9.11.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100.
時代 縄文・弥生・古墳・中世	遺物名 IUE-25(15)	
作業内容 試掘・掘削・調査・写真		
実測内容 平面プラン・セクション	出土遺物	
層位の事実(色調・性状・混入物)	調査所見	
<ul style="list-style-type: none"> ・土層は1.5.2.4.9.11.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100. ・土層は1.5.2.4.9.11.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100. ・土層は1.5.2.4.9.11.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100. ・土層は1.5.2.4.9.11.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100. 	<ul style="list-style-type: none"> ・土層は1.5.2.4.9.11.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100. ・土層は1.5.2.4.9.11.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100. ・土層は1.5.2.4.9.11.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100. ・土層は1.5.2.4.9.11.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35.36.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.47.48.49.50.51.52.53.54.55.56.57.58.59.60.61.62.63.64.65.66.67.68.69.70.71.72.73.74.75.76.77.78.79.80.81.82.83.84.85.86.87.88.89.90.91.92.93.94.95.96.97.98.99.100. 	
遺物調査事項	写真	25(白黒・カラー) 6×7(白黒・カラー) 4×5(カラー)
	テープ番号	

(附) 岩手県埋蔵文化財センター

図 1 3 a

に納めた。なお、カメラマンは調査の初期の段階で、使用器材の操作方法や特性について一通りの学習を積んだ。熟練を要するストロボ撮影では、いくつかトラブルの生じた部分もある。

一方、写真班の中の第二次精査班（これを写真班と通称した）は、主に住居址を対象に、土層断面観察用の畦を除去して、遺構を完全に露出して全景撮影や平面図作成の段階までを準備する第二次精査や、炉・カマドそのほかの施設を断ち割る最終的個別精査に従事した。この第二次精査で住居址の壁・床面・柱穴・炉・カマド・その他の付属施設を検出した。この写真班は、これらの検出に付随するものとして、炭化材や遺物の清掃にも携った。これらの仕事には全体的に技術と根気が要求されるために、熟練した作業員が主に写真班の構成員となった。

写真撮影は、すべての場合について原則として実測班に先行した。これは撮影の度に何度も同じ遺構の清掃を繰り返すような無駄を避けるためである。

遺構や付属施設の全景撮影が終了すると、実測班はただちに平面図の作成にとりかかった。実測班は2名1パーティを標準としたが、実測内容によっては臨機応変に編成替えを行なった。平面実測は、3m単位に設定された遣り方による実測を基本にし、特殊なものを除いて縮尺は20分の1に統一した。また、エレベーションの計測は50cm単位で行なった。平面実測が完了したのちは、写真班員が炉・カマドやその他の付属施設の断ち割りをし、その断面の撮影後に、実測班員がその断面図の作成に携った。この実測班は、主に20～50才台の男子・女子作業員によって構成された（全作業員数に対する実測班員数の比率については、折りこみのグラフを参照のこと）。カメラマンに対してと同様に、大半の作業が粗掘りによって占められていた調査の初期段階に、実測班を対象とした室内外の講習会を何度か設けた。しかし、前年度の調査参加者が実測班の大半を構成していたために、前年の反省点に立った上で、のちには実測班員どうしが自らの仕事を通して互いに高め合って、遂には調査員らの望む以上の高度な内容を消化するまでになった。このことは後に詳しく触れるが、写真撮影とともに、実測という作業は何も調査員の専売特許的な仕事なのではない。

写真班と実測班を掌握する担当調査員は、調査の進展の全体的な見通しをもった上で、世話人を通じて上記の各種の仕事を各班に割り当てた。細かい作業を進めるに際しては、もちろん作業員に対する世話人の指示にも限界があるので、必要に応じて担当調査員は直接的に作業員に対して仕事上の注意や指示を与えた。主に調査員の指示不足から、掘りすぎのみられた遺構も数多くある。また、これは少数にすぎないが、図面関係では柱穴や測定値の欠落がいくつかみられた。これは、担当調査員の図面に対するチェック不足が原因となっている。

以上、調査員と作業員の分業体制を基本とした長者屋敷遺跡の発掘調査の運営的な側面について述べてきた。上記の作業と並行して、ほぼ調査の全期間にわたって、毎日10名ほどの作業員が出土遺物の水洗に、また5～6名の作業員が室内での図面整理や遺物に対するラベル打ち

の作業に専従した。

(3) 文章記録

学術調査とか緊急調査とかの区分をせずに言えば、発掘調査の目的は別に遺物の採集活動にあるのではなく、おそらく遺跡や遺構から基礎的な情報を収集することにあるのにちがいない。基礎的な情報を収集している過程でいくつかの仮説が生み出されるものとしても、やはり調査の基本は基礎情報の収集にあると言えるであろう。遺物の採集は、この基礎情報の物質的側面の代表例として位置づけられるのかもしれない。

調査によって遺跡や遺構や遺物の在り方を通して得られる基礎的な情報には、図面・写真・文章記録などがある。これらは基礎情報群の中の記録的な側面を構成するものであろう。この中で、図面や写真は形をなす部分、文章記録は基質をなす部分と考えることができよう。

前節で述べたように、長者屋敷遺跡の発掘調査では、調査員は図面作成や写真撮影に直接的に従事しなかった。調査員の基本的な任務は、調査の運営と情報収集にあると考えられたからである。この場合の情報収集とは、上に述べた、情報の基質の部分となす文章記録を指している。調査員は調査組織の分業体制の一環として、文章記録を担当したと言えよう。文章記録に際しては、1カード1項目方式として、当埋文センターで作成したField Cardを多用した。

調査員は各担当区で作業の運営を計りながら、一方ではField Cardに、遺跡や遺構から得られた観察事項を数多く記載するように努めた。この場合は担当区の別にこだわらずに、調査対象となっているすべての遺構に対して観察眼を行き渡らせるように心がけた。例えば、精査班の担当調査員は、作業員に対する指示の合間を縫って、粗掘り班の担当区で地層や遺構検出状況についてField Cardに観察を記載し、さらに写真班の担当区に行って住居址の平面的な状態を書き留め、今度は自分の担当区に戻ってピットの埋土についての情報を記録する、という具合である。このように作業の各段階で、1棟の住居址を取り上げても、検出状況・埋土の状態・遺物出土状況・平面的な形態・炉・炉の断面などの各項目に対して、複数の調査員が記載したField Cardが残されることになる。情報量の多い住居址などでは、1棟につき数十枚を記録したものもある。参考までに、Field Cardの使用例をいくつか図に示した。

上に述べたように、文章記録を行なうにあたっては、常に同一対象を複数の調査員が観察して、一つの項目について複数枚のField Cardが生産されるようにした。これは、複眼的な観察によって少しでも情報の欠落を防ごうということと、遺構なら遺構の個性的で固有の情報を、可視的な部分で臨界点に達するまで収集しようという考え方の表れである。このような情報収集活動を通して、長者屋敷遺跡の発掘調査では数多くの仮説が生み出された。

前節で軽く触れたが、調査員の本来的な任務ということに関して、ここに10人の調査員がいれば10の異った考え方が提出されるかもしれない。発掘調査とかフィールド・ワークとかに関

する認識についても、おそらく同様のものであろう。例えば、大小の規模にかかわらず、筆者らの担当する調査では調査員は実測や写真撮影に従事しないが、これは、それらをしたくないからしないのではなく、出来ないからしないのでもない。必要性に迫られた時には、もちろんそのような仕事に従事するであろう。しかしその場合には、遺跡や遺構から得られる基質を構成する情報のかなりの部分が欠落することを覚悟しなければならないであろう。

一方、考古学の正統派を自称する調査員の中には、実測や写真撮影ということにあくまでも固執しようという人々もある。フィールド・ワークの体系の中にそれらの仕事が正しく位置づけられていれば、それはそれで一向に差しつかえないであろう。ただ、それが調査員の趣味上や美学上の問題にすり替えられている場合には、多く検討の余地を残すことになるだろう。

(4) まとめ

以上、主に調査員の基本的な任務という観点から、長者屋敷遺跡の発掘調査で展開された各種の方法について具体的に記述してきた。叙述上の煩雑さを避けるために、細かい部分では触れなかった点もある。上に述べてきた内容からも判断されるように、長者屋敷遺跡の発掘調査で展開された方法上の運営的な側面も情報収集的な側面も、何も特別な種類のものではない。強いて取り上げれば、調査員と作業員の分業体制を意識的に押し進めたことと、遺構などの観察事項を徹底的に文章記録化したことに、長者屋敷遺跡の調査の一つの特徴があると言えるのかもしれない。しかし、このようなことも、フィールド・ワーカーにとってはあたり前の事柄にすぎないであろう。

調査における具体的な方法の展開の在り方は、調査員のフィールド・ワークに対する認識や考古学上の各種の認識と密接な関連があるものにちがいない。そしてまた、フィールド・ワークにおける情報収集の質量は、そのまま遺構や遺跡の理解に深く結びつくものであると言えるであろう。この点では、フィールド・ワークの方法上、筆者らはまだ暗中模索の段階にある。ただ、今までの調査経験からみて、遺構や遺跡に対する認識はフィールドにおける基質をなす部分の基礎的情報によってかなりの部分が決定されるものである、とは言えよう。この面を重要視して、筆者らは遺構や遺跡から得られた観察事項を、可能なかぎり徹底的に文章記録化する体制を維持しつづけている。おそらく、これからもそうであろう。

(高橋 文夫)

III. 検 出 遺 構

『遺構編Ⅰ』(1980)に引き続き、この項目では、1979年に調査された遺構群を種別単位に編成し、それらの各々について各ブロック(30m×30mの大区画)毎に、観察結果や属性などの基礎情報を記載する。遺構内から出土した遺物群については別に『遺物編』を用意するので、ここでは出土状態などの面で簡単に触れておくにとどめ、その内容の詳細は記述していない。また、形態的な特徴や出土遺物から所属時期が明らかにされた遺構に対しては、ここで時代および時期を指摘した。遺構の全体・細部にかかる用語や計測の方法などについては、『遺構編Ⅰ』の「室内整理の方法」の項目内である程度の説明を与えている。記載順序は種別単位に、竪穴住居址・大型ピット類・配石遺構・焼土遺構、その他とした。なお、たとえば住居址の柱穴配置や所属時期などについて誤りがある場合には、それは『遺物編』の中で一括して訂正することにする。

(1) 竪穴住居址

EⅢ区

EⅢ-1 住居址 (図版 2abe ; 写真図版 6a・7ab)

この住居址は平安時代に位置づけられるもので、高嶺沢に近い崖線沿いで検出された。大半の部分が用地区域外に存在しているために、東壁に沿った狭小な範囲が精査されているにすぎない。精査範囲内に関する限り、この住居址は保存が良好な状態で検出されている。規模は、北西～南東方向で6.0m±を計る。主体部の大半が未調査であるために詳細は不明であるが、精査がなされた東壁付近の状況から考えて、この住居址の平面形は隅丸で、方形を基調とする形態をもつものであろう。カマドは検出されていない。床面近くに数多く分布する炭化材の存在から、この住居址は焼失を受けたものであると考えられる。

埋土は、上半部が黒褐色～黒色土層、下半部が暗褐色土層でそれぞれ構成されている。上半部の埋土中には、僅かながら微細な炭化物・焼土粒子や十和田a降下火山灰(大池、1972:1973:1974)起源の再積性の細粒が包含されている。下半部の暗褐色土層中には、全体的に多くの炭化物・焼土が含まれているほか、下底部付近の層準に炭化材や火熱を受けて僅かに赤色変化をしている十和田a降下火山灰のブロックがみられる。

床面は凹凸のある面となっていて、全体に比較的軟弱な状態を示している。柱穴状のピット

は、P₁ (径58cm±・深さ34cm±)・P₂ (径35cm±・深さ22cm±)・P₃ (径36cm±・深さ22cm±)の3個が検出されている。壁高は、北壁15cm±・東壁23cm±・南壁32cm±を計る。また、北壁から東壁にかけては、幅9cm±~17cm±・深さ6cm±~12cm±の断続的な壁溝(註1)が設けられている。

この住居址の付属施設とみられるものに、南東隅よりに位置して、P₅ (径102cm±×75cm±・深さ26cm±)や、その内部にP₄ (径62cm±・深さ47cm±)・P₆ (径34cm±・深さ19cm±)などのピット群がある。これらのピット群内部には、焼失に関連して生産されたと考えられる、炭化材を伴う異地性の厚い焼土層が堆積していた。また、P₄-P₅・P₅-P₆の重複部分には、微小なものではあるが現地性焼土の形成が認められている。これら3個のピットの性格や相互の関係などについてはよくわからない。

この住居址からの出土遺物としては、北東隅近くの床面上から得られたロクロ使用の土師器・坏・高台付坏などがある。一部は、住居の焼失に係るとみられる二次焼成を受けている。

炭化材は精査された範囲内のほぼ全面にわたって分布しており、いずれも床面よりも僅かに浮く在り方を示している。炭化材の中には、角材や工具の削り痕をとどめている割材状のものもみられる。これらの炭化材のほか、床面上には、微細な焼土や炭化物の粒子が多量に分布していた。また、北東隅付近の床面上からは、焼けた十和田a降下火山灰のブロックが検出されている。

上記のもの以外に、この住居址の南壁よりの埋土中から、粒径10~20cm±の安山岩類亜角礫が数点まとまって出土している。

精査された範囲に関するかぎり、この住居址と重複関係を示す遺構はみられない。

EⅢ-2 住居址 (図版 2cd ; 写真図版 6b・138ac)

この住居址は平安時代に位置づけられるもので、高嶺沢に面した崖線沿いに検出されたものである。住居址の主体部の大半は開田に際して削剝を受けており、南向きに設けられている1基のカマドとその周辺部のみが残存していたにすぎない。したがって、この住居址の規模・形態や埋土などの状況については不明である。

カマドの東側には、P₁ (径70cm±×60cm±・深さ20cm±)・P₂ (径64cm±×50cm±・深さ19cm±)・P₃ (径28cm±・深さ32cm±)・P₄ (径28cm±・深さ30cm±)・P₅ (径32cm±・深さ31cm±)・P₆ (径22cm±・深さ38cm±)など6個のピットがみられるが、これらと柱穴や付属施設との関係は明らかではない。壁高は、カマド東側の南壁部分で15cm±を計る。

カマドは全体的に崩壊しており、その構造の詳細は不明であるが、燃焼部から煙道部にかけて残存している粒径10~25cm±の安山岩類亜角礫の在り方から推定して、上部構造の一部は石組みのものであったと考えられる。袖部の状態についてもよくはわからないが、その構造の痕

跡を示すものとして、右袖部の芯部から直立の形で埋置された安山岩垂角礫が検出されている。焚口部は径50cm±の浅いピットで、底面の全体は火熱を受けてきわめて堅くしめる面となっている。燃烧部から煙道部にかけてはゆるやかに立ち上がり、径20cm±・深さ32cm±の煙出し部に接続している。カマドの本体および両袖部周辺には広く焼土層が堆積しており、燃烧部付近でその最大層厚16cm±を計る。残存部でのこのカマドの全長は135cm±である。

この住居址からの出土遺物としては、数点の土師器甕の破片がある。これらは主にカマドの周辺から出土しているが、その一部は安山岩礫とともにカマドの構築に使用されているものと考えられる。

精査された部分に関する限りこの住居址は単独で検出されたもので、他の遺構との重複関係は認められていない。

(高橋 文夫)

EV区

EV-9住居址 (図版 3ab・4abc ; 写真図版 7c・8ab・9a・138bd・139a)

当住居址はカマド付近から出土した遺物などからみて、平安時代に位置づけられよう。床面や埋土を構成する火山灰層と埋土の層相が近似しているため、南壁と床面の一部に掘りすぎが認められる。床面直上部から検出された多量の焼土・炭化材などの存在から、この住居址は焼失をうけたものと考えられる。

この住居址の平面形は、一辺3.7m±を計る隅丸方形を呈する。南壁の東側に片寄った位置にカマドが1基設けられている。埋土は、上部から黒褐色土層・褐色～暗褐色土層の2層で構成される。中位から下位に堆積している褐色～暗褐色土層中には十和田a降下火山灰の細粒が多量に含まれている。

床面は平坦で、軟質なものとなっている。柱穴配置は明らかではないが、検出されたピット群のうち規模や位置から捉えて、P₁ (径65cm±・深さ52cm±)・P₂ (径38cm±・深さ23cm±)などで構成されるものと考えられる。これらのピット以外に床面から検出されたP₃ (径72cm±・深さ23cm±)・P₄ (径136cm±×60cm±・深さ41cm±)・P₅ (径50cm±・深さ25cm±)など3個のピットの性格については明らかではない。壁は全体にまっすぐな立ちあがりを示している。壁高は、北壁22cm±・南壁35cm±・東壁14cm±・西壁38cm±を計る。

南壁に設けられているカマドは全長160cm±を計り、煙道部および煙出部はこの住居址によって切られる関係にあるEV-10住居址の埋土を削剝して構築されている。右袖部・燃烧部はその大半を欠く状況で検出され、残存状況はあまりよくない。残存するこれらの部位についてみ

ると、燃焼部は周辺の床面よりも6cm±低い部分に使用面をもつ凹んだものとなっていて、下位の火山灰層は火熱による赤色変化を受けている。左袖部には粒径15cm±～48cm±を計る安山岩類亜角礫が5個残存しており、これらの礫は芯材または袖の側壁として使用されたものと考えられる。

煙道部は燃焼部から南東方向に緩く這い上る構造をもつ。その側縁には、粒径10cm±～30cm±を計る平坦面をもつ18個の安山岩類亜角～亜円礫と土師器甕の破片が側縁を上下にする状態で配列され、側壁を形成している。煙道部内の埋土は焼土・炭化物および十和田a降下火山灰の細粒を含む暗褐色土で構成されている。下底部には火熱による赤色変化があまり認められなかった。煙道部の規模は、全長120cm±・最大幅48cm±を計る。

煙出し部の形状は明らかではないが、煙道部の側壁を構成する礫の南端と天井石の先端部との間の径10cm±・下底部から礫の上端までの高さ13cm±の部分が、これに該当すると考えられる。

出土遺物として、カマド左袖部付近と煙道部から土師器甕の破片が出土している。このほかに、東壁に寄った床面直上部から粒径10cm±～30cm±の大小9個の安山岩類亜角礫が出土している。これらの礫の表面には部分的に火熱による赤色変化が観察されている。

重複関係についてみれば、この住居址はE V—10住居址を切る関係にある。

E V—10住居址（図版 3ab・5a・110a；写真図版 7c・9a・139b）

この住居址は出土遺物や複式炉（梅宮；1960）の存在からみて、縄文時代中期末葉期に位置づけられよう。南壁と北壁をE V—9住居址およびE V—10住居址によって切られる在り方を示しており、残存状況は良くない。このため、全体の形状、規模は明らかではないが、残存部から推定すると、形状は東西の方向に長軸をもつ凸辺方形を呈し、径4.8m±×4.0m±を計るものと考えられる。東壁寄りに複式炉が1基設けられている。

埋土の状況については、この住居址が重複する2棟の住居址構築の際の削剝を受けていることや、調査上の不手際から床面直上部付近を残して不明なものとなっている。僅かに残存する埋土最下部は褐色土層で構成されている。

床面は堅く、凹凸が認められる。また、西壁に寄った部分に比べて東壁に寄った部分が10cm±～15cm±低くなる緩やかな傾きをみせている。柱穴状ピットは、P₁（径35cm±・深さ46cm±）・P₂（径55cm±・深さ42cm±）・P₃（径48cm±・深さ47cm±）・P₄（径14cm±・深さ29cm±）・P₅（径51cm±・深さ31cm±）・P₆（径35cm±・深さ60cm±）・P₇（径24cm±・深さ13cm±）など7個検出されている。柱穴配置は明らかではない。

壁は残存する部分において直壁の形状を呈する。壁高は、東壁30cm±・西壁92cm±計る。

炉は複式炉の形態を呈し、床面中央付近から東壁に向って連続する2つの石囲部と前庭部からなる。全長190cm±を計る。

第1石囲部には粒径14cm±・34cm±を計る2個の安山岩類亜角礫が左右に配され、下半部を埋置される状況で存在する。部内には現地性焼土の形成が認められる。使用面は周辺の床面よりも中央部で10cm±低い摺鉢状を呈する。さらに、使用面から7cm±下位の深さまで、この部位に伴う掘り方が認められており、使用面と下底部の間には焼土を含む褐色土層が敷設されている。

第2石囲部は粒径10cm±～50cm±を計る6個の安山岩類亜角礫で構成され、径70cm±の方形の平面形を呈する。部内には現地性焼土の形成は認められず、平坦な底面が周辺の床面よりも5cm±低い凹んだ状況を示す。この部位は下位に掘り方を伴ない、下底部との間には層厚20cm±を計る暗褐色～褐色土層が敷設されている。

前庭部は第2石囲部から東壁に向って開口する平面形を呈し、底面が周辺の床面よりも5cm±低い浅皿状のものとなっている。底面は平坦で、堅い。

出土遺物として、埋土中から縄文時代中期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の破片類と半円状扁平打製石器が得られている。

重複関係についてみれば、この住居址はE V-9住居址およびE V-11住居址と重複関係にあり、両方の住居址に切られる関係にある。

E V-11住居址（図版 3abc・5bc；写真図版 7c・9a・11a・139cd）

出土遺物および埋土の中に含まれている十和田a降下火山灰の存在から、この住居址は平安時代に位置づけられよう。調査上の手違いから、重複するE V-10住居址の精査を先行したために、遺構の大部分を掘りすぎてしまい、僅かに南壁付近と東壁および西壁の一部しか残存しない不良な検出状況を示している。

残存する部分および土層断面観察用畦の断面から推定すると、この住居址は南北に長軸をもつ長方形の形状を呈し、4.0m±×3.7m±の規模をもつと考えられる。南壁の西側に偏った位置にカマドが1基設けられている。

埋土は、上位が黒褐色～暗褐色土層で構成され、中位以下の部分が褐色～暗褐色土層群で構成される堆積状況を示している。埋土全体に十和田a降下火山灰が多量に包含されているが、上位と中位以下の部分では含有の状況が異なる。上位付近では細粒の状態为数枚の葉層を呈するのに対して、中位以下の部分では灰白色の純粋な状態でブロック状に認められている。このような堆積状況のちがいについて考えると、下位の埋土は十和田a降下火山灰降下時期に近接する時期に形成され、上位の埋土は中位以下の埋土が堆積したのち凹地化したこの部分に住居外から搬入された再積性の十和田a降下火山灰を起源として形成されたものと推定される。

残存する床面は軟く、起伏がわずかに認められる。柱穴配置は不明なものとなっているが、床面からは、P₁（径35cm±・深さ49cm±）・P₂（径20cm±・深さ39cm±）・P₃（径20cm±・深さ

16cm±) など 3 個のピットが検出されている。

残存する壁は直壁の形状を呈する。壁高は、南壁61cm±・東壁50cm±・西壁67cm±を計る。壁高は、検出された範囲内では認められなかった。

カマドは南壁の西側に寄った部分から 1 基検出されている。残存状況はよくない。全長160cm±を計る。

燃焼部には径30cm±の範囲内に現地性焼土が形成されている。使用面は周辺の床面よりも中央部で 3 cm±～5 cm±低い摺鉢状の凹んだものとなっていて、ガリガリに堅い状況を呈する。下位の火山灰層は使用面から 7 cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。燃焼部よりも東壁に寄った部分に径55cm±×100cm±の範囲に再積性の焼土の分布が認められる。

煙道部は燃焼部から一定の角度をもって立ちあがる状況を呈し、凹んだ下底部だけが残存する。火熱による赤色変化は認められない。平均幅35cm±・長さ85cm±を計る。埋土は調査手順にまちがいを生じたため、明らかではない。

煙出し部は煙道部上端から検出されたピット状の凹みからその存在を推定できる。この部分の規模は径20cm±・上端からの深さ10cm±を計る。

出土遺物には、カマド燃焼部付近の焼土上面や、埋土下位から出土した土師器甕の破片類がある。重複関係についてみれば、この住居址はE V—10住居址およびE V—52ピットを切る関係にある。E V—52ピットとの新旧関係については明らかではない。

E V—12住居址群 (図版 6ab・110b ; 写真図版 9b・10a・11b・140ab・256bc)

柱穴配置を検討した結果、この住居址群が存在する範囲内に 4 棟の住居址が重複して存在することがわかった。4 棟の柱穴配置を比較してみると、それぞれ主軸方向および規模的に差異は認められるが、基本的に同じような形状を呈する四角形の配置を示す。検出された壁および床、または炉は新期の遺構に共伴するものとみられるが、存在が確認された 4 棟の柱穴配置との適合性からみて、この住居址はE V—12a住居址と考えられる。古期に位置づけられる他の 3 棟 (E V—12b住居址・E V—12c住居址・E V—12d住居址) の新旧関係については明らかではない。

これらの柱穴址を構成する柱穴間には再利用形態が多く認められる。また、柱穴配置はほぼ同位置的なあり方を示すものとなっている。このことから推定すれば、再利用されるものは柱穴以外の床面や壁の一部にも及んでいるのではないかと考えられ、4 棟は同系列の住居址ではないかとも思われる。以下、それぞれの住居址について記載する。

E V—12a住居址 (図版 6ab・110b ; 写真図版 9b・10a・11b・140ab・256bc)

この住居址は、出土遺物や炉の形態などから縄文時代中期末葉期に位置づけられよう。平面形はほぼ円形を呈し、規模は径3.7m±～4.1m±を計る。床面中央部から東壁に寄った部分に

複式炉系統の炉が1基設けられている。

埋土は暗褐色～黒褐色土層で構成され、中位以下に焼土・炭化物を含む。床面は掘りすぎにより凹凸の認められる部分もあるが、全体に堅く、平坦なものとなっている。北西壁付近の床面は下位の泥流堆積物上面を削平して形成されており、極めて堅いものとなっている。

壁高は、北壁20cm±・南壁35cm±・東壁6cm±・西壁40cm±を計る。壁溝は認められない。炉は、床面中央寄りの部分から地床炉的な部位・石囲部・前庭部の各部で構成される複式炉の形態を呈する。全長160cm±を計る。

地床炉的な部位は、床面検出時に誤って上部を削平したために下底部に相当する部分しか残存しておらず、十分な観察ができなかった。この部分では円形の平面形をもつ径60cm±の範囲で現地性焼土の形成が認められている。使用面は削平のため明らかではないが、この部分と交錯する状況で設定された埋土土層断面の観察によれば、周辺の床面よりも3cm±～5cm±高いレベルにあると認められる。下位の火山灰層は使用面から4cm±～6cm±下位まで火熱による赤色変化を受けている。

石囲部は、周縁に粒径8cm±～25cm±を計る6個の安山岩類亜角礫を配し、炉内には現地性焼土が粒径20cm±の異地性の礫を載せる状況で検出された。この部位は径55cm±を計る円形の平面形を呈する。周縁に埋置されている構成礫の間には抜きとり痕と捉えられる浅い凹みが観察されている。使用面は周辺の床面に比べて中央部で2cm±低い浅皿状の凹みとなっており、下位の火山灰は深さ7cm±～10cm±まで火熱による赤色変化を受けている。

前庭部は石囲部よりも東壁に寄った部分に位置し、底面が周辺よりも5cm±～12cm±低い摺鉢状の形状を呈する。平面形は不整な円形を呈し、径50cm±～58cm±を計る。底面（使用面）は堅くしまっており、凹凸がみられる。この部位を覆うように、上部には多量の焼土や炭化物を含む暗褐色土が層厚10cm±の厚さで堆積していた。この堆積物はこの部位にのみ認められることから、石囲部からの掻き出しなどで形成されたものと推定される。

この住居址の柱穴は、P₂（径22cm±・深さ33cm±）・P₅（径27cm±・深さ31cm±）・P₆（径23cm±・深さ35cm±）・P₁₀（径26cm±・深さ41cm±）など4個のピットで構成されると考えられる。柱穴配置をみると、北西から南東の方向に主軸をもつ四角形を呈し、P₂—P₆・P₅—P₁₀が対応する位置関係にある。これらの柱穴のうち、P₂はEV—12b住居址と、P₅はEV—12d住居址と、P₆はEV—12c住居址と、P₁₀はEV—12b住居址およびEV—12d住居址と共有し、再利用する関係にある。

南壁に寄った床面や埋土から、縄文時代中期末葉期に位置づけられる土器片が多く出土している。重複関係についてみると、この住居址はEV—12住居址群の中で最も新期の遺構と捉えられ、他の3棟を切る関係にあると考えられる。

EV-12b住居址 (図版 6ab・110b ; 写真図版 9b・10a・11b・140ab・256bc)

この住居址の柱穴は、P₂ (前掲)・P₇ (径17cm±・深さ18cm±)・P₉ (径17cm±・深さ26cm±)・P₁₀(前掲)など4個のピットで構成されると考えられる。これらのピットのうち、P₂はEV-12a住居址に再利用され、P₉はEV-12c住居址と、P₁₀はEV-12a住居址およびEV-12d住居址と共有する関係にあると考えられる。この住居址の柱穴配置は主軸こそ東西の方向にもつが、EV-12住居址群を構成する他の3棟と類似した平面形を呈するところから、同系列の住居址と考えられ時期的にはEV-12a住居址と同時期の縄文時代中期末葉期に位置づけられると推定される。

重複関係についてみれば、この住居址はEV-12a住居址よりは古期に位置づけられるが、他の2棟との新旧関係については明らかではない。

EV-12c住居址 (図版 6ab・110b ; 写真図版 9b・10a・11b・140ab・256bc)

この住居址の柱穴は、P₄ (径25cm±・深さ21cm±)・P₆ (前掲)・P₉ (前掲)・P₁₁ (径19cm±・深さ9cm±)など4個のピットで構成されると考えられる。柱穴配置は東西の方向に主軸をもつ四角形の平面形を呈し、P₄—P₉・P₆—P₁₁ が対応する位置関係を示す。これらのピットのうち、P₆はEV-12a住居址に再利用され、P₉はEV-12b住居址と共有する関係にある。

EV-12住居址群を構成する住居址が共有関係や類似した柱穴配置をもち、同系列のものと考えられることから、この住居址も時期的には縄文時代中期末葉期に位置づけられると推定される。このピットは、EV-12a住居址よりも古期に位置づけられるが、他の2棟 (EV-12b住居址・EV-12d住居址) との新旧関係については明らかではない。

EV-12d住居址 (図版 6ab・110b ; 写真図版 9b・10a・11b・140ab・256bc)

この住居址の柱穴は、P₁ (径20cm±・深さ37cm±)・P₅ (前掲)・P₈ (径17cm±・深さ18cm±)・P₁₀ (前掲)など4個のピットで構成されると考えられる。柱穴配置は、北西から南東の方向に主軸をもつ四角形の平面形を呈し、P₁—P₈・P₅—P₁₀ が対応する位置関係にある。これらのピットのうち、P₅はEV-12a住居址に再利用され、P₁₀はEV-12a住居址およびEV-12b住居址と共有または再利用される関係にある。EV-12住居址群を構成する住居址が柱穴の共有関係や類似した柱穴配置をもつところから、同系列のものと考えられれば、この住居址も時期的には縄文時代中期末葉期に位置づけられると推定される。新旧関係についてみれば、このピットはEV-12a住居址よりも古期に位置づけられるが、EV-12b住居址およびEV-12c住居址との関係については不明なものとなっている。

以上、4棟の住居址について記載してきたが、これらの住居址が重複する範囲からは各住居址を構成する柱穴のほかに、P₁₂ (径12cm±・深さ9cm±)・P₁₃ (径12cm±・深さ7cm±)・P₁₄ (径18cm±・深さ23cm±)など3個のピットが検出されている。これら3個のピットの性格に

については明らかではない。また、重複状況について簡単に触れれば、検出された床面に貼り床や壁溝が認められなかったことや、埋土に切り合いを示すような不整合が認められなかったことなどから、これらの4棟は壁・床面・柱穴の一部を再利用しながら最終的には拡張形態を示す変遷過程をもつものと推定されよう。

(佐藤 勝)

EVI区

EVI-1住居址 (図版6cde・110c；写真図版10b・11c・140cd・141a)

この住居址は出土遺物や埋土に含まれている十和田a降下火山灰の存在から平安時代に位置づけられよう。丘陵北端部頂面から東側に続く緩斜面に位置する。壁の一部に掘りすぎがみられるが、概ね良好な保存状態で検出された。

平面形はほぼ方形を呈し、規模は4.8m±×4.2m±を計る。南壁の西側に寄った部分にカマドが1基設けられている。埋土は黒色土層・褐色土層で構成され、全体に自然堆積相を示している。埋土全体に再積性の十和田a降下火山灰の細粒が含まれており、中位付近には比較的多く認められる。

床面は平滑で、西壁付近から東壁付近にかけて20cm±低くなる傾きをもっている。中央部付近から西側の部分は下位の泥流堆積物上面を削平して形成されていて、東側の軟質な部分と異なりひじょうに堅いものとなっている。東側の軟質な床面は、十和田a降下火山灰の含有が認められる褐色の汚れ火山灰からなり、この部分に敷設された貼り床と考えられる。

床面から検出されたピットは、P₁ (径65cm±・深さ38cm±)・P₂ (径25cm±・深さ15cm±) など2個を数える。具体的な柱穴配置は明らかではないが、位置的にみてP₂などで構成されるものと推定される。

壁は調査時の削剝によって消失した部分もあるが、残存部についてみればほぼまっすぐな立ちあがり示している。壁高は、北壁61cm±・南壁38cm±・東壁11cm±・西壁75cm±を計る。

壁溝は、西壁から北壁にかけての北西隅付近に1条認められ、幅25cm±～35cm±・平均深度8cm±の規模をもつ。

カマドは南壁の西側に寄った部分に1基設けられている。天井石が燃焼部に転落した形跡が認められ、全体が押し潰れたような状況で検出された。このカマドは南方向に長軸をもって構築されており、全長215cm±を計る。

燃焼部付近には粒径15cm±～45cm±を計る安山岩類垂角礫が現地性焼土に載る状況で検出されている。これらの礫は表面に火熱による赤色変化が認められることや、煙道部方向から滑

り落ちて崩落した状況が認められることから、もともとは天井部または煙道部付近を構成するものであろうと考えられる。燃焼部には径50cm±の範囲に涉って現地性焼土が形成されており、その表面が非常に堅いものとなっている。使用面は周辺の床面よりも中央部で5cm±低くなる凹んだ状況を呈し、下位の火山灰はさらに5cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。袖部の残存状況は悪く、芯材または側壁として使用されたとと思われる粒径10cm±～30cm±を計る3個の礫が埋置された状況で残存している。

煙道部は幅35cm±～45cm±の凹んだ掘り方の内側に、粒径20cm±～35cm±の扁平な礫をたてて側壁として、下底部が燃焼部からゆっくり立ちあがる構造を示している。天井部は燃焼部に転落したと思われる礫を含めると、粒径30cm±～45cm±の扁平な礫を用い、煙道部を覆うように配列して、さらに間隙を10cm±～14cm±の礫で塞ぎ、火山灰で上部をかためて構築されたと考えられる。煙道部の埋土はしまりのない暗褐色～褐色土層で構成される。内壁には火熱による赤色変化がみられ、燃焼部から立ちあがる部分では特に良く観察されている。

煙出し部については明らかではないが、位置から推定して、煙道部の掘り方が途切れる上端と側壁として使用された礫が途切れる間の径15cm±～20cm±の空間がこれに該当するものと考えられる。

カマドのほか、床面から地床炉的な形態を呈するものが2基検出されている。1号炉は床面中央部からやや東壁に寄った貼り床部分に位置する。径60cm±×40cm±の範囲に炭化物を多く含む状況で現地性焼土が形成されている。断ち割りの結果、この現地性焼土は下位に敷設された炭化物や焼土を多く含む暗褐色土上部に最深部で10cm±の層厚で形成されている。このような在り方からみて、この部分は地床炉的な性格をもつものと考えられる。

2号炉は、カマドと東壁の間の南壁に沿った部分に位置する。径30cm±を計る範囲に現地性焼土が形成され、粒径18cm±～28cm±の安山岩類亜角～亜円礫を上部に伴う状況で検出されている。断ち割りの結果、現地性の焼土下位には炭化物を含む暗褐色土が敷設されていることがわかった。調査時点で、位置的に壁と近接する在り方を示すところから、古期のカマド痕跡を示すものとも考えられたが、周辺部との関連性が下位に認められず、1号炉と構造的に類似している点などからみて、1号炉と同様に地床炉的な性格をもつものと考えられる。

左袖部付近から検出されたピット（P₁）は、位置および規模からみて当住居址に伴なう貯蔵穴状の付属施設と考えられる。

出土遺物には、南西隅付近の床面やカマド燃焼部から出土した刀子や土師器甕・坏の大形破片類がある。

重複関係についてみれば、この住居址は南壁付近で隣接する在り方を示すEVI—51フラスコ形ピットを切る関係にある。また、北壁付近に認められるEVI—52ビーカー形ピットとの新旧

関係についてはEVI-52ピーカー形ピットの検出面が明らかでないところから不明なものとなっている。

(佐藤 勝)

F II 区

F II-1 住居址 (図版 7a・8ab・110de・111a ; 写真図版12・14a・141bcd・256de)

床面や炉からは時期決定資料となる遺物は出土していないが、埋土中にみられた土器などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代前期前半期に位置づけられるものであろう。北側の一部が調査区域外に存在していたために完全な形で検出されてはいないが、精査が行なわれた範囲の壁の輪郭線からみて、この住居址は7.7m±×5.4m±の規模をもち、平面形は長方形の形態を示しているものと考えられる。床面と炉が2ヵ所にわたって風倒木跡によって大きく破壊を受けている以外は、少なくとも精査した範囲内に関する限り保存が良好な状態で検出されている。3基の地床炉の存在が確認されている。

埋土はいくつかの層に細分されるが、基本的には褐色・暗褐色・黒褐色土層群により構成されている。これらの埋土はいずれも自然堆積相を示している。

床面は、2号炉の存在する東側付近で比高5cm±～9cm±の明瞭な段差を伴って、西側3分の1ほどの部分と東側3分の2ほどの範囲に2分される在り方を示している。西側に較べて、東側が全体的に低い面となっている。この段差はその在り方からみて、遺構間の重複などの痕跡を現わしているものではなく、本来的にこの住居址に設けられていた施設であると考えられる。床面はこの段差の上下にわたってほぼ平坦で、全体的に軟弱な面となっている。住居址の壁高は、北壁29cm±・南壁40cm±・東壁11cm±・西壁65cm±を計る。東壁沿いの一部には、長さ145cm±・幅5cm±～10cm±・深さ2cm±～6cm±の壁溝が設けられている。

柱穴は、P₁(径44cm±・深さ52cm±)・P₂(径25cm±・深さ18cm±)・P₃(径26cm±・深さ15cm±)・P₄(径29cm±・深さ31cm±)・P₅(径46cm±・深さ34cm±)などのピット群で構成されているものと考えられる。これらの中で、P₅—P₁・P₁—P₄・P₄—P₂とジグザグ状の配置関係がみられるほか、P₃—P₂の群は対になる形に配されている。柱穴群のこのような在り方からすれば、P₂—P₁の延長線上の住居址北西隅には、P₅と対になる関係のもう1個の柱穴が存在しているものであろう。この住居址の柱穴は、基本的には6個のピットで構成されているものと推定される。この住居址内からは上記の柱穴群のほかに、P₆(径30cm±・深さ28cm±)・P₇(径31cm±・深さ11cm±)・P₈(径41cm±・深さ12cm±)・P₉(径23cm±・深さ12cm±)・P₁₀(径29cm±・深さ16cm±)・P₁₁(径60cm±・深さ72cm±)・P₁₂(径22cm±・深さ23cm±)・P₁₃(径20cm±・深さ7

cm±)・P₁₄ (径15cm±・深さ10cm±)などのピット群がみられるが、いずれもその具体的な性格については不明である。

住居址内の3地点から検出された炉は、すべて地床炉の形態を示しているものである。これらの炉はいずれも、上下に重複する新旧2基の地床炉で構成されている。北東部に位置する1号炉では、径120cm±×100cm±の範囲にわたって現地性焼土の形成がみられる。古期の炉の大部分および新期の炉の使用面は床面と同じレベルに設けられていて、両者ともにきわめて堅く、しめる面となっている。新期の炉は、古期の炉の中央部付近の凹部に火山灰を埋めこんで設けられている。断面観察用のトレンチの設定が適正なものではなかったために、両者の関係は断面図にはよく表われていない。これらの炉の使用面下の火山灰層は、13cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。

一部が調査区域外に位置し、一部が風倒木跡によって切られているために、2号炉の規模については明らかではない。130cm±×110cm±の範囲に現地性焼土が現存している。1号炉と同様に、古期の炉の大部分と新期の炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられており、両者ともにきわめて堅くしめる面となっている。新期の炉は、古期の炉の中央部付近の凹部に層厚3cm±の火山灰を閉塞した上で設けられている。これらの炉の使用面下の火山灰層は、13cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。

3号炉も風倒木跡によって大きく破壊を受けているものとみられ、規模の詳細については不明である。120cm±×90cm±の範囲に現地性焼土が残存している。平面形は著しく不整形な形状を示している。古期の炉の大部分および新期の炉の使用面は床面と同じレベルに設けられていて、両者ともにきわめて堅くしめる面となっている。新期の炉は、古期の炉の南半部の凹部に層厚8cm±の火山灰を埋めこんだ上で設けられている。これらの炉の使用面下の火山灰層は、12cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。

今まで述べてきた3基の地床炉は、平面および断面の観察の結果、それぞれが上下に重複する新旧の地床炉から成っているものであることが明らかにされた。新期の炉は、すべてが古期の地床炉の凹部に火山灰を埋めこんだ上で設けられているが、これらの間には、古期の炉に比較してあまり多くの赤色変化を受けていないという共通性がみられる。また、住居形態と炉の配置との関係からみると、ここで検出されたものは「定位置」の地床炉として捉えられるものであろう。これらの炉の配置からすれば、調査区域外となっている住居址北西隅付近には、さらにもう1基の「定位置」の地床炉が存在しているものと推定される。

床面上からの出土遺物としては、柱穴P₄の北東部から検出された粒径59cm±の安山岩垂角礫を使用した扁平な台石がある。

重複関係について言えば、少なくとも調査範囲内に関する限りこの住居址は単独で検出され

たもので、他の遺構との切り合い関係は認められてはいない。

F II-2 住居址群 (図版 7a・9ab・111bc ; 写真図版13・14bc・142abcd・143a・256f)

柱穴配置を検討した結果、この住居址群が検出された範囲内には最低2棟の住居址が存在していることが明らかにされた。これらに対して、新しいと考えられるものから順に、ここでF II-2a 住居址・F II-2b 住居址と呼称することにする。これらの住居址の間には柱穴群の再利用形態の存在がみられる。また、検出された4基の炉の中で、3基のものは上下に重複する新旧の地床炉で構成されている。このような炉の在り方は、おそらく住居址間の新旧関係によく対応を示しているものであろう。以下、各住居址について個別的に記載する。

F II-2a 住居址 (図版 7a・9ab・111bc ; 写真図版13・14bc・142abcd・143a・256f)

埋土下底部から出土した土器をもとにして推定すると、この住居址は縄文時代前期前半期に位置づけられるものであろう。フラスコ形ピットなどによって切られている部分を除けば、全体に保存が良好な状態で検出されている。6.6m±×4.8m±の規模をもち、平面形は僅かに凸辺の台形状の形態を示している。

埋土はいくつかの層に細分されるが、基本的には褐色・暗褐色・黒褐色土層群により構成されている。これらの埋土は、いずれも自然堆積相を示している。

床面はほぼ平坦で、全体に軟い面となっている。柱穴は、P₁(径28cm±・深さ61cm±)・P₂(径27cm±・深さ73cm±)・P₃(径14cm±・深さ46cm±)・P₄(径24cm±・深さ37cm±)・P₅(径25cm±・深さ23cm±)など、5個のピットで構成されているものと考えられる。これらの柱穴群の中で、P₁—P₂・P₅—P₃の群内に対になる配置関係がみられる。また、P₄は、P₅とP₃を結ぶ線を底辺とする三角形の頂点にあたる位置に配されている。重複関係の面では、P₂・P₃・P₅の部位で、F II-2b 住居址の柱穴を共有または同位置的に再利用する在り方がみられる。P₃はF II-2b 住居址に所属する柱穴 P₇を同位置で明瞭に切っている。柱穴 P₁の部位でも2つのピットの同位置的な重複がみられるが、他の一方(残存部深さ40cm±)の性格については不明である。住居址の壁高は、北壁25cm±・南壁33cm±・東壁10cm±・西壁52cm±を計る。また、この住居址内には、規模は小さいながら3ヵ所にわたって壁溝が設けられている。これらのものはそれぞれ、北壁沿いのものは長さ90cm±・幅8cm±~12cm±・深さ14cm±、北西壁沿いのものは長さ220cm±・幅14cm±・深さ8cm±~13cm±、南東壁沿いのものは長さ240cm±・幅7cm±~20cm±・深さ10cm±~13cm±の規模を計る。

前述したように、この住居址内からは平面的に4基の地床炉が検出されている。これらの中で、3基のものは上下に重複する2つの地床炉から成っている。これらの新旧関係にある炉の在り方は、F II-2a 住居址とF II-2b 住居址との重複によく対応を示しているものとみられるが、ここではこれらについてとりまとめて述べることにする。西側に位置する1号炉は、上

下に重複する新旧2つの地床炉から成るもので、径170cm±×135cm±の範囲に現地性焼土が形成されている。古期の炉の大半の部分および新期の炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、両者ともにきわめて堅くしめる面となっている。新期の炉は、古期の炉の中央部付近の凹部を層厚3cm±の火山灰で閉塞した上で設けられている。これらの炉の下位の火山灰層は、13cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。

北側に位置する2号炉も上下に重複する2基の地床炉から成るもので、径100cm±×90cm±の範囲に現地性焼土の形成がみられる。古期の炉の大部分および新期の炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、両者ともにきわめて堅くしめる面となっている。新期の炉は、古期の炉の中央部付近の凹部を層厚3cm±の火山灰で閉塞した上で設けられている。これらの下位の火山灰層は、14cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。南側に位置する3号炉も上下に重複する2つの地床炉から成るもので、径140cm±×115cm±の範囲に現地性焼土が形成されている。古期の炉の大部分および新期の炉の使用面は床面よりも僅かに高い位置に設けられていて、両者ともにきわめて堅くしめる面となっている。新期の炉は、古期の炉の中央部付近の凹部に層厚5cm±の火山灰を敷設した上で設けられている。下位の火山灰層は、深さ16cm±まで火熱による赤色変化を受けている。東側に位置する4号炉は、見掛けの上からは単独の地床炉から成るとみられるもので、その使用面は床面よりも僅かに高くに位置し、比較的堅くしめる面となっている。下位の火山灰層は、8cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。

以上に述べた地床炉の中で、1号炉・2号炉・3号炉のそれぞれは下位に掘り方とみられる部分を伴っている。この内部には、いずれも汚れ火山灰が充填されていた。また、これらの新期の炉の間には、古期の炉に較べてあまり多くの赤色変化を受けていないという共通性がみられる。

床面上からの出土遺物としては、北壁近くから得られた台石と考えられる粒径45cm±の扁平な安山岩垂角礫がある。この遺物は斜位の状態で出土している。また、南壁際からは半円状扁平打製石器が出土している。

F II-2b 住居址 (図版7a・9ab・111bc ; 写真図版13・14bc・142abcd・143a・256f)

この住居址の柱穴は、P₆ (径28cm±・深さ25cm±)・P₂ (前掲)・P₇ (径30cm±・深さ32cm±)・P₈ (径18cm±・深さ43cm±)・P₅ (前掲) など、5個のピットで構成されているものと考えられる。これらの中で、P₆—P₂・P₅—P₇の各群内に対になる配置関係がみられる。またP₈は、P₅とP₇を結ぶ線を底辺とする三角形の頂点にあたる位置に配されている。柱穴間の重複関係では、P₂・P₅はF II-2a 住居址と共有される関係にある。P₇は、F II-2a 住居址の柱穴P₃によって切られている。

以上、F II-2a 住居址・F II-2b 住居址について個別的に記載してきた。この住居址群内には、上記の柱穴群のほかにさらに、P₉(径44cm±・深さ12cm±)・P₁₀(径29cm±・深さ29cm±)・P₁₁(径40cm±・深さ34cm±)・P₁₂(径42cm±・深さ53cm±)・P₁₃(径80cm±・深さ30cm±)・P₁₄(径33cm±・深さ17cm±)・P₁₅(径23cm±・深さ18cm±)・P₁₆(径22cm±・深さ52cm±)・P₁₇(径23cm±・深さ10cm±)・P₁₈(径32cm±・深さ21cm±)などのピット群がみられるが、これらの具体的な性格についてはよくわからない。P₁₀は1号炉を切る在り方を示している。

最後に遺構間の重複関係について述べる。柱穴配置と住居形態との安定性からみて、F II-2a 住居址の柱穴群が最新期のものを構成することについては、まず問題がないであろう。つまり、ここでは古い方からF II-2b 住居址→F II-2a 住居址の順序で住居址の変遷があったと考えられる。また、両者間の柱穴配置の基本的な類似性からみて、F II-2a 住居址は柱穴群と炉のほかに、F II-2b 住居址の壁・床面の大半の部分を再利用しているのではないかと推定される。他遺構との重複では、この住居址群はF III-5 住居址を切り、F II-53 フラスコ形ピットには切られている。F II-52 フラスコ形ピット・F III-62 フラスコ形ピットとの新旧関係については不明である。

(高橋 文夫)

F III区

F III-1 住居址

この住居址については、すでに「遺構編 I」の中で報告しているので、ここではその記載を省略することにする。

F III-2 住居址 (図版10ade ; 写真図版15ab・16a)

残存状態が著しく不良であるために、この住居址の詳細についてはよくわからない。十和田 a 降下火山灰を切る在り方を示すことや、床面とみられる部分から土師器類が出土していることなどから、この住居址は時代的に平安時代に位置づけられるものであろう。残存している壁の輪郭線からみて、一辺3.8m前後の規模をもち、平面形は方形を基調とする形態を示していたものではないかと考えられる。また、住居址内にはカマドと炉がそれぞれ1基ずつ設けられていたとみられる。

埋土は主に黒褐色土層で構成されている。また、層位的にこの住居址は十和田 a 降下火山灰を切る在り方を示している。この関係は土層断面図によく表われている。

床面にはやや凹凸があって、比較的軟弱な面となっている。この床面は十和田 a 降下火山灰を包含する暗褐色土層を切って作られている。ピットについてはF III-3 住居址の記載後にと

りまとめて述べることにする。住居址の壁高は、北壁24cm±・南壁30cm±・西壁29cm±を計る。

カマドとみられる部分は住居址の南壁沿いの地点に位置している。保存状態が悪く、一部が痕跡的に残存していたにすぎない。この部位では、カマド袖部を構成していたと考えられる粒径11cm～22cm±の安山岩垂角礫群がみられたほか、床面には現地性焼土の存在が確認されている。炉と考えられる現地性焼土はその在り方からみて、住居址のほぼ中央部に位置していたのではないかと考えられる。この部位では、径50cm±・深さ7cm±の規模の現地性焼土の形成がみられる。

F III—3 住居址（図版10abc；写真図版15b・16b）

この住居址はF III—2住居址の下位から検出されたもので、埋土下底部から出土している土器などを参考にして推定すると、これは縄文時代前期前半期に位置づけられるものではないかと考えられる。保存が比較的良好な状態で検出されている。住居址の埋土と周辺の再堆積火山灰層との識別が困難で壁のかなりの部分を掘りすぎているが、残存している壁の輪郭線から判断すると、この住居址は一辺3.8m±の規模をもち、平面形は方形を基調とする形態を示していたものではないかと考えられる。炉は検出されていない。

埋土は主に褐色～暗褐色土層群で構成されている。

床面はほぼ平坦で、全体に軟弱なものとなっている。東半部の床面にはかなりの掘りすぎがみられる。壁高は、北壁（残存部）6cm±・南壁41cm±・西壁40cm±を計る。

以上、F III—2住居址・F III—3住居址について個別的に記載してきた。ピットについてみれば、これらの住居址の内外には、P₁（径24cm±・深さ13cm±）・P₂（径24cm±・深さ12cm±）・P₃（径23cm±・深さ19cm±）・P₄（径22cm±・深さ12cm±）・P₅（径28cm±・深さ18cm±）・P₆（径21cm±・深さ15cm±）・P₇（径16cm±・深さ7cm±）・P₈（径24cm±・深さ17cm±）・P₉（径29cm±・深さ27cm±）・P₁₀（径30cm±・深さ21cm±）・P₁₁（径18cm±・深さ18cm±）・P₁₂（径20cm±・深さ18cm±）・P₁₃（径18cm±・深さ14cm±）・P₁₄（径25cm±・深さ30cm±）・P₁₅（径20cm±・深さ10cm±）・P₁₆（径20cm±・深さ20cm±）・P₁₇（径36cm±・深さ14cm±）・P₁₈（径19cm±・深さ12cm±）・P₁₉（径90cm±・深さ78cm±）・P₂₀（径23cm±・深さ15cm±）などのピット群がみられる。これらの中には両住居址の柱穴を構成するものもあるのかもしれないが、その具体的な位置づけについては不明である。

重複関係の面では、F III—3住居址はF III—2住居址によって切られている。また、ピットの配置および壁の残存とみられる部分の在り方から、これらの住居址の北側にさらにもう1棟の縄文時代住居址が存在していたのではないかと考えられる。

F III—4 住居址（図版11ab・112ab；写真図版16c・17a・143bc・144a）

炉の出土土器からみて、この住居址は縄文時代前期前半期に位置づけられるものであろう。

保存状態が良好ではないことや、精査中に壁・床面ともに掘りすぎがみられたことなどから、規模や形態については明らかではない。最大径で7.5m±の部分が残存しているにすぎない。平面的には2基の地床炉が検出されている。

埋土はいくつかの層に細分されるが、基本的には褐色～黒褐色土層群により構成されている。これらの埋土は、いずれも自然堆積相を示している。

床面はほぼ平坦で、全体にきわめて軟弱な面となっている。いずれが柱穴を構成するものか明らかではないが、この住居址内からは、P₁（径19cm±・深さ29cm±）・P₂（径28cm±・深さ42cm±）・P₃（径23cm±・深さ28cm±）・P₄（径20cm±・深さ15cm±）・P₅（径32cm±・深さ20cm±）・P₆（径27cm±・深さ46cm±）・P₇（径20cm±・深さ22cm±）・P₈（径29cm±・深さ23cm±）・P₉（径21cm±・深さ17cm±）・P₁₀（径45cm±・深さ39cm±）・P₁₁（径64cm±・深さ30cm±）・P₁₂（径19cm±・深さ18cm±）・P₁₃（径23cm±・深さ22cm±）・P₁₄（径28cm±・深さ35cm±）・P₁₅（径40cm±・深さ14cm±）・P₁₆（径73cm±・深さ15cm±）・P₁₇（径33cm±・深さ12cm±）・P₁₈（径32cm±・深さ15cm±）などのピット群が検出されている。住居址の壁高は、北壁14cm±・南壁33cm±・東壁23cm±を計る。壁溝は設けられていない。

この住居址から検出された2基の炉はいずれも地床炉の形態をもつもので、両者ともに上下に重複する新旧の炉群から成っている。住居形態が不明であるために、住居址内におけるこれらの具体的な位置関係についてはよくわからない。北西部に位置する地床炉（1号）では、径150cm±×130cm±の範囲に現地性焼土の形成がみられる。この中で、古期の炉は床面よりも僅かに低い位置に、また新期の炉は床面よりも僅かに高い位置に、それぞれの使用面が設けられている。面はいずれもきわめて堅くしまるものとなっている。ここにみられる新期の炉は、古期の地床炉の凹部に層厚6cm±の火山灰を閉塞した上で設けられたものである。これらの下位の火山灰層は、13cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。南東部に位置する地床炉（2号）では、径190cm±×125cm±の範囲に現地性焼土の形成がみられる。この中で、古期の炉は床面とほぼ同じレベルに、また新期の炉は床面よりも僅かに高い位置に、それぞれその使用面が設けられている。面はいずれもきわめて堅くしまるものとなっている。ここにみられる新期の炉は、1号炉と同様に、古期の炉の使用面の上に層厚5cm±の火山灰を閉塞した上で設けられたものである。これらの下位の火山灰層は、14cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。この2号炉はピットP₁₀・P₁₁により切られている。

以上、地床炉について個別的に記載してきた。これらの中で、新期を構成する炉の間では、いずれも古期の地床炉に比較して火熱による赤色変化の程度が低いという共通性がみられる。また、古期の炉では両者ともに掘り方を伴っていて、その内部には汚れ火山灰が充填されていた。この汚れ火山灰の中には、炭化物・焼土が僅かに含まれている。

この住居址からの出土遺物としては、2号炉の使用面上の土器片がある。また、この炉の南東に接する位置には、台石と考えられる粒径54cm±の安山岩亜角礫が存在していた。

重複関係について言えば、調査範囲内に関する限りこの住居址は単独で検出されたもので、他の遺構との切り合い関係は認められていない。

F III—5 住居址 (図版7a・12ab・112cde ; 写真図版17b・21a・143d・144bc・145ab)

床面上の出土遺物からみて、この住居址は縄文時代前期前半期に位置づけられるものであろう。複数の住居址・ピット類・風倒木などによって多くの部分が破壊を受けているために、一部を除けば、残存がきわめて不良な状態で検出されている。したがって、規模や形態についてはよくわからない。6.0m×4.0m前後の範囲が残存していたにすぎない。調査範囲内では、3基の地床炉が検出されている。

埋土は主に褐色～暗褐色土層によって構成されている。これらは、いずれも自然堆積相を示している。

床面はほぼ平坦で、全体に軟弱な面となっている。いずれが柱穴を構成するものか明らかではないが、この住居址内からは、P₁ (径28cm±・深さ14cm±)・P₂ (径23cm±・深さ50cm±)・P₃ (径14cm±・深さ10cm±)・P₄ (径24cm±・深さ53cm±)・P₅ (径27cm±・深さ32cm±)・P₆ (径19cm±・深さ14cm±)・P₇ (径28cm±・深さ21cm±)・P₈ (径18cm±・深さ10cm±)・P₉ (径20cm±・深さ25cm±)・P₁₀ (径37cm±・深さ13cm±)・P₁₁ (径22cm±・深さ10cm±)・P₁₂ (径22cm±・深さ18cm±)・P₁₃ (径48cm±・深さ10cm±)・P₁₄ (径35cm±・深さ24cm±)・P₁₅ (径50cm±・深さ132cm±)などのピット群が検出されている。これらのほかに、F III—6 住居址・G III—2 住居址に切られた範囲内にも、当住居址に伴うピット群が存在していたものであろう。この住居址の壁高は、残存している北壁部分で26cm±を計る。壁溝は設けられていない。

検出された3基の炉は地床炉の形態をもつもので、いずれもその使用面上に現地性の炭化物層を伴っている。北西部に位置する1号炉は床面よりも僅かに低いレベルに使用面をもつもので、径100cm±の範囲に層厚9cm±の現地性焼土層の形成がみられる。使用面はきわめて堅くしまるものとなっている。この炉は、径110cm±・最大層厚5cm±の現地性炭化物層によって直接的に被覆されている。この炭化物層中からは、248個に達する炭化した栗が出土している。南西部に位置する2号炉も床面よりも僅かに低いレベルに使用面をもつもので、径100cm±×60cm±の範囲に層厚4cm±の現地性焼土層の形成がみられる。この炉の使用面もきわめて堅くしまるものとなっている。この炉は、径210cm±×120cm±・最大層厚10cm±の現地性炭化物層によって直接的に被覆されている。この炭化物層中からは34個の炭化した栗が出土している。北東部に位置する3号炉は、床面よりもやや高いレベルにその使用面をもつもので、径90cm±×80cm±

の範囲に層厚 8 cm 土の現地性焼土層の形成がみられる。使用面はきわめて堅くしめる面となっていて、この面上は最大層厚 4 cm 土の現地性炭化物層によって被覆されていた。

この住居址からの出土遺物としては、床面上から得られた若干の土器片のほかに、2 個の台石がある。このうちの 1 個は 2 号炉の僅かに上位から出土したもので、粒径 52 cm 土の扁平な安山岩垂角礫である。他の 1 個はピット P₁₅ に接する付近の床面上から出土したもので、粒径 50 cm 土の扁平な安山岩垂角礫である。

重複関係の面では、この住居址は、F II—2 住居址群・F III—6 住居址・G III—2 住居址により切られている。F III—6 住居址と重複する部分では、この住居址は床面下 20 cm 土の深さまで削剝を受けている。当住居址内から検出された 3 基の地床炉は、規模や相互の配置からみていずれも「定位置」の炉として捉えられるべきものであって、このことからすれば、F III—6 住居址によって削剝された範囲内には、2 号炉または 3 号炉と対になるもう 1 基の地床炉が存在していたものと推定することができよう。また、ピット間との重複では、この住居址は F III—62 フラスコ形ピット・F III—63 フラスコ形ピット・F III—64 フラスコ形ピット・G III—52 ピット・G III—51 ピットなどにより切られている。

F III—6 住居址 (図版 7a・12ab)

この住居址から時期決定資料は出土していないが、重複住居址群との先後関係からみて、この住居址も縄文時代前期前半期に位置づけられるものであろう。大半の部分が後出の住居址やピット群に削剝を受けているために、残存状態は著しく不良である。4.0 m × 2.0 m 前後の範囲が痕跡的に残っているにすぎない。炉は検出されていない。

埋土は、主に褐色～暗褐色土層により構成されている。

床面はほぼ平坦で、比較的軟弱な面となっている。柱穴状のピットは P₁₆ (径 33 cm 土・深さ 15 cm 土) が検出されているにすぎない。壁高は、残存している西壁部分で 12 cm 土を計る。

重複関係について言えば、この住居址は F III—5 住居址を切り、G III—2 住居址群には切られている。また、F III—64 フラスコ形ピット・G III—51 ピット・G III—52 ピットや風倒木跡にも切られている。

(高橋 文夫)

G III 区

G III—1 住居址 (図版 7a・13b; 写真図版 18a)

床面からは時期決定資料となる遺物は出土していないが、埋土中の土器などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代前期前半期に位置づけられるものであろう。大半の部分が他

の住居址に切られているために、規模や形態についてはよくわからない。6.0m×2.3m前後の範囲が残存しているにすぎない。炉は検出されていない。

GⅢ-2 住居址群との埋土の一連の断面観察によれば、この住居址の埋土は主に褐色～黒褐色土層により構成されている。

床面は全体的にほぼ平坦であるが、Field Cardにも具体的な記載を欠くために、他の性状についてはよくわからない。柱穴を構成するものかどうか明らかではないが、南壁際にはピットP₁（径19cm±・深さ21cm±）が検出されている。残存部での壁高は、南壁41cm±・東壁16cm±・西壁58cm±を計る。

重複関係では、この住居址はGⅢ-2 住居址群・GⅢ-4 住居址群により切られている。GⅢ-3 住居址との切り合いについてはよくわからない。

GⅢ-2 住居址群（図版7a・13cd・113abcd；写真図版19・20・21b・145cd・146ab・257d）
柱穴配置を検討した結果、この住居址群が検出された範囲内には最低4棟の住居址が存在していることが明らかにされた。これらについて今、新しいと考えられるものから順に、GⅢ-2a 住居址・GⅢ-2b 住居址・GⅢ-2c 住居址・GⅢ-2d 住居址と呼称することにする。これらの中で、柱穴配置の基本的な類似性や柱穴間の再利用形態の存在からみて、GⅢ-2a 住居址・GⅢ-2b 住居址・GⅢ-2c 住居址などは同系列で、一連のものとして位置づけることができよう。これに反して、GⅢ-2d 住居址では前3者と比較して柱穴配置が著しく異り、また柱穴間の再利用形態の存在もみられない。これらのことから、GⅢ-2d 住居址は他の3棟に先行する異系列の住居址であると考えられよう。以下、各住居址について個別に記載する。

GⅢ-2a 住居址（図版7a・13cd・113abcd；写真図版19・20・21b・145cd・146ab・257d）
床面上の出土遺物からみて、この住居址は縄文時代前期前半期に位置づけられるものであろう。後世の攪乱部分やピットで切られている範囲を除けば、大半は保存が良好な状態で検出されている。壁や壁溝の輪郭線からみると、この住居址は7.7m±×5.5m±の規模をもち、平面形は長方形の形態を示している。床面には、他の住居址に所属すると考えられるものや新旧関係にあるものを取り混ぜて、平面的に10基の地床炉が検出されている。

埋土はいくつかの層に細分されるが、基本的には褐色～暗褐色・黒褐色土層群により構成されている。これらのうち、埋土下底部の層準を占める汚れ火山灰優占の褐色土中には僅かに、炭化物・亜円礫・土器片などが含まれている。

床面はほぼ平坦で、全体に比較的軟弱な面となっている。柱穴は、P₁（径19cm±・深さ18cm±）・P₂（径40cm±・深さ21cm±）・P₃（径28cm±・深さ58cm±）・P₄（径17cm±・深さ25cm±）・P₅（径36cm±・深さ54cm±）など、5個のピットで構成されているものと考えられる。これらは全体で五角形を形作る安定した配置を示している。柱穴P₅は、同位置的にGⅢ-2b 住居址・

G III-2c 住居址のそれと共有関係にある。壁高は、北壁 8 cm± (G III-4 住居址群床面との比高)・南壁 62 cm± (G III-1 住居址床面との比高)・東壁 2 cm± (G III-4 住居址群床面との比高)・西壁 84 cm± (F III-6 住居址床面との比高)を計る。この住居址の壁溝は、北壁沿いの東半部および東壁沿いと南壁沿いに設けられている。これらの壁溝の規模は、幅 8 cm±~48 cm±・深さ 4 cm±~21 cm±を計る。

前述したように、この住居址内からは平面的な形で全部で 10 基の地床炉が検出されている。それらのうち、8 号・9 号・10 号の各炉は当住居址の東壁沿いに位置して、明確に壁溝によって切られている。したがって、これらの 3 基は当住居址に直接的に伴うものではなく、配置からすれば G III-4 住居址群内に含まれるべきものと考えられる。これらについては G III-4 住居址群の項目内で記載することにする。上記のもの以外の 7 基は、その在り方から判断して、いずれもこの住居址群に所属し、「定位置」の地床炉を構成するものであろう。

住居址北西部では、平面的に 3 基の地床炉が集合した状態で検出されている。これらの中で、1 号炉がもっとも新しい段階に位置づけられるのではないかと考えられる。この炉は、上下に重複する 2 基の地床炉から成っている。古期の炉の大半の部分および新期の炉の使用面は、床面とほぼ同じレベルに設けられていて、いずれもきわめて堅くしまる面となっている。新期の炉は、古期の炉の凹部に層厚 4 cm±の火山灰を敷設した上で作られている。この 1 号炉の存在する範囲には、径 100 cm±・層厚 12 cm±の現地性焼土が形成されている。ただ、新期の炉は古期の炉に比較して、あまり多くの赤色変化を受けてはいない。2 号炉も床面とほぼ同じレベルにその使用面が設けられているもので、その部位はきわめて堅くしまる面となっている。この範囲には、径 92 cm±・層厚 14 cm±の現地性焼土が形成されている。1 号炉・2 号炉と同様に、3 号炉も床面とほぼ同じレベルにその使用面が設けられているもので、その部位はきわめて堅くしまる面となっている。この 3 号炉は、2 基のピットや精査時の掘りすぎで南半部が多く削剝を受けている。残存している範囲内では、径 100 cm±・層厚 10 cm±の現地性焼土の形成がみられる。断面観察によれば、1 号炉を構成する古期の地床炉と、2 号炉および 3 号炉間の境界は必ずしも明瞭なものではない。

南西部に位置する 4 号炉も北側の一部がピットと掘りすぎによって削剝を受けているものと考えられる。この炉の使用面も床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしまる面となっている。ここでは、径 75 cm±・層厚 13 cm±の現地性焼土の形成がみられる。南東部に位置する 5 号炉は、床面よりも僅かに高いレベルにその使用面が設けられている。面はきわめて堅くしまるものとなっている。この部位には、径 110 cm±・層厚 10 cm±の現地性焼土が形成されている。詳細は明らかではないが、平面形と断面形の観察によれば、この 5 号炉は重複する複数の地床炉から構成されているのではないかと推定される。

北東部には重複関係にある2基の地床炉がみられる。これらのうち、6号炉は床面とほぼ同じレベルにその使用面が設けられているもので、ここでは、径110cm±・層厚9cm±の現地性焼土の形成がみられる。使用面はきわめて堅くしめる面となっている。7号炉も床面とほぼ同じレベルにその使用面が設けられているもので、この部位では径82cm±・層厚13cm±の現地性焼土が形成されている。使用面自体はきわめて堅くしめる面となっている。断面観察によれば、この7号炉は6号炉を明瞭に切っている。

以上、この住居址群に所属するとみられる7基（上下に重複するものも含めると8基）の地床炉についてとりまとめて述べてきた。これらのうち、地床炉間の重複関係や配置面からみて、1号・4号・5号・7号の各地床炉がGⅢ-2a住居址に伴うものではないかと推定される。この中には、古期の住居址群と共有関係を示すものも存在しているのであろう。

GⅢ-2b住居址（図版7a・13cd・113abcd；写真図版19・20・21b・145cd・146ab・257d）

この住居址の柱穴は、P₆（径29cm±・深さ31cm±）・P₇（径29cm±・深さ60cm±）・P₈（径58cm±・深さ52cm±）・P₉（径31cm±・深さ57cm±）・P₅（前掲）など、5個のピットで構成されているのではないかと考えられる。これらは全体で五角形を形作る安定した配置を示している。この中で、P₅はGⅢ-2a住居址・GⅢ-2c住居址と、P₇はGⅢ-2c住居址とそれぞれ共有される関係にある。また、P₆の部位では、GⅢ-2c住居址の柱穴P₁₀を切っている。

GⅢ-2c住居址（図版7a・13cd・113abcd；写真図版19・20・21b・145cd・146ab・257d）

この住居址の柱穴は、P₁₀（径27cm±・深さ31cm±）・P₇（前掲）・P₁₁（径39cm±・深さ43cm±）・P₁₂（径27cm±・深さ53cm±）・P₅（前掲）など、5個のピットで構成されているものではないかと考えられる。これらは全体で五角形を形作る安定した配置を示している。この中で、P₅はGⅢ-2a住居址・GⅢ-2b住居址と、P₇はGⅢ-2b住居址とそれぞれ共有される関係にある。またP₁₀の部位では、GⅢ-2b住居址の柱穴P₆に切られ、GⅢ-2d住居址の柱穴P₁₃を切る関係がみられる。

以上に述べてきたGⅢ-2a住居址・GⅢ-2b住居址・GⅢ-2c住居址の関係について、ここで簡単に触れておく。住居形態との関連からみて、GⅢ-2a住居址の柱穴群としたものが最新期に位置づけられるものであることについては、まず問題がないであろう。GⅢ-2b住居址とGⅢ-2c住居址との間では、主に柱穴P₆とP₁₀の切り合いでその新旧関係が推定されたが、このP₆とP₁₀をこれら2棟の住居址の中で入れ換えてみる観方を取れば、これらの新旧関係は逆転する可能性も生じることになる。したがって、GⅢ-2b住居址とGⅢ-2c住居址との正確な新旧関係についてはよくわからない。それがいずれであるにしろ、上記の3棟にみられる柱穴配置の基本的な類似性や柱穴間の再利用形態の存在などから、これらは相互に密接な関連をもつ一連の住居址群であると推定されよう。柱穴配置の規模もほぼ同様のところから、GⅢ

—2b 住居址・GⅢ—2c 住居址ともに、GⅢ—2a 住居址とかなりよく一致した住居形態や規模を示しているものではないかと考えられる。

これら住居址間の各部位における再利用形態の存在または共有関係についてももう少し述べると、これらは壁・床面・柱穴・炉の全部または一部をそれぞれ共有し合う関係にあると推定される。これらの各部位のうち、柱穴については今まで詳しく触れてきたので、ここでは説明を省略する。各住居址の柱穴の配置からみると、少なくとも西壁の南半部と南壁は3棟の住居址によって共有されているものと考えられる。さらに東壁では、GⅢ—4住居址群に伴うと考えられる8号炉・9号炉・10号炉を切る壁溝の在り方からみて、この部位でも3者による壁の共有が行なわれていたものと推定される。壁や壁溝を欠くところもあって必ずしも明確なものではないが、北壁や西壁の北半部についても同じような状況を呈していたのではないかと考えられるのかもしれない。

壁と同様に、床面の大半の部分も3棟の住居址に共有される関係にあるのではないかとみられる。この関係を床面から直接的に捉えることはできないが、地床炉の使用面の在り方や重複関係から判断する限り、上に述べたことは十分根拠があることとしてその推定が成り立つことになる。単独で検出された地床炉も、複数が重複する形で検出された地床炉も、ほとんどのものは床面とほぼ同じレベルにその使用面が設けられている。しかも、その使用面のすべてが火熱によってきわめて堅くしめる面を呈していることは、それらが削剝などを受けていないことを示しているものであろう。また、1号炉の新期のものを除けば、地床炉や床面には貼り床を施している痕跡は認められていない。以上のことから、床面の共有関係も存在していたものと推定される。

炉についてみると、GⅢ—2a 住居址には1号炉・4号炉・5号炉・7号炉が伴うものであることが推定された。住居形態との関連から言えば、これらはいずれも「定位置」地床炉として捉えることができるものであろう。このことについては後の考察でも詳しく触れるが、長者屋敷遺跡でみる限り、縄文時代前期前半期に位置づけられるこの種の形態をもつ住居址は、原則的に4基の「定位置」地床炉を伴うものであると考えられる。このことからみて、GⅢ—2b 住居址・GⅢ—2c 住居址も、おそらく4基の「定位置」地床炉を伴っていたものであろう。北西部および北東部にみられる複数の地床炉の重複は、住居址群の変遷に対応する炉のつけ替えなどを示しているものであろう。また、痕跡がはっきりしないために明確なものではないが、4号炉と5号炉の部位ではほとんど同位置的な再利用が行なわれていたのではないかと推定される。

GⅢ—2d 住居址（図版7a・13cd・113abcd；写真図版19・20・21b・145cd・146ab・257d）

この住居址は、GⅢ—2住居址群内に柱穴配置だけが痕跡的に検出されて、その存在が明ら

かになったものである。上記の3棟の住居址と著しく柱穴配置を異にするところから、G III-2 住居址群内で、これのみが異系列の住居址であると考えられる。その柱穴は、P₁₃ (径18cm±・深さ35cm±)・P₁₄ (径31cm±・深さ不明)・P₁₅ (径37cm±・深さ18cm±)・P₁₆ (径19cm±・深さ14cm±)・P₁₇ (径27cm±・深さ52cm±)・P₁₈ (径20cm±・深さ28cm±)・P₁₉ (径31cm±・深さ20cm±) など、7個のピットで構成されているものと考えられる。実測図中に測定値が記入されていないために P₁₄の深度は不明なものとなっているが、これがある程度の深さをもつものであることは写真からも読み取ることができよう。これらの柱穴は、P₁₅—P₁₆・P₁₆—P₁₄・P₁₄—P₁₇・P₁₇—P₁₃・P₁₃—P₁₈とジグザグ状に配置されている。また P₁₉は、P₁₃と P₁₈を結ぶ線を底辺とする三角形の頂点にあたる位置に配されている。P₁₃の部位では、G III-2c 住居址に伴う柱穴 P₁₀に切られる関係がみられる。

以上、G III-2 住居址群内の各住居址について個別的に記載してきた。この住居址群内には上に述べてきた柱穴群のほかに、なお、P₂₀ (径30cm±・深さ11cm±)・P₂₁ (径15cm±・深さ6cm±)・P₂₂ (径17cm±・深さ8cm±)・P₂₃ (径83cm±・深さ61cm±)・P₂₄ (径20cm±・深さ25cm±)・P₂₅ (径34cm±・深さ14cm±)・P₂₆ (径21cm±・深さ8cm±)・P₂₇ (径30cm±・深さ24cm±)・P₂₈ (径61cm±・深さ52cm±)・P₂₉ (径16cm±・深さ9cm±)・P₃₀ (径29cm±・深さ95cm±)・P₃₁ (径15cm±・深さ40cm±)・P₃₂ (径18cm±・深さ56cm±)・P₃₃ (径27cm±・深さ32cm±)などのピット群が検出されている。これらのうち、P₂₁・P₂₂・P₂₃・P₂₄・P₂₅・P₂₆・P₃₁などはその在り方からみて、壁または壁溝に関連するピットとして位置づけられるのかもしれない。また、P₃₂・P₃₃はG III-4 住居址群に伴う柱穴ではないかと考えられる。そのほかのピット群の具体的な位置づけや性格についてはよくわからない。

最後に、ここにみられる遺構間の重複関係についてとりまとめて述べる。G III-2a 住居址・G III-2b 住居址・G III-2c 住居址を一連の同系列住居址群として捉えると、これらは、F III-5 住居址・F III-6 住居址・G III-1 住居址・G III-2d 住居址・G III-3 住居址・G III-4 住居址群を切っている。また、これらは、G III-53フラスコ形ピット・G III-55フラスコ形ピットには切られている。G III-2d 住居址もG III-53フラスコ形ピットやG III-55フラスコ形ピットには切られているが、F III-5 住居址・F III-6 住居址・G III-1 住居址・G III-3 住居址・G III-4 住居址群との新旧関係については不明なものとなっている。

G III-3 住居址 (図版7a・13a)

床面上などから時期決定資料となる遺物は出土していないが、ここにみられる住居址間の重複の在り方からみると、この住居址も縄文時代前期前半期に位置づけられるものであろう。南半部の大半が削剝を受けているものとみられ、3.8m±×2.2m±の範囲が残存しているにすぎない。残存している壁の輪郭線から推定すると、この住居址は平面的には楕円形状の形態を示

していたものかもしれない。炉は検出されていない。

この住居址はGⅢ-2住居址群を精査中に付随的に検出されたもので、埋土に対する観察は行なわれていない。

床面はほぼ平坦で、全体に比較的軟弱な面となっている。柱穴状のピットは、P₁(径28cm±・深さ11cm±)・P₂(径18cm±・深さ31cm±)・P₃(径17cm±・深さ21cm±)などが検出されているにすぎない。壁高は、北壁42cm±・東壁20cm±(GⅢ-4住居址群床面との比高)を計る。壁溝は設けられていない。

重複関係の面では、この住居址はGⅢ-4住居址群を切り、GⅢ-2住居址群(GⅢ-2d住居址を除く)には切られている。FⅢ-5住居址・FⅢ-6住居址・GⅢ-1住居址・GⅢ-2d住居址・GⅢ-53フラスコ形ピット・GⅢ-55フラスコ形ピットとの新旧関係についてはよくわからない。

GⅢ-4住居址群(図版7a・14a・113ef・114abc;写真図版20・146cde)

床面上などから時期決定資料となる遺物は出土していないが、埋土下部から得られた土器や、ここにみられる住居址間の重複状態をもとにして推定すると、この住居址群は縄文時代前期前半期に位置づけられるものであろう。柱穴配置を検討した結果、この住居址群が検出された範囲内には最低2棟の住居址が存在していることが推定された。詳しくはわからないが、残存している壁の輪郭線や地床炉の配置などからみると、ここにはなお複数の住居址が存在しているのではないかと考えられる。この住居址群は全体で、6.8m×6.0m前後の部分が残存している。また、この住居址群内からは平面的に8基の地床炉が検出されている。以下、存在が推定された各住居址について記載し、最後に全体的な状況についてとりまとめて述べることにする。

GⅢ-4a住居址(図版7a・14a・113ef・114abc;写真図版20・146cde)

この住居址の柱穴は、P₃₂(径18cm±・深さ56cm±)・P₃₄(径28cm±・深さ68cm±)・P₃₅(径25cm±・深さ46cm±)・P₃₆(径16cm±・深さ29cm±)・P₃₇(径28cm±・深さ61cm±)など、5個のピットで構成されているものではないかと考えられる。これらは全体で五角形を形作る安定した配置を示している。P₃₂の部位では、GⅢ-4b住居址の柱穴P₃₃を切っているとみられる。また、P₃₇はGⅢ-4b住居址と共有される関係にあると推定される。

GⅢ-4b住居址(図版7a・14a・113ef・114abc;写真図版20・146cde)

この住居址の柱穴は、P₃₃(径27cm±・深さ32cm±)・P₃₈(径23cm±・深さ24cm±)・P₃₉(径23cm±・深さ24cm±)・P₄₀(径30cm±・深さ20cm±)・P₃₇(前掲)など、5個のピットで構成されているものではないかと考えられる。これらの柱穴群は全体で五角形を形作る安定した配置を示している。前述したように、P₃₃はGⅢ-4a住居址に切られ、またP₃₇は同住居址と共有される関係にあると推定される。

以上、2棟の住居址の主に柱穴配置について記載してきた。この2棟の住居址は柱穴配置の基本的な類似性や柱穴間の再利用形態の存在からみて、一連の同系列住居址であろう。これらはGⅢ-4住居址群内でも新しい方の段階に位置づけられるものではないかと考えられる。あるいは、これらはGⅢ-2住居址群をも切る関係にあるのかもしれない。これら2棟の住居址は、床面のかなりの部分を共有する関係にあるのではないかと考えられる。ここの部位の床面は、GⅢ-4住居址群の中でも古期の段階に位置づけられる住居址の床面よりも僅かに低い位置に設けられている。この床面はほぼ平坦で、全体に比較的軟弱な面となっている。両住居址群間の床面はなだらかに推移し、その境界は必ずしも明瞭ではない。

GⅢ-4a住居址・GⅢ-4b住居址に伴う壁や壁溝についてもはっきりとはしないが、少なくとも、南壁およびその直下の壁溝はGⅢ-4a住居址に関係しているものではないかと考えられる。この部位では、精査時の掘りすぎのために壁高は不明なものとなっている。壁溝は、長さ350cm±・幅11cm±~21cm±・深さ8cm±~12cm±の規模のものである。GⅢ-2住居址群の南東隅にみられる長さ95cm±の壁溝状のものも、あるいはこれと一連のものと考えられるかもしれない。在り方からみて、ここの部位の壁や壁溝などは、GⅢ-4住居址群中の古期住居址にも利用されているものであろう。

GⅢ-4a住居址・GⅢ-4b住居址に伴う地床炉は、12号炉・13号炉・14号炉の群であると考えられる。この中には古期の住居址に所属するものもあるのかもしれないが、一応これらについてここでまとめて述べることにする。

12号炉は上下に重複する新旧2基の地床炉から成るもので、径70cm±×60cm±の範囲に層厚10cm±の現地性焼土の形成がみられる。新期の炉は、古期の炉の中央部の凹部に層厚4cm±の火山灰を敷設した上で設けられている。古期の炉の大半の部分と新期の炉は、その使用面が床面とほぼ同じレベルに設けられていて、面はいずれも堅くしまるものとなっている。13号炉も使用面が床面とほぼ同じレベルに設けられているもので、径86cm±の範囲に層厚13cm±の現地性焼土が形成されている。使用面自体は堅くしまるものとなっている。この13号炉は、次に述べる14号炉によって北側の一部が切られている。14号炉も使用面が床面とほぼ同じレベルに設けられているもので、この部位では、径80cm±の範囲に層厚11cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は堅くしまるものとなっている。前述したように、この14号炉は13号炉の北側の一部を切って作られている。この炉の現地性焼土層の下位には明瞭な掘り方が伴っていて、その内部は汚れ火山灰で充填されていた。

GⅢ-4c住居址（図版7a・14a・113ef・114abc；写真図版20・146cde）

GⅢ-4住居址群の中でも新しい段階に位置するとみられるGⅢ-4a住居址・GⅢ-4b住居址の状況については以上のとおりである。次に、古期を構成すると考えられる住居址の残存

について述べることにする。前述したように、この住居址は北壁沿いの長さ6.0m前後の部分が残存しているほか、GⅢ-2住居址群内に分布する地床炉の在り方などからみても、GⅢ-4a住居址の南壁とした幅6.8m前後の範囲まで、何らかの形でこの住居址に関係しているのではないかと考えられる。この住居址を今、GⅢ-4c住居址と呼称することにする。残存している壁の輪郭線からみて、この住居址は楕円形状の形態を示していたものかもしれない。

一部での観察にすぎないために全体については明瞭ではないが、この住居址の埋土は主に、下半部が汚れ火山灰優占の褐色土で、上半部が黒褐色土層でそれぞれ構成されている。

床面はほぼ平坦で、全体に比較的軟弱な面となっている。この住居址に伴う固有の柱穴群ははっきりしない。柱穴状のピットとしては、P₄₁（径26cm±・深さ11cm±）・P₄₂（径40cm±・深さ12cm±）・P₄₃（径24cm±・深さ20cm±）・P₄₄（径20cm±・深さ23cm±）などのものがみられるにすぎない。GⅢ-2住居址群内に分布するピット群の中には、あるいは当住居址の柱穴を構成するものも存在しているのかもしれない。そのほかのものとして、P₄₅（径16cm±・深さ12cm±）・P₄₆（径12cm±・深さ8cm±）・P₄₇（径10cm±・深さ4cm±）・P₄₈（径21cm±・深さ11cm±）などの小ピット群が検出されている。これらはその在り方からみて、次に述べる壁溝に関連しているものなのであろう。この住居址の壁高は、北壁沿いで20cm±を計る。また、この部位には、上に述べた小ピット群を挟んで、長さ114cm±・220cm±（後者は残存部長）の2条の壁溝が設けられている。これらは、いずれも幅10cm±～38cm±・深さ2cm±～7cm±の規模を示している。

このGⅢ-4c住居址に伴うとみられる地床炉は平面的に5基のものが検出されている。これらのうち、8号炉・9号炉・10号炉の3基はGⅢ-2住居址群内の東壁沿いで検出されたもので、いずれもその東側部分を同住居址群の壁溝によって切られている。また、これらの上部はすべてが軟弱な面となっているために、GⅢ-2住居址群の側から使用面が削剝を受けているのではないかと考えられる。残存している部分についての規模を言えば、8号炉では径40cm±・層厚10cm±、9号炉では径70cm±・層厚5cm±、10号炉では径85cm±・層厚6cm±の現地性焼土がそれぞれ形成されている。断面観察によれば、10号炉としたものは平面的に2基の地床炉で構成されているものなのかもしれない。

11号炉もGⅢ-2住居址群の東側壁溝によって切られているが、これもあるいは8号炉と一連のものとみられるのかもしれない。この部位には、径48cm±・層厚6cm±の現地性焼土が形成されている。この炉の使用面は床面よりも僅かに高い位置に設けられていて、比較的堅くしまる面となっている。GⅢ-2住居址群の北側壁溝によって切られている15号炉の部位では、径85cm±・層厚13cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉は上下に重複する2基の地床炉から成るもので、新期の炉は古期の炉の凹部に層厚3cm±の火山灰を敷設した上で作られてい

る。両者の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、いずれもきわめて堅くしめる面となっている。新期のものは古期の炉に比較して、あまり多くの赤色変化を受けてはいない。

以上、G III-4 住居址群内の古期住居址について述べてきた。最後に、ここにみられる遺構間の重複関係について触れる、G III-4 住居址群の中で、少なくともG III-4c 住居址は、G III-2a 住居址・G III-2b 住居址・G III-2c 住居址・G III-3 住居址・G III-4a 住居址・G III-4b 住居址によって切られている。G III-2d 住居址との新旧関係についてはよくわからない。また、G III-4a 住居址・G III-4b 住居址は、あるいはG III-2 住居址群内の新期住居址群よりも新しい段階に位置づけられる可能性があるのかもしれない。ピットとの重複関係について言えば、G III-4 住居址群は、G III-56 フラスコ形ピット・G III-57 フラスコ形ピット・G III-58 フラスコ形ピットによって切られているものと考えられる。

G III-5 住居址

この遺構が位置している地点では、長者屋敷遺跡における基本層序のⅢ層上面から、地床炉的な3基の現地性焼土が検出されている。この焼土の内外には壁・壁溝・床面・柱穴などは認められていないので、これらは住居址を構成するものというよりも、むしろ焼土遺構として取り扱うべきものかもしれない。したがって、ここでG III-5 住居址を欠番扱いとして、ここに検出された焼土群については新たにG III-201 焼土遺構群として別に記載することにする。

G III-6 住居址

この遺構が位置している地点では、長者屋敷遺跡における基本層序のⅢ層上面から、地床炉的な1基の現地性焼土が検出されている。周辺にはいくつかのピットが検出されているものの、明確な壁・壁溝・床面・柱穴などは認められていないので、G III-5 住居址としたものと同様に、これは住居址を構成するものというよりも、むしろ焼土遺構として取り扱うべきものであろう。したがって、ここでG III-6 住居址を欠番扱いとし、ここに検出された焼土については新たにG III-202 焼土遺構として別に記載することにする。

G III-7 住居址群 (図版15ab・114def・115abcdef; 写真図版18b・21c・22・23・24a・146f・147abcd・148abcd・257f・258abc)

柱穴配置を検討した結果、この住居址群が検出された範囲内には最低2棟の住居址が存在していることが推定された。これを今、新しいと考えられるものから順にG III-7a 住居址・G III-7b 住居址と呼称することにする。これらの住居址を構成する柱穴群以外の多数のピットの存在や、ピット間の重複関係のあり方からみて、それぞれの柱穴配置は把握されていないものの、この住居址群内にはさらに複数の住居址が位置しているのではないかと推定される。以下、存在が明らかにされた各住居址について個別的に記載する。

G III-7a 住居址 (図版15ab・114def・115abcdef; 写真図版18b・21c・22・23・24a・146f・

147abcd・148abcd・257f・258abc)

床面上および埋土下底部中から出土している遺物群からみて、この住居址は縄文時代前期前半期に位置づけられるものであろう。僅かに掘りすぎた部分を除けば、全体に保存が良好な状態で検出されている。規模は $9.3\text{m}\pm\times 6.5\text{m}\pm$ （後者は推定）を計り、平面形は樽形状に近い形態を示している。床面には平面的に9基の地床炉が検出されている。

埋土はいくつかの層に細分されるが、基本的には褐色～暗褐色土層群により構成されている。これらの埋土は、完形土器類をはじめとして、土器破片・石器類・焼土・炭化物・礫を著しく多く含んでいる。これらの中で、完形土器や土器大形破片群の出土状態をみると、それらは層の傾斜に平行して、壁近くに位置するものは床面から $20\sim 30\text{cm}\pm$ 浮き、住居址中央部に分布するものは床面に密着するかそれに近い層準を占めるという在り方を示している。ここにみられる埋土は、全体的に複合廃棄物的な様相を呈している。

床面は、住居址中央部付近が壁沿いよりも若干高いものとなっている。この床面には全体的に凹凸があって比較的軟弱な面となっている。柱穴は、 P_1 （径 $14\text{cm}\pm$ ・深さ $22\text{cm}\pm$ ）・ P_2 （径 $17\text{cm}\pm$ ・深さ $11\text{cm}\pm$ ）・ P_3 （径 $24\text{cm}\pm$ ・深さ $26\text{cm}\pm$ ）・ P_4 （径 $15\text{cm}\pm$ ・深さ $13\text{cm}\pm$ ）・ P_5 （径 $21\text{cm}\pm$ ・深さ $19\text{cm}\pm$ ）・ P_6 （径 $24\text{cm}\pm$ ・深さ $14\text{cm}\pm$ ）・ P_7 （径 $34\text{cm}\pm$ ・深さ $37\text{cm}\pm$ ）・ P_8 （径 $25\text{cm}\pm$ ・深さ $16\text{cm}\pm$ ）などのピット群で構成されているものと考えられる。これらの間では、 P_2-P_8 ・ P_4-P_7 ・ P_5-P_6 の各群内に対になる配置関係がみられる。また P_1 は、 P_8 と P_2 を結ぶ線を底辺とする三角形の頂点にあたる位置に配されている。柱穴群のこのような配置からすれば、南壁沿いには P_3 と対になる形の仮想柱穴 P_x が存在していたものであろう。

住居址の壁高は、北壁 $21\text{cm}\pm$ ・南壁 $42\text{cm}\pm$ ・東壁 $0\text{cm}\pm$ （消失）・西壁 $22\text{cm}\pm$ を計る。北壁沿いと東壁沿いの大半の部分および南壁沿いの東半部と西壁沿いの一部には、幅 $10\text{cm}\pm\sim 24\text{cm}\pm$ ・深さ $2\text{cm}\pm\sim 12\text{cm}\pm$ の壁溝が断続的に設けられている。北壁沿いの一部と南壁沿いの東半部にみられる2条の壁溝の在り方は、少なくとも一部はこの位置において、複数の住居址が存在していることを示唆しているものであろう。

炉はすべて地床炉の形態をもつもので、平面的に9基のものが確認されている。これらのうち、住居址形態と炉の配置との関連からみると、1号炉から6号炉までは「定位置」の、7号炉から9号炉までは「非定位置」の、それぞれ性格を示しているものであると考えられる。1号炉から6号炉までの「定位置」地床炉は、各々が上下に重複する新旧2基の炉によって構成されている。これに反して、「非定位置」の炉では地床炉間の重複関係はみられない。

住居址北東部に位置する1号炉では、径 $117\text{cm}\pm\times 82\text{cm}\pm$ の範囲に層厚 $13\text{cm}\pm$ の現地性焼土の形成がみられる。ここでは、新期の炉は古期の炉の凹部に層厚 $5\text{cm}\pm$ の火山灰を埋めこんで作られている。両者の使用面の大半の部分は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、いずれも

きわめて堅くしまる面となっている。南東部に位置する2号炉では、径145cm±×65cm±の範囲に層厚8cm±・5cm±の2ヵ所の現地性焼土が形成されている。この部位では、断面観察の結果、2基の地床炉が存在しているものであることが明らかにされた。このうち、2a号炉は床面と同じレベルに比較的堅くしまる使用面を伴っている。2b号炉は、上下に重複する新旧2基の地床炉から成るもので、新期の炉は古期の炉の凹部に層厚2cm±の火山灰を敷設して設けられている。両者の使用面はいずれも床面よりも低い位置にあって、全体にきわめて堅くしまる面となっている。

北壁沿いの中央部付近に位置する3号炉では、径120cm±×90cm±の範囲に層厚11cm±の現地性焼土が形成されている。ここにみられる新期の炉は、古期の炉の使用面上に層厚2cm±の火山灰を敷設して作られている。両者の使用面は床面よりも僅かに低い位置にあって、いずれもきわめて堅くしまる面となっている。南壁沿いの中央部付近に位置する4号炉では、径120cm±×108cm±の範囲に層厚14cm±の現地性焼土の形成がみられる。この部位の新期の炉は、古期の炉に層厚4cm±の火山灰を敷設した上で作られている。両者の使用面は床面よりも僅かに低い位置に設けられていて、ともにきわめて堅くしまるものとなっている。

北西部に位置する5号炉では、径115cm±×105cm±の範囲に層厚10cm±の現地性焼土が形成されている。新期の炉は、古期の炉の上に層厚6cm±の火山灰を敷設して設けられている。両者の使用面はいずれも床面よりも僅かに低い位置にあって、全体的にきわめて堅くしまる面となっている。南西部に位置する6号炉では、径100cm±×95cm±の範囲に層厚9cm±の現地性焼土が形成されている。この新期の炉は、古期の炉の上に層厚3cm±の火山灰を敷設した上で作られている。古期の炉では床面よりも僅かに低い位置に、新期の炉では床面とほぼ同じレベルにそれぞれその使用面が設けられている。両者ともに、面はいずれもきわめて堅くしまるものとなっている。

7号炉は床面とほぼ同じレベルにその使用面が設けられるもので、ここでは径92cm±×70cm±の範囲に層厚7cm±の現地性焼土の形成がみられる。面は比較的軟弱なものとなっている。8号炉は床面よりも僅かに高い位置にその使用面が設けられているもので、この部位では径75cm±×55cm±の範囲に層厚6cm±の現地性焼土が形成されている。使用面は比較的軟弱な面となっている。9号炉の位置する部分では径50cm±×43cm±の範囲に層厚5cm±の現地性焼土が形成されている。使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、比較的軟弱なものとなっている。

以上、この住居址から検出された地床炉群について述べてきた。平面および断面観察の結果、「定位置」を構成する地床炉群は、すべて上下に重複する新旧2基の炉から成るものであることが明らかにされた。これらのうち、新期の炉の間では、古期の炉に比較してそれほど多くの

火熱による赤色変化を受けていないという共通性がみられる。また、「非定位置」を構成するとした地床炉群は、すべての使用面が比較的軟弱なものとなっている。このように使用面が一般に軟弱であるという事実からすると、今まで述べてきたことと観方を変えれば、あるいはこれらは古期の住居址に伴う地床炉が新时期住居址の側から削剝を受けた結果を示していると考えることができるのかもしれない。

G III—7b 住居址 (図版15ab・114def・115abcdef; 写真図版18b・21c・22・23・24a・146f・147abcd・148abcd・257f・258abc)

この住居址の柱穴は、P₉ (径28cm±・深さ51cm±)・P₁₀ (径35cm±・深さ12cm±)・P₁₁ (径20cm±・深さ11cm±)・P₁₂ (径45cm±・深さ19cm±)・P₁₃ (径30cm±・深さ12cm±)・P₁₄ (径28cm±・深さ32cm±) など、6個のピットで構成されているものと考えられる。これらの中では、P₉—P₁₄・P₁₀—P₁₃・P₁₁—P₁₂の各群内に対になる配置関係がみられる。また、P₁₀はP₃₅・P₃₆によって切られている。

以上、G III—7住居址群内の各住居址について個別に記してきた。この住居址群内には上に述べた柱穴群のほかに、さらに、P₁₅ (径14cm±・深さ23cm±)・P₁₆ (径25cm±・深さ22cm±)・P₁₇ (径23cm±・深さ10cm±)・P₁₈ (径19cm±・深さ12cm±)・P₁₉ (径20cm±・深さ11cm±)・P₂₀ (径30cm±・深さ17cm±)・P₂₁ (径20cm±・深さ12cm±)・P₂₂ (径13cm±・深さ13cm±)・P₂₃ (径13cm±・深さ14cm±)・P₂₄ (径29cm±・深さ32cm±)・P₂₅ (径47cm±・深さ21cm±)・P₂₆ (径15cm±・深さ33cm±)・P₂₇ (径16cm±・深さ8cm±)・P₂₈ (径17cm±・深さ17cm±)・P₂₉ (径18cm±・深さ34cm±)・P₃₀ (径21cm±・深さ20cm±)・P₃₁ (径15cm±・深さ17cm±)・P₃₂ (径20cm±・深さ11cm±)・P₃₃ (径12cm±・深さ18cm±)・P₃₄ (径10cm±・深さ21cm±)・P₃₅ (径32cm±・深さ73cm±)・P₃₆ (径30cm±・深さ33cm±)・P₃₇ (径23cm±・深さ24cm±)・P₃₈ (径23cm±・深さ19cm±)・P₃₉ (径13cm±・深さ12cm±)・P₄₀ (径22cm±・深さ16cm±)・P₄₁ (径16cm±・深さ11cm±)・P₄₂ (径46cm±・深さ25cm±)・P₄₃ (径45cm±・深さ24cm±)・P₄₄ (径24cm±・深さ60cm±)・P₄₅ (径16cm±・深さ22cm±)・P₄₆ (径14cm±・深さ15cm±)・P₄₇ (径16cm±・深さ23cm±)・P₄₈ (径18cm±・深さ25cm±)・P₄₉ (径25cm±・深さ32cm±)・P₅₀ (径18cm±・深さ24cm±)などのピット群が検出されている。これらの具体的な位置づけや性格については明らかではない。

G III—8 住居址 (図版15cd; 写真図版24b・25a・258d)

埋土の最下底部から出土した一括土器からみて、この住居址は縄文時代前期前半期に位置づけられるものであろう。斜面下方に位置している南壁が消失していることや、精査中の掘りすぎなどから、この住居址の規模や形態は明らかではない。残存している壁の輪郭線から推定すると、3.0m×2.3m前後の規模をもち、凸辺の長方形の形態を示していたものかもしれない。

炉は検出されていない。

埋土は、褐色土・暗褐色土・黒褐色土によって構成されている。このうち、中位から下位にかけての層準を占める暗褐色土層と褐色土層は一括の完形土器群のほかに、土器破片・石器類・礫・焼土・炭化物を多く含んでいて、全体的に複合廃棄物的な層相を示している。

Field Card の記載を欠くために、床面の状況については不明なものとなっている。柱穴状のピットとしては P₁ (径18cm±・深さ28cm±) が検出されているにすぎないが、正確にはこの住居址との共伴関係は不明である。そのほかに P₂ (径50cm±・深さ86cm±) が検出されているが、著しく傾斜した在り方からみて、これは木根などの痕跡を示しているものではないかと考えられる。壁高は、北壁39cm±・東壁31cm±を計る。

重複関係の面では、この住居址はG III-66ピットにより切られているものと考えられる。

(高橋 文夫)

GIV区

GIV-3 住居址群 (図版16a・17a・19abc・116abcde・117abcdef・118abcd; 写真図版24c・26・27・28・29・30a・148ef・149abc・150abc・151abc・152abcd・153ab・259abcd)

この住居址群は『遺構編1』内で、「GIV-3 住居址」として登録されているものに相当する。今年度に行なわれた調査によって、この住居址群が検出された範囲内には、最低6棟の住居址が存在していることが推定された。今、これらの住居址をそれぞれ、GIV-3a 住居址・GIV-3b 住居址・GIV-3c 住居址・GIV-3d 住居址・GIV-3e 住居址・GIV-3f 住居址と呼称することとする。一部を除けば、柱穴配置の基本的類似性からみて、これらはおそらく同時期に位置づけられるもので、また、何らかの形で互いに関連があるものであろう。埋設土器や床面上から検出された廃棄遺物群などから推定すると、これらは時期的に縄文時代前期前半期に位置づけられるものと考えられる。

この住居址群は、GIV-3a 住居址やGIV-3f 住居址を含む北西から南東にかけて長軸をもつ住居址群と、北東から南西方向に長軸をもち、内部にGIV-3b 住居址・GIV-3c 住居址・GIV-3d 住居址・GIV-3e 住居址などを含む住居址群との、それぞれの内部に複数の住居址を含む2群の重複から成っている。説明の便宜上、今ここで、前者をA住居址群、後者をB住居址群と呼称することにする。A住居址群とB住居址群との間では、床面や埋土および廃棄遺物群の分布が連続的で、両者間には削剝や貼り床を敷設した痕跡などは認められていない。これらのことから、両住居址群を構成するもののうち、少なくとも最新期に位置づけられる2棟の住居址間には床面の再利用形態が存在していたものであろう。このほか、両者間の柱穴配置や

壁の輪郭線との関係などから推定して、A住居址群とB住居址群には西壁の全部またはその一部を共有する関係があったのではないかとみられる。また、これらの住居址群内から検出されている地床炉の在り方からみて、炉のいくつかにも再利用形態が存在しているものと推定される。

柱穴配置と壁の輪郭線との関係からみると、両住居址群内で最新期の住居址を構成するものは、A住居址群内ではGIV-3a住居址、B住居址群内ではGIV-3b住居址ではないかと考えられる。直接的な切り合いがみられないために両者の先後関係についてはよくわからないが、この2棟がA・B住居址群内で最終的な重複を示していたものであろう。重複している大半の部分の壁が消失しているために両住居址群の正確な規模や形態は不明であるが、残存している壁の輪郭線から推定すると、A住居址群は $10.8\text{m}\pm\times 6.8\text{m}\pm$ の規模をもち、平面形は北半部が凸辺の長方形状、南半部が円形状の形態を示していたものであろう。B住居址群は、 $13.4\text{m}\pm\times 8.4\text{m}\pm$ の規模をもち、平面形は西半部が凸辺の長方形状、東半部が円形状に近い形態を示していたものではないかと考えられる。両住居址群内からは、それぞれが地床炉を構成するとみられる現地性焼土が、平面的には14個処にわたって検出されている。

A・B両住居址群間の埋土は連続的で、両者間に削剝などの関係は認められていない。この2つの住居址群の埋土はいくつかの層に細分されるが、基本的には上部～中部にかけては黒色～黒褐色土層で、下部は暗褐色～褐色土層群で構成されている。これらの埋土の中で、中央部の層準を占め、褐色～暗褐色土のブロック（d層）を多く包含する黒色～黒褐色土層（c層）は、長者屋敷遺跡における基本層序のIc層に対比されるものである。埋土の下部の大半を構成する暗褐色土層（e層）は、完形土器群をはじめとして、土器片・石器類・礫・焼土・炭化物などを著しく多く含んでいて、全体的に複合的な廃棄ユニットから成る人為堆積相を示している。この層中の完形土器や土器大形破片などを主体にした遺物群の観察によれば、これらは層の傾斜に沿って、壁際に存在するものは斜位の状態で高位置に、床面中央部付近に存在するのは横位の状態で低位置にそれぞれ分布する傾向が認められている。殊に床面中央部付近に存在している遺物群は、ほとんど床面上とも言えるレベルに集中して分布する在り方を示している。

床面について言えば、前述したように、A・B両住居址群間のそれは連続的で、重複部分には削剝や貼り床を敷設した痕跡などは認められていない。これらの住居址群の床面には僅かながら凹凸がみられるものの、全体的にはほぼ平坦で、比較的堅くしまる面となっている。床面上に水酸化鉄の盤層が露出している部分では、きわめて堅くしまるものとなっている。

以上、A・B両住居址群の共通する部分について全体的に記述してきた。次に、各住居址群内に含まれる個々の住居址について個別に記載することにする。また、地床炉については後

に一括して述べる。住居址間の重複関係についても、最後にとりまとめて述べることにする。

GIV-3a 住居址 (図版16a・17a・19abc・116abcde・117abcdef・118abcd ; 写真図版24c・26・27・28・29・30a・148ef・149abc・150abc・151abc・152abcd・153ab・259abcd)

壁の輪郭線にみられる住居形態との安定性のある関係からみて、この柱穴群を伴う当住居址は、A住居址群内でも最新期のものに位置づけられるのではないかと推定される。この住居址の柱穴は、P₁ (径28cm±・深さ40cm±)・P₂ (径32cm±・深さ41cm±)・P₃ (径28cm±・深さ27cm±)・P₄ (径23cm±・深さ44cm±)・P₅ (径38cm±・深さ45cm±)・P₆ (径28cm±・深さ27cm±)・P₇ (径24cm±・深さ76cm±)・P₈ (径68cm±・深さ34cm±)などのピット群で構成されているものと考えられる。あるいはP₉ (径47cm±・深さ20cm±)も柱穴の構成員と考えられるものかもしれない。これらのピット群は、P₅-P₁・P₁-P₆・P₆-P₂・P₂-P₇・P₇-P₃・P₃-P₈・P₈-P₄ (・P₄-P₉)とジグザグ状に配置されている。重複関係の面では、P₅の部位でB住居址群に伴うとみられる壁溝状の短い溝を切っている。また、P₂は、GIV-3d住居址の同位置の柱穴と全形的に重複しあっているのではないかと考えられる。

この住居址の壁高は、北西部で105cm±・南西部中央で62cm±を計る。北東から南東にかけての東壁部分は、B住居址群とGIV-4住居址との重複によって、すべてが消失している。

GIV-3b 住居址 (図版16a・17a・19abc・116abcde・117abcdef・118abcd ; 写真図版24c・26・27・28・29・30a・148ef・149abc・150abc・151abc・152abcd・153ab・259abcd)

住居形態との関係からみて、次の柱穴群を伴う当住居址は、B住居址群内でも最新期に位置するものではないかと推定される。この住居址の柱穴は、P₁₀ (径22cm±・深さ62cm±)またはP₁₁ (径60cm±・深さ57cm±)・P₁₂ (径41cm±・深さ86cm±)・P₁₃ (径47cm±・深さ86cm±)・P₁₄ (径44cm±・深さ54cm±)・P₁₅ (径22cm±・深さ40cm±)・P₁₆ (径33cm±・深さ36cm±)・P₁₇ (径24cm±・深さ18cm±)・P₁₈ (径30cm±・深さ53cm±)などのピット群で構成されているものとみられる。これらのピット群には、やや不整ながら、P₁₀またはP₁₁-P₁₅・P₁₂-P₁₆・P₁₃-P₁₇・P₁₄-P₁₈の各群内に対になる配置関係がみられる。P₁₂は地床炉(6号炉)を切る在り方を示している。

この住居址の壁高は、北壁85cm±・南壁14cm±・東壁41cm±を計る。北西部および南部では、A住居址群との重複のために、壁は消失したものとなっている。A・B両住居址群内からは短かい壁溝または壁溝状の溝がいくつか検出されているが、これらはその配置からみてB住居址群に伴うものではないかと考えられる。その中でも、どの住居址に所属するものかよくわからないので、壁溝についてはここで一括して述べることにする。東壁沿いの壁溝は、長さ190cm±・幅5cm±~17cm±・深さ15cm±~22cm±を計る。北壁沿いのものは、長さ58cm±~92cm±・幅20cm±~23cm±・深さ5cm±~17cm±を計る。西壁沿いに設けられている壁溝は外側のものが

長さ160cm±・幅12cm±～20cm±・深さ10cm±、内側のものが長さ180cm±・幅13cm±・深さ10cm±を計る。

GIV-3c 住居址 (図版16a・17a・19abc・116abcde・117abcdef・118abcd ; 写真図版24c・26・27・28・29・30a・148ef・149abc・150abc・151abc・152abcd・153ab・259abcd)

柱穴配置の在り方から判断して、この住居址もB住居址群内に含まれるものと考えられる。柱穴は、P₁₉ (径56cm±・深さ42cm±) または P₂₀ (径32cm±・深さ54cm±)・P₂₁ (径44cm±・深さ48cm±)・P₂₂ (径58cm±・深さ30cm±)・P₂₃ (径38cm±・深さ54cm±)・P₂₄ (径82cm±・深さ56cm±)・P₂₅ (径59cm±・深さ10cm±)・P₂₆ (径68cm±・深さ26cm±) などのピット群で構成されているものであろう。これらのピット群は、P₁₉または P₂₀—P₂₄・P₂₄・P₂₁・P₂₁—P₂₅・P₂₅—P₂₂・P₂₂—P₂₆・P₂₆—P₂₃とジグザグ状に配置されている。

GIV-3d 住居址 (図版16a・17a・19abc・116abcde・117abcdef・118abcd ; 写真図版24c・26・27・28・29・30a・148ef・149abc・150abc・151abc・152abcd・153ab・259abcd)

柱穴配置の在り方から判断して、この住居址もB住居址群内に含まれているものと考えられる。柱穴は、P₂ (前掲)・P₂₇ (径26cm±・深さ33cm±)・P₂₈ (径32cm±・深さ25cm±)・P₂₉ (径39cm±・深さ22cm±)・P₃₀ (径48cm±・深さ43cm±)・P₃₁ (径34cm±・深さ64cm±)・P₃₂ (径28cm±・深さ35cm±)などのピット群で構成されているものとみられる。これらの柱穴は、P₂—P₃₀・P₃₀—P₂₇・P₂₇—P₃₁・P₃₁—P₂₈・P₂₈—P₃₂・P₃₂—P₂₉とジグザグ状に配置されている。P₂は、当住居址とGIV-3a 住居址間で共有される関係にあるものと考えられる。また P₃₀は地床炉 (11号炉) を僅かに切る在り方を示している。

GIV-3e 住居址 (図版16a・17a・19abc・116abcde・117abcdef・118abcd ; 写真図版24c・26・27・28・29・30a・148ef・149abc・150abc・151abc・152abcd・153ab・259abcd)

柱穴配置の在り方から判断して、この住居址もB住居址群内に含まれるものであろう。柱穴は、P₃₃ (径17cm±・深さ26cm±)・P₃₄ (径28cm±・深さ30cm±)・P₃₅ (径44cm±・深さ31cm±)・P₃₆ (径26cm±・深さ24cm±)・P₃₇ (径20cm±・深さ27cm±)・P₃₈ (径30cm±・深さ30cm±) または P₃₉ (径45cm±・深さ26cm±)・P₄₀ (径43cm±・深さ20cm±) などのピット群で構成されているものと考えられる。これらの柱穴群は、P₃₃—P₃₇・P₃₇—P₃₄・P₃₄—P₃₈または P₃₉・P₃₈または P₃₉—P₃₅・P₃₅—P₄₀・P₄₀—P₃₆と、やや不整な部分もみられるが、基本的にはジグザグ状に配置されている。

GIV-3f 住居址 (図版16a・17a・19abc・116abcde・117abcdef・118abcd ; 写真図版24c・26・27・28・29・30a・148ef・149abc・150abc・151abc・152abcd・153ab・259abcd)

柱穴配置の在り方からみて、この住居址はA住居址群内に位置づけられるものであろう。柱穴は、P₁₀ (前掲) または P₁₁ (前掲)・P₄₁ (径52cm±・深さ70cm±)・P₄₂ (径47cm±・深さ83cm±)・

P₄₃ (径33cm±・深さ75cm±) などのピット群で構成されているものではないかと考えられる。これらの柱穴群は長方形の配置を示している。

以上、各住居址の、主に柱穴配置について記載してきた。A・B両住居址群内からは上に述べたもののほかに、さらに P₄₄ (径17cm±・深さ13cm±)・P₄₅ (径27cm±・深さ34cm±)・P₄₆ (径15cm±・深さ30cm±)・P₄₇ (径31cm±・深さ26cm±)・P₄₈ (径30cm±・深さ24cm±)・P₄₉ (径20cm±・深さ67cm±)・P₅₀ (径19cm±・深さ30cm±)・P₅₁ (径37cm±・深さ59cm±)・P₅₂ (径16cm±・深さ19cm±)・P₅₃ (径66cm±・深さ13cm±)・P₅₄ (径15cm±・深さ41cm±)・P₅₅ (径20cm±・深さ52cm±)・P₅₆ (径32cm±・深さ36cm±)・P₅₇ (径12cm±・深さ18cm±)・P₅₈ (径16cm±・深さ6cm±)・P₅₉ (径29cm±・深さ17cm±)・P₆₀ (径31cm±・深さ47cm±)・P₆₁ (径79cm±・深さ27cm±)・P₆₂ (径23cm±・深さ39cm±)・P₆₃ (径16cm±・深さ43cm±)・P₆₄ (径22cm±・深さ55cm±)・P₆₅ (径22cm±・深さ17cm±)・P₆₆ (径27cm±・深さ16cm±)・P₆₇ (径18cm±・深さ25cm±)・P₆₈ (径20cm±・深さ38cm±)・P₆₉ (径25cm±・深さ38cm±)・P₇₀ (径53cm±・深さ17cm±)・P₇₁ (径54cm±・深さ38cm±)・P₇₂ (径32cm±・深さ26cm±)・P₇₃ (径27cm±・深さ32cm±)・P₇₄ (径26cm±・深さ22cm±)・P₇₅ (径25cm±・深さ48cm±)・P₇₆ (径16cm±・深さ11cm±)・P₇₇ (径24cm±・深さ35cm±)・P₇₈ (径52cm±・深さ25cm±)・P₇₉ (径35cm±・深さ26cm±)・P₈₀ (径38cm±・深さ23cm±)・P₈₁ (径33cm±・深さ13cm±)・P₈₂ (径35cm±・深さ8cm±)・P₈₃ (径20cm±・深さ19cm±)・P₈₄ (径103cm±・深さ25cm±)・P₈₅ (径35cm±・深さ15cm±)・P₈₆ (径22cm±・深さ13cm±)・P₉₀ (径14cm±・深さ12cm±) など、多数のピット群が検出されている。これらのピット群の大半はA住居址群内に位置している。これらのピットの配置上からはよくわからないが、この範囲内には、このピット群内のいずれかを柱穴として所有する住居址がまだ存在しているものかもしれない。

A・B両住居址群内から検出されている、地床炉を構成するとみられる14個所の現地性焼土群のうち、8号炉を除く13基のものがA住居址群内に位置している。これらの現地性焼土群には単独で検出されているものもあるが、多くのものは複数の地床炉が水平方向や垂直方向で重複して一連の分布を構成している。このように、複数の地床炉群が水平的にも垂直的にも重複しあう在り方は、ここにみられる住居址群の重複関係とよく対応しているのであろう。

1号炉はA住居址群の北西隅にあって、径107cm±×100cm±の範囲に層厚13cm±の現地性焼土が形成されている。この炉の使用面は床面よりも僅かに低い位置に設けられていて、きわめて堅くしめる面となっている。2号炉の位置する部位では、径80cm±×66cm±の範囲に層厚13cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしめる面となっている。3号炉は最近3基の地床炉が重複しているもので、この範囲には径102cm±×78cm±の広がりを示す一連の現地性焼土が形成されている。焼土層の

層厚は、3a号炉7cm±・3b号炉11cm±・3c号炉25cm±を計る。3a号炉と3b号炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられているが、3c号炉のみは床面よりも低い位置に設けられている。3c号炉の凹部には焼土や炭化物を含む汚れ火山灰が堆積しているが、観察が不十分であるために、これが貼り床などとして人為的に敷設されているものか、住居址埋土の最下部層に連続するものであるかについてはよくわからない。3号炉の個々の使用面自体はきわめて堅くしまるものとなっている。新旧関係は不明であるが、3c号炉は一部で4号炉と重複を示している。

4号炉の部位では、径31cm±×29cm±の範囲に層厚7cm±の現地性焼土が形成されている。この炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、比較的堅くしまるものとなっている。5号炉は上下に重複する新旧2基の地床炉で構成されている。旧期の炉を構成する5a号炉の部位では、径91cm±×88cm±の範囲に層厚9cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は全体的に床面よりも高い位置に設けられていて、きわめて堅くしまるものとなっている。この炉の中央部は凹んだ面となっている。新期の炉を構成する5b号炉は、5a号炉の凹部に層厚6cm±の火山灰層を敷設した上で設けられている。この部分も全体的に強い赤色変化を受けていて、その使用面はきわめて堅くしまるものとなっている。6号炉の位置する部位の現地性焼土は、径150cm±×110cm±・層厚13cm±の規模のものである。この炉の使用面は床面よりも僅かに低い位置に設けられていて、きわめて堅くしまるものとなっている。

7号炉の位置する範囲にみられる現地性焼土は、水平および垂直方向に重複する4基の地床炉から構成されている。ここでは、径129cm±×90cm±の範囲に現地性焼土が形成されている。北側に位置して古期の炉を構成する7a号炉は、使用面が床面よりもやや低いレベルに設けられているもので、層厚5cm±の現地性焼土の形成がみられる。7b号炉は、7a号炉の凹部に層厚3cm±の火山灰を敷設した上で設けられている。新期の炉であるこの7b号炉の使用面は、床面と同じレベルに位置している。南側に位置して古期の炉を構成する7c号炉は、7a号炉と同様にその使用面が床面よりもやや低いレベルに設けられていて、下位には層厚9cm±の現地性焼土の形成がみられる。この7c号炉の上位にあって新期の炉を構成する7d号炉は、凹部に層厚3cm±の火山灰を敷設した上で設けられている。7b号炉の敷設火山灰は、7b号炉のものと同様にあまり多くの赤色変化は受けていない。この7号炉を構成する個々の地床炉の使用面は、それぞれがきわめて堅くしまるものとなっている。

8号炉の位置する部位では、径68cm±×57cm±の範囲に層厚7cm±の現地性焼土が形成されている。この炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、比較的堅くしまるものとなっている。9号炉では、径25cm±×20cm±の範囲に層厚3cm±の現地性焼土が形成されている。この炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、比較的軟い面となっている。10号炉では、径65cm±×64cm±の範囲に層厚15cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉の

使用面は床面とほぼ同じレベルにあって、きわめて堅くしめる面となっている。

11号炉の位置する部位の一連の現地性焼土は、最低6基の地床炉の重複から成っている。ここにみられる現地性焼土は、径260cm±×87cm±の範囲に形成されている。それぞれの地床炉の焼土の層厚は、11a号炉7cm±・11b号炉6cm±・11c号炉17cm±・11d号炉9cm±・11e号炉15cm±・11f号炉6cm±を計る。これらの地床炉群の中で、11a号炉・11b号炉・11d号炉・11f号炉などの使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられている。これに対して、11c号炉・11e号炉などの使用面は、いずれも床面よりも僅かに低い位置に設けられている。使用面の性状について言えば、11c号炉・11e号炉のそれはきわめて堅くしめるものとなっているが、そのほかの部分ではいくらか軟弱な面を呈している。

12号炉の位置する部位の現地性焼土は、上下に重複する2基の地床炉で構成されている。この現地性焼土は、径114cm±×91cm±の範囲に形成されている。古期の炉を構成する12a号炉の焼土の層厚（残存部）は9cm±、新期の炉を構成する12b号炉のそれは12cm±を計る。断面観察の結果、12b号炉は12a号炉を切って設けられているものであることが明らかにされた。これらの炉の使用面はいずれも床面とほぼ同じレベルに設けられていて、全体的にきわめて堅くしめる面となっている。13号炉は12号炉と14号炉の間にあって、この部位では、径37cm±の範囲に層厚5cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、比較的軟弱な面となっている。

14号炉の位置する部位の現地性焼土は、水平および垂直方向に重複する、少なくとも4基の地床炉から成っている。ここでは、一連の現地性焼土は径17cm±×118cm±の範囲に形成されている。それぞれの焼土の層厚は、14a号炉5cm±・14b号炉9cm±・14c号炉12cm±・14d号炉4cm±を計る。床面よりも低い位置に使用面が設けられている14b号炉以外のものは、すべてその使用面が床面とほぼ同じレベルに設けられている。14d号炉は、14b号炉の凹部に火山灰を敷設した上で設けられている。これらの炉の使用面は、全体的にきわめて堅くしめるものとなっている。

以上、今までA・B両住居址群内から検出された14群29基の地床炉について個別的に記載してきた。これらの中で、規模からみて「定位置」の地床炉を構成するものは、1号炉・2号炉・3号炉・5号炉・6号炉・7号炉・8号炉・10号炉・11c号炉・11e号炉・12号炉・14b号炉・14c号炉・14d号炉などであろう。その他のものは「非定位置」の地床炉群を構成しているものと考えられる。これら「定位置」および「非定位置」地床炉群と、各住居址群内に含まれている個々の住居址との正確な共存関係についてはよくわからない。ただ、各住居址群の平面的な形態や個別的な柱穴配置などを参考にして推定すると、少なくとも「定位置」地床炉の中では、1号炉・6号炉・10号炉・12号炉などはA住居址群に、3号炉・7号炉・8号炉・11e号炉・14（14b・

14c・14d) 号炉などはB住居址群にそれぞれ伴うものではないかと考えられる。

上記の地床炉群以外の施設としては、14号炉近くに位置してその北西部から検出された単体の埋設土器がある。この埋設土器はほぼ完形の深鉢形土器を利用したもので、正立の状態で床面下位の火山灰層中に埋めこまれていた。上部は僅かに床面上に露出している。掘り方についてはよくわからない。この埋設土器と各住居址との共伴関係の詳細についても不明である。

また、住居址に付属する施設を構成するものかどうかについてはよくわからないが、B住居址群の北東部には、東側に向けて弧状に張り出している溝状の遺構がみられる。この溝の壁と底面は、それぞれB住居址群の壁や床面と連続的である。この規模は、全長450cm±・幅75cm±・深さ20cm±を計る。底面自体はほぼ平坦で、比較的軟弱な面となっている。この部位には、P₈₇ (径29cm±・深さ8cm±)・P₈₈ (径23cm±・深さ9cm±)・P₈₉ (径23cm±・深さ13cm±)などの小ピット群が検出されている。

重複関係の面では、A住居址群はGIV-4住居址に切られているが、前述したように、B住居址群との新旧関係については不明である。B住居址群はA住居址群と重複を示しているほか、北壁沿いでは層位的にGIV-2住居址に切られている。A・B両住居址群内の各住居址の変遷については、GIV-3a住居址・GIV-3b住居址がそれぞれの群の最新期のものを構成すると推定されること以外に、正確なことは不明である。ただ、単純に、各住居址の柱穴配置・規模・主軸方向などを参考にして推定すると、古期のものから順に、A住居址群内ではGIV-3f住居址→GIV-3a住居址、B住居址群内ではGIV-3e住居址→GIV-3c住居址→GIV-3d住居址→GIV-3b住居址という変遷が考えられるのかもしれない。A・B両住居址群の重複関係内では、床面・壁・地床炉・柱穴などの一部にそれぞれ再利用形態がみられる。

GIV-4住居址 (図版18a・19a・119abcd ; 写真図版31・153d・154ab・259e)

この住居址もGIV-3住居址群と同様に、1978・1979の2ヵ年にわたって調査されたものである。床面のほとんど直上とも言える層準に分布していた廃棄遺物群からみて、この住居址は縄文時代前期前半期に位置づけられるものであろう。南半部の壁を欠くために規模や形態についてはよくわからないが、残存している壁の輪郭線から推定すると、この住居址は径11.0m±×7.0m±の規模をもち、楕円形状の形態を示していたものではないかと考えられる。住居址の長軸線を中心とする範囲には、地床炉を構成するとみられる現地性焼土が5個所に形成されている。

上部が削割されているために埋土の残存状態は不良であるが、下底部付近での観察によれば、埋土は主に、完形土器群・土器大形破片群・石器類・礫・焼土・炭化物を著しく多く包含する褐色～暗褐色土層により構成されている。完形土器群や大形破片は、大半のものが横位の状態で出土している。この埋土は全体に、複数の廃棄ユニットから構成される複合廃棄物的な人為

堆積相を示している。

床面は、南半部が浸食によって削剝を受けていることや風倒木などに破壊されていることなどから、残存が不良な状態で検出されている。北半部の残存部での観察によれば、床面はほぼ平坦で、比較的軟い面となっている。柱穴は、P₁（径24cm±・深さ52cm±）・P₂（径24cm±・深さ75cm±）・P₃（径23cm±・深さ34cm±）・P₄（径27cm±・深さ35cm±）・P₅（径30cm±・深さ17cm±）・P₆（径64cm±・深さ31cm±）・P₇（径57cm±・深さ41cm±）・P₈（径30cm±・深さ21cm±）・P₉（径33cm±・深さ43cm±）などのピット群で構成されているものではないかと考えられる。これらの柱穴群は、P₁—P₉・P₉—P₂・P₂—P₈・P₈—P₃・P₃—P₇・P₇—P₄・P₄—P₆・P₆—P₅とジグザグ状に配置されている。P₁₀（径28cm±・深さ15cm±）・P₁₁（径48cm±・深さ42cm±）などのピット群も柱穴の構成員と考えられるのかもしれない。残存部での壁高は、北壁11cm±～15cm±・西壁14cm±（GIV—3住居址群床面との比高）を計る。壁溝は設けられていない。

この住居址内からは上記の柱穴群のほかに、P₁₂（径34cm±・深さ29cm±）・P₁₃（径26cm±・深さ14cm±）・P₁₄（径54cm±・深さ20cm±）・P₁₅（径19cm±・深さ13cm±）・P₁₆（径20cm±・深さ37cm±）・P₁₇（径14cm±・深さ57cm±）・P₁₈（径22cm±・深さ7cm±）・P₁₉（径46cm±・深さ27cm±）・P₂₀（径24cm±・深さ9cm±）・P₂₁（径40cm±・深さ11cm±）・P₂₂（径36cm±・深さ7cm±）・P₂₃（径44cm±・深さ16cm±）・P₂₄（径24cm±・深さ20cm±）・P₂₅（径31cm±・深さ16cm±）・P₂₆（径40cm±・深さ36cm±）・P₂₇（径34cm±・深さ33cm±）・P₂₈（径35cm±・深さ15cm±）・P₂₉（径42cm±・深さ63cm±）・P₃₀（径54cm±・深さ70cm±）・P₃₁（径56cm±・深さ69cm±）・P₃₂（径113cm±・深さ41cm±）・P₃₃（径59cm±・深さ21cm±）・P₃₄（径21cm±・深さ35cm±）・P₃₅（径104cm±・深さ12cm±）・P₃₆（径15cm±・深さ16cm±）・P₃₇（径24cm±・深さ15cm±）・P₃₈（径32cm±・深さ17cm±）・P₃₉（径46cm±・深さ15cm±）・P₄₀（径56cm±・深さ23cm±）・P₄₁（径46cm±・深さ46cm±）・P₄₂（径24cm±・深さ10cm±）・P₄₃（径41cm±・深さ56cm±）・P₄₄（径33cm±・深さ21cm±）・P₄₅（径26cm±・深さ20cm±）などのピット群が検出されている。これらの中には別の住居址を構成する柱穴群も含まれているかもしれないが、いずれにしろ、これらの具体的な位置づけや性格については不明である。

地床炉を構成するとみられる現地性焼土群は、住居址中軸線に沿った部位に形成されている。1号炉の位置する地点では、径95cm±×60cm±の範囲に現地性焼土の形成がみられる。この炉は上下に重複する新旧2基の地床炉で構成されている。旧期の炉である1a号炉は床面よりも低いレベルにその使用面をもつもので、下位には層厚10cm±の焼土層が形成されている。新期の炉を構成する1b号炉は、1a号炉の凹部に層厚5cm±～10cm±の火山灰を敷設した上で設けられている。この炉の使用面は床面よりも僅かに高い位置にあって、下位の敷設火山灰は全体に軽微な赤色変化を受けている。これらの使用面はいずれもきわめて堅くしまるものとなってい

る。2号炉の位置する部位では、径67cm±×30cm±の範囲に層厚2cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は床面とほぼ同じレベルにあって、比較的軟弱な面となっている。この炉の下部には、内部に汚れ火山灰が充填された掘り方がある。3号炉では、径40cm±×24cm±の範囲に層厚3cm±の現地性焼土が形成されている。この炉の使用面は床面とほぼ同じレベルにあって、軟弱な面となっている。4号炉はP₃₂に切られているために、正確な規模については不明である。径58cm±×46cm±・層厚8cm±の現地性焼土が残存している。炉の使用面は床面とほぼ同じ面に設けられていて、比較的堅くしまるものとなっている。風倒木によって僅かに切られている部分に位置している5号炉の部位では、径32cm±×23cm±の範囲に現地性焼土が形成されている。断面観察が行なわれていないために、この炉の詳細については不明なものとなっている。

重複関係の面では、この住居址はGIV—3住居址群内のA住居址群を切っている。

(高橋 文夫)

GVI区

GVI—1住居址 (図版20a・119e ; 写真図版25b・153c)

この住居址は滑落による凹地へ北に下る緩斜面に近い丘陵頂面に位置する。床面や炉からの出土遺物がないところから時期について明らかではないが、周辺の遺構、柱穴配置、炉の形状などから推定すると、この住居址は縄文時代前期末葉期から縄文時代中期末葉期の間位置すると考えられる。調査上の手違いから北東壁付近の床面を掘りすぎ、床面の一部を欠く状況で検出された。床面中央部に地床炉が1基設けられている。

形状は、東西に長軸をもつ不整な楕円形を呈する。規模は4.1m±×2.9m±を計る。埋土は単層で構成されるため実測を省略したが、Field Cardによれば、しまりのない黒褐色土で構成され、全体に炭化物を僅かに含む、と記されている。床面は残存部において、平坦で、軟質な状況を呈する。

柱穴状ピットは9個検出されている。柱穴配置を検討してみると、炉を中心にP₁(径20cm±・深さ15cm±)・P₂(径22cm±・深さ28cm±)・P₃(径30cm±・深さ21cm±)・P₄(径45cm±・深さ45cm±)・P₅(径18cm±・深さ32cm±)で構成される五角形の配置が考えられ、P₃を頂点として北に開口する状況を呈し、P₁—P₅・P₂—P₄が対応する関係にあると思われる。その他のP₆(径30cm±・深さ13cm±)・P₇(径15cm±・深さ69cm±)・P₈(径40cm±・深さ39cm±)・P₉(径25cm±・深さ14cm±)などのピット群の性格については不明である。

壁は全体に急な立ちあがりを示す。壁高は残存部で、北壁16cm±・南壁20cm±・東壁14cm±・

西壁26cm土を計る。壁溝は認められない。

地床炉は、下部に摺鉢状の掘り方を伴い、炉内に炭化物を僅かに含む現地性焼土が堆積する在り方を示す。この地床炉の規模は50cm土×40cm土を計り、炉内の焼土は中央部で層厚12cm土を計る。また、焼土の堆積状況からみて、炉の使用面は床面とほぼ同じ面と考えられる。

遺物は埋土上部から土器の細片が得られただけで、床面からの出土は認められなかった。

南壁に沿った部分からGVI-58フラスコ形ピットが検出されているが、当住居址と新旧・共伴いずれの関係にあるのか不明である。

GVI-2 住居址（図版20b・119f；写真図版32a・154cd）

この住居址は、時期決定資料となる床面からの出土遺物を欠き、縄文時代のどの時期に位置するものか明らかではないが、埋土の層相や炉の形態および周辺に位置する住居址群などを参考にすると、縄文時代中期中葉期から縄文時代晩期までの間に位置づけられると推定される。埋土といわゆる“地山”を構成する層の層相が近似しており、壁および床面などの一次施設の大半は明確に検出できなかった。したがって、検出状況は不良で、この住居址の形状・規模は明らかではない。炉は石囲い炉が1基設けられている。

埋土は、しまりのない暗褐色土の単層で構成されている。Field Cardによる記載から推定して、この層は基本層序Ic層に相当すると思われる。

床面は石囲い炉を中心とする付近しか検出できず、平面的な広がりを確認できなかった。確認された部分は、ほぼ平坦で軟質な状況を呈している。

床面と判断された範囲内から検出された柱穴状ピットには、P₁（径25cm土・深さ25cm土）・P₂（径30cm土・深さ24cm土）・P₃（径25cm土・深さ34cm土）・P₄（径30cm土・深さ28cm土）・P₅（径35cm土・深さ30cm土）などがある。

これらのピットはその径・深さにおいてほぼ共通する要素を有するが、位置的な散状を検討してみると、アンバランスな分布状況を呈し、明確に柱穴配置を捉えることはできない。

壁は西壁から北西壁に該当する部分が検出されただけである。確認した部分では床面から急な立ちあがりをみせ、壁高13cm土を計る。

石囲い炉は焼土の周縁に粒径12cm土～23cm土を計る7個の安山岩類亜角礫を埋置した状態で検出されている。構成礫の配置上、不連続な部分が炉の北縁と南縁に認められるが、床面と埋土を構成するそれぞれの層の層相が近似しているため、これらの部分に抜き取り痕があったかどうか確認できなかった。炉は径68cm土～73cm土を計る。炉内の焼土は下位の摺鉢状の掘り方上部にレンズ状に堆積した現地性のものであり、中央部で層厚12cm土の堆積を示す。また、炉内の焼土の堆積状況から、炉の使用面は床面とほぼ同じ面と捉えられる。

床面からの出土遺物はないが、P₆の埋土から風化した粒状の琥珀が出土しているほか、この

住居址を被覆する埋土から縄文土器の細片が出土している。

石囲い炉より南側の床面に相当する部分から、GVI—61ピット・GVI—62ピット・GVI—63ピット・GVI—64フラスコ形ピットなどが検出されている。これらのピットのうち、GVI—64フラスコ形ピットはこの住居址を切る関係にあるが、他の3基については検出面が不明なところから新旧関係については不明なものとなっている。

GVI—3住居址（図版20cd・119g；写真図版30b・32b・155ab）

この住居址は、埋土から出土した土器片や炉の形態などを参考にすると縄文時代中期中葉期から縄文時代中期末葉期に位置づけられよう。検出の段階で南壁付近を削平によって消失したため全体の形状は不明であるが、残存する北半部はほぼ半円に近い形状を呈している。炉を1基もつ。規模は最大径4.4m±を計る。埋土は褐色土～暗褐色土で構成されている。

床面は平坦で、比較的軟い。柱穴状ピットは、P₁（径20cm±・深さ35cm±）・P₂（径14cm±・深さ18cm±）・P₃（径17cm±・深さ27cm±）・P₄（径21cm±・深さ2cm±）・P₅（径23cm±・深さ28cm±）・P₆（径19cm±・深さ39cm±）・P₇（径18cm±・深さ26cm±）・P₈（径21cm±・深さ39cm±）の計8個検出されている。柱穴配置については、遺構の形状が不明なため捉えることはできないが、それぞれの柱穴状ピットの規模および位置関係からP₁・P₅・P₆・P₇・P₈などによって構成されるものと推定される。

検出された壁は、ほぼまっすぐな立ちあがりを示す。壁高は、北壁30cm±・東壁18cm±・西壁32cm±を計る。壁溝は検出された範囲内では認められない。

炉は住居址の形状が不明なために位置的なことならについて明らかではないが、P₃とP₈を結ぶほぼ中間にあり、南北方向に長軸をもつ卵形を呈する。焼土の西縁および上面付近に火熱による赤色変化を認める7個の礫が残存する状況で検出された。7個の礫のうち、原位置をとどめているのは西端に位置する2個であり、4cm±～6cm±の深さで斜位に埋置されている。また、これら原位置をとどめる礫以外のものも側縁に火熱による赤色変化を認めることから、この炉を構成していた礫であると考えられる。これら7個の礫は安山岩類亜角礫であり、粒径10cm±～30cm±を計る。焼土は径80cm±×64cm±の広がりを持ち、摺鉢状の掘り方上部にレンズ状に形成されている。焼土は中央部付近で6cm±の層厚を計り、最終的な使用面と考えられる上面は床面と同じ高さの面と観察される。下位の火山灰層は、火熱による赤色変化を受けて堅くなっている。これらの状況から判断して、この炉は本来的に石囲い炉の形態を呈するものと考えられる。炉の残存部径80cm±（最大径）を計る。

床面からの出土遺物はないが、P₅から磨製石斧が出土しているほか、埋土中から縄文時代中期末葉期に位置づけられる土器片が出土している。また、重複関係について述べると、この住居址は北東壁付近でGVI—69ピットによって切られる状況にある。

GVI—4住居址（図版21a；写真図版33a）

この住居址は床面から検出された埋設土器を参考にすると縄文時代中期中葉期に位置づけられよう。埋土と床面を構成する土層が似ていたため東壁よりの床面に掘りすぎがみられ、検出状況は良くない。また、重複する遺構群によって切られており残存状況も良くない。

残存する壁の状況から推定して、形状は円形に近いものと思われる。規模は不明であるが、残存部最大径4.3m±を計る。埋土は褐色の汚れ火山灰の単層で構成されている。床面は軟く、西壁に寄った部分では平坦である。柱穴状ピットは、P₁(径31cm±・深さ21cm±)・P₂(径30cm±・深さ39cm±)・P₃(径21cm±・深さ23cm±)の3個検出された。柱穴配置は重複する遺構群との切り合いのため捉えることができない。

壁は西壁と東壁の一部だけ確認されていてどちらもほぼ真直な立ちあがりを示している。壁高は、東壁18cm±、西壁17cm±を計る。壁溝は認められない。

炉は床面を検出する際にその上面を掘りすぎ、下底部付近しか捉えることができなかったが、Field Cardによれば、2～3cm±の層厚で現地性焼土が認められたと記されていることなどから地床炉的な形態を呈したと考えられる。炉は西壁と東壁を結ぶほぼ中間に位置し、下底部で径30cm±の規模を計る。

付属施設として、P₁の東側に隣接して埋設土器を検出した。この土器は床面から20～25cm±の深さに直立の状態で埋設されている。土器の器面や周辺の床面には、加熱による赤色変化などの痕跡は認められなかった。

出土遺物には、この埋設土器のほかに、埋土から出土した縄文時代中期末葉期に位置づけられる土器の破片類やスクレーパー、剝片類がある。

重複関係についてみると、この住居址はG VI—5b住居址、G VI—53ビーカー形ピット、G VI—56ビーカー形ピット、G VI—57皿形ピットに切られる関係にある。

G VI—5住居址群（図版21bc・22c・119hi・120c；写真図版30c・33b・34ab・35ab・155cde・156a）

柱穴配置を検討した結果、このG VI—5住居址群が検出された範囲内には2棟の住居址が重複して存在することがわかった。柱穴配置の状況についてみれば、2棟の住居址とも形状、規模の類似した七角形の平面形を呈する。また、柱穴配置の分布状況についてみれば、新期の住居址を構成する柱穴の一部は古期住居址に伴う柱穴を部分的に切る在り方を示し、古期住居址に伴う柱穴のうち4個が新期の住居址によって再利用される関係にある。さらに、一見して新期の住居址に伴うとみられる1期の複式炉は、古期の複式炉を同位置で部分的なつけ替えを施し、再利用する構造を示している。

このような、柱穴配置の類似性や炉にも認められる再利用形態から、2棟の住居址は同系列のものと考えられ、複式炉の存在などからみて縄文時代中期末葉期に位置づけられよう。

ここでは、新期の住居址をGVI-5a 住居址、古期の住居址をGVI-5b 住居址と呼称し、以下それぞれについて記載する。

GVI-5a 住居址（図版21bc・22c・119hi・120c；写真図版30c・33b・34ab・35ab・155cde・156a）

形状は、北西から南東の方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈する。規模は、7.6m±×6.0m±を計る。炉は、複式炉が1基（1号炉）と地床炉が2基（2号炉・3号炉）の計3基設けられている。床面直上部から多量に検出された焼土・炭化材の分布状況から、この住居址は焼失を受けたものと考えられる。この焼土・炭化材と混在する状況で、粒径12cm±～48cm±の安山岩類亜角～亜円礫が11個出土している。

埋土は、上部が黒色～暗褐色土層で構成され、下部が焼土・炭化物を多量に含む汚れ火山灰優占の褐色土層で構成されている。床面は平坦で、堅くしまっている。

柱穴配置は、P₁（径64cm±・深さ68cm±）・P₂（径64cm±・深さ72cm±）・P₃（径76cm±・深さ63cm±）・P₄（径50cm±・深さ58cm±）・P₆（径23cm±・深さ21cm±）・P₇（径22cm±・深さ57cm±）・P₂₁（径38cm±・深さ78cm±）など7個のピットで構成される安定した七角形の平面形を呈し、P₁—P₄・P₂—P₃・P₆—P₇が対応する位置関係にある。これらのピットのうち、P₁・P₃・P₆・P₇はこの住居址よりも古期に位置づけられるGVI-5b住居址にも共伴するものであり、当住居址によって再利用される共有関係をもつ。

壁は、全体にまっすぐな立ちあがりを示している。壁高は、北壁41cm±・南壁52cm±・東壁32cm±・西壁61cm±を計る。壁溝は断続的に南壁付近に認められ、4cm±～9cm±の深さを計る。

炉は3基からなるが、分布状況を見ると、複式炉系統の炉（1号炉）が住居址の長軸方向に沿って東壁付近に位置するのに対し、地床炉の形態を呈する炉（2号炉・3号炉）はそれぞれ床面中央に近い部分にあつて長軸を挟んで北壁と南壁に寄った対になる位置関係を示している。

平面形が住居址と同じ方向に長軸をもつ凸辺三角形を呈し、断面形が舟底形を示すピット内部に1号炉は設けられている。全長250cm±を計る。この炉は3つの石囲い部と前庭部の4つの部位からなっており、各部位ごとに使用面が低くなっていく階段状を呈する。

第1石囲い部は粒径20cm±の安山岩類亜角礫2個を利用して構築されており、径24cm±の規模をもつ。部内には現地性焼土が形成されており、使用面から8cm±下位まで火熱による赤色変化を認めることができる。

第2石囲い部は半円形～長方形の平面形を呈し、径61cm±×24cm±の規模をもつ。縁辺の構成礫は粒径10cm±～24cm±を計る安山岩類亜角礫8個からなり、側縁を上下にした状態で埋置

されている。内部をみると、使用面には僅かに火熱による赤色変化が認められている。断ち割りの結果、この部位下位には使用面を上面とする貼り床状の汚れ火山灰が層厚 2 cm ± ~ 5 cm ± の厚さで貼られていることがわかった。汚れ火山灰のさらに下位には現地性焼土がさらに 9 cm ± の深さまで形成されており、構造的にみて、この焼土は古期住居址の段階に形成されたものと考えられる。

第 3 石囲い部は、構成礫が炉の長軸に対して両側面を欠く「ニ」字状の状態を検出された。残存する礫は粒径 10 cm ± ~ 34 cm ± を計る 10 個の安山岩垂角礫で構成され、下半部を埋置されている。構成礫を欠く両側の部分には明瞭に抜きとり痕が認められている。この部位は抜きとり痕を含めて考えると、本来的には方形~長方形の平面形を呈し、径 40 cm ± ~ 60 cm ± の規模をもつものであったろうと推定される。使用面上には加熱による赤色変化が認められていない。断ち割りの結果、この部位も第 2 石囲い部と同様の状況を呈し、上面を使用面とする層厚 3 cm ± を計る汚れ火山灰の下位から、層厚 4 cm ± を計る現地性焼土が検出された。構造的に第 2 石囲い部と類似したあり方を示し、汚れ火山灰の敷設された状況から判断して、この焼土も古期住居址の段階に形成されたものと捉えられよう。この部位の汚れ火山灰上面（使用面）には石皿の破損品や粒径 6 cm ± ~ 14 cm ± を計る礫が 7 個散乱する状況で認められた。

前庭部は、ほぼ半円形の平面形を呈し、径 160 cm ± × 150 cm ± の規模をもつ。使用面は堅く、1 号炉に伴うピット底面を利用する在り方を示している。東壁よりの末端部には Pa（径 33 cm ± ・底面からの深さ 18 cm ±）が認められる。

1 号炉を構成する各部位の上面（使用面）と住居址床面との比高は、第 1 石囲い部 10 cm ± ・第 2 石囲い部 23 cm ± ・第 3 石囲い部 32 cm ± ~ 35 cm ± ・前庭部 35 cm ± を計る。

2 号炉は P₃ と P₄ のほぼ中間に位置する。現地性焼土は不整な双円形の平面形を呈する径 80 cm ± × 40 cm ± の範囲に形成されている。使用面は床面よりも 2 cm ± 低い凹んだ状況を呈し、下位の火山灰層は 6 cm ± の深さまで火熱による赤色変化をうけている。

3 号炉は住居址の長軸を挟んで 2 号炉と対になる配置を示し、P₁ と P₂ のほぼ中間に位置する。現地性焼土は、66 cm ± × 52 cm ± の範囲に不整な楕円形の平面形を呈する状況で形成されている。使用面は周辺の床面よりも 3 cm ± 高いレベルに認められ、下位の火山灰層は使用面から 7 cm ± の深さまで火熱による赤色変化を受けている。

出土遺物として、床面から小形の深鉢形土器、1 号炉から深鉢形土器の破片、石皿の破損品などが得られており、土器はいずれも縄文時代中期末葉期に位置づけられる。また、埋土からも同時期に位置づけられる土器片のほか、石鏃、石匙、磨製石斧、スクレーパー、磨石などの石器類が出土している。

重複関係についてみれば、この住居址は G VI - 5 住居址群の中で同系列の住居址と考えられ

る G VI—5b 住居址より新期の遺構と考えられる。

G VI—5b 住居址 (図版21bc・119hi・120c；写真図版30c・33b・34ab・35ab・155cde・156a)

この住居址の柱穴は、 $P_1 \cdot P_3 \cdot P_5$ (径40cm±・深さ78cm±)・ $P_6 \cdot P_7 \cdot P_9$ (径34cm±・深さ26cm±)・ P_{22} (径40cm±・深さ16cm±) など7個のピット群で構成されると考えられる。柱穴配置は、G VI—5a 住居址と類似した北西から南東の方向に主軸をもつ安定した七角形の平面形を呈し、 $P_1-P_9 \cdot P_{22}-P_3 \cdot P_6-P_7$ が対になる位置関係を示している。柱穴配置を G VI—5a 住居址と比較してみれば、この住居址を構成するピット群のうち、 $P_1 \cdot P_3 \cdot P_6 \cdot P_7$ は G VI—5a 住居址によって再利用される共有関係にあり、 $P_5 \cdot P_{22}$ は部分的に G VI—5a 住居址を構成するその他の柱穴 ($P_{21} \cdot P_2$) によって切られる在り方を示している。

この住居址に伴う炉の具体的な設置状況については明らかではないが、G VI—5a 住居址1号炉の第2石囲い部および第3石囲い部下位の現地性焼土の存在から、この住居址は少なくともこの複式炉が存在する範囲内であって、最低2つの石囲い部から構成され、使用面上部への汚れ火山灰の敷設や他の部位のつけ替え等によって再利用される関係にある複式炉系統の炉を所有していたものと考えられる。

この住居址は、柱穴間の再利用形態および切合関係からみて、G VI—5a 住居址よりも古期の住居址と考えられる。また、柱穴配置の類似性や炉の共有関係を含めて考えれば、壁や床面の大部分も G VI—5a 住居址によって再利用される関係にあるかもしれない。

以上、G VI—5a 住居址および G VI—5b 住居址について記載してきたが、これらの住居址群が存在する範囲から、両住居址を構成する柱穴以外に、 P_8 (径36cm±・深さ28cm±)・ P_{10} (径48cm±・深さ42cm±)・ P_{11} (径23cm±・深さ43cm±)・ P_{12} (径33cm±・深さ45cm±)・ P_{13} (径23cm±・深さ23cm±)・ P_{14} (径36cm±・深さ17cm±)・ P_{15} (径25cm±・深さ26cm±)・ P_{16} (径20cm±・深さ19cm±)・ P_{17} (径18cm±・深さ33cm±)・ P_{18} (径33cm±・深さ35cm±)・ P_{19} (径24cm±・深さ27cm±)・ P_{20} (径31cm±・深さ18cm±) など12個のピット群が検出されている。これらのピット群の性格については明らかではない。

G VI—6 住居址群 (図版22ab・120a；写真図版36a・37a・156bc)

柱穴配置について検討したところ、検出された範囲内には少なくとも2棟の住居址が存在することがわかった。ここでは、2棟の住居址を新しい順に G VI—6a 住居址、G VI—6b 住居址と呼ぶことにする。2棟の住居址を構成する柱穴配置を比較していると、新期の G VI—6a 住居址は六角形の配置を示し、古期の G VI—6b 住居址は三角形の配置を示す。また、両者の柱穴間には再利用形態が認められない。

2棟の住居址のうち、G VI—6a 住居址は出土遺物からみて、縄文時代中期末葉期に位置づけられる。古期の G VI—6b 住居址については時期決定資料を欠くため明らかではないが、新旧関係

からみて、縄文時代中期末葉期以前と考えられる。以下、それぞれの住居址について記載する。

G VI—6a 住居址（図版22ab・120a；写真図版36a・37a・156bc）

この住居址は埋設土器や埋土から出土した土器片などから、縄文時代中期末葉期に位置づけられよう。北壁付近に僅かに掘りすぎが認められるが、全体に良好な残存状況を示している。平面形は南北の方向に長軸をもつ卵形を呈し、規模は径6.0m±×5.2m±を計る。東壁に寄った床面に構成礫を伴う土器埋設炉が1基設けられている。

埋土は、僅かに焼土の細粒を含む黒色～黒褐色土層によって構成されている。床面は軟質で全体に凹凸が認められる。

この住居址の柱穴は、P₄（径34cm±・深さ38cm±）・P₅（径38cm±・深さ40cm±）・P₆（径40cm±・深さ35cm±）・P₇（径22cm±・深さ16cm±）・P₈（径50cm±・深さ16cm±）・P₉（径20cm±・深さ15cm±）など6個のピット群によって構成されると考えられる。柱穴配置は六角形を呈し、P₇—P₈・P₆—P₉・P₅—P₄ がそれぞれ対になる位置関係を示す。

壁は全体にまっすぐに近い立ちあがりを示している。壁高は、北壁39cm±・南壁36cm±・東壁27cm±・西壁54cm±を計る。壁溝は認められない。

炉は床面中央から東壁に寄った部分に設けられている。東壁寄りの部分に1個の板状の礫を伴う土器埋設炉の形態を呈する。径61cm±を計る円形の範囲に現地性焼土が形成されており、その中央部には深鉢形土器の体部を利用した大形破片が直立に埋設されている。炉の東縁には粒径58cm±を計る板状の礫が側縁を上下にする状態で床面から18cm±の深さに埋置されている。この炉の使用面は、中央部が周辺の床面よりも低く、凹んだものとなっている。下位の火山灰は使用面から8cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。

出土遺物としては、この埋設土器のほか、埋土から出土した縄文時代中期末葉期に位置づけられる土器片や剝片類がある。重複関係についてみれば、この住居址はG VI—6b 住居址を切る関係にあると考えられる。

G VI—6b 住居址（図版22ab・120a；写真図版36a・37a・156bc）

この住居址の柱穴は、P₁（径46cm±・深さ57cm±）・P₂（径40cm±・深さ74cm±）・P₃（径42cm±・深さ65cm±）など3個のピットで構成されると考えられる。柱穴配置は、東西の方向に主軸をもち、P₃をその頂点とする三角形の配置を示す。柱穴配置以外に、この住居址を構成する部位については明らかではないが、位置関係から比較して、床面をG VI—6a 住居址によって同位置的に再利用される在り方を示している。

G VI—6 住居址群が存在する範囲からは、上記の2棟を構成する柱穴以外に、P₁₀（径24cm±・深さ15cm±）・P₁₁（径42cm±・深さ13cm±）・P₁₂（径16cm±・深さ10cm±）・P₁₃（径22cm±・深さ23cm±）・P₁₄（径18cm±・深さ40cm±）・P₁₅（径18cm±・深さ23cm±）・P₁₆（径16cm±・深さ

14cm±)・P₁₇(径14cm±・深さ24cm±)・P₁₈(径30cm±・深さ21cm±)など9個のピット群が検出されている。これらのピット群の具体的な性格については明らかではないが、分布状況からみて、GVI-6住居址群を構成する2棟のいずれかに伴う間仕切り穴、あるいは壁に関連するものと考えられる。

(佐藤 勝)

GVII区

GVII-1住居址(図版23a・120b;写真図版36b・156de)

この住居址は炉の形態やその埋設土器からみて、縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。残存状態が不良であったことや精査中に掘りすぎがみられたことなどから、規模・形態については明らかではない。壁の残存部の輪郭線から推定すると、3.8m±×3.1m±の規模をもち、五角形状の平面的な形態を示していたものかもしれない。住居址中央部のやや東側には、埋置礫と埋設土器を伴う1基の炉が設けられている。

床面はほぼ平坦で、全体に比較的軟弱なものとなっている。柱穴は検出されていない。壁高は、北壁13cm±・南壁15cm±・東壁18cm±・西壁30cm±を計る。

炉は、床面上にみられる2個の埋置礫と床面下に埋めこまれた斜位埋設土器などによって構築されている。一部がピットによって削剝を受けているが、この範囲には、径70cm±×48cm±・層厚9cm±の現地性焼土の形成がみられる。この部位の北側および東側に位置している埋置礫は、粒径37cm±・47cm±の安山岩亜角礫～亜円礫で、いずれも床面下5cm±の深さまでその下半部を埋めこまれている。東側の埋置礫下位には、深鉢形土器を利用した斜位埋設土器がある。この土器は、西側に対して開口する状態で検出されている。以上、この住居址に伴う炉について、今までの記述では見掛け上1基のものとして取り扱ってきた。しかし、埋置礫と埋設土器の在り方から、観方を変えれば、むしろこの部位では斜位埋設土器で構成される古期の炉と、埋置礫で構成される新期の炉が上下に重複していると考えの方が妥当なのかもしれない。現地性焼土上にみられる焼土混りの汚れ火山灰の存在は、また、新期の炉の側から古期の炉に対して使用面のつけ替えのあった痕跡を示していると言えるのかもしれない。

重複関係の面では、この住居址はそのほぼ中央部をGVII-51フラスコ形ピットにより切られている。GVII-2住居址・GVII-3住居址との新旧関係は不明である。

GVII-2住居址(図版23b・120d・121a;写真図版38a・156f・157a)

伴出遺物を欠くために、この住居址の所属時期については明らかではない。周辺の遺構群との重複状況を参考にして推定すると、これはおそらく、縄文時代前期～中期の時期内に含めら

れるものであろう。主にピット類によって大半の部分が削剝されていることや、精査中に掘りすぎがみられたことなどから、規模・形態に関する詳細は不明である。

Field Cardの記載によれば、この住居址の埋土は主に汚れ火山灰優占の褐色土層と黒褐色土層により構成されている。

床面はほぼ平坦で、全体に軟弱なものとなっている。柱穴は検出されていない。僅かに残存していた南西壁での観察によると、壁高は21cm±を計る。

残存していた床面には、大小合わせて3ヵ所にわたって地床炉的な現地性焼土の形成がみられる。これを今、1号炉・2号炉・3号炉とする。残存している範囲内の南東部に位置している1号炉は、G VII—54フラスコ形ピットの埋土最上層を削剝した面上にその使用面が設けられているもので、径140cm±×100cm±の範囲に層厚13cm±の現地性焼土が形成されている。使用面自体はきわめて堅くしまる面となっている。2号炉では、径25cm±×9cm±の残存部に層厚6cm±の現地性焼土の形成がみられる。1号炉と同様に、この炉の使用面も床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしまる面となっている。3号炉では、径23cm±の範囲に層厚5cm±の現地性焼土が形成されている。この部位の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、比較的軟弱な面となっている。

重複関係の面では、この住居址はG VII—3住居址・G VII—54フラスコ形ピットを切り、G VII—53フラスコ形ピット・G VII—56フラスコ形ピット・G VII—58フラスコ形ピット・G VI—71フラスコ形ピットなどには切られている。G VII—1住居址・G VII—55ピット・G VII—57フラスコ形ピットとの新旧関係についてはよくわからない。

G VII—3住居址（図版24a・121b；写真図版38a・157b）

住居址の登録がなされているが、この遺構では地床炉的な現地性焼土が確認されているのみで、壁・床面・柱穴などは検出されていない。したがって、この現地性焼土が住居址を構成するものかどうか不明であるが、一応、ここでは住居址の残片として記載することにする。この住居址はG VII—2住居址の下位6cm±のレベルで検出されたもので、残存状態が不良であるために規模・形態などについては明らかではない。

残存部での観察によれば、この住居址の埋土は主に汚れ火山灰優占の褐色土層で構成されている。これが、この住居址固有のものかG VII—2住居址側からの貼り床なのかよくわからない。

検出された現地性焼土は、径60cm±×52cm±・層厚8cm±の規模のもので、きわめて堅くしまる使用面を伴うことから、これは地床炉としての性格をもつものであると考えられる。在り方からみて、使用面は床面よりも僅かに低い位置に設けられていたと推定される。

重複関係の面では、この住居址はG VII—2住居址に切られているが、全形が明らかにされていないために、他のフラスコ形ピット群との具体的な重複状況については不明なものとなって

いる。

G VII—4 住居址（図版24bc・121c；写真図版37b・38b・157cd）

伴出遺物を欠くが、複式炉の系統を引く炉の存在からみて、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。2基のフラスコ形ピットと大きく重複している部分を除けば、全体に保存が良好な状態で検出されている。規模は径4.5m±×4.3m±を計り、平面形は多角形状または円形状に近い形態を示している。

埋土は主に、上部が黒褐色土層で、中部が暗褐色土層で、下部が褐色土層でそれぞれ構成されている。

床面はほぼ平坦で、全体に堅くしまる面となっている。柱穴は、P₁（径45cm±・深さ74cm±）・P₂（径30cm±・深さ32cm±）・P₃（径34cm±・深さ62cm±）などのピット群で構成されているものではないかと考えられる。あるいは、P₄（径30cm±・深さ21cm±）も柱穴を構成するピットとして位置づけられるのかもしれない。この住居址内からは上記のものほかに、P₅（径17cm±・深さ19cm±）・P₆（径17cm±・深さ5cm±）・P₇（径24cm±・深さ20cm±）などのピット群が検出されているが、それらの性格については明らかではない。壁高は、北壁21cm±・南壁63cm±・東壁30cm±・西壁77cm±を計る。また、西壁から南壁にかけては断続的に、幅6cm±～16cm±・深さ2cm±～12cm±の壁溝が設けられている。

東壁よりに設けられている複式炉は2つの石囲い部と前庭部とから成るもので、フラスコ形ピットと重複している部分を除く1.7m±×1.2m±の範囲が検出されている。第1石囲い部は床面下16cm±～20cm±低い位置に設けられていて、残存部に関する限り粒径10cm±～23cm±の安山岩類亜角～亜円礫を使用して、平面形が楕円形状に構築されている。この部位の西縁部の構成礫はすべて抜き取られているとみられる。この部分では明瞭な抜き取り痕の存在が確認されている。この第1石囲い部内には層厚7cm±の現地性焼土が形成されている。使用面自体はきわめて堅くしまる面となっている。また、この面上には、層厚1cm±～2cm±の汚れ火山灰の敷設がみられた。この火山灰の上面もきわめて堅くしまるものとなっている。第2石囲い部は第1石囲い部よりも4cm±～8cm±低い位置にあって、一部に抜き取り痕がみられるが、基本的には粒径10cm±～24cm±の安山岩類亜角～亜円礫を使用して構築されている。2つの石囲い部の境界をなす構成礫は、その下半部を13cm±の深さまで下位の火山灰層中に埋置されている。第2石囲い部内には層厚2cm±の現在性焼土が形成されている。この上面もきわめて堅くしまる面となっている。

前庭部は第2石囲い部よりも7cm±低い位置に設けられていて、残存部に関する限り底面はほぼ平坦で、全体にきわめて堅くしまる面となっている。この2つの部位の境界をなす構成礫は、10cm±の深さまでその下半部を下位の火山灰層中に埋めこまれている。また、前庭部の北

側縁部には、同様に下半部を埋めこまれた粒径31cm±・50cm±の安山岩垂角礫がみられる。

以上、複式炉について記載してきた。ここにみられる各部位の在り方から考えて、この複式炉ではいわゆる燃焼部のつけ替えが行なわれているのではないかと推定される。第1石囲い部内の使用面が火山灰で閉塞されていたことからみて、この部位に位置していた燃焼部が第2石囲い部内に移動しているものであろう。

重複関係の面では、この住居址はG VII—58フラスコ形ピット・G VII—72フラスコ形ピットを切っているものと考えられる。

G VII—5 住居址（図版25ad；写真図版39a）

明確な伴出遺物を欠くために、この住居址の所属時期は明らかではない。ただ、埋土の状況や出土遺物から推定すると、これは縄文時代中期内に含まれるものと考えられるのかもしれない。大半の部分が調査区域外に存在していることや、他の遺構群によって削剝を受けていることなどから、この住居址の規模や形態については不明である。残存している壁の輪郭線から推定すると基本的には円形状の形態を示していたものであろう。調査されたのは、5.0m±×1.7m±の範囲である。炉は検出されていない。

埋土は主に、褐色～暗褐色土層群により構成されている。埋土の中央部の層準を占めるe層は、長者屋敷遺跡における基本層序のβ層（高橋：1980）に相当するもので、一本木火山礫（中川ら：1963）の一部を構成する火山灰層ではないかと考えられる。

検出された範囲内に関する限り、床面はほぼ平坦できわめて堅くしまる面となっている。柱穴は確認されていない。壁高は、南壁130cm±・西壁74cm±を計る。

重複関係について言えば、この住居址はG VII—6 住居址・G VII—70フラスコ形ピットにより切られている。

G VII—6 住居址（図版25bd；写真図版39a）

床面からの伴出遺物を欠くために、この住居址の所属時期の詳細については不明である。埋土の状況や出土遺物から推定すると、あるいは縄文時代中期末葉期に位置づけられるものかもしれない。大半の部分が調査区域外に存在しているものとみられ、この住居址の規模や形態についても不明である。4.0m±×1.0m±の範囲が検出されているにすぎない。

埋土の多くはG VII—5 住居址のそれと連続的で、主に褐色～暗褐色土層群により構成されている。G VII—5 住居址の場合と同様に、埋土の中央部の層準を占めるe層は長者屋敷遺跡における基本層序のβ層に相当するもので、一本木火山礫の一部を構成する火山灰層ではないかと考えられる。この下位に位置するf・g層は焼土・炭化物を多量に含むほか、層中には多くの乾裂の発達もみられ、全体に人為堆積相を示している。

床面は僅かに凹凸のある面となっていて、比較的堅くしまっている。柱穴状のピットは、P₁（径21cm±・深さ58cm±）・P₂（径38cm±・深さ7cm±）の2個が検出されているにすぎない。

壁高は、南壁59cm±・西壁41cm±を計る。

重複関係の面では、この住居址はG VII-5住居址を切り、G VII-70フラスコ形ピットには切られている。

G VII-7住居址

地床炉的な現地性焼土が確認されて住居址登録がなされているが、周辺状況から考えてこれが住居址を構成するものかどうか不明である。したがってここでこの住居址を欠番扱いとして、この現地性焼土については新たにG VII-201焼土遺構の項目内で記載することにする。

G VII-8住居址（図版25c；写真図版37c・39b）

伴出遺物を欠くために、この住居址の所属時期については不明である。全体に残存が不良な状態で検出されている。規模は3.0m±×2.3m±を計り、平面形は楕円形状の形態を示している。炉は検出されていない。床面上に多くみられた炭化材・炭化物・焼土の存在から、この住居址は焼失を受けているものではないかと考えられる。

埋土は主に、炭化物・焼土を多量に含む暗褐色土層で構成されている。

Field Card の記載を欠くために、床面の性状については不明である。柱穴は検出されていない。壁高は、北壁23cm±・南壁18cm±・東壁18cm±・西壁34cm±を計る。

重複関係の面では、この住居址はG VII-67フラスコ形ピットを切っている。G VII-68フラスコ形ピットとの新旧関係の詳細についてはよくわからない。G VII-67フラスコ形ピットとの重複においては、当住居址の床面や面上に分布する炭化材・炭化物・焼土がピットの埋土を切って連続する状況が把握されている。

（高橋 文夫）

H III区

H III-1住居址群（図版 26ab・27ab・121de・122ab；写真図版 40・41・42a・157e・158ab）

柱穴配置について検討を加えたところ、この住居址群が検出された範囲内には最低2棟の住居址が重複する状況で存在していることがわかった。2棟の住居址の柱穴配置を比較してみると、平面形に類似性が認められ、新期の住居址は古期住居址に伴う柱穴の一部を再利用するあり方を示している。このことから、2棟の住居址は同系列のものと思われ、建て替えなどによって、同位置的な重複状況を示すものであろうと考えられる。

また、新期の住居址に伴う南壁が不明なものとなっているため、具体的には把握できないが、少なくとも新期住居址に伴う貼り床が床面南縁にだけ敷設された状況を示すことや、柱穴配置の輪郭の一部が柱穴の再利用によって変化しないところから、新期住居址は古期住居址から拡張化

される在り方を示すものであると推定される。

ここでは、2棟の住居址のうち新期のものをHIII-1a住居址、古期のものをHIII-1b住居址と呼称し、以下それぞれについて記載する。

HIII-1a住居址（図版 26ab・27ab・121de・122ab；写真図版 40・41・42a・157e・158ab）

この住居址は床面から出土した土器などから縄文時代前期前半期に位置づけられよう。遺構の南側半分にあたる部分の壁を消失していることから全体の形状は明らかではないが、半円形を示す北半の残存部や柱穴配置を参考にすれば、本来は南北に長軸をもつ楕円形～隅丸長方形を呈するものであったと推定される。規模は、径8.4m±×6.3m±を計るものと考えられる。炉は4基の地床炉で構成される。

埋土は上位から黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層の順で構成される。このうち、中位から下位付近まで埋積している暗褐色土層中には炭化物や焼土粒が多く含まれているほか、北壁に寄った部分に集中して多くの土器片類などの遺物が含まれていることから、この層は当住居址廃絶後に複合的廃棄行為によって形成されたと考えられる。

床面は南端部付近で北壁際の部分よりも45cm±低くなる緩かな傾きをみせる。北半部の床面が基本層序III層上面を削削して利用した平滑で堅い面となっているのに対して、南半部では黄褐色火山灰と暗褐色土が入り混じった汚れ火山灰で構成され、軟質なものとなっている。この汚れ火山灰はHIII-3住居址に伴う埋土上面やその周辺を被覆していることから、貼り床と考えられる。

床面から検出されたピット群は42個を数えるが、この住居址は基本的にP₁（径22cm±・深さ110cm±）・P₃（径23cm±・深さ92cm±）・P₅（径44cm±・深さ55cm±）・P₆（径32cm±・深さ50cm±）・P₇（径28cm±・深さ52cm±）・P₈（径25cm±・深さ39cm±）・P₁₀（径22cm±・深さ10cm±）・P₁₂（径22cm±・深さ81cm±）など8個によって構成される柱穴配置を有するものと考えられる。

これらのピットは、P₁₂—P₁・P₁₀—P₃・P₈—P₅・P₇—P₆という対になる位置関係を示し、一見不整であるが南北方向に主軸をもつ安定した配置を示す。このうち、P₅・P₆・P₇・P₈はHIII-1b住居址にも伴い、当住居址によって再利用される関係にある。

壁は残存部においてやや外傾する立ちあがりを示している。壁高は、北壁55cm±・東壁22cm±・西壁22cm±を計る。

検出された4基の地床炉のうち1～3号炉は住居址の長軸に沿った床面の中央部に150cm±～160cm±の間隔で設けられているのに対し、4号炉は1号炉から75cm±寄った部分に位置するあり方を示す。また、現地性焼土のひろがりも1～3号炉が40cm±～60cm±の径を計り良く焼成を受けているが、4号炉は径16cm±と微弱な状況を呈する。このような分布状況からみて、1～3号炉は「定位置」地床炉（高橋：1980）ととらえられ、4号炉は「非定位置」的なあり

方を示す地床炉と考えられる。

1号炉は住居址の長軸に沿った北壁寄りの部分に位置する。径60cm±×50cm±の範囲に現地性焼土の形成が認められ、使用面は床面と同じレベルにある。下位の火山灰層は使用面から7cm±の深さまで加熱による赤色変化を受けている。

2号炉は住居址長軸に沿って床面のほぼ中央に位置する。径62cm±×53cm±の範囲に現地性焼土の形成が認められ、それを囲むようにして環状に炭化物が分布している。この炉の使用面は床面よりも2cm±高いレベルにあり、下位の火山灰層は7cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。

3号炉は、住居址の長軸に沿って2号炉から150cm±離れた南側に位置している。現地性焼土は径38cm±～43cm±を計る範囲内に形成されており、使用面は床面とほぼ同じレベルにある。この炉はHⅢ-3住居址埋土上面を切って設けられている。層厚8cm±を計る現地性焼土の下位には焼土・炭化物の細粒を多く含む暗褐色土層が認められ、この層下位の層理面が掘り方に伴う下底部と考えられる。

4号炉は1号炉から75cm±東壁に寄った部分に位置する。現地性焼土は径16cm±・層厚2cm±～3cm±の規模で形成されている。

この住居址からの出土遺物には、床面や埋土から出土した縄文時代前期前半期に位置する土器片類と、埋土から出土した半円状扁平打製石器、石匙・磨製石斧などの石器類がある。

重複関係についてみれば、この住居址はHⅢ-1b住居址よりも新期の遺構と考えられ、HⅢ-3住居址を切る関係にある。HⅢ-4住居址との新旧関係については南壁を消失している状況から明らかではないが、検出面から推定すれば、HⅢ-4住居址に切られる関係にあるものと位置づけられる。また、HⅢ-1b住居址との関係について推定すれば、柱穴配置の類似性や一部の共有関係から、壁および床面、さらに炉についてもそれらの一部を再利用する関係にあるのかもしれない。

HⅢ-1b住居址（図版 26ab・27a・121de・122ab；写真図版 40・41・42a・157e・158ab）

この住居址はHⅢ-1a住居址に先行する古期の住居址と考えられ、やはり縄文時代前期前半期に位置づけられよう。形状は柱穴配置から推定して、南北の方向に主軸をもつ楕円形～隅丸長方形を呈していたものと考えられる。規模は柱穴配置で見ると、HⅢ-1a住居址よりも長軸方向に約1m少ない数値を示している。

柱穴は、P₂（径32cm±・深さ71cm±）・P₄（径20cm±・深さ52cm±）・P₅（径44cm±・深さ55cm±）・P₆（径32cm±・深さ50cm±）・P₇（径28cm±・深さ52cm±）・P₈（径25cm±・深さ39cm±）・P₉（径17cm±・深さ59cm±）・P₁₁（径24cm±・深さ43cm±）など8個で構成される。柱穴配置はP₂-P₁₁・P₄-P₉・P₅-P₈・P₆-P₇がそれぞれ対応する位置関係を示す。このうち、P₅・P₆・

P₇・P₈ はHⅢ-1aの住居址によって再利用される共有関係にある。

床面および炉の具体的なあり方については、明らかではないが、柱穴配置の類似性からみて少なくとも床面はHⅢ-1a住居址と同じような拡がりをもっていたものと考えられる。従って、HⅢ-1a住居址床面の南縁部に認められた貼り床は、すでにこの住居址の構築段階でHⅢ-3住居址埋土上部に施されていたものと推定される。

このほか、HⅢ-1a・1b住居址に伴う床面付近から、P₁₃ (径16cm±・深さ16cm±)・P₁₄ (径24cm±・深さ68cm±)・P₁₅ (径16cm±・深さ40cm±)・P₁₆ (径16cm±・深さ13cm±)・P₁₇ (径22cm±・深さ45cm±)・P₁₈ (径36cm±・深さ50cm±)・P₁₉ (径17cm±・深さ16cm±)・P₂₀ (径20cm±・深さ19cm±)・P₂₁ (径15cm±・深さ16cm±)・P₂₂ (径20cm±・深さ12cm±)・P₂₃ (径30cm±・深さ19cm±)・P₂₄ (径45cm±・深さ50cm±)・P₂₅ (径35cm±・深さ12cm±)・P₂₆ (径20cm±・深さ20cm±)・P₂₇ (径35cm±・深さ15cm±)・P₂₈ (径24cm±・深さ12cm±)・P₂₉ (径32cm±・深さ21cm±)・P₃₀ (径28cm±・深さ27cm±)・P₃₁ (径23cm±・深さ41cm±)・P₃₂ (径18cm±・深さ18cm±)・P₃₃ (径22cm±・深さ49cm±)・P₃₄ (径20cm±・深さ7cm±)・P₃₅ (径21cm±・深さ41cm±)・P₃₆ (径19cm±・深さ17cm±)・P₃₇ (径35cm±・深さ29cm±)・P₃₈ (径25cm±・深さ22cm±)・P₃₉ (径20cm±・深さ21cm±)・P₄₀ (径16cm±・深さ8cm±)・P₄₁ (径11cm±・深さ46cm±)・P₄₂ (径14cm±・深さ22cm±) など30個のピット群が検出されている。

このうち、P₁₉・P₂₃・P₃₃・P₃₅ は位置的にみて、P₃₅—P₁₉・P₃₃—P₂₃ という対応関係を示すところから、2棟の住居址のいずれかに伴う間仕切の痕跡を示すものと考えられる。それ以外の26個のピット群の性格については明らかではないが、その中で2棟の住居址の柱穴配置南縁に位置するピット群は分布状況からみて、HⅢ-201焼土遺構と関連性をもった遺構の痕跡をとどめるものかもしれない。

HⅢ-2住居址 (図版 28ab ; 写真図版 42b・43a)

有力な時期決定資料となる床面からの出土遺物は得られなかったが、埋土から出土した土器片や周辺から検出され、同じような形態的要素をもったHⅢ-3住居址、HⅢ-4住居址、HⅢ-5住居址などの住居址群などを参考にすれば、この住居址は縄文時代前期前半期に位置づけられよう。平面形は南西から北東の方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、南壁が弧状にいくぶん膨らんでいる。規模は、3.2m±×2.5m±を計る。炉は認められない。

埋土は暗褐色～褐色土層群で構成され、中位から下位にかけて汚れ火山灰優占の褐色土の混入が認められる。埋土全体に炭化物が含まれている。

床面は堅緻で、小さな凹凸が多くみられる。柱穴配置は明らかではないが、P₁ (径18cm±・深さ19cm±)・P₂ (径19cm±・深さ27cm±)・P₃ (径21cm±・深さ22cm±) ら3個の柱穴状ピットが検出されている。

壁は、上位が軟質であったために一部掘りすぎに及んだ部分もあるが、全体的に立ちあがり
が垂直に近い状況を示す。壁高は、北壁68cm±・南壁57cm±・東壁71cm±・西壁72cm±を計る。

壁溝は南東隅および北西隅付近の壁際から部分的に検出されており、平均幅13cm±・平均深
度8cm±の規模をもつ。西壁から北壁にかけて、径8cm前後・深さ5cm±～17cm±を計る規模
をもつピットが数個検出されているが、これらのピットも壁溝と類似した性格をもつものと考
えられる。

出土遺物には、埋土から出土した縄文時代前期前半期に位置づけられる土器片類がある。
この住居址は、単独の遺構として検出され、他の遺構との重複は認められない。

HⅢ-3 住居址 (図版 26a・29ab ; 写真図版 42c・43b・257e)

この住居址は、HⅢ-1 住居址群との重複関係および周辺から検出された同じような形態的
要素をもつ住居址群 (HⅢ-2 住居址、HⅢ-3 住居址など) の存在から、縄文時代前期前半
期に位置するものと考えられる。検出面はこの住居址の埋土上部を切って載る在り方を示すH
Ⅲ-1a住居址床面であり、汚れ火山灰を主体とする土層によって埋土上部付近は部分的に被覆
される状況を呈していた。

東西方向に長軸をもち、南辺がやや長い隅丸の等辺台形～隅丸長方形の平面形をこの住居は
示し、2.9m±×1.9m±の規模を計る。炉は認められなかった。

埋土は汚れ火山灰優先の暗褐色～黒褐色土層で構成され、全体に炭化物の細粒を含んでいる。
床面は堅緻で、ほぼ平坦なものとなっている。

柱穴配置は不明であるが、P₁ (径24cm±・深さ30cm±)・P₂ (径20cm±・深さ17cm±)・P₃ (径
35cm±・深さ8cm±)・P₄ (径56cm±・深さ7cm±)・P₅ (径20cm±・深さ23cm±)・P₆ (径64cm±・
深さ37cm±) など6個のピットが床面および壁付近から検出されている。これらのピットのう
ち、P₁・P₂・P₅ は位置関係および規模から柱穴状ピットと推定されるが、それ以外のピットの
性格については明らかではない。また、北西隅付近のピット (径25cm±・深さ39cm±) は検出
面が埋土上位付近に認められたことから、この住居址と重複関係にあるHⅢ-1 住居址群に伴
うピットと考えられる。

壁は全体にほぼまっすぐな立ちあがりを示している。壁高は、北壁31cm±・南壁21cm±・東
壁22cm±・西壁36cm±を計る。壁溝は、西壁から北壁・東壁に沿って「コ」字状に認められて
おり、幅10cm±・深さ3cm±～5cm±の規模をもつ。

床面および埋土からも遺物は出土していない。

重複関係について述べれば、この住居址は埋土上部にHⅢ-1 住居址群を載せ、HⅢ-1a住
居址に伴う3号炉によって東壁寄りの埋土上部を切られるほか、HⅢ-1 住居址群に伴うと捉

えられる P₃ によって北西隅付近の埋土および床面を切られる在り方を示している。

HIII-4 住居址 (図版 26a・30ab ; 写真図版 44a・45a)

埋土から出土した土器片や周辺部から検出された住居址群 (HIII-1 住居址群・HIII-2 住居址など) の存在から、この住居址は縄文時代前期前半期に位置づけられよう。北壁付近の木根による攪乱や北西隅付近の掘りすぎのため、部分的に壁の上半を欠失した状況で検出されたが、平面形は東西の方向に長軸をもつ隅丸の長方形～等辺台形を呈しており、 $3.1\text{m}\pm\times 2.1\text{m}\pm$ の規模を計る。炉は認められない。

埋土は上位から褐色土層・暗褐色土層・黒褐色土層の順で構成されており、上位から中位にかけて焼土や炭化物の細粒を僅かに含んでいる。床面は平坦で、かたくしまっている。

床面から、P₁ (径 $13\text{cm}\pm$ ・深さ $13\text{cm}\pm$)・P₂ (径 $14\text{cm}\pm$ ・深さ $5\text{cm}\pm$)・P₃ (径 $18\text{cm}\pm$ ・深さ $26\text{cm}\pm$)・P₄ (径 $14\text{cm}\pm$ ・深さ $12\text{cm}\pm$)・P₅ (径 $17\text{cm}\pm$ ・深さ $3\text{cm}\pm$)・P₆ (径 $50\text{cm}\pm$ ・深さ $21\text{cm}\pm$)・P₇ (径 $13\text{cm}\pm$ ・深さ $14\text{cm}\pm$) など7個のピットが検出されているが、これらのピットが柱穴状ピットとしての性格をもつものかどうか、その性格については明らかではない。

壁は全体にまっすぐに近い立ちあがりを示している。壁高は残存部において、北壁 $45\text{cm}\pm$ ・南壁 $22\text{cm}\pm$ ・東壁 $36\text{cm}\pm$ ・西壁 $41\text{cm}\pm$ を計る。

壁溝は、平均幅 $14\text{cm}\pm$ ・平均深度 $5\text{cm}\pm$ の規模をもって、北西隅から北壁沿いを経て北東隅付近まで巡っている。

埋土から縄文時代前期前半期に位置づけられる深鉢形土器の大形破片が出土している。重複関係についてみれば、木根による攪乱のため具体的には確認されていないが、この住居址は検出された層位や位置関係などからみて、HIII-1 住居址群およびHIII-201焼土遺構を切る関係にあるものと推定される。

HIII-5 住居址 (図版 31ab ; 写真図版 44b・45b)

床面から出土した土器からみて、この住居址は縄文時代前期前半期に位置づけられると考えられる。精査時の不手際から、壁および床面にかなりの掘りすぎが認められ、残存状況は不良なものとなっている。残存部から推定すると、平面形が南北の方向に長軸をもつ卵形を呈し、 $3.2\text{m}\pm\times 2.3\text{m}\pm$ を計る規模をもつものと考えられる。

埋土は上位から黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層で構成される堆積状況を示している。埋土全体に少量の焼土・炭化物の含有が認められる。

床面は残存状況からみて、本来的に平滑で堅い状況を呈していたと考えられる。床面からは P₁ (径 $32\text{cm}\pm$ ・深さ $41\text{cm}\pm$)・P₂ (径 $43\text{cm}\pm$ ・深さ $13\text{cm}\pm$) など2個のピットが検出されているが、これらのピットの性格および具体的な位置づけについては明らかではない。

壁は掘りすぎのため部分的にしか観察できないが、概ねゆるやかに外傾する状況を示している。壁高は、北壁 $12\text{cm}\pm$ ・南壁 $22\text{cm}\pm$ ・西壁 $27\text{cm}\pm$ を計り、東壁付近では計測できなかった。

壁溝・炉・その他の付属施設に該当するものはいずれも検出されなかった。出土遺物には、床面および埋土から出土した縄文時代前期前半期に位置づけられる深鉢形土器がある。

この住居址は単独の遺構であり、他の遺構との重複は認められない。

HⅢ-6・7・8・9・10住居址群（図版 32abc・33c；写真図版 45c・46a）

この住居址群は検出段階では重複関係をもたない単独の遺構と考えられていたが、床面の精査を進める過程で、段状に認められる平坦面（床面）や貼り床と認められるしまった土層、さらにその下位から壁溝などが観察され、何棟かの重複を想定する根拠が得られた。そこで試掘溝を設け、断面から観察できる埋土の状況や最終的な残存状況などと関連させて検討を加えたところ、検出された範囲内には5棟の住居址が重複する状況で存在することを確認した。

調査手順の誤りから全部の住居址についての形状・規模を明らかにすることはできなかったが、これらの住居址は断続的に切り合って存在したものととらえられ、時期的には最も新期の住居址に伴う出土遺物や、周辺部から検出された同系列の住居址の存在から縄文時代前期前半期に位置づけられるものであろう。ここでは、それぞれの住居址を古い順にHⅢ-6住居址、HⅢ-7住居址、HⅢ-8住居址、HⅢ-9住居址、HⅢ-10住居址と呼び、各住居址ごとに記載し、一連の重複関係についてはそのあとで試掘溝にあらわれた断面を使って述べることにする。

HⅢ-6住居址（図版 32abc・33c；写真図版 45c・46a）

この住居址は重複する5棟の中で最も古期に位置するものと考えられる。南北の方向に長軸をもち、北壁に膨みをもつ凸辺長方形を呈し、3.2m±×2.2m±の規模をもつ。

個有の埋土は切り合いのためほとんど観察できないが、廃絶直後埋積したと捉えられる黒色土層の一部が壁際に残存している。HⅢ-7住居址との切り合いのため、中央部付近を欠き、環状に残存している床面は平坦で、堅い面となっている。床面から、P₁（径38cm±×20cm±・深さ41cm±）・P₂（径20cm±・深さ不明）・P₇（径18cm±・深さ19cm±）・P₈（径14cm±・深さ11cm±）など4個の柱穴状ピットが検出されているが、それらの具体的な位置づけについては明らかではない。また、西壁の外側から検出されたP_a（径18cm±・深さ8cm±）の性格や具体的な位置づけについても不明である。

壁はかなり急な立ちあがりを示している。壁高は、北壁28cm±・南壁17cm±・東壁19cm±・西壁25cm±を計る。

この住居址はHⅢ-7住居址によって壁と壁際の床面を環状に残して切られる在り方を示し住居址群を構成するHⅢ-8・9・10住居址よりも古期に位置づけられる。

HⅢ-7住居址（図版 32ac・33ac；写真図版 45c・46a）

この住居址はHⅢ-8住居址によって床面の大半を切られている。このため、全体の形状・規模などについては明らかではないが、HⅢ-6住居址との重複関係からみて、HⅢ-6住居

址に内在する形状・規模をもつものと考えられる。片凸レンズ状に残存する西壁付近の床面は、平坦で堅く、HⅢ-6住居址に伴う床面よりも平均して4cm±低いレベルにある。重複関係についてみれば、試掘溝断面および残存状況から、この住居址はHⅢ-6住居址床面中央付近を削平して構築され、さらにHⅢ-8住居址によって切られる関係にあると考えられる。

HⅢ-8住居址（図版 32ac・33bc；写真図版 45c・46a）

この住居址は壁上部を欠く残存状況に限ってみると、南北に長軸をもつ楕円形を呈し、2.5m±×1.3m±の規模を計る。床面は平坦で、堅緻な状況を呈し、HⅢ-6住居址床面よりも6cm±、HⅢ-7住居址床面よりも2cm±低いレベルに認められる。床面には、P₃（残存部径44cm±・深さ5cm±）・P₄（径24cm±・深さ8cm±）・P₅（径21cm±・深さ27cm±）・P₆（径15cm±・深さ6cm±）など4個のピットが存在する。このうち、P₃はこの住居址廃絶からHⅢ-10住居址構築までの間に形成されたものであると考えられる。残るピットについてもP₄はP₅に切られる残存状況を示すことや、検出面を捉えられなかったことから、この住居址固有のピットの判別がつかず、それらの具体的な性格に関しては全く不明である。

壁溝は西壁に沿って1条認められる。平均幅10cm±・平均深度4cm±の規模を計る。

この住居址に伴う床面がHⅢ-6住居址床面よりも平均して6cm±低く、HⅢ-7住居址床面よりも平均して2cm±低い状況を呈することやHⅢ-7住居址の残存部に沿って壁溝が巡っていることから、試掘溝に観察された切り合い状況から判断してこの住居址はHⅢ-7住居址を西壁付近で直接切りながらもその床面の大部分を再利用する関係にあると思われる。また、この床面上部に敷設された貼り床からHⅢ-9住居址によって切られる関係にあると考えられる。

HⅢ-9住居址（図版 32ac・33c；写真図版 45c・46a）

調査の下手際から床面（貼り床）のひろがりを確認できず、形状・規模を把握できなかったが、試掘溝断面には部分的に新期のピット（P₃）には切られてはいるもののHⅢ-8住居址床面を覆う状態で、炭化物を含む汚れ火山灰優占のしまりのよい貼り床とみられる層が観察された。この層は褐色を呈し、層厚（平均）5cm±を計る。貼り床の敷設状況から、この住居址はHⅢ-8住居址に伴う床面を再利用し、壁を共有する状況で構築された住居址と推定され、HⅢ-8住居址とほぼ同じ形状を呈していたものではないかと考えられる。

重複関係についてみれば、この住居址はHⅢ-8住居址を構成する壁や床面上部を再利用した新期の住居址と考えられる。また、東壁付近にレンズ状に埋積するc層の堆積状況からみると、当住居址廃絶後形成されたP₃に伴う埋土（b層）を切って構築されたHⅢ-10住居址によって床面の大部分を再利用される関係にあると考えられる。

HⅢ-10住居址（図版 32ac・33c；写真図版 45c・46a）

この住居址は、HⅢ-8住居址廃絶後、形成されたピット（P₃）の埋積期間を経たのち、構築された遺構と考えられる。埋土断面の観察によれば、この住居址はHⅢ-8住居址の床面お

よび P₃ に埋積した埋土を床面とした状況を伺うことができる。規模、形態などは明らかではないが、一連の重複状況を示す HIII-7・8・9 住居址に後続する最も新期の住居址と考えられる。断面を見る限り床面は平坦な状況を呈する。床面や埋土から縄文時代前期前半期に位置づけられる土器片が出土している。

これまで述べた HIII-6・7・8・9・10 住居址群の推移および重複状況を試掘溝に伴う埋土断面から捉えると、HIII-6 住居址構築・廃絶→f 層の形成→HIII-7 住居址構築・廃絶→HIII-8 住居址構築・(廃絶)→HIII-9 住居址構築 (d 層の形成=貼り床)→P₃ の形成・埋積 (c 層の形成)→b 層の形成→HIII-10 住居址構築・廃絶→a 層の形成、というプロセスが想定される。

柱穴配置や形状について具体的に把握できないところから明らかではないが、5 棟の住居址はそのうち最も古期に位置づけられる住居址の範囲内で、床面や壁などを再利用しながら重複していることから同時期・同系列の住居址と認められよう。

HIII-11 住居址 (図版 35a ; 写真図版 47)

この住居址は HIII-12 住居址群によって切られたものと捉えられ、わずかに北西隅に該当する部分しか残存していない。出土遺物や埋土の記録を欠くため具体的な資料に乏しいが、切り合い関係および周辺から検出された住居址群のあり方から判断して、縄文時代前期前半期に位置づけられよう。

規模や形態は切り合いのため不明であるが、検出された部分は北西隅にあたる部分と考えられ、隅丸に近い状況を呈している。床面は平坦で、しまっている。

柱穴状ピットは 1 個確認されており、このピット (P₁) は径 40cm±・深さ 21cm± を計る。壁はほぼまっすぐに近い立ちあがりを示している。壁高は、西壁 32cm±・北壁 23cm± を計る。

重複関係について述べれば、この住居址は HIII-12 住居址群によって切られており、HIII-12 住居址群の中でも古期の HIII-12a 住居址によって切られたものと推定される。

HIII-12 住居址群 (図版 34・35abc・36a・122cdefgh・123abcdefg・124abc ; 写真図版 46b・47・48・49ab・158cde・159abcd・160abc・161abc・162abc・163abc・164ab)

この住居址群は『遺物編 I』で報じられた HIV-3 住居址と同一の遺構である。前回の調査では HIV-4x 住居址と切り合う北東隅付近の調査だけに終わったが、今回の調査の結果遺構の大部分が HIII 区に属している事実が判明した。そこで、ここでは重複による混乱を避けるため、遺構名を HIII-12 住居址群として統一し、HIV-3 住居址という遺構名は欠番扱いとする。

この住居址群は前回の調査に継続して当初単独の住居址として調査したが、埋土の状況・床面・柱穴配置・壁溝・炉の位置と数などを総合的に検討した結果、検出範囲内での多数の住居址の重複状況を確認した。群を構成する個々の住居址の実数や形状については重複の痕跡をと

どめる残存状況から具体的に把握することはできないが、柱穴配置や炉・壁溝などの検討から15棟の存在が推定された。そして、これらの住居址はいずれも規模や炉の配置形から「大型住居系列」(高橋;1980)に属するものであろうと考えられる。この稿では、群の痕跡を残す残存状況についてHⅢ-12住居址群として記載し、個々の住居址についてはこれらの痕跡を手がかりに住居址名を付してそのあとで述べることにする。また、全体の推移などはさらにその後でふれる順序をとる。

住居址群は、東側に緩く下る傾きをみせる丘陵頂面のやや南側崖線に寄った部分から検出された。時期は床面および埋土からの出土遺物や北東隅付近で切り合うHⅣ-4・5住居址を参考にすると、縄文時代前期前半期に位置づけられよう。

崖線に近接する斜面に位置しているため、南壁や東壁の大部分が消失しており、全体の形状や規模は明らかではないが、残存する壁や床面のひろがりなどから、この住居址群は南北に長軸をもつ楕円形～隅丸長方形を呈し、長軸最大径23.0m±・短軸最大径8.2m±を計る細長い範囲内に存在したと考えられる。

住居址群全体を被覆する埋土は上位から黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層の3層で構成されている。このうち東壁や西壁に寄って堆積している褐色土層は暗褐色土層によって切られる埋積状況を示している。このことは住居址群内で最終期に床面を共有して東西方向での縮少形態をとる建て替えがあったことを示すものであろう。

床面は全体に軟質な状況を呈している。床面全体においてははっきりした段差は認められないが、高度差から面的に3つの平滑な面に分けられ、高位面・中位面・低位面に区分できる。このうち、高位面は遺構群の北西隅付近に残っており、中位面に比べ約4cm高くなっている。高位面を除いた西壁際から壁溝cとの間は中位面で、地点によって異なるが低位面に比べて約7cm高くなっている。それ以外の壁溝cから東壁までの部分は低位面と捉えられる。低位面は高位面・中位面に比べて広い面積をもつ平滑な面となっているが、北縁と南縁で52cm±、東縁と西縁で6cm±のちがいを計り、全体としてみれば東西に平らでやや南に低くなる緩い傾きをみせる。なお、前回の調査で報告されたHⅣ-3住居址に伴う貼り床はこの低位面に相当するものである。床面のこのような3区分は、西壁付近から順に東に向かって低くなる状況を示しているが、これは住居址群の中であって新期の住居址群が古期の住居址群を削平した痕跡を示すもので、住居址群の推移に密接に関連するものと推定される。

住居址群が存在する範囲から検出されたピット群は総計318個を数える。これらのピット群をその規模や位置などからグルーピングを試み、検出された床面・壁・炉・壁溝・埋土の状況などを参考にして検討した結果、少数のものを除いて柱穴、壁柱穴(注2)、間仕切りに伴うピット、炉と関連性を有するピットなどのいずれかに所属する性格を有するものであることが判明

した。ここでは、あらかじめ、それぞれが群または対の関係をもって存在する、壁柱穴・間仕切り穴・炉と関連するピットについて触れ、柱穴については各住居址の記述の中で扱うことにする。

残存する壁に沿って検出されたピット群は一方では壁溝に沿った分布を示し、それらは配列上のまとまりをみせる。このような配列上の分布から、壁柱穴群と捉え、A～Iに細分できる。

壁柱穴群Aは、P₁₉₁（径24cm±・深さ34cm±）・P₂₀₃（径30cm±・深さ17cm±）・P₂₁₅（径18cm±・深さ15cm±）・P₂₄₂（径20cm±・深さ27cm±）・P₂₄₅（径12cm±・深さ27cm±）・P₂₄₆（径11cm±・深さ9cm±）・P₂₅₇（径15cm±・深さ14cm±）・P₂₅₈（径14cm±・深さ12cm±）・P₂₅₉（径34cm±・深さ18cm±）・P₂₆₁（径17cm±・深さ12cm±）・P₂₆₈（径12cm±・深さ17cm±）・P₂₇₇（径20cm±・深さ13cm±）・P₂₈₁（径10cm±・深さ6cm±）・P₂₈₂（径14cm±・深さ18cm±）・P₂₈₆（径18cm±・深さ10cm±）・P₂₈₇（径11cm±・深さ10cm±）・P₂₉₃（径12cm±・深さ6cm±）・P₂₉₅（径22cm±・深さ36cm±）・P₃₁₂（径13cm±・深さ16cm±）・P₃₁₃（径10cm±・深さ17cm±）・P₃₁₄（径11cm±・深さ10cm±）・P₃₁₅（径20cm±・深さ33cm±）・P₃₁₇（径20cm±・深さ36cm±）・P₃₁₈（径10cm±・深さ26cm±）など24個のピット群で構成され、他の壁柱群と比べて最も西壁に寄った分布状況を示している。

壁柱穴群Bは、P₁₇₇（径15cm±・深さ15cm±）・P₁₉₂（径20cm±・深さ14cm±）・P₁₉₅（径28cm±・深さ13cm±）・P₂₀₉（径18cm±・深さ16cm±）・P₂₁₆（径15cm±・深さ45cm±）・P₂₂₆（径13cm±・深さ不明）など6個のピット群で構成される。位置的には壁柱穴群Aよりもやや床面中軸線に寄る配列をみせる。

壁柱穴群Cは、P₁₇₀（径20cm±・深さ34cm±）・P₁₇₂（径17cm±・深さ26cm±）・P₁₇₅（径24cm±・深さ27cm±）・P₁₈₅（径17cm±・深さ21cm±）・P₁₉₃（径19cm±・深さ14cm±）・P₁₉₄（径17cm±・深さ17cm±）・P₂₁₂（径35cm±・深さ37cm±）・P₂₂₄（径12cm±・深さ31cm±）・P₂₂₇（径17cm±・深さ33cm±）・P₂₂₈（径15cm±・深さ不明）・P₂₄₁（径15cm±・深さ不明）・P₂₄₃（径24cm±・深さ21cm±）・P₂₄₇（径20cm±・深さ26cm±）・P₂₆₀（径13cm±・深さ48cm±）・P₂₆₂（径13cm±・深さ24cm±）・P₂₇₀（径10cm±・深さ10cm±）・P₂₇₁（径10cm±・深さ9cm±）・P₂₇₆（径33cm±・深さ61cm±）・P₂₉₅（径22cm±・深さ36cm±）・P₂₉₆（径17cm±・深さ40cm±）・P₂₉₇（径23cm±・深さ29cm±）など21個のピット群で構成される。位置的には西壁際に認められた壁柱穴群Aと壁柱穴群Bを挟んで床面中軸寄りに並行する配列をみせる。

壁柱穴群Dは、P₁₇₁（径16cm±・深さ4cm±）・P₁₇₃（径17cm±・深さ6cm±）・P₁₇₈（径24cm±・深さ29cm±）・P₁₈₃（径20cm±・深さ21cm±）・P₂₀₂（径40cm±・深さ22cm±）・P₂₂₁（径15cm±・深さ12cm±）・P₂₄₈（径16cm±・深さ40cm±）・P₂₆₄（径11cm±・深さ11cm±）・P₂₇₅（径14cm±・深さ20cm±）・P₂₇₈（径16cm±・深さ16cm±）・P₂₈₉（径16cm±・深さ28cm±）・P₂₉₈（径20cm±・

深さ49cm±) など12個のピット群で構成され、壁柱穴群Cよりもさらに床面中軸線寄りに点在する。

壁柱穴群Eは、P₂₁₇ (径10cm±・深さ14cm±)・P₂₁₉ (径18cm±・深さ21cm±)・P₂₂₂ (径18cm±・深さ29cm±)・P₂₂₃ (径15cm±・深さ14cm±)・P₂₄₉ (径13cm±・深さ46cm±)・P₂₆₃ (径15cm±・深さ53cm±)・P₂₆₅ (径23cm±・深さ11cm±)・P₂₇₃ (径13cm±・深さ54cm±)・P₂₉₀ (径17cm±・深さ27cm±) など9個のピット群で構成され、壁柱穴群Dのすぐ床面中央寄りに点在する在り方を示す。

壁柱穴群Fは、P₇₉ (径23cm±・深さ27cm±)・P₂₂₀ (径18cm±・深さ26cm±)・P₂₃₉ (径20cm±・深さ31cm±)・P₂₄₀ (径25cm±・深さ35cm±)・P₂₅₀ (径27cm±・深さ74cm±)・P₂₅₁ (径15cm±・深さ24cm±)・P₂₈₀ (径16cm±・深さ不明)・P₃₀₀ (径18cm±・深さ11cm±)・P₃₀₃ (径20cm±・深さ19cm±)・P₃₀₄ (径12cm±・深さ19cm±)・P₃₀₅ (径23cm±・深さ31cm±)・P₃₀₇ (径26cm±・深さ不明)・P₃₀₈ (径30cm±・深さ10cm±)・P₃₀₉ (径16cm±・深さ30cm±) など14個のピット群で構成され、西壁に沿って配列する壁柱穴群の中で最も床面中央寄りに位置する。

壁柱穴群Gは、P₈₄ (径25cm±・深さ18cm±)・P₉₄ (径40cm±・深さ13cm±)・P₁₀₂ (径33cm±・深さ49cm±)・P₁₀₇ (径17cm±・深さ45cm±)・P₁₁₄ (径18cm±・深さ不明)・P₁₂₃ (径30cm±・深さ不明)・P₁₂₇ (径15cm±・深さ22cm±)・P₁₃₉ (径22cm±・深さ21cm±)・P₁₄₈ (径14cm±・深さ7cm±)・P₁₅₁ (径15cm±・深さ不明) など10個のピット群で構成され、東壁に沿って認められる壁柱穴群の中で最も床面中央寄りに位置する。

壁柱穴群Hは、P₇₄ (径17cm±・深さ84cm±)・P₇₈ (径17cm±・深さ41cm±)・P₉₆ (径20cm±・深さ30cm±)・P₉₈ (径15cm±・深さ31cm±)・P₁₀₁ (径25cm±・深さ27cm±)・P₁₀₄ (径17cm±・深さ53cm±)・P₁₁₄ (径18cm±・深さ不明)・P₁₁₅ (径22cm±・深さ不明)・P₁₂₀ (径20cm±・深さ14cm±)・P₁₂₁ (径20cm±・深さ38cm±)・P₁₂₆ (径20cm±・深さ不明)・P₁₂₈ (径18cm±・深さ不明)・P₁₂₉ (径21cm±・深さ不明)・P₁₃₄ (径17cm±・深さ不明)・P₁₃₇ (径21cm±・深さ27cm±)・P₁₄₉ (径20cm±・深さ不明)・P₁₅₃ (径28cm±・深さ23cm±)・P₁₅₄ (径65cm±・深さ26cm±) など18個のピット群で構成される。位置的には壁柱穴群Gよりも東壁に寄ったあり方を示しており、床面北縁から南縁にかけて連続性をもって分布している。

壁柱穴群Iは、P₈₈ (径11cm±・深さ4cm±)・P₈₉ (径20cm±・深さ12cm±)・P₉₇ (径12cm±・深さ11cm±)・P₁₀₃ (径26cm±・深さ34cm±)・P₁₂₄ (径14cm±・深さ不明)・P₁₃₅ (径15cm±・深さ27cm±)・P₁₃₆ (径19cm±・深さ33cm±)・P₁₅₀ (径18cm±・深さ不明)・P₁₅₅ (径53cm±・深さ55cm±) など9個のピット群で構成され、床面で最も東側に寄って分布している。住居址群に伴う東壁は完全に検出されなかったが、位置的にこの壁柱穴群のすぐ東側外方に存在したのではないかと考えられる。

これらの壁柱穴群は、壁や壁溝とほぼ平行する連続性を持ち、床面の高位面から低位面にかけて分布している。したがって、床面区分や壁溝が建て替えのような変遷過程を示す痕跡と捉えられれば、この壁柱穴群についても同様のことが言え、推移と密接に関連するものと考えられる。壁柱穴群はおもに東西いずれかの壁に寄った在り方を示しているが、このことについても、住居址の重複がこの遺構内において主として東西に揺れる過程を示す資料となり得よう。

P₆₁ (径21cm±・深さ65cm±)・P₈₂ (径30cm±・深さ51cm±)・P₁₀₀ (径50cm±・深さ21cm±)・P₁₀₆ (径22cm±・深さ23cm±)・P₁₁₃ (径29cm±・深さ31cm±)・P₁₃₁ (径48cm±・深さ16cm±)・P₁₄₇ (径19cm±・深さ不明)・P₁₈₇ (径40cm±・深さ21cm±)・P₂₀₆ (径32cm±・深さ17cm±)・P₂₅₅ (径26cm±・深さ16cm±)・P₂₈₅ (径15cm±・深さ46cm±)・P₂₉₂ (径20cm±・深さ49cm±) など9個のピットはいずれも壁柱穴群よりも床面中央寄りに位置するが、P₂₉₂—P₂₈₅—P₈₂・P₆₁—P₁₀₀・P₆₁—P₁₀₆・P₂₅₅—P₁₁₃・P₂₀₆—P₁₃₁・P₁₈₇—P₁₄₇という対応関係においては床面中軸線と直交する位置関係を示す状況にあり、住居址群に伴う間仕切りの痕跡を残すピットと捉えられる。

また、P₉₀ (径17cm±・深さ20cm±)・P₁₀₅ (径10cm±・深さ10cm±)・P₁₄₁ (径20cm±・深さ5cm±)・P₁₄₃ (径14cm±・深さ5cm±)・P₁₄₄ (径17cm±・深さ不明)・P₁₄₅ (径25cm±・深さ不明)・P₁₈₆ (径13cm±・深さ6cm±)・P₁₈₉ (径20cm±・深さ10cm±)・P₂₅₆ (径26cm±・深さ16cm±)・P₂₈₃ (径15cm±・深さ45cm±)・P₂₈₄ (径18cm±・深さ51cm±) など11個のピットはそれぞれ炉の周辺から検出され、炉と関連する施設の痕跡を残すのではないかと考えられる。これらのピットと共伴する炉について近接する位置関係を推測すると、P₉₀・P₂₈₃・P₂₈₄ に対し3号炉、P₁₀₅・P₂₅₆ と10号炉、P₁₄₁・P₁₈₉ と22号炉、P₁₄₃・P₁₈₆ と23号炉、P₁₄₄・P₁₄₅ と24号炉の組み合わせを考えることができる。

以上、壁柱穴、間仕切り穴、炉と関連するピットなどの分類に従って述べてきたが、いずれの分類にも属さず位置的にも性格を捉えられないものも多数存在する。P₇₂ (径35cm±・床面低位面との比高49cm±)・P₇₃ (径25cm±・床面低位面との比高54cm±)・P₇₅ (径33cm±・床面低位面との比高43cm±)・P₁₆₉ (径31cm±・深さ27cm±)・P₁₉₀ (径36cm±・深さ11cm±)・P₂₀₅ (径17cm±・深さ11cm±) などのピットもそれに該当するが、このうち P₇₂・P₇₃・P₇₅ はその住居址群との切り合い関係にあるHIV-4住居址に共伴するものかもしれない。また、P₁₆₉・P₁₉₀・P₂₀₅ は木根による攪乱の痕跡を示すものと推定される。その他のピット群の性格はよくわからない。

残存する壁は、西壁と、北西隅に寄った部分だけ認められる北壁、そして南側崖線に寄って大半が消失してしまったと考えられる東壁の一部である。南壁は東壁と同様に南側崖線に続く緩斜面にあって消失したのと考えられる。また、北東隅付近の壁については前年の調査上の手

ちがいから不明なものとなっている。残存部における壁の立ちあがりは急で、西壁付近ではほぼまっすぐに近い状況を呈している。壁高は、北東隅付近45cm±・北壁57cm±・北西隅付近60cm±・西壁北半61cm±・西壁中央部56cm±・西壁南半37cm±・東壁12cm±を計る。

壁溝は断続的に4条検出された。このうち3条は西壁に沿って並行して認められ(a・b・c)、他の1条(d)は東壁沿いに認められる。壁溝aは、ほぼ西壁際を平均幅24cm±・平均深度10cm±の規模で断続的にたどる状況にあり、北西隅付近の床面(高位面)では認められない。壁溝bは平均幅15cm±・平均深度8cm±の規模をもって、壁溝aとおよそ半分程度の長さで並行するあり方を示す。壁溝cは壁溝bよりも床面中央寄りの部分から検出され、平均幅12cm±・平均深度8cm±の規模をもち、壁溝bよりやや長い状況にある。壁溝dは東壁に相当すると考えられる外郭線に沿って検出され、平均幅14cm±・平均深度14cm±の規模をもち、断続的に巡る状況を呈する。このように壁溝は、西壁沿いに分布が偏り、壁柱穴群の場合と同じような傾向を示す。壁柱穴群とその分布を比較してみると、壁溝aは壁柱穴群Aと、壁溝cは壁柱穴群Fと同位置的なあり方を捉えることができる。従って、壁柱穴群と同様に床面区分と関連して、4条の分布は住居址群の推移を物語る痕跡と考えられ、遺構内において東西方向に変化のあった資料となり得よう。

炉は全部で28基検出されており、すべて地床炉の形態をとる。検出状況から全体の配置を捉えると、これらの炉の中で1～4号炉・9～13号炉・16号炉・17号炉・20～25号炉・27号炉・28号炉が遺構の長軸上あるいは床面の中軸線上に位置するのに対し、5～8号炉・14号炉・15号炉・18号炉・19号炉・26号炉は中軸線よりも東西いずれかの壁に寄った在り方を示しており、前者を「定位置地床炉」、後者を「非定位置地床炉」(高橋;1980)と捉えることができる。

1号炉は85cm±×70cm±の範囲に現地性焼土が形成されており、床面より2～4cm±高いレベルに使用面をもつ。使用面はガリガリに堅く、焼土の周辺に炭化物の散布が認められる。2号炉は南側でHⅢ-54ピットに切られる状況で検出された。現地性焼土は65cm±×20cm±の範囲に形成されている。下位の火山灰層は床面と同じレベルの使用面から4cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。3号炉は、床面と同じレベルに使用面をもち、80cm±×65cm±の範囲に現地性焼土の広がりを認める。下位の火山灰層は床面から4cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。

4号炉は、床面と同じレベルに使用面をもち、75cm±×60cm±の範囲に現地性焼土が形成されている。下位の火山灰層は3cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。5号炉は、床面と同じレベルに使用面をもち、45cm±×20cm±の範囲に炭化物を多く含む現地性焼土の分布がみられる。下位の火山灰層は2cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。6号炉は中央部付近からP₁₀によって切られた残存状況を示している。現地性焼土は、環状に10cm±

の幅をもって残存している。使用面は床面とほぼ同じ面にある。下位の火山灰層は深さ2cm±まで火熱による赤色変化をうけている。

7号炉は床面と同じレベルに使用面をもち、32cm±×30cm±の範囲に現地性焼土の形成がみられる。下位の火山灰層は3cm±の深さまで火熱による赤色変化を被っている。8号炉は、中央部で床面より2cm±低い。やや凹んだ使用面をもち、55cm±×45cm±の範囲に現地性焼土が形成されている。下位の火山灰層は10cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。9号炉は床面と同じレベルに使用面をもち、45cm±×33cm±の範囲で現地性焼土が形成されている。下位の火山灰層は3cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。断面の観察により、この炉は10号炉に切られる在り方を示しており、10号炉よりも古期の炉と考えられる。10号炉は床面と同じレベルに使用面をもち、50cm±×43cm±の範囲に現地性焼土が形成されている。下位の火山灰層は5cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。断面の観察結果から、この炉は9号炉を切るあり方を示しており、9号炉よりも新期の炉と思われる。

11号炉は床面とほぼ同じレベルに使用面をもち、57cm±×50cm±の範囲に現地性焼土の分布がみられる。下位の火山灰層は、4cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。12号炉は床面と同じレベルに使用面をもち、70cm±×48cm±の範囲に現地性焼土が形成されている。下位の火山灰層は2cm±の深さまで火熱による赤色変化を被っている。13号炉では、48cm±×35cm±の範囲で現地性焼土の形成が認められ、使用面は床面と同じレベルに有する。下位の火山灰層は、4cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。14号炉では24cm±×17cm±の範囲で現地性焼土が確認されたが、調査上の手ちがいから削平され、使用面および火熱による下位の火山灰の赤色変化は観察できなかった。

15号炉は床面よりも2cm高いレベルに使用面をもち、44cm±×32cm±の範囲に現地性焼土が形成されている。下位の火山灰層は5cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。16号炉は新旧2期の使用面をもつ。古期の使用面は床面から僅かに凹む状況を呈し、新期の使用面や焼土を載せるあり方を示している。古期の使用面に伴う現地性焼土は、75cm±×65cm±の範囲に形成されている。下位の火山灰層は9cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。また、新期の使用面は床面よりも2cm±高いレベルにあり、34cm±×22cm±の範囲にわたる現地性焼土の広がりをもって古期の使用面に載る状況を呈する。

17号炉は床面と同じレベルに使用面をもち、78cm±×73cm±の範囲で多量の炭化物を混じえて現地性焼土の形成がみられる。下位の火山灰層は、8cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。18号炉は床面よりも3cm±高いレベルに使用面をもち、53cm±×45cm±の範囲で現地性焼土が形成されている。下位の火山灰層に対し火熱による赤色変化は13cm±の深さまで及んでいる。19号炉は床面よりも中央部で3cm±低い凹みに使用面をもち、現地性焼土が60

cm±×55cm±の範囲に分布している。部分的に、木根によるとみられる攪乱をうけているが、5 cm±の深さまで火熱による赤色変化を認めることができる。20号炉は床面と同じレベルに使用面をもち、45cm±×35cm±を計る範囲で現地性焼土の形成がみられる。火熱による赤色変化は、4 cm±の深さまで達している。

21号炉は床面とほぼ同じレベルに使用面をもつ。現地性焼土は径70cm±の範囲に形成されており、上部はガリガリに堅くなっている。下位の火山灰層は6 cm±の深さまで火熱による赤色変化を被っている。22号炉も床面とほぼ同じレベルに使用面をもつが、近接する位置関係にある21号炉に比べ1 cm±～2 cm±低いものとなっている。現在性焼土は70cm±×50cm±の範囲で不整な平面形を呈して分布している。下位の火山灰層は5 cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。21号炉と22号炉は極めて近接した位置関係を示していることから、両者の間には新旧関係が存在すると推定されたが、断面の観察では捉えられなかった。

23号炉は床面と同じレベルに使用面をもち、52cm±×50cm±の範囲に現地性焼土が形成されている。下位の火山灰層は4 cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。24号炉は南縁で25号炉に切られる状況を示しており、25号炉より古期の炉と捉えられる。現地性焼土は68 cm±×60cm±の範囲に形成され、床面よりも2～3 cm±高いレベルに使用面をもつ。火熱による赤色変化は8 cm±の深さまで達している。また、下底部付近から P₁₄₄・P₁₄₅ の2つのピットが検出されており、これらのピットはこの炉が共伴する住居址よりも古期の住居址に伴うものか、この炉に伴う施設の痕跡を残すものか明らかではないが、位置関係から後者の可能性が高いと思われる。25号炉は北縁で24号炉を切る在り方を示しており、24号炉より新期の炉と捉えられる。この炉は床面よりも4 cm±高いレベルに使用面をもつが、断面の観察によれば、現地性焼土は24号炉を切る際に敷設されたと思われる黒褐色土の中央に形成されており、火熱による赤色変化は深さ7 cm±まで及んでいる。現地性焼土は70cm±×53cm±の範囲に形成されている。

26号炉は、床面に敷設されたと考えられる褐色土上部に形成され、床面から9 cm±高いレベルに使用面をもつ。現地性焼土は45cm±×30cm±の範囲に分布している。火熱による赤色変化は6 cm±の深さに及んでいる。27号炉は床面と同じレベルに使用面をもち、70cm±×63cm±の範囲で現地性焼土が形成されている。下位の火山灰層は5 cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。28号炉は、床面と同じレベルの使用面をもち、77cm±×48cm±の範囲にわたって多量の炭化物を含む黒褐色土と僅かに焼土が分布している。炉の大半が炭化物を含む黒褐色土で構成され、汚れた状況を呈している。火熱による赤色変化が2 cm±の深さまで及んでいる。

床面からの出土遺物には縄文時代前期前半期とみられる土器片のほかに、剥片類と台石状の平坦面をもつ亜角礫などがある。これに対し、埋土からは多量の縄文時代前期前半期の土器片や少量であるが縄文時代前期後半期の土器片のほかに、石鏃・石匙・石筥・磨石・熔岩製砥石・

半円状扁平打製石器などの石器や石核・剝片・石皿の半欠品とみられるものなどが出土している。

遺構内で群を構成する個々の住居址間の重複状況は後で述べるとして、前年度行われた調査結果も含めて位置的にこの住居址と切り合うと考えられる遺構は、HⅢ-11住居址・HⅣ-4住居址・HⅣ-4x住居址・HⅢ-51・52・54ピット・HⅢ-301・302溝址群などである。

HⅢ-11住居址はこの住居址群の西壁に切られており、この住居址群よりも古期の住居址と考えられる。HⅣ-4住居址はこの住居址群の北東隅付近で切られる状況を呈し、やはりこの住居址群よりも古期の段階に位置づけられよう。また、HⅣ-4x住居址もHⅣ-4住居址によって切られ、上部にはこの住居址群に伴う貼り床を載せる在り方を示しているところから、さらに古期の住居址と言えよう。HⅢ-51・52・54ピットはいずれもこの住居址群に伴う床面を切る状況で検出されているところから、この住居址群よりも新期の遺構と捉えられる。この住居址群の南側から南側崖線にかけて検出されたHⅢ-301・302溝址との新旧関係については、この住居址群に伴う南壁の存在が確認されないため明らかではないが、位置的に極めて接近する在り方を示すことや、溝址群の大部分が縄文時代前期前半期の土器片を多く含む基本層序Ⅱ層の下位から検出された状況から判断して、むしろこの住居址群と共伴する可能性を指摘できる。以下、それぞれの住居址について記載する。

HⅢ-12 a 住居址 (図版 34・35abc・36a・122cdefgh・123abcdefgh・124abc; 写真図版 46b・47・48・49ab・158cde・159abcd・160abc・161abc・162abc・163abc・164ab)

この住居址は柱穴配置から推定して、隅丸長方形～楕円形を呈するものと考えられる。床面は住居址群全体の床面区分で北西隅付近に残存する高位面と捉えられる。床面は、HⅢ-12 b～d 住居址と共有し、その大部分はHⅢ-12 e 住居址構築に際し、削平をうけたものと考えられる。柱穴は、P₁ (径47cm±・深さ30cm±)・P₂ (径15cm±・最寄りの住居址群床面からの深さ63cm±)・P₈ (径16cm±・深さ41cm±)・P₁₂ (径30cm±・深さ49cm±)・P₁₈ (径15cm±・深さ40cm±)・P₂₄ (径34cm±・深さ62cm±)・P₅₉ (径18cm±・深さ34cm±)・P₆₃ (径22cm±・深さ45cm±)・P₆₈ (径47cm±・深さ49cm±)・P₁₄₂ (径25cm±・深さ50cm±)・P₂₀₄ (径30cm±・深さ不明)・P₂₂₅ (径17cm±・深さ36cm±) など12個のピット群によって構成される。これらの柱穴は、P₁-P₂・P₆₈-P₈・P₆₃-P₁₂・P₅₉-P₁₈・P₂₂₅-P₂₄・P₂₀₄-P₁₄₂ とそれぞれ対になる位置関係を示している。これらの柱穴のうち、P₁・P₃・P₈・P₆₈ はHⅢ-12 b 住居址と、P₁₂・P₆₃ はHⅢ-12 b～d 住居址と、P₁₈・P₂₄・P₅₉・P₁₄₂・P₂₀₄・P₂₂₅ はHⅢ-12 c 住居址と共有関係にある。

炉は床面同様、HⅢ-12 e 住居址によって切られた結果、消失したのと考えられる。柱穴配置と位置的に適合することから、付属施設として壁柱穴群A・H、間仕切り穴P₃₀₀-P₃₀₂-P₈₀ が共伴したのではないかと推定される。

この住居址はHⅢ-12住居址群において最も古い段階に位置すると考えられ、床面を共有し

て縮少形態をとるHⅢ-12b住居址に先行する時期の住居址であると考えられる。

HⅢ-12b住居址 (図版 34・35abc・36a・122cdefgh・123abcdefg・124abc ; 写真図版 46b・47・48・49ab・158cde・159abcd・160abc・161abc・162abc・163abc・164ab)

柱穴配置から、この住居址は隅丸長方形～楕円形を呈するものと考えられる。床面はHⅢ-12a・c・d住居址と共有関係にある高位面と捉えられ、HⅢ-12a住居址床面の南側の一部を残して再利用する縮少形態を示す。柱穴は、P₁ (前掲)・P₃ (前掲)・P₈ (前掲)・P₁₂ (前掲)・P₁₉ (径52cm±・深さ35cm±)・P₅₀ (径30cm±・深さ48cm±)・P₅₆ (径30cm±・深さ42cm±)・P₆₃ (前掲)・P₆₈ (前掲)・P₂₃₃ (径30cm±・深さ43cm±) など10個のピット群で構成され、それぞれP₁-P₃・P₆₈-P₈・P₆₃-P₁₂・P₅₆-P₁₉・P₅₀-P₂₃₃ と対になる配置を示す。これらの柱穴と他の住居址に伴う住居址との共有関係をみると、P₁・P₃・P₈・P₆₈ はHⅢ-12a住居址と、P₆₃ はHⅢ-12a・c・d住居址と、P₁₉・P₅₀・P₅₆・P₂₃₃ はHⅢ-12d住居址と、P₁₂ はHⅢ-12a・c・d・h・j住居址と共有する関係にある。

炉はHⅢ-12a住居址の場合と同様に、HⅢ-12e住居址構築に伴って消失したのと考えられる。柱穴配置と位置的に適合することから、付属施設として壁柱穴群A・H、間仕切り穴P₃₀₀-P₃₀₂-P₈₀ が共伴すると思われ、これらはHⅢ-12a住居址と共有する関係にあると推定される。この住居址は、柱穴配置および床面のあり方からHⅢ-12a住居址の縮少形態と認められ、さらにHⅢ-12c住居址を載せる重複関係を示すものと考えられる。

HⅢ-12c住居址 (図版 34・35abc・36a・122cdefgh・123abcdefg・124abc ; 写真図版 46b・47・48・49ab・158cde・159abcd・160abc・161abc・162abc・163abc・164ab)

この住居址は、柱穴を結ぶ外郭線から推定して楕円形～長円形を呈するものと考えられる。床面はHⅢ-12a・b・d住居址と共有関係にあり、住居址群床面における高位面に相当する。

柱穴は、P₅ (径23cm±・最寄りの住居址群床面からの深さ47cm±)・P₇ (径51cm±・深さ68cm±)・P₁₂ (前掲)・P₁₈ (前掲)・P₂₄ (前掲)・P₅₉ (前掲)・P₆₃ (前掲)・P₇₁ (径40cm±・深さ61cm±)・P₁₄₂ (前掲)・P₂₀₄ (前掲)・P₂₂₅ (前掲)・P₃₁₁ (径22cm±・深さ43cm±) など12個のピット群で構成され、それぞれP₇₁-P₅・P₃₁₁-P₇・P₆₃-P₁₂・P₅₉-P₁₈・P₂₂₅-P₂₄・P₂₀₄-P₁₄₂ と対になる位置関係を示している。これらの柱穴と他の住居址に伴う柱穴との共有関係をみれば、P₅・P₃₁₁ はHⅢ-12d住居址と、P₁₈・P₂₄・P₅₉・P₁₄₂・P₂₀₄・P₂₂₅ はHⅢ-12a住居址と、P₇ はHⅢ-12d・k・l～o住居址と、P₁₂ はHⅢ-12a・b・d・h・j住居址と、さらにP₆₃ はHⅢ-12a・b・d住居址と共有する関係にある。

炉は、床面と同様にHⅢ-12e住居址との切り合いのため削平され消失したと捉えられるが、一方で、住居址群全体の残存状況において炉が中軸線寄りに残存する傾向からみれば、非定位

置地床炉と考えられる7号炉・8号炉・14号炉・15号炉・18号炉・19号炉は他の住居址に比べ西に寄る在り方を示すこの住居址およびHⅢ-12d住居址の中軸線に近接する配置から、これらの住居址に共伴し、HⅢ-12e住居址による削平をうけても痕跡的に残存した炉とも推定される。

住居址群全体の残存状況とこの住居址に伴う柱穴を結ぶ輪郭線との位置関係から、壁溝aと壁柱穴群A・Hが共伴関係にあると考えられ、壁柱穴群A・HはHⅢ-12a・b・d住居址と共有する関係にあると思われる。

この住居址は、HⅢ-12b住居址に伴う床面を再利用してこれに載り、さらに床面を共有して縮小形態をとると見られるHⅢ-12d住居址を載せる重複過程にあると考えられる。

HⅢ-12d住居址(図版34・35abc・36a・122cdefgh・123abcdefg・124abc;写真図版46b・47・48・49ab・158cde・159abcd・160abc・161abc・162abc・163abc・164ab)

この住居址は、柱穴を結ぶ輪郭から推定して楕円形を呈すると考えられる。柱穴は、P₅(前掲)・P₇(前掲)・P₁₂(前掲)・P₁₉(前掲)・P₅₀(前掲)・P₅₆(前掲)・P₆₃(前掲)・P₇₀(径29cm±・深さ80cm±)・P₂₃₃(前掲)・P₃₁₁(前掲)など10個のピット群で構成され、それぞれP₇₀-P₅・P₃₁₁-P₇・P₆₃-P₁₂・P₅₀-P₁₉・P₅₀-P₂₃₃と対になる配置を示す。他の住居址に伴う柱穴との共有関係をみれば、P₅・P₇・P₃₁₁はHⅢ-12c住居址と、P₁₂はHⅢ-12a・b・c・h・j住居址と、P₇₀はHⅢ-12e・f住居址と、さらにP₂₃₃はHⅢ-12b住居址と共有する状況にある。

この住居址は住居址群全体の床面区分や柱穴配置から、HⅢ-12a・b・c住居址と共有する関係にある高位面に床面をもち、HⅢ-12c住居址の北半部に寄った縮小形態を呈する住居址と考えられる。また、床面はHⅢ-12a・b・c住居址同様、HⅢ-12e住居址によって切られる関係にあり、削平を受けたと考えられる。炉は、このような床面の削平に伴って消失した可能性が高いが、HⅢ-12c住居址と同じように位置関係から、7号炉・8号炉・14号炉・15号炉・18号炉・19号炉によって構成されたのではないかと推定される。

付属施設として、住居址群全体の残存状況と当住居址の柱穴を結ぶ輪郭の比較から、壁溝aおよび壁柱穴群A・Hが、この住居址と共伴するものと考えられ、これらは重複過程において先行するHⅢ-12a～c住居址と共有する関係にあると推定される。

この住居址は同じ床面上に存在する柱穴配置の対比からHⅢ-12c住居址の縮小形態をとる住居址と考えられ、HⅢ-12e住居址によって切られる重複関係にあると考えられる。

HⅢ-12e住居址(図版34・35abc・36a・122cdefgh・123abcdefg・124abc;写真図版46b・47・48・49ab・158cde・159abcd・160abc・161abc・162abc・163abc・164ab)

この住居址は、柱穴を結ぶ輪郭線から推定して隅丸長方形に近い形状を呈すると考えられる。床面は住居址群の床面区分における中位面と捉えられ、HⅢ-12a～d住居址が共有する関係

にあった高位面を削平して形成されたものと思われる。また、この床面はHⅢ—12 f～e・g住居址と共有する関係にあると思われる。

柱穴は、P₆（径42cm±・最寄りの住居址群床面からの深さ54cm±）・P₉（径28cm±・深さ78cm±）・P₁₄（径56cm±・深さ97cm±）・P₂₁（径25cm±・深さ97cm±）・P₂₆（径38cm±・深さ87cm±）・P₃₀（径40cm±・深さ92cm±）・P₃₈（径55cm±・深さ80cm±）・P₄₆（径55cm±・深さ86cm±）・P₅₃（径25cm±・深さ101cm±）・P₆₀（径40cm±・深さ93cm±）・P₆₆（径30cm±・深さ78cm±）・P₇₀（前掲）など12個のピット群で構成され、それぞれ P₇₀—P₆・P₆₆—P₉・P₆₀—P₁₄・P₅₃—P₂₁・P₄₆—P₂₆・P₃₉—P₃₀ と対になる配置を示している。これらの柱穴と他の住居址に伴う柱穴との共有関係についてみれば、P₆ はHⅢ—12 f・g住居址と、P₉ はHⅢ—12 f・g・j住居址と、P₁₄ はHⅢ—12 f・g・m住居址と、P₃₉ はHⅢ—12 f・g・n住居址と、P₄₆ はHⅢ—12 f・g・k・m・n住居址と、P₅₃・P₆₀ はHⅢ—12 f・g・m・n住居址と共有関係にある。さらにP₆₆ はHⅢ—12 f・h・n住居址と、P₇₀ はHⅢ—12 f・n住居址と共有する関係をもつ。

この住居址に伴う壁溝および壁柱穴群の存在について、住居址群全体の検出状況と柱穴配置との位置関係やHⅢ—12 a～d住居址までの推移を参考にすると、壁溝a・d、壁柱穴群C・Iが共伴関係をもつのではないかと推定される。そして、群を構成する各住居址の変遷過程の類推から、壁溝aはHⅢ—12 b～d・f・g住居址と、壁溝d・壁柱穴群C・IはHⅢ—12 f・g住居址と共有関係にあると考えられる。

炉は柱穴配置との位置関係から、基本的には1号炉・4号炉・11号炉・17号炉・22号炉など5基から成ると考えられる。これらの炉はいずれも床面の中軸線付近にみられるところから、定位置地床炉と思われるが、床面の規模から5号炉・6号炉も非定位置地床炉として共伴したとも捉えられ、この住居址の床面を再利用する重複関係にあると考えられるHⅢ—12 f・g住居址と共有関係にあるのではないかと推定される。この住居址に伴う定位置地床炉と他の住居址に伴う炉との共有関係について位置関係からみれば、1号炉はHⅢ—12 f・g住居址と、4号炉はHⅢ—12 f・g・m・n住居址と、11号炉はHⅢ—12 f・g・n住居址と、17号炉はHⅢ—12 f～m住居址と、さらに22号炉はHⅢ—12 f・g・j・k・m住居址と共有する関係にあると考えられる。

この住居址に伴う付属施設として、P₂₉₂—P₂₈₅—P₈₂・P₆₁—P₁₃が間仕切りの痕跡を残すピットと考えられる。これらのピットが間仕切りの痕跡を示すと捉えられる住居址として、この住居址のほかにHⅢ—12 f・g・m住居址が考えられる。

この住居址は住居址群の中であって全体の推移から、HⅢ—12 d住居址を切り、HⅢ—12 f住居址によって床面を再利用される重複関係を示すと考えられる。

HⅢ—12 f住居址（図版 34・35abc・36a・122cdefgh・123abcdefg・124abc；写真図版 46b・

47・48・49ab・158cde・159abcd・160abc・161abc・162abc・163abc・164ab)

この住居址は柱穴配置から推定して、隅丸長方形～楕円形の形状を呈すると考えられる。床面は、全体の残存状況における中位面と捉えられ、HⅢ-12e住居址の再利用形態をとり、さらにHⅢ-12g・h～l住居址とも共有関係にある。柱穴配置によって区画された床面を平面的にHⅢ-12e住居址と比べると、北半で共有形態を示すが、長軸に沿って伸張された形跡を示しているところから、この住居址はHⅢ-12e住居址の拡張形態を示すものと捉えられる。このような床面規模に限ってみた場合、HⅢ-12住居址群において最も平面的な広がりをもつ住居址と考えられる。

柱穴は、P₆（前掲）・P₉（前掲）・P₁₄（前掲）・P₂₀（径25cm±・深さ108cm±）・P₂₅（径25cm±・深さ68cm±）・P₂₉（径41cm±・深さ28cm±）・P₃₃（径50cm±・深さ33cm±）・P₃₄（径50cm±・深さ71cm±）・P₃₉（前掲）・P₄₆（前掲）・P₅₃（前掲）・P₆₀（前掲）・P₆₆（前掲）・P₇₀（前掲）など14個のピット群で構成され、それぞれP₇₀—P₆・P₆₆—P₉・P₆₀—P₁₄・P₅₃—P₂₀・P₄₆—P₂₅・P₃₉—P₂₉・P₃₃—P₃₄と対になる配置を示す。これらの柱穴と他の住居址に伴う柱穴との共有関係についてみれば、P₆はHⅢ-12e・g住居址と、P₉はHⅢ-12e・g・j住居址と、P₁₄はHⅢ-12e・g・m住居址と、P₂₀はHⅢ-12e・m住居址と、P₂₅がHⅢ-12g～m住居址と、P₂₉がHⅢ-12g・m住居址と共有する。また、P₃₃・P₃₄がHⅢ-12g・l・n・o住居址と、P₃₉・P₆₀がHⅢ-12e・g・n住居址と、P₄₆がHⅢ-12e・g・k・m・n住居址と、P₅₃・P₆₀がHⅢ-12e・g・m・n住居址と、さらにP₆₆がHⅢ-12e・h・n住居址と共有する関係にある。

壁溝および壁柱穴群の共伴関係についてみると、全体の推移および位置関係から、壁溝a・dおよび壁柱穴群C・Iが共伴するものと考えられる。そして、これらの中で、壁溝aはHⅢ-12a～e・g住居址と壁溝dおよび壁柱穴群C・IはHⅢ-12e・g住居址とそれぞれ共有する関係をもつ。

柱穴配置や炉の配列における位置関係から推定して、定位置地床炉は1号炉・4号炉・11号炉・17号炉・22号炉・28号炉の6基で構成されると思われる。住居址そのものがHⅢ-12e住居址の拡張形態ととらえられるところから、これらの炉のうち28号炉を除いた5基の炉はそのまま再利用されたのではないかと考えられる。6基の炉と他の住居址・炉を位置的適合性からみれば、1号炉はHⅢ-12e・g・m～o住居址と、4号炉はHⅢ-12e・g・m・n住居址と、11号炉はHⅢ-12e・g・n住居址と、17号炉はHⅢ-12e・g～m住居址と、22号炉はHⅢ-12e・g・h・j・k・m住居址と、さらに28号炉はHⅢ-12g・l・n住居址と、それぞれ共有関係にある。また、5号炉と6号炉はHⅢ-12e・g住居址と同様に、床面規模から言って非定位置地床炉として共伴するものかもしれない。

付属施設としては、HⅢ-12e・g住居址と共有関係をもって、P₂₉₂—P₂₈₅—P₈₂が間仕切り

の痕跡を残すピットと考えられる。

この住居址は住居址群全体の中で、中位面を床面として共有しあう段階に位置づけられ、HⅢ-12 e 住居址に後続して拡張形態をとり、さらにはHⅢ-12 g 住居址によって若干の縮小形態をとられていく重複過程にある住居址と考えられる。

HⅢ-12 g 住居址 (図版 34・35abc・36a・122cdefgh・123abcdefg・124abc; 写真図版 46b・47・48・49ab・158cde・159abcd・160abc・161abc・162abc・163abc・164ab)

この住居址に伴う柱穴が、HⅢ-12 f 住居址と近似した配置を示すところから、形状も同様に隅丸長方形～楕円形を示すものと思われる。また、同位置的な在り方を示しているところから、床面もHⅢ-12 f 住居址の再利用形態をとるものであろう。

柱穴は、P₆ (前掲)・P₉ (前掲)・P₁₄ (前掲)・P₂₂ (径45cm±・深さ93cm±)・P₂₅ (前掲)・P₂₉ (前掲)・P₃₃ (前掲)・P₃₄ (前掲)・P₃₉ (前掲)・P₄₆ (前掲)・P₅₃ (前掲)・P₆₀ (前掲)・P₆₇ (径40cm±・深さ76cm±)・P₇₁(前掲)などの14個のピット群で構成され、HⅢ-12 f 住居址とひじょうによく似た構成を示している。それぞれの柱穴は、P₇₁—P₆・P₆₇—P₉・P₆₀—P₁₄・P₅₃—P₂₂・P₄₆—P₂₅・P₃₉—P₂₉・P₃₄—P₃₃ と対になる配置を示している。他の住居址に共伴する柱穴との共有関係についてみれば、P₆ はHⅢ-12 e・f 住居址と、P₉ はHⅢ-12 e・f・j 住居址と、P₁₄ はHⅢ-12 e・f・m 住居址と、P₂₂ はHⅢ-12 h～k 住居址と、P₂₅ はHⅢ-12 f・h～m 住居址と、そしてP₂₉ はHⅢ-12 f・m 住居址と共有する関係にある。また、P₃₃・P₃₄ はHⅢ-12 f・l・n・o 住居址と、P₃₉ はHⅢ-12 e・f・n 住居址と、P₄₆・P₆₀ はHⅢ-12 e・f・k・m・n 住居址と、P₅₃ はHⅢ-12 e・f・m・n 住居址と共有関係をもつ。さらに、P₆₇ はHⅢ-12 k・m・o 住居址と、P₇₁はHⅢ-12 c・g・m・o 住居址と同様の関係にある。

壁溝および壁柱穴群の共伴関係についても、HⅢ-12 f 住居址同様、壁溝 a・d と壁柱穴群 C・I が併存するものと捉えられよう。したがって、壁溝 a はHⅢ-12 a～f 住居址と、壁溝 d および壁柱穴群 C・I はHⅢ-12 e・f 住居址と共有関係にあると考えられる。

炉に関しても、床面・柱穴・壁溝・壁柱穴群のあり方と同様に、HⅢ-12 f 住居址を構成した1号炉・4号炉・11号炉・17号炉・22号炉・28号炉の6基の炉を定位置地床炉として保有したと考えられる。このような状況から、1号炉はHⅢ-12 e・f・m～o 住居址と、4号炉はHⅢ-12 e・f・m・n 住居址と、11号炉はHⅢ-12 e・f・n 住居址と、17号炉はHⅢ-12 e・f・h～m 住居址と、22号炉はHⅢ-12 e・f・h・j・k・m 住居址と、さらに28号炉はHⅢ-12 f・l・n 住居址と共有関係にあると考えられる。また、定位置的配置をとらない5号炉・6号炉もHⅢ-12 e・f 住居址の場合と同じように、床面規模からいって、非定位置地床炉として共伴関係にあったかもしれない。

P₂₉₂—P₂₈₅—P₈₂ は床面や柱穴配置の近似性から、HⅢ-12 e・f 住居址と共有関係にあつて

間仕切りの痕跡を残すものと捉えられる。

この住居址は、床面北縁でややせばまるが、柱穴配置・床面規模などからHⅢ-12 f 住居址のあり方とよく似た存在と考えられ、HⅢ-12 f 住居址に後続して建て替えられた住居址と考えられる。さらに、この住居址は住居址群全体の推移から判断して、HⅢ-12 h 住居址によって切られる重複過程にあると推察される。

HⅢ-12 h 住居址 (図版 34・35abc・36a・122cdefgh・123abcdefg・124abc; 写真図版 46b・47・48・49ab・158cde・159abcd・160abc・161abc・162abc・163abc・164ab)

この住居址は、柱穴配置から推定して隅丸長方形を呈すると思われる。床面規模についても柱穴配置から、先行するHⅢ-12 g 住居址よりは長軸方向にせばまった状況を示している。床面は、住居址群全体における区分の中位面ととらえられ、HⅢ-12 e～g・i～l 住居址と共有する関係にあると思われる。

柱穴は、P₁₂ (前掲)・P₁₆ (径40cm±・深さ73cm±)・P₂₂ (前掲)・P₂₅ (前掲)・P₂₈ (径30cm±・深さ不明)・P₃₁ (径54cm±・深さ68cm±)・P₃₇ (径66cm±・深さ76cm±)・P₄₂ (径30cm±・深さ78cm±)・P₅₂ (径60cm±・深さ82cm±)・P₅₈ (径27cm±・深さ84cm±)・P₆₆ (前掲)・P₈₃ (径18cm±・深さ56cm±)・P₂₁₄ (前掲)・P₃₂₀ (径25cm±・深さ61cm±)で構成され、それぞれがP₆₆—P₈₃—P₃₂₀—P₁₂—P₅₈—P₁₆—P₅₂—P₂₂—P₂₁₄—P₂₅—P₄₂—P₂₈—P₃₇—P₃₁ と結び合うジグザグ配置を示す。これらの柱穴と他の住居址を構成する柱穴とを比較すると、P₁₂ がHⅢ-12 a～d・j 住居址と、P₁₆ がHⅢ-12 i・j 住居址と、P₂₂ がHⅢ-12 g・i～k 住居址と、P₂₅ がHⅢ-12 f・g・i～m 住居址と、P₂₈ がHⅢ-12 j・k・l 住居址と、P₃₁ がHⅢ-12 j・k 住居址と共有関係にある。このほか、P₃₇ がHⅢ-12 l 住居址と、P₄₂ がHⅢ-12 o 住居址と、P₅₂・P₅₈ がHⅢ-12 i・k 住居址と、P₆₆ はHⅢ-12 e・f 住居址と、P₂₁₄ はHⅢ-12 i 住居址と、さらに P₃₂₀ はHⅢ-12 k 住居址と共有関係にある。

この住居址に共伴する壁溝および壁柱穴群として、全体の残存状況とこの住居址に伴う床面や柱穴配置の比較から、壁溝bと壁柱穴群D・Gが考えられる。壁溝bと壁柱穴群Dは、この住居址に後続するHⅢ-12 i・j 住居址と共有関係にあると思われる。また、壁柱穴群Gはこの住居址に後続する新期のHⅢ-12 i～o 住居址まで再利用形態をとられ、併存していったものと考えられる。

定位置地床炉が柱穴によって区画される床面において、ある程度の規則性をもった配置を示す傾向からとらえて、この住居址の炉は3号炉・10号炉・13号炉・17号炉・22号炉・24号炉など6基によって構成されることが考えられる。これらの炉と他の住居址に伴う炉との共有関係についてみると、3号炉はHⅢ-12 i～l・o 住居址と、10号炉はHⅢ-12 j・l・o 住居址と、13号炉はHⅢ-12 j・l 住居址と、17号炉はHⅢ-12 e～g・i～m 住居址と、22号炉はHⅢ

—12 e～g・j・k・m住居址と、さらに24号炉はHⅢ—12 l住居址と共有する関係にあると思われる。

この住居址は、床面の共有関係および柱穴配置の比較などから、住居址群の推移においてHⅢ—12 g住居址に後続し、HⅢ—12 i住居址に先行する段階に位置づけられる。

HⅢ—12 i住居址（図版 34・35abc・36a・122cdefgh・123abcdefg・124abc；写真図版 46b・47・48・49ab・158cde・159abcd・160abc・161abc・162abc・163abc・164ab）

この住居址は、柱穴配置から推定すると楕円形の形状を呈すると考えられる。床面は、住居址群全体の残存状況における中位面ととらえられ、HⅢ—12 e～h・j～l住居址と共有関係にあると考えられる。

柱穴は、P₁₃（径35cm±・深さ70cm±）・P₁₆（前掲）・P₂₂（前掲）・P₂₅（前掲）・P₂₇（径66cm±・深さ77cm±）・P₄₁（径30cm±・深さ38cm±）・P₅₂（前掲）・P₅₈（前掲）・P₆₂（径95cm±×55cm±・深さ83cm±）・P₆₄（径40cm±・深さ67cm±）・P₈₂（径30cm±・深さ51cm±）・P₂₁₄（前掲）から構成される。柱穴配置は、それぞれP₆₄—P₈₂・P₆₂—P₁₃・P₅₈—P₁₆・P₅₂—P₂₂・P₂₁₄—P₂₅・P₄₁—P₂₇と対になる配置を示している。これらの柱穴と他の住居址に伴う柱穴との共有関係についてみれば、P₁₆はHⅢ—12 h・j住居址と、P₂₂はHⅢ—12 g・h・j・k住居址と、P₂₅はHⅢ—12 f～h・j～m住居址と、P₂₇はHⅢ—12 n・o住居址と共有しあう。また、P₄₁はHⅢ—12 j・k住居址と、P₅₂・P₅₈はHⅢ—12 h・k住居址と、P₆₂はHⅢ—12 j・o住居址と、P₆₄はHⅢ—12 l住居址と、P₂₁₄はHⅢ—12 h住居址と共有関係にある。

この住居址に伴う壁溝および壁柱穴群として、床面および柱穴配置を手がかりとすれば、壁溝bおよび壁柱穴群D・Gを保有すると考えられる。したがって、壁溝bはHⅢ—12 h・j住居址と共有関係にある。また、壁柱穴群DはHⅢ—12 h・j住居址と、壁柱穴群GはHⅢ—12 h・j～o住居址と共有する関係にある。

定位置地床炉は柱穴配置および配列に関する適合性からとらえて、3号炉・9号炉・12号炉・17号炉・21号炉の5基から構成されたと考えられる。これらの炉と他の住居址に伴う炉との共有関係をみれば、3号炉はHⅢ—12 h・j～l・o住居址と、9号炉はHⅢ—12 k住居址と、12号炉はHⅢ—12 k・m住居址と、17号炉はHⅢ—12 e～h・j～m住居址と21号炉はHⅢ—12 l・o住居址と共有しあう。

HⅢ—12 h住居址とこの住居址の柱穴配置を比較してみると、短軸方向において規模的变化はみられないが、長軸方向において南縁がせままる状況を呈する。つまり、柱穴を結ぶ輪郭線内において、この住居址はHⅢ—12 h住居址に内接する在り方を示している。このことから、この住居址は、HⅢ—12 h住居址よりも新期の縮小形態にある住居址と考えられる。

HⅢ—12 j住居址（図版 34・35abc・36a・122cdefgh・123abcdefg・124abc；写真図版 46b・

47・48・49ab・158cde・159abcd・160abc・161abc・162abc・163abc・164ab)

この住居址は柱穴配置から推定して、隅丸長方形～楕円形の形状を呈すると考えられる。床面は、やはり柱穴配置から考えて住居址群全体の残存状況における中位面と捉えられ、HⅢ-12 e～j・k住居址と共有する関係にあると思われる。

柱穴は、P₉（前掲）・P₁₂（前掲）・P₁₆（前掲）・P₂₂（前掲）・P₂₅（前掲）・P₂₈（前掲）・P₃₁（前掲）・P₃₆（径40cm±・深さ60cm±）・P₄₁（前掲）・P₄₇（径45cm±・深さ57cm±）・P₅₁（径25cm±・深さ75cm±）・P₅₇（径25cm±・深さ38cm±）・P₆₂（前掲）・P₆₅（径27cm±・深さ57cm±）など14個のピット群から構成され、それぞれP₆₅—P₉・P₆₂—P₁₂・P₅₇—P₁₆・P₅₁—P₂₂・P₄₇—P₂₅・P₄₁—P₂₈・P₃₆—P₃₁と対になる配置を示している。これらの柱穴と他の住居址を構成する柱穴との共有関係についてみれば、P₉はHⅢ-12 e～g住居址と、P₁₂はHⅢ-12 a～d・h住居址と、P₁₆はHⅢ-12 h・i住居址と、P₂₂はHⅢ-12 g～i・k住居址と、P₂₅はHⅢ-12 f～i・k～m住居址と共有しあう。また、P₄₁はHⅢ-12 i・k住居址と、P₆₂はHⅢ-12 i・o住居址と共有関係にある。

この住居址に伴う壁溝および壁柱穴について考えてみれば、床面がHⅢ-12 e～i・k住居址と共有関係にある中位面と捉えられることや柱穴配置などから、依然として壁溝bおよび壁柱穴群Gが併存し、共伴関係にあると思われる。したがって、壁溝bはHⅢ-12 h・i・k住居址と、壁柱穴群DはHⅢ-12 h・i住居址と、壁柱穴群GはHⅢ-12 h・i・k～o住居址とそれぞれ共有する関係にあると思われる。

定位置地床炉は、柱穴配置や住居址群全体の残存状況における配列の傾向などから、3号炉・10号炉・13号炉・17号炉・22号炉・25号炉の6基から構成されると考えられる。他の住居址に伴う炉との共有関係についてみると、3号炉はHⅢ-12 h・i・k・l・o住居址と、10号炉はHⅢ-12 h・l・o住居址と、13号炉はHⅢ-12 h・l住居址と、17号炉はHⅢ-12 e～i・k～m住居址と、22号炉はHⅢ-12 e～h・k・m住居址と共有する関係にある。

この住居址は、HⅢ-12 h・i住居址と柱穴配置を比較してみると、長軸径ではHⅢ-12 h住居址と比べほぼ同じであるが、HⅢ-12 i住居址よりは長い。また短軸径では両住居址より短い状況にある。このような形態上の差はあるが、住居址群全体の推移の中で、西縁がしだいに中軸線に寄る動きを見せて短軸径がせばまっていく傾向から、この住居址はHⅢ-12 i住居址に後続する新期の住居址と考えられ、最終的な残存状況へと変遷する過程にあつて漸移的な在り方をみせるHⅢ-12 k住居址よりも古期の住居址と考えられる。

HⅢ-12 k住居址（図版 34・35abc・36a・122cdefgh・123abcdefg・124abc；写真図版 46b・47・48・49ab・158cde・159abcd・160abc・161abc・162abc・163abc・164ab）

この住居址は柱穴配置から推定して、隅丸長方形～楕円形の形状を呈すると考えられる。床

面はHⅢ-12 e～j・l住居址と共有する面、すなわち住居址群全体の残存状況における中位面と捉えられる。また、床面はHⅢ-12 j住居址との比較から北縁および西縁でやや広くなる変化をみせ、北西へ僅かに傾く中軸線に沿ってやや拡張された形跡が認められる。

柱穴は、P₆（前掲）・P₁₀（径35cm±・深さ63cm±）・P₁₅（径65cm±・深さ74cm±）・P₂₂（前掲）・P₂₅（前掲）・P₂₈（前掲）・P₃₁（前掲）・P₃₆（前掲）・P₄₁（前掲）・P₄₆（前掲）・P₅₂（前掲）・P₅₈（前掲）・P₆₇（前掲）・P₃₂₀（前掲）など14個のピット群で構成され、それぞれP₆₇-P₇-P₃₂₀-P₁₀・P₅₈-P₁₅・P₅₂-P₂₂・P₄₆-P₂₅・P₄₁-P₂₈・P₃₆-P₃₁と対になる配置を示している。これらの柱穴と他の住居址に伴う柱穴との共有関係についてみれば、P₇はHⅢ-12 c・d・l～o住居址と、P₁₀・P₁₅はHⅢ-12 l住居址と、P₂₂はHⅢ-12 g～j住居址と、P₂₅はHⅢ-12 f～j・l・m住居址と、P₂₈はHⅢ-12 h・j・l住居址と、P₃₁はHⅢ-12 h・j住居址と共有する関係にある。また、P₃₆はHⅢ-12 j住居址と、P₄₁はHⅢ-12 i・j住居址と、P₄₆はHⅢ-12 e～g・m・n住居址と、P₅₂・P₅₈はHⅢ-12 h・i住居址と共有関係にある。さらに、P₆₇はHⅢ-12 g・m・o住居址と、P₃₂₀はHⅢ-12住居址と同様の関係にある。

壁溝および壁柱穴の存在については、住居址群全体の推移や柱穴配置から、壁溝bおよび壁柱穴群E・Gが共伴関係にあると考えられる。壁溝bはHⅢ-12 h～j住居址と共有関係にある。また、壁柱穴群EはHⅢ-12 l・m住居址と、壁柱穴群GはHⅢ-12 h～j・l～o住居址と共有する関係にある。

定位置地床炉は、床面のあり方と配置に関する残存状況の傾向から、3号炉・9号炉・12号炉・17号炉・22号炉・27号炉の6基から構成されることが考えられる。これらの炉のうち、3号炉はHⅢ-12 h～j・l住居址と、9号炉はHⅢ-12 i住居址と、12号炉はHⅢ-12 i・m住居址と、17号炉はHⅢ-12 e～j・l・m住居址と、さらに22号炉はHⅢ-12 e・h・j・m住居址と、それぞれ共有する関係にある。

床面における位置関係から、P₆₁-P₁₀₀が間仕切りの痕跡を残すものと捉えられる。

この住居址は、柱穴配置の西縁を部分的に共有しながら長軸方向に対しHⅢ-12 j住居址の部分的な拡張形態をとる住居址と捉えられ、さらにHⅢ-12 l住居址によって西縁の大部分を共有しながらも長軸方向により拡張される重複過程に位置づけられよう。

HⅢ-12 l住居址（図版 34・35abc・36a・122cdefgh・123abcdefg・124abc；写真図版 46b・47・48・49ab・158cde・159abcd・160abc・161abc・162abc・163abc・164ab）

この住居址は、HⅢ-12 k住居址との柱穴配置によれば、西縁をほぼ共有し、東縁が中軸線に寄り、南縁にやや張り出る状況を示しているところから、西縁はほぼそのまま長軸方向にやや長く、短軸方向にせばめる規模をもつように建て替えをうけた住居址と考えられよう。

柱穴配置から推定して、形状は細長い楕円形を呈すると思われる。床面は、柱穴配置と住居

址群全体の残存状況の比較から、全体の床面区分における中位面と捉えられ、HⅢ-12e~k・n・o住居址と共有関係にあると思われる。

柱穴は、P₇（前掲）・P₁₀（前掲）・P₁₅（前掲）・P₂₀（前掲）・P₂₅（前掲）・P₂₈（前掲）・P₃₃（前掲）・P₃₄（前掲）・P₃₇（前掲）・P₄₄（径30cm±・深さ不明）・P₄₉（径40cm±・深さ85cm±）・P₅₄（前掲）・P₆₁（径21cm±・深さ65cm±）・P₆₄（前掲）・P₁₅₂（前掲）など15個のピット群で構成される。それぞれの柱穴は、P₇—P₆₄—P₁₀—P₆₁—P₁₅—P₅₄—P₂₀—P₄₉—P₂₅—P₄₄—P₂₈—P₃₇—P₁₅₂—P₃₄—P₃₃というジグザグの配列を示している。これらの柱穴と他の住居址に伴う柱穴との共有関係についてふれば、P₇はHⅢ-12c・d・k・m~o住居址と、P₁₀・P₁₅はHⅢ-12k住居址と、P₂₀はHⅢ-12f・m住居址と、P₂₅はHⅢ-12f~k・m住居址と、P₂₈はHⅢ-12h・j・k住居址と共有しあう。さらに、P₃₃・P₃₄はHⅢ-12f・g・n・o住居址と、P₃₇はHⅢ-12h住居址と、P₆₄はHⅢ-12i住居址と共有関係にある。

この住居址に伴う壁溝および壁柱穴群の存在について、住居址群全体の残存状況と共伴する柱穴配置や床面の位置関係から推定すると、壁溝Cおよび壁柱穴群E・Gが共伴関係にあると考えられる。壁溝CはHⅢ-12m~o住居址と共有関係にある。また、壁柱穴群EはHⅢ-12k住居址と、壁柱穴群GはHⅢ-12h~k・m~o住居址と、それぞれ共有関係にある。

定位置地床炉は、柱穴配置と全体の残存状況における配列の傾向から捉えて、3号炉・10号炉・13号炉・17号炉・21号炉・24号炉・28号炉の7基から構成されると推定される。これらの炉のうち、3号炉はHⅢ-12h・k・o住居址と、10号炉はHⅢ-12h・j・o住居址と、13号炉はHⅢ-12h・j住居址と、17号炉はHⅢ-12e~k・m住居址と、21号炉はHⅢ-12i・o住居址と共有関係にある。また、24号炉はHⅢ-12h住居址と、28号炉はHⅢ-12f・g・n住居址とそれぞれ同様の関係にある。

この住居址は柱穴配置の比較から、HⅢ-12k住居址とは西縁の大部分を共有しながら、全体の床面区分における中位面に床面をもち、長軸にのびて短軸でせばまり、全体に細長くなる形態変化を示す新期の住居址と考えられる。また、同じく柱穴配置の西縁の一部を共有し、最終的な残存状況に結びつくHⅢ-12m・n・o住居址群よりは古期の住居址と捉えられる。

HⅢ-12m住居址（図版34・35abc・36a・122cdefgh・123abcdefg・124abc；写真図版46b・47・48・49ab・158cde・159abcd・160abc・161abc・162abc・163abc・164ab）

この住居址は柱穴配置から推定して、楕円形の形状を呈するものであろう。床面はやはり柱穴配置から捉えて住居址群全体の残存状況における低位面にあると考えられ、HⅢ-12l・m・o住居址と共有関係にあると思われる。

柱穴は、P₄（径40cm±・深さ47cm±）・P₇（前掲）・P₁₄（前掲）・P₂₀（前掲）・P₂₅（前掲）・P₂₉（前掲）・P₃₈（径55cm±・深さ80cm±）・P₄₆（前掲）・P₅₃（前掲）・P₆₀（前掲）・P₆₇（前掲）・P₇₁

(前掲) など12個のピット群で構成され、それぞれ P₇₁—P₄・P₆₇—P₇・P₆₀—P₁₄・P₅₃—P₂₀・P₄₆—P₂₅・P₃₈—P₂₉ と対になる配置を示している。これらの柱穴と他の住居址に伴う柱穴との共有関係をみれば、P₄はHⅢ—12 n・o 住居址と、P₇はHⅢ—12 c・d・k・l・n・o 住居址と、P₁₄はHⅢ—12 e～g 住居址と、P₂₀はHⅢ—12 f・l 住居址と、P₂₅はHⅢ—12 f～l 住居址と、P₂₉はHⅢ—12 f・g 住居址と共有しあう。また、P₄₆はHⅢ—12 e～g・k・n 住居址と、P₅₃・P₆₀はHⅢ—12 e～g・n 住居址と、P₆₇はHⅢ—12 g・k・o 住居址と、さらにP₇₁はHⅢ—12 c・g・o 住居址と共有する関係にある。

この住居址に伴うとみられる壁溝・壁柱穴群の存在を、床面の共有関係や柱穴配置からとらえると、壁溝Cおよび壁柱穴群F・Gが共伴関係にあると考えられる。このうち、壁溝CはHⅢ—12 e・n・o 住居址と、壁柱穴群GはHⅢ—12 h～l・n・o 住居址と共有関係にある。

定位置地床炉は、柱穴配置や住居址群の残存状況から判断して、1号炉・4号炉・12号炉・17号炉・22号炉の5基から構成されると思われる。これらの炉の共有関係についてみると、1号炉はHⅢ—12 e～g・n・o 住居址と、4号炉はHⅢ—12 e～g・n 住居址と、12号炉はHⅢ—12 i・k 住居址と、17号炉はHⅢ—12 e～l 住居址と、さらに22号炉はHⅢ—12 e～h・j・k 住居址と、それぞれ共有する関係にある。

付属施設として、床面における位置関係から、P₂₉₂—P₂₈₅—P₈₂ が間仕切り穴の痕跡を残すものと考えられ、HⅢ—12 f・g 住居址と共有関係をもつと思われる。

この住居址は柱穴配置においてHⅢ—12 l 住居址と西縁で部分的に共有関係をもつが、床面の比較によれば、HⅢ—12 l 住居址よりも全体に住居址群の残存状況において認められた北壁に寄ったあり方を示している。このような床面のあり方は、住居址群全体の残存状況において、埋土や床面などの諸点で最終期の住居址としての適合性をもつと捉えられるHⅢ—12 n・o 住居址と同位置的な配置を呈する。このことから、この住居址はHⅢ—12 l 住居よりも新期の住居址ながらHⅢ—12 n・o 住居址よりも古期の段階に位置づけられる住居址と考えられる。

HⅢ—12 n 住居址 (図版 34・35abc・36a・122cdefgh・123abcdefg・124abc; 写真図版 46b・47・48・49ab・158cde・159abcd・160abc・161abc・162abc・163abc・164ab)

この住居址とHⅢ—12 o 住居址とは、住居址群検出に伴う埋土観察用畦の断面にみられた新期の埋土と古期の埋土の不整合面を壁とし、住居址群全体の残存状況における低位面を床面として共有する関係にあり、住居址群全体の中にあって最終期の段階に位置づけられる。

形状は柱穴配置から推定して、隅丸長方形～楕円形を呈すると思われる。床面は、HⅢ—12 l・m・o 住居址と共有する関係をもつ。柱穴は、P₄ (前掲)・P₇ (前掲)・P₁₁ (前掲)・P₁₇ (径30cm±・深さ65cm±)・P₂₃ (径25cm±・深さ76cm±)・P₂₇ (径25cm±・深さ76cm±)・P₃₂ (前掲)・P₃₃ (前掲)・P₃₄ (前掲)・P₃₉ (前掲)・P₄₆ (前掲)・P₅₃ (前掲)・P₆₀ (前掲)・P₆₆ (前掲)・P₇₀

(前掲)など15個のピット群で構成される。これらのピットの配置をみると、 $P_4-P_{70} \cdot P_{34}-P_{33}$ は対になるが、残るピットが $P_{70}-P_7-P_{66}-P_{11}-P_{60}-P_{17}-P_{53}-P_{23}-P_{46}-P_{27}-P_{39}-P_{32}-P_{33}$ とジグザグになる位置関係をもって結びあっている。これらのピットのうち、 P_4 はHⅢ-12 m・o住居址と、 P_7 はHⅢ-12 c・d・k～m・o住居址と、 $P_{11} \cdot P_{17} \cdot P_{23} \cdot P_{32}$ はHⅢ-12 o住居址と、 $P_{33} \cdot P_{34}$ はHⅢ-12 e・f・l・o住居址と、 $P_{39} \cdot P_{70}$ はHⅢ-12 e～g住居址と共有関係にある。さらに、 P_{46} はHⅢ-12 e～g・k・m住居址と、 $P_{53} \cdot P_{60}$ はHⅢ-12 e～g・m住居址と、 P_{66} はHⅢ-12 e・f・h住居址と共有する関係にある。

埋土断面では観察された不整合面(壁)と床面のあり方から考えて、この住居址に伴う壁溝および壁柱穴群は、壁溝Cおよび壁柱穴群B・Gと捉えられる。これらの共有関係についてみれば、壁溝CはHⅢ-12 l・m・o住居址と、壁柱穴群BはHⅢ-12 o住居址と、壁柱穴群GはHⅢ-12 h～m・o住居址と共有する。また、HⅢ-12 o住居址の場合にも言えることであるが、壁柱穴群Bと柱穴配置を結ぶ西縁の間には空間が認められることから、この空間内に分布する壁柱穴群C～Eのいずれかが併存する可能性も考えられよう。

定位置地床炉は、柱穴配置および検出された炉間の切り合い関係などから捉えて、1号炉・4号炉・11号炉・16号炉・20号炉・23号炉・28号炉の7基から構成される。16号炉では2期の使用面が観察されているが、この住居址に伴う使用面は下位に位置する古期の使用面と考えられる。これらの炉のうち、1号炉はHⅢ-12 e～g・m・o住居址と、4号炉はHⅢ-12 e～g・m住居址と、11号炉はHⅢ-12 e～g住居址と、28号炉はHⅢ-12 f・g・l住居址と共有関係をもつ。

この住居址はHⅢ-12 o住居址と共に、住居址群全体の埋積状況や床面のあり方から最終期の遺構と捉えられ、床面を共有しあうHⅢ-12m住居址よりも新期の遺構と考えられる。また、この住居址とHⅢ-12 o住居址の新旧関係については、床面のあり方や形状の点で類似しており、時間的にはさほどの隔たりはないと思われるが、異なる柱穴配置の比較によれば、北西隅付近で僅かにこの住居址に膨みが認められ、この部分で貼り床の痕跡が認められなかったことなどから、HⅢ-12 o住居址は僅かながら北西隅付近で縮小形態をとる新期の住居址と推定されよう。

HⅢ-12 o住居址 (図版 34・35abc・36a・122cdefgh・123abcdefg・124abc; 写真図版 46b・47・48・49ab・158cde・159abcd・160abc・161abc・162abc・163abc・164ab)

この住居址はHⅢ-12 n住居址と共に、住居址群の中で最終的に位置づけられる。形状は柱穴配置から推定して隅丸長方形～楕円形を呈すると思われる。この住居址固有の埋土は、住居址群埋土断面において新期の埋土と捉えられる不整合面よりも内側の土層で、上位から黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層の順で構成されている。暗褐色土層下位から褐色土層上位にかけ

て焼土・炭化物が含まれており、多量の土器片などの遺物が出土している。このような状況から、暗褐色土層は人為的に形成された層と考えられ、埋積過程において土器片などの遺物を主体とする廃棄行為が行われたと考えられる。出土遺物から、この廃棄行為は縄文時代前期前中期に位置づけられよう。

床面はHⅢ-12n住居址と同じ面にあつて、同位置的なつながりをみせるところから、HⅢ-12n住居址の床面とそのまま再利用したと捉えられ、HⅢ-12l・m・n住居址と共有関係にあると考えられる。

柱穴は、P₄（前掲）・P₇（前掲）・P₁₁（前掲）・P₁₇（前掲）・P₂₃（前掲）・P₂₇（前掲）・P₃₂（前掲）・P₃₃（前掲）・P₃₄（前掲）・P₃₅（径50cm±・深さ70cm±）・P₄₂（前掲）・P₄₈（径50cm±・深さ51cm±）・P₅₅（前掲）・P₆₂（前掲）・P₆₈（前掲）・P₇₁（前掲）など16個のピット群で構成され、それぞれP₇₁-P₄・P₆₇-P₇・P₆₂-P₁₁・P₅₅-P₁₇・P₄₈-P₂₃・P₄₂-P₂₇・P₃₅-P₃₂・P₃₄-P₃₃と対になる配置を示している。これらの柱穴のうち他の住居址に伴う柱穴との共有関係について見れば、P₄はHⅢ-12m・n住居址と、P₇はHⅢ-12c・d・k～n住居址と、P₁₁・P₁₇・P₂₃・P₃₂はHⅢ-12n住居址と、P₂₇はHⅢ-12i・n住居址と、P₃₃・P₃₄はHⅢ-12f・g・l・n住居址と、P₄₂はHⅢ-12h住居址と共有する。さらに、P₆₂はHⅢ-12i・j住居址と、P₆₇はHⅢ-12g・k・m住居址と、P₇₁はHⅢ-12c・g・m住居址と共有する関係にある。

住居址群全体の埋土断面において、西壁と東壁に寄った部分から切り合い関係を示すとみられる不整合面が観察されている。これが、この住居址に伴う東壁および西壁ととらえられる。壁高は、東壁24cm±・西壁35cm±を計る。床面が同位置的な在り方を示すところから、この壁はHⅢ-10n住居址と共有する関係にあるのかもしれない。また、同様に遺構としての近似性から壁溝および壁柱穴群はHⅢ-12n住居址と共伴関係にある壁溝Cおよび壁柱穴群B・Gを再利用する状況にあったのではないかと考えられ、壁溝CについてはHⅢ-12l～n住居址と、壁柱穴群ではGがHⅢ-12n住居址以外にHⅢ-12h～m住居址とそれぞれ共有関係にあると思われる。

定位置地床炉は柱穴配置と残存状況との比較や炉間の切り合い関係から、1号炉・3号炉・10号炉・16号炉・21号炉・25号炉の6基から構成されると考えられる。断ち割りの結果、16号炉から新・旧2期の使用面が観察されているが、この炉を共有するHⅢ-12n住居址との新旧関係から、上位の新期使用面がこの住居址に伴うものではないかと考えられる。これらの定位置地床炉のうち、1号炉はHⅢ-12e～g・m・n住居址と、3号炉はHⅢ-12h～l住居址と、10号炉はHⅢ-12h・j・l住居址と、21号炉はHⅢ-12i・n住居址と、25号炉はHⅢ-12j住居址と位置的に共有する在り方を示す。

付属施設として、柱穴配置および床面との位置関係から、P₆₀-P₁₀₀はHⅢ-12k住居址と共

有する状況で間仕切りの痕跡を残すピットではないかと推定される。HⅢ-12住居址群の項で述べた出土遺物のうち、西壁沿いおよびHⅣ-3住居址貼り床上の遺物を除く、床面および埋土出土の遺物は大半がこの住居址固有のものと捉えられる。

この住居址は、埋土断面の観察および床面区分などから、HⅢ-12n住居址と共にこの住居址群において最終期の遺構と捉えられ、さらに、柱穴配置の比較などからHⅢ-12n住居址より新期の住居址と考えられる。

以上15棟の住居址は検出された住居址群全体の残存状況に対して、柱穴配置、高低差にもとづく床面区分、壁溝および壁柱穴群の分布、埋土の埋積状況、炉の配置とそれらの新旧関係などの点から検討を加えて推定されたものである。これらの住居址を古い順に列記すれば、HⅢ-12a～oの順になろうと考えられるが、床面の共有関係から大別すると、古期・中期・新期の段階に大きく分けられる。

古期の段階に属する住居址群は高位面を共有する関係にあるもので、HⅢ-12a～d住居址がこれに該当する。中期の段階に属する住居址群として、中位面を共有するHⅢ-12e～k住居址があげられる。また、新期の段階にある住居址群は、低位面を共有しあうHⅢ-12l～o住居址によって構成される。

古期の段階にある住居址群は他の段階と比べて住居址群全体の残存状況の中で北西隅に寄る傾向が認められ、それぞれが対になる柱穴配置によって構成されている。形状はほぼ楕円形を呈すると思われ、短軸の最大径は同じであるが、長軸方向で差が認められる変化を呈する。いずれの住居址も長軸を南北にもっているが、中軸線は全体の残存状況において定位置の炉が配列する方向から見れば、西に寄ったあり方を示している。

柱穴配置の類似性から古期の住居址群はさらに、HⅢ-12a・b住居址から構成される住居址群iとHⅢ-12c・d住居址から構成される住居址群iiの2つの小群にわけられ、住居址群iに対し住居址群iiが北縁でせばまる形状を呈する。また、2つの小群においてHⅢ-12b・dは先行するHⅢ-12a・c住居址の縮小形態ととらえられる。これら古期の住居址群によって共有された床面は、北西隅に部分的に残存する状況で中期の住居址によって切られ、大部分が削平をうけて消失したと考えられる。

中期の段階に位置する住居址群は、HⅢ-12住居址群の残存状況に伴う長軸と各住居址の中軸線が一致する在り方を示す。各住居址間の形状・規模にはバラツキがみられるが、柱穴配置の類似性や柱穴を結ぶ輪郭によって占められる空間（床面のひろがり）の位置関係から、HⅢ-12e～g住居址によって構成される住居址群iiiとHⅢ-12h～l住居址によって構成される住居址群ivの2つの小群に細分できる。

住居址群iiiは、いずれも対になる柱穴配置で構成され、隅丸長方形～楕円形の形状を呈する。

柱穴配置からみて、この小群はHⅢ-12住居址群の中では最大規模にあり、とりわけHⅢ-12g住居址ではその頂点に達して南縁に拡張された動きを観察できる。

住居址群ivは柱穴配置から推定される形状において、隅丸長方形～楕円形と考えられるもの(HⅢ-12h・j・k住居址)のほかに、楕円形を呈するもの(HⅢ-12i住居址)があり不揃いなほか、柱穴が対になるものとジグザグ配置を示すものがあるが統一性に欠けるが、それぞれの住居址において先行する住居址の柱穴を部分的に再利用する状況にある。また、この小群に属する住居址は住居址群iiiに比べ、柱穴配置における東縁と西縁を結ぶ短軸径では大差ないが、北縁と南縁を結ぶ長軸径が約 $\frac{3}{4}$ 程度を計るという共通性をもつ。

新期の段階に属する住居址は柱穴配置からすると、ほぼ楕円形の形状を呈し、中期の住居址群に比べて短軸径はせばまるが、長軸方向に径がのびて細長くなる形態上の変化が認められる。このような共通性からこの段階にある住居址群を住居址群Vとして扱う。これらの住居址にあってHⅢ-12m住居址はHⅢ-12n・o住居址と柱穴配置や床面のあり方において共通する部分が多く認められるが、前段階に位置づけられる住居址群ivのHⅢ-12l住居址を構成する柱穴を西縁で部分的に共有し、中期の段階にある住居址群と同位置に中軸線が認められるところから漸新的な存在として捉えられよう。

次に、住居址群の推移との関連を含めて壁溝と壁柱穴群の存在についてとりあげてみたい。HⅢ-12住居址群全体から検出された壁溝は西壁に沿った部分から3条(壁溝a～c)と東壁沿いの1条(壁溝d)の計4条である。4条の壁溝はいずれも床面の縁辺から断続的に認められるが、配置は住居址群の長軸とほぼ平行な位置関係を示している。壁柱穴群は壁溝と近接して検出され、西縁から6群(壁柱穴群A～F)と東縁から3群(壁柱穴群G～I)の計9群を数える。各壁柱穴群の分布をみると、多少の揺れは見られるが壁溝と同様に、HⅢ-12住居址群の長軸に対し平行かあるいはこれをくくるように弧状に連続する在り方を示している。したがって、壁柱穴群は壁溝と同様にHⅢ-12住居址群の東西いずれかの縁辺にあって分布する状況にあり、西縁に多く認められる。

このような壁溝および壁柱穴群の分布状況と柱穴配置から推定される15棟の住居址や高位面～低位面に区分された床面、さらに埋土の埋積状況とを関連させて考えると、4条の壁溝および9群の壁柱穴群は同時存在とは捉えられず、住居址の推移と関係して順次形成されたものと考えられる。そして、これらが床面の東西両縁、ことに西縁に多く分布が認められることは、床面区分によって高位面から低位面へと住居址群が変遷して行く変化の過程を裏づける根拠となろう。また、柱穴配置と床面の関係を手がかりとして各住居址で述べたように、相伴する壁溝および壁柱穴群は先行する住居址と床面と同じように共有する関係にあるとか、西縁だけに存在したというように必ずしも順次に規則性をもって変化したものではないだろうと考えられる。

同じような変化は間仕切りピットにもみられる。P₃₀₀—P₃₀₂—P₈₀・P₂₉₂—P₈₂・P₆₁—P₁₃・P₆₁—P₁₀₀ はそれぞれ共伴すると推定される住居址の中軸線と直交するあり方を示し、柱穴配置から想定される床面の短軸内に位置するところから、これらは間仕切りの痕跡を残すものと捉えて記述した。こうして推定された間仕切りピットは他の住居址と共有関係にあって、再利用された状況を呈しているが、それぞれの配置を住居址群全体の推移から捉えてみると、床面の変化に伴って北西寄りの位置から中軸線付近へとしだいに変化する動きを示している。

検出された28基の炉は残存状況における配置から「定位置地床炉」・「非定位置地床炉」として分け、各住居址ごとに床面のひろがりや柱穴配置に基づいて、それらのうちの何基かが共伴すると推測して述べた。こうした炉の共伴性は推測の域を出るものではないが、主として次のような根拠を手がかりとしたものである。第1の理由として、検出された炉は住居址群の推移の結果、最終期の住居址に共伴する可能性が最も高いわけであるが、その住居址の柱穴配置から推定される床面規模や壁溝および壁柱穴群との共伴関係を考慮に入れた場合、少なくとも5～7号炉は床面から離れた配置を示し、位置的には適合しないこと。第2の理由として、時期は異なるが同系列の住居址（GV—2住居址・JVII—27住居址群）でもこれほど多くの炉を保有していないこと。第3に、6号炉においてはHIII—12k・1住居址を構成する柱穴P₁₀によって切られる状況を呈していること。第4に、個々の住居址において先行する住居址を構成する柱穴のほかに床面や壁溝および壁柱穴群が再利用されて共有する関係にあると捉えられ、炉においてもその関係はあり得ようと考えられること。

以上の4点を根拠にすれば、HIII—12a～o住居址はそれぞれ数基の炉を保有したと捉えられ、それぞれの建て替えに応じて先行する住居址に伴う炉を再利用または新しく保有したということになる。そうすると、再利用の最も激しい炉については使用面が再利用された回数分だけ面として把握されなければならないが、残存状況の観察では2期を越えるものはない。

このような問題を含めて炉に関する推察を加えてみると、検出された28期の炉は平面的側面と垂直的側面をもつ床面の変化に制約をうけた残存形態と捉えられよう。つまり、15棟の住居址は中軸線上に「定位置地床炉」を持つ同じ系統の住居址であり、これらの住居址に共伴する床面が全体の推移において、しだいにHIII—12住居址群としての中軸線に接近する短軸径を有するようになるという変化からすれば、最終的には「定位置地床炉」が中軸線付近で近接して分布したり、同位置的な在り方を示すほか、「非定位置地床炉」が分散的な在り方を示すであろう。また、住居址群の床面が高位面から低位面に変化すれば、古期～新期の変化に応じて削平が施され、消失する場合もあろうが、痕跡を残す程度の削平をうけて残存する可能性もあろう。したがって、検出された28基のうち19基（1～4・9～13・16・17・20～25・27・28号炉）が中軸線上に認められる例や近接する例（12号炉と13号炉、21号炉と22号炉、23号炉と24号炉

および25号炉、27号炉と28号炉) および部分的に重複する例(24号炉と25号炉)、さらに後期の住居址に伴う柱穴によって切られたと考えられる例(6号炉)などは床面の変化によって制約をうけた残存形態の好例と考えられる。そして、幾度にもわたって他の住居址によって再利用された例(17号炉など)については、継続使用という可能性もあり得ようが、先に述べた床面の変化による制約をうけた結果、同位置的共有関係を示したと思われる。

HIV区

HIV-7住居址(図版37ab; 写真図版49c・52b)

この住居址は周辺の緩斜面から検出された住居址群(HIII-2~10住居址・HIV-5住居址など)と規模や形状が類似しており、検出面を基本層序II層下位付近に求められるところから縄文時代前期前半期の時期に位置づけられよう。埋土と壁および床面を構成する火山灰層との層相が似ているため、全体に掘りすぎが認められ、良好な検出状況を呈してはいないが、形状は南北に長軸をもつ隅丸長方形を呈するものと捉えられる。規模は、 $2.9\text{m}\pm\times 2.0\text{m}\pm$ (最大径)を計る。炉は検出されなかった。

埋土は焼土および炭化物を僅かに含む褐色土層で構成されている。床面はほぼ平坦で、軟質な状態にある。柱穴状ピットは検出されなかったが、東壁際から深さ5cm±を計る不整なピット状の凹みが検出されている。壁高は、北壁26cm±・南壁10cm±・東壁7cm±・西壁25cm±を計る。出土遺物として、埋土から縄文時代前期前半期とみられる深鉢の破片が数片出土している。この住居址は単独の遺構として検出され、他の遺構との重複関係はみられない。

(佐藤 勝)

HVI区

HVI-1住居址(図版37c・124d・125a; 写真図版54a・164c)

Field Cardの記載を欠くことや保存状態が悪いことなどから、この住居址の詳細は明らかではない。2基の地床炉の存在からみて、縄文時代前期に位置づけられるものではないかと推定される。柱穴状のピット配置から考えると、この住居址の規模は径6mを越すものであろう。

柱穴状のピットは、 P_1 (径25cm±・深さ22cm±)・ P_2 (径30cm±・深さ55cm±)・ P_3 (径24cm±・深さ30cm±)・ P_4 (径30cm±・深さ20cm±)・ P_5 (径25cm±・深さ21cm±)・ P_6 (径40cm±・深さ29cm±)・ P_7 (径30cm±・深さ53cm±)・ P_8 (径20cm±・深さ22cm±)などが検出されている。しかし、それらの具体的な配置関係などについては不明である。

2基の地床炉のうち、東側に位置するもの（1号）は使用面と床面のレベルがほぼ一致するもので、114cm±×72cm±の範囲にわたって現地性焼土が形成されている。下位の火山灰層には、使用面下8cm±の深さまで火熱による赤色変化がみられる。この炉の西側の一部は、精査の段階で僅かながら破壊を受けている。西側に位置する地床炉（2号）では、70cm±×50cm±の範囲に現地性の焼土が形成されている。この炉の使用面も床面と同じレベルに設けられていて、下位の火山灰層は深さ4cm±まで火熱による赤色変化を受けている。近接する位置にあるこれら2基の地床炉が、共存するものかそれとも新旧関係にあるものかなどについては不明である。

住居地の南壁方向には、長さ125cm±・幅14cm±・深さ12cm±の壁溝状の溝が一条検出されている。

柱穴状のピットの配置から推定すると、この住居地はHVI-56フラスコ形ピット・HVI-92フラスコ形ピットと重複するものとみられるが、それらとの新旧関係や共伴関係などの詳細は把握されていない。

HVI-2住居地（図版37d・125b；写真図版54b・55a・164d・165ab）

この住居地は縄文時代中期末葉の時期に位置づけられるもので、一部を除けば、比較的保存が良好な状態で検出された。東壁よりには、複式炉の系統を引くとみられる1基の炉が設けられている。住居地の平面形は楕円形状を示しており、規模は3.3m±×2.7m±を計る。

埋土はほぼ単層の暗褐色土で構成されていた。

床面は全体的に平坦で、やや堅くしまるものとなっている。柱穴と考えられるピットは、P₁（径18cm±・深さ38cm±）・P₂（径22cm±・深さ38cm±）などが検出されている。P₃（径18cm±・深さ16cm±）も、あるいは柱穴配置を構成するピット群の一部なのかもしれない。これらのピットと、柱穴とは異なる性格をもつと思われるP₄を除くと、他のピットはいずれも浅く、配置的にも安定性を欠くために、それらを柱穴とみなすことはできなかった。住居地の壁高は、北壁30cm±・南壁4cm±・東壁16cm±・西壁20cm±を計る。

炉は石囲い部と前庭部の2つの単位から成るもので、床面の中央部よりやや東側の位置に設けられている。全長130cm±を計る。石囲い部は、1個の安山岩製の石皿と、粒径10~22cm±の6個の安山岩類亜角~亜円礫で構築されている。石皿も含めた炉の構成礫は、いずれも火山灰中にその下半部が埋置されている。石囲い部内の使用面は床面よりも僅かに低い位置にあって、その下位の火山灰層は4cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。前庭部は石囲い部と東壁の間に位置し、床面よりも6cm±低い面となっている。北側の輪郭を欠くが、残存している南側の輪郭線から推定して、この前庭部は凸辺長方形に作られているのではないかと考えられる。Field Cardには具体的な記載を欠くために、前庭部底面の状態については不明である。この前庭部内にはP₄（径24cm±・深さ29cm±）がある。

炉以外の付属施設として、この住居址には土器埋設遺構とみられるものがある。この施設は、前庭部と東壁が境を接する部分のやや北東の位置に設けられており、内部からは潰れた状態の深鉢形土器が検出されている。掘り方などは明確ではない。

この住居址からの出土遺物としては、上述の埋甕や石皿がある。これらのほかに、床面上には粒径25cm±・28cm±の2個の安山岩垂角礫が存在していた。

この住居址は、南西部でHVI-63ピットにより切られている。

HVI-3住居址（図版38a・125c；写真図版56a・165c）

他の遺構と重複する部分が多く、また残存状態も不良であることから、この住居址の詳細は不明である。遺構間の新旧関係や地床炉の存在などを手掛りにして考えると、この住居址は縄文時代前期に位置づけられるものであろう。残存部での規模は3.1m±を計る。形態はわからない。埋土の具体的な状況についても不明である。

床面はほぼ平坦な面となっている。柱穴は検出されていない。残存部で、壁高は北壁37cm±・東壁12cm±を計る。

地床炉は、その使用面が床面のレベルにほぼ一致するもので、径32cm±の範囲に現地性焼土の形成が認められている。下位の火山灰層は、7cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。

この住居址は、HVI-64フラスコ形ピット・HVI-65フラスコ形ピットにより大半の部分が、またHVI-4住居址により南壁の一部が切られている。

HVI-4住居址（図版38d・125d；写真図版56b・57a・165d・260bc）

住居址内の大半の部分が他の遺構群によって切られているために、規模・形態の詳細はよくわからないが、残存している壁の輪郭線から推定すると、径5m±×4.5m±の規模をもち、長方形を基調とする形状を示すものであると考えられる。遺構群との重複関係からみて、この住居址は縄文時代前期～中期の時期内に含まれるものであろう。床面のほぼ中央部には、地床炉の形態をもつとみられる炉が痕跡的に残存している。

埋土の詳しい状態は明らかではない。埋土中には“湯沢パターン”のほぼ純粋な火山灰層の堆積が認められているが、精査の手順が悪く、その分布や層厚を正確に把握することはできなかった。土層断面図も作成していない。

Field Card の記載を欠くために、床面の状況は不明である。柱穴状のピットとしては、P₁（径22cm±・深さ11cm±）・P₂（径28cm±・深さ45cm±）・P₃（径24cm±・深さ35cm±）・P₄（径22cm±・深さ31cm±）・P₅（径32cm±・深さ39cm±）・P₆（径16cm±・深さ29cm±）・P₇（径16cm±・深さ34cm±）・P₈（径22cm±・深さ47cm±）・P₉（径20cm±・深さ22cm±）・P₁₀（径23cm±・深さ32cm±）・P₁₁（径20cm±・深さ34cm±）・P₁₂（径47cm±・深さ20cm±）・P₁₃（径40cm±・深さ15cm±）・P₁₄

(径30cm±・深さ39cm±)など14個のピット群が検出されている。配置的な面からみて、これらのピット群と柱穴との具体的な関連性については明らかではない。壁高は、北壁31cm±・南壁5cm±・東壁41cm±・西壁23cm±を計る。

炉は、32cm±×12cm±の範囲に現地性焼土が残存しているにすぎない。構成礫やその抜き取り痕などを欠くことから、この炉は地床炉の形態をもつものではないかと考えられる。使用面は床面と同位置に設けられていて、その下位の火山灰層は13cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。

この住居址はHVI-3住居址を切り、HVI-5住居址・HVI-75フラスコ形ピット・HVI-76フラスコ形ピット・HVI-78フラスコ形ピット・HVI-79フラスコ形ピットなどには切られている。

HVI-5住居址(図版38bc・125e;写真図版55b・57a・165de・260bce)

この住居址は縄文時代中期末葉の時期に位置づけられるもので、比較的保存が良好な状態で検出されている。平面の形態はほぼ円形を呈し、規模は3.2m±×2.9m±を計る。南東部には、複式炉の系統を引くとみられる1基の炉が設けられている。

埋土は、上部が黒色土層で、下部が黒褐色～暗褐色土層で主に構成されている。上部の層は基本層序のO~Ic層までの層準を含んでいる。下部層中には焼土・炭化物の粒子が多量に含まれていて、全体的に人為堆積相を示している。

床面は、下位にある2つのフラスコ形ピットの上に載る部分では僅かに沈下しており、また軟いものとなっているが、それ以外の範囲はほぼ平坦で堅くしまるものとなっている。柱穴は検出されていない。壁高は、北壁37cm±・南壁29cm±・東壁56cm±・西壁44cm±を計る。

床面中央の南東部に設けられている複式炉は、石囲い部と前庭部の2つの単位から成るもので、全長110cm±を計る。この炉も、下位のフラスコ形ピットのルーズな埋土を削剝した面上に構築されていて、床面とともに若干の沈下がみられる。石囲い部は粒径8~32cm±の7個の安山岩類亜角～亜円礫から成り、構成礫のそれぞれはその下半部を床面下に埋置されている。使用面は床面よりも低い位置に設けられている。この使用面下6cm±の部分は貼られた火山灰層で、全体に火熱による赤色変化を受けている。前庭部は石囲い部からはやや遊離し、壁に接続する深さ5~8cm±のピットとなっている。Field Cardの具体的な記載を欠くために、底面の状況については不明である。

この住居址の中央部および北東部の床面上からは、鉢形土器がそれぞれ出土している。また、東壁近くの埋土中からは、横位の状態で青竜刀形石器が出土している。観察が不十分であるために、この石器が単純に廃棄されているものかどうか明らかではない。

この住居址は、HVI-4住居址・HVI-75フラスコ形ピット・HVI-76フラスコ形ピットを切っている。石囲い部内を除けば、2基のフラスコ形ピットの埋土を削剝した面上にはこの住

居址固有の貼り床などは施されていない。

HVI-6 住居址 (図版37e・125fg; 写真図版57b・260d・261a)

この住居址は縄文時代中期末葉の時期に位置づけられるもので、保存が比較的良好な状態で検出されている。卵形に近い形状を示しており、規模は3m±×2.4m±を計る。床面中央部よりやや東側の位置には、1基の炉が設けられている。焼失を受けた住居址である可能性も考えられる。

埋土は、全体に炭化物の粒子が包含される黄褐色土のほぼ単層で構成されている。土層断面図の作成は省略した。また、炉の周辺の埋土下底部には、焼土と炭化物から成る薄層を伴う。

床面は平坦で、やや軟いものとなっている。柱穴は検出されていない。壁高は、北壁13cm±・南壁10cm±・東壁5cm±・西壁12cm±を計る。

炉は、いわゆる土器埋設炉の形態をもつもので、1個体の深鉢形土器を直立に埋設して構築されている。土器は床面下14cm±の深さまで埋めこまれていて、その周辺部には僅かながら現地性焼土の形成がみられる。炉の掘り方は明確に捉えることはできなかった。

この住居址は単独で検出されたもので、他の遺構との重複関係は認められない。

(高橋 文夫)

HVII区

HVII-1 住居址群 (図版39abcd・126abc; 写真図版55c・58・60a・165f・166abc・167ab)

柱穴配置を検討した結果、この住居址群が検出された範囲内には最低2棟の住居址が存在していることが明らかにされた。これらについて今、新しいと考えられるものから順に、HVII-1a 住居址・HVII-1b 住居址と呼称することにする。これらは僅かなレベル差をもって上下に重複しているが、両者間には壁・床面・炉・柱穴などの共有関係は認められていない。以下、各住居址について個別に記載する。

HVII-1a 住居址 (図版39abcd・126abc; 写真図版55c・58・60a・165f・166abc・167ab)

床面上からの伴出遺物を欠くが、複式炉の系統を引く炉の存在や埋土中の土器などからみて、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。比較的に保存が良好な状態で検出されている。規模は12.4m±×9.2m±(後者は推定復元値)を計り、平面形は楕円形状の形態を示している。複式炉の系統を引く炉のほかに、この住居址の北西壁よりにはさらに2基の地床炉が設けられている。

埋土は主に、上半部が黒褐色～黒色土層で、下半部が褐色～暗褐色土層でそれぞれ構成されている。これらの中で、下半部の層準を占める暗褐色土層は土器片類・石器類・焼土・炭化物

や礫などを含んでいて、全体的に複合廃棄物的な人為堆積相を示している。

床面にはゆるやかな凹凸があって、一部は堅くしまっているが、大半はやわらかい面となっている。柱穴は、 P_1 (径90cm±・深さ100cm±)・ P_2 (径76cm±・深さ70cm±)・ P_3 (径93cm±・深さ70cm±)・ P_4 (径63cm±・深さ51cm±)・ P_5 (径54cm±・深さ91cm±)・ P_6 (径30cm±・深さ65cm±)・ P_7 (径29cm±・深さ60cm±)・ P_8 (径40cm±・深さ53cm±)・ P_9 (径66cm±・深さ80cm±)・ P_{10} (径77cm±・深さ62cm±)・ P_{11} (径93cm±・深さ70cm±) など、11個のピットで構成されているものと考えられる。これらの柱穴は、 P_2 — P_{11} ・ P_{11} — P_3 ・ P_3 — P_{10} ・ P_{10} — P_4 ・ P_4 — P_9 ・ P_9 — P_5 ・ P_5 — P_8 ・ P_8 — P_6 ・ P_6 — P_7 とジグザグ状に配置されている。また P_1 は、 P_2 と P_{11} を結ぶ線を底辺とする三角形の頂点にあたる位置に配されている。 P_4 の部位では、HVII—1b 住居址に伴う柱穴 P_{17} を明瞭に切る関係がみられる。住居址の壁高は、北壁72cm±・南壁27cm±・西壁90cm±を計る。斜面下方にあたる東壁は削剝によるものか消失している。西壁沿いの南半部から南壁沿いにかけては、幅12cm±～35cm±・深さ4cm±～12cm±の断続的な壁溝が設けられている。複式炉末端部にみられる壁溝状の溝については別に記載する。

北西部の床面上に位置している地床炉の中で、1号炉では径40cm±×36cm±の範囲に層厚4cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしまる面となっている。2号炉の位置する部位では、径94cm±×70cm±の範囲に層厚6cm±の現地性焼土が形成されている。この炉の使用面も床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしまるものとなっている。

南東部の壁際に位置している複式炉(3号炉)は、2つの石囲い部と前庭部との3つの単位から成るもので、規模は全長350cm±・最大幅250cm±を計る。一部で構成礫を欠く部分もあるが、第1石囲い部および第2石囲い部は、粒径8cm±～32cm±の安山岩類垂角～垂円礫を多数使用して構築されている。これらの構成礫は、深いもので約20cmほど、その下半部を下位の火山灰層中に埋置されている。第1石囲い部と第2石囲い部の底面は、それぞれが床面よりも12cm±・24cm±低い位置に設けられていて、いずれも堅くしまる面となっている。第1石囲い部内には明確な現地性焼土の形成は認められていないが、第2石囲い部内では、径115cm±×80cm±・層厚10cm±の現地性焼土の形成がみられる。この部位の使用面は平滑で、きわめて堅くしまるものとなっている。第2石囲い部と前庭部の間には、いわゆる仕切り石状に構成礫群が弧状に配置されている。前庭部は床面よりも17cm±低い位置にその底面が設けられていて、全体に平坦で、きわめて堅くしまる面となっている。この前庭部と住居址壁が境界を接する位置には、長さ165cm±・幅21cm±～33cm±・深さ14cm±～25cm±の溝状の施設がみられる。規模および形態からみて、この施設は壁溝とは異なる機能または性格を示すものと考えられるのかもしれない。

重複関係の面では、この住居址はHVII-1b住居址・HVII-58フラスコ形ピット・HVII-63ピット・HVII-64ピットを明瞭に切っている。精査中に詳しい観察がなされていないためによくはわからないが、HVII-1b住居址の炉の周辺部には、層厚10cm±近くの火山灰を貼り床として敷設していたのではないかと考えられる。また、HVII-63ピット・HVII-64ピットを切る部分では、火山灰を使用した貼り壁状の施設の痕跡がみられた。住居址内部から検出されているHVII-51フラスコ形ピット・HVII-52フラスコ形ピット・HVII-54フラスコ形ピットなどのピット群も当住居址に切られる関係にある。

HVII-1b 住居址 (図版39abcd・126abc；写真図版55c・58・60a・165f・166abc・167ab)

この住居址は、HVII-1住居址群内に柱穴群と炉が残存していたことからその存在が明らかにされたものである。固有の伴出遺物を欠くが、柱穴群と炉の配置との関係からみて、この住居址も縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。全周にわたって壁は削剝を受けているものとみられ、規模や形態は不明なものとなっている。柱穴間での規模は7.5m±×6.0m±を計る。壁や床面の大半が削剝されているにもかかわらず、この住居址に伴う炉が残存していたのは、この部位が床面よりも部分的に低い位置に設けられていたためではないかと推定される。

柱穴は、P₁₂ (径34cm±・深さ15cm±)・P₁₃ (径14cm±・深さ19cm±)・P₁₄ (径24cm±・深さ17cm±)・P₁₅ (径20cm±・深さ32cm±)・P₁₆ (径40cm±・深さ12cm±)・P₁₇ (径50cm±・深さ45cm±)・P₁₈ (径27cm±・深さ24cm±)・P₁₉ (径28cm±・深さ22cm±) など、8個のピットで構成されているのではないかと考えられる。これらの柱穴は、P₁₉-P₁₄・P₁₄-P₁₈・P₁₈-P₁₅・P₁₅-P₁₇・P₁₇-P₁₆ とジグザグ状に配置されている。また P₁₂ は、P₁₃ と P₁₉ を結ぶ線を底辺とする三角形の頂点にあたる位置に配されている。P₁₇ の部位では、HVII-1a 住居址に伴う柱穴 P₄ に切られる重複関係がみられる。

この住居址の北壁よりに設けられている炉は「い」字状の平面的な形態を示している石囲い炉で、粒径13cm±~34cm±の安山岩類垂角礫を使用して構築されている。構成礫の抜き取り痕などは認められていない。これらの構成礫は、その下半部を6cm±~20cm±の深さまで下位の火山灰層中に埋めこまれている。この炉の使用面は床面よりも13cm±低い位置に設けられているが、その部位には明瞭な現地性焼土の形成は認められていない。内部には、炭化物や焼土を僅かに含む黒褐色土層が堆積していたのみである。この炉の規模は、径70cm±×65cm±を計る。

重複関係の面では、この住居址はHVII-1a住居址に切られている。ピット群との重複関係について言えば、この住居址は少なくともHVII-51フラスコ形ピット・HVII-58フラスコ形ピットと切り合っている。推定されるピットの時期から考えると、この住居址はそれらに後出するものとして位置づけられるのであろう。

以上、HVII-1住居址群内の各住居址について個別的に記載してきた。この住居址群内には

上記の住居址群に伴う柱穴群のほかに、さらに、P₂₀ (径28cm±・深さ9cm±)・P₂₁ (径34cm±・深さ23cm±)・P₂₂ (径51cm±・深さ62cm±)・P₂₃ (径37cm±・深さ24cm±)・P₂₄ (径110cm±・深さ30cm±)・P₂₅ (径128cm±・深さ40cm±)・P₂₆ (径19cm±・深さ11cm±)・P₂₇ (径59cm±・深さ19cm±)・P₂₈ (径32cm±・深さ14cm±)・P₂₉ (径28cm±・深さ14cm±)・P₃₀ (径15cm±・深さ25cm±)・P₃₁ (径41cm±・深さ5cm±)・P₃₂ (径14cm±・深さ7cm±)・P₃₃ (径130cm±・深さ15cm±)・P₃₄ (径19cm±・深さ32cm±)・P₃₅ (径56cm±・深さ24cm±)・P₃₆ (径31cm±・深さ21cm±)・P₃₇ (径27cm±・深さ11cm±)・P₃₈ (径37cm±・深さ15cm±)・P₃₉ (径29cm±・深さ19cm±)・P₄₀ (径28cm±・深さ15cm±)・P₄₁ (径111cm±・深さ34cm±)などのピット群が検出されている。これらの具体的な位置づけについてはよくわからない。

HVII—2 住居址 (図版40ab・127ab；写真図版59a・60b・167cde)

床面や炉からの伴出遺物を欠くが、住居址の諸特徴や埋土中の土器片などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代中期中葉期から末葉期にかけての時期に位置づけられるものであろう。より限定的に言えば、中期末葉期に含まれるものとみられる。一部を除けば、保存が比較的良好的な状態で検出されている。規模は6.0m±×5.5m±を計り、平面形はやや凸辺の五角形状の形態を示している。住居址中央部付近には石囲い炉と地床炉が設けられている。

住居址の埋土は上位より、暗褐色土層 (a層)・黒色土層 (b層)・褐色土層 (c層)・暗褐色土層群 (d～e層) など、基本的に4層で構成されている。これらのうち、上層を占めるa層と中層を占めるc層は、それぞれが“湯沢パターン” (高橋：1977、三浦：1978) を構成する火山灰層であると考えられる。上部の“湯沢パターン”を構成する暗褐色土層は、浮石粒を多く含む著しく汚れた火山灰から成るもので、径4m±・最大層厚32cm±の規模をもって分布している。下部の“湯沢パターン”を構成する褐色土層は、浮石粒を多く含むきわめて新鮮な層相をもつ火山灰から成るもので、径3.7m±・最大層厚36cm±の規模をもって住居址中央部の層準に分布している。この“湯沢パターン”を構成する上下の火山灰層の間には、自然堆積相を示す最大層厚23cm±の黒色土層 (b層) の発達が見られる。この黒色土層は、住居址中央部付近で、埋土中に異地性の焼土を伴う小ピット (HVII—88ピット) により切られている。埋土の最下部を構成する暗褐色土層群は、遺物や焼土・炭化物をあまり多く含んでいず、全体に自然堆積相を示しているものと考えられる。

下位に位置するフラスコ形ピットを削剝した面上に設けられている中央部付近を除けば、床面にはいくらかの凹凸はみられるものの全体的にはほぼ平坦で、比較的堅くしまるものとなっている。フラスコ形ピットのルーズな堆積物上に載る部分では、炉の一部とともに床面には若干の沈下がみられる。柱穴は、P₁ (径39cm±・深さ82cm±)・P₂ (径38cm±・深さ75cm±)・P₃ (径43cm±・深さ81cm±)・P₄ (径45cm±・深さ72cm±)などのピット群で構成されているもの

と考えられる。精査中には検出されていないが、上記のピット群の配置からみて、この住居址内にはさらにいくつかの柱穴が存在していたものであろう。柱穴群のほかに、この住居址内からは、P₅（径22cm±・深さ17cm±）・P₆（径53cm±・深さ23cm±）・P₇（径40cm±・深さ42cm±）・P₈（径28cm±・深さ5cm±）・P₉（径16cm±・深さ12cm±）などのピット群が検出されているが、これらの具体的位置づけや性格については不明である。住居址の壁高は、北壁37cm±・南壁15cm±・東壁17cm±・西壁70cm±を計る。東壁沿いの一部には、堅くしめる汚れ火山灰を使用した貼り壁状の施設がみられた。壁溝は設けられていない。

住居址中央部よりやや南側の位置には、粒径20cm±～28cm±の安山岩類亜角礫を使用して平面が楕円形状に構築された1基の石囲い炉（1号炉）が設けられている。炉縁径は80cm±×70cm±を計る。構成礫はその下半部を、7cm±～16cm±の深さまで床面下の火山灰層中に埋め込まれている。この炉の使用面は床面よりも6cm±低い位置に設けられていて、その下位には層厚8cm±の現地性焼土の形成がみられる。使用面自体はほぼ平坦で、きわめて堅くしめる面となっている。この石囲い炉の北西縁部からフラスコ形ピットが位置している部分にかけては、50cm±×40cm±の範囲に層厚6cm±の現地性焼土が形成されている。一部に途切れる部分もみられるが、この地床炉的な在り方を示している焼土は石囲い炉内のものと一連の形成になるものなのであろう。石囲い炉内と同じレベルに使用面が設けられていたとみられるが、精査時点では、フラスコ形ピット内の堆積物の沈下に合わせて、現地性焼土自体が北下りの傾斜を示していた。使用面そのものはほぼ平滑で、全体にきわめて堅くしめる面となっている。1号炉の西側に位置する地床炉（2号炉）では、径42cm±の範囲に層厚7cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしめるものとなっている。

重複関係の面では、この住居址は層的にHVII-3住居址・HVII-4住居址群・HVII-5住居址および、これらのすべてを被覆する関係にある“湯沢パターン”や“長者屋敷パターン”（高橋：1979、1980）を構成する火山灰層を切っている。これらを切る部分には、前述の貼り壁状の施設が設けられている。ピットとの重複では、この住居址は明確にHVII-70フラスコ形ピットを切っている。また、北東部ではHVII-69フラスコ形ピットと重複を示しているが、当住居址はこのピットには切られていると考えられる。

HVII-3住居址（図版41ab・42a；写真図版61b）

床面上からの伴出遺物を欠くが、埋土中の土器片などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。大半の部分が後出の住居址群によって削剝を受けているために、この住居址に関する詳細はよくわからない。残存している壁の輪郭線から推定すると、径3.6m×3.0m前後の規模をもち、平面形は楕円形状の形態を示してい

たものかもしれない。

残存部での観察によれば、この住居址の埋土は主に、褐色～暗褐色土層によって構成されている。また、これについては後に触れるが、埋土の最上位には“長者屋敷パターン”を構成する層厚17cm±の火山灰層がみられる。

残存している範囲内に関する限り、床面はほぼ平坦で、比較的堅くしまるものとなっている。柱穴状のピットは、P₁（径36cm±・深さ37cm±）・P₂（径20cm±・深さ17cm±）・P₃（径20cm±・深さ22cm±）などが検出されているにすぎない。一部は後出の住居址群内に存在しているのかもしれない。壁高は、北壁35cm±・西壁44cm±を計る。壁溝は設けられていない。

重複関係の面では、この住居址はHVII-2住居址・HVII-4住居址群・HVII-5住居址・HVII-9住居址などによって切られている。

HVII-4住居址群（図版41ab・42b；写真図版59b・60c・61ab）

壁の輪郭線からみて、この住居址群は、床面を共有しあう2棟の住居址を含んでいるものではないかと考えられる。これらを今、HVII-4a住居址・HVII-4b住居址と呼称することにする。両者の新旧関係についてはよくわからないが、床面の共有性から判断して、これらは互いに時間的に密接な関係にあるものと考えられる。いずれに所属するものか明らかではないが、両住居址の重複部分の床面上から出土している一括の土器群から推定すると、これらは時期的に縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。以下、各住居址について記載する。

HVII-4a住居址（図版41ab・42b；写真図版59b・60c・61ab）

東壁から南壁にかけての部分が消失しているが、残存している壁の輪郭線から推定すると、この住居址は径3.0m±×2.7m±の規模をもち、平面形は卵形状の形態を示していたものではないかと考えられる。炉は検出されていない。

埋土は、上半部が“長者屋敷パターン”および“湯沢パターン”を構成する2枚の汚れ火山灰層で、下半部が暗褐色～黒褐色土層群でそれぞれ構成されている。最上位の層準を占める“長者屋敷パターン”を構成する汚れ火山灰層は、径500cm+ α ・最大層厚29cm±の規模をもって当住居址の内外に分布していた。この火山灰層は、不整合的に下位の“湯沢パターン”を構成する層を被覆する関係にある。“湯沢パターン”の構成層である汚れ火山灰は、当住居址の埋土の凹部を埋めこむような形で、径300cm+ α ・最大層厚47cm±の規模をもって堆積している。この下位の暗褐色～黒褐色土層群は、いくつかの層に細分されるが、いずれも自然堆積相を示している。

床面には僅かに凹凸がみられるものの全体的にはほぼ平坦で、きわめて堅くしまる面となっている。下位のHVII-5住居址の壁溝および炉には、当住居址の側から汚れ火山灰による貼り床が施されている。ピット関係については後述する。住居址の壁高は、北壁20cm±・西壁20cm±

(いずれもHVII-3住居址床面との比高)を計る。西壁から南壁にかけての部分には、幅4cm±～16cm±・深さ3cm±～6cm±の連続的な壁溝が設けられている。

当住居址とHVII-4b住居址の境界付近の床面上からは一括の土器群が得られているほか、当住居址の床面上には多くの炭化物が散布していた。

重複関係の面では、この住居址はHVII-3住居址・HVII-5住居址を切り、HVII-2住居址・HVII-9住居址には切られている。前述したように、HVII-4b住居址との新旧関係については不明である。HVII-5住居址との重複関係についてみると、同住居址の壁溝や炉が汚れ火山灰で閉塞されていた事実から考えて、当住居址は床面を再利用する形でHVII-5住居址上に載っているものであろう。HVII-4a住居址・HVII-4b住居址・HVII-5住居址ら3者間の床面はいずれも連続的である。

HVII-4b住居址(図版41ab・42b;写真図版59b・60c・61ab)

HVII-4a住居址と重複しあう西壁部分を消失しているために、この住居址の規模や形態は不明である。2.7m±×1.4m±の範囲が残存しているにすぎない。残存している壁の輪郭線から推定すると、この住居址の平面形はあるいは凸辺の長方形の形態を示していたものかもしれない。炉は検出されていない。

埋土の構成は基本的にはHVII-4a住居址のそれと同様であるために、ここではその記述を割愛することにする。

不整形ピットにより切られている部分もあるが床面は全体的にはほぼ平坦で、東側の一部軟い部分を除けば、他はきわめて堅くしまる面となっている。ピット関係については後述する。壁高は、北壁10cm±・南壁39cm±・東壁17cmを計る。東壁から南壁にかけての一部には、幅5cm±～8cm±・深さ3cm±～4cm±の連続的な短い壁溝が設けられている。

出土遺物についてもHVII-4a住居址と共通するので、ここでは特に記述しない。

重複関係の面では、この住居址はHVII-3住居址・HVII-5住居址を切り、HVII-2住居址・HVII-9住居址には切られている。前述したように、HVII-4a住居址との新旧関係については不明である。また、当住居址の床面はHVII-4a住居址・HVII-5住居址のそれと連続的であるところから、それらの重複する部分においては、住居址間に床面の再利用形態が存在しているものと考えられる。

HVII-5住居址(図版41ab・42c・127c;写真図版61b・167f)

床面や炉からの伴出遺物を欠くが、HVII-4a住居址やHVII-4b住居址との床面の共有性を手掛りにして考えると、この住居址も縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。壁は検出されていないが、この住居址固有のものであると考えられる壁溝の輪郭線から推定すると、径2.5m±×2.1m±の規模をもち、平面形は卵形状の形態を示していたものであろう。床

面中央部には1基の地床炉が設けられている。

HVII-4住居址群によって削剝されているものとみられ、固有の埋土は伴わない。

床面についてはHVII-4住居址群の項目内で記載したように、この住居址のそれは同住居址群によって再利用されているものと考えられる。床面は全方向において、HVII-4住居址群のそれと連続的である。再利用される以前の床面の本来の性状については不明である。ピット群については後に一括して述べる。北壁から西壁にかけては、幅7cm±~11cm±・深さ3cm±~4cm±の連続的な壁溝が、また東壁にあたる部分には幅4cm±~10cm±・深さ5cm±~6cm±の断続的な壁溝がそれぞれ設けられている。この壁溝内には、HVII-4住居址群の側から汚れ火山灰による貼り床が施されていた。

床面のほぼ中央部に設けられている地床炉の部位では、径44cm±の範囲に層厚1cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は床面よりも低い位置に設けられていて、きわめて堅くしまる面となっている。この使用面上には、層厚4cm±のほぼ純粋な炭化物層が堆積していた。この炉は、HVII-4住居址群の側から床面のレベルまで汚れ火山灰で堅く充填されていた。

重複関係の面では、この住居址はHVII-3住居址を切り、HVII-2住居址・HVII-4住居址群・HVII-9住居址には切られる関係にある。すでに述べているように、HVII-4住居址群との重複では床面の共有関係が認められている。

以上、HVII-3住居址・HVII-4住居址群・HVII-5住居址について記載してきた。これらの重複住居址群内には、HVII-3住居址内のもののほかに、さらに、P₄ (径15cm±・深さ11cm±)・P₅ (径15cm±・深さ16cm±)・P₆ (径22cm±・深さ29cm±)・P₇ (径13cm±・深さ11cm±)・P₈ (径13cm±・深さ5cm±)・P₉ (径23cm±・深さ22cm±)・P₁₀ (径21cm±・深さ72cm±)・P₁₁ (径36cm±・深さ25cm±)・P₁₂ (径11cm±・深さ10cm±)・P₁₃ (径19cm±・深さ28cm±)・P₁₄ (径19cm±・深さ21cm±)・P₁₅ (径18cm±・深さ18cm±)・P₁₆ (径23cm±・深さ42cm±)・P₁₇ (径30cm±・深さ60cm±)・P₁₈ (径24cm±・深さ73cm±)・P₁₉ (径36cm±・深さ11cm±)・P₂₀ (径17cm±・深さ10cm±)・P₂₁ (径12cm±・深さ15cm±)・P₂₂ (径20cm±・深さ40cm±)・P₂₃ (径85cm±・深さ20cm±)などのピット群が検出されている。これらの中には、当然のことながら各住居址の柱穴を構成するピットも含まれているものとみられるが、いずれにせよ、このピット群の具体的な位置づけや性格についてはよくわからない。

HVII-6住居址 (図版43ac; 写真図版62a・64a)

この住居址はダメ押しの段階で汚れ火山灰下位から検出されたもので、固有の遺物を欠くことや壁を消失していることなどから、所属時期や規模および形態については不明なものとなっている。西半部はダメ押しの際の深掘りによって削剝されている。住居址内のどの位置に設けられていたものか不明であるが、床面からは2基の地床炉が検出されている。

ダメ押し中での観察によれば、この住居址が検出された範囲は全体にわたって汚れ火山灰で被覆されていた。

床面にはやや凹凸のみられる部分もあるが全体的にはほぼ平坦で、比較的堅くしめる面となっている。当住居址との所属関係や、いずれが柱穴を構成するものか不明であるが、炉の周辺部からは柱穴状のものとして、P₁（径94cm±・深さ19cm±）・P₂（径30cm±・深さ46cm±）・P₃（径28cm±・深さ36cm±）・P₄（径22cm±・深さ46cm±）・P₅（径27cm±・深さ30cm±）・P₆（径23cm±・深さ35cm±）・P₇（径70cm±・深さ25cm±）・P₈（径16cm±・深さ34cm±）・P₉（径57cm±・深さ16cm±）・P₁₀（径24cm±・深さ25cm±）・P₁₁（径30cm±・深さ30cm±）・P₁₂（径29cm±・深さ41cm±）・P₁₃（径22cm±・深さ14cm±）・P₁₄（径56cm±・深さ42cm±）・P₁₅（径26cm±・深さ28cm±）・P₁₆（径30cm±・深さ8cm±）・P₁₇（径30cm±・深さ6cm±）などのピット群が検出されている。

1号炉の位置する部位では、残存部径91cm±×33cm±の範囲に層厚10cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は床面よりもいくらか低い位置に設けられていて、きわめて堅くしめる面となっている。2号炉では、残存部径85cm±×58cm±の範囲に層厚11cm±の現地性焼土が形成されている。この炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしめるものとなっている。

重複関係の面では、この住居址は、下位に位置するHⅦ-7住居址に後出するものである。東側に位置するHⅦ-8住居址やHⅦ-72プラスチック形ピットとの重複関係の有無についてはよくわからない。HⅦ-7住居址との重複では、当住居址の2号炉を中心とする範囲の床面は、同住居址の埋土上に設けられている。この範囲の床面が、HⅦ-7住居址の固有の埋土を削剝した上で設けられているのか、HⅦ-7住居址内に汚れ火山灰を充填した上で設けられているのか、その詳細については不明なものとなっている。

HⅦ-7住居址（図版43bc・127d；写真図版62b・64a・168ab）

この住居址もHⅦ-6住居址と同様にダメ押しの段階でその存在が確認されたものである。床面や炉からは遺物が出土していないが、埋土中の土器片などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。炉の一部とともに、この住居址の西半部はダメ押しの際の深掘りによって削剝を受けている。精査された範囲内に関しては保存が良好な状態で検出されている。規模は、南北径2.6m±を計る。東西径については1.7m±の範囲が残存したにすぎない。平面的な形態に関する詳細は不明である。

埋土はスコリアやパミスの在り方から2層に細分されているが、基本的にはやや汚れた褐色火山灰層で構成されている。この埋土が、自然堆積相を示しているものか人為堆積相を示しているものかについてはいずれとも明確にできなかった。

床面はほぼ平坦で、比較的堅くしめる面となっている。柱穴は検出されていない。壁高は、北壁26cm±・南壁11cm±・東壁18cm±を計る。壁溝は設けられていない。

南壁よりに設けられている炉は石囲い炉の形態をもつもので、粒径13cm±～27cm±の安山岩類亜角～亜円礫を使用して平面的には円形状に構築されている。これらの構成礫はその下半部を、3cm±～7cm±の深さまで下位の火山灰層中に埋めこまれている。石囲い部内には、層厚6cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしめる面となっている。

重複関係の面では、この住居址はHVII—6住居址に切られている。

HVII—8住居址（図版44ab・127e；写真図版63a・64b・168ce）

床面や炉からの伴出遺物を欠くが、複式炉の系統を引く炉の存在や埋土中の土器片などからみて、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。掘りすぎによって東壁の一部を消失しているが、全体的には保存が良好な状態で検出されている。規模は、径3.7m±×3.2m±を計り、平面形は卵形状に近い形態を示している。

埋土は主に、上半部が黒褐色土層で、下半部が暗褐色土層でそれぞれ構成されている。層相からみて、黒褐色土層は自然堆積相を示しているが、暗褐色土層は土器片・石器類・礫・焼土・炭化物などを含んでいて、全体に複合廃棄物的な人為堆積相を示している。

床面はほぼ平坦で、比較的堅くしめるものとなっている。柱穴は、P₁（径32cm±・深さ41cm±）・P₂（径20cm±・深さ不明）・P₃（径26cm±・深さ41cm±）など、3個のピットで構成されているものではないかと考えられる。実測図中に測定値が記入されていないためにP₂の深さは不明なものとなっているが、これがある程度の深さをもつものであることは写真からも読み取ることができよう。この住居址内からは上記の柱穴群のほかに、P₄（径20cm±・深さ17cm±）・P₅（径38cm±・深さ17cm±）・P₆（径19cm±・深さ7cm±）・P₇（径28cm±・深さ16cm±）・P₈（径38cm±・深さ10cm±）などのピット群が検出されているが、これらの具体的な位置づけや性格については明らかではない。住居址の壁高は、北壁34cm±・南壁13cm±・西壁33cm±を計る。壁溝は設けられていない。

この住居址の炉は南東壁よりに設けられていて、地床炉的な部分と石囲い部および前庭部の3単位で構成されている。地床炉的な部分は、それぞれが独立的な2つの現地性焼土群から成っている。これらのうち、床面中央部よりに位置するものは径54cm±・層厚9cm±の規模のもので、その使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしめる面となっている。石囲い部よりのものは径30cm±・層厚9cm±の規模のもので、床面よりも低い位置にその使用面が設けられている。使用面は凹凸のある面となっていて、きわめて堅くしまっている。石囲い部は、粒径8cm±～40cm±の安山岩類亜角～亜円礫を使用して、平面形が長方形に構

築されている。この部位の構成礫はその下半部を、6cm±～20cm±の深さまで下位の火山灰層中に埋めこまれている。この石囲い部内の底面は床面よりも24cm±低い位置に設けられていて、平坦で比較的堅くしまる面となっている。この部内には現地性焼土の形成は認められていない。前庭部には構成礫はみられず、床面を切りこんで深さ20cm±の位置にその底面が設けられている。底面には僅かに凹凸があつて、きわめて堅くしまる面となっている。この前庭部内には、底面よりも数cm上位に位置して粒径10cm±～28cm±の安山岩類亜角～亜円礫群がみられるが、これらはその在り方から判断して2次的にこの部位にもたらされているものであると考えられる。石囲い部内と同様に、前庭部内にも現地性焼土の形成は認められていない。

重複関係の面ではこの住居址は単独で検出されたもので、他の遺構との切り合いはみられない。南壁部の下位にはHⅦ-72フラスコ形ピットが位置しているが、当住居址との直接的な重複関係は認められていない。

HⅦ-9住居址（図版44cd・127f；写真図版63b・64c・168d・169a・261f）

複式炉の系統を引く炉の存在や床面上の一括土器からみて、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。掘りすぎなどによって壁が消失した部分もあるために、比較的残存が不良な状態で検出されている。したがって、規模や形態の詳細についてはよくわからないが、残存している壁の輪郭線から推定すると、この住居址は4.7m×4.5m前後の規模をもち、平面形は卵形状に近い形態を示していたものではないかと考えられる。東壁沿いに設けられている複式炉系統の炉のほかに、西壁よりの床面上には1基の地床炉がみられる。

埋土はいくつかの層に細分されるが、基本的には上半部が黒褐色土層で、下半部が暗褐色土層でそれぞれ構成されている。これらの埋土はいずれも、土器片・石器類・礫・焼土・炭化物などを著しく多く含んでいて、全体に複合廃棄物的な人為堆積相を示している。

床面はほぼ平坦で、比較的堅くしまるものとなっている。柱穴は、P₁（径42cm±・深さ44cm±）・P₂（径38cm±・深さ47cm±）・P₃（径50cm±・深さ41cm±）・P₄（径43cm±・深さ38cm±）などのピット群で構成されているものと考えられる。壁高は、北壁15cm±・南壁33cm±・東壁15cm±・西壁56cm±を計る。壁溝は設けられていない。

東壁沿いに設けられている複式炉（1号炉）は、大きく捉えれば石囲い部と前庭部との2つの単位から成るもので、規模は全長246cm±・最大幅134cm±を計る。一部で構成礫を欠く部分もあるが、石囲い部は粒径15cm±～47cm±の安山岩類亜角～亜円礫を使用して、平面形がダルマ形の形態に構築されている。この部位の構成礫はその下半部を、4cm±～7cm±の深さまで下位の火山灰層中に埋めこまれている。石囲い部内はくびれ部を境にして、上位面と下位面に2分されている。この境界部には構成礫や構成礫の抜き取り痕などはみられない。上位面は床面よりも10cm±低い位置に設けられていて、平坦できわめて堅くしまる面となっている。この

部位には、最大層厚7cm±の現地性焼土が形成されている。下位面は床面よりも14cm±～26cm±低い斜面となっていて、面は平滑できわめて堅くしまるものとなっている。この部位には、最大層厚5cm±の現地性焼土が全面にわたって形成されている。

前庭部はいわゆる仕切り石状の施設を境界にして、石囲い部とは反対の方向に平面形がデルマ形の形状に構築されている。この前庭部内も、くびれ部を境にして上位面と下位面に2分されている。上位面は両側縁部に、粒径28cm±～65cm±の安山岩類亜角～亜円の扁平礫を埋めこんで作られている。この上位面の底面は、下位に位置するHⅦ—10住居址の埋土上に汚れ火山灰を堅く敷設した上で設けられており、面はほぼ平滑なものとなっている。この面は床面よりも28cm±低い位置にある。下位面は上位面よりも10cm±低い位置にあって、面はほぼ平坦できわめて堅くしまるものとなっている。この下位面は、その一部が住居址壁よりも僅かに外部に張り出す施設となっている。上位面および下位面ともに、前庭部内には現地性焼土の形成は認められていない。

西壁よりに位置する地床炉(2号炉)は、精査中に西半部の一部が削剥されていて、径33cm±×24cm±の範囲が残存していたにすぎない。この部位に形成されているものは薄層厚の現地性焼土で、その使用面は比較的軟弱なものとなっている。この面上には炭化材・炭化物の散在がみられた。

当住居址からの出土遺物としては、複式炉前庭部の南側床面上から得られた深鉢形土器や、前庭部内に位置していた磨石などがある。埋土中からは多量の土器とともに、磨石や削器などの石器類や碎屑物状のコハク塊などが出土している。

重複関係の面では、この住居址は層位的にHⅦ—3住居址・HⅦ—4住居址群・HⅦ—5住居址およびHⅦ—10住居址を切っている。またピット類との関係では、HⅦ—71フラスコ形ピット・HⅦ—74フラスコ形ピットを切っている。

HⅦ—10住居址(図版45ab;写真図版65a・67a)

床面上からの伴出遺物を欠くが、埋土中の土器片などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものではないかと考えられる。全体的に残存状態が不良な形で検出されている。北壁西半部や東壁が消失しているために、この住居址の規模や形態についてはよくわからない。炉は検出されていない。

埋土はいくつかの層に細分されるが、基本的には主に暗褐色土層により構成されている。

床面はいくらか凹凸のある面となっていて、比較的堅くしまっている。柱穴を構成するものかどうか不明であるが、柱穴状のピットとして、P₁(径18cm±・深さ10cm±)・P₂(径52cm±・深さ25cm±)・P₃(径11cm±・深さ8cm±)などが検出されている。残存部での壁高は、北壁20cm±・南壁25cm±・西壁54cm±を計る。壁溝は設けられていない。

重複関係の面では、この住居址は層位的にHⅦ—9住居址によって切られている。またピットとの関係では、この住居址はHⅦ—76フラスコ形ピットにより切られている。しかし、HⅦ—75フラスコ形ピットとの新旧関係についてはよくわからない。

HⅦ—11住居址

整理時の不手際から、大型ピットに対して住居址登録がなされたものであるために、ここでこの住居址を欠番扱いとし、新たにHⅦ—87ピットの項目内でこの遺構の詳細を述べることにする。

HⅦ—12住居址（図版45cd・128ad；写真図版65b・169bcd）

床面上の土器群や炉の形態からみて、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。精査中に掘りすぎがみられた部分を除けば、比較的保存が良好な状態で検出されている。この住居址の直上にはHⅦ—13住居址が位置しているが、両住居址の在り方から判断して、これらの間には全周にわたって壁の共有関係があるものと推定される。他の部位については、両住居址の間に再利用形態の存在などは認められていない。規模は径3.6m±×3.5m±を計り、平面形は凸辺の三角形の形態を示している。南壁よりには、埋設土器を伴う1基の複式炉系統の炉が設けられている。

この住居址は固有の埋土を欠き、HⅦ—13住居址の側から層厚3cm±～18cm±の汚れ火山灰を使用した貼り床が全体に施されている。

床面には凹凸があって、きわめて堅くしまる部分と比較的軟い部分とから構成されている。柱穴配置については不明であるが、柱穴状のものとして、P₁（径22cm±・深さ18cm±）・P₂（径14cm±・深さ27cm±）・P₃（径16cm±・深さ13cm±）・P₄（径35cm±・深さ62cm±）・P₅（径18cm±・深さ16cm±）・P₆（径27cm±・深さ20cm±）などのピット群が検出されている。住居址の壁高は、北壁77cm±・南壁24cm±・東壁20cm±・西壁47cm±を計る。壁溝は設けられていない。

南壁よりに設けられている複式炉は石囲い部と前庭部の2つの単位から成るもので、全長は130cm±を計る。石囲い部は、粒径5cm±～27cm±の安山岩類亜角～亜円礫を使用して、平面形が長方形に構築されている。この部位の構成礫は、その下半部を3cm±の深さまで下位の火山灰層中に埋めこまれている。石囲い部内には、2個体の深鉢形土器が斜位の状態で2重に埋設されていた。これらの斜位埋設土器を中心とする範囲には、層厚5cm±の現地性焼土の形成がみられる。石囲い部内の使用面は床面よりも僅かに低い位置に設けられていて、ほぼ平滑で比較的軟い面となっている。前庭部は石囲い部端からやや南東方向に位置し、その底面は床面よりも15cm±低いレベルに設けられている。この底面はほぼ平坦で、全体にきわめて堅くしまる面となっている。精査中に掘りすぎているために、側縁部の状況や形態についてはよくわからない。この前庭部内には現地性焼土の形成は認められていない。

当住居址からの出土遺物としては、炉の埋設土器のほかに、北壁沿いおよび西壁よりの床面

上から得られた3個体分の深鉢形土器破片がある。

重複関係の面では、この住居址は層位的に、HVII-13住居址に全形を被覆する形で切られている。

HVII-13住居址（図版45c・46ab・128a；写真図版65b・66a・67b・169de・170a・262a）

床面上や埋土中の出土土器からみて、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。全体に保存が良好な状態で検出されている。この住居址は直下に位置するHVII-12住居址の壁を全周にわたって再利用しているものとみられ、同住居址と規模や形態が一致する在り方を示している。住居址の中央部付近には1基の石囲い炉が設けられている。

埋土は主に、上部が暗褐色土のブロックを多量に包含する黒色土で、下部が暗褐色～黒褐色土層群でそれぞれ構成されている。これらの埋土はいずれも自然堆積相を示している。

床面は、直下のHVII-12住居址の全体に層厚3cm±～8cm±の汚れ火山灰を敷設した上で設けられている。この貼り床の上面はほぼ平坦で、堅くしまるものとなっている。柱穴状のピットなどは検出されていない。壁高は、北壁61cm±・南壁21cm±・東壁17cm±・西壁29cm±を計る。壁溝は設けられていない。

住居址の中央部付近に設けられている石囲い炉は、粒径6cm±～24cm±の安山岩類亜角～垂円礫を使用して、平面形が長方形に近い形態に構築されている。これらの構成礫はその下半部を、床面下1cm±～5cm±の深さまで埋めこまれている。石囲い部内の使用面は床面よりも低い位置に設けられていて、この部位には最大層厚8cm±の現地性焼土の形成がみられる。使用面自体はほぼ平滑で、比較的堅くしまる面となっている。この炉の直下には、HVII-12住居址の石囲い炉が位置している。

重複関係の面では、この住居址は層位的に、全形に載る形でHVII-12住居址を切っている。その他の遺構との切り合いは認められていない。

HVII-14住居址（図版46cd・128e；写真図版66b・170b）

床面上や炉などから土器は出土していないが、埋土中の土器片などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。比較的保存が良好な状態で検出されている。規模は径3.2m±×2.7m±を計り、平面形は楕円形状に近い形態を示している。住居址中央部付近には、埋置礫を伴う1基の炉が設けられている。

埋土は上位より、黒褐色土層（a層）・暗褐色土層（b層）・褐色～暗褐色土層（c・d層）などで構成されている。これらの中で、b～d層は土器片・石器類・礫・焼土・炭化物などを多く含んでいて、全体に複合廃棄物的な人為堆積相を示している。

床面には軽微な凹凸は認められるものの全体的にはほぼ平坦で、比較的軟弱な面となっている。具体的な柱穴配置は不明であるが、柱穴状のものとして、P₁（径22cm±・深さ28cm±）・P₂

(径26cm±・深さ7cm±)・P₃(径31cm±・深さ12cm±)・P₄(径36cm±・深さ43cm±)・P₅(径53cm±・深さ17cm±)・P₆(径33cm±・深さ44cm±)・P₇(径26cm±・深さ35cm±)・P₈(径33cm±・深さ12cm±)などのピット群が検出されている。壁高は、北壁30cm±・南壁20cm±・東壁25cm±・西壁51cm±を計る。壁溝は設けられていない。

住居址中央部付近に設けられている炉は、1個の埋置礫と地床炉的な部分とから成るもので、この部位には、径35cm±×30cm±の範囲に層厚6cm±の現地性焼土が形成されている。埋置礫は粒径23cm±の安山岩垂円礫を使用したもので、その下半部は5cm±の深さまで床面下の火山灰層中に埋めこまれている。この炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられており、やや軟弱な面となっている。

性格は不明であるが、炉の北部には粒径24cm±の1個の流紋岩垂角礫が存在していた。

重複関係の面では、この住居址は単独で検出されたもので、他の遺構との切り合いは認められていない。

HVII—15住居址(図版46g;写真図版68a・170cd)

床面上や炉からの伴出遺物を欠くために、この住居址の所属時期は明らかではない。ほとんど表土直下から検出されたもので削剝されているものか東側から南側にかけての壁や床面の一部は消失している。西側に残存している壁の輪郭線から推定すると、この住居址は径2.7m前後の規模をもち、平面形は円形状の形態を示していたものかもしれない。1基の石囲い炉が設けられている。

床面のすぐ近くまで削剝を受けているために、この住居址固有の埋土の状況については不明である。

床面には全体的に凹凸があって、比較的軟いものとなっている。具体的な配置に関してはよくわからないが、柱穴状のものとして、P₁(径25cm±・深さ26cm±)・P₂(径20cm±・深さ23cm±)・P₃(径23cm±・深さ54cm±)・P₄(径21cm±・深さ35cm±)などのピット群が検出されている。残存部での壁高は、北壁6cm±・西壁7cm±を計る。壁溝は設けられていない。

石囲い炉は、粒径17cm±～23cm±の安山岩垂角礫3個を使用して構築されている。これらの構成礫はその下半部を、床面下位の火山灰層中に埋めこまれている。構成礫を欠く部分には、礫の抜き取り痕などは観察されていない。石囲い部内には全体にわたって現地性焼土の形成がみられるが、断面観察が行われていないために層厚は不明である。使用面は堅くしまっている。

重複関係の面では、この住居址は単独で検出されたもので、他の遺構との切り合いは認められていない。

HVII—16住居址(図版46ef・128bcf;写真図版67c・68b・170ef・171ac)

床面上や炉からは時期決定資料となる遺物は出土していないが、複式炉の系統を引く炉の存

在や埋土中の土器片などからみて、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。全体に保存が良好な状態で検出されている。規模は径3.4m±×2.9m±を計り、平面形は卵形状に近い形態を示している。炭化材・炭化物・焼土などの分布からみて、この住居址は焼失を受けているものではないかと考えられる。

埋土は主に暗褐色土層により構成されている。この層の下底部付近には、住居の焼失に際して形成されたものが起源であると考えられる炭化材・炭化物・焼土が著しく多く含まれている。この暗褐色土層の上位には、黒色～黒褐色土層群が発達している。

床面にはいくらかの凹凸があつて、全体的にやや軟弱なものとなっている。具体的な柱穴配置については不明であるが、柱穴状のものとして、P₁ (径19cm±・深さ15cm±)・P₂ (径22cm±・深さ27cm±)・P₃ (径32cm±・深さ42cm±)・P₄ (径20cm±・深さ32cm±)などのピット群が検出されている。住居址の壁高は、北壁60cm±・南壁11cm±・東壁14cm±・西壁21cm±を計る。壁溝は設けられていない。

東壁よりに設けられている複式炉（1号炉）は石囲い部と前庭部の2つの単位から成るもので、規模は全長110cm±・最大幅90cm±を計る。北側で構成礫を欠いているが、残存している部分でみると、石囲い部は粒径10cm±～19cm±の安山岩類垂角～亜円礫で構成されている。これらの構成礫は5cm±の深さまでその下半部を床面に埋めこまれている。石囲い部内の使用面は床面よりも5cm±～7cm±低い位置に設けられていて、比較的軟い面となっている。全体にわたってではないが、この部位には最大層厚2cm±の現地性焼土が形成されている。この使用面上には、層厚5cm±～6cm±の炭化物片を含む黒褐色土層と、さらにその上位に載る炭化材群の堆積がみられる。前庭部はいわゆる仕切り石で石囲い部とは境されていて、両側縁部に粒径11cm±～29cm±の安山岩類垂角～亜円礫を使用して、平面形が放物線状に構築されている。この部位の構成礫もその下半部を床面下に埋めこまれている。前庭部内の底面は床面よりも僅かに低い位置に設けられていて、ほぼ平坦できわめて堅くしまる面となっている。この前庭部内には現地性焼土の形成は認められていない。

西壁よりに位置する径49cm±×30cm±・層厚5cm±の現地性焼土は、その在り方から判断して、当住居址の焼失に際して形成されたというよりは、むしろ地床炉（2号炉）を構成していると思われるものであろう。この炉の使用面は床面よりも僅かに高い位置に設けられていて、比較的軟弱な面となっている。

住居址の焼失に際して形成されたと考えられる異地性の焼土・炭化材・炭化物などの群は、径170cm±×50cm±の広がり層厚6cm±の規模をもって、北壁沿いの床面上に分布している。これら焼土・炭化材・炭化物は大半の部分で混在する在り方を示しているが、地点によっては焼土や炭化材が独立的に存在している部分もある。また、これらの直下の床面には、僅かな範

囲ながら薄層厚の現地性焼土が形成されている個処もある。

当住居址からの出土遺物としては、複式炉の前庭部北側の側縁部端に2次的に使用されていた安山岩製の石皿破片や、床面中央部付近に位置していた粒径25cm±の、安山岩亜角礫を使用した台石がある。

重複関係の面では、この住居址は層位的にHVII-151配石遺構の下位に位置している。その他の遺構との切り合いは認められていない。

HVII-17住居址（図版47a・129a；写真図版69a・171b）

床面や炉からの伴出遺物を欠くが、複式炉の系統を引くとみられる炉の存在や埋土中の土器片などからみると、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。一部を除けば、全体に残存が不良な状態で検出されている。北壁・東壁・南壁などのそれぞれ全部または一部が消失しているために、この住居址の規模や形態については明らかではない。残存している壁の輪郭線から推定すると、平面形は楕円形状の形態を示していたものかもしれない。

精査に不手際があったために土層断面図は作成されていないが、Field Cardの記載によれば、この住居址床面上の堆積物は下位より、黒褐色土層（層厚23cm±）・汚れ火山灰層（層厚17cm±）・黒色土層～表土層（層厚25cm±）などによって構成されている。これらの中で、中央部の層準を占める汚れ火山灰層は、層相やその在り方からみて、“長者屋敷パターン”の構成員として位置づけられるものではないかと考えられる。

床面はほぼ平坦で、全体に軟い面となっている。柱穴配置については不明である。この住居址との共伴関係についてはよくわからないが、柱穴状のものとして、P₁（径53cm±・深さ38cm±）・P₂（径30cm±・深さ37cm±）などのピット群が検出されている。残存部での壁高は、北壁12cm±・西壁42cm±を計る。壁溝は設けられていない。

北東壁よりに設けられている複式炉系統の炉は、石囲い部と前庭部との2つの単位から成るもので、全長210cm±を計る。石囲い部は、粒径13cm±～28cm±の安山岩類亜角～亜円礫を使用して、平面形が楕円形状に構築されている。これらの構成礫は、その下半部を2cm±～9cm±の深さまで床面下に埋めこまれている。全体にわたってではないが、この石囲い部内には、層厚5cm±の現地性焼土の形成がみられる。この部位の使用面は床面よりも低い位置に設けられていて、比較的軟弱な面となっている。前庭部は石囲い部の北東部に位置する細長い楕円形状のピットで、その底面は床面よりも22cm±低いレベルに設けられて、ほぼ平坦で比較的堅くしまる面となっている。この前庭部には現地性焼土の形成は認められていない。

重複関係の面では、この住居址は単独で検出されたもので、他の遺構との切り合いはみられない。

HVII-18住居址（図版47bc・48a・129c；写真図版69b・70a・71a・171de・261b・262bcde）

床面直上から出土している土器群からみて、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。比較的保存が良好な状態で検出されている。規模は径3.0m±×2.4m±を計り、平面形は東半部が方形状を、西半部が円形状の形態をそれぞれ示している。住居址の中央部付近には1基の石囲い炉が設けられている。

埋土は主に、暗褐色～黒褐色土層で構成されている。これらはいずれも自然堆積相を示している。

床面には凹凸があって、全体に堅くしまるものとなっている。柱穴配置については不明である。柱穴状のものとして、P₁（径24cm±・深さ33cm±）・P₂（径30cm±・深さ20cm±）・P₃（径29cm±・深さ51cm±）などのピット群が検出されている。これらの中で、P₂は、石囲い炉内に位置する在り方からみて、あるいは木根などの痕跡を示しているものかもしれない。このほかに、当住居址内には深さ3cm±～8cm±の小ピット群が検出されているが、これらについても木根などの痕跡を示しているものではないかと考えられる。住居址の壁高は、北壁34cm±・南壁18cm±・東壁25cm±・西壁28cm±を計る。壁溝は設けられていない。

住居址中央部付近に設けられている石囲い炉は、粒径7cm±～32cm±の安山岩垂角～垂円礫を使用して構築されている。これらの構成礫は、最大で7cm±の深さまでその下半部を下位の火山灰層中に埋めこまれている。構成礫の残存状況から推定して、この炉の一部は破壊を受けているものではないかと考えられる。石囲い部内には痕跡的に薄い現地性焼土が形成されていたのみで、床面よりも僅かに低い位置に設けられている使用面はかなり軟弱な面となっていた。

当住居址からの出土遺物としては、床面直上およびそれ近くの層準に横位の状態で存在していた、完形のもとを主体とする数個体の深鉢形土器群がある。これらの土器群の中には、丹塗り土器破片も含まれていた。

重複関係の面では、この住居址は南側に位置するHVII-19住居址を切っている。

HVII-19住居址（図版47de・48a・129e；写真図版70b・71b・172ab）

炉の埋設土器や埋土中の土器片などからみて、この住居址は縄文時代中期中葉期に位置づけられるものであろう。炉や床面などの一部を除けば、大半の部分は残存が不良な状態で検出されている。全周にわたって壁が消失しているために規模や形態については詳細が不明であるが、床面の観察などから推定すると、この住居址は径5.3m前後の規模をもち、平面形は円形状の形態を示していたものではないかと考えられる。住居址の中央部付近と考えられる位置には、埋設土器を伴う1基の石囲い炉が設けられている。

埋土はいくつかの層に細分されるが、基本的には自然堆積相を示す暗褐色～黒褐色土層により構成されている。

床面は全体的にほぼ平坦で、やや軟弱な面となっている。柱穴は検出されていない。

石囲い炉は、粒径13cm±~44cm±の安山岩類亜角礫を使用して、平面形が長方形の形態に構築されている。この部位の構成礫は、その下半部を床面下4cm±~9cm±の深さまで埋め込まれている。石囲い部内には、深鉢形土器底部破片が直立の状態で埋設されている。この炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、凹凸に富む面は全体に比較的軟いものとなっている。すべてにわたってではないが、この石囲い炉内には層厚5cm±の現地性焼土の形成がみられる。炉の規模は82cm±×72cm±を計る。

床面上の敷地点には、粒径7cm±~34cm±の安山岩類亜角~亜円礫群が散在している。これらの性格についてはよくわからない。

重複関係の面では、この住居址は北部をHVII-18住居址によって切られている。

HVII-20住居址（図版49ab・129b；写真図版71c・72a・172cd）

複式炉の系統を引くとみられる炉の存在や、床面および埋土中から出土している土器片などからみると、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。浸食によって削剝を受けている部分や精査中の掘りすぎ個処などを除けば、他の範囲は比較的残存が良好な状態で検出されている。北壁・東壁・南壁のそれぞれ全部または一部が消失しているために規模や形態の詳細についてはよくわからないが、残存している壁の輪郭線や柱穴の配置などから推定すると、この住居址は3.2m×2.5m前後の規模をもち、やや凸辺の長方形の形態を示していたものではないかと考えられる。

残存していた部分での観察によれば、この住居址の埋土は主に自然堆積相を示す暗褐色土層により構成されている。

床面はほぼ平坦で、かなり軟弱な面となっている。具体的な柱穴配置についてはよくわからないが、柱穴を構成すると考えられるピットとして、P₁(径24cm±・深さ43cm±)・P₂(径49cm±・深さ42cm±)・P₃(径38cm±・深さ60cm±)などが検出されている。これらのほかに、性格の不明なP₄(径28cm±・深さ10cm±)が検出されている。これもあるいは柱穴群の一部を構成するピットであるのかもしれない。残存部での壁高は、北壁12cm±・西壁7cm±を計る。壁溝は設けられていない。

複式炉は石囲い部と前庭部との2つの単位から成るもので、全長92cm±・最大幅57cm±を計る。石囲い部は、粒径10cm±~23cm±の安山岩類亜角~亜円礫を使用して、平面形は円形状に構築されている。この部位の構成礫は、4cm±の深さまでその下半部を床面下に埋め込まれている。石囲い部内には層厚5cm±の現地性焼土が形成されている。この炉の使用面は床面よりも僅かに低い位置にあって、比較的軟弱な面となっている。前庭部は石囲い部の東側に位置する円形状のピットで、その底面は床面よりも10cm±低いレベルに設けられている。この底面はほぼ平滑で、きわめて堅くしまるものとなっている。この前庭部内には現地性焼土の形成は認

められていない。

当住居址からの出土遺物としては、複式炉南西部の床面上から得られた1個体の深鉢形土器がある。

重複関係の面では、この住居址は単独で検出されたもので、他の遺構との切り合いは認められていない。

HVII—21住居址（図版50a・129h；写真図版72b・172ef）

床面や炉からの伴出遺物を欠くが、埋土中の土器片などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。東半部や南半部は掘りすぎや壁を消失していることなどから残存が不良であるが、北西部分を中心とする範囲では比較的保存が良好な状態で検出されている。東壁から南壁にかけての範囲が消失しているために、規模や形態についてはよくわからないが、残存している壁の輪郭線から推定すると、この住居址は径3.0m前後の規模をもち、平面形が円形状の形態を示していたものではないかと考えられる。住居址中央部付近と考えられる位置には、1基の石囲い炉が設けられている。

土層断面図は作成されていないが、Field Cardの記載によれば、この住居址の埋土は主に自然堆積相を示す黒色土層で構成されていた。

床面はほぼ平坦で、全体的に軟弱な面となっている。具体的な柱穴配置については不明であるが、柱穴状のものとして、P₁（径32cm±・深さ25cm±）・P₂（径22cm±・深さ6cm±）などのピット群が検出されている。残存部での壁高は、北壁11cm±・西壁15cm±を計る。壁溝は設けられていない。

石囲い炉は、粒径17cm±～29cm±の安山岩亜角～亜円礫を使用して構築されている。これらの構成礫は、いずれもその下半部を床面下2cm±の深さまで埋めこまれている。南東部を中心とする範囲の炉縁部には構成礫を欠いているが、この部位には礫の抜き取り痕などは認められていない。この炉の使用面は床面よりも低い位置に設けられていて、その面下には層厚7cm±の現地性焼土が形成されている。使用面自体は凹凸のある面となっていて、比較的軟弱なものとなっている。また、この使用面上には細片状の炭化材が散在していた。

この石囲い炉の東側には、粒径28cm±の安山岩の埋置礫がある。この礫の性格についてはよくわからないが、もしこれが前庭部北側側縁部を構成していた礫の残存であるとする、ここにみられる炉は、全体として複式炉の系統を引くものとして位置づけることができよう。

この住居址は南側でHVII—86ピットと重複を示しているが、両者間の新旧関係の詳細は不明である。

HVII—22住居址（図版50bc・129g；写真図版73a・74a・173ac）

床面や炉からの伴出遺物を欠くが、埋土中の土器片や炉の形態などを参考にして推定すると、

この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。後出の住居址によって一部が切られていることや精査中に掘りすぎがみられたことなどから、全体的に残存が不良な状態で検出されている。北東部分は調査区域外に位置しているために、この住居址は6.3m×3.2m前後の範囲が検出されているにすぎない。残存している壁の輪郭線から推定すると、この住居址の平面形はやや凸辺の方形状を基調とする形態を示しているものであろう。

残存部での観察によれば、この住居址の埋土は主に自然堆積相を示す暗褐色土層により構成されている。この上位には“湯沢パターン”を構成する汚れ火山灰層が載るが、これについては次項目内で記載することにする。

床面は僅かに北に下る平滑な面となっていて、きわめて堅くしまっている。この床面は、一部が後出のHⅦ-23住居址に切られ、また一部が同住居址によって再利用されている。ピット関係については後に一括して述べる。壁高は、南壁66cm±・東壁18cm±・西壁26cm±を計る。壁溝は設けられていない。

精査された範囲内から検出された2基の地床炉の中で、在り方から判断して、1号炉が当住居址に伴うものではないかと考えられる。1号炉の位置する部位では、径64cm±×58cm±の範囲に層厚3cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は床面よりも低い位置に設けられていて、きわめて堅くしまる面となっている。炉の中央部はピットP₁₅に切られている。

重複関係の面では、この住居址はHⅦ-23住居址に切られている。北西部で重複するHⅦ-77フラスコ形ピットとの新旧関係については不明である。

HⅦ-23住居址（図版50bc・129g；写真図版73a・74a・173ac）

床面や炉からの伴出遺物を欠くが、埋土中の土器片や炉の形態などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。壁の大半が消失していることや一部が調査区域外に位置していることなどから、比較的保存が不良な状態で検出されている。残存している壁や壁溝の輪郭線から推定すると、この住居址は径4.0m前後の規模をもち、平面形は円形状の形態を示していたものではないかと考えられる。

埋土は、下部が褐色～暗褐色土層で、上部が汚れ火山灰層でそれぞれ構成されている。これらの中で、下部の層準は自然堆積相を示しているが、上部の汚れ火山灰層は“湯沢パターン”の構成員で、人為堆積相を示す火山灰の単純廃棄物から成っている。この火山灰層は、径3.3m±・層厚40cm±の規模をもって分布している。

細かい凹凸は認められるものの床面はほぼ平坦に近く、きわめて堅くしまる面となっている。この床面は、先行するHⅦ-22住居址の床面の南部を削剝し、北部を再利用した上で設けられている。ピット関係については後に一括して述べることにする。残存している部分で、壁高は南壁66cm±を計る。この部分の壁はHⅦ-22住居址のそれと共有関係にあるのではないかとみ

られる。南西部には、幅4cm±～18cm±・深さ4cm±～5cm±の断続的な壁溝が設けられている。この壁溝の設けられている北側では、床面はHⅦ-22住居址のそれと連続的なものとなっている。

精査によって検出された2基の地床炉の中で、配置からみて2号炉が当住居址に所属するものではないかと考えられる。この2号炉の部位では、径54cm±×43cm±の範囲に層厚5cm±の現地性焼土が形成されている。この炉の使用面は床面よりもいくらか低い位置に設けられていて、きわめて堅くしめる面となっている。

重複関係の面では、この住居址はHⅦ-22住居址を切っている。

以上、HⅦ-22住居址・HⅦ-23住居址について個別的に記載してきた。これら両住居址の具体的な柱穴配置についてはよくわからないが、柱穴状のものとして、P₁ (径20cm±・深さ17cm±)・P₂ (径17cm±・深さ15cm±)・P₃ (径20cm±・深さ11cm±)・P₄ (径20cm±・深さ50cm±)・P₅ (径23cm±・深さ42cm±)・P₆ (径29cm±・深さ17cm±)・P₇ (径25cm±・深さ28cm±)・P₈ (径20cm±・深さ37cm±)・P₉ (径29cm±・深さ59cm±)・P₁₀ (径39cm±・深さ57cm±)・P₁₁ (径30cm±・深さ70cm±)・P₁₂ (径58cm±・深さ56cm±)・P₁₃ (径28cm±・深さ35cm±)・P₁₄ (径16cm±・深さ10cm±)・P₁₅ (径16cm±・深さ8cm±)などのピット群が検出されている。これらのうち、P₁・P₁₁・P₁₂・P₁₃などは位置からみて、HⅦ-22住居址に伴うものであろう。また、配置から判断して、P₄・P₅・P₉・P₁₀などはHⅦ-23住居址の柱穴を構成するピット群と考えられるのかもしれない。上記のピット群のほかに、これらの住居址内からは、深さ4cm±～6cm±の小ピット群が検出されているが、いずれもその具体的な位置づけや性格についてはよくわからない。

HⅦ-24住居址 (図版49c・129d；写真図版73b・173b)

床面や炉からの伴出遺物を欠くが、埋土中の土器片などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。東半部の壁や床面などの一部が消失していて、全体に保存が不良な状態で検出されている。残存していた壁の輪郭線から推定すると、この住居址は径3.5m×2.4m前後の規模をもち、平面形は楕円形状の形態を示していたものではないかと考えられる。床面には地床炉が設けられている。

床面はほぼ平坦で、きわめて堅くしめる面となっている。具体的な柱穴配置については不明であるが、柱穴状のものとして、P₁ (径28cm±・深さ20cm±)・P₂ (径23cm±・深さ27cm±)・P₃ (径22cm±・深さ6cm±)などのピット群が検出されている。残存部での壁高は、西壁4cm±・南壁4cm±を計る。壁溝は設けられていない。

地床炉は床面中央部よりもやや南東部に位置し、この部位では径80cm±×40cm±の範囲に層厚7cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしめる面となっている。

重複関係の面では、この住居址はH VII—202焼土遺構を切っている。

(高橋 文夫)

I II区

I II—1住居址 (図版 51a ; 写真図版 75a)

床面からの伴出遺物を欠くが、埋土中の土器片などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代前期前半期に位置づけられるものであろう。床面中央部付近から東南部にかけての床面や壁が削剥されていて、全体に残存が不良な状態で検出されている。残存部の壁の輪郭線から推定すると、この住居址は径3.5m±×3.0m±の規模をもち、楕円形状の形態を示していたものであろう。炉は検出されていない。

土層断面図は作成していないが、埋土は主に暗褐色土層により構成されている。

床面は南側に向けて僅かに下る傾斜をみせているが全体にほぼ平坦で、比較的堅くしまるものとなっている。明確な柱穴は検出されていないが、性格不明のものとしては、P₁(径28cm±・深さ4cm±)・P₂(径30cm±・深さ8cm±)・P₃(径20cm±・深さ6cm±)・P₄(径19cm±・深さ8cm±)・P₅(径21cm±・深さ14cm±)・P₆(径24cm±・深さ13cm±)・P₇(径21cm±・深さ10cm±)・P₈(径20cm±・深さ11cm±)・P₉(径47cm±・深さ29cm±)などの小ピット群がみられる。壁高は、北壁21cm±・南壁5cm±・西壁15cm±を計る。また北壁沿いには、幅9cm±~13cm±・深さ4cm±の壁溝が設けられている。

床面の中央部付近には、泥流堆積物起源の粒径54cm±の安山岩壱円礫がみられる。

重複関係の面では、この住居址は単独で検出されたもので、他の遺構との切り合い関係は認められていない。

(高橋 文夫)

I VI区

I VI—1住居址 (図版 51b ; 写真図版 75b)

この住居址は縄文時代前期に位置づけられるもので、凸辺長方形形状の形態を示し、規模は、径2.6m±×2.1m±を計る。南壁沿いの西側一部には若干の掘りすぎがみられる。炉は伴わない。

埋土は、主に暗褐色土の単層で構成されている。土層断面図の作成は省略した。

床面はほぼ平坦で、僅かに堅くしまるものとなっている。柱穴状のピットとして、P₁(径28

cm±・深さ21cm±)が検出されている。壁高は、北壁23cm±・南壁3cm±・東壁8cm±・西壁15cm±を計る。西壁沿いには、幅7～13cm±・深さ3～5cm±の壁溝が設けられている。

この住居址は単独で検出されたもので、他の遺構との重複関係は認められていない。

(高橋 文夫)

I VII区

I VII-1 住居址 (図版52ab・129f・130a ; 写真図版74b・76a・173de)

床面上の土器片や炉の埋設土器からみて、この住居址は縄文時代中期中葉期に位置づけられるものであろう。保存が良好な状態で検出されている。規模は4.1m±×4.0m±を計り、卵形状に近い形態を示している。住居址の中央部付近には埋設土器で構成される1基の炉が設けられている。

埋土は、上部が褐色・黒褐色土層で、中部が暗褐色・黒色土層で、下部が褐色土層でそれぞれ構成されている。最下部層中にみられる異地性焼土の堆積を除けば、これらの埋土は全体的に自然堆積相を示している。

床面はほぼ平坦で、全体にきわめて軟弱な面となっている。柱穴は、P₁(径30cm±・深さ50cm±)・P₂(径35cm±・深さ47cm±)・P₃(径18cm±・深さ60cm±)など、3個のピットで構成されているものではないかと考えられる。これらは三角形の安定した配置を示している。この住居址内からは上記の柱穴群のほかに、P₄(径30cm±・深さ10cm±)・P₅(径29cm±・深さ38cm±)・P₆(径21cm±・深さ23cm±)・P₇(径23cm±・深さ12cm±)などのピット群が検出されているが、これらの具体的な位置づけについては明らかではない。住居址の壁高は、北壁22cm±・南壁24cm±・東壁8cm±・西壁50cm±を計る。西壁沿いの一部には、木根などによる攪乱痕や精査中の掘りすぎがみられる。壁溝は設けられていない。

床面中央部付近に位置している炉は直立埋設土器だけで構成されているもので、径50cm±を計る。ここにみられる土器は深鉢形土器の胴体部より上の部位を利用したもので、その下半部は床面下15cm±の深さまで下位の火山灰層中に埋めこまれている。埋設土器の内部は、暗褐色土層と現地性焼土層の互層となっている。ここの焼土は、それぞれ層厚4cm±を計る。焼土の在り方からみる限り、炉の使用面は土器内部にあって、その最終的な面は床面のレベルにほぼ一致しているものと考えられる。

また、この住居址内には上記の炉のほかに、東壁よりに位置して20cm±×11cm±の範囲に層厚2cm±の現地性焼土の形成がみられるが、これの性格については明らかではない。炉の北側床面上に広範囲にわたって炭化材・炭化物が分布していた事実と考え合わせると、あるいはこの焼土は当住居址が焼失を受けた痕跡を示しているものとみることができのかもしれない。

当住居址からの出土遺物としては、北西壁よりの床面上から得られた土器片がある。このほか、炉の東側および南側の床面上には、粒径13cm±~17cm±の安山岩・流紋岩の亜角礫がいくつか散在していた。

重複関係の面では、この住居址は北壁沿いで僅かにH VII-151配石遺構によって切られている。そのほかの遺構との切り合いはみられない。

I VII-2 住居址 (図版51c・130b; 写真図版76b)

床面や炉からの伴出遺物を欠くが、埋土中の土器などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代中期中葉期に位置づけられるものであろう。比較的保存が良好な状態で検出されている。規模は2.7m±×2.4m±を計り、やや不整ながら、平面形は凸辺長方形に近い形態を示している。床面の中央部付近には1基の地床炉が設けられている。

土層断面図は作成していないが、Field Cardの記載によれば、この住居址の埋土は単層の褐色土層で構成されていた。

床面は平坦で、全体に堅くしまるのとなっている。柱穴状のピットとして、P₁ (径17cm±・深さ11cm±)・P₂ (径42cm±・深さ30cm±)・P₃ (径46cm±・深さ5cm±)などが検出されている。壁高は、北壁33cm±・南壁9cm±・東壁14cm±・西壁23cm±を計る。壁溝は設けられていない。

床面中央部付近の地床炉が設けられている部位には、径23cm±の範囲に層厚3cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は床面よりも僅かに低い位置に設けられていて、比較的軟いものとなっている。

重複関係の面では、この住居址は北東隅で、I VII-51ピットにより僅かに切られている。そのほかの遺構との切り合いはみられない。

I VII-3 住居址 (図版53a・54abcd・130cd; 写真図版74c・77ab・78・79abc・174a・263ef・265a)

床面や炉からの伴出土器を欠くが、その他の遺物群の形態や埋土下底部付近から出土した土器などからみると、この住居址は縄文時代中期中葉期に位置づけられるものであろう。全周にわたって壁に大小の掘りすぎがみられた部分を除くと、他は全体に保存が良好な状態で検出されている。5.7m±×4.5m±の規模をもち、平面形は凸辺の長方形の形態を示しているものと考えられる。床面には2基の地床炉が検出されている。

住居址の埋土は上位より、黒色土層群 (a~d 層)・黒褐色土層 (e 層)・明褐色土層 (f 層)・褐色~暗褐色土層群 (g~j 層) などにより構成されている。これらの中で、埋土の最上位を占めて遺構外の自然堆積物に連続的である黒色土層群 (a~d 層) は、長者屋敷遺跡における基本層序のIc層以上の層準に対応するものである。それらの下位に位置する黒褐色土層 (e 層) には、縦方向に発達する多数の乾裂がみられる。埋土中央部から下部にかけての大半の部分を構

成する明褐色土層 (f 層) は基本層序Ⅲ層起源のほぼ純粋な火山灰層で、この層はその在り方からみて“湯沢パターン”を構成する堆積物ではないかと考えられる。この火山灰層は当住居址内の径5.0m±×3.1m±の範囲に、40cm±～53cm±の最大層厚をもって分布している。住居址中央部よりやや南東では、粒径数cm・層厚5cm±の安山岩類円礫層が径110cm±の範囲にわたってこの火山灰層中に挟在する在り方を示している。この層中にはこの円礫層のほかに、たとえば土器・石器・焼土・炭化物などの包含はみられない。埋土最下部の層準を占めるg～j層は汚れ火山灰が優占する堆積物で、その層中には僅かながら土器片・礫・焼土・炭化物などが含まれている。

床面にはゆるやかな凹凸がみられるものの全体的にはほぼ平滑で、きわめて堅くしまる面となっている。柱穴は、P₁ (径33cm±・深さ62cm±)・P₂ (径45cm±・深さ62cm±)・P₃ (径32cm±・深さ56cm±)・P₄ (径36cm±・深さ64cm±)・P₅ (径28cm±・深さ59cm±)・P₆ (径35cm±・深さ19cm±)・P₇ (径36cm±・深さ37cm±)・P₈ (径24cm±・深さ33cm±) など、8個のピットで構成されているものと考えられる。やや不整ではあるが、これらの柱穴は、P₈—P₁・P₁—P₇・P₇—P₂・P₂—P₆・P₆—P₃ とジグザグ状に配置されている。また P₄ は、P₃ と P₅ を結ぶ線を底辺とする三角形の頂点にあたる位置に配されている。この住居址内からは上記の柱穴群のほかに、P₉ (径38cm±・深さ5cm±)・P₁₀ (径63cm±・深さ72cm±)・P₁₁ (径22cm±・深さ68cm±)・P₁₂ (径30cm±・深さ24cm±) などのピット群が検出されているが、これらの具体的な位置づけについては明らかではない。住居址の壁高は、北壁50cm±・南壁44cm±・東壁12cm± (I VII—4住居址床面との比高)・西壁60cm±を計る。また北壁沿いの東半部には、長さ150cm±・幅13cm±～22cm±・深さ6cm±～9cm±の規模の壁溝が設けられている。

2基検出された地床炉のうち、北西部に位置する1号炉は床面とほぼ同じレベルにきわめて堅くしまる使用面を伴うもので、この部位には径60cm±×35cm±の範囲に層厚4cm±の現地性焼土の形成がみられる。床面中央部のやや南東に位置する2号炉では、径56cm±の範囲に層厚5cm±の現地性焼土が形成されている。この炉の使用面は床面よりも僅かに低い位置に設けられていて、きわめて堅くしまる面となっている。

土器や石器利器類は出土していないが、この住居址の床面上には岩偶・刻線礫・石棒・石皿が存在していた。岩偶は西壁よりの床面上に、刻線礫と石棒は南壁よりの床面上に、石皿は東壁よりの床面上にそれぞれ位置していた。これらの中で、石棒は2分割したものが上下に重複する状態で出土している。

重複関係の面では、この住居址は東側でI VII—4住居址を切っている。また、この住居址の固有の部位は破壊されていないが、住居址北壁よりの部分では“湯沢パターン”を構成する火山灰層などを切って作られているI VII—78ピットが検出されている。

I VII—4住居址 (図版53abc ; 写真図版80a)

床面からの伴出遺物を欠くが、埋土下底部付近から出土した土器などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。精査中に掘りすぎがみられた僅かな部分を除けば、比較的保存が良好な状態で検出されている。西側がⅠⅦ-3住居址に切られているために、規模や形態については明らかではない。精査がなされたのは3.6m±×3.2m±の範囲である。残存している壁の輪郭線から推定すると、この住居址の平面形は凸辺長方形の形態を示していたものかもしれない。炉は検出されていない。

埋土は主に、褐色～暗褐色土層で構成されている。

床面には微小な凹凸がみられるものの全体的にはほぼ平坦で、全体にきわめて堅くしめる面となっている。いずれが柱穴を構成するものか明らかではないが、柱穴状のピットとして、P₁ (径14cm±・深さ22cm±)・P₂ (径20cm±・深さ17cm±)・P₃ (径39cm±・深さ30cm±)・P₄ (径27cm±・深さ25cm±)・P₅ (径32cm±・深さ30cm±)・P₆ (径33cm±・深さ26cm±)・P₇ (径31cm±・深さ24cm±)・P₈ (径34cm±・深さ23cm±)・P₉ (径38cm±・深さ31cm±)・P₁₀ (径80cm±・深さ28cm±)・P₁₁ (径44cm±・深さ28cm±)などが検出されている。住居址の壁高は、北壁44cm±・南壁28cm±・東壁33cm±を計る。壁溝は設けられていない。

重複関係の面では、ⅠⅦ-3住居址に切られている以外は、この住居址と他の遺構との重複は認められていない。

ⅠⅦ-5住居址群 (図版55ab・130eg ; 写真図版81・83ab・174bcd)

炉の埋設土器や埋土中の遺物群などからみて、このⅠⅦ-5住居址群は縄文時代前期末葉期から中期初頭期の時期に位置づけられるものであろう。柱穴配置を検討した結果、この住居址群が検出された範囲内には、最低3棟の住居址が存在していることが推定された。これらを今、それぞれⅠⅦ-5a住居址・ⅠⅦ-5b住居址・ⅠⅦ-5c住居址と呼称することにする。柱穴配置上の形態的な特徴や相互の位置的な関係からみると、これらは、ⅠⅦ-5a住居址と、ⅠⅦ-5b住居址とⅠⅦ-5c住居址の2棟を含む群との2つの住居址群から成っているものと考えられる。このうち、柱穴配置の基本的な類似性や近接した位置に存在しているという点から推定して、後者の群を構成する2棟の住居址間には、互いに密接な関係があるものとみられる。この住居址群とⅠⅦ-5a住居址との先後関係についてはよくわからない。ただ、柱穴配置と、主に北半部に検出された壁との相互関係からみると、ここにみられる住居址群内では、ⅠⅦ-5a住居址が最新期のものとして位置づけられるのであろう。以下、各住居址について個別的に記載することにする。

ⅠⅦ-5a住居址 (図版55ab・130eg ; 写真図版81・83ab・174bcd)

南半部の壁が消失しているために規模や形態の詳細は不明であるが、残存している部分の輪郭線から推定すると、この住居址は9.5m±×5.2m±の規模をもつものであろう。平面形は、長軸に沿う部位はほぼ直線状の、短軸に沿う両端部は半円状の形態をそれぞれ示している。隅

丸長方形と2つの半円形の複合的な形態とってよいかもしいない。この住居址の中軸線上を中心とする範囲には、平面的に5基の炉が検出されている。

埋土は、褐色～黒褐色土層により構成されている。これらの埋土は、いずれも自然堆積相を示している。

床面にはいくつかゆるやかな凹凸がみられるが全体的にはほぼ平坦で、比較的堅くしめる面となっている。柱穴は、P₁ (径28cm±・深さ50cm±)・P₂ (径30cm±・深さ41cm±)・P₃ (径29cm±・深さ19cm±)・P₄ (径20cm±・深さ14cm±)・P₅ (径20cm±・深さ14cm±)・P₆ (径54cm±・深さ14cm±)・P₇ (径25cm±・深さ21cm±)・P₈ (径31cm±・深さ10cm±)・P₉ (径23cm±・深さ53cm±)・P₁₀ (径45cm±・深さ26cm±)などのピット群で構成されているものと考えられる。これらの柱穴は、P₂—P₁₀・P₁₀—P₃・P₃—P₉・P₉—P₄・P₄—P₈・P₈—P₅・P₅—P₇・P₇—P₆とジグザグ状に配置されている。また、P₁はP₂とP₁₀を結ぶ線を底辺とする三角形の頂点にあたる位置に、P₆もP₅とP₇を結ぶ線を底辺とする三角形の頂点にあたる位置に、それぞれ配されている。P₆の部位では、I VII—5c住居址の柱穴P₂₄との重複関係がみられる。残存部での壁高は、北壁40cm±・東壁4cm±・西壁35cm±を計る。壁溝は設けられていない。

中軸線沿いに検出されている5基の炉群と、この住居址との正確な共伴関係については不明である。これらの一部は、先行する住居址群であるI VII—5b住居址・I VII—5c住居址に含まれるものである可能性がある。また、柱穴配置の検討からはまだ明らかになされていないが、埋設土器を伴う炉は、I VII—5a住居址よりも新しい段階の住居址に所属するものである可能性もある。いずれにしろ、住居址と炉の所属関係についてはよくわからないので、ここで、これらの炉について一括して述べることにする。

西方に位置する1号炉では、径50cm±×38cm±の範囲に層厚5cm±の現地性焼土の形成がみられる。炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしめる面となっている。2号炉の部位では、径70cm±×60cm±の範囲に層厚5cm±の現地性焼土が形成されている。この炉の使用面も床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしめる面となっている。3号炉の位置する部分では、地床炉(3a号炉)と、直立埋設土器によって構成される炉(3b号炉)との上下方向の重複関係がみられる。3a号炉の部位では、径73cm±×53cm±の範囲に層厚4cm±の現地性焼土が形成されている。この炉の使用面も床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしめる面となっている。この3a号炉は、その中央部付近を埋設土器を伴う3b号炉によって切られている。3b号炉は、ほぼ完形の深鉢形土器を床面下20cm±の深さまで直立の状態に埋めこんだ上で設けられている。この土器の周縁部には、僅かながら現地性焼土の形成がみられた。この炉の掘り方内には焼土粒子を含む暗褐色土が充填されていた。

4号炉の位置する部位では、径47cm±×34cm±の範囲に層厚4cm±の現地性焼土の形成がみ

られる。炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしめる面となっている。5号炉の部位では、径70cm±×55cm±の範囲に層厚13cm±の現地性焼土が形成されている。この炉の使用面も床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしめる面となっている。この5号炉は、一部をI VII-8住居址により切られている。

重複関係の面では、この住居址はI VII-8住居址・I VII-9住居址・I VII-10住居址には明確に切られている。また、I VII-70ピットやI VII-71フラスコ形ピットにも切られている。南壁沿いの中央部付近は、風倒木痕によって大きく破壊を受けている。I VII-5b住居址・I VII-5c住居址との重複では、当住居址はこれらに後出するものではないかと考えられる。

I VII-5b住居址（図版55ab・130eg；写真図版81・83ab・174bcd）

この住居址は、痕跡を示すものとして柱穴配置が確認されて、その存在が推定されたものである。柱穴は、P₁₁（径27cm±・深さ53cm±）・P₁₂（径25cm±・深さ49cm±）・P₁₃（径32cm±・深さ21cm±）・P₁₄（径40cm±・深さ12cm±）・P₁₅（径18cm±・深さ26cm±）・P₁₆（径27cm±・深さ20cm±）・P₁₇（径27cm±・深さ18cm±）・P₁₈（径22cm±・深さ不明）・P₁₉（径29cm±・深さ21cm±）などのピット群で構成されているものとみられる。これらの柱穴群には、P₁₂-P₁₉・P₁₃-P₁₈・P₁₄-P₁₇・P₁₅-P₁₆の各群内に対になる配置関係がみられる。またP₁₁は、P₁₂とP₁₉を結ぶ線を底辺とする三角形の頂点にあたる位置に配されている。P₁₂とP₁₇の柱穴は他のピットと重複を示している。

この住居址は、I VII-5a住居址・I VII-8住居址・I VII-9住居址・I VII-10住居址に切られているものと考えられる。同系列のI VII-5c住居址との新旧関係についてはよくわからない。

I VII-5c住居址（図版55ab・130eg；写真図版81・83ab・174bcd）

前述のI VII-5b住居址と同様に、この住居址も痕跡的に柱穴群が検出されたところから、その存在が推定されたものである。柱穴配置の基本的な類似性や、近くに位置することなどからみて、この住居址はI VII-5b住居址と密接な関連があるものであろう。

柱穴は、P₂₀（径55cm±・深さ72cm±）・P₂₁（径28cm±・深さ53cm±）・P₂₂（径32cm±・深さ95cm±）・P₂₃（径38cm±・深さ93cm±）・P₂₄（径29cm±・深さ46cm±）・P₂₅（径28cm±・深さ62cm±）・P₂₆（径20cm±・深さ44cm±）・P₂₇（径32cm±・深さ21cm±）などのピット群で構成されているものと考えられる。これらの柱穴には、P₂₁-P₂₇・P₂₃-P₂₆・P₂₄-P₂₅の各群内に対になる配置関係がみられる。このような配置からすれば、風倒木痕によって大きく破壊を受けているが、P₂₅とP₂₇を結ぶ線上には、P₂₂と対になる関係を示す仮想柱穴P_xが存在していたものであろう。またP₂₀は、P₂₁とP₂₇を結ぶ線を底辺とする三角形の頂点にあたる位置に配されている。P₂₄の部位ではI VII-5a住居址を構成する柱穴P₆との重複がみられるほか、P₂₂とP₂₆の位置する部位では他のピットと切り合い関係を示している。

重複関係の面では、この住居址は I VII-5 a 住居址・I VII-8 住居址・I VII-9 住居址・I VII-10 住居址などによって切られているものと考えられる。同系列の住居址を構成する I VII-5 b 住居址との新旧関係についてはよくわからない。

以上、I VII-5 住居址群内の各住居址について個別的に記載してきた。この住居址群内からは、上に述べた柱穴群のほか、さらに、P₂₈ (径47cm±・深さ14cm±)・P₂₉ (径23cm±・深さ49cm±)・P₃₀ (径37cm±・深さ54cm±)・P₃₁ (径22cm±・深さ36cm±)・P₃₂ (径24cm±・深さ20cm±)・P₃₃ (径25cm±・深さ23cm±)・P₃₄ (径23cm±・深さ59cm±)・P₃₅ (径27cm±・深さ38cm±)・P₃₆ (径40cm±・深さ24cm±)・P₃₇ (径25cm±・深さ41cm±)・P₃₈ (径22cm±・深さ14cm±)・P₃₉ (径40cm±・深さ30cm±)・P₄₀ (径27cm±・深さ26cm±)・P₄₁ (径19cm±・深さ35cm±)・P₄₂ (径43cm±・深さ29cm±)・P₄₃ (径32cm±・深さ39cm±)・P₄₄ (径29cm±・深さ40cm±)・P₄₅ (径27cm±・深さ34cm±)・P₄₆ (径37cm±・深さ28cm±)・P₄₇ (径36cm±・深さ13cm±)・P₄₈ (径32cm±・深さ11cm±)・P₄₉ (径48cm±・深さ26cm±)・P₅₀ (径21cm±・深さ24cm±)・P₅₁ (径19cm±・深さ32cm±)・P₅₂ (径27cm±・深さ11cm±)・P₅₃ (径32cm±・深さ77cm±) などのピット群が検出されている。

これらのピット群は、炉群を中心として集中して分布する在り方を示している。柱穴配置の検討からはまだ明らかにされていないが、これらのピット群内には、上記のものとは別な住居址を構成する柱穴群も含まれているものと考えられる。例えば、P₅₃・P₃₁・P₄₀・P₂₉・P₄₆ などのピット群は、五角形の柱穴配置を示す住居址の存在を指唆しているものかもしれない。また、この住居址群内には、上記のピット群のほかに、いくつかの小ピット群が点在している。いずれにしろ、これらの具体的な位置づけについてはよくわからない。

I VII-6 住居址

整理時の不手際から、架空の遺構に対して当住居址名が登録された。したがって、ここで I VII-6 住居址を欠番扱いとする。

I VII-7 住居址

上の I VII-6 住居址と同じ理由で、この住居址も欠番扱いとする。

I VII-8 住居址 (図版56a・57a ; 写真図版81・83ab)

伴出遺物を欠くためにこの住居址の所属時期については不明である。ただ、形態的な諸特徴や、ここにみられる住居址群間の重複関係を参考にして推定すると、これは縄文時代中期内に位置づけられるのかもしれない。西から南側にかけての壁が風倒木などによって破壊を受けて消失しているために、規模や形態についても詳細は不明なものとなっている。2.0m±×1.5m±の範囲が残存していたにすぎない。残存している壁の輪郭線から推定すると、この住居址の平面形は、凸辺の長方形または楕円形状の形態を示していたものであろう。炉は検出されていない。

土層断面図は作成されていないが、Field Cardの記載によれば、埋土は主に焼土粒子や炭化物を僅かに含む暗褐色土層により構成されている。

床面には多くの凹凸があって、きわめて堅くしまる面となっている。柱穴の存否についてはわからない。I VII-5 住居址群内で記載した P₃₉ は、当住居址内に位置しているが、その共伴関係は不明なものとなっている。残存部での壁高は、北壁13cm±（I VII-5 住居址群床面との比高）・東壁6cm±（I VII-9 住居址床面との比高）を計る。壁溝は設けられていない。

重複関係の面では、この住居址は、I VII-5 住居址群・I VII-9 住居址を切っている。

I VII-9 住居址（図版56b・57a・130f；写真図版81）

床面や炉からの伴出遺物を欠くが、埋土中から出土している遺物などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代前期末葉期から中期初頭期にかけての時期に位置づけられるものであろう。遺構間の切り合いによって、2.3m±×1.0m±の範囲が残存していたにすぎない。残存範囲が狭いものであるために、この住居址の規模や形態については明らかではない。

観察が不十分であるために、埋土の状況については不明なものとなっている。

床面はほぼ平坦で、きわめて堅くしまる面となっている。この住居址内には、I VII-5 住居址群内で記載した P₄₁・P₄₂・P₄₃・P₄₄ などのピット群が位置しているが、両者間の関係についてはよくわからない。残存部での壁高は、北壁6cm±（I VII-5 住居址群床面との比高）を計る。

地床炉は西側を I VII-8 住居址に切られているために、層厚6cm±の現地性焼土が52cm±×25cm±の範囲に残存しているにすぎない。この炉の使用面は床面よりも僅かに高い位置に設けられていて、比較的堅くしまる面となっている。

重複関係の面では、この住居址は I VII-5 住居址群を切り、I VII-8 住居址には切られている。両住居址の重複部分の在り方からみて、この住居址はまた、I VII-10住居址にも削剝を受けているものと考えられる。

I VII-10住居址（図版56c・57a・131a；写真図版81）

床面や炉からの伴出遺物を欠くために、この住居址の所属時期についてはよくわからない。しかし、埋土中の遺物や、形態的な諸特徴から推定して、この住居址は縄文時代前期末葉期から中期初頭期にかけての時期に位置づけられるものであろう。東側と南側の壁が消失していて、2.3m±×2.0m±の範囲が検出されているにすぎない。規模については不明であるが、残存している壁の輪郭線から推定して、平面形は方形を基調とする形態を示していたものであろう。

観察が十分になされていないために、埋土の状況についてはよくわからない。

床面はほぼ平坦で、きわめて堅くしまる面となっている。I VII-5 住居址群内で記載した、P₄₆・P₄₇・P₄₈・P₄₉・P₅₀・P₅₁ などのピット群が当住居址内に位置しているが、両者の具体的な関係は不明である。残存部での壁高は、北壁5cm±（I VII-5 住居址群床面との比高）・西壁8

cm±（I VII—9 住居址床面との比高）を計る。壁溝は設けられていない。

地床炉は柱穴状ピット P₄₉ に切られているために、層厚 4 cm±の現地性焼土が50cm±×30 cm±の範囲に残存しているにすぎない。この炉の使用面は床面よりも低い位置に設けられていて、比較的軟弱な面となっている。

重複関係では、この住居址は I VII—5 住居址群・I VII—9 住居址を切っているものと考えられる。

I VII—11 住居址（図版58a；写真図版82）

床面から出土している土器からみて、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。掘りすぎなどによって、全体に残存が不良な状態で検出されている。残存部の壁の輪郭線などから推定すると、この住居址は径2.5m前後の規模をもち、平面形は円形状の形態を示していたのではないかと考えられる。1基の地床炉が検出されている。

土層断面図は作成されていないが、Field Card の記載によれば、この住居址の埋土は主に暗褐色土層により構成されている。

床面は全体的に平坦で、比較的堅くしまる面となっている。柱穴は検出されていない。残存部で、壁高は東壁17cm±を計る。壁溝は設けられていない。

掘りすぎによって南側の一部が削剝を受けているが、住居址のほぼ中央部と考えられる位置には1基の地床炉が設けられている。この部位には径35cm±の範囲に現地性焼土の形成がみられる。断面観察がなされていないために、焼土の層厚については不明なものとなっている。この炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしまる面となっている。

西壁沿いとみられる床面上には、1個体の深鉢形土器が密着した状態で存在していた。この土器の直上には、粒径29cm±の安山岩亜角礫が載っている。

重複関係の面では、この住居址は I VII—12 住居址に切られている。

I VII—12 住居址（図版57b・61a；写真図版82）

伴出遺物を欠くために所属時期の詳細は不明であるが、ここにみられる住居址群間の重複関係から推定すると、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるのであろう。南側の大半の部分が削剝を受けているために、規模や形態については明らかではない。7.9m±×1.5m±の範囲が残存していたにすぎない。残存している壁の輪郭線からみると、この住居址の平面形は楕円形状か樽形状に近い形態を示していたものではないかと考えられる。炉は検出されていない。

残存状態が不良であるために、土層断面図は作成されていない。Field Card の記載によれば、この住居址の埋土は主に暗褐色土層によって構成されていた。

残存部に関する限り床面はほぼ平坦で、やや堅くしまる面となっている。木根などの攪乱によるせいか、西側部分は凹凸の激しいものとなっている。柱穴配置については不明である。い

ずれが柱穴を構成するものであるかよくわからないが、柱穴状のピットとして、P₁ (径30cm±・深さ12cm±)・P₂ (径21cm±・深さ6cm)・P₃ (径20cm±・深さ34cm±)・P₄ (径30cm±・深さ14cm±)・P₅ (径23cm±・深さ16cm±)・P₆ (径35cm±・深さ9cm±)などが検出されている。残存部での壁高は、北壁30cm±・西壁10cm±を計る。壁溝は設けられていない。

重複関係の面では、この住居址はI VII-11住居址を切り、I VII-13住居址・I VII-14住居址・I VII-16住居址・I VII-18住居址・I VII-19住居址などには直接的に切られている。I VII-15住居址・I VII-17住居址などとの新旧関係については不明である。また、西側は風倒木痕によって切られている。

I VII-13住居址 (図版59a・61a; 写真図版81)

伴出遺物を欠くが、ここにみられる住居址群間の重複関係から推定して、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。大半の部分が他の住居址によって削剝を受けていて、3.0m×0.6m前後の範囲が検出されているにすぎない。規模については不明であるが、残存している壁の輪郭線からみて、この住居址の平面形は基本的に円形状の形態を示していたものであろう。炉は検出されていない。

残存状態が不良なものであるために、土層断面図は作成されていない。Field Cardの記載によれば、この住居址の埋土は主に暗褐色土層により構成されていた。

残存部での観察によるかぎり、床面には僅かに凹凸があって比較的堅くしめる面となっている。柱穴は、I VII-14住居址内に検出された、P₇ (径20cm±・深さ20cm±)・P₈ (径34cm±・深さ21cm±)・P₉ (径23cm±・深さ34cm±)・P₁₀ (径35cm±・深さ46cm±)・P₁₁ (径20cm±・深さ19cm±)などのピット群で構成されているものではないかと考えられる。これらの柱穴は、僅かに不整ながら、五角形を形成する安定した配置を示している。P₇は、I VII-14住居址の柱穴P₁₂に切られている。住居址の壁高は、残存している西壁で20cm±を計る。

重複関係の面では、この住居址はI VII-12住居址を切り、I VII-14住居址には切られている。I VII-17住居址との具体的な関係についてはよくわからない。

I VII-14住居址 (図版59bc・61a・131b; 写真図版82・83c・174e)

僅かながら床面上から出土している土器や埋土中の土器群、およびここにみられる住居址群間の重複関係を参考にして推定すると、この住居址は時期的に、縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。全体的に保存が比較的不良な状態で検出されている。一部で掘りすぎや住居址間の重複によって壁が消失している部分があるが、残存している壁や壁溝の輪郭線からみて、この住居址は径4.7m±×3.8m±の規模をもち、平面形は楕円形状の形態を示していたものであろう。平面的には1基の地床炉が設けられている。また、床面上に分布していた炭化材・炭化物・焼土の存在から、この住居址は焼失を受けているものではないかと考えられる。

埋土は主に、褐色～暗褐色土層群によって構成されている。この中で、最下部の層準は、住居の焼失に際して形成されたものが起源であると考えられる炭化材・炭化物・焼土などを著しく多く含んでいる。また、この層中からは深鉢形土器破片群をはじめ、石器類や剥片類が多く出土している。剥片類の量は数十点を数えるが、観察不足のために、これらが「剥片貯蔵」(三浦：1978)を起源するものか、一括廃棄物を構成しているものか明らかではない。住居址北半部を中心とする範囲の中央部の層準には、径210cm±の範囲にわたって“湯沢パターン”を構成する層厚17cm±の汚れ火山灰層の分布がみられる。この層中には、焼土・炭化物や人工遺物などは含まれていない。この上位を構成する暗褐色土層群中にも、僅かながら炭化物・焼土・土器片・石器類・礫などが包含されている。これらの埋土は、全体的に人為堆積相を示している。

床面は、住居址北東部を除くと、全体に著しく凹凸に富む面となっている。殊に、西半部の範囲は木根などの削剝によるものか、かなり多くの破壊を受けている。原形をよくとどめている部分の床面は、きわめて堅くしまるものとなっている。柱穴は、P₁₂(径15cm±・深さ36cm±)・P₁₃(径30cm±・深さ16cm±)・P₁₄(径18cm±・深さ40cm±)・P₁₅(径14cm±・深さ13cm±)・P₁₆(径37cm±・深さ28cm±)・P₁₇(径21cm±・深さ41cm±)・P₁₈(径20cm±・深さ25cm±)・P₁₉(径23cm±・深さ60cm±)などのピット群で構成されているものではないかと考えられる。これらの柱穴群は、P₁₅—P₁₇・P₁₇—P₁₄・P₁₄—P₁₈・P₁₈—P₁₃・P₁₃—P₁₉・P₁₉—P₁₂とジグザグ状に配置されている。またP₁₆は、P₁₅とP₁₇を結ぶ線を底辺とする三角形の頂点にあたる位置に配されている。P₁₂の部位では、I VII—13住居址の柱穴P₁₁を明瞭に切る関係がみられる。この住居址内からは上記の柱穴群のほかに、P₂₀(径30cm±・深さ25cm±)・P₂₁(径13cm±・深さ8cm±)・P₂₂(径30cm±・深さ7cm±)・P₂₃(径21cm±・深さ30cm±)・P₂₄(径11cm±・深さ20cm±)・P₂₅(径42cm±・深さ49cm±)・P₂₆(径14cm±・深さ36cm±)・P₂₇(径29cm±・深さ10cm±)・P₂₈(径16cm±・深さ46cm±)などのピット群が検出されている。これらの中には、I VII—13住居址に伴うものや、I VII—17住居址・I VII—18住居址の柱穴を構成するピットも含まれているのかもしれない。

住居址の残存部での壁高は、北壁21cm±(I VII—12住居址床面との比高)・南壁15cm±・西壁30cm±(I VII—12住居址床面との比高)を計る。また、東壁沿いと南壁沿いにはそれぞれ断続的ながら、長さ260cm±・幅7cm±～28cm±・深さ2cm±～6cm±、長さ38cm±～110cm±・幅8cm±～17cm±・深さ2cm±～4cm±の規模の壁溝が設けられている。

地床炉は、住居址中央部よりもやや南側の位置に設けられている。この炉は上下に重複する新旧2基の地床炉から成るもので、この部位には、径50cm±×30cm±の範囲に層厚8cm±の現地性焼土の形成がみられる。古期の炉の使用面は、その中央部付近が床面よりも僅かに低い位置に設けられている。また、新期の炉は、古期の炉の凹部に薄層厚の軽石を敷設した上で設けられている。新期の炉は、古期の炉に比較してそれほど多くの赤色変化を受けていない。いず

れの使用面もきわめて堅くしまるものとなっている。

上記の地床炉のほかに、この住居址内の北壁よりの床面上には、径13cm±・12cm±の小規模な現地性焼土の形成がみられる。薄層厚である点からみて、これらの焼土は住居址の焼失に際して形成されているものではないかと考えられる。これらの現地性焼土と地床炉との間を中心とする範囲には、これもまた住居の焼失に際して形成されたと考えられる炭化材・炭化物や異地性の焼土が密集する状態で分布していた。

重複関係の面では、この住居址はI VII—12住居址・I VII—13住居址・I VII—18住居址を切っている。東半部ではI VII—17住居址と重複を示しているが、壁溝の在り方などからみて、この住居址はI VII—17住居址に切られているものではないかと考えられる。

I VII—15住居址（図版60a・61a；写真図版80b・82）

時期決定資料となる伴出遺物を欠くが、ここにみられる住居址群間の重複関係から推定すると、この住居址も縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。保存が比較的良好な状態で検出されている。径2.2m±×1.9m±の規模をもち、平面形は卵形状に近い形態を示している。炉は設けられていない。

この住居址は固有の埋土を欠いている。住居址内には床面にいたるまで、層厚9cm±～13cm±の単層の汚れ火山灰層が、I VII—16住居址の側から敷設されている。

床面はほぼ平坦で、比較的軟弱な面となっている。いずれが柱穴を構成するものかよくわからないが、柱穴状のピットとしてP₂₉（径19cm±・深さ31cm±）・P₃₀（径24cm±・深さ23cm±）・P₃₁（径28cm±・深さ34cm±）・P₃₂（径17cm±・深さ14cm±）・P₃₃（径16cm±・深さ20cm±）・P₃₄（径20cm±・深さ31cm±）などが検出されている。壁高は、北壁9cm±・南壁13cm±・東壁10cm±・西壁8cm±を計る。壁溝は設けられていない。

重複関係の面では、この住居址は全形を覆う形でI VII—16住居址に切られている。そのほかの周辺の住居址群との具体的な関係については不明である。

I VII—16住居址（図版60b・61ab；写真図版82・84a）

床面上からの伴出遺物を欠くが、埋土中の土器片や、ここにみられる住居址群間の重複関係を参考にして推定すると、この住居址も縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。東側から南側にかけて壁が消失している部分を除けば、比較的保存が良好な状態で検出されている。2.7m±×2.6m±の規模をもち、平面形は凸辺の五角形状の形態を示している。炉は設けられていない。

埋土は主に、炭化物や焼土を僅かに含む暗褐色土層により構成されている。

床面にはいくつかの凹凸があって、全体にきわめて堅くしまる面となっている。下位に位置するI VII—15住居址と重複する部分では、全体にわたって層厚9cm±～13cm±の汚れ火山灰が貼り床として堅緻に敷設されている。この貼り床と当住居址固有の床面は、なめらかに連続す

る面となっている。いずれが柱穴を構成するものか明らかではないが、この住居址内からは、P₃₅（径18cm±・深さ不明）・P₃₆（径13cm±・深さ15cm±）・P₃₇（径19cm±・深さ14cm±）・P₃₈（径19cm±・深さ18cm±）・P₃₉（径14cm±・深さ10cm±）・P₄₀（径15cm±・深さ17cm±）・P₄₁（径29cm・深さ24cm±）・P₄₂（径18cm±・深さ22cm±）・P₄₃（径20cm±・深さ25cm±）・P₄₄（径15cm±・深さ15cm±）・P₄₅（径12cm±・深さ6cm±）・P₄₆（径12cm±・深さ9cm±）・P₄₇（径15cm±・深さ18cm±）などのピット群が検出されている。これらの中で、P₄₄とP₄₅は壁溝に関係する小ピットと考えられるのかもしれない。また、この中には、I VII-17住居址やI VII-18住居址に所属するピットなども含まれている可能性もあろう。

住居址の壁高は、北壁33cm±（I VII-12住居址床面との比高）・南壁4cm±（I VII-17住居址床面との比高）・西壁15cm±（I VII-18住居址床面との比高）を計る。北壁沿いには、幅12cm±～20cm±・深さ2cm±～4cm±の壁溝が設けられている。

重複関係の面では、この住居址は、I VII-12住居址・I VII-15住居址・I VII-17住居址・I VII-18住居址・I VII-19住居址などを切っている。

I VII-17住居址（図版57c・61a・131c；写真図版82・175a）

この住居址は周辺の住居址群を精査中に付随的に検出されたもので、床面や炉からは時期決定資料となる遺物は出土していない。しかしここにみられる住居址群間の重複関係を参考にし推定すると、この住居址も縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。残存がきわめて不良な状態で検出されている。I VII-14住居址内には、この住居址に所属するとみられる断続的な壁溝が検出されている。また、I VII-16住居址の南東には、この住居址に伴うと考えられる壁状の部分が残存している。これらからみると、当住居址の規模は、東西径で4.0m前後のものと考えられるのかもしれない。南北径や平面的な形態については不明である。

埋土の状況についてはよくわからない。

床面にはいくらかの凹凸があつて、比較的堅くしまる面となっている。重複する部分では、両者間の床面の連続性から考えて、I VII-14住居址と共有関係を示しているものであろう。重複部分が少ないために正確なことはよくわからないが、I VII-18住居址とも床面を共有する関係にあるのかもしれない。いずれが柱穴を構成するものか不明であるが、この住居址内からは、P₄₈（径20cm±・深さ37cm±）・P₄₉（径50cm±・深さ20cm±）・P₅₀（径20cm±・深さ22cm±）・P₅₁（径36cm±・深さ94cm±）・P₅₂（径58cm±・深さ45cm±）などのピット群が検出されている。I VII-14住居址やI VII-16住居址の項目内で記載したピット群中にも、重複部分ではこの住居址に伴うものもあるのかもしれない。

残存部での壁高は、東壁15cm±（I VII-19住居址床面との比高）を計る。壁溝は、北西隅と考えられる部分および西壁に沿うとみられる範囲に、それぞれ、長さ75cm±・幅10cm±～15cm±・深さ30cm±、長さ95cm±・幅13cm±～23cm±・深さ10cm±の規模のものが設けられている。

検出された地床炉は上下に重複する新旧2基の炉から成るもので、この部位では、径83cm±×67cm±の範囲に層厚10cm±の現地性焼土の形成がみられる。古期の炉は、床面よりも低い位置にその使用面が設けられている。また新期の炉は、古期の炉の凹部に層厚5cm±の軽石を敷設した上で設けられている。新期の炉は古期のものに比較して、あまり多くの赤色変化を受けていない。いずれの炉の使用面もきわめて堅くしめる面となっている。

重複関係の面では、この住居址はI VII-16住居址に切られている。壁溝の在り方や深さからみて、この住居址はI VII-14住居址よりも新しい段階に位置づけられるものであろう。I VII-15住居址やI VII-18住居址との具体的な関係については不明である。これもまた具体的な関係についてはよくわからないが、ここにみられる住居址群間の重複状況から判断して、この住居址はI VII-12住居址やI VII-19住居址よりも後出のものとして位置づけられるのかもしれない。

I VII-18住居址（図版58b・61a；写真図版82）

床面上からの伴出遺物を欠くが、埋土中の土器片や、ここにみられる住居址群間の重複関係を参考にして推定すると、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。他の住居址によって大きく削剝を受けているために、1.4m×0.7m前後の範囲が残存していたにすぎない。したがって、規模や形態については不明なものとなっている。

埋土はI VII-14住居址群のそれと連続的で、焼土・炭化物・土器片・石器類・礫などを含む褐色～暗褐色土層群により構成されている。

残存部での観察によるかぎり、床面はほぼ平坦できわめて堅くしめる面となっている。柱穴状のピットはP₅₃（径31cm±・深さ48cm±）が検出されているにすぎない。I VII-14住居址・I VII-16住居址・I VII-17住居址の項目内で記載したピット群中には、当住居址に所属するものも含まれているのかもしれない。残存部での壁高は、北壁14cm±（I VII-12住居址床面との比高）を計る。壁溝は検出されていない。

重複関係の面では、この住居址はI VII-12住居址を切り、I VII-14住居址・I VII-16住居址などには切られている。I VII-15住居址とI VII-17住居址との具体的な関係については不明である。床面の連続性から判断して、少なくとも重複範囲内の部分では、当住居址と、I VII-14住居址・I VII-17住居址の3者間で、床面の共有関係が成立しているのではないかと考えられる。

I VII-19住居址（図版58c・61a）

時期決定資料となる伴出遺物を欠くが、ここにみられる住居址群間の重複関係を参考にして推定すると、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。全体的に残存がきわめて不良な状態で検出されている。2.5m×1.5m前後の範囲が残存していたにすぎない。したがって、規模や形態については不明である。

埋土の状況についてはよくわからない。

残存部での床面は、僅かに凹凸が認められるもののほぼ平坦で、比較的堅くしめる面となっている。いずれが柱穴を構成するものか明らかではないが、柱穴状のものとして、P₅₄（径19cm±・深さ15cm±）・P₅₅（径13cm±・深さ不明）・P₅₆（径30cm±・深さ46cm±）・P₅₇（径34cm±・深さ25cm±）・P₅₈（径12cm±・深さ5cm±）・P₅₉（径27cm±・深さ41cm±）などのピット群が検出されている。I VII—16住居址やI VII—17住居址の項目内で記載したピット群中には、この住居址に伴うものも含まれているのかもしれない。壁や壁溝は検出されていない。

重複関係の面では、この住居址はI VII—12住居址を切り、I VII—16住居址・I VII—17住居址には切られているものと考えられる。I VII—15住居址との具体的な関係については明らかではない。

I VII—20住居址（図版62ab；写真図版84b）

床面上からの伴出遺物を欠くが、埋土中の土器群などから推定すると、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。一部を除けば、比較的保存が良好な状態で検出されている。規模は径3.8m±×3.1m±を計り、平面形は卵形状に近い形態を示している。炉は検出されていない。

埋土は、上半部が黒褐色土層で、下半部が褐色～暗褐色土層でそれぞれ構成されている。これらの中で、上位を占める黒褐色土層は多くの炭化物・焼土を含むほか、数個体の完形土器や土器破片群・石器類を包含していて、全体に複合廃棄物的な人為堆積相を示している。

床面はほぼ平坦で、きわめて堅くしめる面となっている。いずれが柱穴を構成するものか明らかではないが、柱穴状のものとして、P₁（径19cm±・深さ15cm±）・P₂（径13cm±・深さ9cm±）・P₃（径13cm±・深さ26cm±）・P₄（径15cm±・深さ12cm±）・P₅（径16cm±・深さ26cm±）・P₆（径25cm±・深さ18cm±）・P₇（径19cm±・深さ8cm±）・P₈（径25cm±・深さ32cm±）・P₉（径13cm±・深さ15cm±）・P₁₀（径25cm±・深さ30cm±）・P₁₁（径21cm±・深さ30cm±）・P₁₂（径24cm±・深さ22cm±）などのピット群が検出されている。また、壁溝に関係するとみられるものに、P₁₃（径15cm±・深さ17cm±）・P₁₄（径13cm±・深さ17cm±）などのピットがある。住居址の壁高は、北壁65cm±・南壁3cm±・東壁55cm±・西壁100cm±を計る。北壁から西壁沿いにかけては、幅7cm±～15cm±・深さ2cm±～5cm±の壁溝が設けられている。

重複関係の面では、この住居址は南東部でI VII—77フラスコ形ピットにより切られている。

（高橋 文夫）

J VII区

J VII—1住居址（欠番）

整理時の不手際から、掘りすぎ部分に対して誤って住居登録がなされた。したがって、ここ

で J VII—1 住居址を欠番扱いとする。

J VII—2 住居址群 (図版63a・131de ; 写真図版85a・175bc)

この住居址は、後述の J VII—3 住居址とともに複雑な重複関係を示す住居址群の中の一つとして検出されたもので、柱穴や炉の配置および壁溝の在り方などの検討の結果、当住居址として登録されている範囲内に最低 3 棟の住居址が存在していることが明らかになった。これらの住居址を今、J VII—2a・J VII—2b・J VII—2c 住居址とする。J VII—3 住居址も含めて、ほぼ同位置に設けられているこれらの住居址群間では、一部の柱穴・床面・炉などの再利用形態がみられる。いずれの住居址にも明確な壁は検出されていない。壁を消失している原因としては、著しく多い重複関係のほか、これらの住居址群が地表面下比較的浅い位置にあり、容易に人為的削剝を受けやすい条件下にあったことなどが考えられよう。床面上から出土している遺物はないが、埋土中の遺物および炉の形態などを参考にして推定すると、これらの住居址群は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。以下、各住居址単位で事実を記載し、最後にそれらの新旧関係について述べることにする。

J VII—2a 住居址 (図版63a・131de ; 写真図版85a・175bc)

壁を消失していることにより、この住居址の平面的な形態は不明である。柱穴間で、この住居址の規模は、4.1m×4 m前後を計る。床面には地床炉が設けられている。

J VII—3 住居址も含めて J VII—2 住居址群全体に共通するが、埋土は基本層序 II 層と層相がほぼ同様の暗褐色土層で構成されている。土層断面図の作成は省略した。

床面は、他の住居址と重複する部分およびこの住居址の固有とみられる部分の全体にわたって、比較的平坦できわめて堅くしまるものとなっている。柱穴は、P₁(径38cm±・深さ44cm±)・P₂(径23cm±・深さ22cm±)・P₃(径28cm±・深さ76cm±)・P₄(径31cm±・深さ46cm±)・P₅(径44cm±・深さ35cm±)・P₆(径31cm±・深さ21cm±) など 6 個のピットで構成されているものと考えられる。これらの中で、P₁—P₄・P₂—P₆・P₃—P₅ がそれぞれ対になる在り方を示している。

この住居址内には、地床炉の形態をもつ炉が平面的に 3 基検出されている。これらのうち、柱穴配置の上から 4 号炉は J VII—2c 住居址に伴うものであるとみられる。このほかの 2 号炉および 3 号炉は、当住居址と J VII—2b 住居址の重複部分内に位置しているが、後に述べる住居址群間の新旧関係から推定すると、3 号炉に僅かに切られる 2 号炉が当住居址に所属するものであろう。2 号炉は、垂直方向に重複する新旧 2 基の炉から成るもので、全体的に径70cm±×55cm±の範囲に現地性焼土が形成されている。下位に位置する古期の地床炉は、床面よりも低いレベルに使用面が設けられていて、その下の火山灰層は 4 cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。この炉の使用面は焼けて、きわめて堅くしまるものとなっている。新期の炉は、古期の炉の凹み部分に基本層序 III 層起源とみられるパミスを厚さ 4 cmほど敷設して形成されて

いる。この炉の使用面は床面とほぼ同位置に設けられていて、全体に強くしまる面となっている。使用面および敷設された下位のパミスには僅かながら火熱による赤色変化が認められる。

柱穴 P₃ の南東部と P₅ の北東部には、断続的にそれぞれ幅13cm±~34cm±・深さ 4 cm±~8 cm±、幅 9 cm±~14cm±・深さ 4 cm±の壁溝状の溝が検出されている。しかし、これらが当住居址に伴うものであるかどうか明らかではない。

J VII-2b 住居址 (図版63a・131de ; 写真図版85a・175bc)

この住居址も壁を消失していることから、平面的な形態は不明である。柱穴間で、この住居址の規模は3.5m×2.9m前後を計る。地床炉が1基設けられている。

床面の状況および埋土の性状は J VII-2a 住居址と共通する。柱穴は、P₇ (径33cm±・深さ45cm±)・P₈ (径24cm±・深さ55cm±)・P₉ (径36cm±・深さ66cm±)・P₅・P₆・P₁₀ (径26cm±・深さ26cm±)など6個のピット群で構成されている。これらのピット群内で、P₇—P₈・P₈—P₁₀・P₉—P₆ が対になる配置を示している。P₅ と P₆ は J VII-2a 住居址と共有関係にある。

この住居址に伴う地床炉は、2号炉を切る関係にある3号炉とみられる。炉の使用面は床面下6cm±の位置に設けられていて、きわめて強くしまる面となっている。下位の火山灰層は7cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。この炉に伴う現地性焼土は、径75cm±×50cm±の範囲に形成されている。

柱穴 P₇ と P₁₀ の間、および P₈ の西側には、この住居址に属すとみられる壁溝が設けられている。前者は幅 9 cm±~22cm±・深さ 4 cm±~7 cm±、後者は幅10cm±~18cm±・深さ 6 cm±を計る。

J VII-2c 住居址 (図版63a・131de ; 写真図版85a・175bc)

前記した2棟の住居址と同様に、この住居址の平面形態も不明である。柱穴間で規模は、4m×2.9m前後を計る。床面には地床炉が設けられている。

埋土は J VII-2a 住居址などと同様に、暗褐色土層で構成されている。

この住居址の床面も他の住居址群と共有関係にあつて、比較的平坦で、きわめて強くしまるものとなっている。柱穴は、P₁₁ (径18cm±・深さ25cm±)・P₂・P₁₂ (径20cm±・深さ20cm±)・P₁₃ (径58cm±・深さ26cm±)・P₁₄ (径31cm±・深さ51cm±)・P₁ など、6個のピット群で構成されているものと考えられる。これらの柱穴配置の中で、P₁₁—P₁₃・P₂—P₁・P₁₂—P₁₄ などに対になる関係がみられる。P₁ と P₂ は J VII-2a 住居址と共有関係にある。

この住居址に伴う地床炉(4号炉)は上下に重複する新旧2基の炉から成るもので、全体として径82cm±×70cm±の範囲に現地性焼土が形成されている。下位にある古期の炉は、床面よりも低い位置に使用面が設けられている。使用面はきわめて強くしまる面となっており、下位の火山灰層は8cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。新期の炉は、古期の炉の使

用面上に最大層厚 6 cm 土のパミスを敷設して作られている。この炉の使用面は床面のレベルにほぼ一致し、きわめて堅くしまる面となっていて、下位のパミスとともに火熱による赤色変化が僅かに認められている。

J VII—3 住居址 (図版63a・131g ; 写真図版85a・175d)

南西部を他の住居址に大きく削剝されていることや、北半部の壁が消失していることなどから、この住居址の形態および規模は不明である。残存している範囲内では、地床炉が検出されている。

観察が不十分であるために、固有の埋土の状況は不明である。

不整形ピットにより破壊されている部分を除けば、床面はほぼ平坦できわめて堅くしまるものとなっている。柱穴ははっきりとしたものは検出されていない。炉との関係からみて、ピット P₁₉ (径30cm 土・深さ45cm 土)・P₂₀ (径25cm 土・深さ25cm 土) などは当住居址に伴うものかもしれないが、その詳細は不明である。

炉は上下に重複する新旧 2 基の地床炉から成るもので、全体として径45cm 土×45cm 土の範囲に現地性焼土の形成が認められる。古期の炉は床面よりも僅かに低い位置に使用面をもつもので、その下位の火山灰層は 3 cm 土の深さまで火熱による赤色変化を受けている。使用面自体はきわめて堅くしまる面となっている。この古期の炉の使用面上に、基本層序Ⅲ層起源とみられるパミスを貼って新期の炉が形成されている。この炉の使用面は床面のレベルとほぼ一致し、堅くしまる面となっている。使用面および下位に敷設されている厚さ 2 cm 土のパミスには、全体的に火熱による赤色変化がみられる。小規模な不整形ピットを挟んでこの炉の北側には、径16cm 土の現地性焼土が存在しているが、両者の関係についてはよくわからない。

以上に述べた J VII—2 住居址群と J VII—3 住居址の重複関係を整理すると、それらの間の新旧や変遷は次のようなものとなろう。ただし、これは上下に重複する新旧 2 基の炉を伴うものの中で、新期の炉をもつ住居址を対象とするものであって、上下の炉の間にある程度の時間差があるものとすれば、次に述べる住居址群間の関係はより複雑なものとなるであろう。

まず、J VII—2c 住居址の地床炉は J VII—2b 住居址の柱穴 P₇ および壁溝の上に形成されているので、J VII—2c 住居址は J VII—2b 住居址よりも後出のものであると考えられる。また、J VII—2a 住居址と J VII—2c 住居址に共有される関係にある柱穴 P₁ は、J VII—3 住居址に伴う地床炉を僅かながらにしろ切る在り方を示しているので、この 2 棟あるいは少なくともそのうちの 1 棟は J VII—3 住居址よりも新しい段階に位置づけられよう。J VII—2a 住居址と J VII—2b 住居址との関係についてみれば、重複する住居址間にあつては全部とは言えないまでも、その重複部分に対して新期の住居址の側から壁溝が設けられる例が多いという一般的傾向から考えて、小規模なものであるにしろ壁溝を伴う J VII—2b 住居址のほうが J VII—2a 住居址より

も新しい時期のものとして推定される。また、両住居址の重複部分内に位置する2号炉と3号炉の間にも、明確な切り合い関係が認められている。配置的な面からのみ言えば、これらの地床炉がいずれの住居址に伴うものか明らかではないが、上に述べたJ VII-2b住居址の壁溝の存在を手掛りにして考えれば、2号炉はJ VII-2a住居址に、2号炉を切る3号炉はJ VII-2b住居址にそれぞれ所属するものとなろう。

上記の重複関係内の諸要素からまとめると、J VII-2住居址群に関しては、古期のものから順に、J VII-2a住居址・J VII-2b住居址・J VII-2c住居址という変遷過程が考えられる。J VII-3住居址については、J VII-2c住居址よりも古い段階に位置づけられるということ以外、他の住居址との具体的な関係は不明である。ただここで、J VII-2a住居址とJ VII-2c住居址とのP₁・P₂、J VII-2a住居址とJ VII-2b住居址とのP₅・P₆など、J VII-2住居址群内にみられる柱穴の再利用形態から推定すると、これらの各住居址は互いに強い関連を示しているものと考えられるので、これら一連の住居址群とはやや“場”を異にして位置するJ VII-3住居址は、この重複住居址群の中であって最古期のものとして捉えられる可能性がある。

J VII-2住居址群やJ VII-3住居址など、柱穴や炉の配置から存在が明らかにされた住居址群のほかに、ここにみられる重複範囲内にはなお複数の住居址が位置している可能性がある。それらの実態については不明であるが、J VII-2c住居址の地床炉を切る柱穴状のピットであるP₁₅（径24cm±・深さ48cm±）・P₁₆（径35cm±・深さ38cm±）などの存在は、その可能性を示す一つの証拠をなすものであろう。また、この重複範囲内には、同様に柱穴状のピットであるP₁₇（径19cm±・深さ24cm±）・P₁₈（径24cm±・深さ27cm±）・P₂₁（径34cm±・深さ21cm±）などがみられるが、これらの具体的な位置づけについても詳細は不明である。

他の遺構群との重複関係では、J VII-2a住居址はJ VII-51ピットにより切られ、J VII-2a・J VII-2c住居址の重複部分は不整形ピットにより切られている。J VII-3住居址は、炉の周辺部と西方の床面の一部が不整形ピットにより切られているほか、南半部の大半がJ VII-4・5・6・7住居址群によって削剝を受けているものと考えられる。

J VII-4住居址（図版63b；写真図版85ab・87a）

他の住居址群により大半の部分が削剝されているために、この住居址の規模・形態の詳細は不明である。僅かに東壁周辺の一部が残片的に検出されているにすぎない。この住居址に伴う固有の遺物はないが、重複関係内の前後の状況から判断して、縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。

埋土の状況は不明である。

残存部での床面はほぼ平坦で、きわめて堅くしまるものとなっている。柱穴は検出されていない。壁高は東壁46cm±を計る。

平面形や床面の設けられているレベルからみて、この住居址は J VII—3 住居址を切っている。また、大半の部分を J VII—5 住居址に、一部を J VII—6・J VII—7 の各住居址に切られていると考えられる。北側の一部には、僅かながら掘りすぎがみられた。

J VII—5 住居址 (図版63bc・64a ; 写真図版85b・87a)

重複関係内の前後の状況から判断して、この住居址も縄文時代前期末葉の時期に位置づけられるものである。北半部が他の住居址に大きく削剝されているために、規模・形態の詳細は不明であるが、残存している東壁と南壁の輪郭線からみて、東西径3.7m±の規模をもち、凸辺長方形の形態を示しているものと考えられる。

僅かに残存していた部分での観察によれば、埋土は焼土と炭化物の細粒を含む暗褐色土層により構成されている。

床面は全体に平坦で、きわめて堅くしまるものとなっている。柱穴は検出されていない。壁高は、南壁42cm±・東壁48cm±・西壁50cm±を計る。なお、この住居址の床面は、J VII—4 住居址のそれよりも11cm±低い位置に設けられている。

東壁沿いおよび南壁沿いの東半部には幅7cm±~17cm±・深さ3cm±~6cm±の壁溝が設けられている。南壁沿いの壁溝は壁から11cm±~22cm±内側に位置しているの、あるいはこの外方に、当住居址と形態をほぼ同じくする先行する住居址が存在していたのかもしれない。

この住居址は直接的には J VII—4 住居址を、間接的には J VII—3 住居址を切っている。J VII—6・J VII—7 住居址群には切られている。北側の一部には掘りすぎがみられる。

J VII—6 住居址 (図版63bc・64b ; 写真図版85ab・87a)

大半の部分を後出の住居址によって切られているところから、この住居址の規模や形態は不明である。僅かに残存している西壁から南壁にかけての輪郭線から推定して、楕円形状の形態を示しているものかもしれない。

南西部に残片的にみられた埋土の観察によれば、それは主に、焼土・炭化物の細粒を包含する暗褐色土層で構成されている。

床面は全体的にはきわめて堅くしまるほぼ平滑な面となっているが、後出の住居址の側に向けてゆるやかに下る傾斜を示している。柱穴は検出されていない。壁高は、南壁6cm±(J VII—5 住居址床面との比高)・西壁37cm±を計る。南東部の壁沿いには、幅8cm±~18cm±・深さ3cm±~6cm±の壁溝が断続的に設けられている。

この住居址は直接的に J VII—5 住居址、間接的に J VII—3・J VII—4 住居址を切り、J VII—7 住居址群には切られている。

J VII—7 住居址群 (図版63bc・64c・131f ; 写真図版85ab・86a・87a・267cdef)

この住居址群は、J VII—4・J VII—5・J VII—6 などとの重複する住居址群内にあつて、もつ

とも後出のものである。住居址群間の前後関係および埋土中に包含される多量の遺物の所属時期からみて、この住居址群も縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。内部にみられるピット群の相互関係や配列を検討した結果、このJ VII-7住居址群として登録されている範囲内には、炉・床面・柱穴・壁溝・壁のそれぞれを何らかの形で共有して、異なる柱穴配置を示す3棟の住居址がほぼ平面的に重複していることが判明した。今これらの住居址を、古いと考えられるものから順に、J VII-7a住居址・J VII-7b住居址・J VII-7c住居址と呼称する。これらの住居址群の間には、上記のような各種の共有形態が認められているが、これら3者の関係は住居址のそれぞれの示す柱穴配置の異質性から推定して、互いに系列の異なるものであると考えられよう。

各住居址を記載するに先立ち、ここでJ VII-7住居址群の全体について触れておく。この住居址群は径2.8m±の規模をもち、円形の形態を示している。3棟の住居址の柱穴配置や各種の共有関係からみて、一部が縮小されたと推定される北東部分を除けば、これらの各住居址はほぼ同規模・同形態のものであると考えられる。床面中央部よりやや南東に位置して、上下に重複する新旧2基の地床炉から成る炉が設けられている。

壁際で層理面は不明瞭なものとなっているが、住居址群の中央部で観察した結果によれば、埋土は基本的に、上位から暗褐色土層・黒褐色土層・暗褐色土層で構成されている。上部層中には、土器片・石器類・礫・焼土・炭化物などが含まれていて、全体的に人為堆積相を示している。中部層は、この住居址群の埋土中でもっとも多くの遺物類を包含する層準である。層中には多量の深鉢形土器の完形品をはじめとして、大形土器破片・各種石器類・礫・焼土・炭化物が含まれている。この層も上部層と同様に、複合廃棄物から成る人為堆積物の層相を示している。遺物の出土状態の観察によると、この層中に含まれるものは多方向性のバラツキをもって分布しているが、この層の上下の層理面上にみられる大形土器破片などは層の傾斜に平行して、横位や斜位の状態で検出されている。最下部の暗褐色土層は少量の焼土・炭化物や多量の火山灰ブロックなどを含んでいて、全体に自然堆積相を示している。

床面はほぼ平坦で、きわめて堅くしまるものとなっている。柱穴配置については各住居址単位に次項で述べる。壁高は、北壁100cm±・南壁4cm±(J VII-6住居址床面との比高)・東壁14cm±(同上)・西壁92cm±を計る。北西の一部を除けば、この住居址群にはほぼ全周する形で、幅15cm±~35cm±・深さ8cm±~16cm±の規模の連続的な壁溝が設けられている。柱穴配置からみて、この壁溝の大半の部分は本来的にJ VII-7a住居址に伴って設けられたものであると考えられる。柱穴P₂の北西部に位置する壁溝も、その在り方から推定するとJ VII-7a住居址に伴うものであろう。P₂の南東部は掘りすぎているために、この部分における壁溝の存否などの状況は不明である。北側にみられる一部壁溝間の断絶およびこの位置の各住居址の柱穴のズレ

から考えて、柱穴 P₁₀—P₃ 間の部分の壁溝は J VII—7c 住居址の形成に伴って設けられているものであろう。

上下に重複して位置する地床炉のうち、新期の炉は J VII—7c 住居址に伴うものであるとみられるが、古期の炉が他の住居址のいずれに所属するものか明らかではない。また、2つの炉のうち的一方を2棟の住居址が共有している可能性も考えられる。これらの炉はいずれも小規模なものであるが、不整形ピットに切られていることや精査時の掘りすぎなどから、固有の現地性焼土の分布範囲の詳細については不明である。古期の炉は床面よりも8cm±深い掘り方を伴っていて、掘り方内の焼土・炭化物を僅かに含む褐色土層の上面を使用面として形成されている。この使用面は床面よりもやや低い位置に設けられており、下位の火山灰層は1cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。この使用面上には、層厚1cm±の炭化物の分布がみられた。Field Cardの記載を欠くために、使用面自体の状態は明らかでない。新期の炉は、古期の炉に伴う炭化物層の上に、基本層序III層起源と考えられる層厚2cm±のパミスを敷設して、その上面を使用面として形成されている。この使用面は床面よりも僅かに高い位置に設けられており、下位のパミスは1cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。使用面自体の状況は不明である。

J VII—7a 住居址 (図版63bc・64c・131f ; 写真図版85ab・86a・87a・267cdef)

この住居址は重複する J VII—7 住居址群内で最古期に位置づけられるものとみられる。柱穴は、P₁ (径24cm±・深さ51cm±)・P₂ (径25cm±・深さ18cm±)・P₃ (径25cm±・深さ33cm±)・P₄ (径19cm±・深さ31cm±)・P₅ (径21cm±・深さ31cm±)・P₆ (径22cm±・深さ29cm±)・P₇ (径27cm±・深さ22cm±) など7個のピットで構成されていて、全体的に五角形状の配置を示している。これらの柱穴の中で、P₂—P₇・P₄—P₅ が対になり、この間にあって P₂—P₆・P₆—P₃・P₃—P₅ の柱穴はジグザグ状に配されている。

J VII—7b 住居址 (図版63bc・64c・131f ; 写真図版85ab・86a・87a・267cdef)

J VII—7 重複住居址群内で、この住居址は中期に位置づけられるものであろう。柱穴は、P₁・P₈ (径21cm±・深さ51cm±)・P₄・P₅・P₉ (径19cm±・深さ44cm±) など5個のピットで構成されていて、五角形状の配置を示している。これらの中で、P₈—P₉・P₄—P₅ の各群が対になる形に配されている。P₁・P₄・P₅ の3個の柱穴は、J VII—7a 住居址の同位置の柱穴を再利用したものであろう。

J VII—7c 住居址 (図版63bc・64c・131f ; 写真図版85ab・86a・87a・267cdef)

この住居址は、重複する J VII—7 住居址群内でもっとも新しい時期に位置づけられるものであろう。柱穴は、P₁・P₁₀ (径34cm±・深さ78cm±)・P₁₁ (径18cm±・深さ23cm±)・P₄・P₅・P₆・P₉ など7個のピットで構成されていて、七角形状の配置を示している。これらの柱穴の中で、

P₁₀—P₉・P₁₁—P₆・P₄—P₅などの各群が対になる形に配されている。また柱穴の再利用形態の面からみれば、P₁・P₄・P₅はJ VII—7a・J VII—7b 両住居址と、P₆はJ VII—7a 住居址のみと、P₉はJ VII—7b 住居址とそれぞれ共有関係にある。

以上、J VII—7 住居址群内の各住居址について、古いと考えられるものから順に述べてきたが、柱穴配置や柱穴間のズレおよび壁溝の在り方などを手掛りにして推定すると、これら各住居址の具体的変遷は次のようなものとなろう。まず、住居址群内の北壁よりの位置には、互いに近接してそれぞれの住居址に所属する柱穴 P₁₀・P₂・P₈がみられる。これらの中で、P₁₀はP₂を切っているところから、P₁₀を伴うJ VII—7c 住居址はP₂を伴うJ VII—7a 住居址よりも後出のものであると解釈されよう。さらに壁溝の在り方をみると、J VII—7a 住居址に伴うと考えられるP₂北西部のものは、J VII—7c 住居址の柱穴 P₁₀—P₁₁間の壁溝よりも外側の位置に設けられている。重複住居址間にあつては、その重複部分に対して新しい住居址の側から壁溝が施されることが多いという一般的傾向からみて、上記の壁溝の在り方は、J VII—7a 住居址がJ VII—7c 住居址に先行する可能性を示唆するものであろう。

柱穴間の切り合いおよび壁溝の在り方から前後関係が推定されたJ VII—7a・J VII—7c 両住居址と、これらとは異なる柱穴配置を示すJ VII—7b 住居址との新旧関係は厳密には明らかなものではない。しかし、J VII—7b・J VII—7c 両住居址と共有関係にある柱穴 P₉がJ VII—7a 住居址のP₇の内側に設けられていることや、P₈がP₁₀とP₂の間とも言える位置に設けられていることなどから考えて、J VII—7b 住居址は時間的に、J VII—7a 住居址とJ VII—7c 住居址の間に位置しているものと推定される。したがって、柱穴や壁溝の在り方からこれらの住居址群の関係をまとめると、それらは古期のものから順に、J VII—7a→J VII—7b→J VII—7c 住居址と変遷したと考えられるのである。

J VII—7 住居址群の内部、および外部の近接した位置には、P₁₂(径15cm±・深さ23cm±)・P₁₃(径16cm±・深さ14cm±)・P₁₄(径30cm±・深さ8cm±)・P₁₅(径18cm±・深さ16cm±)・P₁₆(径19cm±・深さ14cm±)などのピット群がみられる。これらは先行する住居址群に伴うものかもしれないが、その詳細は不明である。

J VII—8 住居址

地床炉的な現地性焼土が検出された当遺構について、調査時および整理時の段階において住居登録がなされたが、後の検討により焼土遺構として捉えることが妥当であることが判明した。したがってこの住居址名をここで欠番扱いとし、この部分に対してはJ VII—201焼土遺構の項目内でその状況を述べることにする。

J VII—9 住居址 (図版65ab・131h ; 写真図版86b・87b・175e)

床面や炉などからの出土遺物はないが、埋土中の遺物群や炉の形態からみて、この住居址は

縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。比較的保存が良好な状態で検出されている。規模は径4.2m±を計り、ほぼ円形の形態を示している。この住居址の下位に位置している住居址に対して敷設された貼り床には1基の地床炉が設けられている。

埋土はいくつかの層に細分されるが、基本的には上位の黒褐色土層・中位の暗褐色土層群・下位の褐色土層から成っている。これらのうち、中位の暗褐色土層群は堆積状態や層相からみて、「土」を主体とした単純廃棄物ではないかと考えられる。最下部の褐色土層は遺物を含まず、壁際で層厚を増し、住居址中央部付近では薄失する汚れ火山灰層である。

床面は全体的に平坦で、貼り床の範囲も含めてきわめて堅くしまるものとなっている。柱穴は配置からみて、P₁ (径28cm±・深さ9cm±)・P₂ (径26cm±・深さ9cm±)・P₃ (径22cm±・深さ9cm±)・P₄ (径20cm±・深さ12cm±)・P₅ (径29cm±・深さ18cm±)・P₆ (径19cm±・深さ43cm±)・P₇ (径27cm±・深さ9cm±)など、7個のピットで構成されているものと考えられる。これらのピット群の中で、P₁はP₂—P₇を結んだ線を底辺とする三角形の頂点にあたる位置に、またP₇—P₃・P₃—P₆・P₆—P₄・P₄—P₅などの群はジグザグ状に、それぞれ配されている。この住居址内には上記の柱穴群のほかに、P₈ (径37cm±・深さ17cm±)・P₉ (径38cm±・深さ56cm±)・P₁₀ (径47cm±・深さ14cm±)・P₁₁ (径27cm±・深さ45cm±)・P₁₂ (径28cm±・深さ16cm±)など全体に柱穴群よりも深いピット群が検出されているが、配置的にも安定性を欠くために、これらを柱穴として捉えることはできなかった。したがってその具体的な性格については不明である。壁高は、北壁60cm±・南壁25cm±・東壁60cm±・西壁23cm±を計る。柱穴P₄を中心とする範囲の北壁はオーバー・ハング状を呈し、下底部が外奥に潜りこむ在り方を示している。壁溝は設けられていない。

住居址のほぼ中央部に設けられている炉は地床炉の形態をもつもので、径96cm±×86cm±の範囲にわたって現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は床面よりもやや低い位置にあってきわめて堅くしまる面となっている。下位の貼り床として敷設してある汚れ火山灰層は7cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。

この住居址からの出土遺物としては、埋土中から、縄文時代前期末葉期の土器群のほか、磨製石斧や石鏃など石器類や剥片類が得られている。

他遺構との重複関係の面では、この住居址は古期のJ VII—10住居址の全形に載る在り方を示している。重複範囲内にはこの住居址の側から、層厚2cm±～15cm±の汚れ火山灰が貼り床として充填されている。

J VII—10住居址 (図版65ac ; 写真図版86b・87b)

この住居址はJ VII—9住居址に伴う貼り床下位から検出されたものである。床面などからの出土遺物はないが、固有の埋土を欠く当住居址の床面上に直接J VII—9住居址の側から汚れ火

山灰による貼り床が施されていることから、これも時期的には、おそらく縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。南壁を消失しているために正確な規模や形態は不明であるが、残存している壁の輪郭線から推定して、この住居址は $2.7\text{m} \pm 2.1\text{m} \pm$ の規模をもち、凸辺長方形形状の平面形を示していたものであるとみられる。炉は設けられていない。

床面は全体的に平坦で、きわめて堅くしめる面となっている。当住居址に伴う柱穴状のピットとして、 P_1 (径 $24\text{cm} \pm$ ・深さ $17\text{cm} \pm$)・ P_2 (径 $31\text{cm} \pm$ ・深さ $35\text{cm} \pm$) が検出されている。壁高は、J VII-9 住居址床面との比高で北壁 $15\text{cm} \pm$ ・東壁 $2\text{cm} \pm$ ・西壁 $10\text{cm} \pm$ を計る。遺構検出面の位置からみて、J VII-9 住居址に削剝される以前のこの住居址の壁高は $60 \sim 70\text{cm} \pm$ ほどのものであったと考えられる。壁溝は設けられていない。

重複関係では、この住居址はJ VII-9 住居址に切られている以外に、他の遺構との切り合いはみられない。

J VII-11住居址 (図版65d ; 写真図版88a)

床面から出土した遺物はないが、埋土中に含まれている土器群などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。削剝を受けている部分があるために規模や形状の詳細は明らかなものではないが、残存部の壁の輪郭線からみて、この住居址は径 $3.1\text{m} \pm$ の規模をもち、ほぼ円形の形態を示していたのではないかと考えられる。炉は設けられていない。

埋土は単層の暗褐色土層で構成されており、その層中には、前期末葉期の一括土器や破片、および石鏃・凹石・石棒・スクレイパーなどの石器類や剝片類が包含されていた。単層であるために、層相を Field Card に記載したのみで、土層断面図の作成は省略している。

床面はほぼ平坦で、全体的に堅くしめる面となっている。柱穴状のピットは、 P_1 (径 $14\text{cm} \pm$ ・深さ $7\text{cm} \pm$)・ P_2 (径 $14\text{cm} \pm$ ・深さ $7\text{cm} \pm$)・ P_3 (径 $17\text{cm} \pm$ ・深さ $40\text{cm} \pm$)・ P_4 (径 $33\text{cm} \pm$ ・深さ $9\text{cm} \pm$) などの4個が検出されているが、配置的にみて、これらがはたして柱穴を構成するものであるかどうかについては不明である。壁高は、北壁 $24\text{cm} \pm$ ・南壁 $19\text{cm} \pm$ ・西壁 $17\text{cm} \pm$ を計る。壁溝は設けられていない。

この住居址は東側部分でJ VII-12住居址と重複しているとみられるが、観察が不十分なものであるために、両者の新旧関係の詳細については不明なものとなっている。

J VII-12住居址 (図版65ef ; 写真図版87c・88b)

床面などからの出土遺物を欠くが、埋土中の土器群や遺構間の重複状況を参考にして推定すると、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。西壁から南壁にかけての範囲が他の住居址群に切られていることから規模・形状の詳細については不明であるが、残存している壁の輪郭線からみて、この住居址は $3.2\text{m} \times 3.2\text{m}$ 前後の規模をもち、凸辺正方形

状の平面形を呈していたものではないかと考えられる。調査範囲内に関する限り、炉は検出されていない。

埋土はいくつかの層に細分されるが、基本的には上部の黒褐色土層と下部の暗褐色土層群で構成されている。この暗褐色土層群内には、前期末葉期の一括土器や破片類および石器類や炭化物などが包含されている。これらの遺物群は、J VII-201焼土遺構を中心とする広範囲に分布する遺物包含層に連続するものの一部をなしているものであろう。

床面は全体的に凹凸のある状態を呈していて、堅くしまるものとなっている。具体的な柱穴配置は不明であるが、柱穴状のピットとして、P₁（径13cm±・深さ27cm±）・P₂（径18cm±・深さ25cm±）・P₃（径34cm±・深さ21cm±）・P₄（径19cm±・深さ42cm±）などが検出されている。壁高は、北壁32cm±・東壁14cm±・西壁35cm±を計る。壁溝は設けられていない。

またこの住居址内には、付属施設と言えるかどうか不明であるが、柱穴状ピット P₄ の東側から南側の範囲にかけて比高 6 cm±の半月形状の段差がみられる。

この住居址は J VII-15住居址に切られている。J VII-13住居址とも重複関係をもつものと思われるが、この両者の新旧関係についてはよくわからない。J VII-11住居址との関係についても同様である。

J VII-13住居址（図版66acd・132a；写真図版89a・92a・176a）

この住居址は、全部で3棟の住居址が同心円状ともいえる状態で重複している内部に検出されたものである。これら、J VII-13住居址・J VII-14住居址・J VII-15住居址の間には、床面・柱穴・炉などの一部に再利用形態がみられる。当住居址からは時期決定のできる固有の遺物は出土していないが、住居址間の再利用形態の存在から考えて、この住居址は重複する他の住居址群とほぼ同じ時期にこの地点に営まれていたものと推定される。後述する J VII-15住居址は、出土遺物からみて縄文時代前期末葉期に位置づけられるものである。この J VII-13住居址は、ここにみられる3棟の重複住居址群内にあつて最古期の段階を占めるものであるが、住居址群内の再利用形態の存在を手掛かりにして推定すると、これも時期的には J VII-15住居址と同様に縄文時代前期末葉期に含められるものであろう。

この住居址の壁の全周は、後出の J VII-15住居址により床面近くの部位まで削剝を受けているが、比高 2～6 cm±範囲で残存している壁の輪郭線から、径4.4m±×3.9m±の規模をもち、卵形に近い平面形を示す住居址であることが明らかにされた。床面の中央部には地床炉が1基設けられていたとみられる。

当住居址に伴う埋土は存在せず、J VII-14住居址に対すると同じく、床面上には J VII-15住居址の側から層厚 2～6 cm±の黒褐色土のブロックを包含する汚れ火山灰が貼り床として直接的に敷設されている。しかし、炉の存在する部分については貼り床が施されていない。

床面は中央部に向けてゆるやかに凹む在り方を示し、J VII—14住居址のそれと連続的で、全体にきわめて堅くしまる面となっている。柱穴は、P₁ (径32cm±・深さ73cm±)・P₂ (径24cm±・深さ不明)・P₃ (径16cm±・深さ16cm±)・P₄ (径30cm±・深さ63cm±)・P₅ (径19cm±・深さ21cm±)・P₆ (径28cm±・深さ36cm±) など、6個のピットで構成されているものと考えられる。P₂ は実測図中に測定値が記入されていないために深度が不明であるが、複数の調査員の Field Card には柱穴として記載されているものである。これらの柱穴群の中で、P₁・P₄・P₆ の3個が後出のJ VII—15住居址によって再利用されているものと推定される。両住居址間にみられる柱穴群の総体的な深度の差から判断して、P₁ の部位で、当住居址に固有の柱穴はJ VII—15住居址の側から原形を止めぬほどの破壊を受けているものであろう。これに反して、P₄ および P₆ の位置では、両住居址に伴う柱穴が複合している状況が認められている。ことに、柱穴 P₆ の部分では、J VII—15住居址を構成する柱穴 P₁₀ との重複関係が明瞭なものとなっている。

J VII—13住居址に付属する柱穴間には、P₁—P₄・P₂—P₆・P₃—P₅ と対になる関係が認められており、全体で六角形を形作る安定した柱穴配置にあることを示している。この柱穴配置は形態的にJ VII—15住居址のそれとよく一致している。

住居址の壁高は、J.VII—15住居址床面との比高で、北壁2cm±・南壁5cm±・東壁2cm±・西壁6cm±を計る。遺構検出面の位置から考えて、J VII—15住居址に削剝される以前のこの住居址の壁高は40～50cm前後のものであったと推定される。壁溝は設けられていない。

この住居址に伴う地床炉は、その位置および在り方から判断して、J VII—14住居址・J VII—15住居址に引き続き再利用されているものと考えられる。したがってこの炉については、最終的な使用段階にあるJ VII—15住居址の1号炉に関する記載の中で詳しく触れることにする。ただここでは、1号炉の使用面はJ VII—13住居址・J VII—14住居址・J VII—15住居址のいずれの床面にも連続的で、その下位には貼り床などの痕跡は認められていないことを指摘するにとどめておく。

この住居址内には前に述べた柱穴群のほかに、P₁₄ (径14cm±・深さ16cm±)・P₁₅ (径16cm±・深さ19cm±)などのピットが検出されているが、これらの具体的な性格については不明である。

重複関係では、この住居址はJ VII—14住居址・J VII—15住居址により切られている。J VII—14住居址との関係は次項で具体的に述べる。また、この住居址はJ VII—12住居址とも僅かな部分で重複しあっているものと考えられるが、その間にJ VII—15住居址が介在しているために、両者の新旧関係については不明なものとなっている。

J VII—14住居址 (図版66ad・67a・132a ; 写真図版89a・92a・176a)

この住居址は、J VII—13住居址・J VII—15住居址の内部に検出されたものである。重複関係内ではJ VII—13住居址を切り、J VII—15住居址には切られる位置にある。この住居址もJ VII—13

住居址と同様に固有の遺物を欠くが、ここにみられる3棟の住居址群内の床面・柱穴・炉などの再利用形態の存在から推定して、これもJ VII-15住居址と同じく時期的には縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。壁は検出されていないが、一部断続的ながらもほぼ全周に設けられている壁溝の存在から、当住居址は径3.2m±×2.6m±の規模をもち、卵形に近い形態を示しているものであることが明らかにされた。床面の中央部には、J VII-13住居址およびJ VII-15住居址と共有関係にある1基の地床炉が設けられていたとみられる。

この住居址は先行するJ VII-13住居址とともに固有の埋土を欠き、その床面と壁溝内には後出のJ VII-15住居址の側から黒褐色土のブロックを含む層厚1cm±～5cm±の汚れ火山灰が貼り床として敷設されている。地床炉内部には貼り床がみられない。

床面はJ VII-13住居址のそれと全方向において連続的で、住居址中央部に向ってゆるやかに凹む在り方を示し、全体的にきわめて堅くしめる面となっている。両者間の床面の連続性からみて、J VII-14住居址の床面はJ VII-13住居址のそれを再利用しているものであろう。柱穴は、P₇ (径28cm±・深さ11cm±)・P₈ (径16cm±・深さ12cm±)・P₉ (径17cm±・深さ31cm±) など3個のピットで構成されているものと考えられる。壁溝の規模は、幅5cm±～23cm±・深さ2cm±～13cm±を計る。この壁溝の内部には深さ5cm±～13cm±の小ピットがいくつかみられるが、あるいはこれらは壁溝の機能に関連する何らかの施設の痕跡であるのかもしれない。

この住居址の炉については、J VII-15住居址の1号炉に関する記載の中で詳しく触れることにし、ここでの記述は省略することにする。

この住居址内には上に述べたもの以外に、P₁₆ (径14cm±・深さ23cm±)・P₁₇ (径12cm±・深さ21cm±)などのピットのほか、深さ5cm±～7cm±の範囲にある小ピット群がいくつか存在している。これらのピット群の中には、J VII-13住居址に含まれるものもあるのかもしれない。

住居間の重複について言えば、貼り床の存在から当住居址はJ VII-15住居址に先行していることが明らかなので、ここでは主に、J VII-13住居址との新旧関係を述べる。まず、この住居址の壁溝内に充填されていた黒褐色土のブロックを含む汚れ火山灰は、当住居址およびJ VII-13住居址床面を被覆するJ VII-15住居址の貼り床に連続的で、その層相もきわめてよく一致している。これらのことは、J VII-15住居址側からの貼り床の敷設が、J VII-13住居址の床面にもJ VII-14住居址の壁溝や床面にも一連の行為としてなされたことを意味するものであろう。このことはまた、貼り床が敷設される段階においては、J VII-14住居址に伴う壁溝は「土」を充填する程度に空間を形成していたことをも意味するものであろう。つまり、この壁溝内にはJ VII-13住居址側からの貼り床の痕跡は見い出されず、J VII-15住居址の側からのみ貼り床が施されていることが明らかである。これは、当住居址がJ VII-13住居址を切っているとする見方に対して十分な根拠を与えるものであろう。また別に、少なくとも長者屋敷遺跡にお

ける住居址間の重複関係を参考にする限り、古期住居を切る新时期住居の側には壁溝が設けられている事例が多いという一般的傾向が見い出されている。

以上のことを総合して考えれば、このJ VII-14住居址は明らかにJ VII-13住居址を切っているものと判断されよう。

J VII-15住居址 (図版66abd・67b・132abd; 写真図版87c・89ab・90a・176abc・268abcde)

この住居址は、ここにみられる同心円状ともいえる重複住居址群の中では、時間的にもっとも新しい段階に位置づけられるものである。床面上や炉からは時期決定資料となる遺物は出土していないが、柱穴から得られた土器や埋土中に含まれていた多量の土器群からみて、この住居址は时期的に縄文時代前期末葉期に含められるものであろう。全体に保存が良好な状態で検出されている。規模は6.0m±×5.5m±を計り、平面形は卵形状の形態を示している。床面の中央部には、先行するJ VII-13住居址・J VII-14住居址に付属するものを再利用したと考えられる1基の地床炉が設けられているほか、その北部および北東部にはやや小規模な地床炉が2基みられる。

埋土は上位のものから順に、黒色土層・黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層の4層に細分することができる。これらの中で、中央部の層準を占める黒褐色土層(b層)中には、多量の完形土器・土器破片や、石鏃・石匙・半円状扁平打製石器・凹石・スクレイパーなどの石器群および剥片類が焼土・炭化物などとともに含まれている。土層断面図には破片の分布状況が描かれているにすぎないが、これを外れた地点のフィールドでの観察によれば、住居址中央部に分布する一括土器および大形破片群などはb・c層の層理面付近に集中し、床面から5cm±~10cm±浮く在り方を示している。これに対して壁際に位置を占めている一括土器群等は、b層の傾斜に沿って住居址内に落ちこむ在り方を示している。このように、各種の遺物を大量に含むb層は、マトリックスを構成する黒褐色土とともに複合的な廃棄行為の結果形成されたものであると考えられる。埋土の最下部を占めるc・d層には遺物はほとんど含まれていない。また、埋土最上層を占める黒色土層の下底部付近には円礫・土器片・焼土・炭化物などが含まれているが、この層自体の形成時期からみて、内部に含まれるこれらの遺物群はb層起源のものであると推定される。

床面は住居址中央部に向けてゆるやかに凹む在り方を示している。この住居址の床面は、先行するJ VII-13住居址とJ VII-14住居址に対して敷設された貼り床の部分と、壁沿いの固有の部分とから成るが、そのいずれも面は平滑できわめて堅くしまるものとなっている。貼り床の部分は、黒褐色土ブロックを含む層厚2cm±~6cm±の汚れ火山灰を、先行する住居址群の床面の傾斜に沿って敷設して形成されている。ただしこの貼り床は、先行する住居址群の地床炉上には施されていない。壁高は、北壁53cm±・南壁33cm±・東壁43cm±・西壁39cm±を計る。

柱穴は、 P_{10} (径28cm±・深さ57cm±)・ P_1 (径32cm±・深さ73cm±)・ P_{11} (径23cm±・深さ42cm±)・ P_{12} (径28cm±・深さ64cm±)・ P_{13} (径19cm±・深さ35cm±)・ P_4 (径30cm±・深さ63cm±)など、6個のピットで構成されているものと考えられる。このことはすでにJ VII-13住居址の項目内で触れたが、当住居址に伴う柱穴 P_1 ・ P_4 ・ P_{10} は、ほぼ同位置でJ VII-13住居址の柱穴と重複しているものであろう。 P_1 の部位ではJ VII-13住居址に付属する柱穴を完全に破壊しているとみられるが、 P_4 ・ P_{10} の部位では両住居址の柱穴間の重複状況が痕跡的に残されている。ことに P_{10} の位置では、J VII-13住居址固有の柱穴 P_6 との複合が明瞭に現われている。これら、当住居址に伴う柱穴間では、 P_{10} - P_{12} ・ P_1 - P_4 ・ P_{11} - P_{13} の各群内に対になる配置関係がみられ、全体で六角形を形作る安定した柱穴配置を示している。この構成は、基本的にJ VII-13住居址の柱穴配置の形態によく一致している。

この住居址内には上に述べた柱穴群のほかに、 P_{18} (径26cm±・深さ43cm±)・ P_{19} (径12cm±・深さ18cm±)・ P_{20} (径20cm±・深さ16cm±)・ P_{21} (径26cm±・深さ27cm±)・ P_{22} (径20cm±・深さ42cm±)・ P_{23} (径18cm±・深さ29cm±)などのピット群がみられるが、これらの具体的な性格については不明である。北壁から東壁にかけての範囲にみられる深さ5cm±~10cm±の小ピット群についても同様である。

床面中央部に設けられている地床炉(1号炉)は、床面よりも低い位置に使用面をもつもので、径65cm±×60cm±の範囲に現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面はきわめて堅くしまるものとなっていて、その下位の火山灰層は6cm±の深度まで火熱による赤色変化を受けている。この炉の中央部から南西部を中心とする範囲には炭化物が集中して分布していた。この地床炉は次に述べる2号炉や3号炉と異り、当住居址の貼り床の面上に設けられているものではなく、その使用面は直接的にJ VII-13住居址・J VII-14住居址の床面に連続している。ここにみられる3棟の重複住居址群の中心的な位置に設けられていることと相俟って、この地床炉が存在する範囲に限って当住居址の側から貼り床が施されていないという事実は、この炉が先行する住居址から引き続き利用されたものであるという見方に有力な判断の材料を提供するものであろう。

2号炉は1号炉の北側にあって、この部分では径34cm±×25cm±の範囲に現地性焼土の形成がみられる。この地床炉の使用面は床面と同一レベルに設けられているもので、その下位の貼り床構成層は4cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。使用面自体は焼成によりきわめて堅くしまる面となっている。3号炉は1号炉の北東部に位置し、この範囲では径58cm±×38cm±の規模で現地性焼土が形成されている。この地床炉の使用面は床面よりも僅かに高い位置に設けられており、その下位の貼り床構成層および火山灰層は5cm±の深度まで火熱による赤色変化を被っている。この炉の使用面も焼成を受けてきわめて堅くしまる面となっている。

住居址群間の重複関係については今までたびたび触れてきたが、それを最終的に整理すると、当住居址はJ VII-12住居址・J VII-13住居址・J VII-14住居址を切るものであることが明らかにされた。ことに、時間的な先後関係はあるものの、J VII-13住居址・J VII-14住居址との重複では、床面・柱穴・地床炉などにみられる再利用形態を通して、これらの住居址間にかなり密接な関係が存在していたものと推定される。

J VII-16住居址（図版68ac；写真図版90b・92b）

床面上からの伴出遺物を欠くが、埋土中に含まれていた土器片およびここにみられる住居址間の重複状況を参考にして推定すると、この住居址は縄文時代前期に位置づけられるものではないかと考えられる。後出の住居址に東側の大半の部分が削剝されているものとみられ、規模・平面形については明らかではない。調査時点で $2.5\text{m} \pm \times 0.6\text{m} \pm$ の範囲が残存していたにすぎない。掘りすぎや後世の攪乱を受けてはいるが、残存している壁の輪郭線からみて、この住居址の平面形は方形を基調としていたものと考えられるのかもしれない。調査範囲内に関する限り、炉は検出されていない。

埋土はいくつかの層に細分されるが、基本的には上位の黒褐色土層群と下位の褐色～黄褐色土層群で構成されている。これらの埋土の中で、最上層を占める黒褐色土層を除くすべての層準が後出の住居址により削剝を受けている。

この住居址は火砕流とみられる堆積物を削剝した面上に作られているために、床面には多くの軽石が露出して凹凸のあるものとなっているが、面は全体に比較的堅くしまるものとなっている。柱穴状のピットは、 P_1 （径 $20\text{cm} \pm$ ・深さ $47\text{cm} \pm$ ）・ P_2 （径 $19\text{cm} \pm$ ・深さ $31\text{cm} \pm$ ）などが検出されているにすぎない。残存部で壁高は、北壁 $23\text{cm} \pm$ ・南壁 $20\text{cm} \pm$ ・西壁 $34\text{cm} \pm$ を計る。壁溝は設けられていない。

この住居址はJ VII-18住居址群により切られている。調査範囲内ではこのほかに、他の遺構との重複関係は確認されていない。

J VII-17住居址（図版68a）

この住居址はJ VII-18住居址群を精査中に残片的に検出されたもので、床面や埋土中の遺物を欠き、所属時期の詳細は不明である。ただ、ここにみられる住居址間の重複状況から、この住居址は縄文時代前期内に含まれる可能性もある。調査時点で $1.5\text{m} \pm \times 0.6\text{m} \pm$ の範囲が残存していたにすぎず、規模・平面形についても詳しいことはよくわからない。

土層断面図も作成されていず、また Field Card の記載も欠くために、埋土の状況についても不明である。

床面は火砕流とみられる堆積物を削剝した面上に設けられていて、比較的堅くしまるものとなっている。柱穴は検出されていない。壁高は北壁で $38\text{cm} \pm$ を計る。

この住居址は大半の部分を J VII-18 住居址群・J VII-19 住居址に切られているものと考えられる。

J VII-18 住居址群 (図版 68abc・132ce・133a; 写真図版 92b・176de・177ab・268f・269ab)

柱穴配置を検討した結果、この住居址群が検出された範囲内には最低 4 棟の住居址が存在していることが推定された。これらを今、J VII-18a 住居址・J VII-18b 住居址・J VII-18c 住居址・J VII-18d 住居址とする。これらのうち、柱穴配置の基本的な類似性からみて、古期の段階に位置すると考えられる J VII-18c 住居址と J VII-18d 住居址は同系列住居址群として捉えられるものであろう。他の住居址は、柱穴配置の異質性から判断して、それぞれが異系列の住居址を構成しているものであろう。この中で最新期に位置づけられるものが J VII-18a 住居址であると考えられる。以下、各住居址について個別的に記載する。

J VII-18a 住居址 (図版 68abc・132ce・133a; 写真図版 92b・176de・177ab・268f・269ab)

床面直上出土の深鉢形土器や炉の埋設土器からみて、この住居址は縄文時代中期中葉期に位置づけられるものであろう。全体に保存が良好な状態で検出されている。規模は、9.5m±×6.0m±を計り、平面形は隅丸長方形の形態を示している。また、すべてがこの住居址に伴うものではないが、住居址長軸線を中心とする範囲内からは、3 基の地床炉と 1 基の石囲い炉が検出されている。また、西方よりの部分からは倒立の埋設土器が発見されている。

埋土は主に、上部が黒色土層で、中部が暗褐色～黒褐色土層群で、下部が褐色～暗褐色土層群でそれぞれ構成されている。これらの埋土は、いずれも全体に自然堆積相を示している。

床面はほぼ平坦で、比較的堅くしめる面となっている。この床面は、全体的に貼り床として敷設された薄層厚の汚れ火山灰から成るもので、古期住居址群はすべてこの下位から検出されている。柱穴は、P₁ (径 18cm±・深さ 32cm±)・P₂ (径 31cm±・深さ 59cm±)・P₃ (径 28cm±・深さ 83cm±)・P₄ (径 25cm±・深さ 50cm±)・P₅ (径 50cm±・深さ 63cm±)・P₆ (径 32cm±・深さ 61cm±)・P₇ (径 28cm±・深さ 83cm±)・P₈ (径 54cm±・深さ 35cm±)・P₉ (径 37cm±・深さ 39cm±) などのピット群で構成されているものと考えられる。これらの柱穴群内では、P₁—P₉・P₂—P₈・P₃—P₇・P₄—P₆ の各群内に対になる配置関係がみられる。また P₅ は、P₄ と P₆ を結ぶ線を底辺とする三角形の頂点にあたる位置に配されている。P₃ の部位では、J VII-18c 住居址固有の柱穴と重複関係を示しているものであろう。この住居址群内からは、上に述べた柱穴群のほか、当住居址に所属するものではないかと考えられるピットがさらにいくつか検出されている。このうち、配置からみて、P₁₀ (径 47cm±・深さ 75cm±)・P₁₁ (径 30cm±・深さ 83cm±) は対になる関係にあって、間仕切りのな性格を示しているものと捉えられるのかもしれない。また、P₁₂ (径 50cm±・深さ 49cm±)・P₁₃ (径 42cm±・深さ 43cm±)・P₁₄ (径 63cm±・深さ 55cm±) などのピット群は、あるいは柱穴の構成員とみることもできるかもしれない。

住居址の壁高は、北壁95cm±・南壁23cm±・東壁56cm±・西壁35cm±を計る。西壁沿いおよび北壁沿いの一部と北東隅を中心とする範囲の壁沿いには、幅7cm±～25cm±・深さ4cm±～8cm±の壁溝が断続的に設けられている。

検出された4基の炉の中で、在り方から判断して当住居址に伴うとみられるものは、東側に位置する石囲い炉（1号炉）と西側の地床炉（4号炉）の2基ではないかと推定される。重複関係や配置からみて、中央部に位置する地床炉群（2号炉・3号炉）は古期住居址のいずれかに伴うものと考えられるが、所属が明確ではないために、これらについてもここで取りまとめて記載することにする。

石囲い炉（1号炉）は12個の、粒径10cm±～24cm±の安山岩類垂角～垂円礫を使用して平面形が方形状に構築されているもので、炉縁径は74cm±×68cm±を計る。これらの構成礫は、床面下10cm±～12cm±の深さまで、その下半部を下位の火山灰層中に埋めこまれている。石囲い部内の中央部付近には、口縁部と底部を欠く深鉢形土器が直立の状態で床面下15cm±の深さまで埋設されている。石囲い部内には全体に、最大層厚16cm±の現地性焼土が形成されている。この炉の使用面は床面よりも僅かに低い位置に設けられていて、きわめて堅くしまる面となっている。この石囲い炉は、2号炉を東部で切る径80cm±・最大深28cm±のやや不整形なピットを、さらに切って作られている。

上記したように、2号炉は東側をピットにより切られている。残存している範囲内では、径60cm±×46cm±・層厚10cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は当住居址の床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしまるものとなっている。3号炉の位置する部位には、径55cm±×47cm±の範囲内に層厚12cm±の現地性焼土が形成されている。この炉の使用面は凹凸のあるものとなっていて、比較的軟弱な面となっている。4号炉の位置では、径40cm±×33cm±の範囲に層厚2cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、比較的堅い面となっている。

住居址中央部よりやや西側に位置する長軸線上には、倒立の状態で一個体の完形深鉢形土器が床面下40cm±の深さまで埋めこまれている。この土器の底部の若干の部分は床面上に露出していた。また、この埋設土器が存在している部位では、明瞭な掘り方は確認されていない。

この住居址からの出土遺物としては、北壁よりの床面上から得られた1個体の深鉢形土器がある。この土器は底部を床面に接し、僅かに斜傾した状態で検出されている。

重複関係では、この住居址はJ VII-16住居址・J VII-17住居址・J VII-18b住居址・J VII-18c住居址・J VII-18d住居址・J VII-19住居址を切っている。

J VII-18b住居址（図版68abc・132ce・133a；写真図版92b・176de・177ab・268f・269ab）

この住居址はJ VII-18住居址群内に柱穴群だけが痕跡的に検出されたもので、所属時期の詳細

細や規模・形態については明らかではない。柱穴配置や住居間の重複関係からみると、この住居址は時期的には、縄文時代前期前半期から中期中葉期の間に位置づけられるものであろう。

柱穴は、P₁₅（径26cm±・深さ63cm±）・P₁₆（径40cm±・深さ44cm±）・P₁₇（径25cm±・深さ74cm±）・P₁₈（径18cm±・深さ32cm±）・P₁₉（径21cm±・深さ20cm±）・P₂₀（径34cm±・深さ31cm±）・P₂₁（径18cm±・深さ49cm±）など、7個のピットで構成されているものと考えられる。これらの柱穴は、P₁₅—P₂₁・P₂₁—P₁₆・P₁₆—P₂₀・P₂₀—P₁₇・P₁₇—P₁₉・P₁₉—P₁₈とジグザグ状に配置されている。柱穴間で、最大長7.8m±・最大幅2.6m±を計る。

重複関係の面では、この住居址はJ VII—18a 住居址に切られているが、他の住居址群との新旧関係についてはよくわからない。

J VII—18c 住居址（図版68abc・132ce・133a；写真図版92b・176de・177ab・268f・269ab）

J VII—18b 住居址やJ VII—18d 住居址と同様に、この住居址もJ VII—18住居址群内に柱穴群だけが痕跡的に検出されたもので、所属時期の詳細や規模・形態については明らかではない。ここにみられる住居址間の重複関係から判断すると、この住居址も時期的には縄文時代前期前半期から中期中葉期の間に位置づけられるものであろう。

柱穴は、P₃（前掲）・P₂₂（径30cm±・深さ65cm±）・P₂₃（径29cm±・深さ20cm±）・P₂₄（径36cm±・深さ37cm±）・P₂₅（径24cm±・深さ29cm±）など、5個のピットで構成されているものと考えられる。これらの柱穴の中で、P₃の部位ではJ VII—18a 住居址固有の柱穴と重複を示しているであろう。また、P₂₃の部位でもJ VII—18d住居址と柱穴を共有する関係がみられる。これらの柱穴群は全体で五角形を形作る安定した配置を示している。

重複関係の面では、この住居址はJ VII—18a 住居址に切られているが、他の住居址群との新旧関係についてはよくわからない。

J VII—18d 住居址（図版68abc・132ce・133a；写真図版92b・176de・177ab・268f・269ab）

重複関係から判断して、この住居址も時期的には縄文時代前期前半期から中期中葉期の間に位置づけられるものであろう。J VII—18b 住居址やJ VII—18c 住居址と同様に柱穴群が検出されているのみで、この住居址の規模や形態についても詳細は不明である。

柱穴は、P₂₆（径30cm±・深さ24cm±）・P₂₇（径19cm±・深さ50cm±）・P₂₃（前掲）・P₂₈（径25cm±・深さ17cm±）・P₂₉（径52cm±・深さ20cm±）・P₃₀（径21cm±・深さ32cm±）など、6個のピットで構成されているものと考えられる。この中で、P₂₃はJ VII—18c 住居址と共有される関係にある。これらの柱穴群は全体で六角形を形成し、安定した配置を示している。

重複関係について言えば、この住居址はJ VII—18a 住居址には切られているが、他の住居址群との新旧関係に関してはよくわからない。

以上、J VII—18住居址群内から検出された各住居址を個別的に記載してきた。この住居址群

には、上記の住居地に伴う柱穴群のほかに、P₃₁ (径15cm±・深さ7cm±)・P₃₂ (径13cm±・深さ12cm±)・P₃₃ (径14cm±・深さ12cm±)・P₃₄ (径18cm±・深さ33cm±)・P₃₅ (径18cm±・深さ40cm±)・P₃₆ (径22cm±・深さ21cm±)・P₃₇ (径28cm±・深さ31cm±)・P₃₈ (径20cm±・深さ8cm±)・P₃₉ (径55cm±・深さ17cm±)・P₄₀ (径22cm±・深さ40cm±)・P₄₁ (径48cm±・深さ10cm±)・P₄₂ (径21cm±・深さ20cm±)・P₄₃ (径17cm±・深さ23cm±)・P₄₄ (径37cm±・深さ12cm±)・P₄₅ (径18cm±・深さ18cm±)・P₄₆ (径30cm±・深さ23cm±)・P₄₇ (径24cm±・深さ不明)・P₄₈ (径18cm±・深さ18cm±)・P₄₉ (径17cm±・深さ35cm±)・P₅₀ (径18cm±・深さ10cm±)・P₅₁ (径14cm±・深さ21cm±)・P₅₂ (径30cm±・深さ13cm±)・P₅₃ (径26cm±・深さ18cm±)・P₅₄ (径20cm±・深さ50cm±)・P₅₅ (径18cm±・深さ24cm±)・P₅₆ (径25cm±・深さ23cm±)・P₅₇ (径26cm±・深さ8cm±)・P₅₈ (径23cm±・深さ61cm±)・P₅₉ (径30cm±・深さ34cm±)・P₆₀ (径21cm±・深さ17cm±)・P₆₁ (径18cm±・深さ8cm±)・P₆₂ (径10cm±・深さ20cm±)・P₆₃ (径40cm±・深さ22cm±)・P₆₄ (径50cm±・深さ22cm±)・P₆₅ (径36cm±・深さ不明)・P₆₆ (径28cm±・深さ12cm±)などのピット群が検出されている。これらのピット群の中にはさらに住居址を構成するものもあるのかもしれないが、その具体的な位置づけについては不明なものとなっている。

J VII-19住居址 (図版68a ; 写真図版91a・92c)

南側の大半の部分をJ VII-18住居址群によって削剝を受けているために、この住居址の所属時期や規模・形態の詳細については不明である。ここにみられる住居址間の重複関係から推定すると、この住居址は时期的には、縄文時代前期から中期中葉期の間位置づけられるものであろう。残存していた範囲は3.8m±×0.6m±の部分である。

土層断面図の作成は行なわれていないが、Field Cardの記載によれば、この住居址の埋土は炭化物・焼土・土器片を含む火山灰優占の褐色土層により構成されている。

床面には全体的に凹凸があって、比較的堅くしめる面となっている。柱穴は検出されていない。壁高は、北壁56cm±を計る。北壁沿いの一部には、長さ88cm±・幅5cm±~12cm±・深さ2cm±の規模の壁溝が設けられている。

重複関係の面では、この住居址はJ VII-17住居址を切り、J VII-18住居址群には切られている。

J VII-20住居址 (図版69ab・133c ; 写真図版91b・96a・177ce・269c)

床面上の土器および複式炉の系統を引く炉の存在からみて、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。比較的保存が良好な状態で検出されている。規模は径3.6m±×3.4m±を計り、平面形は卵形状に近い形態を示している。

埋土は主に、焼土・炭化物・土器片を含む暗褐色土層により構成されている。この層は、全体に人為堆積相を示している。

この住居址は泥流堆積物を削剝した面上に作られているために、床面の一部にはその構成員

である安山岩が露出している。床面には全体的にゆるやかな凹凸があって、比較的堅くしまる面となっている。柱穴は、P₁（径25cm±・深さ32cm±）・P₂（径44cm±・深さ22cm±）・P₃（径24cm±・深さ27cm±）など、3個のピットで構成されているものと考えられる。この住居址内には上記の柱穴群のほかに、P₄（径28cm±・深さ7cm±）・P₅（径21cm±・深さ27cm±）・P₆（径14cm±・深さ29cm±）・P₇（径19cm±・深さ15cm±）・P₈（径34cm±・深さ11cm±）などのピット群が検出されているが、これらの具体的位置づけについては明確ではない。住居址の壁高は、北壁33cm±・南壁13cm±・東壁27cm±・西壁20cm±を計る。

南壁よりの位置に設けられている複式炉は石囲い部と前庭部の2つの単位から成るもので、全長130cm±を計る。石囲い部は、粒径17cm±～28cm±の安山岩類亜円礫を使用して構築されている。この石囲い部内には、径36cm±×32cm±の範囲に層厚4cm±の現地性焼土の形成がみられる。この部位の使用面は床面よりも11cm±低い位置に設けられていて、やや軟弱な面となっている。前底部は側縁部の一部に粒径18cm±～20cm±の安山岩類亜円礫を使用して、床面下16cm±の位置に作られている。この部位の底面は平滑で、きわめて堅くしまるものとなっている。石囲い部および前底部ともに、その構成礫は下半部を8cm±～14cm±の深さまで下位の火山灰層中に埋めこまれている。また、前庭部が位置している付近の壁沿いの範囲には、径10cm±～34cm±・深さ3cm±～9cm±の小ピット群がみられる。これらはその在り方から判断して、構成礫の抜き取り痕と考えられるのかもしれない。

当住居址からの出土遺物としては、複式炉前庭部の東側床面上から得られた1個体の深鉢形土器や流紋岩角礫がある。

重複関係の面では、この住居址はJ VII—54フラスコ形ピットと切り合いを示しているが、両者の新旧についてはよくわからない。あるいは共伴関係にあるのかもしれない。

J VII—21住居址（図版70ab；写真図版93ab・94ab・269def・270a）

この住居址はJ VII—23住居址を精査中に付随的に検出されたものである。床面上からの伴出遺物を欠くために所属時期の詳細は不明であるが、重複関係などから判断すると、この住居址は時期的に縄文時代前期内に位置づけられるものであろう。西側の大半の部分が削剝されているために、規模や形態についても不明なものとなっている。2.7m±×0.7m±の範囲が残存していたにすぎない。残存部の壁の輪郭線から推定すると、平面形は円形を基調とした形態を示していたものであろう。炉は検出されていない。

土層断面図が作成されていず、Field Cardの記載も欠くために、固有の埋土の状況については不明である。

床面には多少の凹凸が認められるものの全体的にはほぼ平坦で、きわめて堅くしまる面となっている。柱穴は検出されていない。壁高は、東壁53cm±を計る。

重複関係の面では、この住居址は J VII-23 住居址により切られている。

J VII-22 住居址 (図版 70a・72a ; 写真図版 95a)

この住居址は壁や床面の一部が残片的に検出されたもので、所属時期や規模・形態についての詳細は明らかではない。ここにみられる住居址間の重複関係から推定すると、時期的には縄文時代前期内に位置づけられるものであろう。

この住居址は、J VII-23 住居址や J VII-25 住居址・J VII-26 住居址を精査中に付随的に検出されたもので、埋土についての観察は行なわれていない。

床面はほぼ平坦できわめて堅くしまる面となっている。柱穴は検出されていない。壁高は、残存している北壁で 25cm 土を計る。

重複関係の面では、この住居址は J VII-23 住居址・J VII-24 住居址・J VII-25 住居址・J VII-26 住居址群により切られている。

J VII-23 住居址 (図版 70ac・71a・133d ; 写真図版 93ab・94ab・96b・177d・269def・270a)

床面や炉からの伴出遺物を欠くが、埋土中の土器群を参考にして推定すると、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。保存が良好な状態で検出されている。規模は径 4.7m 土 × 3.8m 土を計り、平面形は卵形状に近い形態を示している。住居址の中央部付近には 2 基の地床炉が設けられている。

埋土は、上位が黒色土層～黒褐色土層で、中位が暗褐色土層～黒褐色土層で、下位が褐色土層でそれぞれ構成されている。これらの埋土の中で、中央部の層準を占める暗褐色土層 (d・e 層)～黒褐色土層 (c 層) は、土器群・石器群・礫・焼土・炭化物を著しく多く含んでいて、全体的に複合廃棄物的な人為堆積相を示している。殊に d 層中の完形土器や土器破片群の観察によれば、それらは直立・斜位・横位と多方向性をもって分布する在り方を示している。埋土最下部を構成する褐色土層 (f 層) は汚れ火山灰が優占するもので、無遺物層となっている。

微小な凹凸は認められるものの床面は全体的にはほぼ平坦で、きわめて堅くしまるものとなっている。この住居址は泥流の上部を削剝した面上に作られているために、床面の一部には安山岩垂円礫の露出がみられる。柱穴は、P₁ (径 28cm 土・深さ 78cm 土)・P₂ (径 20cm 土・深さ 41cm 土) などを中心として構成されているものと考えられるが、その具体的な配置についてはよくわからない。いずれが柱穴の構成員となるものか不明であるが、この住居址内からは P₁ や P₂ のほかに、P₃ (径 11cm 土・深さ 14cm 土)・P₄ (径 14cm 土・深さ不明)・P₅ (径 28cm 土・深さ 45cm 土)・P₆ (径 22cm 土・深さ 32cm 土)・P₇ (径 20cm 土・深さ 17cm 土)・P₈ (径 27cm 土・深さ 8cm 土)・P₉ (径 28cm 土・深さ 19cm 土)・P₁₀ (径 12cm 土・深さ 10cm 土)・P₁₁ (径 24cm 土・深さ 15cm 土)・P₁₂ (径 13cm 土・深さ 10cm 土)・P₁₃ (径 26cm 土・深さ 32cm 土)・P₁₄ (径 23cm 土・深さ 46cm 土) などのピット群が検出されている。これらの中には、J VII-21 住居址・J VII-22 住居址・J VII-24 住居址な

どの柱穴を構成するピットも含まれているのかもしれない。住居址の壁高は、北壁87cm±・南壁18cm±・東壁9cm±（J VII—21住居址床面との比高）・西壁34cm±を計る。また西壁沿いには、幅5cm±～15cm±・深さ3cm±～5cm±の壁溝が設けられている。

住居址のほぼ中央部に設けられている地床炉（1号炉）では、径54cm±の範囲に層厚8cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は床面よりも僅かに低い位置に設けられていて、きわめて堅くしまる面となっている。2号炉は1号炉の北西部に位置し、この部位では径25cm±×21cm±の範囲に層厚2cm±の現地性焼土が形成されている。この炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしまるものとなっている。

重複関係の面では、この住居址はJ VII—21住居址・J VII—22住居址・J VII—24住居址・J VII—55ピットを切っている。

J VII—24住居址（図版70a・71b・72a；写真図版95a・96b・178a）

この住居址はJ VII—22住居址と同様に、J VII—23住居址を精査中に付随的に検出されたものである。床面や炉からの伴出遺物を欠くが、ここにみられる住居址間の重複関係や埋土中の土器片などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。これがそのままこの住居址の規模を示しているものかどうか不明であるが、地床炉を挟む南北の壁状の部分で、1.4m±の範囲が検出されている。規模や形態についての詳細はよくわからない。

埋土は主に、J VII—23住居址埋土のc・d層と連続的な黒褐色～暗褐色土層群で構成されている。

床面はほぼ平坦で、きわめて堅くしまるものとなっている。柱穴は検出されていない。壁状の部分の高さは、北側8cm±・南側6cm±・西側4cm±を計る。

地床炉が検出された部位では、径57cm±×42cm±の範囲内に層厚5cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしまる面となっている。

重複関係の面では、この住居址はJ VII—22住居址を切り、J VII—23住居址・J VII—25住居址・J VII—26住居址群には切られている。

J VII—25住居址（図版72ab・73a；写真図版95ab・96c・270bcd）

床面上の出土土器からみて、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。西側を他住居址によって削剝されているために、4.5m±×1.2m±の範囲が検出されているにすぎない。したがって、この住居址の規模や形態についてはよくわからない。残存している壁の輪郭線から推定すると、この住居址の平面形は楕円形状の形態を示していたものかもしれない。残存部分については保存が比較的良好な状態で検出されている。

この住居址の固有の埋土を対象とした土層断面図は作成されていないが、残存部での観察に

よれば、埋土は主に、土器片・石器類・礫・焼土・炭化物を多く含む暗褐色土層により構成されている。層相からみて、この埋土の大半は複合的な廃棄物から成っているものと考えられる。

微細な凹凸がみられるものの床面はほぼ平坦で、全体にきわめて堅くしまる面となっている。いずれが柱穴を構成するものか明らかではないが、この住居址内からは、P₁（径36cm±・深さ17cm±）・P₂（径20cm±・深さ25cm±）・P₃（径13cm±・深さ12cm±）・P₄（径30cm±・深さ41cm±）・P₅（径20cm±・深さ38cm±）などのピット群が検出されている。これらのほかに、径13cm±～17cm±・深さ7cm±～9cm±の小ピット群がいくつかみられるが、形態からみて、この小ピット群は木根などにより形成されたものなのであろう。住居址の壁高は、北壁61cm±・南壁24cm±・東壁60cm±を計る。

当住居址からの出土遺物としては、北東部の壁際の床面上から得られた1個体の深鉢形土器がある。この土器は床面に密着する形で存在していた。

重複関係の面では、この住居址はJ VII-22住居址を切り、J VII-26住居址群には切られている。

J VII-26住居址群（図版72acde・73bc・134a；写真図版95ab・98a・178b）

この住居址群は、間に廃棄物層を挟んで上下に重複する2棟の住居址から構成されている。層位的には上下関係にあるが、両者間にみられる壁の共有的な在り方から推定すると、この2棟の住居址は何らかの形で互いに強い結びつきを示しているものであろう。これらの住居址を今、新しい方から順にJ VII-26a 住居址・J VII-26b 住居址と呼称することにする。J VII-26a 住居址・J VII-26b 住居址ともに、いずれも保存が良好な状態で検出されている。以下、各住居址について個別に記載することにする。

J VII-26a 住居址（図版72acde・73bc・134a；写真図版95ab・98a・178b）

この住居址は炉の埋設土器および埋土中の土器からみて、縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。下位に位置するJ VII-26b 住居址内に堆積する廃棄物層を床面とし、壁の全周を再利用する形で構築されている。規模は径4.0m±×3.8m±を計り、楕円形状の平面的な形態を示している。住居址の中央部付近には、埋設土器と地床炉的な部分で構成される1基の炉が設けられている。

この住居址の固有の埋土を対象とした土層断面図は作成されていないが、精査中での観察によれば、埋土は主に、土器片群・石器群・礫・焼土・炭化物を含む暗褐色土層群により構成されていた。層相からみて、この埋土は複合的な廃棄物から成っているものであろう。

床面はほぼ平坦で、全体に堅くしまるものとなっている。柱穴を構成するものかどうか不明であるが、柱穴状のピットとしてP₁（径28cm±・深さ27cm±）・P₂（径20cm±・深さ13cm±）などが検出されている。壁高は、北壁31cm±・南壁3cm±・東壁2cm±（J VII-25住居址床面とのレベル差）・西壁11cm±を計る。西壁の南半部から南壁を経て東壁の一部にかけては、幅10

cm±～28cm±・深さ9cm±～22cm±の連続的な壁溝が設けられている。

床面の中央部付近に設けられている炉の部位では、径120cm±×100cm±の範囲に層厚13cm±の現地性焼土の形成がみられる。この中心部には、口頸部および底部を欠く深鉢形土器が直立の状態に埋設されている。炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしめる面となっている。

重複関係の面では、この住居址はJ VII-22住居址・J VII-24住居址・J VII-25住居址・J VII-26b住居址を切っている。

J VII-26b 住居址 (図版72acde・73bc・134a ; 写真図版95ab・98a・178b)

この住居址は、J VII-26住居址群の中でも下位を構成するもので、床面上からの伴出遺物を欠くが、ここにみられる遺構間の重複関係や埋土中の土器群の検討などをもとにして考えると、時期的には縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。全周にわたって壁を共有する関係にあるために、J VII-26a住居址と規模および形態は一致している。炉は検出されていない。

埋土は主に、完形土器群・土器片群・石器群・礫・焼土・炭化物を著しく多く含む褐色～暗褐色土層群により構成されている。これらの埋土はいずれも、複合廃棄物的な人為堆積相を示している。完形土器群はJ VII-26a住居址の床面直下に、大半が横位の状態で存在していた。

床面には僅かながら凹凸がみられるが全体的にはほぼ平坦で、きわめて堅くしめる面となっている。いずれかが柱穴を構成するものか明らかではないが、この住居址内からは柱穴状のピットとして、P₃ (径35cm±・深さ20cm±)・P₄ (径27cm±・深さ19cm±)・P₅ (径25cm±・深さ51cm±)・P₆ (径20cm±・深さ43cm±)・P₇ (径19cm±・深さ12cm±)・P₈ (径21cm±・深さ10cm±)・P₉ (径38cm±・深さ23cm±)・P₁₀ (径47cm±・深さ15cm±)・P₁₁ (径33cm±・深さ9cm±)・P₁₂ (径27cm±・深さ25cm±)・P₁₃ (径24cm±・深さ50cm±)・P₁₄ (径20cm±・深さ15cm±)・P₁₅ (径25cm±・深さ14cm±)・P₁₆ (径16cm±・深さ13cm±)・P₁₇ (径32cm±・深さ35cm±)・P₁₈ (径21cm±・深さ13cm±)・P₁₉ (径15cm±・深さ36cm±)などが検出されている。これらの中には、J VII-25住居址やJ VII-26a住居址に所属するものも含まれているかもしれない。住居址の壁高は、北壁57cm±・南壁22cm±・東壁13cm±・西壁36cm±を計る。

重複関係の面では、この住居址はJ VII-25住居址を切り、J VII-26a住居址には全形に載る形で切られている。重複関係内にJ VII-26a住居址が介在するために、J VII-22住居址・J VII-24住居址との新旧関係は厳密には不明なものとなっているが、住居址間の在り方から考えると、おそらく当住居址はそれらに後出するものとして位置づけられるのであろう。

J VII-27住居址群 (図版74a・75abc・133e・134bcdef・135acd ; 写真図版97・98bc・99・100ab・178ce・179abc・180abc)

柱穴配置を検討した結果、この住居址群が検出された範囲内には最低4棟の住居址が存在し

ていることが推定された。これらを今、J VII-27a 住居址・J VII-27b 住居址・J VII-27c 住居址・J VII-27d 住居址と呼称することにする。柱穴群の検出された状況や、地床炉群の配置状態などからみると、これらの住居址群内で最新期のものとして位置づけられるのは、おそらくJ VII-27a 住居址であろう。床面上の出土土器から判断すると、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであると考えられる。古期の住居址群は、全形に載る形でJ VII-27a 住居址に切られているために、所属時期の詳細については必ずしも明らかなものではない。しかし、一部の柱穴間にみられる再利用形態の存在や、地床炉群内部における重複状況などを参考にして推定すると、J VII-27a 住居址も含めて、これら4棟の住居址間のそれぞれの重複部分には、柱穴のみならず一部の壁や床面・地床炉などに対する共有関係が成立していたものであろう。また、このJ VII-27住居址群の下位には、全体に貼り床の施されているJ VII-28住居址・J VII-29住居址・J VII-30住居址・J VII-31住居址などが存在している。これらのうち、少なくとも後2者の住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものである。これらのことからみて、J VII-27住居址群を構成する古期住居址群も、J VII-27a 住居址と同様に、時期的には縄文時代前期末葉期に含まれるものと考えられる。

このJ VII-27住居址群は崖線沿いの傾斜変換線付近に位置し、西壁・南壁および東壁の一部を欠いている。精査中の掘りすぎも一部にはみられるが、この住居址群は浸蝕などによる削剝を多く受けていて、全体に残存が不良な状態で検出されている。北壁沿いの東半部では、壁の輪郭線は不規則な形状を示している。また、西半部の壁沿いの範囲を中心とする床面上には、下位の泥流堆積物である安山岩の巨礫が多く露出している。この安山岩の巨礫が露出している部分は主にJ VII-27a 住居址・J VII-27b 住居址に関連するが、この範囲では、両住居址の床面が完全に整備されていない形跡が認められている。

この住居址群内からは、いずれも地床炉を構成するとみられる現地性焼土が、平面的には11個処にわたって検出されている。これらの現地性焼土の中には、水平および垂直方向に地床炉が複合する形で形成されているものもある。地床炉間のこのような重複形態の存在は、ここにみられる複数の住居址間の重複とよく対応する関係を示しているものであろう。以下、J VII-27住居址群内の各住居址について個別的に記載し、最後にこれらの関係についてとりまとめて述べることにする。

J VII-27a 住居址 (図版74a・75abc・133e・134bcdef・135acd; 写真図版97・98bc・99・100ab・178ce・179abc・180abc)

前述したように、柱穴群の検出状況や地床炉群の配置状態からみて、この住居址はJ VII-27住居址群内では最新期を構成するものであろう。床面上から出土しているいくつかの土器群の検討によれば、時期的には縄文時代前期末葉期に位置づけられるものと考えられる。東壁の一

部および南壁・西壁を欠く上に、北壁の東半部は多くの削剝を受けていて不規則な形状を示している。したがって、床面中央部を中心とする範囲を除けば、この住居址は全体として残存状態が不良である。このような状態で検出されているために、この住居址の正確な規模や形態については明らかではない。しかし、残存している壁の輪郭線や、柱穴群および地床炉群の配置状態などを参考にして推定すると、この住居址は21.0m×7.2m前後の規模をもち、平面形は隅丸長方形の形態を示していたものではないかと考えられる。

埋土は主に、上位が黒色土層で、中位が黒褐色土層群で、下位が暗褐色土でそれぞれ構成されている。これらのうち、中位および下位の層準は多くの完形土器群・土器破片・石器類・焼土・炭化物・礫などを含んでいる。完形土器や土器大形破片群での観察によれば、これらは層の傾斜に沿って、北壁際のはずれは斜位の状態で、床面中央部付近を中心として分布するものは横位の状態で出土する在り方を示している。このように多くの遺物を包含している当住居址の暗褐色～黒褐色土層群は、遺構外に分布するII層または遺物包含層と連続的で、全体的に複合廃棄物的な人為堆積相を示している。

床面は、北壁沿いの西半部を除けば全体にほぼ平坦で、比較的堅くしまる面となっている。斜面下方にあたる南側では壁とともに床面も消失していて、基本層序のIII層（黄橙色～黄褐色火山灰層）とその境界が不明瞭なものとなっている。北壁沿いの西半部には、下位の泥流堆積物の構成員である、粒径数cm～85cm±の安山岩垂角～垂円礫群の分布がみられる。これらの礫群が露出する部分の床面は、中央部付近に比較して4cm±～40cm±高い凹凸のある面となっている。このような状況から判断して、当住居址に先行すると考えられるJ VII—27b 住居址も含めて、この範囲では、露出する安山岩群のために床面が完全に整備されてはいなかったのではないかと推定される。これらの安山岩群の礫原皮には、打割を意図した痕跡などは認められていない。

この住居址の柱穴は、P₁（径57cm±・深さ85cm±）・P₂（径43cm±・深さ55cm±）・P₃（径不明・深さ不明）・P₄（径38cm±・深さ81cm±）・P₅（径50cm±・深さ81cm±）・P₆（径49cm±・深さ58cm±）・P₇（径57cm±・深さ78cm±）・P₈（径63cm±・深さ53cm±）・P₉（径60cm±・深さ78cm±）・P₁₀（径55cm±・深さ69cm±）・P₁₁（径48cm±・深さ60cm±）などのピット群によって構成されているものと考えられる。実測図中に平面形および測定値が記入されていないためにP₃の規模については不明なものとなっているが、これがある程度の径と深さをもつものであることは平面写真からも読み取ることができよう。このP₃の部位では、J VII—27b 住居址の柱穴とも同位置で重複する関係にあるとみられるが、ピット自体の大きさから考えて、さらに別な性格のピットもここで複合していると推定されるのかもしれない。これらの柱穴群には、P₂—P₁₁・P₃—P₁₀・P₄—P₉・P₅—P₈・P₆—P₇の各群内に対になる配置関係がみられる。このよう

な柱穴配置からすれば、 $P_{10} \cdot P_{11}$ を結んだ線の西方延長線上には、 P_1 と対になる仮想柱穴 P_x が存在していたものであろう。重複関係の面では、前述した P_3 のほかに、 $P_5 \cdot P_9$ の部位でそれぞれ J VII-27c 住居址・J VII-27d 住居址との柱穴の共有関係がみられる。また P_6 は、J VII-27c 住居址の柱穴 P_{19} を明瞭に切っている。

残存部での壁高は、北壁 7 cm 土～50 cm 土・東壁 13 cm 土～22 cm 土を計る。これらの壁沿いには壁溝は設けられていない。

住居址中軸線に沿う範囲には、いずれも地床炉を構成するとみられる現地性焼土が11個処にわたって形成されている。この中には、水平および垂直方向に複数の地床炉が重複して一連の焼土層を形成しているものもみられる。このような炉の在り方は、ここにみられる J VII-27 住居址群内の各住居址間の重複状態とよく対応する関係を示しているものであろう。しかし、個別の地床炉と個々の住居址との具体的な関係についてははっきりとしないために、すべての炉に関する事実記載をここで行なうことにする。

1号炉の位置する部位では、径78 cm 土×72 cm 土の範囲に層厚12 cm 土の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は床面と同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしまる面となっている。東側の一部は P_{74} により切られている。2号炉は上下に重複する2基の地床炉から成るもので、この部位では、径77 cm 土×45 cm 土の範囲に層厚15 cm 土の現地性焼土の形成がみられる。古期の2a号炉は、床面よりも低い位置にその使用面が設けられている。新期の2b号炉は、古期の炉の凹部に層厚11 cm 土の軽石を敷設した上で、床面とほぼ同じレベルにその使用面が設けられている。これらの炉の使用面はいずれも堅くしまるものとなっている。両者の炉ともに、その西半部を3号炉に載る形で切られている。3号炉の位置では、径92 cm 土×56 cm 土の範囲に層厚12 cm 土の現地性焼土が形成されている。この炉は2号炉を切っていて、その使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられている。攪乱によって一部の焼土層を欠く部分もあるが、断面観察によって、この炉は東側が載る形で2号炉を切るものであることが明らかにされた。使用面自体はきわめて堅くしまる面となっている。

4号炉は、水平および垂直方向に重複する4基の地床炉から成るもので、この範囲には、径186 cm 土×94 cm 土の規模の現地性焼土の形成がみられる。4a号炉は下部に暗褐色土層の充填された掘り方を伴うもので、その上部に軽石状のものを敷設した上で設けられている。焼土層の層厚は5 cm 土を計る。使用面は床面とほぼ同じレベルにあって、比較的堅くしまる面となっている。4b号炉は4a号炉を僅かに切る関係にあり、この部位では層厚8 cm 土の焼土層が形成されている。中央部を除けば、この炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしまる面となっている。4c号炉は、4b号炉の上位にあって、その凹部に層厚4 cm 土の軽石状のものを敷設した上で設けられている。使用面は床面と同じレベルに位置し、きわめ

て堅くしまるものとなっている。4d号炉は床面と同じレベルに設けられた、きわめて堅くしまる使用面を伴うもので、この部位には層厚13cm±の焼土層が形成されている。

5号炉では、径148cm±×62cm±の範囲に現地性焼土が形成されている。この炉は、上下に重複する新旧2基の地床炉で構成されている。下部の5a号炉の焼土層の層厚は6cm±を計る。5b号炉は5a号炉を削剝した面上に、層厚4cm±の軽石状のものを敷設した上で設けられている。これらの炉の使用面はいずれも床面とほぼ同じレベルにあって、きわめて堅くしまる面となっている。6号炉の位置する部位では、径54cm±×48cm±の範囲に層厚10cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は床面と同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしまるものとなっている。7号炉も使用面が床面とほぼ同じレベルに設けられているもので、ここでは径95cm±×67cm±の範囲に層厚4cm±の現地性焼土の形成がみられる。使用面自体は比較的軟弱な面となっている。8号炉の位置では、径54cm±×40cm±の範囲に層厚12cm±の現地性焼土が形成されている。使用面は床面とほぼ同じレベルにあって、きわめて堅くしまる面となっている。

9号炉は、床面とほぼ同じレベルにきわめて堅くしまる使用面を伴うもので、この部位では、径72cm±×55cm±の範囲に層厚7cm±の現地性焼土が形成されている。使用面自体は比較的堅くしまる面となっている。10号炉の部位では、径88cm±×64cm±の範囲に層厚5cm±の現地性焼土が形成されている。この炉の使用面も床面とほぼ同じレベルにあって、比較的軟弱な面となっている。11号炉では、径78×55cm±の範囲に層厚11cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は床面とほぼ同レベルにあって、比較的軟弱なものとなっている。

以上、各地床炉について個別に記してきた。平面および断面観察の結果、この住居址群内には11群16基の地床炉が存在していたことが明らかにされた。これらの間には、部分的なものから全形で重複するものまで、各種の重複形態がみられる。このうち、上下に重複する地床炉群では、軽石または軽石状のものが敷設された上で設けられている新期の炉は、古期のものに較べてあまり多くの赤色変化を受けていないという共通性が認められている。

当住居址からの出土遺物としては、西半部の床面上から得られた一括土器および数個体分の土器破片群などがある。埋土中から出土した遺物には、完形土器群や破片群のほかに、石斧・石鏃・スクレイパー類・半円状扁平打製石器などの石器群がある。

重複関係の面では、この住居址はJ VII-28住居址・J VII-29住居址・J VII-30住居址・J VII-31住居址などの全形に載る形で明瞭に切っている。また、前述したように、同住居址群内のJ VII-27b住居址・J VII-27c住居址・J VII-27d住居址なども切る関係にあると考えられる。南東部ではK VIII-3住居址に切られている。ピットとの重複では、J VII-56ピットを切っているが、当住居址とJ VII-57ピットとの新旧関係については明らかではない。

J VII-27b 住居址 (図版74a・75abc・133e・134bcdef・135acd; 写真図版97・98bc・99・100ab・178ce・179abc・180abc)

この住居址は柱穴群が痕跡的に検出されて、住居址としての存在が推定されたものである。柱穴は、P₁₂ (径27cm±・深さ63cm±)・P₃ (前掲)・P₁₃ (径43cm±・深さ71cm±)・P₁₄ (径41cm±・深さ79cm±)・P₁₅ (径35cm±・深さ36cm±)・P₁₆ (径39cm±・深さ62cm±)・P₁₇ (径66cm±・深さ44cm±)などのピット群で構成されているものと考えられる。これらの柱穴は、P₁₂—P₁₇・P₁₇—P₃・P₃—P₁₆・P₁₆—P₁₃・P₁₃—P₁₅・P₁₅—P₁₄とジグザグ状に配置されている。これらの柱穴群間の規模は、12.5m±×4.1m±を計る。なお、前述しているように、P₃の部位では、J VII-27a 住居址の柱穴などとの重複があるものと推定される。

重複関係の面では、この住居址はJ VII-28住居址・J VII-29住居址・J VII-30住居址・J VII-31住居址などを切り、J VII-27a 住居址には全形に載る形で切られているものと考えられる。明瞭な痕跡がないために、J VII-27c 住居址・J VII-27d 住居址などとの新旧関係や、K VIII-3 住居址との重複の有無についてはよくわからない。J VII-56ピットやJ VII-57ピットとの新旧や重複関係の詳細についても不明なものとなっている。

J VII-27住居址群内の各住居址の在り方からみて、少なくとも西半部の基本的な形態は当住居址の営まれた時期に整備されているものと考えられる。北壁沿いの西半部にみられる安山岩群の露出も、この住居址の側からは削剝を受けずに、その範囲だけが凹凸のある小高い面となって取り残されていたものであろう。

J VII-27c 住居址 (図版74a・75abc・133e・134bcdef・135acd; 写真図版97・98bc・99・100ab・178ce・179abc・180abc)

この住居址は、J VII-27住居址群内では東半部の位置を占めている。これも柱穴群が痕跡的に検出されて、住居址としての存在が推定されたものである。柱穴は、P₁₈ (径46cm±・深さ81cm±)・P₅ (前掲)・P₁₉ (径54cm±・深さ56cm±)・P₂₀ (径25cm±・深さ28cm±)・P₂₁ (径25cm±・深さ48cm±)・P₂₂ (径36cm±・深さ46cm±)・P₂₃ (径45cm±・深さ76cm±)などのピット群で構成されているものと考えられる。これらの柱穴は、P₁₈—P₂₃・P₂₃—P₅・P₅—P₂₂・P₂₂—P₁₉・P₁₉—P₂₁・P₂₁—P₂₀とジグザグ状に配されている。柱穴間の規模は、10.4m±×4.1m±を計る。P₅の部位では、当住居址とJ VII-27a 住居址は柱穴を共有する関係にあるものとみられる。P₁₉は、J VII-27a 住居址の柱穴 P₅に切られている。

重複関係の面では、この住居址はJ VII-30住居址を切り、J VII-27a 住居址・K VIII-3 住居址には切られている。具体的な重複がみられないために、J VII-27b 住居址・J VII-27d 住居址・J VII-31住居址などとの新旧関係の詳細については不明である。

J VII-27d 住居址 (図版74a・75abc・133e・134bcdef・135acd; 写真図版97・98bc・99・100ab・

178ce・179abc・180abc)

前2者の住居址と同様に、この住居址も柱穴群が痕跡的に検出されて、その存在が推定されたものである。J VII-27住居址群内の東半部の位置を占めている。柱穴は、P₂₄ (径34cm±・深さ22cm±)・P₂₅ (径29cm±・深さ45cm±)・P₂₆ (径55cm±・深さ62cm±)・P₂₇ (径39cm±・深さ75cm±)・P₂₈ (径49cm±・深さ83cm±)・P₂₉ (径24cm±・深さ66cm±)・P₃₀ (径23cm±・深さ66cm±)・P₃₁ (径16cm±・深さ49cm±)・P₉ (前掲)などのピット群で構成されているものではないかと考えられる。これらの中で、P₂₄-P₉・P₂₅-P₃₁の各群内に対になる配置関係がみられる。また、他の柱穴群は、P₃₁-P₂₆・P₂₆-P₃₀・P₃₀-P₂₇・P₂₇-P₂₉・P₂₉-P₂₈とジグザグ状に配されている。対になる柱穴を欠くために詳細はよくわからないが、P₃₂ (径22cm±・深さ33cm±)・P₃₃ (径32cm±・深さ25cm±)のいずれかは、あるいはこの住居址の柱穴の構成員と考えられるのかもしれない。P₉の部位では、当住居址とJ VII-27a住居址との間で柱穴の共有関係がみられる。柱穴間の規模は、7.6m±×4.7m±を計る。

重複関係の面では、この住居址はJ VII-30住居址・J VII-31住居址を切り、J VII-27a住居址・K VIII-3住居址には切られている。明確な重複関係がみられないために、J VII-27b住居址・J VII-27c住居址との先後関係についてはよくわからない。P₃₁と重複しているJ VII-52ピットとの新旧関係についても不明である。

以上、J VII-27住居址群内の各住居址について個別的に記載してきた。この住居址群内からは、上記の各柱穴群のほかに、さらに、P₃₄ (径36cm±・深さ18cm±)・P₃₅ (径51cm±・深さ58cm±)・P₃₆ (径23cm±・深さ69cm±)・P₃₇ (径41cm±・深さ33cm±)・P₃₈ (径22cm±・深さ17cm±)・P₃₉ (径51cm±・深さ68cm±)・P₄₀ (径26cm±・深さ16cm±)・P₄₁ (径26cm±・深さ10cm±)・P₄₂ (径29cm±・深さ20cm±)・P₄₃ (径22cm±・深さ15cm±)・P₄₄ (径30cm±・深さ40cm±)・P₄₅ (径14cm±・深さ15cm±)・P₄₆ (径27cm±・深さ27cm±)・P₄₇ (径17cm±・深さ37cm±)・P₄₈ (径52cm±・深さ50cm±)・P₄₉ (径50cm±・深さ100cm±)・P₅₀ (径32cm±・深さ28cm±)・P₅₁ (径30cm±・深さ30cm±)・P₅₂ (径22cm±・深さ16cm±)・P₅₃ (径23cm±・深さ11cm±)・P₅₄ (径26cm±・深さ16cm±)・P₅₅ (径22cm±・深さ33cm±)・P₅₆ (径32cm±・深さ19cm±)・P₅₇ (径30cm±・深さ31cm±)・P₅₈ (径22cm±・深さ44cm±)・P₅₉ (径30cm±・深さ35cm±)・P₆₀ (径15cm±・深さ59cm±)・P₆₁ (径20cm±・深さ53cm±)・P₆₂ (径14cm±・深さ25cm±)・P₆₃ (径15cm±・深さ31cm±)・P₆₄ (径19cm±・深さ50cm±)・P₆₅ (径16cm±・深さ22cm±)・P₆₆ (径20cm±・深さ45cm±)・P₆₇ (径29cm±・深さ27cm±)・P₆₈ (径105cm±・深さ45cm±)・P₆₉ (径30cm±・深さ27cm±)・P₇₀ (径21cm±・深さ25cm±)・P₇₁ (径49cm±・深さ14cm±)・P₇₂ (径76cm±・深さ20cm±)・P₇₃ (径26cm±・深さ20cm±)・P₇₄ (径56cm±・深さ26cm±)・P₇₅ (径14cm±・深さ34cm±)・P₇₆ (径19cm±・深さ29cm±)・P₇₇ (径26cm±・深さ62cm±)・P₇₈ (径20cm±・深さ47cm±)・P₇₉ (径23

cm±・深さ21cm±)・P₉₀(径23cm±・深さ66cm±)・P₉₁(径28cm±・深さ22cm±)・P₉₂(径33cm±・深さ24cm±)・P₉₃(径20cm±・深さ19cm±)・P₉₄(径59cm±・深さ19cm±)・P₉₅(径28cm±・深さ40cm±)・P₉₆(径22cm±・深さ19cm±)・P₉₇(径29cm±・深さ12cm±)・P₉₈(径14cm±・深さ14cm±)・P₉₉(径20cm±・深さ14cm±)・P₉₉(径30cm±・深さ43cm±)・P₉₁(径29cm±・深さ10cm±)・P₉₂(径15cm±・深さ28cm±)・P₉₃(径16cm±・深さ48cm±)・P₉₄(径40cm±・深さ34cm±)・P₉₅(径41cm±・深さ25cm±)・P₉₆(径28cm±・深さ28cm±)・P₉₇(径28cm±・深さ12cm±)・P₉₈(径28cm±・深さ14cm±)・P₉₉(径38cm±・深さ15cm±)・P₁₀₀(径20cm±・深さ25cm±)などのピット群が検出されている。これらの中には、別の住居地の柱穴を構成するピット群も含まれているのかもしれないが、いずれにしろ、その具体的な位置づけや性格については不明である。

他の施設としては、J VII-27住居地群の中央部よりやや東側に位置して、南北方向に設けられている、長さ180cm±・幅7cm±~17cm±・深さ17cm±~20cm±の壁溝状の溝が検出されている。この溝の性格および所属する住居地についてもよくわからない。

今まで述べてきたJ VII-27住居地群内の各住居地は、柱穴配置の上からは、対になる配置形態を示すもの(J VII-27a 住居地)と、ジグザグ状の配置形態を示すもの(J VII-27b 住居地・J VII-27c 住居地・J VII-27d 住居地)との2群に大別することが可能である。ジグザグ状の配置形態を示している群は、さらに、全形が台形状を呈しているもの(J VII-27b 住居地・J VII-27c 住居地)と樽形状を呈しているもの(J VII-27d 住居地)とに細分される。J VII-27住居地群内にはこのように、相異なる柱穴配置を示す3小群4棟の住居地が存在していたことが明らかにされた。これまでしばしば述べてきたように、これらの住居地群内で最新期を構成するものは、柱穴群が対になる配置を示しているJ VII-27a 住居地であると考えられる。この住居地は、他の3棟のいずれとも1個の柱穴を共有する関係にある。また、貼り床を切って柱穴が設けられていることや、貼り床上面に地床炉群(5号炉・6号炉・9号炉・10号炉・11号炉)が配置されていることなどからみて、このJ VII-27a 住居地は、J VII-28住居地・J VII-29住居地・J VII-30住居地・J VII-31住居地などに後出するものであることは明らかであろう。このJ VII-27a 住居地に伴う柱穴群は、精査中に比較的容易に検出されている。

J VII-27a 住居地とJ VII-27b 住居地が重複しあうJ VII-27住居地群の西半部は、主にJ VII-27b 住居地によってその基本的な形態が整備されているものと考えられる。このJ VII-27b 住居地の柱穴は、J VII-28住居地・J VII-29住居地の貼り床を切って設けられている。このことから、J VII-28住居地とJ VII-29住居地の貼り床は、直接的にJ VII-27b 住居地の側から汚れ火山灰を敷設した上で設けられているものではないかと考えられる。さらに、J VII-27b 住居地の柱穴は、J VII-30住居地・J VII-31住居地などの貼り床をも直接的に切っている。同様にJ VII-27d住居地の柱穴も直接的にJ VII-30住居地・J VII-31住居地内に充填された貼り床を

切る関係にあるが、柱穴配置の在り方からみて、J VII-27d 住居址がそれらに貼り床を施したと考えることは困難であろう。この推定が成立するとすれば、少なくとも J VII-31 住居址に直接的に貼り床を敷設した住居址は、J VII-27b 住居址であるとみられる。J VII-31 住居址の貼り床は J VII-30 住居址のそれとよく連続的で層相も一致している。したがって、J VII-31 住居址と同様に、J VII-30 住居址も同時に J VII-27b 住居址の側から貼り床が施されたものであろう。下位に存在する 4 棟の古期住居址群内に充填された貼り床の上面は、そのいずれの部分も J VII-27 住居址群の固有の床面とよく連続する在り方を示している。

J VII-30 住居址に敷設された貼り床は、J VII-27b 住居址のみならず、J VII-27a 住居址・J VII-27c 住居址・J VII-27d 住居址などに伴う柱穴によっても切られている。前述したように、J VII-27b 住居址と J VII-27a 住居址との新旧関係については、すでに明らかなものとなっている。J VII-27b 住居址・J VII-27c 住居址・J VII-27d 住居址の 3 者間には柱穴などの重複関係がみられないために、各項目内で互いの新旧については不明なものとして取り扱ってきたが、ここで J VII-27 住居址群内の下位に存在する古期住居址群に対して施されている貼り床との関係を手掛かりにして考えると、J VII-27b 住居址は、J VII-27c 住居址・J VII-27d 住居址に先行するものとして位置づけられることになる。つまり、J VII-27b 住居址は J VII-27 住居址群内で最古期の段階に位置する住居址であると推定される。J VII-27c 住居址と J VII-27d 住居址との新旧関係についてはなお詳細は不明である。したがって、ここで J VII-27 住居址群内の各住居址の変遷について整理すると、それらは古期のものから、J VII-27b 住居址→J VII-27c 住居址・J VII-27d 住居址→J VII-27a 住居址の順序で構成されているものと考えられることになる。

下位の住居址群に対する J VII-27 住居址群側からの貼り床の層厚は、J VII-28 住居址 9 cm ± ~ 27 cm ± ・ J VII-29 住居址 2 cm ± ~ 21 cm ± ・ J VII-30 住居址 10 cm ± ~ 27 cm ± ・ J VII-31 住居址 18 cm ± ~ 25 cm ± を計る。これらの貼り床は、いずれも層相が均一な汚れ火山灰層で構成されていた。

J VII-28 住居址 (図版 74a・76d ; 写真図版 101a)

時期決定資料となる伴出遺物を欠くが、ここにみられる住居址群間の重複関係から考えて、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。残存が比較的不良な状態で検出されている。南側の一部を欠いているが、残存している壁の輪郭線からみて、この住居址は径 4.0 m ± × 3.5 m ± の規模をもち、やや不整な円形状の形態を示していたものであろう。床面中央部には 1 基の地床炉が設けられている。

この住居址は固有の埋土を欠いていて、J VII-27 住居址群の側から全体にわたって、層厚 9 cm ± ~ 27 cm ± の汚れ火山灰が敷設されていた。

この住居址は下位の泥流堆積物を削剝した面上に作られているために、北および西側を中心とする範囲の壁や床面には安山岩群が多く露出していて、凹凸のあるものとなっている。そのほかの部分の床面も、全体的に凹凸に富んでいる。柱穴は、P₁ (径26cm±・深さ21cm±)・P₂ (径26cm±・深さ22cm±)・P₃ (径30cm±・深さ45cm±)・P₄ (径31cm±・深さ17cm±)・P₅ (径26cm±・深さ27cm±)などのピット群で構成されているものではないかと考えられる。これらの柱穴は、P₁—P₂・P₂—P₅・P₅—P₃とジグザグ状に配置されている。P₄は、P₅とP₃を結ぶ線を底辺とする三角形の頂点にあたる位置に配されている。この住居址内からは上記の柱穴群のほかに、P₆ (径28cm±・深さ26cm±)・P₇ (径27cm±・深さ26cm±)・P₈ (径13cm±・深さ11cm±)・P₉ (径27cm±・深さ5cm±)・P₁₀ (径29cm±・深さ23cm±)・P₁₁ (径49cm±・深さ9cm±)・P₁₂ (径29cm±・深さ12cm±)・P₁₃ (15cm±・深さ8cm±)などのピット群が検出されている。これらの具体的な位置づけや性格については明らかではない。これらの中には、J VII—27住居址群内に所属するピット群も含まれているのかもしれない。

住居址の壁高は、北壁47cm±・南壁9cm± (J VII—27住居址群床面との比高)・東壁13cm± (J VII—27住居址群床面との比高)・西壁27cm± (J VII—27住居址群床面との比高)を計る。北壁の一部は貼り床から上の部分が露出した状態で検出されている。このような検出状態からみて、この範囲の壁は部分的にJ VII—27住居址群によって再利用されていると考えられるのかもしれない。壁溝は設けられていない。

地床炉の位置する部位では、径28cm±×15cm±の範囲に薄層厚の現地性焼土が形成されている。この炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、比較的軟弱な面となっている。重複関係の面では、この住居址はJ VII—27住居址群・J VII—29住居址・J VII—56ピットにより切られている。

J VII—29住居址 (図版74a・76a・135b；写真図版101b)

時期決定資料となる伴出遺物を欠くが、ここにみられる住居址群間の重複関係からみて、この住居址も縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。比較的、残存が不良な状態で検出されている。南部および南東部の壁は、主に掘りすぎによって消失している。したがって、正確な規模や形態については不明であるが、残存している壁の輪郭線からみると、この住居址は径4.5m±の規模をもち、平面形は不整な円形状または卵形状に近い形態を示していたものではないかと考えられる。床面の中央部とみられる付近には1基の地床炉が設けられている。

この住居址は固有の埋土を欠き、全体にわたってJ VII—27住居址群の側から、層厚2cm±～21cm±の汚れ火山灰が敷設されている。この火山灰は、J VII—28住居址に敷設されたそれと連続的で、いずれもJ VII—27住居址群の貼り床構成層となっている。

この住居址は部分的に泥流堆積物を削剝した面上に作られているために、床面はいくつかの

安山岩礫の露出がみられるが、全体的には床面はほぼ平坦で、きわめて堅くしめる面となっている。いずれが柱穴を構成するものか不明であるが、この住居址内からは柱穴状のものとして、 P_1 (径31cm±・深さ20cm±)・ P_2 (径31cm±・深さ14cm±)・ P_3 (径30cm±・深さ21cm±)・ P_4 (径50cm±・深さ39cm±)・ P_5 (径57cm±・深さ11cm±)・ P_6 (径34cm±・深さ31cm±)・ P_7 (径24cm±・深さ25cm±)・ P_8 (径25cm±・深さ9cm±)・ P_9 (径19cm±・深さ32cm±)・ P_{10} (径27cm±・深さ21cm±)・ P_{11} (径23cm±・深さ44cm±)・ P_{12} (径28cm±・深さ20cm±)・ P_{13} (径12cm±・深さ19cm±)・ P_{14} (径27cm±・深さ6cm±)・ P_{15} (径20cm±・深さ22cm±)・ P_{16} (径61cm±・深さ20cm±)・ P_{17} (径49cm±・深さ32cm±)・ P_{18} (径24cm±・深さ10cm±)・ P_{19} (径39cm±・深さ13cm±)・ P_{20} (径60cm±・深さ32cm±)・ P_{21} (径32cm±・深さ7cm±)・ P_{22} (径27cm±・深さ8cm±)・ P_{23} (径25cm±・深さ11cm±)などのピット群が検出されている。これらの中には、J VII-27住居址群内に含まれるものもあるのかもしれないが、いずれにしろその具体的な位置づけや性格についてはよくわからない。この住居址の壁高は、北壁11cm± (J VII-28住居址床面との比高)・東壁21cm± (J VII-27住居址群床面との比高)・西壁2cm± (J VII-27住居址群床面との比高)を計る。壁溝は設けられていない。

地床炉の位置する部位では、径38cm±×32cm±の範囲に層厚6cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、比較的堅くしめる面となっている。この炉は南東部の一部をJ VII-27b住居址の柱穴 P_{17} によって切られている。

重複関係の面では、この住居址はJ VII-28住居址を切り、J VII-27住居址群には切られている。J VII-56ピットとの新旧関係についてはよくわからない。

J VII-30住居址 (図版74a・76b ; 写真図版102ab)

時期決定資料となる伴出遺物を欠くが、ここにみられる住居址群間の重複関係から推定して、この住居址も縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。残存が比較的良好な状態で検出されている。南側の一部を掘りすぎていることや、後出の住居址によって部分的に切られていることなどから、正確な規模や形態については不明である。しかし、残存している壁の輪郭線から推定すると、この住居址は2.6m±×2.5m±の規模をもち、平面形は南東半部が凸辺長方形状、北西半部が半円状の形態を示していたものと考えられるのかもしれない。炉は設けられていない。

この住居址は固有の埋土を欠き、全体にわたってJ VII-27住居址群の側から、層厚10cm±～27cm±の汚れ火山灰が敷設されている。

床面はほぼ平坦で、全体にきわめて堅くしめる面となっている。いずれが柱穴を構成するものか不明であるが、この住居址からは柱穴状のものとして、 P_1 (径38cm±・深さ61cm±)・ P_2 (径33cm±・深さ40cm±)・ P_3 (径30cm±・深さ6cm±)などのピット群が検出されている。南東部

にみられるP₄（径69cm±・深さ34cm±）との共伴関係については不明である。これらの中には、あるいはJ VII-27住居址群に所属するピットも含まれているのかもしれない。また、P₂はJ VII-31住居址に伴うものである可能性もある。住居址の壁高は、北壁27cm±・南壁18cm±・東壁15cm±・西壁10cm±（いずれもJ VII-27住居址群床面との比高）を計る。壁溝は設けられていない。

重複関係の面では、この住居址はJ VII-27住居址群・J VII-31住居址により切られている。

J VII-31住居址（図版74a・76c・135e；写真図版102b・103a・181a・270ef）

住居址内に埋設されていた深鉢形土器からみて、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。比較的保存が良好な状態で検出されている。径3.7m±×3.0m±の規模をもち、平面形は楕円形状の形態を示している。床面の中央部付近には1基の地床炉が設けられている。

この住居址は固有の埋土を欠いていて、全体にわたってJ VII-27住居址群の側から、層厚18cm±～25cm±の汚れ火山灰が敷設されていた。この火山灰層はJ VII-30住居址内に敷設されているそれと連続的で、J VII-27住居址群の貼り床構成層となっている。

床面にはいくつかの凹凸がみられるが全体的にはほぼ平坦で、きわめて堅くしまるものとなっている。いずれが柱穴を構成するものか明らかではないが、この住居址内からは、P₁（径34cm±・深さ33cm±）・P₂（径62cm±・深さ18cm±）・P₃（径24cm±・深さ13cm±）・P₄（径13cm±・深さ13cm±）・P₅（径30cm±・深さ36cm±）・P₆（径23cm±・深さ6cm±）・P₇（径24cm±・深さ23cm±）・P₈（径22cm±・深さ15cm±）・P₉（径30cm±・深さ15cm±）・P₁₀（径58cm±・深さ40cm±）・P₁₁（径29cm±・深さ61cm±）などのピット群が検出されている。これらの中には、J VII-27住居址群に伴うピットも含まれているのかもしれない。地床炉の北部を切るP₂などは、そのようなピットとして位置づけられるものであろう。この住居址の壁高は、北壁18cm±・南壁25cm±・東壁20cm±・西壁22cm±（いずれもJ VII-27住居址群床面との比高）を計る。J VII-30住居址を切る北壁を中心とする範囲には、幅8cm±～21cm±・深さ2cm±～5cm±の規模の連続的な壁溝が設けられている。この範囲の床面は、J VII-30住居址のそれよりも4cm±低い面となっている。

北側の一部がP₂に切られているために地床炉の正確な規模は不明であるが、残存部分では、径73cm±×63cm±の範囲にわたって層厚5cm±の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしまる面となっている。

地床炉の北西部には、1個体の深鉢形土器を利用した埋設土器がみられる。この土器は直立の状態、床面下47cm±の深さまで埋めこまれている。この埋設土器の掘り方内には汚れ火山灰が充填されていた。

重複関係の面では、この住居址はJ VII-30住居址を切り、J VII-27住居址群には切られている。

(高橋 文夫)

J VIII区

J VIII-1 住居址 (図版 77ab・78a ; 写真図版 103b)

住居址登録がなされているが、この遺構が果して住居址を構成するものがどうかは明らかではない。南側がピットによって切られ、東側が調査区域外に位置しているために、規模や形態についても不明である。80cm±×70cm±の範囲に壁と壁溝状の部分が検出されているにすぎない。壁状の部分は高さ12cm±、壁溝状の部分は幅7cm±~16cm±・深さ8cm±を計る。床面状の部分はほぼ平滑で堅く、全体に南側にゆるやかに傾斜している。

埋土は、土器片・石器類・礫・焼土・炭化物を著しく多く含む暗褐色土層により構成されている。層相は全体に、複合廃棄物的な人為堆積相を示している。

この遺構はJ VIII-53ピットにより切られている。J VIII-201焼土遺構・J VIII-251土器埋設遺構・J VIII-54ピット・J VIII-56ピット・J VIII-2 住居址との具体的関係は不明である。

J VIII-2 住居址 (図版 77ab・78b ; 写真図版 100c・104a)

床面上の伴出遺物を欠くが、埋土中の土器などからみて、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。東側の大半の部分が調査区域外に存在しているものとみられ、規模や形態の詳細は不明である。2.6m±×0.8m±の範囲が検出されているにすぎない。残存している壁の輪郭線から推定すると、平面形は円形状を呈しているものかもしれない。精査された範囲内に関する限り、炉は検出されていない。

埋土は、土器片・石器類・礫・焼土・炭化物などを著しく多く含む暗褐色土層により構成されている。この埋土は全体に、複合廃棄物的な人為堆積相を示している。

床面はほぼ平坦で、きわめて堅くしめる面となっている。いずれが柱穴を構成するものか不明であるが、柱穴状のピットとして、P₁(径12cm±・深さ8cm±)・P₂(径22cm±・深さ15cm±)・P₃(径15cm±・深さ14cm±)・P₄(径13cm±・深さ13cm±)・P₅(径28cm±・深さ14cm±)・P₆(26cm±・深さ28cm±)・P₇(径21cm±・深さ39cm±)などが検出されている。壁高は、西壁14cm±を計る。

重複関係の面では、この住居址はJ VIII-56ピットを切っている。

J VIII-3 住居址 (図版 77ab・78c ; 写真図版 104b)

床面からの伴出遺物を欠くが、埋土中の土器などを参考にして推定すると、この住居址は縄

文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。東側の大半の部分が調査区域外に存在しているとみられるほか、ピットによって床面の多くが削剝を受けているために、残存が不良な状態で検出されている。精査された範囲は2.1m±×1.0m±の部分で、住居址の規模や形態については不明なものとなっている。残存している壁の輪郭線かは推定すると、平面形は円形を基調とした形態を示しているものかもしれない。

ピットによって削剝を受けているために、この住居址固有とみられる埋土はほとんど残存していない。壁際の堆積物の観察によると、焼土・炭化物などを含む暗褐色土層で構成されていたものかもしれない。

残存している範囲内では、床面はほぼ平坦できわめて堅くしまる面となっている。いずれが柱穴を構成するものか明らかではないが、柱穴状ピットとして、P₁ (径17cm±・深さ31cm±)・P₂ (径23cm±・深さ20cm±)・P₃ (径15cm±・深さ30cm±)・P₄ (径12cm±・深さ12cm±)・P₅ (径13cm±・深さ5cm±)などが検出されている。壁高は、西壁41cm±を計る。

重複関係の面では、この住居址は床面の部位で浅皿状のピット(推定径160cm±・深さ26cm±)と、それよりも新期のピット(径74cm±・深さ42cm±)により切られている。J VIII—202焼土遺構との関係についてはよくわからない。

J VIII—4 住居址 (図版 77a・79a・135f)

床面からの伴出遺物を欠くが、埋土中の土器などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。全体に残存が不良の状態検出されている。規模や形態については不明である。残存している壁の輪郭線から推定すると、平面形は楕円形状の形態を示していたものかもしれない。

土層断面図の作成は行なわれていないが、埋土は主に、土器群・石器群・礫・焼土・炭化物を著しく多く含む暗褐色土層により構成されている。この埋土は全体に、複合廃棄物的な人為堆積相を示している。

床面はほぼ平坦で、全体に堅くしまる面となっている。いずれが柱穴を構成するものか明らかではないが、柱穴状のピットとして、P₁ (径22cm±・深さ30cm±)・P₂ (径29cm±・深さ18cm±)・P₃ (径23cm±・深さ5cm±)・P₄ (径15cm±・深さ21cm±)・P₅ (径25cm±・深さ20cm±)・P₆ (径29cm±・深さ13cm±)・P₇ (径40cm±・深さ51cm±)・P₈ (径28cm±・深さ40cm±)・P₉ (径30cm±・深さ11cm±)・P₁₀ (径19cm±・深さ29cm±)・P₁₁ (径29cm±・深さ25cm±)・P₁₂ (径23cm±・深さ14cm±)などが検出されている。壁高は、北壁20cm±を計る。

南西部には地床炉状の現地性焼土が検出されている。この焼土の規模は、広さ45cm±×36cm±・層厚9cm±を計る。使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、比較的堅くしまる面となっている。

以上、JⅧ—4住居址について記載したが、柱穴状ピットなどとの位置的關係から考えて、上の現地性焼土が果してこの住居址の地床炉を構成するものかどうか不明である。

重複關係の面では、この住居址は単独で検出されたもので、他の遺構との切り合いは認められていない。

JⅧ—5住居址（図版 78d・135g；写真図版 106a・178d）

床面や炉からの伴出遺物を欠くが、埋土から出土している土器などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。全体に残存状態が不良であって、北壁や床面の一部、また1基の地床炉が検出されているにすぎない。東側の部分は調査区域外に存在しているものと考えられる。規模や形態については明らかではない。

土層断面図は作成されていないが、埋土は主に、上部が黒褐色～黒色土層で、下部が暗褐色土層でそれぞれ構成されている。

地床炉の西側および南側の範囲の床面は剝削を受けているものとみられる。残存している北壁沿いでの観察によれば、床面はほぼ平坦で比較的堅くしまる面となっている。柱穴は検出されていない。壁高は、北壁13cm±を計る。

地床炉の位置する部位には、径88cm±×70cm±の範囲に層厚13cm±の現地性焼土が形成されている。この炉の使用面は床面よりも僅かに低い位置に設けられていて、きわめて堅くしまる面となっている。

重複關係について言えば、調査範囲内に関する限りこの住居址は単独で検出されたもので、他の遺構との切り合いは認められていない。

JⅧ—6住居址（図版 79bc・135h；写真図版 105a・106b・181b）

床面上の出土土器からみて、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。保存が比較的良好的な状態で検出されている。規模は径2.7m±を計り、平面形は円形状の形態を示している。南壁よりには、複式炉の系統を引くとみられる炉が設けられている。

埋土は主に暗褐色土層と褐色土層で構成されていて、いずれも土器群・石器群・礫・焼土・炭化物などを含んでいる。これらの埋土は、全体に複合廃棄物的な人為堆積相を示している。

床面にはゆるやかな凹凸があって、比較的堅くしまる面となっている。いずれが柱穴を構成するものか明らかではないが、柱穴状のものとして、P₁（径35cm±・深さ15cm±）・P₂（径36cm±・深さ30cm±）・P₃（径25cm±・深さ13cm±）・P₄（径40cm±・深さ12cm±）などのピット群が検出されている。壁高は、北壁28cm±・南壁15cm±・東壁20cm±・西壁14cm±を計る。

複式炉の系統を引くとみられる炉は、石囲い部分的な部分と前庭部状の部分の2つの単位から成るもので、全長74cm±を計る。石囲い部分的な部分では一部に構成礫の抜き取り痕があって、その内部には、径32cm±×29cm±の範囲に層厚4cm±の現地性焼土の形成がみられる。この部

位の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、比較的軟い面となっている。現地性焼土に接する位置にある前庭部状の部分は径50cmほどの円形ピットで、床面よりも8cm±低い位置に設けられているその底面はきわめて堅くしまるものとなっている。

当住居址からの出土遺物としては2個体の深鉢形土器がある。これらの土器はそれぞれ、東壁沿いおよび西壁沿いの床面上から得られている。

重複関係の面ではこの住居址は単独で検出されたもので、他の遺構との切り合いは認められていない。この住居址の下位には縄文時代前期末葉期に所属するJⅧ-55フラスコ形ピットが位置しているが、両者の間に具体的な形の重複はみられない。

(高橋 文夫)

KⅧ区

KⅧ-1 住居址 (図版 80ab ; 写真図版 105b・107b・271c)

床面や炉からの伴出遺物を欠くが、埋土中の土器などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。保存が良好な状態で検出されている。規模は径4.5m±×3.9mを計り、平面形は卵形状または楕円形状の形態を示している。住居址中央部よりやや南側の位置には1基の地床炉が設けられている。

埋土はいくつかの層に細分されるが、基本的には褐色土・暗褐色土・黒褐色土などの層群によって構成されている。最下部にみられる汚れ火山灰優占の褐色土層(8層)を除けば、埋土の大半は完形土器群・土器大形破片群・石器類・礫・焼土・炭化物を著しく多く含んでいて、全体に複合廃棄物的な人為堆積相を示している。完形土器群や土器大形破片群での観察によれば、それらは層理面または葉理面の傾斜に平行して分布する在り方を示している。

床面はほぼ平坦で、全体にきわめて堅くしまる面となっている。柱穴は、P₁(径21cm±・深さ55cm±)・P₂(径26cm±・深さ44cm±)・P₃(径18cm±・深さ24cm±)・P₄(径21cm±・深さ30cm±)など、4個のピットで構成されているものではないかと考えられる。これらの柱穴の間では、P₁-P₃・P₂-P₄の各群内に対になる配置関係がみられ、全体で菱形を形作る安定した形態を示している。この住居址内には上記の柱穴群のほかに、P₅(径30cm±・深さ82cm±)・P₆(径22cm±・深さ26cm±)・P₇(径16cm±・深さ11cm±)・P₈(径17cm±・深さ11cm±)・P₉(径12cm±・深さ10cm±)・P₁₀(径30cm±・深さ14cm±)・P₁₁(径42cm±・深さ7cm±)・P₁₂(径15cm±・深さ20cm±)・P₁₃(径20cm±・深さ17cm±)・P₁₄(径16cm±・深さ29cm±)・P₁₅(径31cm±・深さ79cm±)・P₁₆(径30cm±・深さ80cm±)・P₁₇(径15cm±・深さ80cm±)・P₁₈(径17cm±・深さ10cm±)などのピット群がみられるが、これらの具体的な位置づけについては不明である。

住居址の壁高は、北壁84cm±・東壁32cm±・南壁23cm±・西壁58cm±を計る。壁溝は設けられていない。

この住居址に伴う炉は地床炉の形態をもつもので、住居址中央部よりやや南側に位置し、径23cm±×11cm±の小規模な範囲に薄層厚の現地性焼土の形成がみられる。この炉の使用面は軟弱なものとなっていて、この上面および周辺部は薄い炭化物層で被覆されていた。

重複関係の面では、この住居址は西壁沿いでKⅧ-51ピットと切り合っているが、両者の新旧関係については不明である。

KⅧ-2 住居址（図版 80ac；写真図版 105c・108a）

床面からの伴出遺物を欠くが、埋土中の土器などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代前期末葉期に位置づけられるものであろう。大半の部分が調査区域外に存在しているために、規模や形態については明らかではない。僅かに2.2m±×0.9m±の範囲が精査されているにすぎない。炉は検出されていない。

埋土は主に、土器破片群・石器類・礫・焼土・炭化物を著しく多く含む黒褐色土層により構成されている。この埋土は、全体的に複合廃棄物的な人為堆積相を示している。

床面はほぼ平坦で、きわめて堅くしまる面となっている。いずれが柱穴を構成するものか明らかではないが、柱穴状のピットとして、P₁（径27cm±・深さ20cm±）・P₂（径28cm±・深さ45cm±）・P₃（径30cm±・深さ10cm±）・P₄（径19cm±・深さ29cm±）などが検出されている。壁高は、西壁12cm±を計る。壁溝は設けられていない。

南側でピット状のものと重複を示している以外、他の遺構とこの住居址との切り合い関係はみられない。

KⅧ-3 住居址（図版 74a・81c；写真図版 108b・111a）

伴出遺物を欠くために、この住居址の所属時期は不明である。埋土中に僅かにみられた土器片からすると、縄文時代中期末葉期前後の時期に位置づけられるものかもしれない。3.5m±×2.0m±の規模をもち、平面形は手鏡形の形態を示している。炉は検出されていない。

埋土は主に褐色土～暗褐色土層により構成されている。これらの埋土は、いずれも自然堆積相を示している。

床面には僅かな凹凸がみられるもののほぼ平坦で、全体にきわめて堅くしまる面となっている。この中でいずれが柱穴を構成するものか明らかではないが、柱穴状のピットとして、P₁（径17cm±・深さ38cm±）・P₂（径20cm±・深さ19cm±）・P₃（径18cm±・深さ27cm±）・P₄（径30cm±・深さ3cm±）・P₅（径30cm±・深さ15cm±）などが検出されている。住居址の壁高は、北壁24cm±・南壁14cm±・東壁24cm±・西壁18cm±を計る。壁溝は設けられていない。

重複関係では、この住居址はJⅦ-27住居址群を切っている。

KVIII—4 住居址 (図版 81b ; 写真図版 109a)

伴出遺物を欠くために、この住居址の所属時期は不明である。残存がやや不良な状態で検出されている。径2.2m±×1.7m±の規模をもち、平面形は卵形状または楕円形に近い形態を示している。炉は検出されていない。

土層断面図が作成されていず、また Field Card にも記載を欠くために、埋土の状況についても不明である。

床面はほぼ平坦で、比較的堅くしまるものとなっている。柱穴状のピットとして、P₃(径23cm±・深さ25cm±)・P₄(径29cm±・深さ31cm±)・P₅(径22cm±・深さ15cm±)などが検出されている。壁高は、北壁24cm±・南壁3cm±・東壁22cm±・西壁12cm±を計る。壁溝は設けられていない。

この住居址の北側には、西から東にかけて、長さ3.7m±・幅10cm±～17cm±・深さ5cm±～13cm±の壁溝状の小溝がみられる。溝内には、径10cm±～15cm±・深さ9cm±～13cm±の小ピットがいくつか存在している。また、この溝の南方延長線内には、P₁(径24cm±・深さ30cm±)・P₂(径32cm±・深さ19cm±)・P₆(径37cm±・深さ16cm±)・P₇(径32cm±・深さ16cm±)・P₈(径26cm±・深さ24cm±)などのピット群がみられるほか、溝に接する位置にはP₉(径17cm±・深さ36cm±)がある。以上に述べた壁溝状の小溝とピット群は、あるいはKVIII—4住居址に先行して存在した古期住居址の痕跡を示しているものと考えられるのかもしれない。

KVIII—5 住居址 (図版 81a ; 写真図版 109b・110a・271d)

床面からの出土遺物を欠くが、埋土中にみられる土器などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代前期末葉期から中期初頭期にかけての時期に位置づけられるものであろう。保存がやや不良の状態で検出されている。規模は3.0m±×2.4m±を計り、楕円形状の形態を示している。炉は検出されていない。

埋土は主に、暗褐色～黒褐色土層で構成されていた。精査の下手際から土層断面図は作成されていない。この埋土は、完形土器群・土器大形破片群・石器類・礫・焼土・炭化物などを著しく多く含み、全体に複合廃棄物的な人為堆積相を示している。完形土器や大形破片での観察によると、これらは層理面または葉理面の傾斜に平行して分布する在り方を示している。

床面にはやや凹凸がみられるものの全体的にはほぼ平坦で、比較的堅くしまるものとなっている。柱穴状のピットとして、P₁(径28cm±・深さ11cm±)・P₂(径18cm±・深さ27cm±)・P₃(径23cm±・深さ9cm±)・P₄(径22cm±・深さ8cm±)・P₅(径19cm±・深さ18cm±)などが検出されている。壁高は、北壁61cm±・南壁4cm±・東壁14cm±・西壁40cm±を計る。壁溝は設けられていない。

重複関係の面では、この住居址は単独で検出されたもので、他の遺構との切り合い関係は認

められていない。

(高橋 文夫)

L VII区

L VII—1 住居址 (図版 82ab ; 写真図版 110b・111b)

この住居址は埋土から得られた出土遺物のあり方からみて、縄文時代前期末葉期に位置づけられよう。形状は円形を呈し、径3.8m±を計る。埋土は、床面中央部でL VII—56ピットに切られて消失しているほか、検出段階の不手際から上部を失い、壁寄りの下部付近しか残存していない。残存部の観察によれば、埋土の下部は黒褐色土～黒色土層で構成されており、層中には汚れた火山灰のブロックや下位の泥流起源と思われる安山岩亜角礫が認められる。

床面は全体に堅くしまったものとなっていて、凹凸が多くみられる。また、床面中央部は炉を含めてL VII—56ピットに切られて消失したと考えられる。床面から、P₁ (径20cm±・深さ18cm±)・P₂ (径20cm±・深さ11cm±)・P₃ (径20cm±・深さ16cm±)・P₄ (径34cm±・深さ11cm±)・P₅ (径10cm±・深さ10cm±)・P₆ (径10cm±・深さ12cm±)・P₇ (径15cm±・深さ12cm±) など7個のピットが検出されている。柱穴配置については明らかではないが、これらのピットの規模や配置からみれば、基本的にはP₁・P₂・P₄などで構成されるのではないかと推定される。

壁のたちあがりはしっかりしているが、斜面下方にあたる南～南西壁は消失している。壁高は、北壁62cm±・南壁3cm±・東壁32cm±・西壁10cm±を計る。床面からの出土遺物はないが、埋土下部から縄文時代前期末葉に位置づけられる深鉢の大形破片が出土している。

この住居址はL VII—56ピットと重複関係にあり、埋土断面の観察から、このピットによって埋土下位から切られたものと捉えられる。

(佐藤 勝)

N VII区

N VII—1 住居址 (図版 83ab・136a ; 写真図版 112ab・181cd)

この住居址は出土遺物および炉の形態から縄文時代中期末葉期に位置づけられる。全体に検出時の削剝をうけており、壁および埋土の大半を欠失している。平面形は不整な円形を呈し、2.8m±×2.5m±の径を計る。南壁に寄った部分に炉を1基もつ。床面直上から検出された焼土および炭化材の分布状況から、この住居址は焼失をうけたものと捉えられる。

埋土は床面上7～8cm±しか残存していないところから断面の実測を省略した。Field Cardによれば、残存する下位の埋土は炭化材・炭化物を非常に多く含む黒褐色土によって構成され

ている、と記載されている。床面は堅くしまったものとなっており、わずかに凹凸が認められる。床面から P₁ (径10cm±・深さ17cm±)・P₂ (径15cm±・深さ11cm±) の2個のピットが検出されているが、これらのピットが柱穴の性格をもつものであるかどうか不明である。また、西壁付近から検出された P₃ (径60cm±×18cm±・平均深度7cm±) についても壁溝のような性格をもつのか明らかではない。僅かに残存する壁の壁高は、北壁6cm±・南壁3cm±・東壁14cm±を計る。

炉は床面中央から南壁に寄った部分に設けられており、土器埋設炉の形態を呈する。この炉は下位に摺鉢状の掘り方を伴ない、北の方向に開口する状況で深鉢形土器を斜位に埋設している。また、斜位埋設土器に密着する状況で土器の大形破片が認められる。掘り方内は炭化物を含む暗褐色土で構成され、斜位埋設土器の内部は炭化物を多量に含む黒褐色土で充填されている。さらに、炉内には埋設土器の周辺に黄褐色細礫が敷設されている。炉縁は径95cm±・深さ35cmの規模をもち、床面から斜位埋設土器下底部までの深さは26cm±を計る。

出土遺物として炉の埋設土器および大形破片のほかに、北壁寄りの床面からやはり縄文時代中期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の破片が出土している。

この住居址は単独の遺構として検出され、他の遺構との重複は認められない。

NVII-2 住居址 (図版 84a ; 写真図版 113a)

重機による削剝をうけて遺構の大部分を破壊されている。残存部からの出土遺物がなく、この住居址の所属する時代・時期については不明なものとなっている。周辺から検出された住居址などから、あるいは縄文時代中期末葉期に位置するものかもしれない。残存する部分の平面形は半円状を呈し、最大径3.6mを計る。埋土の詳細は不明であるが、Field Cardの記載によれば、床面上に僅かに黒褐色土層が認められたと記されている。

残存状況から判断して調査できたのはこの住居址の東側の部分と認められ、この部分の床面は平坦で堅くしまったものとなっている。床面から検出されたピットは、P₁ (径25cm±・深さ45cm±)・P₂ (径13cm±・深さ9cm±)・P₃ (径20cm±・深さ11cm±)・P₄ (径35cm±・深さ12cm±)・P₅ (径15cm±・深さ43cm±) など5個を数える。柱穴配置は不明であるが、規模から捉えて、基本的には P₁・P₅ などによって構成されると考えられる。壁の立ちあがりはしっかりしており、残存する部分の壁高は北壁30cm±・東壁7cm±を計る。炉は検出されなかった。残存部だけの観察では、他の遺構との重複は認められない。

NVII-3 住居址 (図版 84b・136e ; 写真図版 113b・182a)

この住居址は炉の形態および埋設土器の破片から縄文時代中期末葉期に位置すると考えられる。NVII-2 住居址同様、この住居址も重機による削剝をうけており、炉付近だけを残して遺構の大半を失った状況で検出された。炉は径1.7m±×1.5m±を計る皿状ピットの南縁から検

出されているが、この皿状ピットがこの住居址そのものであるか、付属施設的なものであるか明らかではない。したがって、この住居址の形状や規模についても不明である。

炉は土器埋設炉の形態を呈する。下位の火山灰層を掘り凹めた不整な摺鉢状の掘り方を伴ない、北の方向に開口する状況で斜位埋設土器が認められる。炉断面の観察によれば、掘り方内は焼土を含む暗褐色土および褐色土で構成され、斜位埋設土器内部は炭化物を多量に含む暗褐色土で充填されている。炉縁径は45cm±、皿状ピット底面から斜位埋設土器下底部までの深さは25cm±を計る。

出土遺物としては、潰れて細片化した埋設土器が得られただけである。残存部だけに限ってみれば、この住居址と他の遺構との重複は認められない。

(佐藤 勝)

QIV区

QIV-1 住居址群 (図版85abc・136c ; 写真図版111c・114ab・182bc)

これらの住居址群が共有して床面としている範囲の南半が近くを東流する堤沢の支流の改修に伴う水路として掘削されており残存状況はよくない。また、検出面を基本層序Ic層upperに相当する黒色土層中にもつため、検出状況もあまりよくない。

調査の段階で単独の遺構と考えられていたが、検出された柱穴状ピットの検討したところさらに古期の住居址と考えられる3棟の存在を確認した。そこで、これらの遺構をQIV-1住居址群として扱い、それぞれの住居址をQIV-1a住居址、QIV-1b住居址、QIV-1c住居址、QIV-1d住居址と呼ぶことにする。4棟の住居址はいずれも5角形の柱穴配置をもち、柱穴のいくつかが他の3棟のいずれかの住居址と共有関係にある。また、同じ範囲内で重複する状況から床面についても共有する関係にあると考えられる。4棟の新旧関係は明らかではないが、検出状況や残存部から推定される遺構の平面形から考えて、QIV-1a住居址が最も新期の住居址と認められる。この住居址は出土遺物などから縄文時代晩期末葉期に位置づけられる。重複する他の3棟についても柱穴配置の類似性からほぼ同じ頃に位置づけられよう。

QIV-1a 住居址 (図版 85abc・136c ; 写真図版 111c・114ab・182bc)

この住居址はQIV-1住居址群の中で最も新期の遺構と考えられる。検出時に多量に認められた焼土や炭化材の分布状況から、この住居址は焼失をうけたものと考えられる。水路の掘削や遺構確認のため設けられたトレンチの削剝をうけて、全体の形状や規模は明確には把握できないが、焼土および炭化材の分布状況や残存部および柱穴配置から推定すると、径8.7m±の規模をもつ隅丸方形の平面形を呈するものと思われる。床面中央部に炉を1基もつ。

現地地形が水田であったため、埋土の下部付近しか残存していないが、残存部の観察によれば、床面直上部を焼失に伴って形成された焼土や炭化材を多く含む黒褐色土層に覆われ、さらにその上を基本層序 I c 層 upper に相当する黒色土が覆う状況にある。床面は埋土で観察された黒色土層をいわゆる“地山”としており、全体にしまったものとなっている。Field Card には、残存部の北壁から北東隅に寄った部分および P₁₀・P₁₁ の位置する部分には粘土質シルトを利用した貼り床が認められたと観察記録されている。

柱穴は、P₂ (径30cm±・深さ19cm±)・P₆ (径25cm±・深さ18cm±)・P₁₀ (径24cm±・深さ26cm±)・P₁₆ (径30cm±・深さ10cm±)・P₁₉ (径32cm±・深さ20cm±) など5個のピットで構成され、北壁付近からみれば P₁₀ を頂点として P₂—P₁₉・P₆—P₁₆ が対になる安定した5角形の配置を示している。これらの柱穴と他の住居址に伴なう柱穴とを比較してみれば、P₆はQIV—1c 住居址と、P₁₆・P₁₉ はQIV—1b 住居址と同位置的な共有関係をもつ。床面からはこのほかに、P₄ (径20cm±・深さ28cm±)・P₁₃ (径35cm±・深さ22cm±)・P₁₄ (径20cm±・深さ12cm±)・P₁₇ (径25cm±・深さ23cm±) など4個のピットが検出されているが、これらのピットの性格については明らかではない。

残存部の壁のたちあがりはしっかりしており、西壁で10cm±・北壁で11cm±の高さを認める。壁溝は北壁から北東隅付近の壁際に幅15cm±～35cm±・深さ4cm±～8cm±の規模をもって1条検出されている。炉は床面中央部に位置し、土器埋設石囲い炉の形態を呈する。埋設土器を中心に5cm±～20cm±の大きさの垂角礫が残存している。構成礫の外縁間は100cm±～110cm±を計る。炉の下位には焼土を含む黒色～黒褐色土層で埋められた摺鉢状の掘り方が認められる。中央部に直立埋設土器を伴う。床面から埋設土器下底部までの深さは13cm±を計り、床面から掘り方底部までの深さは22cm±を計る。炉は埋設土器を中心によく焼成をうけている。

P₂₁ は北東隅寄りの床面から検出され、焼失に伴って形成された焼土・炭化材が底部付近まで認められたところから、この住居址に伴する付属施設的なピットと捉えられる。平面形は円形を呈し、径115cm±・深さ22cm±を計る皿状の形態をもつ。炉の埋設土器のほかに、床面からは縄文時代晩期と位置づけられる土器片と剝片が出土している。埋土からも縄文時代晩期末葉期に位置づけられる大形土器片と剝片が出土している。

この住居址はQIV—1住居址群の中で新期の住居址と考えられる。古期とみられる3棟の重複関係について把握できないところから直接この住居址に切られる関係にある住居址の判定はできないが、精査の過程で認められた貼り床の存在や柱穴の配置および共有関係から推定するとQIV—1b 住居址がその段階にあると捉えられ、QIV—1a 住居址はこの住居址から東方へ拡張された新期の住居址と考えられる。

QIV—1b 住居址 (図版 85abc・136c ; 写真図版 111c・114ab・182bc)

この住居址は、P₁（径25cm±・深さ19cm±）・P₇（径30cm±・深さ30cm±）・P₁₂（径42cm±・深さ26cm±）・P₁₆（径30cm±・深さ10cm±）・P₁₉（径32cm±・深さ20cm±）など5個の柱穴で構成される柱穴配置を示す。5個の柱穴は北壁付近からみると、P₁₂を頂点としてP₇—P₁₆・P₁—P₁₉と対になる安定した配置を示し、これらを結ぶ5角形の3辺でQIV—1a住居址に内接するあり方を示している。これらの柱穴のうち、P₁はQIV—1d住居址と、P₁₆はQIV—1a住居址およびQIV—1d住居址と、P₁₉はQIV—1a住居址と共有関係にある。他の3棟の住居址との切合関係については明らかではないが、柱穴配置の近似性や柱穴の共有関係からみて、この住居址はQIV—1a住居址を拡張形態として載せるあり方を示しており、4棟の重複過程の中でQIV—1a住居址に先行する段階に位置づけられよう。

QIV—1c住居址（図版 85abc・136c；写真図版 111c・114ab・182bc）

この住居址の柱穴は、P₃（径20cm±・深さ18cm±）・P₆（径25cm±・深さ18cm±）・P₉（径23cm±・深さ21cm±）・P₁₅（径23cm±・深さ21cm±）・P₂₀（径30cm±・深さ44cm±）など5個で構成されると思われる。これらの柱穴は5角形の配置を示し、P₉を頂点としてP₃—P₂₀・P₆—P₁₅が対になる関係にある。また、P₆はQIV—1a住居址と、P₂₀はQIV—1d住居址と共有する関係にある。

この住居址はQIV—1a住居址よりも古期の住居址と考えられるが、他の2棟との新旧関係については明らかではない。

QIV—1d住居址（図版 85abc・136c；写真図版 111c・114ab・182bc）

この住居址の柱穴は、P₁（径25cm±・深さ19cm±）・P₇（径30cm±・深さ30cm±）・P₁₁（径40cm±・深さ10cm±）・P₁₆（径30cm±・深さ10cm±）・P₂₀（径30cm±・深さ44cm±）など5個で構成され、P₁₆を頂点にP₁₁—P₂₀・P₈—P₁が対になる5角形の配置を示す。この住居址の柱穴と群を構成する他の住居址の柱穴とを比べてみると、P₁およびP₁₆はQIV—1a住居址と、P₂₀はQIV—1c住居址とそれぞれ共有関係にある。この住居址はQIV—1a住居址よりも古期の住居址と考えられるが、QIV—1b住居址およびQIV—1c住居址との新旧関係については明らかではない。

QIV—2住居址群（図版 86ab・87a；写真図版 115a）

単独の遺構として調査された住居址の床面および周辺に認められた柱穴状ピットを検討したところ、これらのピット群が分布する範囲内には9棟の住居址が重複して存在することがわかった。これらの住居址は出土遺物および西側に隣接するQIV—1住居址群と同じ検出面にあることなどからみて、縄文時代晩期末葉期以前に位置するものと推定される。

検出段階である程度の形状を把握できた1棟は検出状況から判断して9棟中最も新期の住居址と捉えられるが、それよりも古期に位置づけられる残る8棟の新旧関係についてはこれらの

住居址が柱穴配置からしか確認できないため明らかではない。検出された37個のピットのうち、 P_4 (径20cm±・深さ25cm±)・ P_{11} (径20cm±・深さ18cm±)・ P_{15} (径15cm±・深さ22cm±)・ P_{23} (径20cm±・深さ22cm±)・ P_{27} (径17cm±・深さ30cm±) など5個のピットの性格については明らかではないが、9棟の住居址を構成する32個の柱穴状ピットの約 $\frac{1}{3}$ は他の住居址とも共有するあり方を示している。このことから、これらの住居址は柱穴を部分的に再利用する状況で建て替えられたのではないかと推定される。

ここでは、形状・規模を把握できる状況で検出された新期の住居址を柱穴配置との適合性からQIV-2 a住居址として扱い、新旧関係について把握できない古期の8棟の住居址についてはQIV-2 b住居址、QIV-2 c住居址、QIV-2 d住居址、QIV-2 e住居址、QIV-2 f住居址、QIV-2 g住居址、QIV-2 h住居址、QIV-2 i住居址と呼称し、順に記述することにする。

QIV-2 a住居址 (図版 86ab・87a ; 写真図版 115a)

この住居址は埋土上部を削平によって失い、わずかに床面直上に焼土・炭化物および粘土質シルトを含む黒色～黒褐色土層で構成される埋土下位を残す状況で検出された。平面形はほぼ円形を呈し、6.0m±×5.4m±の径を計る。床面は基本層序I c層 upper に相当する黒色土層中に認められ、平坦で軟質な状況を呈する。

柱穴は、 P_2 (径30cm±・深さ13cm±)・ P_7 (径20cm±・深さ15cm±)・ P_{10} (径20cm±・深さ11cm±)・ P_{17} (径30cm±・深さ26cm±)・ P_{21} (径25cm±・深さ17cm±)・ P_{28} (径21cm±・深さ23cm±)・ P_{35} (径30cm±・深さ11cm±) など8個のピットで構成され、 P_{35} と P_{17} を結ぶ線上に主軸をもち、 P_{34} — P_2 ・ P_{28} — P_7 ・ P_{21} — P_{10} がそれぞれ対になる八角形の安定した配置を示す。これらの柱穴のうち、 P_2 はQIV-2 d・2 f・2 g住居址と、 P_7 はQIV-2 d・2 f～2 h住居址と、 P_{10} はQIV-2 b・2 f・2 g住居址と、 P_{17} はQIV-2 c・2 f・2 g住居址と、 P_{21} はQIV-2 d～2 g住居址と共有する関係にある。また、 P_{28} はQIV-2 b・2 d・2 e住居址と、 P_{35} もQIV-2 g住居址と共有関係にある。

壁高は、北壁10cm±・南壁8cm±・東壁11cm±・西壁22cm±を計る。炉は床面中央部から検出され、地床炉的な形態をとる。径45cm±×25cm±の範囲内に現地性焼土が炭化物を含んで形成されている。あまり焼成をうけてはおらず、断面実測を省略した。 P_{28} 底面付近および埋土から縄文時代晩期に位置づけられる土器片が出土している。

QIV-2 住居址群を構成するピットのうち、この住居址内から検出されたピットはその大半が床面を掘り下げたダメ押しの段階で確認されたものであることや、この住居址の検出状況などから、この住居址は住居址群を構成する他の8棟を最終的に切る状況を示していると考えられる。また、推測の域を出るものではないが、この住居址に伴う柱穴の埋土中から多量の炭化物が含まれているという Field Card の記載から、この住居址は焼失をうけたのち清掃を経

て再び利用された住居址ではないかと思われる。

QIV-2 b住居址 (図版 86ab・87a ; 写真図版 115a)

この住居址の柱穴は、 P_6 (径25cm±・深さ33cm±)・ P_{10} ・ P_{16} (径22cm±・深さ9cm±)・ P_{20} (径20cm±・深さ14cm±)・ P_{28} ・ P_{31} (径20cm±・深さ17cm±) など6個で構成されると考えられる。配置を見ると、 P_6 と P_{20} を結ぶ北から南の方向に主軸を有し、 P_{31} — P_{10} ・ P_{28} — P_{16} が対になる六角形の安定した状況を呈する。これらの柱穴のうち、 P_{10} はQIV-2 a・2 f・2 g住居址と、 P_{20} はQIV-2 c・2 h住居址と、 P_{28} はQIV-2 a・2 d・2 e住居址と共有する関係にある。また、 P_{31} もQIV-2 d・2 f~2 h住居址と同様の関係にある。

この住居址はQIV-2 a住居址よりも古期の段階に位置づけられるが、他の7棟との新旧関係については明らかではない。

QIV-2 c住居址 (図版 86ab・87a ; 写真図版 115a)

この住居址の柱穴は、 P_8 (径30cm±・深さ23cm±)・ P_{17} ・ P_{20} ・ P_{26} (径32cm±・深さ13cm±)・ P_{29} (径20cm±・深さ24cm±)・ P_{32} (径32cm±・深さ36cm±) など6個からなると考えられる。柱穴の配置をみると、 P_{29} と P_{17} を結ぶ北西から南東の方向に主軸をもち、主軸をはさんで、 P_{26} — P_{32} ・ P_{20} — P_8 がそれぞれ対になる六角形の形状を示している。これらの柱穴のうち、 P_8 はQIV-2 e住居址と、 P_{17} はQIV-2 a・2 f・2 g住居址と、 P_{20} はQIV-2 b・2 h住居址と、 P_{26} はQIV-2 f住居址とそれぞれ共有関係にある。また、 P_{29} もQIV-2 i住居址と同様の関係にある。

この住居址はQIV-2 a住居址よりも古期の住居址と考えられるが、他の7棟との新旧関係については明らかではない。

QIV-2 d住居址 (図版 86ab・87a ; 写真図版 115a)

この住居址と構成する柱穴は、 P_2 ・ P_7 ・ P_{21} ・ P_{28} ・ P_{31} ・ P_{37} (径10cm±・深さ10cm±) など6個からなると考えられる。配置を見ると、 P_7 と P_{28} を結ぶ線上に主軸をもち、この主軸をはさむようにして P_2 — P_{37} ・ P_{31} — P_{21} とそれぞれ対になる位置関係を示す。これらの柱穴のうち、 P_2 はQIV-2 a・2 f・2 g住居址と、 P_7 はQIV-2 a・2 f~2 h住居址と、 P_{21} はQIV-2 a・2 e~2 g住居址と、 P_{28} はQIV-2 a・2 b・2 e住居址と共有関係にある。また、 P_{31} もQIV-2 b・2 f~2 h住居址と同様の関係にある。この住居址はQIV-2 a住居址よりも古期の住居址と考えられるが、他の7棟との新旧関係については不明である。

QIV-2 e住居址 (図版 86ab・87a ; 写真図版 115a)

この住居址の柱穴は、 P_8 ・ P_{12} (径20cm±・深さ17cm±)・ P_{21} ・ P_{28} ・ P_{30} (径20cm±・深さ11cm±)・ P_{36} (径32cm±・深さ12cm±) など6個からなると考えられる。配置をみると、 P_{36} と P_{21} を結ぶ北から南の方向に主軸を有し、この主軸を挟んで P_{30} — P_8 ・ P_{28} — P_{12} とそれぞれ対になる六角形の形状を呈する。これらの柱穴と他の住居址に伴う柱穴とを比較すれば、 P_8 はQIV-2 c

住居址と、P₂₁はQIV-2a・2d・2f・2g住居址と、P₂₈はQIV-2a・2b・2d住居址とそれぞれ共有する関係にある。

この住居址はQIV-2a住居址よりも古期の住居址と考えられるが、他の7棟の住居址との新旧関係については明らかではない。

QIV-2f住居址（図版 86ab・87a；写真図版115a）

この住居址の柱穴は、P₂・P₇・P₁₀・P₁₇・P₂₁・P₂₆・P₃₁・P₃₃（径20cm±・深さ17cm±）など8個のピットから構成されると考えられる。配置をみると、北東から南西に主軸をもち、P₂-P₇・P₃₃-P₁₀・P₃₁-P₁₇・P₂₆-P₂₁とそれぞれ対になる位置関係にあり、全体として樽形に近い八角形の形状を呈する。これらの柱穴をみれば、P₂はQIV-2a・2d・2g住居址と、P₇はQIV-2a・2d・2g・2h住居址と、P₁₀はQIV-2a・2b・2g住居址と、P₁₇はQIV-2a・2c・2g住居址と、P₂₁はQIV-2a・2d・2e・2g住居址と、P₂₆はQIV-2c住居址と共有関係にある。また、P₃₁はQIV-2b・2d・2g・2h住居址と、P₃₃はQIV-2i住居址と共有する関係にある、8個のピットのすべてがQIV-2住居址群を構成する他の住居址と共有する関係をもっている。この住居址はQIV-2a住居址よりも古期のものと考えられるが、他の7棟の住居址との新旧関係については明らかではない。

QIV-2g住居址（図版 86ab・87a；写真図版 115a）

この住居址の柱穴は、P₂・P₇・P₁₀・P₁₇・P₂₁・P₂₅（径33cm±・深さ10cm±）・P₃₁・P₃₅など8個のピットから構成されると考えられる。これらの配置をみると、P₃₁とP₁₀を結ぶ西から東の方向に主軸をもち、P₂₅-P₃₅・P₂₁-P₂・P₁₇-P₇とそれぞれ対になる八角形の安定したあり方を示している。これらの柱穴のうち、P₂はQIV-2a・2d・2f住居址と、P₇はQIV-2a・2d・2f・2h住居址と、P₁₀はQIV-2a・2b・2f住居址と、P₁₇はQIV-2a・2c・2f住居址と、P₂₁はQIV-2a・2d・2e・2f住居址と共有する関係にある。さらに、P₃₁はQIV-2b・2d・2f・2h住居址と、P₃₅はQIV-2a住居址と共有する関係にある。

この住居址はQIV-2a住居址よりも古期に位置づけられるが、他の七棟との新旧関係については明らかではない。

QIV-2h住居址（図版 86ab・87a；写真図版 115a）

この住居址の柱穴は、P₃（径23cm±・深さ24cm±）・P₇・P₁₄（径20cm±・深さ50cm±）・P₁₈（径18cm±・深さ21cm±）・P₂₀・P₂₄（径56cm±・深さ37cm±）・P₃₁など7個のピットで構成されると考えられる。配置をみると、P₂₀とP₁₈の midpointとP₃を結ぶ南北の方向に主軸を有し、P₃₁-P₇・P₂₄-P₁₄・P₂₀-P₁₈がそれぞれ対になる安定した七角形の形状を示す。これらの柱穴のうち、P₇はQIV-2a・2d・2f・2g住居址と、P₁₄はQIV-2i住居址と、P₂₀はQIV-2b・2c住居址と、P₃₁はQIV-2b・2d・2f・2g住居址と共有関係にある。この住居址に伴う柱穴の中で

P₁₄ は QIV-2 a 住居址が位置する範囲外から検出されている状況から、この住居址は QIV-2 a 住居址に切られる関係にある古期の住居址と捉えられるが、他の 7 棟との新旧関係については明らかではない。

QIV-2 i 住居址 (図版 86ab・87a ; 写真図版 115a)

この住居址の柱穴は、P₁ (径45cm±・深さ34cm±)・P₅ (径26cm±・深さ20cm±)・P₉ (径17cm±・深さ11cm±)・P₁₄・P₁₉ (径13cm±・深さ10cm±)・P₂₂ (径21cm±・深さ35cm±)・P₂₉・P₃₃ など 8 個のピットで構成されると考えられる。これらのピットの配置をみると、北西から南東の方向に主軸を有し、これを挟んで P₂₉-P₃₃・P₂₂-P₁・P₁₉-P₅・P₁₄-P₉ とそれぞれ対になる位置関係を示し、全体的に安定した八角形の平面形を呈する。これらの柱穴のうち、P₁₄ は QIV-2 h 住居址と、P₂₉ は QIV-2 c 住居址と、P₃₃ は QIV-2 f 住居址とそれぞれ共有する関係にある。

8 個の柱穴のうち P₅・P₉・P₁₄ の 3 個が QIV-2 a 住居址の位置する範囲外から検出された状況から判断して、この住居址は QIV-2 a 住居址によって切られる関係にある古期の住居址と考えられる。残る 7 棟との新旧関係については明らかではない。

(佐藤 勝)

RIV区

RIV-1 住居址群 (図版87b・88a・136d ; 写真図版115b・182de)

単独の遺構として調査された住居址の床面に分布する柱穴状ピットの配置について検討を加えたところ、この遺構は単独の住居址ではなく、8 棟の住居址が重複する状況における新期のものであることがわかった。これらの住居址を覆う埋土が下位まで水田耕作によって攪乱をうけており、埋土から新旧関係を具体的に捉えることはできなかった。新期の住居址を含めてこれら 8 棟の住居址は一定の範囲内に重複しており、それぞれの住居址を構成する柱穴が他の住居址と共有する関係にあるところから、これらの住居址は一定期間内に建て替えられていったものと考えられる。新期の住居址に伴う埋土の下部が基本層序 Ic 層 upper に比定できることや埋設土器などを参考にすると、新期の住居址は縄文時代晩期末葉期に位置づけられる。他の 7 棟についてもほぼ同時期かそれ以前と推定される。

ここでは 8 棟の住居址を RIV-1 住居址群として扱い、新期の住居址を RIV-1 a 住居址と呼び、さらに古期の 7 棟についてはそれぞれに RIV-1 b 住居址・RIV-1 c 住居址・RIV-1 d 住居址・RIV-1 e 住居址、RIV-1 f 住居址、RIV-1 g 住居址、RIV-1 h 住居址という遺構名を付して順に述べることにする。

RIV-1a 住居址 (図版87b・88a・136d ; 写真図版115b・182de)

この住居址は炉の埋設土器および検出状況から判断して縄文時代末葉期に位置づけられる。東方に開口して「コ」の字状の残存状況を示す壁のありかたから推定すると、この住居址は隅丸方形の平面形を呈し、径5.6m±程度の規模をもつと思われる。埋土は、水田耕作による攪乱をうけて不明なものとなっているが、Field Cardによれば、グライ層の直下は炭化材・焼土があり、その下は黒色土となっているという記述があるところから、少なくとも床面直上部を覆う最下層部には基本層序 Ic 層 upper に相当する黒色土層が埋積していたと考えられる。また、記載の際観察された炭火材・焼土の存在から、この住居址は焼失をうけたものかもしれない。

床面は平坦で軟弱なものとなっている。この住居址の柱穴は、P₁(径23cm±・深さ36cm±)・P₄(径20cm±・深さ18cm±)・P₆(径24cm±・深さ30cm±)・P₁₃(径20cm±・深さ14cm±)・P₂₆(径16cm±・深さ11cm±)など5個のピットで構成されると考えられる。柱穴配置は北東方向に主軸をもつ安定した五角形の形状を呈し、P₁—P₆・P₂₆—P₁₃が対になる関係にある。これらの柱穴のうち、P₁はRIV-1b・d・g・h住居址と、P₄はRIV-1b・g住居址と、P₆はRIV-1b・c・g・h住居址と共有関係にある。

壁は前段で述べたように部分的にしか検出されず、残存部での最大高は南壁6cm±・西壁5cm±を計る。炉は明瞭な形で検出されなかったが、床面中央部から検出された埋設土器やその周辺に認められる小ピット(P_a・P_b・P_c・P_d・P_e・P_f・P_h)の分布からみて、本来的に土器埋設石囲い炉の形態を呈していたと思われ、これらのピットが抜き取りの痕跡を示すものであろうと考えられる。この部分の断面の観察によると、土器は床面から6cm±の深さまで埋設されており、下位には粘土質シルト層を12cm±の深さまで掘り凹めた摺鉢状の掘り方が認められる。

炉の内部や周辺からは現地性焼土の形成がほとんど認められなかった。

床面から検出されたピットのうち、P₂(径20cm±・深さ19cm±)・P₈(径38cm±・深さ17cm±)・P₁₂(径21cm±・深さ35cm±)・P₁₆(径55cm±・深さ18cm±)・P₁₇(径20cm±・深さ15cm±)・P₁₈(径25cm±・深さ11cm±)・P₁₉(径25cm±・深さ12cm±)・P₂₂(径23cm±・深さ9cm±)・P₂₃(径38cm±・深さ10cm±)・P₂₇(径37cm±・深さ9cm±)・P₃₀(径80cm±×45cm±・深さ8cm±)など11個のピットの性格については明らかではないが、P₁₆およびP₃₀は位置および規模などにおいて炉の掘り方と同じようなあり方を示しており、あるいは古期の住居址7棟いずれかの炉の痕跡を残すものかもしれない。埋設土器以外に出土遺物はない。

この住居址は検出状況からRIV-1住居址群の中で最も新期の住居址と考えられるが、他の7棟のどの住居址を切るものであるか明らかではない。

RIV-1b 住居址 (図版87b・88a・136d ; 写真図版115b・182de)

この住居址の柱穴は、P₁・P₄・P₆・P₁₄(径18cm±・深さ18cm±)・P₂₅(径25cm±・深さ32cm±)

など5個のピットで構成される。柱穴配置は北東の方向に主軸をもつ五角形を呈し、 P_1 — P_6 ・ P_{25} — P_{14} がそれぞれ対になる配置を示す。これらの柱穴のうち、 P_1 はRIV—1 a・d・g・h 住居址と、 P_4 はRIV—1 a・g 住居址と、 P_6 はRIV—1 a・c・g・h 住居址と、 P_{25} はRIV—1 h 住居址と共有関係にある。

この住居址はRIV—1 住居址群にあって、RIV—1 a 住居址より古期の住居址と捉えられるが、他の6棟との新旧関係については明らかではない。

RIV—1 c 住居址 (図版87b・88a・136d ; 写真図版115b・182de)

この住居址は、 P_3 (径20cm±・深さ20cm±)・ P_6 ・ P_{11} (径27cm±・深さ13cm±)・ P_{24} (径20cm±・深さ22cm±)・ P_{29} (径20cm±・深さ16cm±) など5個の柱穴で構成される柱穴配置をもつと考えられる。この柱穴配置は北東に主軸を有し、 P_{29} — P_6 ・ P_{24} — P_{11} がそれぞれ対になる五角形の形状を呈する。これらの柱穴のうち、 P_3 ・ P_{24} はRIV—1 d 住居址と、 P_6 はRIV—1 a・b・g・h 住居址と共有関係にある。

この住居址はRIV—1 住居址群の中で、RIV—1 a 住居址より古期の遺構と考えられるが、他の6棟との新旧関係については明らかではない。

RIV—1 d 住居址 (図版87b・88a・136d ; 写真図版115b・182de)

この住居址の柱穴は、 P_1 ・ P_3 ・ P_{10} (径35cm±・深さ28cm±)・ P_{24} ・ P_{28} (径23cm±・深さ12cm±) など5個から構成されると考えられる。配置をみると、南南西と北北東を結ぶ方向に主軸を有し、これを挟んで P_{28} — P_3 ・ P_{24} — P_{10} とそれぞれ対になる位置関係にあり、五角形の形状を示す。これらの柱穴をみると、 P_1 がRIV—1 a・b・g・h 住居址と、 P_3 がRIV—1 c 住居址と、 P_{10} がRIV—1 g 住居址と共有関係にある。また、 P_{24} はRIV—1 c 住居址と、 P_{28} がRIV—1 e~g 住居址と共有しあい、全部の柱穴が群を構成するいずれかの住居址と共有する状況にある。

新旧関係についてみれば、この住居址はRIV—1 a 住居址より古期に位置づけられるが、他の6棟との関係については不明なものとなっている。

RIV—1 e 住居址 (図版87b・88a・136d ; 写真図版115b・182de)

この住居址の柱穴は、 P_5 (径30cm±・深さ22cm±)・ P_9 (径33cm±・深さ21cm±)・ P_{15} (径40cm±・深さ17cm±)・ P_{21} (径25cm±・深さ10cm±)・ P_{28} など5個のピットで構成されると考えられる。配置をみれば、南側に主軸をもつ五角形の形状を呈し、 P_{28} — P_5 ・ P_{21} — P_9 がそれぞれ対になる配置を示している。これらの柱穴のうち、 P_5 ・ P_{15} はRIV—1 f・h 住居址と、 P_{21} はRIV—1 h 住居址と、 P_{28} はRIV—1 d・f・g 住居址と共有関係にある。

この住居址はRIV—1 a 住居址より古期の住居址と考えられるが、他の6棟との新旧関係については明らかではない。

RIV—1 f 住居址 (図版87b・88a・136d ; 写真図版115b・182de)

この住居址に伴う柱穴は、 $P_5 \cdot P_7$ (径15cm±・深さ18cm±)・ $P_{15} \cdot P_{20}$ (径23cm±・深さ22cm±)・ P_{28} など5個のピットからなると考えられる。柱穴配置は、南側に主軸をもつ五角形の形状を呈し、 $P_7-P_{20} \cdot P_5-P_{28}$ がそれぞれ対になる位置関係を示す。これらの柱穴のうち、 $P_5 \cdot P_{15}$ はRIV-1e・h住居址と、 P_{20} はRIV-1g住居址と、さらに P_{28} はRIV-1d・e・g住居址と共有する関係にある。

新旧関係についてみれば、この住居址はRIV-1a住居址よりは古期の遺構と考えられるが、他の6棟との関係については明らかではない。

RIV-1g住居址 (図版87b・88a・136d；写真図版115b・182de)

この住居址は、 $P_1 \cdot P_4 \cdot P_6 \cdot P_{10} \cdot P_{20} \cdot P_{28}$ などの柱穴で構成される六角形の配置を示すものと考えられる。この柱穴の中で、 $P_1-P_6 \cdot P_{28}-P_{10}$ とそれぞれ対になる位置関係を示している。6個の柱穴のうち、 P_1 はRIV-1a・b・d・h住居址と、 P_4 はRIV-1a・b・g住居址と、 P_6 はRIV-1a～c・h住居址と共有関係にある。また、 P_{20} がRIV-1f住居址と、 P_{28} もRIV-1d～f住居址と共有する関係にあり、すべての柱穴が群を構成する他の住居址のいずれかと共有する状況にある。

この住居址はRIV-1a住居址よりは古期の住居址と考えられるが、他の6棟との新旧関係は明らかではない。

RIV-1h住居址 (図版87b・88a・136d；写真図版115b・182de)

この住居址の柱穴は、 $P_1 \cdot P_5 \cdot P_6 \cdot P_{15} \cdot P_{21} \cdot P_{25}$ など6個のピットで構成されると考えられる。配置を見ると、 P_1 と P_{15} を結ぶ南北方向に主軸をもち、これを挟んで $P_{25}-P_5 \cdot P_{21}-P_6$ とそれぞれ対になる安定した六角形の形状を呈する。これらの柱穴のうち、 P_1 はRIV-1a・b・g住居址と、 $P_5 \cdot P_{15}$ はRIV-1e・f住居址と、 P_6 はRIV-1a・b・c・g住居址と共有関係にある。また、 P_{21} はRIV-1e住居址と、 P_{25} もRIV-1b住居址と共有関係にあり、RIV-1d・g住居址と同様に群を構成する住居址のいずれかと共有する状況にある。

この住居址はRIV-1a住居址より古期の住居址と捉えられるが、残る6棟との新旧関係は明らかではない。

RIV-2住居址群 (図版89a・136f；写真図版116a・182f・183a)

水田面グライ層下から直接検出された31個のピット群と1基の炉および弧状の残存状況を示す一条の壁溝についてそれぞれの位置関係から検討したところ、これらのピット群や炉および壁溝が位置する範囲内には少なくとも4棟の住居址が重複する状況で存在することがわかった。そこで、ここではこれらの遺構をまとめてRIV-2住居址群として扱い、それぞれの住居址をRIV-2a住居址、RIV-2b住居址、RIV-2c住居址、RIV-2d住居址と呼ぶことにする。

出土遺物がなく時期決定資料にかけるため、4棟の住居址の時代・時期については明らかではないが、隣接して検出されたRIV-1住居址群や炉の形態を参考にすると、縄文時代晩期に位置づけられると思われる。重複する4棟の住居址に伴う埋土や壁は水田を作る際の削削により欠くため、具体的な新旧関係を把握できないが、少なくとも同時に検出された炉および壁溝は新期の住居址と共伴関係にあると考えられる。炉周辺の床面は軟質で平坦な状況を呈する。

検出された炉の周辺には7個の安山岩壘円～垂角礫が埋置されており、表面には火熱をうけた赤色変化が認められている。このことから、この炉は石囲い炉の形態をとるものと考えられる。炉断面の観察によれば、使用面は床面より2cm±低い部分にあって全体に凹んでいる。下位の粘土質シルト層は使用面から4cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。

ピット群が検出された範囲の東側にあって、これらのピットを取り巻くように弧状に認められる壁溝は平均幅15cm±・平均深度9cm±の規模をもち、部分的な残存状況を示している。また、壁溝の底面からは径12～24cm±・深さ7～20cm±の規模をもつピット群が検出されている。これらのピット群の性格については明らかではないが、壁溝と同位置的な連続性を示すところから壁柱穴的な性格をもつものではないかと推定される。

床面から検出されたピット群のうち、P₁（径30cm±・深さ16cm±）・P₂（径15cm±・深さ10cm±）・P₄（径17cm±・深さ29cm±）・P₉（径42cm±・深さ26cm±）・P₁₂（径21cm±・深さ33cm±）・P₁₄（径13cm±・深さ21cm±）・P₁₅（径20cm±・深さ15cm±）・P₁₆（径25cm±・深さ31cm±）・P₂₁（径17cm±・深さ19cm±）・P₃₀（径24cm±・深さ16cm±）など10個のピットの性格については不明なものとなっているが、これらのピットは存在が確認された4棟以外のさらに古期の住居址の痕跡を残すものかもしれない。以下、それぞれの住居址について記載することにする。

RIV-2a 住居址（図版89a・136f；写真図版116a・182f・183a）

この住居址の柱穴は、P₈（径16cm±・深さ23cm±）・P₁₀（径15cm±・深さ22cm±）・P₂₀（径24cm±・深さ16cm±）・P₂₄（径25cm±・深さ9cm±）・P₂₅（径28cm±・深さ14cm±）・P₂₆（径22cm±・深さ21cm±）・P₂₈（径22cm±・深さ10cm±）など7個のピットから構成されると考えられる。配置をみると、P₂₆とP₂₃の中点からP₂₀を結ぶ線上に主軸をもち、P₂₆—P₂₃・P₂₅—P₈・P₂₄—P₁₀がそれぞれ対になる安定した七角形の平面形を呈する。この住居址を構成する柱穴のうち、P₂₆・P₂₆はRIV-2b～d住居址と共有関係にある。群を構成する他の3棟との新旧関係については明らかではないが、検出された炉の位置がこの住居址のほぼ中央部に位置するところから、あるいはこの住居址が4棟中新期に位置づけられるかもしれない。

RIV-2b 住居址（図版89a・136f；写真図版116a・182f・183a）

この住居址の柱穴は、P₃（径20cm±・深さ14cm±）・P₆（径40cm±・深さ21cm±）・P₁₁（径28cm±・深さ24cm±）・P₁₇（径23cm±・深さ25cm±）・P₂₃（径21cm±・深さ38cm±）・P₂₅・P₂₆・P₂₉

(径27cm±・深さ49cm±)・P₃₁(径17cm±・深さ13cm±)など9個のピットで構成されることが考えられる。柱穴配置は、北西の方向に主軸をもち、この主軸を挟んで、P₂₉—P₃₁・P₂₆—P₃・P₂₅—P₆・P₂₃—P₁₁がそれぞれ対になる安定した九角形の平面形を呈する。これらの柱穴のうち、P₁₁・P₃₁はRIV—2c住居址と、P₂₅・P₂₆はRIV—2a・c・d住居址と、P₂₉はRIV—2d住居址と共有する関係にある。群を構成する、RIV—2a住居址やRIV—2c住居址およびRIV—2d住居址との新旧関係については明らかではない。

RIV—2c住居址(図版89a・136f;写真図版116a・182f・183a)

この住居址の柱穴は、P₅(径21cm±・深さ19cm±)・P₇(径12cm±・深さ12cm±)・P₁₁・P₁₉(径20cm±・深さ22cm±)・P₂₂(径26cm±・深さ53cm±)・P₂₅・P₂₆・P₂₇(径25cm±・深さ18cm±)・P₃₁など9個のピットで構成されることが考えられる。柱穴配置はP₂₇とP₃₁を結ぶ中点からP₁₉を通る線上に主軸をもつ九角形の平面形を呈し、主軸を挟んでP₂₇—P₃₁・P₂₆—P₅・P₂₅—P₇・P₂₂—P₁₁とそれぞれ対になる対応関係を示している。これらの柱穴のうち、P₅・P₇はRIV—2d住居址と、P₁₁・P₃₁はRIV—2b住居址と、P₂₅・P₂₆はRIV—2a・b・d住居址と共有する関係にある。RIV—2a住居址、RIV—2b住居址、RIV—2d住居址との新旧関係については明らかではない。

RIV—2d住居址(図版89a・136f;写真図版116a・182f・183a)

この住居址の柱穴は、P₅・P₇・P₁₃(径18cm±・深さ21cm±)・P₂₅・P₂₆・P₂₉など6個から構成されることが考えられる。柱穴配置はP₂₉とP₁₃を結ぶ線上に主軸をもつ六角形の平面形を呈する。この主軸を挟んで、P₂₆—P₅・P₂₅—P₇が対になるあり方を示している。これらの柱穴のうち、P₅・P₇はRIV—2c住居址と、P₂₅・P₂₆はRIV—2a～c住居址と、P₂₉はRIV—2b住居址と共有する関係にある。この住居址は、群を構成する他の3棟の柱穴配置の比較からみて、規模的に最も小さい状況にあると認められるが、具体的な新旧関係については不明なものとなっている。

(佐藤 勝)

S III区

S III—1住居址(図版90a;写真図版116b・183b)

床面や炉および埋土からの出土遺物を欠くために、この住居址の所属時期は不明である。検出されている範囲の大半の部分を後出の住居址やフラスコ形ピット群に切られていることや、調査区域外にあたっているために南側部分が未調査であることなどから、この住居址の規模・形態についても不明なものとなっている。精査した範囲内には石囲い炉の残片がみられる。

埋土は、下底部付近に僅かに炭化物片を含む暗褐色土層の単層で構成されている。単層であるために、この住居址の土層断面図の作成は省略した。

床面はほぼ平坦で、比較的堅くしまる面となっている。柱穴は検出されていない。S III-2 住居址内に検出されている Px (径32cm±・深さ19cm±) は、両住居址の重複関係から推定して、あるいは当住居址に伴うものかもしれない。残存部での壁高は、東壁13cm±を計る。

石囲い炉は、粒径13cm±～22cm±の安山岩亜角礫を利用して構築されている。後出の S III-2 住居址に切られているために、この炉は径64cm±の半月形状の断片として残存していたにすぎない。精査された範囲内に関する限り、炉内には現地性焼土の形成は認められていない。

重複関係の面では、この住居址は、S III-2 住居址・S III-51 フラスコ形ピット・S III-52 フラスコ形ピットなどにより切られている。

S III-2 住居址 (図版 90a・137a ; 写真図版 117a・118a・183c)

床面上からの出土遺物はないが、複式炉の系統を引くとみられる炉の存在や埋土中の遺物から推定して、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。大半の部分が調査区域外に存在しているために、この住居址の規模・形態についてはよくわからない。精査がなされたのは、住居址北東半部の、6.1m±×2.6m±の範囲である。炉は住居址南東部の壁よりの位置に設けられている。また、床面上に分布していた炭化材・炭化物・焼土の存在から、この住居址は焼失を受けているものと推定される。

埋土は、褐色～暗褐色土層により構成されている。

床面はほぼ平坦で、全体的に比較的堅くしまる面となっている。柱穴状のピットは、P₁ (径40cm±・深さ78cm±)・P₂ (径26cm±・深さ78cm±)・P₃ (径23cm±・深さ42cm±)・P₄ (径14cm±・深さ53cm±)・P₅ (径23cm±・深さ25cm±)・P₆ (径21cm±・深さ19cm±) などが検出されている。これらのうちのいくつかは柱穴を構成しているものなのであろう。残存部での壁高は、北壁24cm±・東壁10cm±を計る。壁溝は設けられていない。

住居址本体部と同様に、炉も大半の部分が調査区域外に存在しているものと推定される。この炉については130cm±×60cm±の範囲が精査されているにすぎないが、その住居址内における位置および精査部分の形状から、これは複式炉の系統を引くものではないかと考えられる。調査がなされたのは、おそらく、複式炉の前庭部に相当する部分なのであろう。この部位は長軸130cm±の楕円形状のピットで、その底面は床面下20cm±低い位置に設けられている。このピット内には、ほぼ全面にわたって層厚14cm±の現地性焼土の形成がみられる。底面はきわめて堅くしまる面となっている。

住居の焼失に際して形成されたと考えられる炭化材・炭化物・焼土は、床面上の広範囲にわたってその分布がみられた。

重複関係の面では、この住居址はS III-1住居址を切っている。東壁よりに位置しているS III-53ピットとの新旧または共伴関係の詳細については不明である。

(高橋 文夫)

SIV区

SIV-1住居址群 (図版 91ab・137b; 写真図版 117b・118b・183e・184a・271ef)

炉および柱穴群の配置を検討した結果、この住居址群が検出された範囲内には、最低3棟の住居址がほぼ同位置に重複している事実が明らかにされた。新しいと考えられるものから順に、ここでこれらの住居址をSIV-1a住居址・SIV-1b住居址・SIV-1c住居址と呼称することとする。複式炉の系統を引くとみられる炉の存在から、これらの住居址はいずれも縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。住居址間の重複関係内では、柱穴群の一部に再利用形態の存在が知られているが、壁・床面・炉など、他の部位における再利用形態の状況については不明である。次に、各住居址毎に観察結果や属性などを記載することにする。

SIV-1a住居址 (図版 91ab・137b; 写真図版 117b・118b・183e・184a・271ef)

複式炉の系統を引くとみられる炉の存在や床面上の出土土器からみて、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。大形ピットに切られている床面中央部を除けば、全体に保存が良好な状態で検出されている。規模は径8.2m±×7.9m±を計り、平面形はほぼ円形の形態を示している。複式炉は住居址中央部よりやや南東方向に設けられている。

埋土はいくつかの層に細分されるが、基本的には褐色～暗褐色土層などにより構成されている。これらの埋土の中で、上位から下位にかけてブロック状・レンズ状に堆積し、同時に明瞭な層となって床面中央部を切る縄文時代後期に位置する大形ピット内に入りこんでいる暗灰色土層(i層)は、長者屋敷遺跡における基本層序のβ層に相当するもので、一本木火山礫の一部を構成する砂質の火山灰であると考えられる。

床面はほぼ平坦で、全体に比較的軟弱な面となっている。柱穴は、P₁(径48cm±・深さ76cm±)・P₂(径42cm±・深さ59cm±)・P₃(径29cm±・深さ68cm±)・P₄(径27cm±・深さ72cm±)・P₅(径60cm±・深さ86cm±)・P₆(径41cm±・深さ92cm±)・P₇(径40cm±・深さ84cm±)など、7個のピットで構成されるものであろう。これらのピットの中で、P₁はP₂とP₇を結ぶ線を底辺とする三角形の頂点にあたる位置に配され、他の群は、P₂-P₇の群も含めて、P₃-P₆・P₄-P₅と各群内で対になる配置関係を示している。また配置的な面からみて、P₁・P₆・P₇などの柱穴群は、下位のSIV-1b住居址に伴う柱穴群を同位置的に再利用して設けられているものではないかと考えられる。柱穴P₂の部位では、最古期に位置するSIV-1c住居址に伴

う柱穴 P₁₄ を明確に切る重複関係が認められている。住居址の壁高は、北壁27cm±・南壁14cm±・東壁22cm±・西壁24cm±を計る。壁溝は設けられていない。

住居址南東部に設けられている複式炉は、地床炉的な部分と埋置礫を伴う前庭部との2つの単位から成るもので、全長212cm±を計る。地床炉的な部分は径90cm±の円形ピットで、その使用面は床面よりも10cm±低い位置に設けられている。この使用面には径70cm±の範囲に現地性焼土が形成されている。使用面自体は全体にきわめて堅くしめる面となっており、その下位の火山灰層は10cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。この地床炉的な部分には、構成礫やその抜き取り痕などの存在は認められていない。前庭部は、平面形が凸辺長方形形状の形態を示すピットである。この前庭部には、地床炉的な部分との間に粒径18cm±～44cm±の安山岩類亜角礫が、また壁よりの末端部には粒径56cm±の安山岩亜角礫が、それぞれの下半部を10cm±～35cm±の深さで火山灰層中に埋めこまれる形で埋置されている。前庭部の底面は床面よりも26cm±低い位置に設けられていて、全体にきわめて堅くしめる面となっている。この底面上には径32cm±の現地性焼土の形成がみられ、その下位の火山灰層は6cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。

また、この複式炉前庭部内には、粒径8cm±～28cm±の流紋岩角～亜角礫や安山岩角～亜角礫などの礫群が集中して存在していた。これらの礫群はその在り方から考えて、複式炉やその前庭部に直接的に伴うものではなく、廃棄などによって二次的にここの部位にもたらされているものではないかと推定される。

この住居址内には上記の複式炉のほかに、床面中央部より西方に位置して、2ヵ所にわたって現地性焼土の形成が認められている。これらの焼土群は、下位の住居址群に伴うものである可能性も考えられるが、ここで一括して述べることにする。1つは径114cm±×44cm±の規模のものであり、床面中央部の大形ピットに切られている他の1つは、残存部で径50cm±×40cm±の規模のものである。これらの焼土はいずれも薄層で、その表面は軟弱なものとなっている。このような状況から、ここにみられる焼土群は、当住居址によって削剝を受けた下位住居址群に伴う焼土層の痕跡を示すものか、または、当住居址が焼失を受けているものとするれば、その焼失に際して形成されているものではないかと考えられる。

この住居址からの出土遺物としては、南壁沿いの床面上から得られた一括の深鉢形土器のほか、北壁近くの埋土下底部から得られた石棒などがある。また、西壁沿いから南壁沿いの床面上には、粒径10cm±～30cm±の安山岩類亜角礫群や炭化材・炭化物の集中的な分布がみられた。これらの炭化材・炭化物の存在から、この住居址は焼失を受けた可能性があると考えられるのかもしれない。

重複関係の面では、この住居址はSIV-1b住居址・SIV-1c住居址の全形に載る形でそ

れらを切っている。SIV-1 b 住居址との関係では、当住居址に伴う柱穴 P₁・P₆・P₇の部位で同位置的な再利用がなされていることが推定された。SIV-1 c 住居址との重複についてみれば、当住居址の柱穴 P₂は SIV-1 c 住居址に伴う柱穴 P₁₄を明確に切っている。さらに、当住居址の複式炉は、SIV-1 c 住居址に伴うと考えられる複式炉前庭部を明瞭に切りこんで、その地床炉的なピットや前庭部の一部が作り出されている。また住居址中央部では、縄文時代後期に位置するとみられる SIV-56ピットに切られる関係にある。

SIV-1 b 住居址 (図版 91ab・137b ; 写真図版 117b・118b・183e・184a・271ef)

この住居址では、柱穴群と複式炉の前庭部状の部分が痕跡的に検出されているにすぎない。したがって伴出遺物を欠くが、複式炉前庭部とみられる部分の残存や、後出の住居址にみられる当住居址に伴う柱穴群の再利用形態の存在などから、この住居址も時期的に縄文時代中期末葉期に位置づけられるものではないかと考えられる。個有の壁を消失していることから、規模や平面的な形態についてはわからないが、複式炉前庭部状のピットおよび柱穴配置の関係などからみて、この住居址は径6.5m以上の規模をもつものであろう。

柱穴は、P₁ (前掲)・P₈ (径32cm±・深さ60cm±)・P₉ (径42cm±・深さ34cm±)・P₁₀ (径34cm±・深さ46cm±)・P₁₁ (径35cm±・深さ52cm±)・P₆ (前掲)・P₇ (前掲)・P₁₂ (径32cm±・深さ80cm±) または P₂₇ (径46cm±・残存部深さ42cm±) など、8個のピットで構成されているものではないかと考えられる。P₁₂・P₂₇の部位では柱穴間の重複がみられるが、そのいずれが当住居址に所属するものか明らかではない。これらの柱穴の中で、P₇は P₆と P₁₂ または P₂₇を結ぶ線を底辺とする三角形の頂点にあたる位置に配され、他の群は、P₆-P₁・P₁-P₁₁・P₁₁-P₈・P₈-P₁₀・P₁₀-P₉とジグザグ状に配置されている。

複式炉の前庭部とみられる部分は柱穴 P₉と P₁₀との間にあって、それらの東側に張り出す形に設けられている。この部分は、径165cm±×74cm±の規模をもち、平面形が不整な楕円形状の形態を示しているピットである。底面は床面よりも31cm±低い位置に設けられている。観察が十分に行なわれていないために、この部位に対する貼り床の存否や底面自体の状況などについては詳細が不明なものとなっている。

重複関係の面では、この住居址は SIV-1 a 住居址および SIV-56ピットには切られている。SIV-1 c 住居址との新旧関係については正確にはよくわからないが、当住居址と SIV-1 a 住居址間にみられる柱穴群の再利用形態の存在から推定すると、この住居址は SIV-1 a 住居址と同様に、SIV-1 c 住居址よりも後出のものではないかと考えられる。

SIV-1 c 住居址 (図版 91ab・137b ; 写真図版 117b・118b・183e・184a・271ef)

この住居址も SIV-1 b 住居址と同様に、複式炉の前庭部とみられる部分と柱穴群が痕跡的に検出されているにすぎない。時期的には、これもおそらく縄文時代中期末葉期に位置づけら

れるものであろう。ここにみられる3棟の重複住居址群内では、時間的に最古期の段階を占めるものであると考えられる。個有の壁を消失していることから、規模や平面的な形態についてはよくわからないが、複式炉前庭部状のピットおよび柱穴配置の関係などからみて、この住居址は径6.2m以上の規模をもつものであろう。

柱穴は、P₁₃ (径25cm±・深さ40cm±)・P₁₄ (径32cm±・残存部深さ23cm±)・P₁₅ (径30cm±・深さ55cm±)・P₁₆ (径30cm±・深さ47cm±)・P₁₇ (径30cm±・深さ56cm±)・P₁₈ (径39cm±・深さ70cm±)・P₁₉ (径33cm±・深さ33cm±)など、7個のピットで構成されているものと考えられる。これらの柱穴は、P₁₃—P₁₉・P₁₉—P₁₄・P₁₄—P₁₈・P₁₈—P₁₅・P₁₅—P₁₇・P₁₇—P₁₆とジグザグ状に配置されている。また、柱穴P₁₄の部位では、SIV—1a住居址に伴う柱穴P₂に明確に切られる重複関係が認められている。

複式炉前庭部を構成するとみられる部分は、柱穴P₁₆とP₁₇のほぼ中間に設けられている。この部位は、大半の部分が床面中央部に位置する大形ピットとSIV—1a住居址に伴う複式炉に切られていて、径115cm±×115cm±の範囲で僅かに残存しているにすぎない。残存部の輪郭線からみて、この前庭部は不整な扇形状か楕円形状の平面的な形態を示していたものではないかと考えられる。この部位の底面はSIV—1a住居址床面よりも10cm±低い位置に設けられている。観察が十分に行なわれていないために、この部分に対する貼り床の存否や底面自体の状況については不明なものとなっている。

重複関係の面では、この住居址はSIV—1a住居址・SIV—56ピットには切られている。SIV—1b住居址との新旧関係についてはよくわからないが、SIV—1b住居址の項目内ですでに述べた理由から、この住居址はSIV—1b住居址に先行するものではないかと推定される。

以上、ここにみられる3棟の重複住居址について各項目ごとに述べてきた。この重複範囲およびその外縁部には、上記の住居址単位の柱穴群のほかに、さらに、P₂₀ (径31cm±・深さ48cm±)・P₂₁ (径14cm±・深さ31cm±)・P₂₂ (径27cm±・深さ65cm±)・P₂₃ (径18cm±・深さ27cm±)・P₂₄ (径20cm±・深さ不明)・P₂₅ (径28cm±・深さ43cm±)・P₂₆ (径25cm±・深さ41cm±)・P₂₈ (径38cm±・残存部深さ36cm±)・P₂₉ (径38cm±・深さ55cm±)・P₃₀ (径26cm±・深さ19cm±)・P₃₁ (径43cm±・深さ8cm±)・P₃₂ (径12cm±・深さ19cm±)・P₃₃ (径29cm±・深さ19cm±)などのピット群が検出されている。P₂・P₁₄やP₁₂・P₂₇の群と同様に、P₂₈・P₂₉の部位ではピット間の重複関係がみられる。ここに述べたピット群は、所属する住居址やその性格について不明なものとなっている。この中には、間仕切りの性格をもつものなども含まれているのかもしれない。

SIV—2住居址 (図版 90b・136b ; 写真図版 119a・183d・184b)

炉の形態およびそれに伴う埋設土器からみて、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけ

られるものであろう。北半部が削剝を受けていることから規模・形状の詳細は不明であるが、残存している壁の輪郭線から推定すると、この住居址は4.0m×3.5m前後の規模をもち、平面形は楕円形状の形態を示していたものではないかと考えられる。住居址中央部と推定される付近には直立埋設土器を内部に伴う石囲い炉が設けられている。残存している部分が少なく、埋土の層相については不明である。土層断面図の作成も省略している。

床面はほぼ平坦で、全体に比較的軟い面となっている。柱穴は、P₁(径24cm±・深さ33cm±)・P₂(径25cm±・深さ34cm±)・P₃(径23cm±・深さ21cm±)・P₄(径27cm±・深さ39cm±)・P₅(径24cm±・深さ25cm±)・P₆(径16cm±・深さ16cm±)・P₇(径16cm±・深さ12cm±)・P₈(径17cm±・深さ23cm±)など、8個のピットで構成されているものと考えられる。やや不整ではあるが、これらの柱穴群の中では、P₁—P₂・P₈—P₃・P₇—P₄・P₆—P₅の各群内に、それぞれ対になる関係が認められている。P₂とP₃の間にはP₉(径17cm±・深さ19cm±)があるが、このピットの性格については不明である。あるいは、これも柱穴を構成しているものかもしれない。上記のピット群のほかに、南壁沿いには深さ4cm±～6cm±の小ピットがみられる。住居址の壁高は、南壁4cm±・東壁9cm±を計る。壁溝は設けられていない。

内部に直立埋設土器を伴う石囲い炉は、粒径8cm±～24cm±の安山岩類亜角～亜円礫を利用して平面形が楕円形状の形態に構築されている。これらの構成礫は、床面下2cm±～14cm±の深さで、その下半部を火山灰層中に埋めこまれている。直立埋設土器は口頸部を欠く深鉢形土器で、その底部は床面下18cm±の深さに位置している。この土器および炉の掘り方内に充填した火山灰や構成礫の一部には火熱による赤色変化がみられる。

重複関係の面では、当住居址は西壁および南壁沿いでSIV—51フラスコ形ピットやSIV—3住居址群・SIV—4住居址と切り合っている。重複範囲の残存状態が不良であるためにフラスコ形ピットとの新旧は不明であるが、他の住居址群については、それらを切る関係にある。

SIV—3住居址群(図版 92ab・139bc; 写真図版 118c・119b・184cd・185ab)

このSIV—3住居址群が存在している範囲内には、新旧関係が明瞭な重複する3棟の住居址が検出されている。これらの中で、当住居址群を切るSIV—4住居址は、縄文時代中期末葉期に位置づけられる2個体の深鉢形土器で構成される炉を伴っている。このSIV—3住居址群の床面や炉からは、明確に時期決定のできる遺物は出土していないが、複式炉の存在やSIV—4住居址との重複関係からみて、これらもSIV—4住居址と同様に縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。当住居址群は、縮小的な重複関係を示す2棟の住居址から成っている。これらの住居址の間には、床面や柱穴の一部に再利用形態の存在がみられるほか、壁もほぼ全周にわたって共有関係にあるものではないかと考えられる。このような再利用形態の存在と、柱穴配置の基本的な類似性からみて、この2棟は同系列の住居址として位置づけられるもので

あろう。以下、それぞれについて記載する。

SIV-3a 住居址 (図版 92ab・139bc ; 写真図版 118c・119b・184cd・185ab)

この住居址は、SIV-3 住居址群内で古期の段階に位置づけられるものである。柱穴群と壁との間隔の安定性や両住居址間にみられる埋土の連続性からみて、ここに検出されている壁は当住居址と後出のSIV-3b 住居址に共有されているものと推定される。住居址の規模は径7.4m±×6.5m±を計り、平面形は樽形に近い形態を示している。東壁の一部は火山灰の層序を明らかにするためになされた深掘りによって破壊されている。住居址中央部より東方に位置して、1基の複式炉が設けられている。

柱穴は、P₁ (径43cm±・深さ59cm±)・P₂ (径34cm±・深さ70cm±)・P₃ (径32cm±・深さ46cm±)・P₄ (径28cm±・深さ53cm±)・P₅ (径33cm±・深さ45cm±)・P₆ (径40cm±・残存部深さ46cm±) など、6個のピットで構成されていて、やや不整ではあるが全体に六角形を呈する安定した配置を示している。これらの柱穴の中で、P₅ および P₆ の部位ではSIV-3b 住居址の側から同位置的な再利用または柱穴のつけ替えがあったものと推定される。ことに P₆ の部位では、SIV-3b 住居址に伴う柱穴 P₁₁ との重複関係が明瞭に示されている。壁高は、北壁28cm±・南壁30cm±・東壁22cm±・西壁31cm±を計る。また、北西壁に沿った範囲には、幅10cm±~18cm±・深さ5cm±~10cm±の壁溝が設けられている。しかしこの壁溝が当住居址に伴うものか、またはSIV-3b 住居址やSIV-4 住居址に伴うものかどうかなど、その詳細については不明である。

住居址中央部より東側の位置に設けられている複式炉は、地床炉的な部分と前庭部との2つの単位から成るもので、全長250cm±を計る。この炉の前庭部の一部はSIV-3b 住居址の柱穴 P₁₀ に切られているほか、炉内の全体にわたってSIV-3b 住居址の側からほぼ純粋な火山灰層が充填されていた。地床炉的な部分は床面よりも14cm±低い平坦な面で、中央部を中心とする範囲には径42cm±の規模の現地性焼土の形成がみられる。この部位の使用面は堅くしまるものとなっていて、下位の火山灰層は7cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。地床炉的な部分と前庭部との間には、粒径11cm±~33cm±の安山岩類垂角礫を使用した、いわゆる仕切り石状の施設が設けられている。これらの礫群は、地床炉的な部分の平坦面下、最大部で20cm±の深さまでその下半部を火山灰層中に埋めこまれている。前庭部は、地床炉的な部分の平坦面よりも5cm±~10cm±低い位置にあって、全体に浅皿状の形態を示している。この前庭部中央部から仕切り石状の構成礫にかけての範囲には、汚れ火山灰が充填された掘り方がみられる。この前庭部底面は全体にきわめて堅くしまる面となっている。

重複関係の面では、この住居址はSIV-2 住居址・SIV-3b 住居址・SIV-4 住居址により切られている。壁際に位置するSIV-53ピット・SIV-54ピット・SIV-55ピットなどとの

新旧または共伴関係の詳細については不明である。

SIV-3b 住居址 (図版 92ab・139bc ; 写真図版 118c・119b・184cd・185ab)

この住居址は、SIV-3 住居址群の中でも新しい段階に位置づけられるものである。柱穴群や炉のつけ替えはみられるが、基本的にはこの住居址は、先行する SIV-3a 住居址の壁や床面を再利用する形で構築されているものと考えられる。規模および平面的な形態は、SIV-3a 住居址のそれと一致しているものであろう。南東壁よりには 1 基の複式炉が設けられている。

埋土は、暗褐色～黒褐色土層群で構成されている。この埋土の中で、中央部の層準にみられる C 層は、長者屋敷遺跡における β 層に相当するもので、一本木火山礫の一部を構成する火山灰ではないかと考えられる。この住居址の埋土は、西半部の大半を SIV-4 住居址により削剝を受けている。

床面にはやや凹凸がみられる部分もあるが、全体的にはほぼ平坦で、比較的堅くしまるものとなっている。柱穴は、 P_7 (径24cm±・深さ61cm±)・ P_8 (径45cm±・深さ56cm±)・ P_9 (径40cm±・深さ65cm±)・ P_{10} (径44cm±・深さ67cm±)・ P_5 (前掲)・ P_{11} (径40cm±・深さ71cm±) など、6 個のピットで構成されているものと考えられる。これらの柱穴は、やや不整ながら、全体で六角形を形作る安定した配置を示している。これらの中で、 P_5 は同位置的に、当住居址と SIV-3a 住居址に共有される関係にあり、 P_{11} の部位では SIV-3a 住居址に属する柱穴 P_6 を明瞭に切っている状態が観察されている。さらに、 P_7 ・ P_8 ・ P_9 ・ P_{10} は、それぞれ縮小前の柱穴である P_1 ・ P_2 ・ P_3 ・ P_4 に対応する関係にあるものであろう。また P_{10} は、SIV-3a 住居址に伴う複式炉前庭部を切って作られている。

当住居址および SIV-3a 住居址内には、今まで述べてきた柱穴群のほかに、 P_{12} (径27cm±・深さ46cm±)・ P_{13} (径40cm±・深さ44cm±)・ P_{14} (径24cm±・深さ25cm±)・ P_{15} (径38cm±・深さ17cm±)・ P_{16} (径28cm±・深さ70cm±)・ P_{17} (径35cm±・深さ68cm±)・ P_{18} (径54cm±・深さ65cm±)・ P_{19} (径32cm±・深さ33cm±)・ P_{20} (径22cm±・深さ31cm±)・ P_{21} (径17cm±・深さ20cm±)・ P_{22} (径17cm±・深さ17cm±)・ P_{23} (径21cm±・深さ14cm±)・ P_{24} (径16cm±・深さ23cm±)・ P_{25} (径18cm±・深さ24cm±) などのピット群が検出されている。柱穴配置については明らかでないが、これらのピット群の中には SIV-4 住居址に所属するものもあるのかもしれない。そのようなものも含めて、これらのピット群の位置づけや性格についてはよくわからない。

南東壁より設けられている複式炉は石囲い部と前庭部の 2 つの単位から成るもので、全長 160 cm± を計る。石囲い部は、粒径 12cm±～34cm± の安山岩類亜角礫を利用して、平面的には半月形状の形態に構築されている。この部位の構成礫は、その下半部の僅かな部分を床面下に埋めこまれているにすぎない。石囲い部内にはきわめて薄い現地性焼土の形成が認められている。前庭部は凸辺長方形に近い形態を示すピットで、その底面は床面よりも 16cm± 低い位置に設け

られている。一部に掘りすぎがみられるが、この底面はほぼ平坦で、全体的にきわめて堅くしまる面となっている。前庭部の壁よりの部分には、粒径35cm±～50cm±の安山岩類亜角礫を使用した閉鎖的な施設がみられる。これらの構成礫は側縁部を上下にする形で、その下半部を前庭部底面下16cm±の深さで、汚れ火山灰層が充填された掘り方内に埋めこまれている。この前庭部には現地性焼土の形成は認められていない。また、底面上には土器破片や安山岩類亜角礫群などがみられたが、これらはその在り方から考えて、2次的にこの部位にもたらされているものであると推定される。

重複関係の面では、この住居址はSIV-3a住居址を切り、SIV-2住居址・SIV-4住居址には切られている。SIV-3a住居址との関係についてより詳しく述べれば、この住居址ではSIV-3a住居址の壁・床面や柱穴の一部を同位置的に再利用しながら、柱穴配置の上からは縮小的な方向に改築などの行為がなされているものと考えられる。また、SIV-3a住居址に伴う複式炉は、柱穴P₁₀の部分を除いて、当住居址の側から全体的に汚れ火山灰を充填して閉塞されている。他の遺構との関係について言えば、当住居址はSIV-53ピット・SIV-54ピット・SIV-55ピットなどと重複を示している。しかし、これらとの新旧および共伴関係などの詳細については不明である。

SIV-4住居址（図版 92ab・138a・139a；写真図版 119b・185c）

この住居址は、炉の形態およびその埋設土器からみて縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。SIV-3住居址群の西半部の埋土を削剝した範囲内にこの住居址が構築されているものと考えられるが、精査中に壁などを明瞭に検出することはできなかった。したがって、この住居址の規模や平面的な形態については不明である。ただ、北西から南東部にかけての土層断面の観察によれば、少なくともこの方向では、当住居址の規模は2.8m±を計るものであることが知られた。埋土の観察と両者間の床面の連続性からみて、この住居址はSIV-3住居址群の北西壁および西半部床面を再利用する形で作られているものと考えられる。

埋土の大半の部分は、焼土・炭化物を多く含む暗褐色土層により構成されている。北西壁際の範囲では、この層の下位に汚れ火山灰の堆積がみられた。これらの埋土はいずれも、SIV-3住居址群のそれとは不連続な関係を示している。

床面はSIV-3住居址群のものと同連続的で、やや凹凸のみられる部分もあるが全体的にはほぼ平坦で、比較的堅くしまる面となっている。柱穴配置については明らかではない。おそらく、SIV-3b住居址の項目内で記載した所属および性格が不明としたピット群の中には、当住居址に伴うものも含まれているのであろう。

炉は、深鉢形土器の胴体部下半部を利用した2個体の直立埋設土器で構成されている。これらの土器は、それぞれ床面下12cm±・14cm±の深さまで埋めこまれていて、その掘り方内には

汚れ火山灰が充填されていた。埋設土器の内部には、全体にわたって現在性焼土の形成がみられる。また、これらの北西縁部を取り巻く地点には、断続的ながら、82cm±×32cm±の範囲に現地性焼土が形成されている。この範囲は地床炉的な部分に相当しているのかもしれない。この部位の使用面はきわめて堅くしまるものとなっていて、その下位の火山灰層は4cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。

重複関係の面では、この住居址はSIV-3住居址群を切り、SIV-2住居址には切られる関係にある。SIV-53ピット・SIV-54ピット・SIV-55ピットなどとの新旧関係については不明である。

SIV-5住居址群（図版 93a・94ab・95ab；写真図版 120ab・122a・185d・186a）

柱穴配置を検討した結果、このSIV-5住居址群が検出された範囲内には最低5棟の住居址が存在していることが明らかになった。これらの中で、最新期に位置する住居址は南東壁よりに複式炉を伴っている。この住居址の床面や複式炉からは時期決定資料となる遺物は出土していないが、複式炉自体の存在からみて、当住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。この複式炉は見掛けの上からは1基に見えるが、前庭部内のいくつかの段差の存在から考えて、この部位で数次に亘る炉のつけ替えや同位置的な再利用が行なわれているものと推定される。古期住居址群に伴う炉の形態については明らかではないが、柱穴配置との関連性からみて、最新期のものと同様に、おそらくこの位置には複式炉の系統を引く炉が設けられていたものであろう。同位置における炉の配置と柱穴配置の基本的な類似性から考えると、この古期住居址群も時期的には縄文時代中期末葉期に位置づけられるのであろう。これらの住居址の柱穴群の間には再利用されている部分もみられる。以下、各住居址毎に観察結果を記載し、最後にこれらの住居址間にみられる重複関係について述べることにする。

SIV-5a住居址（図版 93a・94ab・95ab；写真図版 120ab・122a・185d・186a）

この住居址は、ここにおける重複群内ではもっとも新しい段階に位置づけられるものである。保存が良好な状態で検出されている。規模は径7.6m±×7.0m±を計り、平面形は樽形状の形態を示している。床面上の炭化材・炭化物や焼土の在り方からみて、この住居址は焼失を受けているものと推定される。

埋土は主に暗褐色土層群で構成されている。この埋土の中で、中央部から下部の層準を占めるd層は長者屋敷遺跡の基本層序のβ層に相当するもので、一本木火山礫の一部を構成する火山灰層であると考えられる。また、最下底部には、焼失に際して形成されたものが起源であると考えられる焼土・炭化材・炭化物が著しく多く含まれている。

床面には全体的に多数の凹凸がみられる。面は比較的堅くしまるものとなっている。柱穴は、P₁（径23cm±・深さ38cm±）・P₂（径28cm±・深さ47cm±）・P₃（径34cm±・深さ15cm±）・P₄（径

31cm±・深さ19cm±)・P₅(径23cm±・深さ31cm±)・P₆(径25cm±・深さ18cm±)・P₇(径21cm±・深さ不明)・P₈(径28cm±・深さ21cm±)・P₉(径18cm±・深さ23cm±)・P₁₀(径20cm±・深さ33cm±)など、10個のピットで構成されているものと考えられる。これらの中で、P₁—P₂・P₁₀—P₃・P₉—P₄・P₈—P₅・P₇—P₆の各群内に対になる配置関係がみられ、全体で十角形を形作る安定した形態を示している。実測図中に測定値が記入されていないために、P₇の深度は不明なものとなっているが、これがある程度の深さをもつものであることは写真から読み取ることができよう。この住居址の柱穴群と古期住居址群との関係についてみると、柱穴P₁₀はSIV—5c住居址に伴う柱穴P₂₂を明瞭に切っている。さらにP₅・P₆・P₇の部位では、SIV—5b住居址・SIV—5c住居址と柱穴を共有しあう関係が認められている。住居址の壁高は、北壁44cm±・南壁15cm±・東壁28cm±・西壁70cm±を計る。壁溝は設けられていない。

この住居址の南東壁よりに設けられている複式炉は、基本的に石囲い部と前庭部の2つの単位から成るもので、全長24.0cm±を計る。前述したように、柱穴配置との関連および前庭部内のいくつかの段差の存在からみて、古期住居址群に伴う炉もこの部位に設けられていたものであろう。この位置で、数次にわたって炉のつけ替えや再利用がなされていたものと考えられる。しかし、古期住居址群に伴う炉の大半の部分は最終的に当住居址の複式炉によって破壊を受けているのではないかとみられる。したがって、この住居址群に伴う炉についてはここでとりまとめ述べることにする。

この住居址の複式炉を構成する石囲い部は、粒径9cm±～30cm±の安山岩類亜円礫から成る。構成礫はその下半部を10cm±の深さで下位の火山灰層中に埋めこまれている。この構成礫の内部および北西外縁部は住居址床面よりも3cm±低い平坦な面となっていて、その面上には僅かながら現地性焼土の形成が認められている。現地性焼土のほぼ中央部に位置する構成礫の配置からみて、この石囲い部は、あるいは古期住居址の複式炉に伴う地床炉的な部分を切って構築されているのかもしれない。断面観察がよく行われていないために詳細は明らかではないが、この炉の前庭部は、古期住居址に伴う前庭部状のピットを汚れ火山灰で閉塞した上で作られているのではないかと考えられる。ここの底面は床面よりも10cm±低い位置に設けられており、全体に平滑で比較的堅くしまる面となっている。壁よりの前庭部末端には粒径18cm±～55cm±の安山岩亜円礫が床面下17cm±の深さまでその下半部を埋置されていて、その構成礫間の底面には僅かに現地性焼土が形成されている。この前底部内には、深鉢形土器の胴体部小破片とともに、粒径6cm±～20cm±の流紋岩や安山岩類の角～亜角礫が数多く密集する状態で存在していた。その在り方からみて、これらは2次的にこの部位にもたらされているものと推定される。

古期住居址に伴う炉の前庭部とみられる部分の底面は、上に述べた前庭部底面よりもさらに20cm前後の深さに設けられている。この個所には、それぞれが比高数cmを計る3つの段差の存

在が認められている。おそらく、その各々が古期住居址に伴う炉の残存を示しているものであろう。また、前庭部南西縁のくびれ部も古期住居址の炉の痕跡を示しているものなのかもしれない。

当住居址からの出土遺物としては、複式炉前庭部内の深鉢形土器小破片のほかに、北東壁よりの床面上から得られた剥片類がある。これは、床面の小さな凹部に10個ほどの剥片が集合した状態で発見されたもので、その在り方から、「剥片貯蔵」の形態を示しているものであると考えられる。また、埋土中からは石鏃・小型磨製石斧・石棒破片などが出土している。住居の焼失に際して生産されたと考えられる炭化材・炭化物・焼土は、主に壁沿いの範囲の床面上および埋土下底部内に分布している。住居址中央部付近では、それらの分布はあまりみられない。また、これらの分布とほぼ一致する範囲には、粒径8cm±~40cm±の流紋岩・安山岩類の角~円礫が数多く存在している。それらの礫群の在り方をみると、壁近くに位置するものは床面よりも浮き、床面中央部近くに位置するものは床面密着かそれにごく近い層準を占めるといふ出土状態を示している。

この住居址から出土した上記の礫群の観察によると、礫の表面には火熱による赤色変化の痕跡をとどめるものが多いという事実が知られた。このような事実と、これらの礫群が炭化材・炭化物・焼土と同じ層準に分布しているという状態からみて、これらは住居が焼失するに際して、直接的に火熱を受ける条件下にあったものと推定されよう。西壁よりの一部を対象とした断面図には、礫群・炭化材・炭化物・焼土などの関係がよく表われている。

SIV-5b 住居址 (図版 93a・94ab・95ab ; 写真図版 120ab・122a・185d・186a)

検出された柱穴群の配置からみて、この住居址の規模と形態はSIV-5a住居址のそれとほぼ同様のものであろう。柱穴は、P₁₁ (径18cm±・深さ40cm±)・P₁₂ (径18cm±・深さ23cm±)・P₁₃ (径16cm±・深さ20cm±)・P₅ (前掲)・P₆ (前掲)・P₇ (前掲)・P₁₄ (径21cm±・深さ21cm±)・P₁₅ (径28cm±・深さ53cm±)・P₁₆ (径20cm±・深さ33cm±) など、9個のピットで構成されているものと考えられる。これらの柱穴群の中では、P₁₆-P₁₂・P₁₅-P₁₃・P₁₄-P₅・P₇-P₆の各群内に対になる配置関係がみられる。またP₁₁は、P₁₆とP₁₂を結んだ線を底辺とする三角形の頂点にあたる位置に配されていて、全体で九角形を形作る安定した配置を示している。

重複関係の面では、P₁₅の部位でSIV-5d住居址に伴う柱穴P₂₉により切られている。そのほかのものについては、SIV-5a住居址の記載の中で触れているように、P₅・P₆・P₇は位置に他の住居址との再利用形態の存在がみられる。そのそれぞれについて述べると、P₅・P₆はSIV-5a住居址およびSIV-5c住居址と、P₇はSIV-5a住居址と共有される関係にある。また、P₁₂・P₁₅・P₁₆は、SIV-5a住居址の下位から検出されたものである。おそらく、これらのピットの存在する範囲に、SIV-5a住居址の側から貼り床が施されていたものであろう。

SIV-5c 住居址 (図版 93a・94ab・95ab; 写真図版 120ab・122a・185d・186a)

この住居址の柱穴は、P₁₇ (径20cm±・深さ31cm±)・P₁₈ (径20cm±・深さ31cm±)・P₁₉ (径24cm±・深さ16cm±)・P₅ (前掲)・P₆ (前掲)・P₂₀ (径24cm±・深さ33cm±)・P₂₁ (径22cm±・深さ40cm±)・P₂₂ (径24cm±・深さ32cm±) など、8個のピットで構成されているものと考えられる。これらの柱穴群の中で、P₁₇—P₁₈・P₂₂—P₁₉・P₂₁—P₅・P₂₀—P₆ の各群内に対になる配置関係がみられ、全体で八角形を形作る安定した構成を示している。この住居址の規模と形態についてはよくわからないが、SIV-5a 住居址にみられる柱穴配置と壁との関連性などを参考にして推定すると、同住居址と基本的に類似した柱穴配置をもつこの住居址は、7.5m×5.5m前後の規模をもち、樽形状の形態を示していたものではないかと考えられる。

重複関係の面では、柱穴 P₂₂ はSIV-5a 住居址に伴う柱穴 P₁₀ により切られている。前述したように、P₅・P₆ はSIV-5a 住居址とSIV-5b 住居址とに共有される関係にある。また、P₁₇・P₁₈・P₂₂ は、SIV-5a 住居址の下位から検出されている。おそらく、これらのピットは部分的に貼り床で閉塞されていたものであろう。

SIV-5d 住居址 (図版 93a・94ab・95ab; 写真図版 120ab・122a・185d・186a)

この住居址の柱穴は、P₂₃ (径35cm±・深さ73cm±)・P₂₄ (径29cm±・深さ55cm±)・P₂₅ (径35cm±・深さ61cm±)・P₂₆ (径34cm±・深さ23cm±)・P₂₇ (径25cm±・深さ27cm±)・P₂₈ (径28cm±・深さ25cm±)・P₂₉ (19cm±・深さ30cm±)・P₃₀ (径38cm±・深さ54cm±) など、8個のピットで構成されているものと考えられる。これらの柱穴群の中で、P₂₃—P₂₄・P₃₀—P₂₅・P₂₉—P₂₆・P₂₈—P₂₇ の各群内に対になる配置関係がみられ、全体で八角形を形作る安定した構成を示している。SIV-5c 住居址と同様に規模と形態についてはよくわからないが、SIV-5a 住居址にみられる柱穴配置と壁との関連性などを参考にして推定すると、同住居址と基本的に類似した柱穴配置をもつこの住居址は、7.5m×5.5m前後の規模をもち、樽形状の形態を示していたものではないかと考えられる。

重複関係の面では、柱穴 P₂₉ はSIV-5b 住居址に伴う柱穴 P₁₅ を切っている。そのほかの部位では、柱穴間の重複や再利用形態の存在はみられない。

SIV-5e 住居址 (図版 93a・94ab・95ab; 写真図版 120ab・122a・185d・186a)

この住居址の柱穴は、P₃₁ (径34cm±・深さ34cm±)・P₃₂ (径34cm±・深さ25cm±)・P₃₃ (径24cm±・深さ63cm±)・P₃₄ (径21cm±・深さ不明)・P₃₅ (径27cm±・深さ38cm±)・P₃₆ (径29cm±・深さ30cm±)・P₃₇ (径24cm±・深さ29cm±) など、7個のピットで構成されているものと考えられる。実測図中に測定値が記入されていないために、P₃₄ の深度は不明なものとなっている。写真から判断する限りは比較的浅いピットではないかとみられる。これらの柱穴群内では、P₃₇—P₃₂・P₃₆—P₃₃・P₃₅—P₃₄ の各群内に対になる配置関係が認められている。また P₃₁ は、P₃₇ と

P₃₂を結ぶ線を底辺とする三角形の頂点にあたる位置に配されている。これらの柱穴群は、全体で七角形を形作る安定した構成を示している。規模と形態の詳細については明らかではないが、SIV-5b住居址にみられる柱穴配置と壁との関連性を参考にして推定すると、同住居址と基本的に類似した柱穴配置をもつこの住居址は、6.5m×5.0m前後の規模をもち、樽形状の形態を示していたものではないかと考えられる。この住居址では、他の住居址に伴う柱穴との重複関係は認められていない。

以上、各住居址について個別的に記載してきた。今まで述べてきた各住居址に伴う柱穴群のほかに、このSIV-5住居址群内にはなお多くのピットが存在している。それらの中で、最新期に位置する住居址の床面を精査している時点で検出されているものとして、P₃₈（径22cm±・深さ21cm±）・P₃₉（径70cm±・深さ24cm±）・P₄₀（径20cm±・深さ44cm±）・P₄₁（径29cm±・深さ不明）・P₄₂（径33cm±・深さ58cm±）・P₄₃（径30cm±・深さ35cm±）・P₄₄（径35cm±・深さ17cm±）・P₄₅（径14cm±・深さ17cm±）・P₄₆（径29cm±・深さ不明）・P₄₇（径27cm±・深さ36cm±）・P₄₈（径19cm±・深さ47cm±）・P₄₉（径18cm±・深さ21cm±）・P₅₀（径22cm±・深さ21cm±）・P₅₁（径34cm±・深さ19cm±）などのピット群がある。また、その床面下からは、P₅₂（径23cm±・深さ40cm±）・P₅₃（径22cm±・深さ32cm±）・P₅₄（径35cm±・深さ19cm±）・P₅₅（径18cm±・深さ47cm±）・P₅₆（径17cm±・深さ不明）・P₅₇（径20cm±・深さ24cm±）・P₅₈（径35cm±・深さ20cm±）・P₅₉（径19cm±・深さ42cm±）・P₆₀（径27cm±・深さ24cm±）などのピット群が検出されている。SIV-5a住居址には明確な貼り床の存在は認められてはいないので、床面下から検出されたこれらのピット群については、部分的な形で閉塞されていたのではないかと推定される。上記のピット群の所属住居址や性格の詳細は不明である。

最後にSIV-5住居址群内の重複関係について述べる。柱穴配置と住居形態との関係からみて、もっとも安定的な在り方を示しているのはSIV-5a住居址の柱穴群である。この柱穴群を最新期のものと見做すことについては、まず問題がないであろう。柱穴間の重複関係やピットに部分的に施されている貼り床の存在から、SIV-5b住居址・SIV-5c住居址がSIV-5a住居址・SIV-5d住居址・SIV-5e住居址などに先行するものであることもほぼ確実であると考えられる。柱穴間の重複がみられないために、SIV-5b住居址とSIV-5c住居址の新旧関係についてはわからない。これは、SIV-5d住居址とSIV-5e住居址との関係についても同様である。したがって、SIV-5住居址群内の各住居址の変遷をまとめると、その過程は古いものから順に、SIV-5b住居址・SIV-5c住居址（または、SIV-5c住居址・SIV-5b住居址）→SIV-5d住居址・SIV-5e住居址（または、SIV-5e住居址・SIV-5d住居址）→SIV-5a住居址というものとなろう。

SIV-6住居址群（図版 96ab・139d；写真図版 121a・122b・186bd）

柱穴群の配置を検討した結果、この住居址群が検出された範囲内には最低3棟の住居址が存在していることが明らかにされた。新しいと考えられるものから順に、ここでこれらの各住居址をSIV-6a住居址・SIV-6b住居址・SIV-6c住居址と呼称することにする。これらの中で、SIV-6a住居址は床面上の出土遺物や複式炉の存在からみて、時期的に縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。住居址南東壁よりに設けられているこの複式炉は、見掛けの上からは1基に見えるが、精査によって複数の炉が上下に重複しているものであることが明らかにされた。このことから、古期住居址群も含めて、この部位で炉のつけ替えや同位置的な再利用がなされているものと推定される。柱穴配置の基本的な類似性や柱穴間の再利用形態の存在からみて、古期住居址群もSIV-6a住居址と同様に縄文時代中期末葉期に位置づけられるものと考えられる。柱穴配置との関連から判断して、SIV-6a住居址の複式炉が存在している部位には、それに先行して、古期住居址群の複式炉の系統を引く炉が設けられていたのであろう。以下、それぞれの住居址について記載する。

SIV-6a住居址 (図版 96ab・139d.; 写真図版 121a・122b・186bd)

全体にこの住居址は保存が良好な状態で検出されている。7.9m±×7.8m±の規模をもち、卵形状に近い形態を示している。

埋土は基本的に、黒褐色～暗褐色土層の3層によって構成されている。このうち、中央部の層準を占める暗灰色土層(b層)は長者屋敷遺跡の基本層序のβ層に相当するもので、一本木火山礫の一部を構成する火山灰層ではないかと考えられる。これらの層は、いずれも焼土・炭化物を多く包含している。

床面には全体的にゆるやかな凹凸があつて、比較的軟かな面となっている。柱穴は、P₁(径30cm±・深さ67cm±)・P₂(径30cm±・深さ73cm±)・P₃(径31cm±・深さ68cm±)・P₄(径40cm±・深さ48cm±)・P₅(径30cm±・深さ64cm±)・P₆(径32cm±・深さ31cm±)・P₇(径21cm±・深さ42cm±)・P₈(径35cm±・深さ56cm±)・P₉(径43cm±・深さ70cm±)・P₁₀(径35cm±・深さ81cm±)など、10個のピットで構成されているものと考えられる。これらの柱穴群の中で、P₁-P₂・P₁₀-P₃の各群内に対になる配置関係がみられる。そのほかの柱穴は、P₃-P₉・P₉-P₄・P₄-P₈・P₈-P₅・P₅-P₇・P₇-P₆とジグザグ状に配されている。また、古期住居址群の柱穴との関係を見ると、P₆はSIV-6c住居址とP₇はSIV-6b住居址と、P₈はSIV-6b住居址およびSIV-6c住居址と、それぞれ共有される関係にある。住居址の壁高は、北壁35cm±・南壁35cm±・東壁18cm±・西壁45cm±を計る。壁溝は設けられていない。

住居址南東壁よりに設けられている複式炉は石囲い部と前庭部の2つの単位から成るもので、全長220cm±を計る。石囲い部については明確ではないが、少なくとも前庭部は古期住居址群の炉を切って設けられている。石囲い部は、粒径10cm±～35cm±の流紋岩・安山岩類の亜角～亜円

礫を使用して、前庭部に対して開口するような形で平面形が馬蹄形状に構築されている。これらの構成礫はその下半部を床面下に埋めこまれている。この石囲い部の内外には層厚18cm±の現地性焼土の形成がみられる。この部位の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしまる面となっている。前庭部は、層位的にSIV—6b住居址に所属するとみられる炉の一部を削剝し、また一部には汚れ火山灰を敷設して作られている。ここの底面は床面よりも25cm±低い位置に設けられており、ほぼ平滑で堅くしまるものとなっている。この前庭部内の壁よりの部分には、粒径58cm±の安山岩亜角礫が、側縁を上下にする形でその下半部を40cm±の深さまで埋めこまれている。この礫の周囲の掘り方内には汚れ火山灰が充填されていた。

この炉の石囲い部と前庭部の境界付近には、粒径7cm±～30cm±の流紋岩・安山岩類の亜角～亜円礫が10個ほど集合した状態で存在している。しかし、これらはその在り方からみて直接この炉に伴うものではなく、2次的にこの部位にもたらされているものであると考えられる。また、前庭部内には異地性と推定される焼土や炭化物が多くみられた。

この住居址のほぼ中央部には、径102cm±×90cm±の規模の現地性焼土が分布している。この焼土の上面は比較的軟く、また断面観察によってきわめて層厚の薄いものであることが知られたので、これは当住居址に伴うものというよりも、あるいは古期住居址群のいずれかに伴う地床炉的な部分が削剝を受けた痕跡を示すものと考えられるのかもしれない。

この住居址からの出土遺物としては、土器片・磨製石斧・剝片類・台石などがある。土器片は、複式炉前庭部内や複式炉南側および住居址西壁よりの床面上から出土している。磨製石斧は、東壁沿いと南東壁沿いの床面上から得られている。また、東壁沿いと南壁際の床面上には「剝片貯蔵」の形態を示していると考えられる複数の剝片類の集合がみられた。台石と推定される粒径40cm±の安山岩亜角礫は、南壁よりの床面上に位置している。上記の遺物のほかに、床面上または床面から僅かに浮く層準からは、粒径10cm±～25cm±の安山岩類角～亜円礫がいくつか出土している。性格は不明であるが、南東壁際には粒径30cm±・43cm±の安山岩亜角礫を使用した2個の埋置礫がみられる。

SIV—6b住居址（図版 96ab・139d；写真図版 121a・122b・186bd）

この住居址の柱穴は、P₁₁（径29cm±・深さ15cm±）・P₁₂（径23cm±・深さ34cm±）・P₁₃（径26cm±・深さ20cm±）・P₁₄（径19cm±・深さ22cm±）・P₁₅（径35cm±・深さ38cm±）・P₇（前掲）・P₈（前掲）・P₁₆（径24cm±・深さ21cm±）など、8個のピットで構成されているものと考えられる。これらの柱穴の中で、P₁₁—P₁₂・P₁₆—P₁₃・P₈—P₁₄・P₇—P₁₅の各群内に対になる配置関係がみられる。また、P₇はSIV—6a住居址と、P₈はSIV—6a住居址およびSIV—6c住居址とそれぞれ共有される関係にある。

この住居址に伴う炉についてはよくわからないが、層位的にみれば、SIV-6a 住居址の複式炉前庭部の下位に位置する一連の異地性焼土が、少なくともこの住居址の炉の一部を構成する部分ではないかと推定される。5cm±の層厚を示す異地性焼土の下底部はピットの平滑な底面となっている。形状からみて、このピットは複式炉の前庭部を構成するものであろう。

SIV-6c 住居址 (図版 96ab・139d; 写真図版 121a・122b・186bd)

この住居址の柱穴は、P₁₇ (径22cm±・深さ29cm±)・P₁₈ (径23cm±・深さ56cm±)・P₁₉ (径24cm±・深さ36cm±)・P₂₀ (径21cm±・深さ34cm±)・P₂₁ (径16cm±・深さ46cm±)・P₆ (前掲)・P₈ (前掲)・P₂₂ (径33cm±・深さ35cm±)・P₂₃ (径14cm±・深さ46cm±)・P₂₄ (径42cm±・深さ70cm±) など、10個のピットで構成されているものと考えられる。これらの中で、P₁₇—P₁₈・P₂₄—P₁₉・P₈—P₆ の各群内に対になる配置関係がみられる。そのほかの柱穴は、P₁₉—P₂₃・P₂₃—P₂₀・P₂₀—P₂₂・P₂₂—P₂₁・P₂₁—P₈ とジグザグ状に配置されている。また、P₆ は SIV-6a 住居址と、P₈ は SIV-6a 住居址および SIV-6b 住居址とそれぞれ共有される関係にある。

SIV-6b 住居址のものと同様に、この住居址に伴う炉についても詳細はよくわからない。層位的にみれば、SIV-6a 住居址と SIV-6b 住居址の炉の下位から検出されたピット状の部分がこの住居址の炉の一部を構成しているのであろう。このピットの底面は、SIV-6a 住居址の床面下40cm±の深さに位置しており、中央部は凹凸のあるものとなっているが、他の部分は全体に平滑な面となっている。形状からみて、この部分はおそらく、複式炉の前庭部を構成しているものであろう。このピットには炭化物を多量に含む暗褐色～黒褐色土層が堆積している。その在り方から、この層は人為堆積相を示しているものと考えられる。SIV-6a 住居址と SIV-6b 住居址の炉はこの埋土を切って作られている。

以上、SIV-6 住居址群内の各住居址について個別的に記載してきた。この住居址群内には今まで述べてきた柱穴群のほかに、なお多くのピットの存在がみられる。これらの中で、SIV-6a 住居址の床面と同じレベルで検出されたものとして、P₂₅ (径36cm±・深さ43cm±)・P₂₆ (径30cm±・深さ42cm±)・P₂₇ (径28cm±・深さ66cm±)・P₂₈ (径19cm±・深さ19cm±)・P₂₉ (径31cm±・深さ73cm±)・P₃₀ (径30cm±・深さ49cm±)・P₃₁ (径30cm±・深さ57cm±)・P₃₂ (径67cm±・深さ23cm±)・P₃₃ (径21cm±・深さ50cm±)・P₃₄ (径15cm±・深さ18cm±)・P₃₅ (径42cm±・深さ30cm±)・P₃₆ (径48cm±・深さ30cm±) などのピット群がある。また、SIV-6a 住居址の床面下位から検出されたものとして、P₃₇ (径14cm±・深さ17cm±)・P₃₈ (径40cm±・深さ19cm±)・P₃₉ (径21cm±・深さ23cm±)・P₄₀ (径23cm±・深さ27cm±)・P₄₁ (径20cm±・深さ54cm±)・P₄₂ (径21cm±・深さ26cm±)・P₄₃ (径19cm±・深さ32cm±)・P₄₄ (径20cm±・深さ11cm±)・P₄₅ (径24cm±・深さ23cm±) などのピット群がある。SIV-6a 住居址には明確な貼り床の痕跡は認められていないので、この下位から検出されたピット群は、おそらく汚れ火山

灰で部分的に閉塞されていたものであろう。いずれにしろ、上記のピット群の所属住居址や具体的な性格などについては不明である。

最後に、この住居址群内の重複関係について述べる。住居形態と柱穴配置の安定性からみて、SIV-6a 住居址に伴うとした柱穴群が最新期に位置づけられるものであることについては、まず問題がないであろう。しかも、これらの柱穴群はすべてSIV-6a 住居址の床面と同じレベルで検出されている。問題は、SIV-6b 住居址とSIV-6c 住居址との新旧関係である。今までの記述では、SIV-6a 住居址の柱穴群と位置的に重複する部分が多いことから、SIV-6b 住居址はSIV-6c 住居址に先行するものとして捉えてきた。しかし、SIV-6b 住居址を構成する柱穴群の中で $P_{11} \cdot P_{12} \cdot P_{14}$ 、SIV-6c 住居址を構成する柱穴群の中で $P_{20} \cdot P_{21} \cdot P_{23}$ がそれぞれSIV-6a 住居址の床面下位から検出されており、いずれも閉塞されたピットの存在についてはSIV-6a 住居址に対しては対等な関係を示している。このことからすれば、SIV-6b 住居址とSIV-6c 住居址間の新旧関係については簡単には論じられないことになる。したがって、ここでは両住居址の今まで述べてきた関係が逆転する可能性もあることを示唆しておく。また、南壁沿いで検出されたSIV-57ピットとこの住居址群との新旧関係についてはよくわからない。

SIV-7 住居址 (図版 90cd・183bc ; 写真図版 121b・186c・187a)

埋設土器や埋土中の遺物からみて、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。一部に精査中の掘りすぎがみられたほかは、全体に保存が良好な状態で検出されている。3.8m±×3.5m±の規模をもち、平面形は楕円形に近い形態を示している。南東壁よりには1基の石囲い炉または複式炉が設けられていたとみられる。西壁際にはいわゆる埋甕がある。

埋土は主に、褐色～暗褐色土層により構成されている。住居址西半部の埋土下部には汚れ火山灰が堆積している。また、中央の下底部付近には炭化物が集中して分布していた。

床面は全体にほぼ平坦で、比較的堅くしまるものとなっている。柱穴は、 P_1 (径25cm±・深さ41cm±)・ P_2 (径20cm±・深さ26cm±)・ P_3 (径33cm±・深さ33cm±)・ P_4 (径22cm±・深さ26cm±)・ P_5 (径17cm±・深さ不明)・ P_6 (径22cm±・深さ28cm±)・ P_7 (径20cm±・深さ34cm±)など、7個のピットで構成されているものと考えられる。位置から判断して、 P_8 (径26cm±・深さ52cm±)も、あるいはこの住居址の柱穴群の一員なのかもしれない。実測図中に測定値が記入されていないために P_8 の深度は不明なものとなっているが、これがある程度の深さをもつものであることは写真から読み取ることができよう。これらの柱穴群には、 P_7 — P_2 ・ P_6 — P_3 ・ P_5 — P_4 の各群内に対になる配置関係がみられる。 P_1 は、 P_7 と P_2 を結ぶ線を底辺とする三角形の頂点にあたる位置に、また P_8 は住居址のほぼ中央部に、それぞれ配されている。この住

居址内には上記の柱穴群のほかに、P₉（径18cm±・深さ21cm±）・P₁₀（径33cm±・深さ53cm±）・P₁₁（径30cm±・深さ34cm±）・P₁₂（径21cm±・深さ16cm±）などのピット群が検出されているが、これらの具体的な性格については不明である。この住居址の壁高は、北壁37cm±・南壁25cm±・東壁16cm±・西壁27cm±を計る。壁溝は設けられていない。

住居址南東壁よりに位置している炉は残存部の状況からみて、石囲い炉または複式炉系統の形態を示していたものではないかと考えられる。径30cm±×26cm±の範囲で形成されている現地性焼土の周囲には、径6cm±～24cm±・深さ2cm±～4cm±の小ピットがいくつか存在している。これらのピット群はその在り方から考えて、構成礫の抜き取り痕を示しているものと推定される。この炉の使用面は床面のレベルとほぼ一致し、面はきわめて堅くしまるものとなっている。下位の火山灰層は2cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。また、使用面上には多くの炭化物や焼土粒の分布がみられた。

西壁沿いの床面下にはいわゆる埋甕が設けられている。この埋設土器は深鉢形土器を利用したもので、その下底部は床面下15cm±の深さまで埋めこまれている。この土器の大半の部分は割れて細片化している。掘り方内および土器内部には汚れ火山灰が堆積していた。

当住居址床面上の出土遺物としては、柱穴 P₃ に接して検出された台石と考えられる粒径26cm±の安山岩垂角礫がある。

重複関係について言えば、この住居址は単独で検出されたもので、他の遺構との切り合いは認められていない。

（高橋 文夫）

SV区

SV-1住居址（図版 97ab・138d；写真図版 122c・123a・187bc）

時期決定資料となるような土器などの出土遺物がないため時期を明確に捉えることはできないが、炉の形態や切り合い関係をもつ住居址のあり方からみて、この住居址は縄文時代中期中葉期～末葉期に位置づけられると推定される。遺構の南側約半分をSV-2住居址によって切られているほか、壁や床面の確認を目的とした試掘が行なわれたため検出状況はよくない。残存部から推定すれば、この住居址は径3.1m±を計り、円形を基調とする平面形を呈するものであったろうと考えられる。石囲い炉が1基設けられている。

残存部の埋土は汚れ火山灰優占の褐色土の単層で構成されている。床面は全体に軟質で若干の起伏が認められる状況にあるが、P₂付近だけは堅くて平坦なものとなっている。床面から検出されたピットは、P₁（径15cm±・深さ10cm±）・P₂（径30cm±・深さ12cm±）・P₃（径20cm±・

深さ 8 cm \pm)・P₄ (径18cm \pm ・深さ12cm \pm)・P₅ (径35cm \pm ・深さ17cm \pm) など 5 個を数えるが、これらのピットがどのような性格をもつものであるか明らかではない。壁高は残存部で、北壁18cm \pm ・東壁24cm \pm ・西壁20cm \pm を計る。

炉の周縁には、粒径10cm \pm ～18cm \pm の安山岩類亜角～亜円礫が埋置されている。炉の立ち割り断面の観察によれば、この炉は床面から 5 cm \pm 低いレベルに使用面をもち、炉内には炭化物を多く含む焼土の薄い層が形成されている。炉縁径は45cm \pm ×40cm \pm を計る。

出土遺物としては床面から粒径20cm \pm ×14cm \pm を計り、平坦面をもつ台石状の安山岩類亜円礫があるほか、埋土中から剥片が 1 点出土している。

この住居址はSV-1住居址に切られており、SV-1住居址よりは古期の住居址と考えられる。

SV-2住居址群 (図版 98a・99ab・138e ; 写真図版 123b・125a・187d・188a)

この住居址群は 7 棟の重複関係にある住居址からなり、検出された炉の形態や出土遺物および柱穴を共有しあう状況から判断して、縄文時代中期末葉期に位置づけられると考えられる。検出された住居形態と柱穴配置から最も新期に位置づけられる住居址をここではSV-2a住居址と呼び、さらに新旧関係の不明な他の 6 棟については、それぞれSV-2b住居址・SV-2c住居址、SV-2d住居址、SV-2e住居址、SV-2f住居址、SV-2g住居址と呼ぶことにする。SV-2a住居址の床面中央から南東壁に向けて複式炉が設けられているが、この炉の下位からは古期の炉が検出されている。存在が確認された住居址 7 棟が同じ北西の方向に主軸をもち、柱穴を部分的に共有しあう状況から判断すれば、古期の 6 棟に関してもこれらの炉が位置する部分で同位置的な共有関係を示し、複式炉系統の形態を呈するものと推定される。次に、各住居址ごとに記載し、そのあとで住居址群全体の先後関係や他の遺構との切り合い関係などについてふれる順序をとりたい。

SV-2a住居址 (図版 98a・99ab・138e ; 写真図版 123b・125a・187d・188a)

北壁付近に部分的な掘りすぎが及んでいるが、この住居址はほぼ良好な残存状況を示している。平面形は円形を呈し、6.4m \pm ～6.8m \pm の径を計る。南東壁付近に複式炉が設けられている。

埋土は、上部から暗褐色土層・暗灰色～褐色土層・黒褐色土層・汚れ風化軽石主体の褐色土層の 4 層で構成される。中位付近にブロック状の堆積をみせる b 層は、基本層序 β 層に相当し、一本木火山礫の一部をなす火山灰層と考えられる。下位の黒褐色土層中からは、ほぼ同じレベルで炭化材や焼土、および粒径10cm \pm ～32cm \pm を計る礫群が検出されている。

床面は基本層序III層に相当する黄橙色の風化軽石層を削平して形成されていて、全体に平坦で軟弱なものとなっている。この住居址の柱穴は、P₁ (径42cm \pm ・深さ13cm \pm)・P₄ (径20cm \pm ・深さ43cm \pm)・P₈ (径14cm \pm ・深さ66cm \pm)・P₁₂ (径19cm \pm ・深さ41cm \pm)・P₁₄ (径24cm \pm ・深

さ46cm±)・P₁₉(径16cm±・深さ14cm±)・P₂₇(径42cm±・深さ13cm±)など7個のピットで構成されたと考えられる。柱穴配置はP₁₂とP₈の midpoint からP₂₇を通る線上に主軸をもつ安定した七角形の平面形を呈し、P₁₉—P₁・P₁₄—P₄・P₁₂—P₈がそれぞれ主軸を挟んで対になる位置関係を示している。これらの柱穴のうち、P₁はSV—2 b・d～f住居址と、P₄・P₈はSV—2 b・f住居址と、P₁₂はSV—2 b・e・g住居址と、P₁₄はSV—2 b・d・e住居址と、P₁₉はSV—2 b・g住居址とそれぞれ共有する関係にある。このほか床面からは、P₃(径75cm±×26cm±・深さ19cm±)・P₅(径18cm±・深さ55cm±)・P₁₇(径17cm±・深さ22cm±)・P₁₈(径20cm±・深さ18cm±)・P₂₁(径17cm±・深さ12cm±)・P₂₃(径15cm±・深さ11cm±)・P₂₄(径17cm±・深さ9cm±)など7個のピットが検出されている。この中で、P₃は木根の攪乱によるものであり、P₁₇・P₂₁・P₂₃・P₂₄は西壁際に位置するところから、壁柱穴的な性格をもつのではないかと推定されるが、古期住居址に共伴する可能性も考えられ、P₅・P₁₈も含めて性格不明のものとなっている。

部分的や掘りすぎのため全体的なあり方を知ることはできないが、残存部の観察によれば、壁はまっすぐに近い立ちあがりを示している。壁高は、北壁61cm±・南壁17cm±・東壁31cm±・西壁55cm±を計る。

壁溝は、平均幅10cm±・深さ25cm±の規模をもって、東壁付近から部分的に検出されているが、同時にP₆(径56cm±・深さ39cm±)に切られる在り方を示している。このことから推定すると、この壁溝は当住居址に共伴するものではなく、SV—2住居址群の中でP₆を柱穴配置の一部としてもつSV—2 d・e住居址より古期の住居址に伴う可能性が高いと考えられる。

床面中央部から南東壁付近に設けられている複式炉は平面的には1基の炉の形態をとるが、断ち割りの結果、前庭部に敷設された風化軽石優占の火山灰を境として古期の炉と新期の炉が同位置で上下に重複するものであることがわかった。この住居址と共伴関係にあるのは新期の炉と考えられるが、古期の炉についてはこの住居址に先行する古期の住居址に伴うことも充分考えられるため共伴関係は明らかではない。両方の炉とも基本的には、南東壁に向けて長軸をもち、径240cm±×120cm±・深さ4cm±～7cm±を計る楕円形の浅い凹みの中に設けられており、明瞭な状況で確認された構成礫の抜きとり痕や残存する焼土および構成礫の存在から、二つの石囲い部と周囲に礫が埋置された前庭部の併せて3つの部位から構成されたと考えられる。

新期の炉は全長240cm±を計る。床面中央部から南東壁に向って、第1石囲い部・第2石囲い部・前庭部の順序に構築されている。第1石囲い部内には径40cm±の範囲に焼土が形成されている。使用面は床面よりも10cm±低い部分に認められ、下位の火山灰層はさらに6cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。現地性焼土が形成されている周縁には数個の抜きとり痕がみられる。第2石囲い部も第1石囲い部と同じレベルに使用面をもち、径56cm×40cmの範囲に現地

性焼土の形成がみられる。下位の火山灰層は使用面から10cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。第1石囲い部との境界付近および周辺にはやはり抜き取り痕が数個認められる。

前庭部は古期の炉の前庭部に敷設された層厚10cm±を計る火山灰層上面を利用するあり方を示している。この部位は平坦で、軟質な状況を呈し、周辺には第1石囲い部や第2石囲い部同様に多数の抜きとり痕が明瞭に検出されている。僅かではあるが、構成礫が残存している。これらの礫は粒径5cm±～12cm±の安山岩質亜角～亜円礫で、2cm±～4cm±下位まで埋置されている。前庭部の末端付近には粒径24cm±～36cm±を計る4個の安山岩質亜角礫が複式炉と床面を区切る状況で13cm±～16cm±下位に埋置された状況で残存している。これらの4個の礫は、前庭部の抜きとり痕が多く認められる部分から10cm±程度離れた部分にしっかり埋め込まれている状況にあるところから、この炉の末端部と床面を区切る、仕切り石のような性格をもつものではないかと思われる。この炉に伴う各部位の規模や抜きとり痕を参考にして推定すれば、第1石囲い部は84cm±×46cm±、第2石囲い部は70cm±×50cm±、前庭部は110cm±×80cm±を計るものと考えられる。

古期の炉も第1石囲い部・第2石囲い部・前庭部の順序で平面的には同じ系統の形態をもつと考えられる。このうち、第1石囲い部および第2石囲い部はそのまま新期の炉によって再利用されたものであろう。新期の炉をさらに掘り下げたところ、前庭部の下位から古期の炉の前庭部と認められる部分が検出された。この古期の炉の前庭部は炉全体を囲う楕円形の凹みの底面をさらに12cm下位に掘り凹めたピット状の形態を呈し、96cm±×80cm±の規模を計る。下底部付近には、粒径8cm±～10cm±の安山岩質亜角～亜円礫が12個残存しており、このうち現位置をとどめているとみられる礫は立ちあがり部分に3cm±の深さに埋置されている。また、第2石囲い部と前庭部の境には、粒径12cm±～14cm±を計る扁平な礫が、部位を仕切るように側縁を上下にして残存している。下底部は全体にしまったものとなっており、平坦な状況を呈する。新期の炉に伴って敷設された火山灰と下底部の間には、焼土を含む暗褐色土層が埋積している。

このように同位置で重複する状況にある古期と新期の炉の変遷過程についてまとめてみると、(i) 古期の炉の構築→(ii) 使用→(iii) 廃絶・構成礫の抜きとり→(iv) 暗褐色土層(c層)の形成→(v) 新期の炉の構築・前庭部に火山灰の敷設→(vi) 使用→(vii) 廃絶・構成礫の抜きとり、という過程をたどるものと考えられる。

炉の末端部から東壁に寄った壁際に粒径42cm±を計る扁平な礫が側縁を上下にして、床面から20cm±の深さまで埋置されている。1個だけの埋置で詳しくは判らないが、周辺部から検出された住居址の例などを参考にすると、あるいは「出入口」状施設に関連するものではないかと推定される。

出土遺物として、埋土から縄文時代中期末葉期に位置づけられる土器片のほかに、剝片が出

土している。調査上の手違いから、正確な実数を知ることができなく、散逸してしまったが、南西壁に寄った床面の2個所に剝片が集中して出土する状況が観察されている。この2ヶ所の出土状況は「剝片貯蔵」形態を示すものであろうと思われる。

この住居址と他の遺構との重複関係についてみると、北西壁付近でSV-1住居址を切り、北壁付近の床面をSV-51・52ピットに切られる在り方を示している。SV-1住居址との切り合い関係についてさらに詳しく述べれば、この住居址がSV-2住居址群の中で最終的な拡張形態を示すと捉えられることから、予め古期の住居址の段階で切る状況にあったものに加えて、北壁部分の拡張分だけ削剝を加えたものと考えられる。

SV-2b住居址（図版 98a・99ab・138e；写真図版 123b・125a・187d・188a）

この住居址の柱穴は、P₁・P₄・P₈・P₁₂・P₁₄・P₁₉・P₂₆（径30cm±・深さ75cm±）など7個のピットで構成されると考えられる。柱穴配置はP₁₂とP₈の midpoint からP₂₆を通る線上に主軸を有し、P₁₉-P₁・P₁₄-P₄・P₁₂-P₈が対になる配置を示す七角形の平面形を呈する。これらのピットのうち、P₁はSV-2a・d～f住居址と、P₄・P₁₉はSV-2a・g住居址と、P₈はSV-2a・f住居址と、P₁₂はSV-2a・e・g住居址と共有関係にある。また、P₁₄はSV-2a・d・e住居址と、P₂₆もSV-2d～g住居址と共有する関係にある。この住居址はSV-2a住居址よりは古期の住居址と思われるが、他の5棟の住居址との新旧関係は明らかではない。ただ、7個の柱穴のうち、6個までをSV-2a住居址に共有される状況にあることから、最終的に拡張形態をとるSV-2a住居址の直前に位置づけられる住居址ではないかと推定される。

SV-2c住居址（図版 98a・99ab・138e；写真図版 123b・125a・187d・188a）

この住居址の柱穴は、P₂（径34cm±・深さ63cm±）・P₇（24cm±・深さ49cm±）・P₁₃（径22cm±・深さ53cm±）・P₁₆（径29cm±・深さ78cm±）・P₂₀（径25cm±・深さ55cm±）・P₂₅（径36cm±・深さ36cm±）P₂₈（径27cm±・深さ55cm±）などの7個のピットで構成されると考えられる。柱穴配置はP₁₃とP₇の midpoint からP₂₅を通る線上に主軸をもち、P₂₀-P₂₈・P₁₆-P₂・P₁₃-P₇がこれをはさんで対になる安定した七角形の平面形を呈する。これらの柱穴のうち、P₂・P₇・P₂₈はSV-2g住居址と、P₁₃・P₁₆はSV-2f住居址と共有関係にある。

この住居址はSV-2a住居址より古期の住居址と考えられるが、他の5棟との新旧関係については明らかではない。柱穴配置だけに限ってみれば、SV-2住居址群の中で最も小規模な平面形を呈する。

SV-2d住居址（図版 98a・99ab・138e；写真図版 123b・125a・187d・188a）

この住居址の柱穴は、P₁・P₆（径56cm±・深さ39cm±）・P₉（径12cm±・深さ41cm±）・P₁₁（径26cm±・深さ56cm±）・P₁₄・P₂₂（径35cm±・深さ70cm±）・P₂₆・P₂₉（径33cm±・深さ76

cm±) など 8 個のピットで構成されると考えられる。柱穴配置は北西方向に主軸をもつ八角形の平面形を呈し、 $P_{26}-P_{29} \cdot P_{11}-P_9$ は対になるが、残るピットは $P_{22}-P_1-P_{14}-P_6-P_{11}$ と連続するジグザグの配置を示す。これらのピットのうち、 P_1 は SV-2 a・b・e・f 住居址と、 P_6 は SV-2 e 住居址と、 P_{11} は SV-2 g 住居址と、 P_{14} は SV-2 a・b・e 住居址と共有する関係にある。また、 $P_{22} \cdot P_{29}$ は SV-2 e・f 住居址と、 P_{26} も SV-2 b・e~g 住居址と共有関係をもつ。

この住居址は、SV-2 a 住居址より古期の住居址と位置づけられるが、他の 5 棟との新旧関係については明らかではない。柱穴配置を比較すると、この住居址は規模的に SV-2 e 住居址と近似したあり方を示しており、あるいは SV-2 e 住居址と住居址群全体の推移の中で直接先後関係をもつものかもしれない。

SV-2 e 住居址 (図版 98a・99ab・138e; 写真図版 123b・125a・187d・188a)

この住居址の柱穴は、 $P_1 \cdot P_6 \cdot P_{10}$ (径 15cm±・深さ 44cm±)・ $P_{12} \cdot P_{14} \cdot P_{22} \cdot P_{26} \cdot P_{29}$ など 8 個のピットで構成されると考えられる。柱穴配置は北西方向に主軸をもつ八角形の平面形を呈し、主軸をはさんで $P_{26}-P_{29} \cdot P_{22}-P_1 \cdot P_{14}-P_6 \cdot P_{12}-P_{10}$ と対になる安定した配置をみせる。これらのピットのうち、 P_1 は SV-2 a・b・d・f 住居址と、 P_6 は SV-2 b 住居址と、 P_{12} は SV-2 a・b・g 住居址と共有する関係にある。また、 $P_{22} \cdot P_{29}$ は SV-2 d・f 住居址と、 P_{26} も SV-2 b・d~g 住居址と共有関係にある。

この住居址は、SV-2 a 住居址よりも古期の段階に位置づけられるが、他の 5 棟との新旧関係は不明なものとなっている。柱穴配置を比較すると、この住居址は規模的に SV-2 d 住居址と近似する在り方を示しているところから、住居址群全体の中で SV-2 d 住居址と直接先後関係をもつ住居址であるかもしれない。

SV-2 f 住居址 (図版 98a・99ab・138e; 写真図版 123b・125a・187d・188a)

この住居址の柱穴は、 $P_1 \cdot P_4 \cdot P_8 \cdot P_{13} \cdot P_{16} \cdot P_{22} \cdot P_{26} \cdot P_{29}$ など 8 個のピットからなると考えられる。柱穴配置は北西に主軸を有する八角形の平面形を呈し、 $P_{26}-P_{29} \cdot P_{22}-P_1 \cdot P_{16}-P_4 \cdot P_{13}-P_8$ とそれぞれ対になる配置を示している。群と構成する他の住居址との柱穴の共有関係についてみれば、 P_1 は SV-2 a・b・d・e 住居址と、 $P_4 \cdot P_8$ は SV-2 a・b 住居址と、 $P_{13} \cdot P_{16}$ は SV-2 c 住居址と、 P_{22} は SV-2 d 住居址と共有する。また、 P_{26} は SV-2 b・d・e・g 住居址と、 P_{29} も SV-2 d・e 住居址と同様の関係にあり、8 個の柱穴全部が他のいずれかの住居址と共有する状況にある。この住居址は、SV-2 a 住居址よりも古期の住居址と考えられるが、他の 5 棟との新旧関係は判らない。

SV-2 g 住居址 (図版 98a・99ab・138e; 写真図版 123b・125a・187d・188a)

この住居址の柱穴は、 $P_2 \cdot P_7 \cdot P_{11} \cdot P_{12} \cdot P_{15}$ (径 18cm±・深さ 26cm±)・ $P_{19} \cdot P_{26} \cdot P_{28}$ など

8個のピットから構成されると考えられる。柱穴配置は西の方向に主軸をもつ八角形の平面形を呈し、 $P_{26}-P_{19}-P_{28}-P_{15}-P_2-P_{12}-P_{11}$ と結びあう。このうち、 $P_{19}-P_{26}$ および $P_{11}-P_7$ は対になる位置関係にあるが、あとはジグザグ配置を示す。8個の柱穴のうち、 $P_2 \cdot P_7 \cdot P_{28}$ はSV-2c住居址と、 P_{11} はSV-2d住居址と、 P_{12} はSV-2a・b・e住居址と、 P_{19} はSV-2a・b住居址と、 P_{26} はSV-2b・d～f住居址と共有関係にある。この住居址はSV-2a住居址よりも古期の住居址と考えられるが、他の5棟との新旧関係については明らかではない。

最後にもう一度、SV-2住居址群の変遷過程について推定すれば、各住居址に伴う柱穴がほぼ同一の面から検出されたこと、それらの間に共有関係が頻繁に認められること、縮小に伴うような貼り床が認められず、埋土観察でもそのような痕跡が観察されなかったことから、複式炉のつけ替えなども参考にして、この住居址群はしだいに拡張の方向を辿って変遷したものと考えられよう。したがって、柱穴配置との比較からみれば、古い順に列記してSV-2c住居址→SV-2g住居址→SV-2f住居址→SV-2e住居址→SV-2d住居址→SV-2b住居址→SV-2a住居址と考えられる。そして、このような変遷過程に応じて複式炉が同位置的に使用されたものと思われる。SV-2a住居址東壁付近で P_6 に切られる状況で検出された壁溝は、SV-2c住居址かSV-2g住居址のいずれかに共伴するものであろう。また、柱穴のあり方からみて、最終的にSV-2a住居址に切られる状況にあるSV-1住居址は、SV-2c住居址の構築段階ですでに遺構の大半を切られる関係にあると思われる。

SV-3住居址群（図版 100ab・140a；写真図版 124a・125b・187e・188b）

新期の住居址床面から検出されたピット群の分布を検討したところ、この住居址を南西壁付近の床面で切る関係にあるSV-55ピーカー形ピットは、同時に最低3個の柱穴状ピットを切って構築されたものと考えられる。このようにして床面と同時に削剝を受けて消失した3個のピットをそれぞれ $P_x \cdot P_y \cdot P_z$ と呼称する。床面から検出されたピット群と $P_x \cdot P_y \cdot P_z$ の3個のピットを含めて、それらの配置についてさらに検討を加えたところ、検出された床面の範囲内には少くとも3棟の住居址が重複する状況で存在したと考えられる。また、新期の住居址に伴う炉の形態や出土遺物を参考にすると、これらの住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられよう。存在が確認された3棟の柱穴配置と検出された床面や壁の状況とを比較し、貼り床が存在しなかったことや埋土の埋積状況などを参考にすると、3棟の住居址はしだいに拡張形態をとる変遷過程をもつと考えられる。

ここでは、3棟の住居址をSV-3住居址群として扱い、新しい順にSV-3a住居址、SV-3b住居址、SV-3c住居址と呼ぶことにする。以下、各住居址について記載する。

SV-3a住居址（図版 100ab・140a；写真図版 124a・125b・187e・188b）

この住居址は、検出された床面や壁の形態からSV-3住居址群の中で最も新期の住居址と認められ、最終的な拡張形態を示す住居址と考えられる。炉の形態や出土遺物から縄文時代中期末葉期に位置づけられよう。南西壁付近に部分的な掘りすぎが認められるが、良好な保存状態で検出された。平面形は、ほぼ円形を呈し、径4.7m±を計る。床面中央部から東南壁にかけて複式炉が1基設けられている。

埋土は上部から暗褐色土層・黒褐色土層・汚れ火山灰主体の褐色土層で構成される。中位の黒褐色土層中には僅かに炭化物が認められる。床面は南西壁付近でSV-55ピーカー形ピットによって切られているが、全体に平坦で堅くしまったものとなっている。柱穴は、P₁(径26cm±・深さ21cm±)・P₄(径25cm±・深さ37cm±)・P₆(径26cm±・深さ50cm±)・P₁₀(径26cm±・深さ56cm±)・P₁₃(径28cm±・深さ56cm±)など残存する床面から検出された5個のピットのほかに、SV-55ピーカー形ピットの構築の際に消失したと思われるP_y・P_zの2個を加えた7個のピットで構成されると考えられる。そして、柱穴配置はP₈とP₆の midpoint からP₁₂を通る線上に主軸をもつ七角形の平面形を呈し、P₁-P_z・P₄-P_y・P₆-P₈とそれぞれが主軸を挟んで対になる構成を示すものと思われる。P₁₂はP₁₃と同位置的なあり方を示し、P₁₃を切る状況にある。また、これらの柱穴のうち、P₆はSV-3b住居址と共有する関係にある。

壁高は、北壁35cm±・南壁19cm±・東壁11cm±・西壁40cm±を計る。炉は、床面中央部付近から土器埋設部・第1石囲い部・第2石囲い部の3つの部位からなる複式炉の形態を呈する。全長162cm±を計る。土器埋設部には底部付近を欠く土器が床面から6cm±の深さまで埋設されており、よく焼成をうけている。焼土は埋設土器の内外に形成されている。下位の火山灰は深さ16cm±まで火熱による赤色変化を被っている。第1石囲い部は粒径12cm±~38cmの安山岩類亜角~亜円礫を用いて構築されている。これらの礫は馬蹄形状に配置され、床面から6cm±~12cm±の深さに埋置されている。この部位の使用面は、床面から6cm±~10cm±低く、やや凹んだ状況を呈する。焼土は構成礫で囲われた全体の部分に形成されており、炭化物を混在する汚れた状況にある。下位の火山灰層は使用面から8cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。第1石囲い部と第2石囲い部の境には、粒径58cmの安山岩類亜角礫が部位と区切るように床面から22cm±の深さまで埋置されている。第2石囲い部は粒径13cm±~42cm±の安山岩類亜角~亜円礫を使用して構築されており、末端部は閉塞されたあり方を示している。これらの礫は9cm±~26cm±の深さまで埋置されている。石囲い内部は凹凸の認められる軟質なものとなっていて、焼土の形成は認められない。床面から5cm±低いこの面は、下位に10cm±~12cm±の厚さで敷設された風化軽石優占の火山灰の上面であることが断ち割りの結果わかった。このことから敷設された火山灰を境として上面と下面があるいは新期と古期の使用面と捉えられ、この複式炉が火山灰の敷設を境として同位置的な重複状況を示しているものかもしれない。

縄文時代中期末葉期に位置づけられる炉の埋設土器のほか、埋土中からほぼ同時期とみられ

る土器片が出土遺物として得られている。北東壁および南壁に寄った床面の二ヶ所から粒径10cm±~16cm±を計る安山岩類亜角礫が出土している。

重複関係について見れば、この住居址はSV-3住居址群の中で最も新期の住居址と捉えられ、SV-3b住居址の拡張形態を示すものと考えられる。また、北西壁付近の床面をSV-55ピーカー形ピットによって切られている。

この住居址の床面からは、P₃ (径16cm±・深さ14cm±)・P₇ (径20cm±・深さ17cm±)などのピットが検出されている。これらのピットの性格については明らかではないが、SV-3住居址群を構成する3棟の住居址以外のさらに古期の遺構の痕跡を示すものかもしれない。

SV-3b住居址 (図版 100ab・140a ; 写真図版 124a・125b・187e・188b)

この住居址の柱穴は、P₂ (径38cm±・深さ64cm±)・P₆・P₁₀ (径26cm±・深さ56cm±)・P₁₃ (径43cm±・深さ39cm±)など床面から検出された4個のピットに加え、SV-55ピーカー形ピット構築時に削剝を受けて消失したと思われるP_xピットの計5個から構成されると考えられる。柱穴配置はP₆とP₁₀の midpoint からP₁₃を通る線上に主軸をもつ安定した五角形の平面形を呈し、P₂-P_x・P₆-P₁₀が主軸を挟んで対になるあり方を示すものであろう。5個のピットのうち、P₂・P₁₃はSV-3c住居址と、P₆はSV-3a住居址と共有する関係にある。P₁₃はP₁₂と同位置的なあり方を示すが、中央部付近をこれに切られる関係にある。

柱穴配置からみて、この住居址はSV-3c住居址を長軸方向に拡張された形態を示し、さらにSV-3a住居址によって側縁部付近で拡張される中間形態にある遺構と捉えられよう。柱穴の共有関係からもやはり同じような推定が可能と思われる。また、炉についてもSV-3a住居址と同位置的なあり方を示すものと思われる。SV-3a住居址に伴う複式炉第2石囲い部貼り床下位の面はあるいはこの住居址に共伴する使用面かもしれない。

SV-3c住居址 (図版 100ab・140a ; 写真図版 124a・125b・187e・188b)

この住居址の柱穴は、P₂・P₅ (径24cm±・深さ71cm±)・P₁₁ (径28cm±・深さ39cm±)・P₁₃など床面から検出された4個のピットに加え、SV-55ピーカー形ピット構築時に削剝を受けて消失したと思われるP_xピットの計5個から構成されるものと考えられる。柱穴配置はP₁₁とP₅の midpoint からP₁₃を通る線上に主軸を有し、P_x-P₂・P₁₁-P₅が主軸を挟んで対になり、P₁₃を頂点とする安定した五角形の平面形を呈すると捉えられる。5個のピットのうち、P₂・P_x・P₁₃はSV-3b住居址によって再利用される共有関係にある。

SV-3住居址群の変遷過程がしだいに拡張される推移を示すものと推定されることや、柱穴配置とその共有関係から、この住居址はSV-3住居址群の中で最も古期の住居址と考えられ、SV-3b住居址によって主軸方向に拡張される重複状況にあると考えられる。炉についても、SV-3a住居址の場合と同位置的なあり方を示す複式炉系統の炉を所有するものと推

定される。

S V—4 住居址 (図版 100cd・140bcd ; 写真図版 124b・125c・188cd・189abcd)

この住居址は床面から出土した土器片や炉の埋設土器などを参考にすると、縄文時代中期末葉期に位置づけられよう。良好な保存状態で検出されている。平面形は東西方向に長軸を有する楕円形の形状を呈し、径4.3m±×3.9m±の規模を計る。複式炉系統の形態をもつ新期(1号炉)と古期(2号炉)の2基の炉が検出されている。埋土は上位から、黒褐色土層・暗灰色～褐色土層・暗褐色土層・黒褐色土層の4層で構成される。中位付近に堆積している暗灰色～褐色土層(b層)は、基本層序β層に相当し、一本木火山礫の一部をなす火山灰層と考えられる。最下位の黒褐色土層中には焼土・炭化物が比較的多く含まれている。床面は全体に平坦で、軟質な状況を呈する。床面中央部から南東壁にかけて部分的に貼り床が施されており、その下位から古期の炉が検出されている。

床面から検出された柱穴状ピットは、P₁(径39cm±・深さ46cm±)・P₂(径20cm±・深さ42cm±)・P₃(径25cm±・深さ22cm±)・P₄(径15cm±・深さ33cm±)・P₅(径30cm±・深さ35cm±)・P₆(径23cm±・深さ32cm±)・P₇(径20cm±・深さ28cm±)・P₈(径19cm±・深さ21cm±)・P₉(径20cm±・深さ34cm±)など9個を数える。柱穴配置の具体的なあり方については明らかではないが、住居址の形態から考えると、P₁・P₃・P₅・P₇・P₉など5個のピットに加えて、精査の段階で見落したと考えられる南東壁付近のピット(P_x)の計6個からなるものと推定される。また、P₂・P₄・P₆・P₈の性格については明らかではないが、貼り床の下位から検出された古期の炉を共伴するような古期の住居址の痕跡を留めるものかもしれない。

壁は全体にしっかりした立ちあがりを示している。壁高は、北壁42cm±・南壁35cm±・東壁4cm±・西壁77cm±を計る。

新期の炉は、床面中央部から東壁に向って構築されており、地床炉的な部分と石囲い部の2つの部位から構成される。全長150cm±を計る。地床炉的な部分には、60cm±×31cm±の範囲内に現地性焼土が薄く形成されている。使用面は床面と同じレベルにもち、下位の火山層は深さ1cm±～2cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。石囲い部は粒径6cm±～30cm±を計る流紋岩亜角礫6個を使用して、東側の一部が開口し、「コ」字状に近い形で構築されている。構成礫はその下半部を床面に埋置されていて、その大半が火熱によるものかブロック状に割れている。床面から4cm±～8cm±低く凹んだ部分に使用面が認められ、炭化物の混じった汚れた状況を呈する。下位の火山灰層は使用面からさらに6cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。

古期の炉は、床面中央部から南東壁付近に敷設された層厚2cm±を計る汚れ火山灰の下位から検出された。土器埋設部と地床炉的な部分の2つの部位からなり、全長73cm±を計る。土器

埋設部には直立埋設土器を中心に径35cm±の範囲に現地性焼土が形成されている。この部位の使用面は周辺の床面よりも8cm±低く凹んだ状況を呈し、埋設土器は底部を欠く状況でさらに8cm±下位に埋設されている。埋設土器の内部には焼土や炭化物を多く含む暗褐色土が充填されていた。断ち割り状況の観察によれば、この埋設土器は床面を掘り凹めたピットの下底部付近にそのまま埋設されたものと思われる。また、埋設土器を中心に形成された焼土の一端は、新期の炉を構成する地床炉的な部分と部分的に重複する状況にある。古期の炉に伴う地床炉的な部分には52cm±×35cm±の範囲に現地性焼土の形成が認められる。床面から3cm±～5cm±凹んだ面を使用面としており、下位の火山灰層はさらに10cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。

東壁付近に認められる「出入口」状施設は、粒径32cm±・35cm±を計る安山岩類亜角礫を長軸が平行となるように、下半部を埋置して設けられている。古期の炉に伴う埋設土器のほか、床面や埋土中からやはり縄文時代中期末葉期に位置づけられる土器片が出土している。また、古期の炉の周辺からは、新期の炉の構成礫と思われる流紋岩の亜角礫2個が認められている。

北壁付近に認められるSV-56ピットは、検出面が不明確なところから、この住居址とどのような関係にあるか明らかではない。したがって、この住居址と他の遺構との重複関係については不確定なものとなっている。

SV-5 住居址群 (図版 101ab・140e ; 写真図版 126a・128a・190ab)

検出された柱穴群の配置や段状に認められる床面のあり方について検討したところ、この住居址群が検出された範囲内には同じような柱穴配置をもった2棟の住居址が切りあって存在することが明らかになった。そこで、2棟のうち、新期と思われるものについてSV-5a 住居址・古期のものをSV-5b 住居址と呼ぶことにする。これらの住居址は、出土遺物や炉の形態を参考にすると縄文時代中期末葉期に位置づけられる。以下、それぞれの住居址について述べる。

SV-5a 住居址 (図版 101ab・140e ; 写真図版 126a・128a・190ab)

この住居址は不整な隅丸方形の平面形を呈し、3.6m±×3.2m±の規模をもつ。壁自体が軟質なため、北壁から西壁にかけて若干の掘りすぎが認められる。床面中央付近から東壁にかけて、複式炉が1基設けられている。

埋土は暗褐色土層・黒褐色土層・褐色土層の3層から構成され、全体に自然堆積相を示す。床面は平滑で、しまったものとなっているが、北壁付近に比べて南壁付近で15cm±低くなる緩かな傾きをみせる。この住居址の柱穴は、P₁ (径27cm±・深さ17cm±)・P₇ (径50cm±・深さ52cm±)・P₁₀ (径30cm±・深さ24cm±) など3個で構成されると考えられる。これらのピットはP₇—P₁を底辺とし、P₁₀を頂点とする二等辺三角形の平面形を呈する柱穴配置をみせる。3

個のピットのうち、P₁はSV-5b住居址と共有する関係にある。

壁は全体にしっかりした立ちあがりを示している。上部付近に掘りすぎが認められるため、正確な計測値を記載できないが、壁高は北壁44cm±（推定値）・南壁50cm±・東壁22cm±・西壁57cm±（推定値）を計るものと推測される。壁溝は認められなかった。

炉は、石囲い部・斜位埋設土器を伴う土器埋設部・埋置礫を伴う前庭部の3つの部位からなり、全長142cm±を計る。石囲い部は、粒径10cm±～33cm±の安山岩類垂円～垂角礫を使用して、東壁に向って開口するように構成されている。この部位の使用面は、周辺の床面から4cm±～5cm±低いレベルにあり、炭化物を僅かに載せる状態で現地性焼土が形成されている。下位の火山灰層は、さらに4cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。この部位に伴う構成礫は、7cm±～16cm±の深さまでその下底部を埋置されている。土器埋設部には、口縁部を欠く深鉢形土器が北西方向に開口して、最深部で床面から12cm±の深さに斜位に埋設されている。位置的には、石囲い部が平面的に東壁に向けて開口する部分を利用する在り方を示し、埋設土器を中心に30cm±×20cm±の範囲にわたって現地性焼土が形成されている。また、埋設土器内部には少量の焼土・炭化物を含む暗褐色土が充填されていた。

前庭部は土器埋設部に寄った部分に埋置礫を伴い、東壁に向って「ハ」字状に開口する平面形を呈する。埋置礫には粒径10cm±～20cm±を計る安山岩類垂角礫を用い、3cm±～5cm±の深さに埋められている。部内は堅くしまったものとなっている。この部位の末端部東壁際に浅皿状のピットP₆（径43cm±・深さ12cm±）がみられる。底面が堅く、位置的にも柱穴状ピットと捉えられないことから、この部位に何らかの関係をもつピットではないかと考えられる。

出土遺物としては、炉の埋設土器のほかに、やはり縄文時代中期末葉期に位置づけられる土器片が埋土から得られている。

この住居址は、北西壁付近でSV-5b住居址を切るあり方を示しており、SV-5b住居址に伴う床面の一部を残して削平を加え構築された住居址と考えられる。

SV-5b住居址（図版101ab・140e；写真図版126a・128a・190ab）

床面から出土した深鉢形土器からみて、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられる。遺構の大半をこの遺構より新期の住居址と捉えられるSV-5a住居址構築時の削平によって消失したものと考えられる。僅かに北壁と床面の一部が残存しているにすぎない。

SV-5住居址群に伴う埋土断面の観察によれば、この住居址の埋土は黒褐色～暗褐色土層で構成されている。残存する床面は平坦で、堅くしまったものとなっている。柱穴はP₁₁（径14cm±・深さ25cm±）だけ残存する床面から検出されているが、SV-5住居址群全体の配置から捉えて、これにP₁（径27cm±・深さ17cm+α）・P₆（径18cm±・深さ38cm+α）を加えた3個で構成されるものと推定される。P₆はSV-5a住居址床面よりも下位から検出された

ところから、SV-5a 住居址が営まれた段階では閉塞されていたものと考えられる。3個の柱穴のうち P₁ はSV-5a 住居址に再利用される共有関係を有する。

残存する部分の壁の立ちあがりはしっかりしている。壁高は54cm±（推定）を計るものと推測される。この遺構に伴う炉の存在については明らかではないが、推定される柱穴配置がSV-5a 住居址と同じ三角形配置を示し、同系列的な在り方を示すところから、SV-5a 住居址固有の炉と同じように、複式炉系統の炉を所有していたのではないと思われる。

前段で述べた深鉢形土器のほかに、埋土から数点の土器片が出土遺物として得られている。この住居址は、SV-5a 住居址に切られる関係にあり、SV-5 住居址群で古期の段階に位置づけられる。

以上、SV-5 住居址群を構成するSV-5a 住居址、SV-5b 住居址について記載してきたが、2棟が重複をみせる範囲内からは P₂（径15cm±・深さ22cm±）・P₃（径20cm±・深さ27cm±）・P₄（径20cm±・深さ57cm±）・P₈（径25cm±・深さ26cm±）・P₉（径22cm±・深さ20cm±）など5個のピットが検出されている。これらのピットの性格については明らかではないが、柱穴以外の付属施設（たとえば「出入口」状施設など）の痕跡をとどめるものかもしれない。

SV-6 住居址（図版 97cd・141a；写真図版 126b・128b・190c・272b）

床面出土遺物や炉の形態から、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられよう。壁および床面を構成する土層と埋土が近似した層相を示しており、そのため北壁付近に掘りすぎが認められたことや、木根による攪乱を部分的に受けていることなどから、検出状況はあまりよくない。平面形は東西方向に長軸を有する卵形～楕円形を呈し、3.2m±×2.8m±の規模を計る。床面中央付近から東壁に向けて複式炉系統の炉が1基設けられている。

埋土は基本的に汚れ火山灰主体の褐色土層と中位にレンズ状の堆積をみせる黒褐色土層の2つの層で構成される。黒褐色土層中には焼土および炭化物の含有が認められる。床面は全体にかたくしまったものとなっており、西壁付近に比べて東壁付近で15cm±（平均）低くなる緩やかな傾きをみせる。

床面から検出されたピットは、P₁（径11cm±・深さ7cm±）・P₂（径26cm±・深さ35cm±）・P₃（径15cm±・深さ14cm±）・P₄（径20cm±・深さ12cm±）・P₅（径24cm±・深さ40cm±）・P₆（径24cm±・深さ16cm±）・P₇（径18cm±・深さ17cm±）・P₈（径14cm±・深さ9cm±）・P₉（径15cm±・深さ9cm±）・P₁₀（径20cm±・深さ14cm±）など10個を数える。柱穴配置は、北壁付近の床面で検出に吟味を欠いたこともあって、不明なものとなっているが、検出された住居址の形態やピット群の規模および位置を考え合わせると、P₂・P₅・P₇・P₁₀ で部分的に構成される五角形あるいは六角形の平面形を呈するものと推定される。また、同時に検出されたそれ以外のピットは、同じ範囲内に重複する古期の住居址の痕跡をとどめるものかもしれない。

壁高は、北壁38cm±（推定）・南壁39cm±・東壁8cm±・西壁57cm±を計る。

炉は残存状況から推定して石囲い部と埋置礫を伴う前庭部の2つの部位で構成されるものと推定される。全長148cm±を計る。石囲い部と推定される部位の周辺には径7cm±～25cm±・深さ4cm±～8cm±の規模をもつピット状の凹みが12個検出されている。これらのピット状の凹みはこの部位を構成する礫の抜きとり痕と捉えられる。これらの抜きとり痕に囲われる状況で35cm±×30cm±の範囲に現地性焼土の形成がみられる。この焼土の上面（使用面）は床面と同じレベルにあり、下位に認められる摺鉢状の掘り方を埋める火山灰層は3cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。

前庭部は径60cm±×42cm±・深さ11cm±～23cm±を計る不整な楕円形の平面形を呈するピット（Pa）とその北壁付近に埋置された粒径45cm±を計る流紋岩亜角礫の存在から確認されている。石囲い部との境界付近の床面が非常に堅緻な状況を呈するところから、前庭部自体はこの床面を含めた一帯を指し、Paはその末端部に位置するものかもしれない。

北壁に寄った床面から縄文時代中期末葉期に位置づけられる小形の深鉢形土器が出土しているほか、埋土からも同時期とみられる土器片が出土している。この住居址を切る関係にある他の遺構との重複は認められないが、床面から検出されたピット群の分布状況から推定すると、この住居址に先行する古期の住居址が存在するのかもしれない。

S V-7 住居址群（図版 102abc・141b；写真図版 127ab・128c・190de・272c）

柱穴配置を検討した結果、検出された範囲内には2棟の住居址の存在することがわかった。2棟の住居址は、同位置的なあり方を示し、柱穴の一部を共有する状況にある。このような共有関係や新期の住居址から検出された炉の形態および出土遺物などを参考にすると、この住居址群は縄文時代中期末葉期に位置づけられよう。ここでは、2棟の住居址をS V-7 住居址群として扱い、新しいものからS V-7 a 住居址、S V-7 b 住居址と呼ぶ。以下、個々の住居址について記載する。

S V-7 a 住居址（図版 102abc・141b；写真図版 127ab・128c・190de・272c）

壁と埋土の見分けが困難なところから、全体に掘りすぎが認められる状況で検出された。このため形状や規模については明らかではないが、残存部から推定すると径4.6m±×4.0m±を計り、南北方向に長軸をもつ楕円形を呈すると考えられる。床面中央から南東壁に向けて複式炉が1基設けられている。

埋土は基本的に、暗灰色土層・暗褐色土層・黒褐色土層・褐色土層の4層で構成されている。上部に堆積している暗灰色土層は基本層序β層に相当し、一本木火山礫の一部を構成する火山灰であると考えられる。中位から下位の層準を占める暗褐色土層（e層）中からは炭化物と共に多量の土器片や礫群が遺構の中央部にかけて出土している。このような出土・分布状況から

みて、この層は下位の褐色土層（第1次埋没土）埋積後、遺物群や礫群で構成される「物」と炭化物を多く含む「土」との複合廃棄行為によって形成された人為堆積相を示すものと考えられる。部分的に木根による攪乱を受けているが、床面は全体に固くて平坦なものとなっている。

柱穴は、 P_1 （径18cm±・深さ18cm±）・ P_5 （径20cm±・深さ44cm±）・ P_{10} （径13cm±・深さ17cm±）・ P_{11} （径15cm±・深さ31cm±）・ P_{16} （径40cm±・深さ21cm±）・ P_{18} （径39cm±・深さ11cm±）・ P_{20} （径不明・深さ40cm±）など7個のピットで構成されると考えられる。柱穴配置は P_{11} と P_{10} の中点から P_{20} を結ぶ線上に主軸をもち、 P_{18} — P_1 ・ P_{16} — P_5 ・ P_{11} — P_{10} がそれぞれ対になる七角形の平面形を呈する。このうち、 P_1 はSV—7b住居址と共有して、これを再利用する在り方を示す。壁高は、残存部で北壁90cm±・西壁74cm±を計る。北西壁付近はオーバー・ハング状の形状を呈している。

炉は石囲い部とピット状に掘り凹められた前庭部からなる。全長192cm±を計る。前庭部末端付近には木根の攪乱によって形成されたと思われる不整形なピットが認められる。石囲い部は粒径9cm±～20cm±計る安山岩垂角～垂円礫を使用して楕円形状に構築されている。これらの構成礫はその下半部を床面から4cm±～9cm±の深さに下位の火山灰層に埋められている。礫の内側に認められる使用面は床面から2cm±～3cm±低いものとなっており、わずかな炭化材を載せる状況で現地性焼土が形成されている。下位の火山灰層は使用面から5cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。前庭部は径100cm±×52cm±・深さ5cm±～12cm±を計るピット状の凹みとなっていて、その底面には径5cm±～24cm±・深さ3cm±～7cm±の凹みが多く認められる。この小さな凹みは分布のしかたから、礫の抜きとり痕とも考えられるが、末端部に認められる木根の攪乱との関連も推定され性格は明らかではない。

床面の出土遺物には、炉付近や南東壁と推定される部分から出土した土器片のほかに、ボーラ・ストーンなどの石器がある。また、埋土から多量に出土した土器群の中には体部付近から口縁が三つに分かれる「三ッ口」状の小型土器が含まれている。

この住居址は、SV—7b住居址と同位置的なあり方を示す新期の住居址と捉えられ、南壁付近でSV—58ピーカー形ピットによって切られる重複関係にある。

SV—7b住居址（図版 102abc・141b；写真図版 127ab・128c・190de・272c）

この住居址の柱穴はSV—7a住居址床面から検出された P_{20} ・ P_2 （径19cm±・深さ27cm±）・ P_8 （径23cm±・深さ21cm±）・ P_{14} （径20cm±・深さ16cm±）・ P_{17} （径16cm±・深さ40cm±）など5個のピットで構成されると考えられる。このうち、 P_{20} はSV—7a住居址によって再利用される共有関係にある。柱穴配置はSV—7a住居址とほぼ同じ方向に主軸をもつ五角形の平面形を呈し、 P_{17} — P_2 ・ P_{14} — P_8 が対になる配置を示す。

この住居址は柱穴配置やその共有関係などからみて、SV—7a住居址と同位置的なあり方

を示す古期の住居址と考えられる。そのような点から推定すると、この住居址に伴う炉もSV-7a住居址の場合と同じような配置を示すものと思われ、あるいは再利用される状況を呈するものかもしれない。

以上、SV-7住居址群を構成する2棟の住居址について述べてきたが、新期と捉えられるSV-7a住居址の床面から、P₃ (径15cm±・深さ7cm±)・P₄ (径18cm±・深さ30cm±)・P₆ (径17cm±・深さ12cm±)・P₇ (径20cm±・深さ17cm±)・P₉ (径15cm±・深さ11cm±)・P₁₂ (径10cm±・深さ6cm±)・P₁₃ (径20cm±・深さ38cm±)・P₁₅ (径24cm±・深さ23cm±)・P₁₉ (径60cm±・深さ14cm±)など9個のピット群が検出されている。これらのピット群の性格については明らかではないが、分布状況や規模などから推定して壁柱穴的な性格をもつものかもしれない。

SV-8住居址群 (図版 103abc・141c ; 写真図版 129ab・131a・191ac)

検出された柱穴の配置を検討した結果、この住居址群は3棟の住居址で構成されると考えられる。3棟の住居址は同置位的な重複関係を示し、それぞれの柱穴群の大半が他の2棟と共有する関係にある。また、3棟の住居址が同じ方向に主軸を持つ近似した平面形を呈することを含めて考えれば、これらは同系列の住居址と考えられる。そして、新期の住居址からの出土遺物や炉の形態などを参考にすれば、いずれも縄文時代中期末葉期に位置づけられよう。

ここでは、検出された壁の輪郭線との適合性や柱穴の検出状況などから、新しい順にSV-8a住居址、SV-8b住居址、SV-8c住居址と呼び、以下各住居址ごとに記載することにする。

SV-8a住居址 (図版 103abc・141c ; 写真図版 129ab・131a・191ac)

比較的良好な保存状態で検出された。床面の北半部に集中して認められる炭化材や焼土の分布状況から、この住居址は焼失を受けたものと考えられる。平面形はほぼ円形を呈し、径4.8m±~5.0m±を計る。東壁寄りに複式炉が設けられている。

埋土は上部から暗褐色土層・暗灰色土層・黒褐色土層・褐色土層の4層で構成され、全体に自然堆積相を示す。中位付近に堆積している暗灰色土層(c層)は基本層序β層に相当し、一本木火山礫の一部を構成する火山灰と考えられる。

床面は平滑で、しまったものとなっているが、北壁付近に比べ南壁付近で23cm±低くなる緩やかな傾きをみせる。東壁付近に木根による攪乱を部分的に受けている。

この住居址の柱穴は、P₁ (径52cm±・深さ27cm±)・P₃ (径23cm±・深さ12cm±)・P₆ (径16cm±・深さ28cm±)・P₉ (径15cm±・深さ48cm±)・P₁₁ (径24cm±・深さ32cm±)・P₁₃ (径18cm±・深さ75cm±)・P₁₄ (径21cm±・深さ10cm±)・P₁₆ (径36cm±・深さ42cm±)・P₁₇ (径30cm±・深さ39cm±)・P₁₉ (径20cm±・深さ不明)など10個のピットで構成されると考えられる。柱穴配置

は、P₁₆—P₁₇・P₁₄—P₁₉・P₁₃—P₁・P₁₁—P₃・P₉—P₆がそれぞれ対になり、北西方向に主軸をもつ安定した十角形の平面形を呈する。これらのピットのうち、P₁・P₃・P₉・P₁₁・P₁₇・P₁₉はS V—8b住居址とそれぞれ共有する関係にある。

壁は全体にまっすぐに近い立ちあがりを示している。壁高は、北壁59cm±・南壁42cm±・東壁17cm±・西壁91cm±を計る。壁高は認められない。

東壁付近に位置する複式炉は、断ち割りの結果、古期・中期・新期の三期に渉る重複状況を示すものであることがわかった。いずれの炉も基本的には、地床的な部位と石囲い部の2つの部位からなるものであると推定される。以下、各期ごとに断面に則って構造的に述べる。

古期の炉は地床炉的な部位と石囲い部の2つの部位で構成される。地床炉的な部位は中期に形成された現地性焼土f層を斜位に載せる残存状況を示している褐色～明褐色土層(g層)と捉えられ、僅かに火熱による赤色変化を全体に受けている。石囲い部は構成礫埋置後敷設されたと思われる暗褐色土層(c層)上面を使用面としたと推定される。構成礫は中期の炉構築時までの間に抜きとられたとみられ、下位の火山灰層との層埋面にみられる凹凸がその痕跡を示すものではないかと思われる。

中期の炉は古期の炉と同様の構成をもつものと考えられる。地床炉的な部位の使用面は古期の使用面の痕跡を残すg層上位から、新期の炉に伴って敷設されたと思われる汚れ火山灰(e層)下位にかけて形成された現地性焼土(f層)上面と認められる。この使用面は周辺の床面よりも若干凹んだものとなっている。石囲い部使用面は下位の火山灰と古期の炉の使用面を挟んでさらに上位に敷設された堆積状況を示す明褐色土層(b層)上面と考えられる。断面で捉えられる堆積状況から推定して、検出された構成礫はこの段階ですでに埋置されたものと考えられ、新期の炉で再利用される在り方を示している。これらの構成礫には粒径15cm±～55cm±を計る扁平な10個の礫が利用され、床面から7cm±～25cm±の深さに側縁を上下にする状況で、方形の形状に埋置されている。

新期の炉も地床炉的な部位と石囲い部からなる。地床炉的な部位は、中期の炉の使用面上に汚れ火山灰(e層)を床面と同じレベルまで敷設し、面的に連続する古期と中期の使用面を加えて使用面としたと考えられる。使用面上には僅かに現地性焼土が形成され、敷設された汚れ火山灰も火熱による赤色変化を受けている。石囲い部は中期の炉の構成礫をそのまま再利用する形態をとり、部内には中期の使用面上に床面と同じレベルまで汚れ火山灰優占の暗褐色土a層が敷設されている。敷設された土層中には焼土・炭化物・炭化材が多く含まれている。また、下位の明褐色土層(b層)との層埋面は地床炉的な部位に寄った付近で攪乱を受けた状況にあり、これらの攪乱はa層敷設時点に起源を有すると考えられる。敷設されたa層上面(使用面)は軟質なものとなっている。新期の炉は全長122cm±を計る。

古期・中期・新期の3つの炉は、基本的にはこの住居址と共伴し、この住居址が営まれた間におけるつけ替えを示すものと考えられるが、新期の炉を除く古期・中期の炉は同系列にあるSV-8b住居址およびSV-8c住居址などの古期住居址と共伴する可能性も推定される。

出土遺物としては、床面ほぼ中央部から出土した深鉢形土器の大形破片がある。

この住居址は、SV-8住居址群で最も新期の住居址とみられ、SV-8b住居址とほぼ床面全体を共有する関係にあると思われる。また、この住居址を切る関係にある遺構の存在は認められない。

SV-8b住居址 (図版 103abc・141c ; 写真図版 129ab・131a・191ac)

この住居址の柱穴は、 $P_1 \cdot P_3 \cdot P_4$ (径26cm±・深さ不明)・ $P_9 \cdot P_{11} \cdot P_{13} \cdot P_{14} \cdot P_{16} \cdot P_{17} \cdot P_{19}$ など10個のピットで構成されると考えられる。柱穴配置は、 $P_{16}-P_{17}-P_{14}-P_{19}-P_{13}-P_1-P_{11}-P_3-P_9-P_4$ とジグザグ配置を示し、全体として安定した十角形の平面形を呈する。10個のピットのうち、 $P_1 \cdot P_3 \cdot P_9 \cdot P_{16} \cdot P_{17} \cdot P_{19}$ など6個のピットはSV-8a住居址と、 $P_{11} \cdot P_{13} \cdot P_{14}$ など3個のピットはSV-8a・c住居址と共有関係にある。柱穴配置を構成する10個のピット群のうち、9個までがSV-8a住居址に再利用される状況にあり、その平面形も近似したあり方を示すところから、規模的にもSV-8a住居址と近似した数値を計るものと考えられ、床面を共有する状況にあるのではないかと考えられる。

この住居址固有の炉の存在については明らかではないが、他の部位の共有関係から推定して、SV-8a住居址のそれと同位置的なあり方を示し、基本的にはSV-8a住居址に共伴すると考えられる古期または中期の複式炉がこれに相当するものかもしれない。

この住居址はSV-8住居址群の中であって、SV-8a住居址に先行し、SV-8c住居址に後続する変遷過程に位置づけられる。

SV-8c住居址 (図版 103abc・141c ; 写真図版 129ab・131a・191ac)

この住居址の柱穴は、 P_2 (径27cm±・深さ73cm±)・ P_5 (径20cm±・深さ46cm±)・ P_7 (径不明・深さ10cm±)・ P_{10} (径16cm±・深さ33cm±)・ $P_{11} \cdot P_{13} \cdot P_{14} \cdot P_{16} \cdot P_{18}$ など9個のピットで構成されると考えられる。柱穴配置は、SV-8a住居址およびSV-8b住居址と同じ方向に主軸をもち、 $P_{14}-P_{18} \cdot P_{13}-P_2 \cdot P_{11}-P_5 \cdot P_{10}-P_7$ がそれぞれ対になって構成される九角形の平面形を呈する。これらの柱穴のうち、 $P_{11} \cdot P_{13} \cdot P_{14} \cdot P_{16}$ はSV-8a住居址およびSV-8b住居址に再利用される共有関係にある。また、 $P_2 \cdot P_5 \cdot P_{18}$ はSV-8a住居址床面よりも下位から検出されている状況から、新期住居址構築時に閉塞されたものと考えられる。 P_7 は上縁を木根によって切られる状況にある。

この住居址の炉の存在については明らかではないが、柱穴の共有状況などを参考にすると、SV-8b住居址同様、SV-8a住居址に基本的には共伴するとみられる炉の古期使用面に

共伴性を求められるかもしれない。

新旧関係についてみると、この住居址はSV-8住居址群の中にあつて、柱穴の共有関係や検出状況から最も古期に位置づけられよう。

以上、SV-8住居址群を構成する住居址について個別に記載してきたが、形態的な変化について柱穴配置から捉えると、SV-8c住居址（古期住居址）からSV-8b住居址（中期住居址）への変遷過程で、北東方向への拡張形態が認められ、中期住居址からSV-8a住居址（新时期住居址）への変遷過程では規模的に変らないものとなっている。このほか、3棟の住居址が存在する範囲内には、各住居址を構成する柱穴群のほかにP₈（径10cm±・深さ22cm±）・P₁₂（径16cm±・深さ20cm±）・P₁₅（径15cm±・深さ17cm±）など3個のピットが検出されている。これらのピットの性格については明らかではないが、分布状況から推定すると壁柱穴あるいは間仕切の痕跡を残すものと思われる。

（佐藤 勝）

TIII区

TIII-1住居址（図版104ab・141d；写真図版130d・131b・191bd）

床面や炉などから出土している遺物はないが、炉の形態や埋土中の出土土器からみて、この住居址は時期的に縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。比較的保存が良好な状態で検出されている。規模は4.0m±×3.5m±を計り、平面形は北半部が凸辺形状を呈し、南半部は円形状の形態を示している。床面中央部から南東に位置して、1基の複式炉が設けられている。

埋土は上位より、褐色土層・黒褐色土層・褐色～黄褐色土層の3層によって構成されており、いずれも自然堆積相を示している。これらのうち、中央部の層準を占める黒褐色土層は基本層序のβ層に相当するもので、一本木火山礫の一部をなす火山灰であると考えられる。

床面はほぼ平坦で、全体に比較的堅くしまる面となっている。柱穴は、P₁（径22cm±・深さ21cm±）・P₂（径26cm±・深さ不明）・P₃（径21cm±・深さ20cm±）・P₄（径20cm±・深さ26cm±）・P₅（径16cm±・深さ13cm±）・P₆（径29cm±・深さ30cm±）・P₇（径23cm±・深さ41cm±）など、7個のピットで構成されているものと考えられる。原図に測定値が記入されていないためにP₂の深度は不明なものとなっているが、それがあつた程度の深さをもつものであることは写真から読みとることができよう。これらの柱穴の中で、P₁はP₂とP₇を結ぶ線を底辺とする二等辺三角形の頂点にあたる位置に配置され、他の群は、P₂-P₆・P₆-P₃・P₃-P₅・P₅-P₄とジグザグ状に配されている。この住居址内には、上記の柱穴群のほかに、P₈（径18cm±・深さ17cm±）・

P₁ (径16cm±・深さ29cm±)などのピットがみられる。これらはその位置から判断して、間仕切りのな性格をもつものと考えられるのかもしれない。住居址の壁高は、北壁33cm±・南壁23cm±・東壁15cm±・西壁14cm±を計る。壁溝は設けられていない。

南東壁よりに設けられている複式炉は石囲い部と前庭部の2つの単位から成るもので、全長200cm±を計る。石囲い部は粒径12cm±～40cm±の安山岩類角～亜角礫を使用して、60cm四方の方形に構築されている。石囲い部内の使用面は床面よりも6cm±低い位置に設けられており、その下位の火山灰層は4cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。使用面自体は比較的軟かい面となっている。前庭部は、平面形が不整な長方形を呈し、一部が石囲い部と共有関係にある構成礫が存在する部分と、それが存在しない壁よりの部分と、2つの部分から成っている。構成礫は粒径12cm±～36cm±を計る。前庭部内の底面は床面よりも13cm低い位置に設けられており、全体に平滑な面となっている。構成礫の末端付近より内側の範囲は、きわめて堅くしまるものとなっている。また、この範囲内には、攪乱による小ピットがみられる。石囲い部および前庭部の構成礫は、いずれもその下半部を床面下5cm±～10cm±の深さまで火山灰層中に埋置されている。なお、前庭部内には現地性焼土の形成は認められていない。

この住居址は単独で検出されたもので、他の遺構との重複関係はみられない。

TⅢ-2 住居址 (図版104cd・141e・142a; 写真図版130b・131c・192abc)

床面や炉からは時期決定資料となる遺物は出土していないが、「出入口」状施設の存在や埋土中の土器片からみて、この住居址は時期的に縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。比較的保存が良好な状態で検出されている。規模は5.0m±×4.8m±を計り、平面形は不整な円形状の形態を示している。床面中央部より東側の位置には1基の石囲い炉あるいは複式炉が設けられている。

埋土はいくつかの層に細分されるが、基本的にはいずれも自然堆積相を示す4枚の暗褐色～黒褐色土層により構成されている。これらのうち、b層は基本層序のβ層に相当するもので、一本木火山礫の一部をなす火山灰であると考えられる。

床面はほぼ平坦で、全体に軟い面となっている。柱穴状のピットは、P₁ (径20cm±・深さ23cm±)・P₂ (径64cm±・深さ22cm±)などが検出されているにすぎない。西壁から南壁沿いの部分にかけては深さ10cm±～45cm±のピットがいくつかみられるが、これはフィールドでの観察の結果、木根等の攪乱により生じたものではないかと推定された。したがって、この住居址の具体的な柱穴配置については不明である。壁高は、北壁97cm±・南壁33cm±・東壁25cm±・西壁74cm±を計る。壁溝は設けられていない。

床面中央部よりやや東側の位置に設けられている石囲い炉は、径68cm±の規模のもので、粒径13cm±～30cm±の安山岩類亜角～角礫を利用して円形状に構築されている。これらの構成礫

はその下半部を床面下10cm±~15cm±の深度まで埋設されている。石囲い部の使用面は床面よりも10cm±低い位置に設けられており、その下位の火山灰層は4cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。炉の東側外縁部を取り巻く範囲には、この焼土に連続する現地性焼土の形成がみられる。詳細な観察が行なわれていないために、使用面自体の状況についてはよくわからない。この炉にほとんど接する北西部には、内部に現地性焼土の形成がみられるP₃(径35cm±・深さ10cm±)が位置している。このピット内の床面下12cm±の位置には炉の使用面状の面が形成されていて、その下位の火山灰層は4cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。このような事実と相俟って、このピットと石囲い炉の両者の現地性焼土が互いに連続的であることから、P₃はあるいは石囲い炉の付属的な施設とみられるのかもしれない。

この住居地の炉に関してももう少し詳しく述べれば、P₃・石囲い炉と、柱穴状ピットとしたP₂の間には直線状の配置がみられる。これら3者の関係に対して今までの記述と若干異なる見方を取って、規模および位置からP₂を前庭部または前庭部の一部をなす施設として捉えれば、この炉は全体的に、ピット(P₃)・石囲い部(石囲い炉)・前庭部(P₂)の3単位で構成される複式炉であると見做すことができよう。

石囲い部(石囲い炉)と東壁との間の中間付近に位置する「出入口」状施設は、長軸が平行する粒径23cm±・33cm±の2個の安山岩垂角~垂円礫で構成されている。これらの構成礫はその下半部を、7cm±~8cm±の深さまで床面下の火山灰層中に埋めこまれている。

埋土中の若干の遺物を除けば、この住居地からの出土遺物としては、石囲い部(石囲い炉)内から深鉢形土器の胴体部破片1点が得られているにすぎない。

この住居地は単独で検出されたもので、他の遺構との重複関係は認められていない。

(高橋 文夫)

TIV区

TIV-1 住居地 (図版105ab・142c; 写真図版132a・133a・192de)

南東壁よりに設けられている複式炉の存在および埋土中の土器群からみて、この住居地は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。保存が比較的良好な状態で検出されている。規模は径4.6m±×4.3m±を計り、平面形はほぼ円形に近い形態を示している。炉および壁の存在する範囲の一部で、精査中に若干の掘りすぎがみられた。

埋土は褐色~暗褐色土層の4層で構成されている。これらの層の中で、中央部の下位の層準を占めるc層は、深鉢形土器破片と磨石・凹石・石匙・搔器・削器などの石器類や剥片類を含むほか、多量の焼土・炭化物を包含している。このことから、c層は複合的な廃棄行為による

人為堆積相を示しているものであると考えられる。この c 層と、上位の a・b 層が接する層理面上には、層理面の傾斜に平行して大半のものが横位の状態で、深鉢形土器の大形破片群が分布していた。

床面はほぼ平坦で、全体的に堅緻なものとなっている。柱穴配置については明確なものではないが、柱穴状のピットとして、P₁ (径46cm±・深さ36cm±)・P₂ (径27cm±・深さ63cm±)・P₃ (径30cm±・深さ59cm±)・P₄ (径29cm±・深さ29cm±)などが検出されている。住居址中央部付近にみられる P₅ (径33cm±・深さ42cm±)・P₆ (径36cm±・深さ56cm±)などのピット群も上記のピット群に関係するものとみられるのかもしれない。この住居址内にはこれらのほかに、P₇ (径30cm±・深さ29cm±)・P₈ (径25cm±・深さ17cm±)・P₉ (径31cm±・深さ19cm±)・P₁₀ (径20cm±・深さ24cm±)などのピット群が検出されている。これらはその位置から判断して、壁溝に関連する施設の痕跡を示しているものではないかと考えられる。この住居址内の壁溝は、西壁から南壁の範囲にかけて断続的に、幅10cm±～25cm±・深さ11cm±の規模のものが設けられている。壁高は、北壁87cm±・南壁3cm±・東壁50cm±・西壁87cm±を計る。

南東壁よりに設けられている複式炉は、2つの石囲い部と前庭部との3単位から成るもので、全長170cm±を計る。石囲い部は、粒径10cm±～24cm±の扁平な安山岩類亜角～亜円礫を多用して、全体で不整な楕円形状に構築されており、その内部は同様の粒径と形状を示す礫の配置によって2つの部位に分割されている。ここにみられる構成礫は、大半の部分を火山灰層中に埋めこまれている。これらの構成礫の周囲の掘り方内には、焼土・炭化物を含む褐色～暗褐色土層が充填されていて、その上面は使用面状の平坦面となっている。しかし、第1石囲い部・第2石囲い部ともに、その内部に現地性焼土の形成は認められていない。この使用面状の平坦面は、第1石囲い部で床面下18cm±・第2石囲い部で床面下27cm±の位置に設けられている。観察が不十分であるために、この使用面状の平坦面の硬軟についてはよくわからない。前庭部は石囲い部の両脇から扇形状に展開して南東壁に達するもので、その底面は床面よりも28cm±低い位置に設けられている。底面はほぼ平滑で、全体にきわめて堅くしまる面となっている。石囲い部内と同様に、この前庭部内にも現地性焼土の形成は認められていない。

この住居址からの出土遺物としては、埋土中の遺物群を除けば、西壁よりの床面上からミニチュア土器が1点得られているにすぎない。

この住居址は単独で検出されたもので、他の遺構との重複関係は認められていない。

TIV-2 住居址 (図版105cd; 写真図版132b・133b)

この遺構は調査時および整理段階において住居址として登録されているが、炉が設けられていないことや柱穴配置がはっきりしていないことなどから、結論的に言えば住居址として認定されるのかどうか疑問である。だが、少数例にすぎないかもしれないが、規模の大小・平面的

な形態・炉の有無・柱穴の有無またその配置形態・床面の状態・遺物の出土状況などの要素を検討しても、ある遺構が住居址であるか非住居址であるか判断を下すに困難な場合もある。定義も含めた上で、このような例については後の考察で詳しく触れることにし、ここでは、この遺構を一応住居址として以下記述することとする。

床面上からの出土遺物はないが、埋土中の土器片を参考にして推定すると、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるのではないかと考えられる。壁沿いの床面が数ヵ所にわたって攪乱を受けているほかは、比較的保存が良好な状態で検出されている。規模は径2.9m±×2.7m±を計り、平面形はほぼ円形状の形態を示している。

埋土は4枚の褐色～暗褐色土層で構成されていて、そのいずれもが自然堆積相を示している。

床面は全体的に平坦で、やや軟い面となっている。柱穴は設けられていない。壁高は、北壁83cm±・南壁46cm±・東壁58cm±・西壁87cm±を計る。

この住居址は単独で検出されたもので、他の遺構との重複関係は認められていない。

TIV-3 住居址 (図版106abc・142b; 写真図版133c・134a・193ab・272d)

床面上や炉から出土した土器からみて、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。保存が良好な状態で検出されているが、住居址埋土と周辺の火山灰層との識別が困難であったために大巾に掘りすぎてしまい、結果的に規模・形態の詳細は不明なものとなっている。しかし、僅かに残存した壁の輪郭線から推定して、この住居址は径3.3m×2.9m±の規模をもち、平面形は凸辺長形状または楕円に近い形態を示していたのではないかと考えられる。床面中央部よりやや南東の位置には、単体の直立埋設土器だけで構成される1基の炉が設けられている。また、床面上の広範囲にわたって分布する炭化材・炭化物・焼土粒の存在から、この住居址は焼失を受けているものであることが推定された。

埋土はいくつかの層に細分されるが、基本的には4枚の褐色～暗褐色土層・黒褐色土層により構成されている。これらのうち、中央部よりやや上位の層準を占めるb層は基本層序のβ層に相当するもので、一本木火山礫の一部を構成する火山灰層であると考えられる。埋土下底部付近の層準には炭化物が多く包含されている。

床面には若干の凹凸がみられるが、全体的にはほぼ平坦である。炉の北西部を中心とする範囲の床面は比較的堅くしまるものとなっているが、そのほかの部分では軟弱な状態を示している。柱穴配置についてはよくわからない。柱穴状のピットとして、P₁(径14cm±・深さ20cm±)・P₂(径18cm±・深さ32cm±)・P₃(径15cm±・深さ30cm±)・P₄(径17cm±・深さ17cm±)・P₅(径12cm±・深さ16cm±)・P₆(径22cm±・深さ21cm±)などのピット群が検出されている。これらのいずれかが柱穴の一部を構成するものなのであろう。壁高は、北壁110cm±・南壁43cm±・東壁5cm±・西壁97cm±を計る。壁溝は設けられていない。

この住居址の炉は、口頸部および底部を欠く深鉢形土器の胴体部を直立に埋設して構築されている。埋設土器も含めて、その周囲の火山灰層は径40cm±の範囲で火熱による赤色変化を受けている。この土器内の床面下8cm±の位置には使用面が設けられており、その面下、すべてにわたってではないが、厚いところで層厚6cm±の現地性焼土の形成がみられる。炉の掘り方内には汚れ火山灰が充填されていた。

当住居址の床面上からの出土遺物としては、炉の北部に横位の状態で存在していた1個体の深鉢形土器や、西部の深鉢形土器大形破片などがある。また、炭化材・炭化物はほとんどが細片・細粒状のもので、床面の大半の部分にわたって密に分布していた。

この住居址は単独で検出されたもので、他の遺構との重複関係は認められていない。

TIV-4 住居址 (図版107abd ; 写真図版134b・136a)

床面上の出土遺物はないが、埋土中の土器片からみて、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。南半の大半の部分が後出の住居址に切られているために、規模や形状の詳細は不明であるが、残存している壁の輪郭線からみて、この住居址は4.2m±×4.0m±の規模をもち、平面形は卵形状の形態を示していたものではないかと推定される。残存範囲内では保存が良好な状態で検出されている。また、精査範囲内に関する限り炉は検出されていない。

埋土は黒褐色土層より構成されている。

床面は全体的にはほぼ平坦である。観察が十分に行なわれていないために、床面の硬軟などの状況については不明である。柱穴配置についてもよくわからないが、柱穴状のピットとして、P₁ (径52cm±・深さ28cm±)・P₂ (径30cm±・深さ不明)・P₃ (径23cm±・深さ11cm±)・P₄ (径16cm±・深さ22cm±)などのピット群が検出されているにすぎない。壁高は北壁41cm±・東壁10cm±・西壁42cm±を計る。壁溝は設けられていない。

この住居址は、南半部および東部で、TIV-5住居址・TIV-53フラスコ形ピットなどにより切られている。

TIV-5 住居址 (図版107abc・142d ; 写真図版134b・136a・193cd)

床面上からの出土遺物はないが、埋土中の遺物群からみて、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。全体に保存が良好な状態で検出されている。規模は径3.7m±×3.0m±を計り、平面形は楕円形状の形態を示している。床面中央部からやや北側の位置には1基の石囲い炉が設けられている。また、床面上の炭化材・炭化物・焼土粒などの分布から、この住居址は焼失を受けているものと考えられる。

埋土は、十和田 a 降下火山灰以上の層準を除けば、基本的には4枚の褐色～暗褐色土層・黒褐色土層により構成されている。これらの埋土の中で、中央部の層準を占めるd層は基本層序

のβ層に相当するもので、一本木火山礫の一部を構成する火山灰であると考えられる。埋土最下部のf層は、多量の炭化物とともに、完形の深鉢形土器などを包含している。

床面には若干の凹凸がみられるが、全体的にはほぼ平坦な面となっている。炉の北側の範囲で床面は一部堅くしまるものとなっているが、そのほかの大半は比較的軟弱な状態を示している。柱穴は、P₁ (径21cm±・深さ20cm±)・P₂ (径13cm±・深さ18cm±)・P₃ (径23cm±・深さ24cm±)・P₄ (径26cm±・深さ18cm±)・P₅ (径20cm±・深さ19cm±)・P₆ (径22cm±・深さ17cm±)・P₇ (径14cm±・深さ21cm±)・P₈ (径14cm±・深さ13cm±)などのピット群で構成されているものと考えられる。これらの柱穴の中で、P₄はP₃とP₅を結ぶ線を底辺とする三角形の頂点にあたる位置に配され、他の群は、P₃—P₆・P₆—P₂・P₂—P₇・P₇—P₁・P₁—P₈とジグザグ状に配置されている。上記の柱穴群以外に、この住居址内には、P₉ (径23cm±・深さ26cm±)・P₁₀ (径15cm±・深さ21cm±)・P₁₁ (径41cm±・深さ25cm±)などピット群がみられる。これらはその位置から推定して、間仕切りの性格をもつものと考えられるのかもしれない。また、北壁付近には深さ8cm±～12cm±を計るいくつかの小ピット群がみられるが、これらの具体的な性格については不明である。壁高は、北壁38cm± (TIV—4住居址床面との比高)・南壁7cm±・東壁30cm±・西壁27cm±を計る。壁溝は設けられていない。

石囲い炉は、粒径15cm±～22cm±の安山岩類亜角～亜円礫を利用して、径50cm±の規模で円形状に構築されている。これらの構成礫は、その下半部を5cm±の深さまで床面下の火山灰層中に埋めこまれている。これらの掘り方内には暗褐色土層が充填されていた。石囲い内の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられており、きわめて堅くしまる面となっている。この下位の火山灰層は、4cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。

床面上の炭化材・炭化物・焼土は、炉の西・北・東側の範囲にかけて多くの分布がみられた。

重複関係の面では、この住居址はTIV—4住居址に後出するもので、その大半の部分を切っている。また、北東部の壁際では、TIV—53フラスコ形ピットと重複を示している。これら両者の新旧関係や共伴関係の詳細についてはよくわからないが、フラスコ形ピットの位置から推定して、これは当住居址に伴うものであると考えられるのかもしれない。

TIV—6住居址 (図版108c・109abc・142e ; 写真図版135ab・136b・193e)

床面上からの出土遺物はないが、埋土中の土器片などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。調査範囲内に関する限り、全体に保存が良好な状態で検出されている。埋土と周辺の火山灰層との識別が困難であった北西部と南西部では、壁および床面の一部に若干の掘りすぎがみられた。東側部分は後出の住居址により切られている。これらのことから、この住居址の規模・形態の詳細については不明なものとなっているが、残存している壁の輪郭線などから推定して、径3.3m×3.0m前後の規模をもち、卵

形に近い平面形を示していたものではないかと考えられる。住居址の中央部付近には、埋置礫を伴う地床炉が設けられている。

埋土は、3層の褐色～暗褐色土層により構成されている。

床面は全体的にほぼ平坦で、比較的堅くしめる面となっている。柱穴は、当住居址内に検出されている P_1 (径23cm±・深さ40cm±)・ P_2 (径16cm±・深さ27cm±)・ P_3 (径20cm±・深さ57cm±)・ P_4 (径19cm±・深さ53cm±) などのピット群のほか、後出の TIV-7 住居址内に位置する P_x (径13cm±・深さ39cm±) も含めて5個のピットで構成されていると考えられる。 P_1 を要として、 P_x — P_2 — P_3 — P_4 と扇形状に展開する配置を示しているのかもしれない。これらの柱穴群のほか、この住居址内には P_5 (径26cm±・深さ47cm±) が検出されているが、このピットの性格についてはよくわからない。TIV-7 住居址内に検出されている P_{10} も、あるいはこの住居址に伴うものかもしれない。住居址の壁高は、北壁12cm±・南壁48cm±・西壁65cm±を計る。壁溝は設けられていない。

床面中央部付近に設けられている炉は、粒径17cm±の安山岩垂円礫を利用した1個の埋置礫と、使用面が床面よりもやや低い位置に設けられている地床炉部分の組み合わせから成っている。地床炉は径52cm±の規模のもので、その南東炉縁部に上記の埋置礫がみられる。そのほかの部位には、構成礫やその抜き取り痕の存在などは確認されていない。すべての範囲にわたってではないが、炉内には最大層厚5cmの現地性焼土の形成がみられる。また、礫は床面下4cm±の深度で、その下半部を下位の火山灰層中に埋めこまれている。

土器などの遺物は伴わないが、炉の北東部の床面上には、粒径26cm±の安山岩垂円礫が存在していた。

重複関係では、この住居址は東側の範囲を TIV-7 住居址に切られている。

TIV-7 住居址 (図版108a・109abc・142f ; 写真図版135a・136c・137a・194ab)

床面上や炉から出土している遺物はないが、埋土中の出土土器などを参考にして推定すると、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。全体に保存が良好な状態で検出されている。北東部を後出の住居址に大きく削剥されていることから規模・形態の詳細は不明であるが、残存している壁の輪郭線や柱穴群の配置からみて、この住居址は $4.5\text{m} + \alpha \times 3.1\text{m}$ ± の規模をもち、平面形は凸辺長方形または楕円形に近い形態を示していたものではないかと考えられる。住居址中央部付近およびその南東の位置には地床炉と石囲い炉が設けられている。また、床面上にみられる多量の炭化材・炭化物・焼土の存在から、この住居址は焼失を受けているものと推定される。

住居址の埋土は、3層の褐色～暗褐色土層により構成されている。これらの埋土の中で、最下部の層準を占める c 層 (暗褐色土層) は、住居の焼失に伴って形成されたものが起源である

と考えられる多量の炭化物・焼土を包含している。

床面はやや凹凸があって、壁沿いの部分は軟く、住居址中央部を中心とする範囲ではきわめて堅くしめる面となっている。柱穴は、後出のTV-1住居址内に検出されているP₇（径18cm±・深さ23cm±）も含めて、当住居址内のP₁（径22cm±・深さ78cm±）・P₂（径21cm±・深さ36cm±）・P₃（径16cm±・深さ41cm±）・P₄（径15cm±・深さ24cm±）・P₅（径16cm±・深さ21cm±）・P₆（径22cm±・深さ35cm±）・P₇（径14cm±・深さ20cm±）などのピット群で構成されているものであろう。これらの柱穴は、P₇-P₁・P₁-P₇・P₇-P₂・P₂-P₆・P₆-P₃・P₃-P₅・P₅-P₄とジグザグ状に配置されている。このような柱穴群の配置から考えて、当住居址がTV-1住居址に切られている範囲内には、さらにいくつかの柱穴が存在していたものと推定される。また、この住居址内には上記の柱穴群のほかに、P₈（径35cm±・深さ43cm±）・P₉（径20cm±・深さ58cm±）・P₁₀（径15cm±・深さ16cm±）などのピット群がみられるが、これらの具体的な性格については不明である。住居址の壁高は、北壁50cm±・南壁25cm±・西壁12cm±（西壁の高さはTIV-6住居址床面との比高）を計る。壁溝は設けられていない。

住居址中央部付近に設けられている地床炉は、床面とほぼ同じレベルに使用面が設けられているもので、それに伴う現地性焼土は径68cm±×38cm±の範囲に形成されている。この炉の使用面はきわめて堅くしめる面となっていて、その下位の火山灰層は4cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。地床炉近くの南東部に設けられている石囲い炉は、粒径20cm±～27cm±の安山岩類角～亜角礫を利用して構築されている。規模は56cm±×46cm±を計り、平面形は台形状の形態を示している。この炉の構成礫は床面下12cm±～14cm±の深さまで、その下半部を下位の火山灰層中に埋めこまれている。礫の周囲の掘り方内には汚れ火山灰が充填されていた。石囲い内の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、削剝を受けて内部に多量の炭化物を包含する黒褐色土層が堆積している攪乱部分を除けば、その上面はきわめて堅くしめるものとなっている。下位の火山灰層は5cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。

住居の焼失に際して形成されたと考えられる炭化物・炭化材・焼土は、床面上のほぼ全体にわたって分布しているが、ことにそれらの集中がみられるのは住居址長軸線上を中心とする範囲の床面上である。この範囲には、比較的大き目の炭化材・炭化物・焼土塊が分布していた。また、柱穴P₃とP₅の間の床面には37cm±×16cm±の規模で現地性焼土の形成がみられる。この焼土は、規模と位置的な面から考えて住居の焼失に伴って形成されたものではないかと推定される。断面観察が行なわれていないために、この焼土の層厚については不明である。

この住居址の床面上や炉からは土器類や石器類は出土していない。床面上の物としては、上記の炭化材・炭化物・焼土を除けば、北西壁よりの床面上に粒径28cm±の安山岩亜角礫が存在していたにすぎない。

重複関係の面では、この住居址はTIV—6住居址を切り、TV—1住居址には切られる関係にあることが明らかにされている。

(高橋 文夫)

TV区

TV—1住居址 (図版108b・109abd・142g; 写真図版135a・137b・194cd)

床面上の出土土器および炉の形態からみて、この住居址は縄文時代中期末葉期に位置づけられるものであろう。全体に保存が良好な状態で検出されている。規模は3.0m±×2.7m±を計り、平面形は卵形状の形態を示している。住居址中央部より南東方向の位置には、1基の複式炉が設けられている。

埋土は褐色～暗褐色土層の4層で構成されている。

床面は全体にほぼ平坦で、比較的堅くしまるものとなっている。柱穴は、P₁ (径19cm±・深さ23cm±)・P₂ (径17cm±・深さ25cm±)・P₃ (径20cm±・深さ25cm±)・P₄ (径15cm±・深さ39cm±)・P₅ (径24cm±・深さ58cm±)・P₆ (径16cm±・深さ40cm±)・P₇ (径18cm±・深さ34cm±)など、7個のピットで構成されているものと考えられる。これらの柱穴の中で、P₁はP₂とP₇を結ぶ線を底辺とする二等辺三角形の頂点にあたる位置に配置され、他の群は、P₇—P₃・P₃—P₆・P₆—P₄・P₄—P₅とジグザグ状に配されている。この住居址内には、上記の柱穴群のほかに、P₈ (径24±・深さ46cm±)・P₉ (径20cm±・深さ48cm±)・P_yなどのピット群が検出されている。これらのうち、P_yはTIV—7住居址に伴う柱穴ではないかと考えられるが、他のP₈・P₉の性格についてはよくわからない。あるいはこれらは、P_yと同様にTIV—7住居址に伴うものであるとみられるのかもしれない。住居址の壁高は、北壁84cm±・南壁10cm± (南壁の高さはTIV—7住居址床面との比高)・東壁46cm±・西壁71cm±を計る。壁溝は設けられていない。

住所址南東部に設けられている複式炉は石囲い部と前庭部の2つの単位から成るもので、全長130cm±を計る。構成礫を欠く部分もあるが、石囲い部は粒径9cm±～20cm±の安山岩類亜角～亜円礫を利用して楕円形状に構築されている。これらの構成礫は6cm±～10cm±の深度で、その下半部を下位の火山灰層中に埋めこまれている。石囲い部内の使用面は床面とほぼ同じレベルに設けられていて、きわめて堅くしまるものとなっている。下位の火山灰層は4cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。前庭部は、不整ではあるが狭い扇形状に近い形態を示しており、石囲い部南東端から住居址壁に達する範囲に設けられている。その底面は床面よりも僅かに低い位置にあって、きわめて堅くしまるものとなっている。この前庭部内には、深さ3cm±～10cm±の不整形なピットがいくつかみられるが、これらは構成礫が抜き取られた痕跡

を示しているものかもしれない。前庭部には現地性焼土が形成されていない。

当住居址からの出土遺物としては、北壁近くの床面上から小形深鉢形土器、磨石、ポーラ・ストーンが、北東壁際の床面上からポーラ・ストーンがそれぞれ得られている。また、北西壁際の床面上には粒径22cm±の扁平な安山岩垂角礫、北東壁に接する位置には粒径16cm±の安山岩垂角礫、石囲い部の南西部の床面上には粒径18cm±の安山岩垂角礫がそれぞれ存在していた。

重複関係の面では、この住居址はTIV-7住居址を切っている。そのほかの遺構との重複は認められていない。また、石囲い部の北部から西部にかけての床面には、不整な形状を示す攪乱痕がみられた。

(高橋 文夫)

(2) 大型ピット類

大型ピット類の説明にあたって、遺構の部位などに係わる用語および計測値については『遺構編Ⅰ』の室内整理の項で述べられているものに準じた。また、記載にあたっては、原則として以下の項目ごとに触れる順序をとった。

①他の遺構との重複関係 ②検出・残存状況 ③形状(平面形・壁の形態) ④埋土の状況 ⑤規模 ⑥出土遺物

EⅢ区

EⅢ-51フラスコ形ピット(図版143ac; 写真図版194ef)

このピットは東壁付近でEⅢ-52フラスコ形ピットと重複する状況にあり、EⅢ-52フラスコ形ピットによって東壁上部付近を切られる在り方を示している。残存状況から推定すると、平面形は開口部、底部とも南北方向に長軸を有する楕円形を呈していたものと考えられる。

残存部についてみると、壁は底面から開口部にかけて内傾する立ちあがりをみせる。底面は平坦な状況を呈する。埋土は、上部から褐色土層・黒褐色土層で構成される。埋土中位付近には炭化物の細粒が含まれている。規模は残存部で、開口部径130cm±(最大径)・底部径135cm±(最大径)・深さ113cmを計る。底面西壁際の部分から、縄文時代晩期に位置づけられる台付鉢が出土している。

EⅢ-52フラスコ形ピット(図版143bd; 写真図版194e・195a)

このピットは西壁付近でEⅢ-51フラスコ形ピットの東壁の上部を切ってつくられている。

平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。壁は内傾気味の立ちあがりのみせる。底面は平坦で、このピットに切られる関係にある E III—51 フラスコ形ピット底面よりも 25cm± 高いレベルにある。埋土は褐色土層・暗褐色土層・黒褐色土層の 3 層で構成される。規模は、開口部径 100cm±・底部径 125cm±・深さ 88cm± を計る。出土遺物はない。

E III—53 フラスコ形ピット (図版 143ef ; 写真図版 195bc)

平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。壁は西縁で内傾する立ちあがりを示すが、他の部分では外形気味の立ちあがりのみせる。底面は平坦なものとなっている。底面東壁寄りの部分に 2 個の副穴 (註 3) が認められる。埋土は上部から暗褐色土層・明褐色土層・褐色土層で構成される。規模は、開口部径 130cm±・底部径 125cm±・深さ 48cm± を計る。底面に認められる副穴は、P₁ (径 12cm±・底面からの深さ 7cm±)・P₂ (径 20cm±・底面からの深さ 14cm±) の規模をもつ。埋土下部から、縄文時代晩期に位置づけられる鉢形土器 1 個体が出土している。

E III—54 フラスコ形ピット (図版 143gh ; 写真図版 195de)

壁自体が軟質なため、部分的に掘りすぎが認められる状況で検出された。平面形は、開口部・底部とも南北の方向に長軸をもつ卵形を呈する。壁は底面から開口部にかけていくらか内傾する立ちあがりを示す。底面は平坦な状況を呈する。埋土は、上部から黒色土層・黒褐色土層・暗褐色土層の 3 層で構成される。規模は、開口部径 156cm±×123cm±・底部径 152cm±×118cm±、深さ 35cm± を計る。出土遺物はない。

E VI 区

E VI—51 フラスコ形ピット (図版 144a)

このピットは E VI—1 住居址と重複関係にあり、この住居址によって北壁と埋土の一部を切られる関係にある。平面形は、残存部から推定して、開口部・底部とも南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈するものと考えられる。壁は底面から開口部まで内傾する立ちあがりのみせる部分とまっすぐに近い立ちあがりを示す部分とに分かれる。底面は西壁付近に比べ東壁付近で 7cm± 低くなる緩かな傾きのみせる。埋土の詳細については、断面実測を省略したため明らかではないが、調査員の Field Card によれば、汚れ火山灰優先の褐色土で構成されるという記載がある。規模は残存する部分で、開口部径 108cm±×85cm±・底部径 106cm±×87cm±・深さ 66cm± を計る。出土遺物はない。

E VI—52 ピーカー形ピット (図版 144b ; 写真図版 196a)

このピットも E VI—1 住居址と重複関係にある。検出面が明らかではないことや埋土の詳細も不明なことから、E VI—1 住居址との切合関係も明らかではない。このピットは下位の泥流起源の礫層を掘り凹めて構築されており、壁および底面全体に凹凸がみられ、非常に固いものと

なっている。平面形は、開口部・底部とも南北方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は底面付近から開口部までほぼまっすぐな立ちあがりを見せる。底面は壁際に比べて中央部が5cm±～15cm±低く凹んだものとなっている。規模は、開口部径141cm×105cm±・底部径108cm±×80cm±・深さ101cm±を計る。出土遺物はない。

(佐藤 勝)

FII区

FII-51ピーカー形ピット (図版144cd ; 写真図版196bc)

北壁付近に掘りすぎが認められ全体の形状は明らかではないが、断面図や残存状況から推定すると、平面形は開口部・底部とも円形を呈すものと考えられる。壁は全体にやや外傾する立ちあがりを示すが、南壁の一部でオーバー・ハング状の形状を見せる。底面はほぼ平坦な状況にある。埋土は基本的には褐色土層と暗褐色土層の2層で構成される。下位に堆積している暗褐色土層中には焼土の含有が認められる。規模は残存部で、開口部径180cm±・底部径148cm±・深さ52cm±を計る。出土遺物として、磨石や半円状扁平打製石器(鈴木;1958)などの石器類がある。

FII-52フラスコ形ピット (図版144ef ; 写真図版196de)

このピットはFII-2住居址と重複関係にあり、この住居址の北東壁付近で埋土中位から切る関係にある。平面形は、開口部と頸部が北西から南東の方向に長軸をもつ楕円形を呈し、底部が円形を呈する。壁は底面から頸部付近まで内湾する立ちあがりを見せたのち、開口部まで外反する形状を示す。埋土は、黒褐色土層・褐色土層・暗褐色土層・黒色土層が入り混じった堆積状況をもって構成される。中位付近には多量の焼土の堆積が認められる。規模は、開口部径95cm±×72cm±・頸部径82cm±×75cm±・底部径96cm±・深さ76cm±を計る。土器などの出土遺物はない。

FII-53フラスコ形ピット (図版144gh ; 写真図版197a)

このピットもFII-2住居址と重複関係にあり、この住居址の床面中央付近を埋土上位から切る在り方を示している。調査上の不手際から上部を削剝してしまい、開口部の形状は不明なものとなっている。底部はほぼ円形の平面形を呈する。埋土断面の観察によれば、壁は底面付近から開口部までやや内傾する状況にある。底面は平坦なものとなっているが、北壁に寄った部分と南壁に寄った部分に副穴と思われる2個のピットが存在する。埋土は、暗褐色土層と黒褐色土層で構成され、中位付近に炭化物が多く認められる。

埋土断面図を参考にすると、規模は開口部径95cm±・底部径110cm±・深さ97cm±を計るものとなっている。底面に認められる副穴の規模は、P₁(径14cm±・底面からの深さ25cm±)・P₂(径20cm±・底面からの深さ12cm±)を計る。この遺構から出土遺物はない。

FⅢ区

FⅢ-52フラスコ形ピット (図版145af ; 写真図版197bc)

このピットはFⅢ-53フラスコ形ピットと重複関係にあり、南壁付近でFⅢ-53フラスコ形ピットの北壁とその周辺の埋土を切って構築されている。壁自体が軟質で埋土の層相を近似している状況にあったところから掘りすぎが多く認められ、加えて調査時に崩落したために底部付近を除く形状は不明なものとなっている。底部はほぼ円形の平面形を呈する。埋土断面の観察によれば、壁はFⅢ-52フラスコ形ピットと切り合う部分で底面から開口部まで内湾する立ちあがりみせる。底面はほぼ平坦な面となっている。

埋土は黒褐色土層と暗褐色土層で構成され、この二つの層が入り混じった堆積状況を示している。埋土断面図で見れば、規模は開口部径80cm±・底部径134cm±・深さ87cm±を計る。土器片などの出土遺物はないが、埋土中位から粒径18cm±を計る垂円礫が1個出土している。

FⅢ-53フラスコ形ピット (図版145be ; 写真図版197c)

このピットは北壁付近をFⅢ-52フラスコ形ピットによって切られ、さらに東壁付近をFⅢ-54フラスコ形ピットによって切られる重複状況にある。したがって、残存状況は不良で、形状は明らかではない。残存する埋土は黒褐色土層の単層で構成され、明褐色土ブロックや炭化物を僅かに含んでいる。残存する底面は平坦なものとなっている。壁の状況も明らかではないが、切り合いによる削剝を免がれた東壁付近では、底面から中位付近まで内傾する立ちあがりみせたのち開口部までわずかに外傾する状況にある。残存する底部で最大径140cm±を計る。出土遺物として磨石が1個出土している。

FⅢ-54フラスコ形ピット (図版145cd ; 写真図版197de)

このピットはFⅢ-53フラスコ形ピットと重複関係にあり、FⅢ-53フラスコ形ピット東壁付近をこのピットの西壁付近で切る状況にある。平面形は、開口部・底部とも東西方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は底面付近から開口部にかけて内傾する立ちあがりを示す。底面は平坦なものとなっているが、南壁に寄った部分に副穴が認められる。

埋土は暗褐色土層・褐色土層の2層で構成され、上位に炭化物や明褐色土ブロックを多く含む。規模は、開口部径130cm±×115cm±・底部径140cm±×125cm±・深さ71cm±を計る。副穴は、径20cm±・底面からの深さ12cm±を計る。縄文時代前期前半期に位置づけられる土器の大

形破片が出土している。

F III—55 フラスコ形ピット (図版146ab ; 写真図版198a)

上半部を削剥し、下底部付近だけが残存する状態で検出された。開口部の形状は明らかではないが、底部は円形の平面形を呈する。残存する部分の壁は底面から内傾気味の立ちあがりを示す。底面は平坦なものとなっている。下底部付近の埋土は暗褐色～黒褐色土層で構成され、炭化物を僅かに含む。規模は、底部径140cm±を計る。縄文時代前期前半期に位置づけられる土器片のほかに、石鏃や剝片が出土している。

F III—56 ビーカー形ピット (図版146cd ; 写真図版198c)

平面形は、開口部、底部とも円形を呈する。壁は全体にまっすぐに近い立ちあがりを示す。底面は平坦な状況にある。埋土は暗褐色土層・褐色土層・明褐色土層の3層で構成され、炭化物を僅かに含んでいる。規模は、開口部径117cm±・底部径104cm±・深さ55cm±を計る。出土遺物はない。

F III—57 フラスコ形ピット (図版146e ; 写真図版198b)

このピットはF III—58ビーカー形ピットと重複関係にあり、F III—58ビーカー形ピットの位置する範囲内の西壁に寄った部分で埋土と底面を切る状況にある。平面形は、開口部と頸部が南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈し、底部は円形の形状を呈する。壁は底面から頸部まで内傾する立ちあがりをみせたのち、開口部まで外反する状況にある。底面はほぼ平坦なものとなっている。埋土は褐色～明褐色土層で構成される。

規模は、開口部径110cm±×65cm±・頸部径92cm±×64cm±・底部径110cm±～117cm±を計る。出土遺物はない。

F III—58 ビーカー形ピット (図版146fg ; 写真図版198bd・257ab)

このピットはF III—57フラスコ形ピットと重複関係にあり、F III—57フラスコ形ピットによって西壁に寄った部分を埋土から切られる状況にある。また、東壁から南壁にかけて木根による攪乱を受けていて、残存状態はあまりよくない。残存状況から推定すれば、平面形は開口部・底部とも円形を呈すものと考えられる。壁は残存する部分でほぼまっすぐに近い立ちあがりを示す。底面は、切り合いや攪乱によって欠失した部分を除けば平坦なものとなっている。埋土は、暗褐色土層・明褐色土層・褐色土層の3層で構成される。

規模は残存する部分から推定して、開口部径152cm±・底部径143cm±・深さ82cm±を計るものと思われる。東壁に寄った埋土中位から下位にかけて、縄文時代晩期に位置づけられる鉢形土器が2個体出土している。

F III—59 フラスコ形ピット (図版146hi)

平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。壁は底面から開口部にかけて内傾する立ちあがりをみせる。底面は壁際に比べて中央部が7cm±低く凹んだものとなっている。埋土は、上部

が暗褐色土層、下部が褐色土層で構成される。上部には炭化物が僅かに含まれている。

規模は、開口部径79cm±～86cm±・底部径110cm±・深さ66cm±～73cm±を計る。出土遺物はない。

FⅢ-60 フラスコ形ピット (図版147ab ; 写真図版198e・199a)

平面形は、開口部が円形を呈し、底部が北西から南東の方向に長軸をもつ卵形を呈する。壁は底面から中位まで外方に向って膨らんだのちすぼまる曲線を描き、さらに開口部までほぼまっすぐに連なる形状を示す。底面はほぼ平坦な状況にある。埋土は基本的には黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層の3層で構成される。規模は、開口部径110cm±・中位から下位にかけての最大径160cm±・底部径131cm±・深さ75cm±を計る。出土遺物はない。

FⅢ-61 ビーカー形ピット (図版147cd ; 写真図版199bd)

平面形は、開口部・底部とも不整な円形を呈する。壁は底面から開口部にかけて外傾気味のたちあがりを示す。底面は壁際に比べて床面中央部が5cm±～11cm±低く凹んだ状況にある。埋土は、黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層の3層で構成され、それぞれが入り組む堆積状況を示している。規模は、開口部径185cm±～204cm±・底部径162cm±～184cm±・深さ72cm±～78cm±を計る。出土遺物はない。

FⅢ-62 フラスコ形ピット (図版147ef ; 写真図版199c・200a)

このピットはFⅡ-2住居址およびFⅢ-5住居址と重複関係にあり、FⅡ-2住居址東壁とFⅢ-5住居址西壁をそれぞれ部分的に切る状態で構築されている。平面形は開口部・底部とも円形を呈する。壁は全体に内湾気味の立ちあがりを示す。底面は、南壁付近に比べて北壁付近が8cm±低くなる傾きをみせる。埋土は、基本的に暗褐色土層・黒色土層・黒褐色土層・褐色土層の4層で構成されるが、それらが混在する状況を呈する。全体に焼土・炭化物・汚れ火山灰ブロックを多量に含んでいる。規模は、開口部径108cm±・底部径104cm±・深さ50cm±～58cm±を計る。出土遺物としては、縄文時代前期前半期に位置づけられる土器片のほかに石鏃などの石器がある。

FⅢ-63 フラスコ形ピット (図版148ab ; 写真図版200bd)

このピットはFⅢ-5住居址と重複関係にあり、FⅢ-5住居址の北壁付近で部分的にこれを切る在り方を示す。平面形は、開口部・底部とも南北方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は底面から中位付近まで一担張り出したのち開口部まで内傾する形状を示す。底面は、南壁に寄った部分に掘りすぎが認められることから全体の状況は明らかではないが、残存部では小さな起伏が認められる。埋土は暗褐色土層・黒褐色土層・褐色土層で構成され、全体にこれらの層が入り組む状況を呈する。中位付近に多量の炭化物の含有が認められる。

規模は、開口部径150cm±×126cm±・中位最大径125cm±～132cm±・底部径125cm±×101

cm±・深さ58cm±～74cm±を計る。縄文時代晩期と思われる土器片のほかに、磨石が出土している。

F III—64 フラスコ形ピット (図版148cd ; 写真図版200c)

このピットも F III—5 住居址と重複関係にあり、F III—5 住居址を床面中央部で埋土上部から切る在り方を示している。平面形は開口部・底部とも円形を呈する。壁は、底面から頸部付近まで内傾する立ちあがりを見せ、頸部から開口部までやや外傾する形状を示す。底面は全体に平坦なものとなっていて、西壁際に副穴が一個認められる。埋土は黒褐色土層・暗褐色土層の2層でほぼ構成される。中位付近に炭化物が多く含まれるほか、下位に明褐色土ブロックの含有が認められる。規模は、開口部径120cm±・頸部径110cm±・底部径156cm±・深さ104cm±を計る。出土遺物としては、埋土上部から縄文時代後期中葉期～末葉期に位置づけられる鉢形土器が出土している。

F VI区

F VI—51 フラスコ形ピット (図版148ef ; 写真図版201ab)

平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。壁は底面から開口部まで内傾する立ちあがりを見せる。底面は、基本層序III層に相当する火山灰の hard part を削出して構築されており非常に堅く、凹凸の認められる面となっている。埋土は黒褐色土層と暗褐色土層の2層で構成され、中位に汚れ火山灰のブロックを含んでいる。規模は、開口部径100cm±・底部径125cm±・深さ85cm±～96cm±を計る。出土遺物はない。

F VI—52 フラスコ形ピット (図版149ad ; 写真図版201c)

このピットは F VI—53ピットと重複関係にあり、南壁付近で F VI—53ピットによって切られる在り方を示す。また、南東壁付近で木根による攪乱をうけている。したがって保存状況は不良で、全体の形状を明確に捉えることはできないが、残存部から推定すると、平面形は開口部・底部とも円形を呈するものと考えられる。壁は底面から開口部までまっすぐに立ちあがる部分と内傾する部分とからなる。残存する底面は、南東壁よりの部分に10cm±低く傾く状況にある。

埋土は黒褐色土層と暗褐色土層の互相で構成される。規模は残存部で、開口部径100cm±・底部径105cm±・深さ54cm±～64cm±を計る。出土遺物はない。

F VI—53ピット (図版149b ; 写真図版201d)

検出された段階ですでに上部を削平されて失い、さらに東壁付近で木根による攪乱をうけているため残存状況はよくない。埋土の実測も省略した。残存する下底部の北縁で F VI—52 フラスコ形ピットを切る状況から、このピットは少なくとも F VI—52 フラスコ形ピットより新期の

遺構と考えられる。また、平面的な位置関係からみて、このピットは隣接するFVI-54ピットとも重複関係にあるものと認められるが、FVI-54ピットもこのピットと同じような残存状況を示すところから両者の重複に関する詳しいことは明らかではない。

残存する下底部付近の観察によれば、壁は底面から外傾する立ちあがりを示し、底面は平坦な状況にある。残存する底部の最大径は115cm±を計る。埋土から縄文時代中期末葉に位置づけられる土器片や剝片が出土している。

FVI-54ピット（図版149c；写真図版201d）

このピットも検出された段階で下底部付近を残して遺構の大半を削平されており、さらに北壁付近で木根による攪乱を受けているため残存状況は不良なものとなっている。埋土の実測は省略した。このピットは北縁でFVI-53ピットと隣接する在り方を示しており、FVI-53ピットと重複関係にあると思われるが詳細については不明なものとなっている。

残存部についてみると、壁は外傾する立ちあがりを示し、平坦な底面はFVI-53ピット底面よりも11cm±～19cm±高いレベルにある。残存する底部最大径200cm±を計る。土器片などの出土遺物はない。

GII区

GII-51フラスコ形ピット（図版149e；写真図版201ef）

平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。壁は底面から開口部まで内傾する立ちあがりを示す。底面は平坦なものとなっている。規模的な作業上の制約から埋土の実測を省略した。調査員のField Cardによれば、埋土は上部から黒色土層・褐色土層・暗褐色土層の3層で構成される堆積状況を示すと記載されている。規模は、開口部径98cm±・底部径117cm±・深さ89cm±を計る。埋土から縄文時代中期中葉期に位置づけられる土器片が出土している。

GII-52フラスコ形ピット（図版149fgh；写真図版202a・257c）

遺構の大半が調査範囲外にあるため、全体の形状については明らかではない。検出された部分をみると、開口部・底部とも半円状の平面形を呈する。壁は底面から中位付近まで内傾した立ちあがりをもせたのち、開口部までわずかに外傾する状況にある。底面は平坦なものとなっている。埋土は、黒褐色土層・黒色土層・暗褐色土層・褐色土層の4層で構成され、各層が入組む堆積状況を示している。全体に焼土・炭化物が含まれている。

埋土断面図によれば、規模は開口部径170cm±・底部径230cm±・深さ160cm±を計る。検出された範囲の埋土下位から、縄文時代晩期中葉期に位置づけられる深鉢形や鉢形を呈する完形品土器が3個体出土している。

GⅢ区

GⅢ-51フラスコ形ピット (図版150a)

調査上の手ちがいから、このピットは上半部を削平され埋土の大半を欠く状況で検出された。このため、全体の形状や埋土に関してほとんど不明なものとなっている。検出状況や位置関係から、このピットはFⅢ-5住居址と重複関係にあり、FⅢ-5住居址を南壁付近で切る関係にあるものと考えられる。残存する下底部付近をみると、底面は平坦な状況にあり、円形の平面形を呈する底部は105cm±の径を計る。残存部からの出土遺物はない。

GⅢ-52フラスコ形ピット (図版150b)

位置関係や検出状況から捉えて、このピットはFⅢ-5住居址と重複関係にあり、FⅢ-5住居址を南壁に寄った床面上部から切る関係にあると考えられる。平面形は、開口部が北西から南東の方向に長軸をもつ楕円形を呈し、底部が南北方向に長軸をもつ卵形を呈する。壁は東縁でまっすぐに近い立ちあがりを示すが、その他の部分では内傾する状況にある。底面には小さな起伏が認められる。埋土は褐色～暗褐色土の単層となっていて実測を省略した。規模は、開口部径90cm±×75cm±・底部径97cm±×70cm±・深さ108cm±～110cm±。計る。出土遺物はない。

GⅢ-53フラスコ形ピット (図版150cf ; 写真図版202b)

このピットはFⅢ-5住居址およびGⅢ-55フラスコ形ピットと重複関係にあり、FⅢ-5住居址床面を切る在り方を示すGⅢ-55フラスコ形ピットをさらに切る関係にある。平面形は開口部・底部とも東西に長軸をもつ卵形を呈する。壁は底面から内傾する立ちあがりを示すが、上半部ではこのピット埋土の層相とGⅢ-55フラスコ形ピットの層相が近似しているため判然としない状況にある。床面は平坦なものとなっている。埋土は、黒色土層・黒褐色土層・暗褐色土層で構成され、全体に焼土や炭化物の細粒を多く含んでいる。規模は、開口部径100cm±×80cm±・底部径108cm±×96cm±・深さ151cm±を計る。

出土遺物はないが、埋土上位から粒径6cm±を計る礫が出土している。

GⅢ-54ピット

GⅢ-55フラスコ形ピット北縁部付近を掘りすぎたために、誤ってこの部分をピットと登録してしまった。遺構名変更による混乱を避けるため、この遺構名は欠番扱いとする。

GⅢ-55フラスコ形ピット (図版150deg ; 写真図版202c・258e)

このピットはFⅢ-5住居址およびGⅢ-53フラスコ形ピットと重複関係にあり、FⅢ-5住居址床面を埋土上部から切り、さらにGⅢ-53フラスコ形ピットによって西縁で切られる関係にある。底部に掘りすぎが多く認められ、検出状況はあまりよくない。

GⅢ-53フラスコ形ピットとの切り合いや掘りすぎのため全体の形状を捉えることはできな

いが、残存状況から推定すると、平面形は開口部・底部とも円形を呈するものと考えられる。壁は全体に内傾する状況にある。底面はほぼ平坦なものとなっている。埋土は、黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層で構成され、全体に焼土や炭化物の細粒を多く含んでいる。

規模は残存部で、開口部径110cm±・底部径148cm±を計る。深さは埋土断面図を参考にすると113cm±を計る。出土遺物には、縄文時代後期中葉期～縄文時代晩期に位置づけられる無文の鉢形土器の大形破片などがある。

G III-56ピーカー形ピット (図版150h)

このピットはG III-4住居址北壁検出の際、存在が明らかになったものである。このような検出状況から、埋土の詳細は不明なものとなっている。位置関係からみると、このピットはG III-4住居址と重複関係にあり、G III-4住居址を北壁付近で切る在り方を示している。平面形は開口部・底部とも円形を呈する。壁は底面から開口部にかけて僅かに外反するが、全体的に見ればほぼまっすぐに近い立ちあがりを示している。底面は、北壁付近に比べ南壁際で9cm±低くなる傾きを示す。

規模は、開口部径93cm±・底部径80cm±・深さ29cm±～38cm±を計る。出土遺物はない。

G III-57フラスコ形ピット (図版151a)

このピットはG III-4住居址およびG III-58フラスコ形ピットと重複関係にあり、検出状況や位置関係から捉えて、G III-4住居址を北壁に寄った床面で切り、G III-58フラスコ形ピットによって東壁付近を切られる関係にあると考えられる。調査の手ちがいからG III-4住居址の調査を優先したために遺構の大半に削平が及び、形状や埋土の状況は不明なものとなっている。残存する下底部付近をみると、底面は円形の平面形を呈し、底部径105cm±を計る。出土遺物はない。

G III-58フラスコ形ピット (図版151bc ; 写真図版202de)

このピットは、G III-4住居址およびG III-57フラスコ形ピットと重複関係にあり、G III-4住居址北東隅付近の床面でこれを切り、さらにG III-57フラスコ形ピット東縁を部分的に切る在り方を示している。平面形は、開口部・底部とも円形を呈し、北壁際に副穴が認められる。壁は、北壁を除いて内傾する立ちあがりを示す。底面は平坦なものとなっている。

埋土は、黒褐色土層・黒色土層・褐色土層で構成され、全体に炭化物を含んでいる。規模は開口部径110cm±・底部径120cm±・深さ50cm±を計る。副穴は、径22cm±・底面からの深さ25cm±を計る規模をもつ。埋土上位から縄文土器の細片が出土している。

G III-59フラスコ形ピット (図版151de ; 写真図版202f・203a・258f)

このピットはG III-202焼土遺構の西側に隣接した位置から検出された。G III-202焼土遺構の性格がはっきりしないところから両者の関係についても明らかではないが、少なくともこの

ピットは検出された層準から捉えて、GⅢ-202焼土遺構を切る関係にあると考えられる。平面形は、開口部・底部とも不整な円形を呈する。壁は全体に底面から開口部まで内傾する立ちあがりみせる。底面は平坦なものとなっている。

埋土は、黒褐色土層の単層で構成される。規模は、開口部径130cm±×120cm±・底部径144cm±×130cm±・深さ97cm±を計る。北壁に寄った底面直上から伏せた状態で縄文時代晩期中葉に位置づけられると推定される台付鉢の完形品が1個体出土しているほか、埋土上部から縄文土器の細片が数片出土している。

GⅢ-60フラスコ形ピット（図版151fg；写真図版203bc）

精査の段階で開口部付近が崩落したため、全体の形状については明らかではないが、残存部から推定すると、開口部・底部とも平面形は円形を呈するものと考えられる。埋土断面図を参考にすると、北壁は底面から外方に膨みをもって立ちあがったのち開口部までゆっくり外反する形状を示し、南壁は底面から開口部にかけて内湾する立ちあがりみせる。底面は平坦なものとなっている。

埋土は上部から、褐色土層・暗褐色土層の2層で構成されている。規模は、開口部径90cm±～100cm±（推定）・中位最大径110cm±・底部径105cm±・深さ57cm±を計る。埋土下位から縄文土器の細片が得られている。

GⅢ-61ピーカー形ピット（図版151hi；写真図版203de）

全体に掘りすぎが認められ、検出状況はよくない。残存部から推定すると、平面形は開口部および底部とも東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈するものと考えられる。埋土断面図によれば、壁は底面から開口部までやや外傾する立ちあがりみせる。底面には凹凸がわずかに認められる。埋土はほぼ暗褐色土層で構成される。規模は残存部および埋土断面図を参考にすると、開口部径107cm±×85cm±・底部径96cm±×80cm±・深さ45cm±～50cm±を計るものと推定される。出土遺物はない。

GⅢ-62ピーカー形ピット（図版151jk；写真図版204ac）

平面形は、開口部・底部とも北西から南東の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は、底面から開口部まで外傾する立ちあがりみせる。底面は壁際に比べて中央部付近が4cm±高い凸状を呈する。埋土は、上位が炭化物を僅かに含む暗褐色土層、下位が褐色土層で構成される。規模は、開口部径197cm±×166cm±・底部径154cm±×134cm±・深さ55cm±～59cm±を計る。埋土下位から縄文時代晩期に位置づけられる土器片が出土している。

GⅢ-63フラスコ形ピット（図版152ab；写真図版204bd）

平面形は、開口部が北西から南東の方向に長軸をもつ楕円形を呈し、底部が東西の方向に長軸をもつ卵形～楕円形を呈する。壁は全体に底面から開口部まで内傾する立ちあがりみせる。

底面は北壁際に比べて南壁際で5cm±低くなる緩やかな傾きをみせる。埋土は、黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層の3層で構成され、上位に炭化物を僅かに含んでいる。

規模は、開口部径164cm±×157cm±・底部径206cm±×183cm±・深さ94cm±～99cm±を計る。出土遺物として、埋土上位から縄文土器の細片が出土している。

G III-64ピーカー形ピット (図版152cd ; 写真図版204e・205a)

平面形は、開口部・底部とも南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。底面中央部に浅い副穴が認められる。壁は底面から開口部にかけて外傾気味の立ちあがりを示す。副穴部分を除く底面は平坦なものとなっている。埋土は、暗褐色土層と褐色土層の2層からなり、上部に炭化物を僅かに含む。規模は、開口部径134cm±×116cm±・底部径118cm±×98cm±・深さ39cm±を計る。副穴は、径77cm±×53cm±・底面からの深さ10cm±の規模をもつ。土器片などの出土遺物はない。

G III-65ピーカー形ピット (図版152ef ; 写真図版205bc)

平面形は、開口部、底部とも東西の方向にやや長い径をもつ卵形に近い。壁はほぼまっすぐに近い立ちあがりを示す。底面は平坦なものとなっている。埋土は、暗褐色土層と褐色土層の2層で構成される。規模は、開口部径137cm±×130cm±・底部径125cm±×117cm±・深さ47cm±を計る。出土遺物はない。

G III-66ピット (図版152g)

このピットはG III-8住居址と重複関係にあり、G III-8住居址西壁付近でこれを切る在り方を示している。G III-8住居址検出時に遺構の大部分が削平され、形状および埋土は不明なものとなっている。残存する下底部をみると、底部は南北の方向に長軸をもつ楕円形の平面形を呈し、底面は北壁に寄った部分に比べ南壁に寄った部分が8cm±低くなる傾きをもつ凹凸のみられる状況にある。北壁に寄った部分から副穴状の小ピット(径18cm±・深さ11cm±)が検出されているが、このピットは或いはG III-8住居址に伴う柱穴状ピットかもしれない。底部径119cm±×81cm±を計る。

G III-8住居址床面から縄文時代前期前半期に位置づけられる深鉢形土器の大形破片が出土しているが、この住居址東縁にみられる木根の攪乱を考えれば、或いはこのピットに共伴する出土遺物とも推定される。

G VI区

G VI-51フラスコ形ピット (図版152h)

このピットはG VI-52フラスコ形ピットと重複関係にあり、東壁付近でG VI-52フラスコ形

ピットによって切られる在り方を示している。西壁付近に掘りすぎがみられることや、GVI-52 フラスコ形ピットとの切り合いのため、残存状況はよくない。残存状況から推定すれば、平面形は開口部・底部とも円形を呈すると考えられる。壁は底面から頸部付近まで内傾する立ちあがりをみせたのち、開口部まで外傾する形状を示す。底面は平坦なものとなっている。

埋土は、黒色土層・暗褐色土層・褐色土層で構成される。規模は、開口部径125cm±・頸部径100cm±・底部径143cm±を計る。出土遺物はない。

GVI-52 フラスコ形ピット (図版152i)

このピットはGVI-51 フラスコ形ピットと重複関係にあり、西壁付近でGVI-51 フラスコ形ピット東壁付近を切る在り方を示している。重複する部分の壁を部分的に掘りすぎたため、形状について明確に把握できないが、残存部から推定すると、平面形は開口部・底部とも北西から南東の方向に長軸をもつ楕円形を呈するものと考えられる。壁は、東縁でオーバー・ハング状の形状をみせ、他の部分ではほぼまっすぐな立ちあがりを示す。底面はほぼ平坦なものとなっている。

埋土は、暗褐色土の単層で構成されており、実測を省略した。規模は、開口部径80cm±×65cm±・底部径67cm±×56cm±・深さ121cm±を計る。出土遺物はない。

GVI-53 ビーカー形ピット (図版152j)

このピットはGVI-4 住居址と重複関係にあり、GVI-4 住居址北壁付近でこれを切る在り方を示している。壁自体が軟質なことや埋土の層相と近似していることから、遺構の東壁付近に掘りすぎが認められ、残存状況はよくない。残存部から推定すると、平面形は開口部・底部とも円形を呈するものと考えられる。残存する部分において、壁はほぼまっすぐな立ちあがりを示す。底面は南壁際に比べて北壁際に10cm±低くなる緩かな傾きを呈する。

埋土は暗褐色～黒褐色土層で構成される。規模は残存部から推定して、開口部径147cm±・底部径132cm±・深さ38cm±～48cm±を計るものと考えられる。出土遺物はない。

GVI-54 ビーカー形ピット (図版153ad ; 写真図版205d・206a)

このピットはGVI-55 フラスコ形ピットと重複関係にあり、GVI-55 フラスコ形ピット北半部を切って設けられている。平面形は開口部・底部とも南北の方向に長軸をもつ不整な楕円形を呈する。壁はほぼまっすぐに近い立ちあがりを示し、底面は平坦なものとなっている。埋土は褐色～暗褐色土層で構成され、下位付近には黄褐色土ブロックが含まれている。

規模は、開口部径154cm±×120cm±・底部径131cm±×103cm±・深さ30cm±を計る。埋土中位から熔岩製の石皿が出土している。

GVI-55 フラスコ形ピット (図版153bc)

このピットはGVI-54 ビーカー形ピットと重複関係にあり、南壁に寄った部分を残して遺構

の大半を切られる在り方を示している。切り合いのため全体の形状については明らかではないが、残存部から推定すると、平面形は開口部・底部とも円形を呈するものと思われる。残存する部分についてみると、壁はオーバー・ハング状の形状を呈し、底面は平坦なものとなっている。埋土は焼土・炭化物の細粒を僅かに含む暗褐色土の単層となっている。

残存する部分の規模は、開口部径105cm±（最大径）・底部径110cm±（最大径）・深さ51cm±を計る。出土遺物はない。

G VI—56ピーカー形ピット（図版153e）

このピットはG VI—4住居址と重複関係にあり、位置関係および規模からみてG VI—4住居址をその北壁付近の床面で切るあり方を示している。検出面が不明なところから形状・規模については明らかではないが、残存する下底部付近をみると、底部は円形の平面形を呈し、壁は平坦な底面から外傾気味の立ちあがりを示す。底部径58cm±を計る。出土遺物はない。

G VI—57皿形ピット（図版153f）

このピットもG VI—4住居址と重複関係にあるとみられ、位置関係から捉えて、G VI—4住居址をその東壁付近で切る関係にあると考えられる。検出面が不明なため、形状・埋土などの詳しいことについては明らかではないが、残存部をみると、底部は東西の方向に長軸をもつ楕円形の平面形を呈し、壁は平坦な底面から外傾ぎみの立ちあがりをみせる。底部径141cm±×86cm±を計る。出土遺物はない。

G VI—58フラスコ形ピット（図版153g）

このピットはG VI—1住居址南壁付近に位置する。このピットの検出面が不明なことやG VI—1住居址埋土との層位的な関連に関して吟味を欠いたところから、両者の関係については明確に捉えることができない。平面形は、開口部・底部とも東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は、北縁ではほぼまっすぐな立ちあがりを示し、南縁ではオーバー・ハング状の形状を呈する。底面は平坦でG VI—1住居址床面よりも61cm±低いレベルにある。埋土は、実測を省略したことやField Cardにも記載がないため不明なものとなっている。

規模は、開口部径100cm±×67cm±・底部径90cm±×60cm±・深さ79cm±を計る。出土遺物はない。

G VI—59フラスコ形ピット（図版153hi；写真図版206bc）

平面形は、開口部・底部とも北西から南東の方向に長軸をもつ不整な楕円形を呈する。底面東壁よりに副穴が認められる。壁は直壁ぎみの形状を示す北壁付近を除いて、底面から開口部まで内傾する立ちあがりをみせる。底面は平坦なものとなっている。埋土は、黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層の3層で構成される。上部に焼土の細粒が僅かに認められる。

規模は、開口部径201cm±×153cm±・底部径200cm±×173cm±・深さ53cm±を計る。副穴は径

30cm±・底面からの深さ8cm±の規模をもつ。このピットからの出土遺物はない。

G VI-60ピーカー形ピット (図版153jk ; 写真図版206d・207a)

平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。壁は底面から開口部まで外傾気味の立ちあがりを示す。底面は壁際に比べて中央部付近が7cm±~10cm±低く凹んだ丸底状を呈する。埋土は黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層の3層で構成される。規模は、開口部径120cm±・底部径95cm±・深さ52cm±~59cm±を計る。出土遺物はない。

G VI-61ピーカー形ピット (図版153l)

このピットはG VI-2住居址北西壁付近に位置する。検出面が明らかに捉えられなかったことや埋土の実測を省略したために層位的な関連を把握できない状況にあることなどから、このピットとG VI-2住居址が新旧・共伴いずれの関係にあるのかわからない。

平面形は、開口部・底部とも南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は底面から開口部にかけて外傾する立ちあがりを示す。底面は僅かに凹凸の認められる状況にあり、G VI-2住居址床面より5cm±~8cm±低いレベルにある。規模は、開口部径83cm±×62cm±・底部径62cm±×46cm±・深さ23cm±~26cm±を計る。出土遺物はない。

G VI-62ピット (図版153m)

このピットもG VI-61ピーカー形ピット同様の性格をもち、G VI-2住居址とどのような関係にあるのか把握できないものとなっている。平面形は開口部・底部とも南北の方向に長軸をもつ長方形~半円形に近い不整形な形状を呈する。壁は外傾ぎみの形状を呈する部分とまっすぐな立ちあがりを示す部分とに分かれる。底面は平坦なものとなっており、G VI-2住居址床面よりも11cm±低いレベルにある。規模は、開口部径88cm±×48cm±・底部径82cm±×37cm±・深さ28cm±を計る。出土遺物はない。

G VI-63皿形ピット (図版154ac ; 写真図版206e)

このピットはG VI-2住居址およびG VI-63フラスコ形ピットと重複関係にあり、G VI-2住居址南縁にあってこの住居址を切り、さらにG VI-63フラスコ形ピットによって北壁付近を残して切られる在り方を示している。G VI-63フラスコ形ピットによって遺構の大部分を切られていることから、このピットの形状・規模については明らかではないが、残存部から推定すると、平面形は開口部・底部とも楕円形に近い形状を示すものと考えられる。残存する部分についてみると、壁はまっすぐに近い立ちあがりを示す部分と外傾気味の形状を示す部分とに分かれる。底面は北壁際に比べて南縁で9cm±低くなる緩かな傾きをみせる。埋土は黒褐色土の単層となっている。残存部における規模は、開口部径115cm± (最大径)・底部径90cm±・深さ42cm±~51cm±を計る。出土遺物はない。

G VI-64フラスコ形ピット (図版154bd ; 写真図版206e)

このピットはG VI—2住居址およびG VI—63皿形ピットと重複関係にあり、G VI—2住居址南縁でこれらの遺構を切る在り方を示している。平面形は開口部・底部とも北西から南東の方向に長軸をもつ楕円形～卵形を呈する。北壁に寄った底面に副穴が認められる。壁は、底部から開口部まで内傾する立ちあがりを見せる部分と直壁に近い形状を示す部分とに分けられる。底面は壁際に比べて中央部が5cm±凹んだ状況を示す。

埋土は暗褐色～黒褐色土層で構成される。規模は、開口部径141cm±×120cm±・底部径134cm±×120cm±、深さ70cm±～75cm±を計る。副穴は、径15cm±・底面からの深さ10cm±の規模をもつ。埋土中より、縄文時代中期末葉期に位置づけられる土器片が出土している。

G VI—65ピーカー形ピット (図版154e)

このピットは位置関係からみてG VI—2住居址と重複関係にあり、G VI—2住居址東縁でこれを切る在り方を示している。平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。底面中央部から北壁に寄った部分に副穴が認められる。壁はほぼまっすぐに近い立ちあがりを示し、底面は平坦なものとなっている。埋土は実測を省略したことやField Cardに記載がないため、明らかではない。規模は、開口部径56cm±・底部径51cm±・深さ16cm±を計る。副穴は、径12cm±・底面からの深さ8cm±を計る。出土遺物はない。

G VI—66ピーカー形ピット (図版154f ; 写真図版207b)

東壁付近に部分的に掘りすぎが認められ、検出状況はあまりよくない。残存部から推定すると、このピットの平面形は開口部・底部ともほぼ円形を呈するものと考えられる。残存する部分についてみれば、壁はやや外傾気味の立ちあがりを示す。底面はほぼ平坦なものとなっている。埋土は褐色～暗褐色土層で構成される。残存部の規模は、開口部径165cm±・底部径130cm±・深さ81cm±を計る。出土遺物はない。

G VI—67フラスコ形ピット (図版154h ; 写真図版207b)

このピットはG VI—68ピーカー形ピットと重複関係にあり、G VI—68ピーカー形ピットによって北壁付近を切られる在り方を示す。切り合いのため、全体の形状について明らかではないが、残存部から推定すると、開口部・底部とも円形の形状を呈するものと考えられる。残存する底面北縁に副穴が認められる。壁は底部から開口部まで内傾する立ちあがりを見せる。底面は平坦なものとなっている。埋土は褐色土の単層となっている。

残存部の規模は、開口部径73cm± (最大径)・底部径84cm± (最大径)・深さ58cm±を計る。副穴は、径13cm±・底面からの深さ16cm±の規模をもつ。出土遺物はない。

G VI—68ピーカー形ピット (図版154i j ; 写真図版207bc)

このピットはG VI—67フラスコ形ピットと重複する関係にあり、南壁付近でこれを切る在り方を示す。平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。壁はほぼまっすぐに近い立ちあがり

みせる。底面は平坦なものとなっている。埋土は褐色～暗褐色土層で構成される。

規模は、開口部径130cm±・底部径105cm±・深さ73cm±を計る。出土遺物はない。

G VI-69ピーカー形ピット（図版154gk；写真図版207d・208a）

このピットはG VI-3住居址と重複関係にあり、G VI-3住居址北壁を部分的に切る在り方を示している。平面形は、開口部・底部ともほぼ円形を呈する。壁は底面から開口部にかけてまっすぐに近い立ちあがりをみせる。底面は平坦なものとなっている。埋土は、黒色土層・黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層の4層で構成され、中位付近に焼土の細粒を僅かに含む。

規模は、開口部径117cm±・底部径92cm±・深さ58cm±を計る。出土遺物はない。

G VI-70ピーカー形ピット（図版155ab；写真図版208bc）

平面形は開口部・底部とも円形を呈する。壁は北壁付近でまっすぐな立ちあがりを示すが、他の部分ではやや外傾気味の形状を示す。底面は北壁際に比べて南壁際が4cm±低く傾く状況にある。埋土は褐色～黒褐色土層で構成される。規模は、開口部径125cm±・底部径94cm±・深さ67cm±～71cm±を計る。埋土中位から縄文時代中期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の破片が出土している。

G VI-71フラスコ形ピット（図版155c）

このピットはG VII-2住居址と重複関係にあり、G VII-2住居址西壁付近でこれを切る在り方を示している。北壁付近に掘りすぎが認められ、全体の形状は明らかではないが、残存部から推定すると、平面形は開口部・底部とも東西の方向に長軸をもつ楕円形～卵形を呈するものと考えられる。壁は南縁でオーバー・ハング状の形状を呈し、他の部分はほぼまっすぐな立ちあがりを示す。残存する底面は平坦なものとなっている。埋土は、暗褐色～黒褐色土層で構成され、中位から下位にかけて褐色土ブロックを多く含む。

残存する部分の規模は、開口部径164cm±×110cm±（最大径）・底部径167cm±×120cm±（最大径）・深さ57cm±を計る。出土遺物はない。

G VI-72フラスコ形ピット（図版155de；写真図版208de）

平面形は、開口部・底部とも不整な円形を呈する。壁は北縁でオーバー・ハング状の形状を示すが、他の部分では底面から開口部までほぼまっすぐな立ちあがりを示す。底面は壁際に比べて中央部が7cm±～9cm±低く凹んだものとなっている。埋土は褐色～暗褐色土層で構成される。規模は、開口部径79cm±～87cm±・底部径83cm±・深さ60cm±～69cm±を計る。出土遺物はない。

G VI-73フラスコ形ピット（図版155fg；写真図版208d・209a）

平面形は、開口部が南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈し、底部が東西の方向に長軸をもつ楕円形～卵形を呈する。壁は、北縁がオーバー・ハング状の形状を呈し、その他の部分では垂直または外傾気味の立ちあがりをみせる。底面はほぼ平坦な状況にある。埋土は褐色～暗褐色

土層で構成される。規模は、開口部径103cm±×85cm±・底部径85cm±×67cm±・深さ79cm±を計る。出土遺物はない。

GVI-74フラスコ形ピット（写真図版208d・209b）

整理時の不手際から実測図に不備を生じ、このピットの形状・規模については不明なものとなっている。Field Cardの記載によれば、断面形はフラスコ形を呈し、埋土は暗褐色土の単層で構成されていると述べられている。出土遺物として縄文土器の細片が得られている。他の遺構との重複は認められない。

GVII区

GVII-51フラスコ形ピット（図版155hi；写真図版209cd）

このピットはGVII-1住居址と重複関係にあり、GVII-1住居址床面中央部を切るあり方を示す。平面形は、開口部が南北に長軸をもつ楕円形を呈し、底部が円形を呈する。壁は底面から開口部にかけて内傾する立ちあがりを示す。底面はほぼ平坦なものとなっている。

埋土は黒褐色土層および暗褐色土層の2層で構成され、全体に炭化物を多量に含んでいる。規模は開口部径133cm±×115cm±・底部径150cm±・深さ91cm±を計る。埋土上位から縄文時代晩期に位置づけられる土器片が出土している。

GVII-52皿形ピット（図版156a；写真図版209c）

このピットはGVII-1住居址東壁よりの床面から検出された。GVII-1住居址との新旧関係については明らかではないが、位置関係から考えると、GVII-1住居址を切る関係にあるのではないかと推定される。平面形は開口部・底部とも南北に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は外傾する立ちあがりを示す。底面は南壁付近に比べて北壁付近が9cm±低く傾いている。

規模は、開口部径107cm±×87cm±・底部径95cm±×74cm±・深さ12cm±～21cm±を計る。埋土の状況および出土遺物に関してはField Cardの記載がないため不明なものとなっている。

GVII-53フラスコ形ピット（図版156bh；写真図版209e・210a）

このピットは、GVII-2住居址・GVII-54フラスコ形ピット・GVII-63フラスコ形ピットと重複関係にある。これらの遺構との新旧関係についてみると、このピットはGVII-2住居址1号炉西縁の床面にあつてこの住居址を切り、同時にさらに古期の遺構と考えられるGVII-54フラスコ形ピット西壁付近とGVII-63フラスコ形ピットの東南壁付近を除く大部分を切る在り方を示している。

開口部付近は掘りすぎや崩落のため形状が明らかではないが、残存状況やField Cardの記載などを参考にすると、平面形は底部とともに南北方向に長軸をもつ楕円形を呈するものと考え

えられる。また、壁は埋土断面図を参考にすると、G VII-54 フラスコ形ピットを切る東壁付近で内傾する立ちあがりを示している。底面には若干の起伏が認められる。

埋土は、褐色～暗褐色土層で構成される。残存部の規模は、底部径170cm±×144cm±・深さ43cm±～49cm±を計る。土器片などの出土遺物はないが、埋土上位から粒径15cm±を計る安山岩類亜角礫が出土している。

G VII-54 フラスコ形ピット (図版156fg)

このピットは、G VII-2 住居址・G VII-53 フラスコ形ピット・G VII-56 フラスコ形ピット・G VII-57 フラスコ形ピット・G VII-63 フラスコ形ピットと重複関係にある。これらの遺構との新旧関係および切り合い関係についてみると、このピットは南西壁付近をG VII-63 フラスコ形ピットによって切られ、次にG VII-63 フラスコ形ピットと共に埋土上面を床面とするG VII-2 住居址を載せ、さらに西壁をG VII-53 フラスコ形ピット、南壁をG VII-56 フラスコ形ピット、東壁をG VII-57 フラスコ形ピットによってそれぞれ切られる在り方を示す。

このような他の遺構との切り合いのため残存状況は不良で形状・規模については明らかではないが、残存部から推定すると、平面形は開口部・底部とも円形を呈するものと考えられる。また、埋土断面図を参考にすると、東壁は底面から開口部まで内傾する立ちあがりを示している。残存部の底面は平坦なものとなっている。G VII-53 フラスコ形ピットによって切られる状況にある底面西縁には副穴が認められる。G VII-2 住居址1号炉下位に残存する埋土は、暗褐色土層で構成されている。出土遺物は得られていない。

G VII-55 ピット (図版156e)

このピットはG VII-2 住居址北縁に位置する。G VII-2 住居址自体の形状が不明なことや埋土の実測を省略し、Field Cardにも記載がないため、このピットとG VII-2 住居址との関係は明らかではない。また、検出面が不明なところから形状・規模についても明らかではないが、残存部だけに限ってみると、平面形は開口部・底部とも円形を呈し、壁は外傾する立ちあがりを示している。規模は、開口部径80cm±・底部径74cm±・深さ19cm±を計る。このピットからの出土遺物はない。

G VII-56 フラスコ形ピット (図版 156d ; 写真図版 209f)

このピットはG VII-2 住居址と重複関係にあり、G VII-2 住居址床面で1号炉および2号炉を切る在り方を示している。調査上の手ちがいから埋土の実測を省いたことやField Cardの記載がないところから、埋土については不明なものとなっている。

平面形は、開口部が円形を呈し、底部は南北の方向に長軸をもつ楕円形～隅丸長方形の形状を呈する。底面ほぼ中央に副穴が認められる。壁は東縁でほぼまっすぐな立ちあがりをみせるが、他の部分ではオーバー・ハング状の形状を示す。底面は副穴付近が壁際に比べて5cm±低

く凹んだ状況を呈する。規模は、開口部径103cm±・底部径117cm±×102cm±・深さ61cm±～66cm±を計る。副穴は径35cm±・底面からの深さ34cm±の規模をもつ。埋土からスクレーパーと時期の不明な縄文土器の底部破片が出土している。

G VII-57 フラスコ形ピット (図版 156i j ; 写真図版 210bd)

このピットはG VII-2 住居址東縁に位置する。位置関係から捉えてこのピットはG VII-2 住居址と重複関係にあると思われるが、G VII-2 住居址の形態が明らかでないことやこのピットの検出面が不明確なところから、両者が新旧・共伴いずれの関係にあるのかわからない。

平面形は、開口部・頸部が南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈し、底部は不整な円形を呈する。東壁際の底面に副穴が認められる。壁は底面から頸部付近まで内傾する立ちあがりを見せたのち、開口部まで僅かに外傾あるいは外反する形状を呈する。底面は平坦なものとなっている。埋土は、褐色土層・暗褐色土層・黄褐色土層の3層で構成される。規模は、開口部径150cm±×128cm±・頸部径137cm±×114cm±・底部径157cm±～167cm±・深さ72cm±を計る。副穴は、径60cm±×40cm±・底面からの深さ6cm±の規模をもつ。土器片などの出土遺物はないが、埋土上位から中位にかけて粒径7cm±～8cm±を計る礫が数個出土している。

G VII-58 フラスコ形ピット (図版 157ab ; 写真図版 210c・211a)

このピットはG VII-2 住居址およびG VII-4 住居址の境界付近に位置し、2棟の住居址を切る在り方を示している。開口部北縁に部分的に掘りすぎが認められる。平面形は開口部が南北に長軸をもつ楕円形を呈し、底部は円形を呈する。壁は、北縁から西縁にかけてオーバー・ハング状の形状を示すが、他の部分では底面から中位付近まで内傾する立ちあがりをみせたのち開口部まで外反する形状を呈する。底面は中央部が壁際の部分より7cm±～12cm±低く凹んでいる状況にある。

埋土は、暗褐色土層・黒褐色土層・褐色土層の3層で構成される。規模は、開口部径182cm±×167cm±・底部径170cm±・深さ100cm±～112cm±を計る。出土した層位は明らかではないが、埋土から縄文時代中期中葉期～末葉期に位置づけられる土器片のほかに、磨石や剥片が出土している。また、底面直上部から粒径25cm±を計る安山岩垂角～垂円礫が2個出土している。

G VII-59 フラスコ形ピット (図版 157cd ; 写真図版 211bc)

平面形は開口部・底部とも円形を呈する。壁は底面から開口部にかけて内傾する立ちあがりをみせる。底面は平坦なものとなっている。埋土は黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層・明褐色土層の4層で構成される。規模は、開口部径145cm±・底部径166cm±・深さ102cm±を計る。土器片などの出土遺物はないが、埋土中位付近から粒径7cm±～11cm±を計る垂角礫が数個出土している。

G VII-60 フラスコ形ピット (図版 157ef ; 写真図版 211de)

開口部付近に僅かに掘りすぎが認められるが、平面形は開口部・底部とも円形を呈する。壁は底面から開口部まで内傾する立ちあがりを見せる。底面は平坦なものとなっている。埋土は褐色～暗褐色土層で構成される。規模は、開口部径88cm±・底部径135cm±・深さ98cm±を計る。埋土上部から縄文時代晩期に位置づけられる土器片が出土しているほか、中位付近から縄文時代中期末葉期に位置づけられる土器片やスクレーパーなどの石器が出土している。

G VII-61 フラスコ形ピット (図版 157gh ; 写真図版 211f・212a)

平面形は、開口部が円形を呈し、底部が南北の方向に長軸をもつ卵形を呈する。壁は北縁で中位付近まで膨みをもって立ちあがったのち開口部まで外傾する形状を呈するが、他の部分は底面から開口部まで内傾する立ちあがりを見せる。底面は平坦なものとなっている。埋土は暗褐色～黒褐色土層で構成される。中位付近に炭化物が含まれている。

規模は、開口部径113cm±・底部径141cm±×126cm±・深さ70cm±を計る。出土遺物はない。

G VII-62 フラスコ形ピット (図版 158ab ; 写真図版 212b)

開口部西縁に部分的に掘りすぎが認められるが、平面形は開口部・頸部が東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈し、底部が不整な円形を呈する状況にある。壁は底面から頸部まで内傾したのち、開口部まで外傾する立ちあがりを見せる。底面はほぼ平坦なものとなっている。埋土は褐色～暗褐色土層で構成される。規模は、開口部径131cm±×106cm±・頸部径114cm±×100cm±・底部径135cm±～142cm±・深さ61cm±を計る。埋土から、縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の破片や剥片などが出土している。

G VII-63 フラスコ形ピット (図版 156c)

このピットはG VII-2 住居址 1号炉付近の床面下位から検出された。重複関係についてみると、このピットはG VII-54 フラスコ形ピットを切り、埋土上面に削平をうけてG VII-2 住居址を載せ、G VII-53 フラスコ形ピットによって切られる関係にある。形状・規模・埋土については、このような切り合い関係のため僅かに南縁の下底部付近しか残存していないため明らかではない。残存部についてみると、壁は部分的に内傾する立ちあがりを示し、平坦な底面には副穴が部分的に認められる。この部分の埋土は褐色～暗褐色土層で構成されている。残存部からの出土遺物はない。

G VII-64 フラスコ形ピット (図版 158cd ; 写真図版 212cd)

開口部北縁に木根による攪乱をうけているため、開口部の形状については明らかではないが、残存部から推定すると底部同様円形の平面形を呈するものと考えられる。壁は東縁でほぼ垂直な立ちあがりを示すが、西縁ではオーバー・ハング状の形状を呈する。底面には僅かに起伏が認められる。埋土は、黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層で構成される。規模は開口部径190cm± (残存部最大径)・底部径193cm±・深さ63cm±～76cm±を計る。出土遺物はない。

G VII—65ビーカー形ピット (図版 159ab ; 写真図版 212ef)

平面形は、開口部・底部とも東西の方向に長軸をもつ卵形を呈する。壁は底面から開口部にかけてほぼまっすぐな立ちあがりを示す。底面には起伏が認められる。埋土は褐色～暗褐色土層で構成され、下位に炭化物が含まれている。規模は、開口部径166cm±×142cm±・底部径132cm±×120cm±・深さ63cm±～76cm±を計る。出土遺物はない。

G VII—66フラスコ形ピット (図版 158e)

このピットはG VII—8住居址床面下位から検出された。重複関係についてみれば、このピットはG VII—67フラスコ形ピットによって遺構の大部分を切られ、さらに埋土上部を削平されG VII—8住居址を載せる関係にある。

残存する下底部北縁についてみると、壁は部分的に内傾する立ちあがりをみせ、底面は平坦な状況を呈する。残存部を覆う埋土については、実測を省いたことや Field Card の記載がないため不明なものとなっている。出土遺物はない。

G VII—67フラスコ形ピット (図版 158fh ; 写真図版 213a)

このピットはG VII—66フラスコ形ピットと共にG VII—8住居址南西壁付近の床面下位から検出された。重複関係についてみると、このピットは北壁付近でG VII—66フラスコ形ピットを切り、さらに埋土上面にG VII—8住居址を載せる在り方を示す。

平面形は開口部・底部とも不整な円形を呈する。西壁に寄った底面に副穴が認められる。壁は、G VII—66フラスコ形ピットを切る北壁付近でまっすぐな立ちあがりを示すが、その他の部分ではオーバー・ハング状の形状をみせる。底面は、副穴付近が壁際に比べて10cm±低く凹んだ状況を呈する。埋土は、褐色～暗褐色土層群で構成され、全体に焼土・炭化物の細粒を多く含んでいる。

規模は、開口部径140cm±～150cm±・底部径150cm±～163cm±・深さ126cm±～136cm±を計る。副穴は、径45cm±・底面からの深さ7cm±を計る。埋土上位から縄文時代中期末葉期に位置づけられる土器片が出土している。

G VII—68フラスコ形ピット (図版158gi ; 写真図版 213b)

このピットはG VII—8住居址東壁付近に位置する。位置関係からみれば、このピットはG VII—8住居址と重複関係にあると思われるが、G VII—8住居址固有の埋土との層位関係を識別できず、両者の新旧関係は明らかではない。また、壁および底面が軟質なため全体に掘りすぎが及び、形状・規模を明確に把握できなかった。

埋土断面を参考にすれば、壁は頸部付近まで内傾したのち開口部まで外傾する形状をみせ、底面には起伏が認められる。埋土は、褐色～暗褐色土層で構成される。層中には焼土・炭化物の細粒が多く含まれている。出土遺物として、縄文時代晩期に位置づけられる土器片がある。

G VII—69 フラスコ形ピット (図版 159cf ; 写真図版 213cd)

このピットはG VII—71 フラスコ形ピットと重複関係にあり、東壁付近でこれを切る在り方を示している。

開口部は部分的に木根による攪乱をうけていることから形状は明らかではないが、残存部から推定すると、頸部および底部同様円形の平面形を呈するものと考えられる。西壁によった底面には、南北方向に長軸をもち、隅丸方形の平面形を呈する副穴が認められる。壁は底面から頸部付近まで内傾する立ちあがりをみせたのち、開口部まで僅かに外反する形状を示す。底面は中央部が壁際よりも5cm±低く凹んだ状況を呈する。埋土は、黒色土層・黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層などで構成される。

規模は、開口部径194cm±(残存部最大径)・頸部径172cm±・底部径244cm±・深さ203cm±～208cm±を計る。副穴は、径115cm±×69cm±・深さ22cm±～24cm±の規模をもつ。埋土中位から下位にかけて、縄文時代中期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の大形破片や石錐などの石器が出土している。

G VII—70 フラスコ形ピット (図版 160ab ; 写真図版 213ef・259f)

このピットはG VII—5 住居址およびG VII—6 住居址と重複関係にあり、これらの住居址を切る関係にある。重複関係にあるこれらの住居址の調査を優先したために、このピットの下底部付近を除いた部分の形状・規模については明らかではない。埋土断面によれば、壁は、頸部付近まで内反する立ちあがりをみせたのち、開口部付近まで垂直に連続する形状を示す。埋土は、暗褐色土層・褐色土層・黄褐色土層などで構成される。

残存する下底部付近をみれば、底面はほぼ平坦な状況を呈し、東西方向に長軸をもつ楕円形を呈する。規模は、底部径230cm±×210cm±・深さ142cm±を計る。北壁に寄った埋土下位から縄文時代中期末葉期に位置づけられる深鉢形土器が倒立の状態出土している。

G VII—71 フラスコ形ピット (図版 159de ; 写真図版 214a)

このピットはG VII—69 フラスコ形ピットと重複関係にあり、西縁を切られる在り方を示している。このため、全体の形状や規模は不明なものとなっているが、残存部から推定すると開口部・底部とも円形の平面形を呈するものと考えられる。残存する壁は底面から開口部にかけて内傾する立ちあがりを示す。底面は平坦なものとなっている。

残存する部位を覆う埋土は、暗褐色～黒褐色土層で構成される。残存部の規模は、開口部径128cm±・底部径135cm±・深さ47cm±を計る。土器片などの出土遺物はないが、底面北東縁に密着する状況で粒径35cm±を計る安山岩類垂角礫が出土している。

G VII—72 フラスコ形ピット (図版 160cd ; 写真図版 214b)

このピットはG VII—4 住居址東壁付近にあって、G VII—4 住居址を切る在り方を示す。位置

的に見て、G VII—201焼土遺構とも重複関係にあると思われるが、G VII—201焼土遺構が残片的なあり方を示すことやField Cardに客観的な切り合い関係の記載を欠くため両者の新旧関係については不明なものとなっている。開口部が調査時に崩落したため、この部分の形状・規模は不明なものとなっている。

残存部について見れば、底部は南北に長軸をもつ卵形を呈し、壁は北縁でオーバー・ハング状の形状を呈する。底面は平坦な状況を呈する。埋土は、黒色土層・暗褐色土層・褐色土層で構成され、中位に多量の炭化物の細粒を含む。残存部の規模は、底部径160cm±×140cm±・深さ112cm±を計る。土器片などの出土遺物はないが、埋土中位から下位にかけて粒径24cm±～30cm±を計る安山岩亜角礫が2個出土している。

H II区

H II—51ビーカー形ピット (図版161ab ; 写真図版214cd)

北壁付近に掘りすぎが部分的に認められるが、このピットの平面形は開口部・底部とも円形を呈する。壁は全体に僅かに外傾する立ちあがりを見せる。底面は壁際に比べて中央部付近が3cm±～5cm±低く少し凹んだ状況にある。埋土は、黒褐色土層と暗褐色土層の互層となっていて、中位から下位にかけて焼土を僅かに含んでいる。規模は、開口部径110cm±・底部径90cm±を計る。出土遺物はない。

H III区

H III—51フラスコ形ピット (図版161cd ; 写真図版214e)

このピットはH III—12住居址群と重複関係にあり、H III—12住居址群で最も新期とみられるH III—12o 住居址を南東壁に寄った床面付近で切る在り方を示す。平面形は、開口部が南北に長軸をもつ楕円形を呈し、底部は円形の形状を呈する。壁は底面から開口部にかけて内傾する立ちあがりを見せる。底面は壁際に比べ中央部が5cm±～10cm±凹んでいる。

埋土は基本的に暗褐色土層・黒褐色土層・褐色土層の3層で構成される。上位付近には、焼土・炭化物が多く含まれている。出土遺物はない。

H III—52ピット (図版161e)

このピットは、H III—12住居址群床面精査時に床面南東付近から同時に検出された。検出面が不明なところからH III—12住居址群との関係について明らかではないが、位置関係からみてこのピットはH III—12住居址群の中で最も新期の住居址と考えられるH III—12o 住居址を切る

関係にあるものと推定される。検出面が不明なところから、このピットの形状および埋土についても不明なものとなっている。残存する下底部付近をみると、底部は北西から南東の方向に長軸をもつ楕円形の平面形を呈し、残存する壁は底面から外傾する立ちあがりを示している。残存する部分において底部は径194cm±×124cm±を計り、平坦な底面は周辺のHⅢ-12住居址群に伴う床面よりも7cm±低いものとなっている。出土遺物についても明らかではない。

HⅢ-53皿形ピット（図版161fg；写真図版214f）

平面形は、開口部・底部とも南北に長軸をもつ楕円形を呈する。底部付近全体に掘りすぎが多く認められるため底面および壁の形状・規模について明らかではないが、埋土断面図などを参考にすると、底面には凹凸が認められ、壁は外傾する形状を示す。埋土は、暗褐色土の単層で構成される。残存部や埋土断面図を手がかりとすれば、このピットの規模は、開口部径278cm±×198cm±・底部径257cm±×180cm±・深さ20cm±を計るものと推定される。出土遺物はない。

HⅢ-54皿形ピット（図版162a）

このピットは、HⅢ-12住居址群と重複関係にあり、この住居址群に伴う2号炉およびその周辺の床面を切る在り方からみて、HⅢ-12住居址群の中で最も新期の住居址と考えられるHⅢ-12o住居址を切る時期に位置づけられるものと推定される。

残存する下底部付近をみると、底部は東西方向に長軸をもつ楕円形の平面形を呈し、径127cm±×48cm±を計る。また、底面は周辺のHⅢ-12住居址群床面（低位面）に比べ33cm±～42cm±低いレベルにある。

埋土については実測を省略したが、Field Cardによれば褐色～暗褐色土層で構成されると記載されている。出土遺物としては、剝片類が多く出土している。

HIV区

HIV-52ピット

検出された形態や埋土の周辺部との層位関係などを検討した結果、この遺構はむしろ住居址としての要素を多く備え、蓋然性の高いものであるとの結論に達した。したがって、ここではこの遺構をHIV-8住居址として登録し、HIV-52ピットという遺構名は欠番扱いとする。

HIV-53皿形ピット（図版162bf）

埋土と壁や底部を構成する土層の層相が近似していることから、全体に掘りすぎが認められ、検出状況は不良なものとなっている。このピットはHIV-54ピットと重複関係にあり、南壁付近でHIV-54ピットを切る在り方を示している。埋土土層断面を参考にすれば、このピットの

断面形は皿形を呈し、底面には凹凸が認められる。埋土は黒褐色～暗褐色土層で構成される。

残存部および埋土土層断面を参考にすると、このピットは開口部・底部とも円形を基調とする平面形を呈し、深さ35cm±～40cm±の規模をもつものと推定される。出土遺物はない。

HIV-54ピット（図版162dg；写真図版215a）

このピットはHIV-53皿形ピットと重複関係にあり、北縁でHIV-53皿形ピットに切られる在り方を示している。全体に掘りすぎが多く認められるほか、東壁付近を木根による攪乱で消失しているため形状・規模については殆ど明らかではない。埋土土層断面を参考にすれば、断面形は皿形に近く、底面には凹凸が認められる。また、埋土は黒褐色～暗褐色土層で構成されている。残存部についてみれば、底面南寄りに副穴と捉えられる小ピット（径21cm±・深さ7cm±）が認められる。出土遺物として、底面直上から縄文時代前期前半期に位置づけられる土器片が出土している。

HVI区

HVI-51フラスコ形ピット（図版162ce；写真図版215b）

平面形は開口部・底部とも円形を呈する。壁は底面から開口部まで内傾する立ちあがりを見せる。底面は平坦なものとなっている。埋土は上位から、黒褐色～黒色土層・暗褐色土層・褐色土層の3層で構成される。規模は、開口部径174cm±・底部径223cm±・深さ196cm±を計る。出土遺物はない。

HVI-52フラスコ形ピット（図版163ac；写真図版215cde）

このピットはHVI-53フラスコ形ピットと重複関係にあり、西縁でHVI-53フラスコ形ピットを切る在り方を示している。調査上の不手際から、東壁付近を下底部だけ残して掘り上げたため、全体の形状・規模は明らかではない。残存部についてみれば、底部は円形の平面形を呈し、底面中央に副穴が認められる。南壁から西壁にかけて、壁はオーバー・ハング状の形状を呈する。底面は平坦なものとなっている。埋土は、黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層で構成され、それぞれの層が入り組む状況を呈する。中位付近には炭化物や焼土の細粒が含まれている。

残存部の規模は、開口部径130cm±（最大径）・底部径160cm±・深さ235cm±を計る。副穴は径26cm±・底面からの深さ23cm±を計る。出土遺物はない。

HVI-53フラスコ形ピット（図版163bd；写真図版215cde）

このピットはHVI-52フラスコ形ピットと重複関係にあり、西壁付近をHVI-52フラスコ形ピットに切られている。したがって、このピットの形状・規模については明らかではないが、残存状況から推定すると、開口部および頸部は円形の平面形を呈し、底部は東西の方向に長軸

をもつ楕円形を呈するものと考えられる。

残存部について見れば、壁は底面から頸部にかけて内湾する立ちあがりをみせたのち、開口部まで僅かに外傾する形状を示す。底面は平坦で、中央部に副穴が認められる。埋土は褐色～暗褐色土層で構成され、下位に黄褐色土ブロックが多く含まれている。規模は、開口部径211cm±（最大径）・頸部径193cm±（最大径）・底部径243cm±（最大径）・深さ180cm±を計る。副穴は、径37cm±・底面からの深さ12cm±を計る。埋土中位から縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器1個体と石鏃や剥片類などの石器も出土している。また、副穴直上部から粒径53cm±を計る扁平な礫も出土している。

HVI-54ピーカー形ピット（図版163e；写真図版215f）

平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。壁は底面から開口部までほぼまっすぐに立ちあがる。底面は中央部で壁際より4cm±低く凹んだものとなっている。埋土は暗褐色土の単層で構成される。規模は、開口部径122cm±・底部径106cm±・深さ45cm±を計る。

埋土から縄文時代中期中葉期に位置づけられる土器片が出土している。

HVI-55ピーカー形ピット（図版163f；写真図版216a）

平面形は開口部・底部とも円形を呈する。壁は底面から開口部にかけてほぼまっすぐな立ちあがりを示す。底面は平坦なものとなっている。埋土は黒褐色土の単層となっている。規模は開口部径109cm±・底部径94cm±・深さ38cm±を計る。出土遺物はない。

HVI-56フラスコ形ピット（図版163hi；写真図版216bc）

このピットはHVI-77フラスコ形ピットと重複関係にあり、北壁付近でこれを切る在り方を示している。全体に掘りすぎが認められ、形状・規模については明らかではない。埋土断面をみると、壁は北縁中位付近で外方に膨む形状を呈し、南縁では中位付近まで内傾したのち開口部まで外傾する形状を呈する。底面は平坦なものとなっている。埋土は、褐色～暗褐色土層で構成され、下位に炭化物を僅かに含む状況にある。深さは84cm±を計る。出土遺物はない。

HVI-57ピット（図版164a）

このピットはHVI-1住居址床面北縁に位置する。検出面が明らかでないことや西縁に掘りすぎがみられるため、形状・規模については明らかではない。残存部の形状や位置関係からみて、HVI-1住居址と新旧・共伴いずれかの関係をもつと思われるが、それについても不明なものとなっている。

HVI-58ピーカー形ピット（図版164b；写真図版216d）

平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。壁は底面から開口部にかけて外傾気味の立ちあがりを示す。底面は壁際に比べて中央部が4cm±低く凹んだ状況を呈する。埋土は、黒褐色土の単層で構成されている。規模は、開口部径114cm±・底部径105cm±・深さ33cm±～37cm±を

計る。出土遺物はない。

HVI-59ピーカー形ピット（図版164c；写真図版216e）

平面形は、開口部・底部とも南北の方向に長軸をもつ楕円形～隅丸長方形を呈する。底面は平坦なものとなっている。埋土は黒褐色土の単層で構成されている。また、Field Cardには層中に火山灰・パミス・スコリア等が粒状にみられると記載されている。規模は、開口部径154cm±×115cm±・底部径148cm±×98cm±・深さ35cm±を計る。出土遺物はない。

HVI-60ピーカー形ピット（図版164d；写真図版216f）

このピットはHVI-61ピーカー形ピットの西側に位置する。位置関係からみて、HVI-61ピーカー形ピットと東壁付近で重複する関係にあると思われるが、両ピットの埋土が黒褐色土の単層で構成され、層相が近似したものとなっていることから、新旧関係を判別できなかった。

西壁付近に掘りすぎが認められるが、平面形は開口部・底部とも東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は外傾する立ちあがりを示す。底面は壁際に比べて6cm±～10cm±低く凹んでいる。規模は開口部径156cm±×137cm±・底部径120cm±×112cm±・深さ52cm±～62cm±を計る。出土遺物はない。

HVI-61ピーカー形ピット（図版164e；写真図版216f）

このピットはHVI-60ピーカー形ピットの東側に位置する。位置関係からみれば、HVI-60ピーカー形ピットと重複関係にあると推定されるが、両ピットの埋土の層相が近似したものであるため新旧関係は不明なものとなっている。HVI-60ピーカー形ピットと接する西壁付近に掘りすぎが認められるため、全体の形状・規模について明確に把握することはできないが、残存部から推定すると平面形は開口部・底部とも南北に長軸をもつ卵形～楕円形を呈すると考えられる。

残存部についてみると、壁は外傾気味の立ちあがりを示し、底面は平坦なものとなっている。埋土は黒褐色土の単層で構成される。規模は開口部径135cm±（最大径）・底部径121cm±（最大径）・深さ35cm±を計る。出土遺物はない。

HVI-62皿形ピット（図版164g；写真図版216f）

平面形は開口部・底部とも南北の方向に長軸をもつ卵形を呈する。壁は底面から開口部まで外傾する立ちあがりを見せる。底面は平坦なものとなっている。埋土は暗褐色～黒褐色土の単層で構成される。規模は、開口部径109cm±×100cm±・底部径95cm±×88cm±・深さ15cm±を計る。出土遺物はない。

HVI-63ピーカー形ピット（図版164f）

このピットはHVI-2住居址南西壁付近に位置し、HVI-2住居址を切る在り方を示す。また南縁で重複関係にあるHVI-66フラスコ形ピットを切る関係にある。

平面形は開口部・底部とも南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は全体に外傾する形状を呈する。底面には起伏が認められる。埋土は褐色～暗褐色土層で構成される。規模は、開口部径240cm±×158cm±・底部径202cm±×108cm±・深さ57cm±～65cm±を計る。出土遺物はない。

HVI-64フラスコ形ピット（図版165ad；写真図版217ab）

このピットはHVI-3住居址西壁よりの床面にあつてこの住居址と東側に隣接するHVI-65フラスコ形ピットを切る在り方を示している。開口部東縁は調査時に崩落したため、形状が不明なものとなっている。Field Cardの記載によれば、開口部も底部同様円形を呈すると記されている。底面ほぼ中央付近に副穴が認められる。

残存部についてみれば、壁は全体に内傾する立ちあがりをみせる。底面は平坦なものとなっている。埋土は、褐色～暗褐色土層で構成される。埋土中位～下位にかけて焼土が堆積しているほか、全体に多量の炭化物が含まれている。規模は残存部で、開口部径240cm±・底部径270cm±・深さ194cm±を計る。副穴は、径58cm±・底面からの深さ54cm±の規模をもつ。

埋土中位から縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の大形破片のほかに剝片類が出土している。また、検出面付近からは縄文時代中期末葉期に位置づけられる土器片が出土している。

HVI-65フラスコ形ピット（図版 165bc；写真図版 217ac）

このピットは、西壁付近でHVI-64フラスコ形ピットに切られる在り方を示している。このため全体の形状や規模については不明なものとなっているが、残存部から推定すると平面形は開口部・底部とも円形を呈していたものと考えられる。

残存部について見れば、壁は底面から開口部付近まで内傾する状況にある。底面は平坦なものとなっている。埋土は褐色～暗褐色土層で構成される。残存部の規模は、開口部径218cm±（最大径）・底部径252cm±（最大径）・深さ125cm±を計る。

埋土下位から縄文時代前期末葉期～縄文時代中期初頭期に位置づけられる深鉢形土器の大形破片や円盤状土製品・スクレーパー類が出土している。

HVI-66フラスコ形ピット（図版 164h）

このピットは、HVI-63ピーカー形ピットおよびHVI-67フラスコ形ピットと重複関係にあり、南壁に相当する部分をHVI-67フラスコ形ピットによって切られ、北縁上部にHVI-63ピーカー形ピットを載せる在り方を示す。切り合いのため、全体の形状・規模については明らかではないが、残存部から推定すると、平面形は開口部・底部とも南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈するものと考えられる。

残存部についてみると、壁は底面から開口部にかけて内傾する立ちあがりを示し、底面は全

く平坦なものとなっている。埋土は、Field Cardの記載によれば褐色～暗褐色土層の単層で構成されていると述べられている。規模は、開口部径108cm±（短軸径）～123cm±（最大径）・底部径132cm±（短軸径）～142cm±（最大径）・深さ52cm±を計る。出土遺物はない。

HVI-67フラスコ形ピット（図版 164jk；写真図版 217d）

このピットは、HVI-66フラスコ形ピットおよびHVI-68フラスコ形ピットと重複関係にある。北壁付近でHVI-66フラスコ形ピットを切り、さらに西壁付近でHVI-68フラスコ形ピットを切る在り方を示している。開口部の形状は、他の2基のピットと重複する部分が不明なため明らかではない。

残存部についてみれば、壁はオーバー・ハング状の形状を呈し、底面はほぼ平坦なものとなっている。底部は円形の平面形を呈し、そのほぼ中央に副穴が認められる。規模は、残存部で開口部径130cm±・底部径172cm±・深さ137cm±を計る。副穴は、径28cm±・底面からの深さ16cm±の規模をもつ。埋土は褐色～暗褐色土層で構成され、上位と下位に部分的に焼土・炭化物の細粒を含んでいる。

当ピットからの出土遺物としては、縄文時代前期末葉期に位置づけられる土器片が最も多く、僅かではあるが、埋土上位から得られた縄文時代中期に位置づけられる土器がこれに続く。また、磨製石斧やスクレーパーなどの石器類も得られている。

HVI-68フラスコ形ピット（図版 164i）

このピットはHVI-67フラスコ形ピットと重複関係にあり、東壁に相当する部分でこれに切られる残存状況を示している。このため、全体の形状は明らかではないが、残存部から推定すると、平面形は開口部・底部とも円形を呈していたものと思われる。

残存する部分についてみれば、壁はオーバー・ハング状の形状を呈し、底面は平坦なものとなっている。埋土は、断面の実測を省略し、Field Cardの記載もないため不明なものとなっている。残存部の規模は、開口部径112cm±（最大径）・底部径120cm±（最大径）・深さ124cm±を計る。埋土から出土した遺物として、縄文時代前期末葉期～縄文時代中期初頭期に位置づけられる深鉢形土器の破片のほかにスクレーパー類がある。

HVI-69フラスコ形ピット（図版 166ag；写真図版 217e・261c）

このピットはHVI-71フラスコ形ピットの北縁に位置し、遺構の大部分がHVI-71フラスコ形ピットに切られる残存状況を示している。したがって、この遺構の形状・規模については明らかではない。僅かに残存する北縁下底部付近についてみれば、壁はオーバー・ハング状の形状を呈し、底面は平坦なものとなっている。この部分の埋土は褐色土の単層で構成されている。底面はHVI-71フラスコ形ピット底面より110cm±高いレベルに位置する。埋土中から縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の破片が出土している。

HVI-70 フラスコ形ピット (図版 166be ; 写真図版 218ab)

このピットはHVI-71フラスコ形ピットの南西縁に位置し、遺構の約半分程度をHVI-71フラスコ形ピットに切られている残存状況を示している。このため、全体の形状、規模については不明なものとなっている。

残存部についてみれば、壁は西縁でオーバー・ハング状の形状を呈し、平坦な底面には副穴が認められる。埋土は、褐色～暗褐色土層で構成され、上位から中位にかけて焼土や炭化物の細粒の包含が認められる。残存部の規模は、開口部径128cm±(最大径)・底部径144cm±(最大径)・深さ159cm±を計る。副穴は、径35cm±・底面からの深さ20cm±の規模をもつ。

埋土最下部から縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の破片が出土している。

HVI-71 フラスコ形ピット (図版 166cf ; 写真図版 218c・261cde)

このピットは、HVI-69フラスコ形ピット・HVI-70フラスコ形ピット・HVI-73フラスコ形ピットなど3基の遺構と重複関係にあり、これらのピットをそれぞれ、北壁・東壁・西壁の各部位で切る在り方を示している。これらの3基のピットと切り合う部分に掘りすぎがあったことや崩落のため、開口部および壁の全体の形状・規模については明らかではないが、調査員のField Cardによれば、開口部の平面形は底部と同じ円形を呈し、壁は底面から開口部まで内傾する状況にあるとの観察記録が行なわれている。

残存部についてみると、底部は円形を呈し、底面は平坦で、その中央部と南壁に寄った部分には副穴(P₁・P₂)が認められる。埋土は、褐色土層・暗褐色土層・黒褐色土層などで構成され、各層が入組んだ堆積状況を示している。埋土中位には焼土の堆積が観察されるほか、下位付近には多量の炭化物の含有が認められる。残存部の規模は、底部径230cm±・深さ223cm±を計る。副穴はそれぞれ、P₁(径37cm±・底面からの深さ42cm±)・P₂(径50cm±×40cm±・深さ52cm±)の規模をもつ。

埋土下位から底面直上部にかけて縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器2個体と磨石が出土している。

HVI-72ピット

このピット状の凹みは木根による攪乱のため形成されたもので、誤って遺構登録されたものである。したがって当遺構名は欠番として扱うことにする。

HVI-73 フラスコ形ピット (図版 166d ; 写真図版 218de・261e)

このピットはHVI-71フラスコ形ピットと重複関係にあり、北西壁付近で切られる残存状況を呈する。このため、全体の形状・規模を把握することはできないが、残存状況から推定すると平面形は開口部・底部とも北西から南東の方向に長軸をもつ楕円形を呈するものと考えられる。

残存部についてみると、壁は底面から開口部まで内傾する立ちあがりのみせ、底面には起伏

が認められる。また、底面中央付近には副穴が存在する。埋土は、褐色～暗褐色土層で構成され、上部に焼土・炭化物の細粒の含有が認められるほか、下位に黄褐色土ブロックが多く含まれている。残存部の規模は、開口部径200cm±(長軸最大径)×148cm±(短軸径)・底部径214cm±(長軸最大径)×195cm±(短軸径)・深さ156cm±～167cm±を計る。副穴は、径45cm±・底面からの深さ11cm±～16cm±の規模をもつ。

土器などの出土遺物はないが、HVI-71フラスコ形ピットと切り合う部分に寄った底面には粒径10cm±の垂角礫と粒径25cm±の垂円礫が存在するとField Cardに記載されている。

HVI-74フラスコ形ピット (図版 167ab ; 写真図版 218f)

平面形は開口部・底部とも不整な円形を呈する。壁は、南縁で底部から中位付近まで内傾する立ちあがりをみせたのち開口部までゆるやかに外傾する形状を示すが、他の部分ではオーバー・ハング状の形状を呈する。底面には凹凸が認められ、とりわけ中央部は壁際に比べて5cm±～12cm±低くなっている。埋土は褐色～暗褐色土層で構成され、層中には軽石の細粒や炭化物が含まれている。規模は、開口部径135cm±～140cm±・底部径160cm±～170cm±・深さ165cm±～177cm±を計る。土器片などの出土遺物はないが、埋土下位から粒径13cm±～16cm±の垂円～垂角礫が数個出土している。

HVI-75フラスコ形ピット (図版167cf ; 写真図版 219ab)

このピットは、HVI-4住居址・HVI-5住居址・HVI-76フラスコ形ピットなどの遺構と重複関係にある。これらの遺構との切り合い関係について具体的に述べると、このピットはHVI-4住居址を切り、HVI-5住居址およびHVI-76フラスコ形ピットによって切られる在り方を示している。このピットより新期の遺構であるHVI-5住居址およびHVI-76ピット構築時に削剝を南側半分を受けているため、全体の形状・規模については明らかではない。残存する部位は北側半分と南側半分の下底部付近だけとなっている。

残存部についてみると、北側開口部は半円形の形状を呈し、底部はほぼ円形の平面形を呈する。北壁は底面から開口部までオーバー・ハング状の立ちあがりをみせ、底面はほぼ平坦なものとなっている。埋土は、褐色土層・暗褐色土層で構成される。埋土全体に炭化物が含まれているが、とくに中位付近には薄くレンズ状にその集中が認められる。

残存部の規模は、開口部径200cm±(最大径)・底部径214cm±・深さ193cm±を計る。土器片などの出土遺物はないが、埋土から磨石が出土している。

HVI-76フラスコ形ピット (図版 167de ; 写真図版 219cd)

このピットは、HVI-4住居址・HVI-5住居址・HVI-75フラスコ形ピットと重複関係にある。これらの遺構との切り合い関係についてみれば、このピットはHVI-4住居址およびHVI-75フラスコ形ピットを切るが、HVI-5住居址によって上部を切られる残存状況を示して

いる。残存部を見ると、壁は北縁ではほぼまっすぐな立ちあがりを示すが、南縁では底面から内傾する立ちあがりを呈する。底面には起伏が認められる。残存部の埋土は、褐色～黒褐色土層で構成され、全体に焼土や炭化物の細粒を含む混濁した堆積状況を示している。円形の平面形を呈する底部は、径195cm±を計る。

残存部の埋土から、縄文時代中期中葉期に位置づけられる深鉢形土器の大形破片や石鏃が出土している。

HVI-77フラスコ形ピット（図版 163g；写真図版 216b・219e）

このピットはHVI-56フラスコ形ピットと重複関係にあり、南壁付近をこれに切られるあり方を示している。このピットはHVI-56フラスコ形ピットの精査に伴って付随的に検出され、埋土に関しては不明なものとなっている。残存部から推定すると平面形は開口部・底部とも円形を呈するものと推定される。

残存する部分は、壁がオーバー・ハング状の形状を示し、底面が平坦なものとなっている。規模は、開口部径65cm±・底部径78cm±・深さ58cm±を計る。出土遺物はない。

HVI-78フラスコ形ピット（図版 168a；写真図版 219f）

このピットはHVI-4住居址と重複関係にあり、HVI-4住居址を北壁付近で切る在り方を示している。開口部は崩落のため形状・規模が明らかではない。底部は円形を呈する。壁は、直壁の形状を示す東縁を除いて、オーバー・ハング状の形状を呈する。底面は東壁際の部分が他の部分より8cm±～14cm±低く傾いたものとなっている。埋土は上位から暗褐色土層・黒褐色土層・褐色土層の3層で構成されている。

規模は、底部径124cm±・深さ116cm±～122cm±を計る。調査手順の誤りから出土層位については明らかではないが、埋土から出土した土器片を見ると、縄文時代前期末葉期に位置づけられるものが最も多く、次に縄文時代中期末葉期に位置づけられるものがこれに続く。僅かではあるが、縄文時代中期前半期ととらえられる土器片も出土している。このほか、円盤状土製品・半円状扁平打製石器・剝片類も出土している。

HVI-79フラスコ形ピット（図版 168bd；写真図版 220ab）

このピットはHVI-4住居址と重複関係にあり、HVI-4住居址を東壁付近で切る在り方を示している。平面形は開口部・底部とも不整な円形～楕円形を呈する。壁は底面から開口部まで内傾する立ちあがりをみせる。底面は、北縁から南縁の部分にかけて14cm±～17cm±低く傾く状況にある。埋土は、褐色～暗褐色土層で構成され、上位には炭化物や焼土の細粒が含まれている。規模は、開口部径140cm±～165cm±・底部径197cm±～222cm±・深さ194cm±～211cm±を計る。

埋土上部から縄文時代中期前半期に位置づけられる深鉢形土器の破片や磨製石斧・磨石・剝

片類が出土している。

HVI-80 フラスコ形ピット (図版 168ce ; 写真図版 220cd)

平面形は、開口部・頸部が東西に長軸をもつ楕円形を呈し、底部が円形を呈する。底面はほぼ中央に副穴が認められる。壁は底面から頸部付近まで内傾する立ちあがりをみせたのち、開口部まで外傾する形状を呈する。底面は平坦である。埋土は、褐色土層と暗褐色土層の互層となっている。下位に多く炭化物が含まれている。

規模は、開口部径 $211\text{cm}\pm\times 163\text{cm}\pm$ ・頸部径 $193\text{cm}\pm\times 154\text{cm}\pm$ ・底部径 $228\text{cm}\pm$ ・深さ $199\text{cm}\pm$ を計る。副穴は、径 $45\text{cm}\pm$ ・底面からの深さ $23\text{cm}\pm$ の規模を有する。

埋土下位から縄文時代前期末葉期～中期初頭期に位置づけられる深鉢形土器の大形破片のほか、半円状扁平打製石器・磨製石斧・スクレーパー・剥片類などが出土している。

HVI-81 ビーカー形ピット (図版 168f ; 写真図版 220e)

平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。壁は底面から開口部まで外傾する立ちあがりをみせる。底面は壁際に比べて中央部付近が $4\text{cm}\pm\sim 6\text{cm}\pm$ 低く凹んでおり、丸底状を呈する。埋土は、黒色～黒褐色土の単層で構成され、層中に褐色火山灰粒子が含まれている。

規模は、開口部径 $154\text{cm}\pm$ ・底部径 $125\text{cm}\pm$ ・深さ $45\text{cm}\pm\sim 51\text{cm}\pm$ を計る。出土遺物はない。

HVI-82 ビーカー形ピット (図版 169ab ; 写真図版 220f・221a)

このピットは下位の暗褐色～黒色土層(基本層序 Ic 層)を挟んで、HVI-83 フラスコ形ピットおよびHVI-84 フラスコ形ピットに載る在り方を示す。平面形は、開口部・底部とも北西から南東の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁はほぼまっすぐな立ちあがりをみせる。底面は平坦なものとなっている。埋土は、暗褐色～黒色土層で構成される。

規模は、開口部径 $135\text{cm}\pm\times 112\text{cm}\pm$ ・底部径 $110\text{cm}\pm\times 91\text{cm}\pm$ ・深さ $37\text{cm}\pm$ を計る。出土遺物はない。

HVI-83 フラスコ形ピット (図版 169ce ; 写真図版 221bcd)

このピットは東壁付近でHVI-84 フラスコ形ピットを切り、南壁付近でHVI-86 フラスコ形ピットによって切られる切り合い関係をもつ。また、検出面上位に暗褐色～黒色土層(基本層序 Ic 層)を挟んでHVI-82 ビーカー形ピットを載せ、位置的な重複状況を示す。他の遺構との切り合いや開口部付近の掘りすぎのため残存状況はよくない。このため、開口部付近の形状・規模については不明なものとなっている。

残存する北壁付近と南縁の下底部付近についてみれば、壁は北縁でオーバー・ハング状の形状を示し、底部は円形に近い平面形を呈する。また、底面は南壁付近が他の部分より $3\text{cm}\pm\sim 9\text{cm}\pm$ 低くなっている。その中央部には副穴が認められる。埋土は、褐色～暗褐色土層群で構成され、中位付近に僅かに炭化物の細粒が含まれている。

残存部の規模は、底部径230cm±～240cm±・深さ197cm±～206cm±を計る。副穴は、径42cm±・底面からの深さ24cm±～30cm±の規模をもつ。出土した層位の確認を把握することはできないが、埋土から縄文時代前期末葉期～中期初頭期に位置づけられる深鉢形土器の破片や磨石が出土している。

HVI-84 フラスコ形ピット (図版 169df ; 写真図版 221be)

このピットは西壁付近でHVI-83フラスコ形ピットによって切られる在り方を示す。また、検出面上部を覆う暗褐色～黒色土層(基本層序 Ic層)を挟んで上部にHVI-82ビーカー形ピットを載せる同位置的な重複関係にある。HVI-83フラスコ形ピットとの切り合いや掘りすぎのため、このピット西壁付近の形状、規模は不明なものとなっている。

良好な残存状態にある東壁は底面から開口部まで内傾する立ちあがりを見せる。底面は平坦で、HVI-83フラスコ形ピット底面よりも24cm±～30cm±高いレベルにある。南西縁にはやはりHVI-83フラスコ形ピットによって切られる状況で副穴が残存している。

埋土は、褐色～暗褐色土層群で構成され、中位付近に炭化物の細粒を含んでいる。残存部の規模は、底部径197cm±(最大径)・深さ153cm±を計る。副穴の規模は残存部で径34cm±(最大径)・底面からの深さ9cm±を計る。埋土中から縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の破片や半円状扁平打製石器が出土している。

HVI-85 フラスコ形ピット (図版 170ab ; 写真図版 221f・222a)

部分的に掘りすぎが認められるが、このピットの平面形は開口部が南北の方向に長軸をもつ卵形を呈し、底部が円形を呈する。底面ほぼ中央に副穴が認められる。壁は、南縁で直壁の形状を呈し、北縁では底面から中位付近まで内湾したのち開口部まで外反していく立ちあがりを見せる。また、それ以外の部分は底面から開口部まで内傾する状況にある。底面は平坦なものとなっている。

埋土は、褐色～暗褐色土層群で構成され、中位から下位にかけて炭化物の細粒を含んでいる。出土遺物には縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の大形破片のほかに、円盤状土製品・石匙・剝片類・残核などがある。

HVI-86 フラスコ形ピット (図版 170ce ; 写真図版 221b・222bc)

このピットはHVI-83フラスコ形ピットと重複関係にあり、北壁付近でこれを切る在り方を呈する。また、このピットは南縁に隣接するHVI-87フラスコ形ピットとも重複関係にあると考えられるが、調査手順の誤りから新旧関係を把握できなかった。開口部全体に掘りすぎが認められ、この部位の形状・規模については不明なものとなっている。

埋土断面図を参考にすれば、壁は底面から開口部まで内傾する立ちあがりを示している。残存部をみると、底部は北西から南東の方向に長軸をもつ双円形を呈し、底面は平坦なものとなっ

ている。埋土は褐色～暗褐色土層群で構成され、全体に焼土・炭化物の含有が認められる。残存部の規模は、底部径163cm±（長軸径）×100cm±～140cm±（短軸径）・深さ166cm±を計る。

埋土から縄文時代前期中葉期～末葉期に位置づけられる深鉢形土器の大形破片が出土している。

HVI-87フラスコ形ピット（図版 170df；写真図版 222bd）

このピットはHVI-86フラスコ形ピット南側に隣接する位置に存在する。位置関係からして両ピットは重複関係にあると考えられるが、調査手順の誤りから新旧関係は不明なものとなっている。また、このために北壁付近の形状についても不明で、開口部・頸部・底部など全体の形状・規模に関しても明らかではない。

残存する部分について見ると、壁は平坦な底面から頸部付近まで緩かに内湾する立ちあがりを見せたあと、開口部まで僅かに外反する形状を示す。底面は、HVI-86フラスコ形ピットよりも6cm±高いレベルにある。埋土は褐色～暗褐色土層群で構成され、粒状の軽石を含んでいる。残存部の規模は、開口部径160cm±（最大径）・頸部径132cm±（最大径）・底部径185cm±（最大径）・深さ157cm±を計る。出土遺物はない。

HVI-88フラスコ形ピット（図版 171ab；写真図版222ef）

平面形は、開口部が南北の方向に長軸をもつ卵形を呈し、底部が円形の形状を呈する。底面中央部には副穴が認められる。また、底面には副穴を中心として東壁から南壁の壁際まで枝状に溝が4条認められる。壁は底面から一旦まっすぐに近い立ちあがりを見せたのち、開口部まで内傾する形状を呈する。底面は副穴および溝を除く部分では平坦なものとなっている。埋土は褐色～暗褐色土層群で構成され、全体に焼土・炭化物を多く含んでいる。

規模は、開口部径142cm±×135cm±・底部径196cm±・深さ109cm±を計る。また、副穴は径50cm±・底面からの深さ19cm±を計る。さらに、4条の溝は、幅5cm±～20cm±・底面からの深さ2cm±～6cm±の規模をもつ。

出土遺物として、縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の破片や剝片類がある。

HVI-89フラスコ形ピット（図版 171ef；写真図版 223a）

平面形は、開口部・頸部・底部とも円形を呈する。壁は底面から頸部付近まで内傾したのち開口部まで外傾する形状を呈する。底面は中央部から北壁に寄った部分が他の部分に比べて3cm±～7cm±低く凹んでいる。埋土は黒色土の単層で構成されている。規模は、開口部径100cm±・頸部径88cm±・底部径102cm±を計る。出土遺物はない。

HVI-90ピーカー形ピット（図版 171cg；写真図版 223bc）

位置関係からみてこのピットはHVI-91フラスコ形ピットと重複関係にあると推定されるが、調査手順の誤りから両者の新旧関係は不明なものとなっている。また、同様の誤りから南

壁付近の状況についても不明確で、このピットの形状・規模についても明らかではない。

埋土断面図を参考にすると、壁はほぼ垂直な立ちあがりを示し、底面には凹凸が認められる。埋土は褐色～黒色土層で構成されている。比較的良好な残存状況を示す北半部についてみると、この部分の規模は、開口部径110cm±・底部径99cm±・深さ81cm±～84cm±を計るものとなっている。埋土から縄文時代前期末葉期および縄文時代中期末葉期に位置づけられる土器片が出土している。

HVI—91フラスコ形ピット（図版 171dh；写真図版 223de）

このピットは残存状況から判断して北壁付近でHVI—90ビーカー形ピットと重複関係にあると考えられるが、調査手順の誤りからこの部分を掘りすぎたために果して新・旧いずれに位置づけられるのか明らかではない。また、同様の削剝が開口部全体に及んでおり、開口部付近の形状・規模も不明なものとなっている。

残存部を見ると、壁は底面から開口部付近まで内傾する立ちあがりを見せ、底面はほぼ平坦なものとなっている。底部は円形を呈し、中央部に副穴が認められる。埋土は褐色～暗褐色土層で構成される。残存部の規模は、底部径186cm±・深さ185cm±を計る。副穴は、径42cm±・底面からの深さ14cm±の規模をもつ。埋土から縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の底部付近の大形破片が出土している。

HVII区

HVII—51フラスコ形ピット（図版172ab；写真図版224a）

このピットはHVII—1a 住居址北壁寄りの床面に位置する。検出状況から判断すると、このピットはHVII—1a 住居址に切られる在り方を示している。HVII—1 住居址群の中で、HVII—1a 住居址よりも古期に位置づけられるHVII—1b 住居址との新旧関係については明らかではない。

残存部についてみると、平面形は開口部が南北の方向に長軸をもつ不整な卵形で、底部が円形の形状を呈する。壁は底面から開口部にかけて内傾する立ちあがりを見せる。底面には凹凸が認められる。

埋土は、上位から中位にかけての部分が暗褐色～黒褐色土層で構成され、下位が褐色土層で構成される堆積状況を示している。規模は、開口部径165cm±×145cm±・底部径195cm±・深さ81cm±～85cm±を計る。埋土から縄文時代中期中葉期～末葉期に位置づけられる深鉢形土器の破片が出土している。

HVII—52フラスコ形ピット（図版172df；写真図版224bc）

このピットはHVII-1a 住居址北壁付近の床面に位置する。検出状況から判断すると、このピットはHVII-1a 住居址に切られる関係にあると考えられるが、HVII-1a 住居址よりも古期に位置づけられるHVII-1b 住居址との新旧関係については明らかではない。

開口部付近が崩壊したため、この部位の形状・規模は明らかではないが、検出時における状況を記した Field Card を参考にすると円形の形状を示していたものと考えられる。底部の平面形は底面西縁に比較的規模の大きい副穴が認められるため、片凹片凸の形状を示す。断面形は、この大きな副穴に伴うため、底部に大きな段差が認められる不整なフラスコ形を呈する。片凹片凸の形状を呈する底面は平坦なものとなっている。

埋土は黒褐色～褐色土層群で構成されている。規模は、底部径145cm±・深さ58cm±を計る。副穴は、径75cm±・底面からの深さ90cm±の規模をもつ。土器片などの出土遺物はないが、副穴底部から粒径18cm±～48cm±の安山岩類亜角～亜円礫が3個出土している。

HVII-53ピット (図版172ce)

遺構登録の段階で、誤ってHVII-52フラスコ形ピットに伴う副穴を遺構として扱ったためにこの遺構名が登録された。埋土の堆積状況などを検討した結果、この遺構名をもった凹みはHVII-52フラスコ形ピットに伴う副穴と考えられるため、この遺構名は欠番扱いとして処理する。

HVII-54フラスコ形ピット (図版172gh; 写真図版224de)

このピットはHVII-1a 住居址東壁付近に位置する。検出面から判断して、このピットはHVII-1a 住居址に切られる関係にあると考えられる。HVII-1 住居址群の中で古期に位置づけられるHVII-1b 住居址との新旧関係については明らかではない。

平面形は、開口部が北西から南東の方向に長軸をもつ楕円形を呈し、底部はほぼ円形の形状を呈する。壁は北西縁と南東縁の部分で僅かに底面から開口部まで外傾する立ち上がりみせるが、それ以外の部分ではオーバー・ハング状の形状を呈する。底面には緩かな傾きが認められ、北壁際に比べて南壁際が15cm±低くなっている。

埋土は黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層の3層で構成されている。規模は、開口部径182cm±×153cm±・底部径165cm±～169cm±・深さ114cm±～129cm±を計る。埋土から縄文時代中期中葉期に位置づけられる深鉢形土器の大形破片が多く出土しているほか、磨製石斧や剝片類も出土している。

HVII-55フラスコ形ピット (図版173ab; 写真図版225ab)

平面形は、開口部が北西から南東の方向に長軸をもつ卵形を呈し、底部が北西から南東の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は開口部東縁で外反する形状をみせるが、その他の部分ではオーバー・ハング状の形状を呈する。底面には凹凸が認められる。

埋土は、黒色土層・黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層の4層で構成される。中位付近に堆積している黒褐色土層中には焼土の細粒が含まれている。規模は、開口部径230cm±×193cm±・底部径243cm±×221cm±・深さ197cm±～209cm±を計る。

出土遺物には、埋土上部から出土した縄文時代晩期中葉期に位置づけられる台付鉢の完形品のほかに埋土中位から下位にかけて出土した縄文時代中期中葉期の深鉢形土器および同時期に位置づけられる土器の大形破片類がある。また、出土した層位については明らかではないが、剥片類も出土している。

HVII-56 フラスコ形ピット (図版173cd ; 写真図版225cd)

平面形は開口部・底部とも円形を呈する。壁は東側の部分が底面から開口部までまっすぐな立ちあがりを示し、西側の部分が底面から上部にかけて内傾する立ちあがりをみせたのち開口部まで僅かに外傾する形状を呈する。底面には緩かな傾きが認められ、西壁際に比べて東壁際の部分が18cm±低いものとなっている。

埋土は、上位から黒色土層・暗褐色土層・黄褐色土層の3層で構成されている。中位付近に堆積している暗褐色土層中には炭化物を含む褐色土ブロックや焼土ブロックが包含されている。また、下位に堆積している黄褐色土層中には暗褐色土ブロックや焼土・炭化物が含まれている。

規模は、開口部径226cm±・底部径260cm±・深さ238cm±～256cm±を計る。出土した層位は明らかではないが、埋土から、縄文時代晩期に位置づけられ、フラスコ形の器形を呈するミニチュア土器が出土している。

HVII-57 フラスコ形ピット (図版174ab ; 写真図版225e)

遺構の大半が調査区外に存在するため、全体の形状・規模については不明なものとなっている。検出された部分についてみると、平面形は開口部・底部とも半円形を呈し、壁は底面から開口部までオーバー・ハング状の形状を呈する。底面はほぼ平坦である。

埋土は、暗褐色～褐色土層で構成され、下位に炭化物の細粒を多く含んでいる。検出された部分の規模は、開口部径98cm± (最大径)・底部径120cm± (最大径)・深さ72cm±を計る。

重複関係について見れば、このピットは周辺のいわゆる“地山”を覆う分布状況を示す“長者屋敷パターン” (高橋; 1979, 1980) を切るあり方を示している。検出された部分からの出土遺物はない。

HVII-58 フラスコ形ピット (図版174cd ; 写真図版225f・226a)

このピットはHVII-1a 住居址と重複関係にあり、遺構の大半をHVII-1a 住居址西壁付近で切られる在り方を示している。このため残存状況は不良で、全体の形状・規模については不明なものとなっている。残存する部分についてみると、壁はオーバー・ハング状の形状を呈し、底面は平坦なものとなっている。埋土は暗褐色土層と黒褐色土層の2層で構成されている。中

位付近に堆積している暗褐色土層中には炭化物の細粒が含まれている。また、埋土全体に細礫が包含されている。

残存部の規模は、開口部径115cm±（最大径）・底部径160cm±（最大径）・深さ84cm±を計る。埋土から縄文時代前期末葉期に位置づけられる土器片が多く出土しているほか、半円状扁平打製石器が出土している。

HVII—59フラスコ形ピット（図版174ef；写真図版226bc）

平面形は、開口部・底部とも南北の方向に長軸をもつ隅丸長方形～楕円形の形状を呈する。底面の中央部付近と南東壁に寄った部分に副穴（ P_1 ・ P_2 ）が認められる。壁は底面から開口部にかけて内傾する立ちあがりを示す。底面は北壁際に比べて南壁際の部分が9cm±低くなる緩い傾きをみせる。

埋土は暗褐色～褐色土層群で構成され、中位付近に焼土の堆積が認められる。埋土全体に浮石粒が多く含まれている。規模は、開口部径122cm±×92cm±・底部径145cm±×120cm±・深さ56cm±～65cm±を計る。副穴の規模は、 P_1 （径42cm±・底面からの深さ8cm±）・ P_2 （径26cm±・底面からの深さ8cm±）を計る。埋土から、縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の破片類のほか剝片類が出土している。

HVII—60ビーカー形ピット（図版174g；写真図版226de）

このピットは北東壁付近でHVII—61フラスコ形ピットによって切られるあり方を示している。このため全体の形状については明らかではないが、残存部から推定すると、平面形は開口部・底部とも隅丸長方形を呈するものと考えられる。底面西壁よりに副穴が認められる。残存する部分の壁は、底面から開口部にかけてほぼまっすぐな立ちあがりを示している。底面は、ほぼ平坦である。埋土は、褐色～暗褐色土層で構成され、全体に浮石粒を多く含む。

規模は、開口部径215cm±×172cm±・底部径198cm±×154cm±・深さ84cm±を計る。副穴は、径53cm±・底面からの深さ6cm±の規模をもつ。埋土から、縄文時代中期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の破片類が多く出土しているほか、円盤状土製品・スクレーパー・剝片類も出土している。

HVII—61フラスコ形ピット（図版174h；写真図版226d）

このピットはHVII—60ビーカー形ピット北東壁付近にあつてHVII—60ビーカー形ピットを切る在り方を示している。調査上の手ちがいから、開口部西側半分を掘りすぎてしまい、この部位の形状・規模については不明なものとなっている。

残存部についてみると、底部は東西の方向に長軸をもつ卵形を呈する。壁は底面から内傾する立ちあがりをみせ、殊に東縁ではその傾きが一層強いものとなっている。底面は平坦である。埋土は、暗褐色～黒褐色土層で構成されている。残存部の規模は、底部径132cm±×114cm±・

深さ98cm±を計る。出土遺物はない。

HVII-62フラスコ形ピット (図版174i ; 写真図版226f・262f)

埋土と周辺の火山灰層との層相が近似しているため、開口部付近を大幅に掘りすぎてしまい、検出・残存状況は不良なものとなっている。このため、開口部の形状・規模については不明なものとなっている。また、埋土土層断面の実測を省略したことや、Field Cardにも具体的な記載がないため、埋土についても明らかではない。

残存する部分について見ると、底部は円形の平面形を呈し、底面は平坦なものとなっている。壁は西縁でオーバー・ハング状の形状を呈し、東縁では直壁に近い立ちあがりを示している。残存する部分の規模は、底部径125cm±・深さ77cm±を計る。埋土下位から縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の破片類が出土しているほか、埋土上部から中位にかけて粒径13cm±～57cm±を計る8個の安山岩類亜角礫が重なる状況で検出されている。

HVII-63フラスコ形ピット (図版175a ; 写真図版227a)

このピットHVII-1a住居址南壁検出の際に存在が認められたものである。検出状況から判断して、このピットはHVII-1a住居址および南側に残片的に残存するHVII-64フラスコ形ピットによって切られる関係にあると思われる。切り合いの結果、残存状況が不良なことや、検出に伴って底部を除く、開口部や壁を削剝したために、全体の形状や規模および埋土の状況・出土遺物の有無などに関して不明なものとなっている。

残存する部分について述べると、底面は平坦で、HVII-1a住居址に伴う最寄りの床面よりも15cm±高いレベルにある。

HVII-64フラスコ形ピット (図版175b ; 写真図版227a)

このピットはHVII-1a住居址南壁検出の際に、HVII-63フラスコ形ピットと同様にその南側から存在が認められたものである。検出状況から判断して、このピットはHVII-63フラスコ形ピットを切り、さらにHVII-1a住居址に切られる関係にあると推定される。遺構の大部分がHVII-1a住居址によって切られていることや、精査時に残存する壁や開口部付近に削剝が及んだため、残存状況は不良なものとなっている。このため、底面の一部を除く部分の形状・規模については不明なものとなっている。また、埋土の状況や出土遺物の有無についても明らかではない。

残存する底面の一部についてみると、この部分は平坦なものとなっており、西壁に寄った部分には副穴が2個(P₁・P₂)認められる。また、この底面の一部は、最寄りのHVII-1a住居址床面よりも3cm±、HVII-63フラスコ形ピット底面よりも16cm±それぞれ低いレベルにある。副穴の規模はそれぞれ、P₁(径35cm±・底面からの深さ13cm±)・P₂(径37cm±×25cm±・底面

からの深さ23cm±)を計る。

HVII—65フラスコ形ピット (図版175cd ; 写真図版227b)

平面形は開口部が不整な円形を呈し、底部が東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は南東縁で直壁の形状を呈するが、それ以外の部分では底面から開口部付近まで内傾する状況にある。底部には傾きが認められ、西壁際の部分が中央部よりも11cm±低いものとなっている。埋土は、上部が暗褐色～黒褐色土層、下部が汚れ火山灰優先の褐色～暗褐色土層で構成されている。

規模は、開口部径85cm±・底部径116cm±×87cm±・深さ78cm±～89cm±を計る。出土遺物はない。

HVII—1a 住居址個々の東壁が明らかでないところからはっきりしたことは言えないが、HVII—1a 住居址の平面形から推定すると、あるいはこのピットはHVII—1a 住居址と重複関係にあるのかもしれない。

HVII—66フラスコ形ピット (図版175ef ; 写真図版227cd)

精査の段階で、開口部付近が崩壊したため、この部位の形状・規模については明らかではない。残存部についてみると、頸部および底部は円形の平面形を呈し、底面は平坦なものとなっている。埋土土層断面図を参考にすると、壁は底面から中位(頸部)付近まで内傾する立ちあがりのみせたのち、開口部まで外傾する形状を示している。

埋土は褐色土層・黒褐色土層・暗褐色土層の3層で構成される。埋土全体に焼土・炭化物の細粒が多く含まれている。残存部の規模は、頸部径96cm～102cm±・底部径150cm±・深さ134cm±を計る。出土遺物はない。

HVII—67フラスコ形ピット (図版175gi ; 写真図版227ef)

このピットはHVII—68フラスコ形ピットと重複関係にあり、東壁付近上部を部分的にHVII—68フラスコ形ピットによって切られる在り方を示している。平面形は、開口部・底部とも東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は東側半分が直壁の形状を呈し、西側半分の部分ではオーバー・ハング状を呈する状況にある。底面は平坦である。

埋土は、褐色～黒褐色土層群で構成されている埋土全体に焼土・炭化物の細粒が含まれているほか、下位付近には浮石粒が含まれている。また、西壁上部でHVII—1a 住居址埋土の下位の層準に認められる暗褐色土層を載せる堆積状況を観察できる。

規模は、開口部径250cm±×220cm±・底部径248cm±×228cm±・深さ146cm±を計る。埋土から、縄文時代前期末葉期に位置づけられる土器の破片と半円状扁平打製石器が出土している。

HVII—68フラスコ形ピット (図版175h ; 写真図版228a)

このピットはHVII—67フラスコ形ピットと重複関係にあり、西壁に寄った下底部の一部でHVII—67フラスコ形ピットを切る在り方を示している。西壁付近を切り合い確認のため削刺し、

全体の形状については明らかではないが、残存部から推定すると、開口部・底部とも東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈していたものと考えられる。

残存部についてみると、壁は東縁で直壁の形状を呈し、北西縁および南西縁でオーバー・ハング状の形状を呈する状況にある。底面はほぼ平坦なものとなっている。

埋土は、黒褐色土の単層で構成されている。残存部の規模は、開口部径135cm±×110cm±・底部径137cm±×107cm±・深さ48cm±を計る。出土遺物はない。

HVII-69フラスコ形ピット（図版176ab；写真図版228b）

このピットはHVII-2住居址北壁付近に位置し、位置関係からみて重複関係にあると考えられる。HVII-2住居址との新旧関係については明らかではないが、精査を担当した調査員によって記されたField Cardの内容を参考にすれば、このピットはHVII-2住居址を切る関係にあると思われる。

平面形は、開口部・底部とも東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は底面から開口部にかけて僅かに内傾する立ちあがりを見せる。底面は平坦なものとなっている。埋土は褐色～暗褐色土層で構成されている。上部に堆積している褐色土層中には焼土・炭化物の細粒が含まれている。規模は、開口部径224cm±×196cm±・底部径242cm±×203cm±・深さ207cm±を計る。出土遺物として、縄文時代中期末葉期に位置づけられる土器片類が多く出土しているほか、石匙・スクレーパーなどの石器も得られている。

HVII-70フラスコ形ピット（図版176cd；写真図版228cd）

このピットは、HVII-2住居址床面中央部付近に位置し、その上部に削剝をうけ、埋土上部をHVII-2住居址床面として利用されるあり方を示している。残存部についてみると、削剝を受けて開口している部分および底部は東西の方向に長軸をもつ楕円形の平面形を呈し、壁は底面からHVII-2住居址床面まで内傾する立ちあがりを示している。底面は平坦なものとなっている。

残存部の埋土は、褐色～暗褐色土層で構成される。埋土上位には焼土・炭化物の細粒が多く含まれている。残存規模は、上部径173cm±×150cm±・底部径223cm±×193cm±・深さ114cm±を計る。土器などの出土遺物はないが、HVII-2住居址床面よりも23cm±低い部分から粒径38cm±を計る扁平な台石状の礫が得られている。

HVII-71フラスコ形ピット（図版177a；写真図版228e・263a）

このピットは、HVII-9住居址と重複関係にあり、残存形態からみて、その上部に削剝をうけてHVII-9住居址床面として利用されるあり方を示している。残存部についてみると、削剝をうけて開口する部分および底部は円形の平面形を呈し、壁は底面から内傾する立ちあがりを見せる。底面には凹凸が認められる。

残存部の埋土は、暗褐色～褐色土層で構成される。埋土下位には焼土・炭化物の細粒が多量に含まれている。残存部の規模は、上部径140cm±・底部径210cm±・深さ199cm±～205cm±を計る。西壁に寄った底面直上部から、縄文時代前期中葉期～末葉期に位置づけられる深鉢形土器3個体と大形破片が出土している。また、埋土から、半円状扁平打製石器・スクレーパー類・剝片類が出土している。

HVII-72 フラスコ形ピット (図版176ef ; 写真図版228f・229a)

平面形は、開口部が東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈し、底部が円形を呈する。底面中央部に副穴が認められる。壁の形状は、東縁で直壁に近い形状を呈するが、その他の部分ではオーバー・ハング状を示す。底面は平坦である。埋土は、上部から暗褐色土層・褐色土層の順で構成される。上部に堆積している暗褐色土層中には、焼土・炭化物の細粒が含まれている。

規模は、開口部径167cm±×127cm±・底部径193cm±・深さ203cm±を計る。副穴の規模は、開口部径50cm±・底面からの深さ18cm±を計る。埋土から、縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の大形破片が出土している。

HVII-73 フラスコ形ピット (図版177bc ; 写真図版229b)

調査上の手違いから、南壁付近を大幅に掘りすぎてしまい、残存状況はよくない。このため、開口部および南壁付近の形状・規模については不明なものとなっている。

残存部についてみれば、底部は東西の方向に長軸をもつ楕円形の平面形を呈し、壁は底面から開口部にかけて内傾する立ちあがりを示している。底面は平坦である。底面には長軸に沿って3個の副穴 (P_1 ・ P_2 ・ P_3) が認められる。

埋土は、上部から黒褐色土層・褐色土層・暗褐色土層・黄褐色土層の4層で構成されている。残存部の規模は、底部径160cm±×142cm±・深さ118cm±を計る。3個の副穴の規模はそれぞれ、 P_1 (径15cm±・底面からの深さ12cm±)・ P_2 (径40cm±・底面からの深さ45cm±)・ P_3 (径25cm±・底面からの深さ19cm±) を計る。埋土から半円状扁平打製石器が出土している。

HVII-74 フラスコ形ピット (図版177de ; 写真図版229cd)

このピットはHVII-9住居址と重複関係にあり、開口部北縁でHVII-9住居址によって切られるあり方を示している。このため開口部の形状・規模については明らかではない。

残存部についてみると、底部は東西の方向に長軸をもつ楕円形の平面形を呈し、底面中央部と東壁に寄った部分に副穴 (P_1 ・ P_2) が認められる。壁は全体に底面から開口部まで僅かに内傾する立ちあがりをみせる。底面は平坦なものとなっている。

埋土は、上位から中位にかけての部分が黒褐色～暗褐色土層、下位が褐色土層で構成されている。下位に堆積している褐色土層中には焼土・炭化物の細粒が含まれている。

残存部の規模は、底部径252cm±×215cm±・深さ184cm±を計る。2個の副穴はそれぞれ、 P_1

(径35cm±×27cm±・底面からの深さ23cm±)・P₂(径20cm±・底面からの深さ9cm±)の規模を計る。埋土からの出土遺物としては、縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の破片類と尖頭石器および剝片類がある。

HVII-75ピーカー形ピット (図版177f ; 写真図版229e)

平面形は開口部・底部とも南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は底面から開口部にかけて外傾気味の立ちあがりを示す。底面には凹凸が認められる。埋土の状況については、実測を省略したことや、Field Cardの記載を欠くため明らかではない。

規模は、開口部径145cm±×120cm±・底部径112cm±×97cm±・深さ55cm±～59cm±を計る。出土遺物はない。

HVII-76皿形ピット (図版177g)

平面形は、開口部・底部とも東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は底面から開口部まで外傾する形状を示す。底面はほぼ平坦なものとなっている。埋土の状況については、実測を省略したことや、Field Cardの記載を欠くため明らかではない。

規模は、開口部径140cm±×99cm±・底部径72cm±×52cm±・深さ34cm±を計る。出土遺物はない。

HVII-77フラスコ形ピット (図版178ab ; 写真図版229f)

このピットはHVII-22住居址と重複する残存状況を示しているが、HVII-22住居址と新旧いずれの関係にあるか明らかではない。また、遺構の大半が調査区外にあるため、全体の形状・規模についても不明なものとなっている。

半裁する状況で精査された部分についてみると、壁は底面から開口部まで内傾する立ちあがりを示し、底面は平坦なものとなっている。埋土は暗褐色～褐色土層群で構成されている。調査された部分の規模は、開口部最大径148cm±・底部最大径187cm±・最大深度118cm±を計る。埋土からの出土遺物には、縄文時代前期末葉期～縄文時代中期初頭期に位置づけられる深鉢形土器の破片類と剝片類がある。

HVII-78フラスコ形ピット (図版178cd ; 写真図版230ab)

平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。壁は底部から開口部まで内傾する立ちあがりを見せる。底面は、中央部が壁際よりも4cm±～6cm±低く、全体に凹んだ状況にある。埋土は褐色～黒褐色土層で構成される。中位付近には焼土の堆積が僅かに認められる。規模は、開口部径140cm±～150cm±・底部径214cm±・深さ146cm±～152cm±を計る。埋土からの出土遺物には、縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の破片類や石筥・半円状扁平打製石器・スクレーパー・剝片類などがある。

HVII-79フラスコ形ピット (図版178ef ; 写真図版230ce)

このピットはダメ押しの段階で上半部を欠く状態で検出された。このため残存状況は不良で、下底部以外の形状・規模については明らかでない。

残存部についてみると、底部は円形の平面形を呈し、その中央部に副穴が認められる。また、壁は底面から内傾する立ちあがりを示している。下底部付近の埋土は、褐色～暗褐色土層で構成されている。底部径182cm±を計る。副穴は、径70cm±・底面からの深さ21cm±を計る。埋土から、縄文時代前期末葉期に位置づけられる土器片が出土している。

HVII—80フラスコ形ピット（図版178g；写真図版230d）

東壁上部から開口部にかけて部分的に掘りすぎが認められるが、平面形は開口部・底部とも円形を呈する。全体に壁は、底面から開口部にかけて内傾する立ちあがりを示す。底面は、ほぼ平坦なものとなっている。埋土の状況については、実測を省略したことや Field Card にも記載がないところから明らかではない。

規模は、開口部径120cm±・底部径143cm±・深さ77cm±～81cm±を計る。出土遺物はない。

HVII—81フラスコ形ピット（図版179ab；写真図版231ab・263b）

重複するHVII—82フラスコ形ピットとは新旧・共伴いずれの関係にあるのか明らかではない。平面形は、開口部が南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈し、底部も残存部から推定すると同様の形状を呈するものと考えられる。底面北壁寄りに副穴が認められる。全体に壁は底面から中位付近まで内傾する立ちあがりをみせたのち、開口部までまっすぐに立ちあがる形状を示す。底面には東から西に下る傾きが認められ、西壁際の部分が東壁際の部分に比べて14cm±～17cm±低くなっている。埋土は暗褐色～褐色土層群で構成され、上位および下位に焼土・炭化物の細粒や風化軽石粒を含んでいる。

規模は、開口部径234cm±×224cm±・底部径300cm±×226cm±・深さ152cm±～169cm±を計る。副穴は、径39cm±・底面からの深さ60cm±の規模をもつ。埋土からの出土遺物には、縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の破片類が半円状扁平打製石器・磨石などの石器類がある。また、埋土下位から粒径23cm±の安山岩類垂角礫が2個出土している。

HVII—82フラスコ形ピット（図版179c；写真図版231c・263b）

このピットは、HVII—81フラスコ形ピットおよびHVII—83フラスコ形ピットと重複関係にあるが、調査上の不手際からこれらのピットとの新旧関係については不明なものとなっている。また、このピットと重複関係にあるHVII—83フラスコ形ピットとの間の火山灰層が崩壊したため南壁付近の状況についても明らかではない。

残存部についてみれば、底部は円形に近い形状を呈し、その中央部付近には副穴が認められる。壁は底面から開口部まで内傾する立ちあがりを示している。底面はほぼ平坦なものとなっている。埋土は褐色～暗褐色土層群で構成される。埋土上部には炭化物の細粒が含まれている。

残存部の規模は、開口部径120cm±(最大径)、底部径240cm±(最大径)、深さ163cm±を計る。副穴の規模は、径31cm±・底面からの深さ44cm±を計る。出土遺物として、東壁に寄った底面直上から縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器2個体が横位の状態で出土している。

HVII-83 フラスコ形ピット (図版179de ; 写真図版231cde・263b)

このピットは、HVII-82 フラスコ形ピットと重複関係にあるが、調査手順の誤りから新旧関係については不明なものとなっている。このピットとHVII-82 フラスコ形ピット南壁との間の火山灰層が崩壊したため、北壁および開口部北縁の形状についても明らかではない。

残存部について見れば、底部は円形の平面形を呈し、壁は底面から開口部まで内傾する形状を示している。底面はほぼ平坦なものとなっており、その中央部付近には副穴が認められる。

埋土は、上位と下位が褐色土層で、中位が焼土・炭化物を多く含む暗褐色土層で構成されている。残存部の規模は、開口部径130cm±(最大径)・底部径228cm±・深さ187cm±を計る。副穴の規模は、径32cm±・底面からの深さ16cm±を計る。出土遺物はない。

HVII-84 フラスコ形ピット (図版180a ; 写真図版231f・232a)

平面形は、開口部が東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈し、底部が南北に長軸をもつ卵形を呈する。壁は底面から開口部まで内曲する立ちあがりを示す。底面はほぼ平坦なものとなっている。底面ほぼ中央に副穴が認められる。

埋土は、上位から褐色土層・暗褐色土層の2層で構成されている。下位に堆積している暗褐色土層中には、焼土・炭化物の細粒が含まれている。規模は、開口部径110cm±×80cm±・底部径180cm±×163cm±・深さ103cm±を計る。副穴の規模は、径25cm±・底面からの深さ14cm±を計る。出土遺物はない。

HVII-85 フラスコ形ピット (図版180bd ; 写真図版232bc・263cd)

平面形は、開口部・底部とも不整な円形を呈する。底面中央部に副穴が認められる。壁は全体に底面から上部付近まで内傾する立ちあがりを示したのち、開口部までまっすぐに続く形状を示す。底面は平坦である。埋土は、上部が暗褐色～黒褐色土層、下部が汚れ火山灰優占の黄褐色～褐色土層で構成されている。焼土・炭化物は全体に含まれているが、下部により多く認められる。

規模は、開口部径135cm±～140cm±・底部径208cm±～213cm±・深さ168cm±を計る。

副穴の規模は、開口部径38cm±・底面からの深さ18cm±を計る。出土遺物には、底面直上から出土した縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器2個体と埋土から出土した半円状扁平打製石器・剥片類などがある。

HVII-86 ピット (図版180c)

このピットの残存状況についてみれば、HVII-21住居址と重複する位置関係にあるが、両者

の新旧関係は明らかではない。また、精査に際して遺構の上部を大幅に掘りすぎてしまったため、下底部を除く部分の形状・規模については不明なものとなっている。実測図の作成を行わなかったことや、Field Cardにも記載がないため、埋土についても不明なものとなっている。

残存する下底部付近についてみると、底部は不整な円形を呈し、径132cm±×125cm±の規模をもつ。底面には凹凸が認められ、南西壁に寄った部分には副穴が認められる。下底部の壁は底面から外傾ぎみの立ちあがりを示す。副穴の規模は径20cm±・底面からの深さ6cm±を計る。出土遺物はない。

HVII-87ピット（図版180ef；写真図版232de）

精査時に東壁および西壁の一部に削剝が及んだため、全体の形状・規模については明らかではない。残存部から推定すると、平面形は開口部・底部とも不整な円形を呈するものと考えられる。残存部についてみれば、壁は底面から開口部までほぼまっすぐな立ちあがりを示し、底面は西壁際から東壁際まで19cm±低くなる傾きをみせる。底面の北壁に寄った部分と南東壁に寄った部分に副穴（P₁・P₂）が認められる。

埋土は、上部が焼土の細粒を含む暗褐色土層、下部が黒褐色土層で構成されている。残存部の規模は、開口部径203cm±～220cm±・底部径183cm±～200cm±・深さ60cm±～79cm±を計る。副穴の規模は、P₁（径21cm±・深さ12cm±）・P₂（径44cm±・深さ28cm±）を計る。出土遺物には縄文土器の細片がある。

HVII-88ピット

このピットはHVII-2住居址埋土断面図作成に伴って存在が明らかになったものであり、全体の形状・規模については不明なものとなっている。HVII-12住居址埋土断面を参考にすれば、このピットはHVII-2住居址の埋土に認められる2枚の“湯沢パターン”（高橋：1977、三浦：1978）の間に発達した黒色土層を切る在り方を示している。埋土は、異地性の焼土を伴う黒色土層で構成されている。出土遺物については、調査上の手ちがいからHVII-2住居址埋土に伴う一括土器として収められたため、不明なものとなっている。

I II区

I II-51フラスコ形ピット（図版181ab；写真図版233ab）

平面形は、開口部が東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈し、頸部および底部は円形を呈する。底面東壁際～南壁際にかけて、3個の副穴（P₁・P₂・P₃）が認められる。壁は底面から頸部まで内傾する立ちあがりを見せたのち、開口部まで外反する形状を示す。底面は壁際に比べて中央部が6cm±低く凹んだ状況を呈する。埋土は、黒褐色土の単層で構成され、中位から下位に

かけて暗褐色～褐色土ブロックおよび炭化物を含んでいる。

規模は、開口部径146cm±×120cm±・頸部径109cm±～114cm±・深さ74cm±～80cm±を計る。副穴はそれぞれ、P₁（径24cm±・底面からの深さ14cm±）・P₂（径11cm±・底面からの深さ11cm±）・P₃（径13cm±・底面からの深さ14cm±）の規模をもつ。出土遺物はない。

I II-52 フラスコ形ピット（図版181cdg；写真図版233cd）

このピットは、下位の火山灰層から泥流堆積物上部まで切り込んで構築されており底面は礫層上面に達するあり方を示す。したがって下底部付近には礫層が露れており、不整な形状を呈する。開口部・頸部は南北に長軸を有する楕円形に近い平面形を呈する。壁は全体的に見ると、頸部付近まで内傾する立ちあがりを見せたあと、開口部まで外反する状況にある。底面中央部には下位の泥流起源の礫が突出している。

埋土は、上位から黒色土層・暗褐色土層・褐色土層の3層で構成され、全体に多量の焼土・炭化物を多く含んでいる。規模は、開口部径110cm±×80cm±・頸部径90cm±×65cm±・底部径117cm±×90cm±・深さ132cm±～150cm±を計る。出土遺物はない。

I II-53 フラスコ形ピット（図版181e；写真図版233e）

このピットはI II-54ピットと重複関係にあるとみられるが、崖線に近い斜面部に位置するところから重複する状況にある東壁付近を消失しているため、新旧関係は不明なものとなっている。残存する部分から推定すると、平面形は開口部・底部ともほぼ円形を呈するものとみられる。北壁～西壁にかけて、壁はオーバー・ハング状の形状を示す。底面は平坦な状況を呈する。実測を省略したが、Field Cardによれば埋土は、焼土および炭化物の細粒を多量に含む黒褐色～暗褐色土層で構成されると記されている。

残存部の規模は、開口部径110cm±・底部径115cm±・深さ47cm±を計る。埋土中位から、縄文時代前期前半期に位置づけられる土器片が数片出土している。

I II-54ピット（図版181f）

このピットは位置関係からみてI II-53フラスコ形ピットと重複関係にあるとみられるが、切り合いをみせると推定される南壁～西壁にかけての部分斜面部に位置するところから消失しており、新旧関係については明らかではない。残存する部分について見ると、平面形は開口部・底部とも北西から南東の方向に長軸をもつ隅丸長方形～楕円形の形状を呈するものと推定される。北壁に寄った底面には円形を呈する浅皿状の凹みが認められる。残存する壁のうち、北西縁の部分はオーバー・ハング状の形状を呈する。残る北縁から東縁の部分はやや外傾する立ちあがりを示す。

埋土は実測を省略したが、Field Cardの記載によれば、暗褐色土層の単層で構成されていると述べられている。残存部における規模は、開口部径180cm±×86cm±・底部径165cm±×80

cm±・深さ40cm±を計る。北壁に寄った部分の浅皿状ピットは径80cm±・底面からの深さ8cm±の規模をもつ。土器などの出土遺物はないが、浅皿状ピットから下位の泥流起源の粒径16cm±を計る安山岩歪角礫が出土している。

I VI区

I VI-51 フラスコ形ピット (図版181hi ; 写真図版233f・234a)

平面形は開口部・底部とも円形を呈する。底面中央部に副穴が認められる。壁は北縁と西縁でオーバー・ハング状の形状を呈するが、その他の部分では底面から開口部にかけてほぼまっすぐな立ちあがりを示している。底面は南壁際が北壁際に比べて5cm±低くなる緩かな傾きを見せる。埋土は上位から中位の部分が黒褐色土層、下位が暗褐色土層で構成されている。埋土全体に褐色火山灰の細粒が含まれている。

規模は、開口部径106cm±・底部径103cm±・深さ61cm±～66cm±を計る。副穴は、径35cm±・底面からの深さ7cm±の規模をもつ。出土遺物はない。

I VI-52 フラスコ形ピット (図版182ab ; 写真図版234bc)

このピットはI VI-53フラスコ形ピットの北側に近接して位置する。平面的に見れば南壁付近でI VI-53フラスコ形ピットと重複するあり方を示しているが、直接切り合っていない。平面形は、開口部・底部とも不整な円形を呈する。壁は南東縁で直壁の形状を呈するが、他の部分は底面から開口部にかけて内傾する立ちあがりを示している。底面はほぼ平坦なものとなっている。埋土は上部から黒色土層・暗褐色土層・褐色土層の順で構成される堆積状況を示している。黒色土層中には焼土が多量に含まれている。

規模は、開口部径143cm±・底部径148cm±～156cm±・深さ57cm±を計る。出土遺物はない。

I VI-53 フラスコ形ピット (図版182de ; 写真図版234d)

このピットはI VI-52フラスコ形ピットのすぐ南側に隣接する位置にある。平面形は開口部が南北に長軸をもつ楕円形の形状を呈し、底部は円形を呈する。底部の北縁部はI VI-52フラスコ形ピットの下位に潜るあり方を示している。壁は南側半分の部分外傾する立ちあがりを示すが、他の部分ではオーバー・ハング状の形状を呈する。底面はほぼ平坦である。

埋土は、上部から黒色土層・黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層の順で構成される堆積状況を示している。中位付近に堆積している黒褐色土層中には焼土の細粒が多く含まれている。規模は、開口部径132cm±×110cm±・底部径132cm±・深さ82cm±～85cm±を計る。出土遺物はない。

I VI-54 フラスコ形ピット (図版182cf ; 写真図版234e・235a)

平面形は開口部が円形を呈し、底部が北西から南東の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。断

面形は中位付近でせばまったのち開口部まで広がっていくフラスコ形を呈する。底面は平坦である。埋土は褐色～黒褐色土層群で構成される。埋土上位から中位にかけて堆積している黒褐色土層中には焼土・炭化物の細粒が含まれている。

規模は、開口部径100cm±～105cm±・底部径105cm±×88cm±・深さ117cm±を計る。出土遺物はない。

I VI-55フラスコ形ピット（図版 182gh；写真図版 235bc）

平面形は、開口部が南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈し、底部が不整な円形を呈する。壁の形状は部分的に異なるが、全体に底面から開口部まで内傾する立ちあがりを示す。底面は南壁際の部分に比べて北壁際の部分が6cm±低くなる傾きをみせる。埋土は暗褐色～黒色土層群で構成され、全体に入り組んだ堆積状況を示す。

規模は、開口部径142cm±×116cm±・底部径177cm±～190cm±・深さ75cm±～81cm±を計る。出土遺物はない。

I VI-56ピーカー形ピット（図版 182i；写真図版 235d）

平面形は開口部・底部とも北西からの南東の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は底面から開口部まで外傾する立ちあがりを見せる。底面は中央部付近が壁際の部分に比べて3cm±～5cm±低く凹んだものとなっている。埋土の状況については、実測を省略したことや Field Card に具体的な記載を欠くため不明なものとなっている。

規模は、開口部径101cm±×80cm±・底部径75cm±×50cm±・深さ78cm±～80cm±を計る。出土遺物はない。

I VII区

I VII-51ピーカー形ピット（図版183ab；写真図版 265b）

このピットはI VII-2住居址の北壁付近に位置し、部分的にI VII-2住居址を切る在り方を示している。平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。壁は底面から開口部まで外傾する立ちあがりを見せる。底面はほぼ平坦なものとなっている。

埋土は、上位から中位付近まで粒状の火山灰を僅かに含む黒色土層で構成され、下位付近が暗褐色土層で構成されている。規模は、開口部径75cm±・底部径61cm±・深さ38cm±を計る。土器などの出土遺物はないが、粒径17cm±～50cm±を計る6個の安山岩類亜角礫が密着する状況で出土している。

I VII-52フラスコ形ピット（図版 183cd；写真図版 235ef・264a）

平面形は開口部・底部とも南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は全体にオーバー・

ハンク状の形状を示す。底面は平坦である。埋土は、暗褐色～黒褐色土層群で構成されており、全体に焼土・炭化物の細粒を含んでいる。規模は、開口部径150cm±×123cm±・底部径197cm±×166cm±・深さ205cm±を計る。

埋土下位から底面直上部にかけて縄文時代中期中葉期に位置づけられる深鉢形土器完形品9個体と同時期の大型破片が出土している。Field Cardに図示された出土状況についてみれば、これらの土器は北壁に寄った部分から多く出土し、それぞれ横位・直立・倒立と一貫性のないあり方を示し、底面付近のものは押し潰れた状態にある。

I VII—53 フラスコ形ピット (図版 183eh ; 写真図版 236a)

このピットは I VII—54 フラスコ形ピットと重複関係にあり、遺構の北半部を残して I VII—54 フラスコ形ピットによって切られる在り方を示している。このような残存状況から、全体の形状・規模については明らかではない。

残存部についてみると、壁は底面から開口部にかけて内傾する立ちあがりを示し、底面は平坦なものとなっている。Field Cardによればこの部分の埋土は、褐色～暗褐色土で構成されると記載されている。出土遺物はない。

I VII—54 フラスコ形ピット (図版 183fg ; 写真図版 236ab・264b・265cd)

このピットは、I VII—53 フラスコ形ピットと重複関係にあり、北壁付近で I VII—53 フラスコ形ピットを切る在り方を示している。I VII—53 フラスコ形ピットと切り合う部分の壁上部を調査上の不手際から削剝してしまい、開口部および壁のおよそ $\frac{1}{3}$ の部分についての形状・規模は不明なものとなっている。残存部から推定すると、開口部は底部同様不整な円形を呈するものと考えられる。

残存する壁は、底面から開口部まで内傾する立ちあがりを示している。底面はほぼ平坦である。埋土は、汚れ火山灰優占の褐色～暗褐色土層群で構成されていて、上位から中位付近に焼土・炭化物・褐色火山灰粒子を含んでいる。

残存部の規模は、開口部径200cm±(最大径)・底部径238cm±・深さ134cm±を計る。出土遺物として、縄文時代中期中葉期に位置づけられる深鉢形土器7個体が得られている。これらの土器は埋土中位から下位にかけて斜位または横位の状態で出土している。

I VII—55 ピーカー形ピット (図版 184a ; 写真図版 236c)

平面形は、開口部・底部とも南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は底面から開口部まで外傾する立ちあがりを見せる。底面には傾きが認められ、北壁際の部分よりも南壁際の部分が8cm±低いものとなっている。埋土は火山灰ブロックを含む柔い黒褐色土の単層で構成されている。

規模は、開口部径115cm±×92cm±・底部径100cm±×60cm±・深さ32cm±～40cm±を計る。出

土遺物はない。

I VII—56ピーカー形ピット (図版 184b ; 写真図版 236d)

平面形は、開口部・底部とも南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は底面から開口部にかけて外傾する立ちあがりをみせる。底面はほぼ平坦である。埋土は実測を省略したことや Field Card に記載がないため明らかではない。出土遺物はない。

規模は、開口部径117cm±×87cm±・底部径90cm±×62cm±・深さ32cm±を計る。

I VII—57フラスコ形ピット (図版184cd ; 写真図版 236ef)

このピットは I VII—58フラスコ形ピットと重複関係にあり、東壁付近で I VII—58フラスコ形ピットによって切られる在り方を示している。このような切り合い関係に加えて、精査時に開口部付近を掘りすぎたため、残存状況は良くない。残存部についてみれば、底部は北西から南東の方向に長軸をもつ楕円形を呈し、壁は底面から開口部付近まで内傾する立ちあがりをみせる。底面は平坦なものとなっている。

埋土は、褐色～暗褐色土層群で構成されている。中位付近には炭化物の細粒が多く含まれている。残存部の規模は、底部径231cm±×185cm±・深さ155cm±を計る。土器片などの出土遺物はないが、埋土中位から粒径20cm±の安山岩類垂円礫が1個出土している。

I VII—58フラスコ形ピット (図版 184eh ; 写真図版 237a)

このピットは I VII—57フラスコ形ピットと重複関係にあり、西壁付近で I VII—57フラスコ形ピットを切る在り方を示している。調査手順の誤りから、I VII—57フラスコ形ピットと重複する西壁付近を掘りあげてしまったため、底部を除く部分の形状・規模については明らかではない。

残存部についてみれば、底部は円形の平面形を呈し、その中央部付近には副穴が認められる。埋土土層断面を参考にすると、断面形は口径が広く下半部に膨みをもつフラスコ形を呈する。底面は平坦なものとなっている。

埋土は、褐色土層と暗褐色土層の2層で構成され、上位に堆積している褐色土層中には浮石粒が多く含まれている。残存部の規模は、底部径180cm±・深さ168cm±を計る。副穴は、径30cm±・底面からの深さ29cm±の規模をもつ。土器などの出土遺物はないが、底部南縁の立ちあがり部分に壁に挿入する状況で粒径49cm±を計る1個の安山岩類垂角礫が出土している。この礫が位置する部分が、このピットの南側に位置する I VII—62フラスコ形ピット底部北縁と近接する在り方を示すところから、この礫は底部の補修を目的として埋置されたものと考えられる。

I VII—59フラスコ形ピット (図版 184fg ; 写真図版 237bc)

このピットは I VII—60フラスコ形ピットと重複関係にあり、南壁付近で I VII—60フラスコ形ピットを切る在り方を示している。平面形は、開口部・底部とも東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は北壁および南壁の一部で直壁の形状を呈するが、他の部分では底面から開口

部まで内傾する形状を呈する。底面には部分的に掘りすぎが認められるが、残存部は平坦なものとなっている。埋土は褐色～暗褐色土層で構成される。埋土上部と下位に汚れ火山灰のブロックが含まれている。また、焼土・炭化物の細粒が全体に含まれている。

規模は、開口部径218cm±×191cm±・底部径248cm±×200cm±・深さ173cm±を計る。出土遺物はない。

I VII-60 フラスコ形ピット (図版 185bd ; 写真図版 237bd)

このピットは、I VII-59 フラスコ形ピットおよび I VII-61 フラスコ形ピットと重複関係にあり、北壁付近を I VII-59 フラスコ形ピットによって、南壁付近を I VII-61 フラスコ形ピットによって切られている。このため残存状況は不良で、全体の形状・規模については明らかではない。残存部について見ると、壁は南縁でオーバー・ハング状を呈し、その他の部分では直壁の形状を呈する。底面はほぼ平坦なものとなっている。I VII-61 フラスコ形ピットに切られる状況で東壁に寄った底面に2条の溝が認められる。

埋土は、褐色～黄褐色土層で構成されている。埋土下位に焼土・炭化物の細粒が僅かに含まれている。残存部の規模は開口部径246cm± (最大径)・底部径245cm± (最大径)・深さ44cm±～47cm±を計る。底面に認められた溝の規模は、平均幅12cm±・平均深度3cm±を計る。出土遺物はない。

I VII-61 フラスコ形ピット (図版 185ac ; 写真図版 237bde)

このピットは I VII-60 フラスコ形ピットと重複関係にあり、I VII-60 フラスコ形ピットを北半部で切る在り方を示している。調査上の手ちがいから、開口部付近に掘りすぎがみられ、壁上部から開口部にかけての部分の形状・規模については明らかではない。

底部は円形の平面形を呈し、壁は底面から壁上部まで内傾する立ちあがりをもとめる。底面は平坦である。埋土は、汚れ火山灰優占の黄褐色～褐色土層で構成されている。残存部の規模は底部径155cm±・深さ132cm±を計る。土器片などの出土遺物はないが、底面に密着する状況で半円状扁平打製石器が出土している。

I VII-62 フラスコ形ピット (図版 185eg ; 写真図版 237f・238a)

このピットは I VII-58 フラスコ形ピットの南側に位置する。直接切り合っていないが、I VII-58 フラスコ形ピット底面南端に補修を目的として埋置された安山岩類亜角礫の一部がこのピット下底部北縁に露出している。平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。壁は底面から開口部まで内傾する立ちあがりを示している。底面はほぼ平坦なものとなっている。

埋土は、黄褐色～褐色土層で構成されており、下位付近に浮石粒を含んでいる。規模は、開口部径140cm±・底部径192cm±・深さ160cm±～164cm±を計る。出土遺物はない。

I VII-63 フラスコ形ピット (図版 185f ; 写真図版 238bc・265ef・266a)

平面形は、開口部・底部とも不整な円形を呈する。壁は、北縁と西縁がオーバー・ハング状を示し、東縁・南縁・北西縁で直壁の形状を呈する。底面はほぼ平坦なものとなっている。埋土は、褐色～暗褐色土層で構成される。埋土上部に焼土・炭化物の細粒が含まれているほか、埋土下位には浮石粒が多く含まれている。

規模は、開口部径180cm±～190cm±・底部径185cm±～208cm±・深さ107cm±を計る。出土遺物として、埋土中位褐色土層中から縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器が1個体出土しているほか、埋土下位から安山岩類亜角礫が2個出土している。

I VII-64 フラスコ形ピット (図版 185hi ; 写真図版 238de)

平面形は、開口部が円形を呈し、底部が東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は底面から開口部まで内傾する立ちあがりを示す。底面には傾きが認められ、東壁際の部分に比べ西壁際の部分で7cm±低くなっている。埋土は上位から中位にかけての部分が褐色土層、下位が炭化物を僅かに含む暗褐色土層で構成されている。

規模は、開口部径93cm±・底部径137cm±×108cm±・深さ43cm±～50cm±を計る。出土遺物はない。

I VII-65 フラスコ形ピット (図版 186ab ; 写真図版 239ab)

平面形は、開口部が不整な円形を呈し、底部が東西の方向に長軸をもつ卵形を呈する。壁は底面から開口部まで内傾する立ちあがりを示している。底面は平坦である。埋土は褐色土層と暗褐色土層で構成される。埋土上位から中位にかけて炭化物の細粒が含まれている。

規模は、開口部径70cm±～74cm±・底部径183cm±×153cm±・深さ187cm±を計る。出土遺物はない。

I VII-66 フラスコ形ピット (図版 186cd ; 写真図版 239c)

調査手順の誤りから、開口部付近を掘りすぎ、この部位の形状・規模について明らかではない。残存する頸部以下の部分についてみると、頸部は円形を呈し、底部は東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。埋土土層断面図を参考にすると、壁は底面から頸部付近まで内傾する立ちあがりを示したのち、開口部まで外反する形状を示している。底面は平坦なものとなっており、その中央部付近には副穴が認められる。

埋土は、上位から中位までの部分が暗褐色土層で構成され、下位が褐色土層で構成されている。埋土全体に、焼土・炭化物の細粒が含まれている。残存部の規模は、頸部径164cm±・底部径228cm±×188cm±・深さ173cm±を計る。副穴は、径48cm±・深さ24cm±の規模をもつ。埋土中位から下位に堆積している褐色土層中から、縄文時代前期末葉期に位置づけられる土器片が多く出土している。

I VII-67 フラスコ形ピット (図版 186ef ; 写真図版 239de・266b)

精査時に開口部付近が崩落したため、この部位の規模については明らかではないが、平面形については円形を呈すると Field Card に記載されている。底部は円形の形状を呈し、その中央部には副穴が認められる。埋土土層断面図を参考にすると、壁は底面から中位付近まで内傾する立ちあがりのみせたのち、開口部にかけて僅かに外反する形状を示している。底面は平坦である。

埋土は、上部が暗褐色土層、下部が褐色土層で構成される堆積状況を示している。規模は、底部径186cm±・深さ142cm±を計る。副穴の規模は、径39cm±・底面からの深さ11cm±を計る。出土した層位については明らかではないが、埋土から縄文時代前期末葉期に位置づけられる土器片や粒径25cm±～33cm±を計る安山岩類亜角礫が出土している。

I VII-68ピーカー形ピット (図版186gh ; 写真図版 239f・240a)

平面形は、開口部・底部とも東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は西縁で部分的に内傾する形状をみせるが、他の部分では底面から外傾する立ちあがりを示す。底面は中央部が壁際に比べて5cm±低く凹んだ状況にある。埋土は上部が黒褐色土層、下部が暗褐色土層で構成されている。

規模は、開口部径104cm±×81cm±・底部径100cm±×47cm±・深さ46cm±～51cm±を計る。埋土上部から縄文土器の細片が出土している。

I VII-69フラスコ形ピット (図版 187ab ; 写真図版 240bc・266c)

検出時に調査手順の誤りから遺構の上半部を削平したことや、底面東半を大きく掘りすぎてしまったことから、残存状況はよくない。このため、底部付近を除く大部分の形状・規模については不明なものとなっている。残存部についてみると、底面は円形の平面形を呈し、その西壁に寄った部分には溝が1条認められている。壁は、全体に内傾する立ちあがりを示している。

残存する下底部付近の埋土は、褐色～暗褐色土層で構成されている。埋土中には炭化物が多く含まれている。残存部の規模は、底部径220cm±を計る。溝は、平均幅10cm±・底面からの平均深度6cm±の規模をもつ。

南壁寄りの底面に密着する状況で、縄文時代前期に位置すると考えられる深鉢形土器の大形破片が出土している。

I VII-70皿形ピット (図版 187c)

このピットは I VII-7 住居址西縁に位置する。I VII-7 住居址との重複関係については、I VII-7 住居址に伴う南壁が消失しているため明らかではない。

平面形は開口部・底部とも北西から南東の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は底面から開口部にかけて外傾する立ちあがりを示す。底面には起伏が認められ、その南東壁に寄った部分には副穴が認められる。埋土の状況については、実測を省略し、Field Card へも記載がない

ため明らかではない。

規模は、開口部径104cm±×76cm±・底部径92cm±×56cm±・深さ22cm±～27cm±を計る。副穴の規模は、径22cm±・底面からの深さ4cm±を計る。

I VII-71 フラスコ形ピット (図版 187de ; 写真図版 240de)

このピットは I VII-7 住居址北壁付近に位置し、I VII-7 住居址を切って作られている。平面形は開口部・底部とも円形を呈する。底面中央部に副穴が認められる。壁は底面から上部まで内傾する立ちあがりを示したのち、開口部まで垂直に続く形状を示す。底面は平坦なものとなっている。

埋土は主に暗褐色～褐色土層群によって構成されている。埋土全体にわたって焼土・炭化物が多く含まれている。規模は、開口部径79cm±・底部径192cm±・深さ124cm±を計る。副穴の規模は、径32cm±・底面からの深さ18cm±を計る。埋土から縄文土器の細片が出土している。

I VII-72 長方形ピット (図版 187fg ; 写真図版 240f)

平面形は、開口部・底部とも北北西から南南東の方向に長軸をもつ長方形を呈する。壁は直立する形状を示し、底面は平坦なものとなっている。埋土は、上位と下位が褐色土層、中位が褐色土ブロック混りの暗褐色土層で構成される堆積状況を示している。

規模は、開口部径185cm±×91cm±・底部径167cm±×73cm±・深さ37cm±を計る。暗褐色土層から縄文土器の細片が出土している。

I VII-73 皿形ピット (図版 187h)

平面形は開口部・底部とも南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は底面から外傾気味の立ちあがりを示す。底面は平坦である。埋土の状況については、実測図の作成を省略したことや、Field Cardへの記載を欠くため明らかではない。規模は、開口部径102cm±×83cm±・底部径91cm±×67cm±・深さ20cm±を計る。出土遺物はない。

I VII-74 ビーカー形ピット (図版 187i ; 写真図版 241a)

平面形は、開口部・底部とも東西の方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈する。壁は底面から開口部にかけて直立する形状を示す。底面は壁際の部分に比べて中央部付近が3cm±～5cm±低く凹んだ状況を示す。埋土の状況については、調査上の不手際から実測を省略したことや Field Card への記載を欠くため不明なものとなっている。

規模は、開口部径152cm±×122cm±・底部径134cm±×105cm±・深さ40cm±～45cm±を計る。出土遺物はない。

I VII-75 ビーカー形ピット (図版 188a)

平面形は、開口部・底部とも東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は底面から開口部にかけて外傾する立ちあがりを示す。底面には凹凸が認められる。実測図の作成は省略したが、

Field Cardの記載によれば、埋土は褐色土層で構成されていると記載されている。

規模は、開口部径115cm±×74cm±・底部径97cm±×57cm±・深さ40cm±～44cm±を計る。埋土から、縄文時代中期中葉期に位置づけられる土器片が出土している。

I VII-76ピーカー形ピット (図版 188b)

検出段階の不手際から下底部付近を残して上部を掘りすぎてしまい、残存状況は不良なものとなっている。残存部についてみると、底部の平面形は南北の方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈する。壁は底面から外傾する立ちあがりを示している。実測を省いたが、埋土の状況について Field Cardには、粒径1cm±～2cm±の火山灰ブロックを含む黒褐色土の単層で構成される、と記されている。全体の規模については明らかではないが、底部径は93cm±×57cm±を計る。

埋土から、ミニチュア土器が出土している。

I VII-77皿形ピット (図版 188c)

このピットは東壁付近を風倒木の攪乱によって消失している。このため、全体の形状・規模については不明なものとなっている。平面形が半円状に残存している部分についてみれば、壁は底面から外傾する立ちあがりを示し、底面は平坦なものとなっている。

埋土の状況については実測を省略したことや、Field Cardへの記載を欠くため明らかではない。残存部の規模は、開口部径93cm± (最大径)・底部径77cm± (最大径)・深さ24cm±を計る。出土遺物はない。

I VII-78ピーカー形ピット (図版 188de ; 写真図版 241b)

このピットは I VII-3 住居址埋土土層断面を実測する段階でその存在が明らかになった遺構である。存在が確認された段階ではすでに遺構の大部分が I VII-3 住居址精査のために削剝を受けて消失しており、このピットの全体の形状・規模については不明なものとなっている。

I VII-3 住居址埋土土層断面に現われた残存部についてみると、このピットは埋土上部に堆積している黒色土層群から中位に堆積している明褐色土層下位の層理面まで切って作られたあり方を示している。ここで観察された黒色土層群は基本層序 Ic 層以上の層準に相当し、さらに中位の明褐色土層は“湯沢パターン”を構成する火山灰層と考えられる。この断面の観察によれば、壁は直立する立ちあがりを示し、底面は東から西に8cm±低くなる傾きを示している。また、埋土は上部から黒褐色土層・明褐色土層・褐色土層の3層で構成されている。断面形の規模は、開口部径および底部径88cm±・深さ41cm±～49cm±を計る。

このピット埋土からの出土遺物については、I VII-3 住居址埋土出土遺物として一括して収められたため、詳細については明らかではない。

I VII-79フラスコ形ピット (図版 188fg ; 写真図版 241cd)

このピットは I VII-20 住居址と重複関係にあり、I VII-20 住居址をその南壁に寄った床面付

近で切る在り方を示している。平面形は開口部・底部とも南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は底面から開口部にかけて内傾する立ちあがりを示す。部分的に掘りすぎは認められるが、底面はほぼ平坦なものとなっている。

埋土は、上部から黒色土層・黒褐色土層・褐色土層の3層で構成される。上位から中位にかけての埋土中には焼土・炭化物が含まれている。規模は、開口部径152cm±×121cm±・底部径175cm±×150cm±・深さ（I VII-20住居址床面との比高）79cm±を計る。底面直上部から縄文時代中期初頭期～中葉期に位置づけられる深鉢形土器の破片類が出土しているほか、埋土からも同時期の土器片やスクレーパー・剝片などが出土している。

J VII区

J VII-51皿形ピット（図版188h；写真図版241e）

平面形は、開口部・底部とも東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は底面から開口部まで外傾する立ちあがりを示す。底面は西から東に僅かに傾き、西壁際の部分よりも東壁際の部分が4cm±低くなっている。埋土の状況については実測を省略したことやField Cardにも記載されていないため明らかではない。

規模は、開口部径175cm±×122cm±・底部径156cm±×102cm±・深さ36cm±～40cm±を計る。埋土から縄文時代前期に位置づけられる土器片や剝片類が出土している。

J VII-52ピット（図版188i）

南壁付近を調査時の削剝のため消失しており、全体の形状・規模については不明なものとなっている。残存部についてみれば、壁は外傾する立ちあがりを示し、底面には凹凸が認められる。埋土の状況については調査上の手ちがいから不明なものとなっている。埋土から、縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の破片類や剝片類が出土している。

J VII-53皿形ピット（図版188j；写真図版242a）

平面形は、開口部・底部とも東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は底面から開口部にかけて外傾する立ちあがりを示す。底面は平坦である。埋土の状況については、実測を省略したことやField Cardの記載がないところから明らかではない。

規模は、開口部径112cm±×77cm±・底部径60cm±×35cm±・深さ46cm±を計る。埋土から縄文時代前期末葉に位置づけられる深鉢形土器の大形破片や石鏃・スクレーパー・剝片類などが出土している。

J VII-54フラスコ形ピット（図版188ki；写真図版242b）

このピットはJ VII-20住居址と南壁付近で重複するあり方を示しているが、両者の新旧関係に

については明らかでない。残存部についてみると、頸部・底部とも東西の方向に長軸をもつ楕円形の平面形を呈する。J VII—20住居址と切り合う南壁上部に掘りすぎが認められたため、開口部の形状についてはよくわからないが、残存部から推定すると、頸部・底部同様の形状を呈していたものと考えられる。壁は底面から頸部まで内傾する立ちあがりを示したのち、開口部まで外傾する形状を呈する。底面には凹凸が認められる。

埋土の状況については、断面図の作成を省略したことや Field Card への記載がないため不明なものとなっている。残存部の規模は、開口部径 $165\text{cm}\pm\times 120\text{cm}\pm$ ・頸部径 $137\times 110\text{cm}\pm$ ・深さ $99\text{cm}\pm\sim 105\text{cm}\pm$ を計る。埋土からの出土遺物には、縄文時代前期末葉期に位置づけられる土器片や剥片がある。このほか、東壁に寄った底面直上部から粒径 $60\text{cm}\pm$ を計る2個の安山岩垂角礫が密着する状況で出土している。

J VII—55皿形ピット (図版189a)

このピットはJ VII—23住居址と重複関係にあり、北壁から東壁に相当する部分を切られて欠失した残存状況を示している。また、南壁付近を調査時に削平されている。このため、全体の形状・規模については明らかではない。

残存部についてみると、壁は底面から開口部にかけて僅かに外傾する立ちあがりを示し、底面は平坦なものとなっている。埋土に関しては、実測を省略したことや Field Card への記載がないところから明らかではない。残存部の規模は、開口部径 $183\text{cm}\pm$ (最大径)・底部径 $167\text{cm}\pm$ (最大径)・深さ $13\text{cm}\pm$ を計る。出土遺物はない。

J VII—56ピーカー形ピット (図版189b)

このピットはJ VII—27住居址、J VII—28住居址、J VII—29住居址と重複関係にある。これら3棟の住居址との個別的な新旧関係について述べると、このピットはJ VII—28住居址を切り、J VII—27住居址によって切られる関係にある。J VII—29住居址との関係については明らかではない。

残存部についてみれば、平面形は開口部・底部とも円形を呈し、壁はまっすぐか僅かに外傾する立ちあがりを示している。底面は南から北に $5\text{cm}\pm$ 低く傾く状況にある。埋土の状況については、重複する住居址の調査を優先し、実測図の作成を省略したために明らかではない。残存部の規模は、開口部径 $95\text{cm}\pm$ ・底部径 $66\text{cm}\pm$ ・深さ $73\text{cm}\pm\sim 78\text{cm}\pm$ を計る。このピットからの出土遺物はない。

J VII—57ピーカー形ピット (図版189c)

J VII—27住居址に伴う南壁が斜面に位置するところから消失しており、はっきりしたことは言えないが、位置関係からみて、このピットはJ VII—27住居址と重複関係にあるものと考えられる。しかし、新旧関係については明らかではない。

残存部についてみると、平面形は開口部・底部とも南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈し、壁は直立する形状を示す。底面には起状が認められる。埋土については、実測図を作成しなかったことや Field Card の記載がなかったために明らかではない。残存部の規模は、開口部径111cm±×82cm±・底部径96cm±×64cm±・J VII-27住居址床面からの深さ41cm±～47cm±を計る。出土遺物については、このピットの精査が J VII-27住居址の精査と併行して行なわれたため、その有無および詳細は不明なものとなっている。

(佐藤 勝)

J VIII区

J VIII-51ピーカー形ピット (図版189d)

このピットは J VIII-2 住居址群と重複する位置関係を示す。新旧関係についてみれば、このピットは J VIII-2 住居址群の中で最も新期の J VIII-2a 住居址を切る関係にあると考えられる。残存部についてみると、平面形は開口部・底部とも東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は底面から開口部にかけて直立ないしは僅かに外傾する立ちあがりを示す。底面には傾きが認められ、西壁付近が東壁付近に比べて15cm±～18cm±低くなっている。

埋土は、Field Card の記載によれば、全体に多量の焼土・炭化物および火山灰ブロックを含む暗褐色土の単層で構成されると記されている。残存部の規模は、開口部径170cm±×125cm±・底部径140cm±×90cm±・深さ39cm±～57cm±を計る。埋土からの出土遺物には、縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の破片や石鏃がある。

J VIII-52ピット

このピットは木根の攪乱によって形成されたものであり、誤って遺構登録されたものである。したがって、当遺構名は欠番扱いとする。

J VIII-53ピーカー形ピット (図版189ef ; 写真図版242cd)

このピットは、J VIII-54ピーカー形ピット・J VIII-56ピーカー形ピット・J VIII-201焼土遺構と重複する関係にあり、これらの遺構を切るあり方を示している。遺構の一部が調査区外にあることや、切り合い関係にある2基のピットと接する部分を掘りすぎによって消失したために、全体の形状・規模については不明なものとなっている。

残存部についてみると、壁は底面から開口部にかけて外傾する立ちあがりを示す。底面は部分的に木根による攪乱をうけているが、ほぼ平坦な状況にある。埋土は、暗褐色土の単層で構成されている。層中には炭化物が僅かに含まれている。検出された部分から、このピットの規模を推定すれば、開口部径200cm前後・底部径180cm前後・深さ56cm前後を計ると考えられる。出土遺物については、調査上の手違いから J VIII-54ピーカー形ピット・J VIII-56ピーカー形ピット

トと一括して収められたため明らかではない。

J VIII—54ピーカー形ピット（図版189eg；写真図版242cd）

このピットはJ VIII—53ピーカー形ピットおよびJ VIII—56ピーカー形ピットと重複し、J VIII—56ピーカー形ピットを切り、J VIII—53ピーカー形ピットを切るあり方を示している。北壁とみられる部分をJ VIII—53ピーカー形ピットとの切り合いのため欠失しており、全体の形状、規模については明らかではない。残存部についてみると、壁は底面から開口部まで外傾気味の立ちあがりを示す。底面は平坦である。

埋土は実測を省略したが、Field Cardによれば、焼土・炭化物を僅かに含む汚れ火山灰優占の褐色土層で構成されると記されている。残存部の規模は、開口部径115cm±・底部径102cm±・深さ24cm±を計る。出土遺物については、調査上の手ちがいから切り合い関係にあるJ VIII—53ピーカー形ピット・J VIII—56ピーカー形ピットと一括してとりあげたため不明なものとなっている。

J VIII—55フラスコ形ピット（図版190ab；写真図版242e・271ab）

このピットはJ VIII—6住居址のすぐ南側に隣接する位置にある。開口部南縁付近で木根による攪乱を部分的に受けている。平面形は、開口部・頸部・底部とも北西から南東の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は、底面から頸部まで内傾する立ちあがりを示したのち、開口部まで僅かに外反する形状を示す。底面はほぼ平坦な状況にあり、その中央部に副穴が認められるほか、東壁際に溝が観察されている。開口部が狭いことや遺物の出土状況などを考慮して、実測を省略したが、埋土はField Cardの記載によれば、上位と下位が焼土・炭化物を多く含んだ暗褐色土層、中位が褐色土層で構成される堆積状況を示すと述べられている。

規模は、開口部径102cm±×87cm±・頸部径90cm±×78cm±・底部径208cm±×171cm±・深さ197cm±を計る。副穴の規模は、径48cm±、底面からの深さ24cm±を計る。また、溝は平均幅10cm±・底面からの平均深度2cm±の規模をもつ。

出土遺物には、埋土上位および下位を構成する暗褐色土層中から出土した縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器3個体と、同時期とみられる土器片類がある。また、J VIII—6住居址南壁と当ピット開口部北縁との間に粒径41cm±を計る安山岩類垂角礫が1個存在している。

J VIII—56ピーカー形ピット（図版189eh；写真図版242cd）

このピットは、J VIII—53ピーカー形ピットおよびJ VIII—54ピーカー形ピットと重複関係にあり、これら2基のピットによって底部中央部から北壁付近を切られる状況にある。この遺構の一部が調査区外にあることや、他の2基のピットとの切り合いのため残存状況は不良なものになっており、全体の形状・規模については明らかではない。

残存部についてみると、開口部・底部は円形に近い形状を呈し、壁は底面から直壁に近い立ちあがりを見せる。中央部付近をJ VIII-54ピーカー形ピットによって切られ、壁に沿って環状に残存している底面は平坦なものとなっている。埋土は褐色土層の単層で構成される。

残存部から推定して、このピットの規模は、開口部径180cm前後・底部径170cm前後・深さ29cm±を計るものと考えられる。出土遺物については、J VIII-53ピーカー形ピット・J VIII-54ピーカー形ピットと一括してとりあげたため、その有無および詳細について明らかではない。

J VIII-57ピット (図版190ce ; 写真図版242f)

このピットの大半の部分が調査区外にあることや、検出された西壁付近に掘りすぎが認められることから、このピットの全体の形状・規模については不明である。重複関係についてみれば、このピットは中央部をJ VIII-58ピーカー形ピットに切られるあり方を示している。このピットの西方に認められるJ VIII-4住居址・J VIII-202焼土遺構との重複および新旧関係については明らかではない。

埋土断面を参考にすると、このピットは摺鉢状の断面形を呈する。埋土は、黒褐色土層で構成されている。検出された部分における最深部での深さは、42cm±を計る。出土遺物はない。

J VIII-58ピーカー形ピット (図版190df ; 写真図版242f)

このピットはJ VIII-57ピット内部にあって、J VIII-57ピットを中央部付近で切る在り方を示している。このピットの東側半分にあたる部分が調査区外に存在すると見られ、全体の形状および規模については明らかではない。

検出された部分や埋土土層断面を参考にすると、壁は北縁で直壁の形状を示し、南縁で外傾気味の立ちあがりを示している。底面は平坦なものとなっている。埋土は褐色土の単層で構成されている。検出された部分から規模を推定すると、開口部径75cm前後・底部径52cm前後・深さ82cm±を計るものと考えられる。出土遺物はない。

(佐藤 勝)

K VIII区

K VIII-51皿形ピット (図版190g)

このピットはK VIII-1住居址と重複関係にあり、K VIII-1住居址によって東壁付近を切られる残存状況を示している。このため、全体の形状・規模については不明である。

残存部についてみると、壁は外傾する立ちあがりを示し、底面は平坦なものとなっている。埋土の状況については、実測を省略したことやField Cardへの記載がないため明らかではない。残存部の規模は、開口部径92cm±(最大径)・底部径79cm±(最大径)・深さ28cm±を計る。埋

土から、縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の破片や石匙・剝片類などが出土している。

KVIII—52皿形ピット（図版190h）

平面形は開口部・底部とも南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は底面から開口部にかけて外傾気味の立ちあがりを示す。底面は平坦なものとなっている。埋土の状況については実測を省略したことや Field Card への観察記録を欠くため明らかではない。

規模は、開口部径120cm±×95cm±・底部径112cm±×85cm±・深さ13cm±を計る。埋土から、縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器の破片や石鏃、スクレーパー・ボーラ・ストーンなどが出土している。

KVIII—53ピーカー形ピット（図版190i）

平面形は、開口部が南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈し、底部が南北の方向に長軸をもつ片凸レンズ状の形状を呈する。底面南壁寄りの部分に副穴が認められる。壁は、西縁部でなだらかに外傾する立ちあがりを示すが、他の部分では直壁に近い形状を示す。底面はほぼ平坦なものとなっている。

埋土の状況については実測を省略したため明らかではない。規模は、開口部径132cm±×105cm±・底部径100cm±×50cm±・深さ39cm±を計る。副穴の規模は、径25cm±・底面からの深さ53cm±を計る。出土遺物はない。

KVIII—54皿形ピット（図版190j）

平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。壁は底面から開口部にかけて外傾する立ちあがりを示す。底面には傾きが認められ、北壁際の部分に比べ南壁際で12cm±低くなっている。規模は、開口部径97cm±・底部径80cm±・深さ18cm±～30cm±を計る。出土遺物はない。

L VII区

L VII—51フラスコ形ピット（図版191ab；写真図版243ab）

平面形は、開口部・底部とも東西の方向に長軸をもつ卵形を呈する。壁は北東縁でオーバー・ハング状の形状を呈するが、他の部分ではほぼまっすぐな立ちあがりを見せる。底面は平坦である。埋土は、上部が黒褐色土層、下部が暗褐色土層で構成されている。規模は、開口部径112cm±×104cm±・底部径97cm±×86cm±・深さ50cm±を計る。出土遺物はない。

L VII—52ピーカー形ピット（図版191cd；写真図版243cd）

平面形は、開口部が東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈し、底部が円形を呈する。壁は底面から開口部にかけて外傾する立ちあがりを見せる。底面は南縁が北縁に比べて8cm±低く傾い

たものとなっている。埋土は黒褐色～黒色土層で構成される。規模は、開口部径86cm±×74cm±・底部径64cm±・深さ37cm±～45cm±を計る。土器片などの出土遺物はないが、埋土下位から粒径8cm±を計る安山岩垂円～垂角礫が1個出土している。

L VII—53 フラスコ形ピット (図版191ef ; 写真図版243ef)

平面形は開口部が円形を呈し、底部が南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は北東縁でオーバー・ハング状の形状を呈するが、他の部分では底面から開口部にかけてやや外傾気味の立ちあがりを示す。底面は平坦なものとなっている。埋土は上部から黒色土層・黒褐色土層・褐色土層の順で構成されている。中位に堆積している黒褐色土層中には焼土および褐色火山灰の細粒が含まれている。規模は、開口部径127cm±・底部径123cm±×103cm±・深さ77cm±を計る。埋土から縄文土器の細片とスクレーパーが出土している。また、粒径7cm±～14cm±を計る安山岩垂角礫も数個出土している。

L VII—54 フラスコ形ピット (図版191gh ; 写真図版244ab)

平面形は、開口部が東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈し、底部が円形を呈する。壁は北縁でオーバー・ハング状の形状を呈するが、他の部分は直壁または外傾ぎみの形状を示している。底面には凹凸が認められる。埋土は上部から褐色土層・黒褐色土層・暗褐色土層の順で構成されている。埋土中位以下の部分には焼土および炭化物の細粒が多く含まれている。

規模は、開口部径127cm±×110cm±・底部径115cm±・深さ30cm±～35cm±を計る。出土遺物はない。

L VII—55 フラスコ形ピット (図版191ij ; 写真図版244cd)

平面形は開口部・底部とも円形を呈する。壁は東側半分が底面から開口部まで内傾する立ちあがりをみせるのに対し、西側の部分は開口部付近まで内傾する立ちあがりをみせたのち開口部にかけて外反する形状を呈する。底面はほぼ平坦なものとなっている。埋土は上部から、黒色土層・黒褐色土層・褐色土層・暗褐色土層の順で構成されている。埋土全体に褐色火山灰の細粒が含まれている。規模は、開口部径130cm±・底部径162cm±・深さ76cm±を計る。出土遺物はない。

L VII—56 皿形ピット (図版192ab)

このピットはL VII—1 住居址と重複関係にあり、床面中央部付近でこれを切る在り方を示している。検出された段階ですでに開口部付近を削平されており、この部位の形状・規模については明らかではない。残存する下底部付近をみると、底部は東西の方向に長軸をもつ楕円形の平面形を呈し、壁は外傾気味の立ちあがりを示している。底面には凹凸が認められ、北縁に4個のピット (P_a・P_b・P_c・P_d) が存在する。この部分の埋土は暗褐色～黒褐色土層で構成されており、下位には焼土・炭化物の細粒を多く含んでいる。残存部の規模は底部径140cm±×103

cm±を計る。底面から検出されたピットはそれぞれ、P_a（径15cm±・底面からの深さ18cm±）・P_b（径10cm±・底面からの深さ12cm±）・P_c（径20cm±・底面からの深さ26cm±）・P_d（径15cm±・底面からの深さ21cm±）の規模をもつ。これらのピットの性格については当皿形ピットに伴なう副穴と基本的には考えられるが、規模からみてあるいはLⅦ-1住居址を構成する柱穴状ピットの痕跡をとどめるものかもしれない。

この遺構は調査の時点でLⅦ-1住居址を構成する床面の一部として取り扱われたため、埋土から出土した遺物もLⅦ-1住居址埋土出土遺物として一括して収納された。このため、この遺構固有の出土遺物については全く不明な状況にある。このように土器片などの出土遺物については明らかではないが、底面直上部から下位の泥流起源のものとして推定される安山岩壱円～壱角礫が10個得られている。

SⅢ区

SⅢ-51フラスコ形ピット（図版192cd；写真図版244ef）

このピットはSⅢ-1住居址と重複関係にあり、SⅢ-1住居址をその北壁付近で切る在り方を示している。平面形は開口部・底部とも円形を呈する。壁は底面から開口部まで内傾する立ちあがりを見せる。底面はほぼ平坦なものとなっている。埋土は褐色土層と黄褐色土層で構成されている。規模は、開口部径126cm±～130cm±・底部径180cm±～185cm±・深さ162cm±を計る。出土遺物はない。

SⅢ-52ピーカー形ピット（図版192ef；写真図版245a）

このピットもSⅢ-①住居址と重複関係にあり、SⅢ-1住居址をその北東壁付近で切る在り方を示している。遺構の西側半分を掘りすぎたため、全体の形状・規模については明らかではないが、残存部からの推定や検出段階におけるField Cardの記載などから、平面形は開口部・底部とも内形を呈するものと思われる。残存部をみると、壁は底面から開口部まで外傾する立ちあがりを示しており、底面はほぼ平坦なものとなっている。埋土は上部が炭化物を含む褐色土層、下部が黄褐色土層で構成されている。

残存部の規模は、開口部径148cm±・底部径110cm±・深さ51cm±～53cm±を計る。出土遺物はない。

SⅢ-53ピーカー形ピット（図版192g）

このピットはSⅢ-2住居址東壁付近の床面に位置する。SⅢ-2住居址との新旧関係については、検出面が不明なことや埋土の実測および層位関係の吟味を省略したため不明なものとなっている。平面形・開口部・底部とも南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。底面にはSⅢ

— 2 住居址に伴なう柱穴状ピット (P₄) の下底部付近が痕跡的に認められる。

壁は底面から開口部まで外傾する立ちあがりを見せる。底面は平坦なものとなっている。埋土に関しては、実測を省略したことや Field Card への記載がないため明らかではない。規模は開口部径105cm±×78cm±・底部径86cm±×77cm±・深さ45cm±を計る。出土遺物はない。

SIV区

SIV—51フラスコ形ピット (図版192h・193ab ; 写真図版245bc・272a)

このピットは位置関係からみてSIV—2住居址と重複する在り方を示す。新旧関係についてはSIV—2住居址の輪郭が不明なため明らかではない。平面形は、開口部・頸部・底部とも不整な円形を呈する。壁は、底部から中位付近まで内傾する立ちあがりを見せたのち、開口部にかけて外傾する形状を示す。底面は平坦なものとなっている。

埋土は、上部から黒褐色土層・褐色土層・暗褐色土層の3層で構成される堆積状況を示す。このうち、下位に堆積している暗褐色土層中には炭化物が僅かに含まれている。規模は、開口部径137cm±~146cm±・頸部径123cm±~132cm±・底部径200cm±~210cm±を計る。土器片などの出土遺物はないが、暗褐色土層中から粒径4cm±~60cm±を計る40個の扁平な安山岩類亜角礫が集中して出土している。これらの礫群の中には、表面に火熱を受けた痕跡の認められるものもある。

SIV—52フラスコ形ピット (図版193cd ; 写真図版245de)

平面形は、開口部・底部とも不整な円形を呈する。壁は部分的に異った形状を呈するが、全体に底部から上部まで内傾する立ちあがりを見せたのち、開口部までまっすぐに続く形状を示す。底面には僅かに傾きが認められ、北壁際の部分に比べて南壁際の部分で13cm±低くなっている。底面西壁際に副穴が認められる。

埋土は、暗褐色~褐色土層で構成され、中位付近に汚れ火山灰優占のにおい褐色土ブロックを包含している。規模は、開口部径146cm±~153cm±・底部径200cm±~210cm±・深さ142cm±~155cm±を計る。副穴の規模は、径23cm±・底面からの深さ13cm±を計る。埋土から、縄文時代中期末葉期に位置づけられる土器片が出土している。

SIV—53フラスコ形ピット (図版193e)

このピットは、SIV—3住居址群およびSIV—4住居址が重複して存在する範囲の西縁から検出された。位置関係からみて、SIV—3住居址群・SIV—4住居址と重複関係にあると考えられるが、これらの住居址との具体的な新旧・共存関係については明らかではない。

平面形は開口部・底部とも不整な円形を呈する。壁は、西縁で重複する住居址群に伴う西壁

と共有するあり方を示す。壁の形状は、西壁がオーバー・ハング状を呈し、他の部分では直壁の形状を示している。底面には起状が認められる。

埋土の状況については、実測を省略したため詳細については明らかではないが、Field Card の記載を参考にすれば、重複する住居址群の床面を構成する火山灰層と層相の類似した褐色土層で構成されていたものと考えられる。残存部の規模は、開口部径108cm±～118cm±・底部径120cm±・深さ（SIV-3・4住居址床面との比高）56cm±～67cm±を計る。出土遺物はない。

SIV-54ピーカー形ピット（図版193f）

このピットはSIV-3住居址群およびSIV-4住居址が重複して存在する範囲の北縁から検出された。位置関係からみて、このピットは重複して存在する住居址群のいずれかと新旧・共伴の関係をもつと思われるが、その具体的な関係については明らかではない。

残存状況についてみると、これらの住居址群に伴って検出された北壁を共有し、平面形は開口部・底部とも不整な円形～楕円形の形状を呈する。壁は、北壁付近で直立する立ちあがりをみせるが、それ以外の部分では緩かに外傾する状況にある。底面は北から南に7cm±低くなる傾きをみせる。埋土の状況については実測を省略したことやField Cardへの記載がないため明らかではない。

規模は、開口部径94cm±×70cm±・底部径40cm±×34cm±・深さ（SIV-3・4住居址床面との比高）44cm±～51cm±を計る。出土遺物はない。

SIV-55ピーカー形ピット（図版193g；写真図版246a）

このピットはSIV-3住居址群およびSIV-4住居址が重複して存在する範囲の南西縁から検出された。位置関係からみて、このピットは重複関係にある住居址群と共伴あるいは新旧関係をもつ存在ととらえられるが、その具体的なことがらについては明らかではない。

残存状況についてみると、平面形は開口部が不整な円形を呈し、底部が不整な楕円形を呈する。壁は全体に外傾する形状を示す。底面は中央部付近が壁際に比べて12cm±低く凹んだものとなっている。埋土の状況については、実測図の作成を省略したことやField Cardへの記載がないため不明なものとなっている。

規模は、開口部径100cm±～110cm±・底部径60cm±～65cm±・深さ62cm±～74cm±を計る。出土遺物はない。

SIV-56ピーカー形ピット（図版194ab；写真図版245f）

このピットはSIV-1住居址群と重複関係にあり、これらの住居址群が重複して存在する範囲の床面中央部を切る在り方を示している。平面形は、開口部が不整な円形を呈し、底部は北西から南東の方向に長軸をもつ隅丸長方形に近い形状を呈する。壁は底面から開口部にかけて外傾する立ちあがりを示す。底面は平坦である。

埋土は上部から黒褐色土層・暗灰色土層・暗褐色土層・汚れ火山灰優占の褐色土層の4層で構成されている。このうち中位付近に堆積している暗灰色土層は基本層序β層に相当し、「一本木火山礫」(中川ら：1963)の一部を構成する火山灰と考えられる。

規模は、開口部径268cm±～290cm±・底部径240cm±×188cm±・深さ49cm±を計る。埋土から、縄文時代後期中葉期に位置づけられる深鉢形土器の大形破片と石棒が出土している。

SIV-57ピーカー形ピット (図版193h)

このピットはSIV-6住居址群が存在する範囲の南東縁に位置する。位置関係からみれば、このピットはSIV-6住居址群と重複関係にあると思われるが、検出面が明らかでないことや底部および東壁付近にSIV-6住居址群を構成するピット(P₁₀・P₂₃・P₃₅・P₃₆)などが存在するところから、この住居址群との新旧・共伴などの具体的な関係についてはよくわからない。

残存部についてみると、平面形は開口部・底部とも北西から南東の方向に長軸をもつ楕円形の形状を呈し、壁は外傾する立ちあがりを示している。底部にはSIV-6住居址群に伴う柱穴(前掲)が認められるが、それらを除いた部分はほぼ平坦なものとなっている。

埋土の状況については実測図の作成を省略したことやField Cardへの記載を欠くため不明である。残存部の規模は、開口部径126cm±×104cm±・底部径113cm±×82cm±・深さ(SIV-6住居址群床面との比高)11cm±を計る。出土遺物はない。

SV区

SV-51ピーカー形ピット (図版194c)

このピットはSV-2住居址群が重複して存在する範囲の北縁から検出された。検出面の高さからみて、このピットはSV-2住居址群を切る関係にあると考えられる。平面形は開口部・底部とも不整な円形を呈し、南東壁付近でSV-2住居址群を構成する柱穴(P₁)を部分的に切る在り方を示している。壁は底面から開口部にかけていくらか外傾する立ちあがりを示している。精査の段階で部分的に掘りすぎてしまったが、残存する底面は平坦なものとなっている。

埋土の状況については、Field Cardによれば、風化軽石混りの暗褐色土層のほぼ単層で占められていると記載されている。規模は、開口部径119cm±～125cm±・底部径100cm±～107cm±・深さ(SV-2住居址群床面との比高)25cm±を計る。出土遺物はない。

SV-52フラスコ形ピット (図版194de ; 写真図版246bc)

このピットはSV-2住居址群が重複して存在する範囲の北東縁から検出された。SV-2住居址群に共伴する北東壁が調査手順の誤りから削剝されて不明なために具体的には認められないが、位置関係からみればこのピットはSV-2住居址群と重複関係にあると考えられ、検

出面などを手がかりとすればSV-2住居址群を切る関係にあると思われる。

平面形は、開口部・底部とも円形を呈する。壁は全体に底面から開口部まで内傾する立ちあがりを示している。底面はほぼ平坦なものとなっている。埋土は褐色～暗褐色土層で構成されている。埋土上部に焼土・炭化物が含まれている。

規模は、開口部径128cm±・底部径150cm±・深さ62cm±を計る。出土遺物はない。

SV-53フラスコ形ピット（図版194fg；写真図版246d）

平面形は、開口部・底部とも東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は、北半部でオーバー・ハング状の形状を呈し、南半部で直壁状の形状を呈する。部分的に掘りすぎが認められるが、残存する底面は平坦なものとなっている。埋土は焼土・炭化物混りの暗褐色～褐色土層で構成される。規模は、開口部径136cm±×120cm±・底部径135cm±×127cm±・深さ48cm±を計る。出土遺物はない。

SV-54ピーカー形ピット（図版194hi）

平面形は、開口部・底部とも北西から南東の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は底面から開口部まで僅かに外傾する立ちあがりを示す。底面は壁際の部分に比べて中央部付近が3cm±～5cm±低く凹んでいる。埋土は汚れ火山灰優占の褐色土層で構成されている。

規模は、開口部径155cm±×130cm±・底部径130cm±×120cm±・深さ36cm±～41cm±を計る。出土遺物はない。

SV-55ピーカー形ピット（図版194jk；写真図版246e）

このピットはSV-3a住居址西壁付近に位置し、SV-3住居址群を切る在り方を示している。SV-3住居址群を構成する柱穴配置を検討した結果、このピットは掘削の際に西壁付近の床面と一部の柱穴（P_x）を切って形成されたものと考えられる。

残存部についてみると、平面形は開口部・底部とも円形を呈し、壁は底面から開口部にかけてまっすぐな立ちあがりを示している。底面は平坦な状況にある。埋土は上部から暗褐色土層・褐色土層・黄褐色土層で構成される堆積状況を示している。

規模は、開口部径120cm±・底部径105cm±・深さ（SV-3a住居址床面との比高）40cm±を計る。出土遺物はない。

SV-56ピーカー形ピット（図版195a）

このピットはSV-4住居址内部の北壁に寄った床面から検出された。位置関係からみて、SV-4住居址と重複関係にあることはまちがいないと考えられるが、検出面が明らかでないことや埋土の実測を省略して層位関係を把握できないところから、新旧・共伴いずれの関係にあるのか不明なものとなっている。

残存部についてみると、平面形は開口部・底部とも東西の方向に長軸をもつ楕円形を呈し、

壁は底面から僅かに外傾する立ちあがりを示している。底面には傾きが認められ、東壁際の部分に比べて西壁際で10cm±低くなっている。埋土の状況については、前述の理由に加え Field Card にも記載がないところから明らかではない。規模は、開口部径104cm±×90cm±・底部径87cm±×72cm±・深さ(SV-4住居址床面との比高)14cm±~24cm±を計る。出土遺物はない。

SV-57フラスコ形ピット (図版195bc ; 写真図版247ab)

平面形は、開口部・底部とも南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は全体に直壁に近い形状を呈するが、北西縁の一部でオーバー・ハング状の形状を示す。底面は平坦な状況であり、その西壁に寄った部分には副穴が認められる。埋土は、上部から暗褐色土層・褐色土層・明褐色土層で構成される堆積状況を示す。

規模は、開口部径157cm±×140cm±・底部径120cm±×110cm±・深さ97cm±を計る。副穴の規模は、径88cm±×75cm±・底面からの深さ10cm±を計る。出土遺物はない。

SV-58ビーカー形ピット (図版195d)

このピットはSV-7住居址群と重複関係にあり、SV-7住居址群をその南壁付近で切るあり方を示している。平面形は開口部・底部とも南北の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は底面から開口部にかけてほぼまっすぐな立ちあがりを示している。底面は中央部が壁際の部分に比べ10cm±~16cm±低く凹んだものとなっている。埋土の状況については、Field Cardによれば暗褐色土の単層で構成されると記されている。

規模は、開口部径84cm±×71cm±・底部径70cm±×62cm±・深さ35cm±~51cm±を計る。出土遺物はない。

TIV区

TIV-51フラスコ形ピット (図版195ef ; 写真図版247cd)

平面形は、開口部・頸部・底部とも不整な円形を呈する。壁は、底部から頸部まで内傾する立ちあがりを見せたのち、開口部まで外傾する形状を示す。底面は、ほぼ平坦なものとなっている。埋土は、上部から暗褐色土層・黒褐色土層・褐色土層・明褐色土層の4層で構成されている。規模は開口部径173cm±~182cm±・頸部径114cm±~123cm±・底部径195cm±を計る。出土遺物として、縄文時代中期末葉期に位置づけられる土器片が出土している。また、北壁に寄った底面直上部から粒径22cm±を計る炭化材が得られている。

TIV-52ピット (図版195gh ; 写真図版247e)

埋土と壁や底部を構成する火山灰層の層相が近似していたため、北西壁の一部を残して全体を大幅に掘りすぎてしまった。このため残存状況は不良で、全体の形状・規模については不明

なものとなっている。検出段階に記された Field Card や埋土土層断面を参考にすると、このピットは平面形が円形を呈し、底部径約140cm±を計り、断面形がピーカー形に近い形状を呈するものであったろうと考えられる。残存する北西壁は平坦な底面から外傾する立ちあがりを示している。

埋土は、暗褐色～黒褐色土層と中位付近にブロック状に堆積している暗灰色土層で構成されている。このうち、暗灰色土層は基本層序β層に相当し、一本木火山礫の一部を構成する火山灰層と考えられる。出土遺物には、埋土から出土した縄文時代中期末葉期に位置づけられる土器片がある。

TIV-53 フラスコ形ピット (図版195i)

このピットはTIV-5住居址北東壁付近に位置し、TIV-4住居址を切るあり方を示している。TIV-5住居址との新旧関係については明らかではないが、調査員によってこのピットの検出面がTIV-5住居址床面にあるとField Cardに観察記録されていることを参考にすれば、むしろ共伴関係にあると考えられよう。

平面形は、開口部・底部とも北西から南東の方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁は、TIV-5住居址床面に沿った部分では外傾ぎみの立ちあがりを示すが、東壁付近では底面から内傾する形状を示す。底面は壁際の部分に比べて中央部付近が12cm±低く凹んでいる。実測は省略したが、埋土はField Cardの記載によれば、黒褐色土層で構成されていたと記されている。

規模は、開口部径78cm±×60cm±・底部径82cm±×70cm±・深さ(TIV-5住居址床面との比高)25cm±～37cm±を計る。

(佐藤 勝)

(3) 配石遺構

F II 区

F II-151配石遺構 (図版 196ab ; 写真図版 248ab・249a)

この遺構は丘陵頂面に位置し、遣り方座標N 0～N 1・W71～W73の範囲から検出された。検出面は、基本層序Ic層上部に相当する。礫群は、東西方向に長軸をもち径90cm±×64cm±を計る楕円形の範囲に密集する状況を示し、粒径15cm±～56cm±を計る20個の安山岩亜円～亜角礫で構成されている。これらの礫群下位から、この遺構に共伴するとみられるピットが検出されている。このピットは礫群の集石状況と同じ平面形を呈し、浅皿状の断面形を示す。ピットの規模は、開口部径110cm±×75cm±・底部径100cm±×68cm±・深さ20cm±を計る。

土器などの伴出遺物はないが、礫群を被覆する基本層序 Ic層に相当する暗褐色土層の形成時期を参考にすると、この遺構は縄文時代中期末葉期～晩期の間に位置づけられよう。

H VII区

H VII-151配石遺構（図版 197ab；写真図版 249bc）

この遺構は、遣り方座標 S 59～S 61・E 70～E 73の範囲内に位置し、表土直下の黒色土層に礫群の上端をさらす状態で検出された。礫群は、粒径18cm±～90cm±を計る流紋岩亜角礫および安山岩巨礫など12個で構成され、径230cm±×120cm±の範囲に重なり合った検出状況を示している。このうち、斜位の状態で他の礫に重なっている中央部の長楕円体状の礫は、下端部がこの遺構に伴うピットの埋土に達しており、本来は立石していたものと考えられる。また、周辺に散乱している亜角～亜円礫も本来はこの遺構に伴う構成礫であったろうと考えられる。

礫群の下位から検出されたピットは、平面形が東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈する。調査上の不手際から、全体の規模については明らかではないが、埋土断面を参考にすると、開口部径145cm±・底部径120cm±・深さ35cm±を計るものとなっている。このピットの埋土は、火山灰ブロック混りの暗褐色土・黒褐色土などで構成され、下位に異地性の焼土を含む。埋土から剥片類が出土している。

礫群を覆う埋土は、上部から十和田 a 降下火山灰層（大池、1972・1973・1974）・黒褐色土層・暗褐色土層で構成される自然堆積相を示している。この埋土下位の層準は、基本層序 Ic層下位に相当する。

他の遺構との切り合い関係は認められないが、層的にみれば、この遺構は H VII-16住居址南壁から I VII-1 住居址北壁にかけての部分の上位に載るあり方を示している。ピットの下部の一部が H VII-16住居址に伴う埋土下位を切っている状況や、礫群を覆う埋土の下位の層準が基本層序 Ic層下位に相当するところから、この遺構は縄文時代中期末葉期～縄文時代晩期の間に位置づけられよう。

（佐藤 勝）

(4) 焼土遺構

G III区

G III-201焼土遺構群（図版 198abcdef；写真図版 251abc）

この遺構群は、遣り方座標 S 1～4・W39～42の範囲に位置する 3 基の焼土遺構で構成される。3 基の焼土遺構は近接する分布状況を示し、基本層序 II 層下位～III 層上位から検出された。ここでは 3 基の遺構を北西の方向から 1 号・2 号・3 号と呼び、以下それぞれについて記載することにする。

1 号は 3 基のうち最も西側にあつて、2 号から西側に約 150cm、3 号から北西に約 170cm 離れた部分に位置する。この遺構は西縁の一部を木根の攪乱によって形成された不整形ピットによって切られるあり方を示している。現地性焼土は不整形ピットの西縁に片凸レンズ状の平面形を呈して残存している。残存部の規模は径 90cm±×30cm±を計る。この部分だけに限って見れば、使用面は周辺の火山灰層と同じレベルにあり、下位の火山灰層は使用面から 11cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。出土遺物はない。

2 号は 3 基のうち最も北側にあつて、1 号から東側に約 150cm±、3 号から北側に約 140cm 離れた部分に位置する。現地性焼土は径 40cm±×30cm±の範囲に形成されている。使用面は周辺の火山灰層上面と同じレベルにあり、下位の火山灰は使用面から 10cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。使用面下位から焼土に混じって縄文土器の細片が出土している。

3 号は 3 基のうち最も南側にあつて、1 号から南東に約 170cm、2 号から南側に約 140cm 離れた部分に位置する。現地性焼土は径 70cm±×60cm±の範囲に形成されている。使用面は周辺の火山灰層上面と同じレベルにあり、下位の火山灰は使用面から 6cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。出土遺物はない。

G III-202 焼土遺構 (図版 199ab ; 写真図版 251d)

この遺構は、遣り方座標 S 11～12・W46～48の範囲内に位置する。検出面は、基本層序 Ic 層下位から III 層上面付近に相当する。現地性焼土は径 100cm±×55cm±の範囲に形成されている。使用面は周辺の火山灰層上面より 2cm±～3cm±高いレベルに認められる。下位の火山灰層は使用面から 8cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。この遺構に共伴する遺物として、焼土上部から縄文土器の細片が出土している。

この遺構の周辺からは、P₁ (径 30cm±・深さ 34cm±)・P₂ (径 45cm±・深さ 17cm±)・P₃ (径 30cm±・深さ 32cm±)・P₄ (径 21cm±・深さ 18cm±)・P₅ (径 39cm±・深さ 37cm±)・P₆ (径 37cm±・深さ 44cm±)・P₇ (径 28cm±・深さ 37cm±)・P₈ (径 20cm±・深さ 19cm±)・P₉ (径 21cm±・深さ 28cm±)・P₁₀ (径 22cm±・深さ 29cm±)・P₁₁ (径 35cm±・深さ 39cm±)・P₁₂ (径 30cm±・深さ 47cm±)・P₁₃ (径 41cm±・深さ 38cm±)・P₁₄ (径 18cm±・深さ 37cm±)・P₁₅ (径 22cm±・深さ 36cm±) など 15 個のピットが検出されている。これらのピットの性格およびこの遺構との関係については明らかではない。

G VII区

G VII—201焼土遺構 (図版 200ab)

この遺構は、遣り方座標 S 29～30・E 63～65の範囲内から、G VII—72フラスコ形ピットの精査に付随して検出された。調査上の不手際から北縁部を掘りすぎ、残存状況は不良なものとなっている。残存状況についてみると、現地性焼土は径65cm±×20cm±の範囲に形成されていて、層厚8cm±を計る。使用面は周辺の火山灰層上面より凹んだ状況を呈する。

現地性焼土の南西付近から、P₁ (径18cm±・深さ19cm±)・P₂ (径25cm±・深さ10cm±) の2個のピットが検出されているが、この遺構との関係およびその性格については明らかではない。この遺構に伴う出土遺物はない。

H III区

H III—201焼土遺構群 (図版 26a・201abc ; 写真図版 41)

この遺構群は、遣り方座標 S 41～44・W 49～50の範囲に位置する2基の焼土遺構から構成される。H III—1住居址群の精査に伴って付随的に検出され、検出面はII層下位に相当する。2基の遺構の間には木根によって形成されたと考えられる不整形ピットが認められ、これらの遺構はその縁辺を切られる在り方を示している。ここでは2基の焼土遺構を北から1号・2号と呼び、以下それぞれについて記載することにする。

1号は南東縁付近を不整形ピットに切られる残存状況を示している。残存する現地性焼土は、径45cm±×33cm±の範囲に認められる。使用面は周辺の火山灰層と同じレベルに認められ、下位の火山灰層は使用面から5cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。出土遺物はない。

2号は、1号の南側約80cm離れた部分に位置し、北縁部を不整形ピットによって切られる残存状況を示している。残存する現地性焼土は径42cm±×30cm±の範囲に認められる。使用面は周辺の火山灰層と同じレベルに認められる。この遺構は下位に浅皿状の掘り方を伴う。掘り方内部には暗褐色土が敷設されており、使用面から3cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。出土遺物はない。

2基の焼土遺構はその分布状況からみて、H III—1住居址群に共伴する3基の「定位置地床炉」(1号炉・2号炉・3号炉)を結ぶ南側延長上に位置するところから、あるいは3基以外の定位置地床炉と捉えられたが、H III—1住居址群を構成する柱穴配置を検討した結果、その輪郭線外に位置することから、推測の域を出ないものと考えられる。

HVI区

HVI-201焼土遺構（図版 200cd；写真図版 252a）

この遺構は、遣り方座標 S 37～38・E 43～48 の範囲内に位置する。検出面は基本層序 II 層下位から III 層上面付近である。現地性焼土は、径 70cm±×64cm± の範囲に形成されている。層厚 3cm± を計る。使用面は周辺の火山灰層と同じレベルに認められ、下位の火山灰層は使用面から 13cm± の深さまで火熱による赤色変化を受けている。出土遺物はない。

HVII区

HVII-201焼土遺構（図版 200ef；写真図版 252b）

この遺構は、遣り方座標 S 52～53・E 69～71 の範囲内に位置する。検出面は明らかではないが、基本層序 III 層上部に設けられている。現地性焼土は径 60cm±×45cm± の範囲に形成されている。使用面は周辺の火山灰層上面と同じレベルにあり、あまり焼成を受けていない。下位の火山灰層は使用面から 6cm± の深さまで火熱による赤色変化を受けている。出土遺物はない。

I VII区

I VII-201焼土遺構（図版 201de）

この遺構は、遣り方座標 S 74～76・E 65～66 の範囲内に位置し、I VII-4 住居址埋土中位付近から検出された。現地性焼土は径 50cm±×45cm± の範囲に形成されている。層厚 8cm± を計る。使用面は平坦なものとなっており、約 140cm± 東側に位置する I VII-202 焼土遺構使用面よりも 4cm± 高いレベルにある。この遺構に伴う出土遺物はない。

I VII-202焼土遺構（図版 201fg）

この遺構は、遣り方座標 S 74～76・E 66～68 の範囲にあつて、I VII-201 焼土遺構から東側に約 140cm± 離れた部分に位置している。検出面は I VII-4 住居址埋土中位付近である。現地性焼土は、径 65cm±×46cm± の範囲に形成されており、層厚 7cm± を計る。使用面はほぼ平坦な状況を呈し、I VII-201 焼土遺構使用面よりも 4cm± 低いレベルにある。下位の土層は使用面から深さ 13cm± の部分まで火熱による赤色変化を受けている。この遺構に伴う出土遺物はない。

I VII-203焼土遺構（図版 202ab；写真図版 252cd）

この遺構は、遣り方座標 S 75～77・E 69～71 の範囲に位置する。検出面は明らかではないが基本層序 III 層上部に設けられている。現地性焼土は、径 60cm±×44cm± の範囲に形成されてい

る。この遺構は構成礫を伴い、粒径38cm±を計る板状の安山岩類亜角礫が15cm±下位まで斜位に埋置されている。使用面は中央部が縁辺よりも3cm±低く凹んだ状況を呈する。断ち割りの結果、現地性焼土下位から、摺鉢状の掘り方が認められた。掘り方内部は、焼土混りの褐色～暗褐色土で充填されており、使用面から9cm±の深さまで火熱による赤色変化を受けている。この遺構に伴う出土遺物はない。

J VII区

J VII-201焼土遺構（図版 202cd；写真図版 252e）

この遺構は、遣り方座標 S 94～95・E 79～81の範囲内に位置し、基本層序Ⅲ層上部から検出された。現地性焼土は、径65cm±×60cm±の範囲に形成されており、層厚9cm±を計る。使用面は周辺の火山灰上面とほぼ同じレベルにある。出土遺物はない。

J VIII区

J VIII-201焼土遺構（図版 202ef；写真図版 252f）

この遺構は、遣り方座標 S 96～99・E 92～93の範囲内に位置し、基本層序Ⅲ層上部から検出された。J VIII-251土器埋設遺構と近接するあり方を示し、東縁でJ VIII-53ピーカー形ピットによって切られる残存状況を示している。現地性焼土は径78cm±×35cm±の範囲に認められる。使用面は周辺の火山灰上面よりも2cm±高いレベルにあり、下位の火山灰は使用面から12cm±の深さまで火熱による赤色変化をうけている。この遺構に伴う出土遺物はない。

この遺構とJ VIII-251土器埋設遺構とは、位置的に極めて近接し、層位的にも土器が埋設された層準と焼土の検出された層準が同じ基本層序Ⅲ層上面と捉えられることから、両者は共伴関係にあるとみられる。埋設土器を参考にすると時期的には、縄文時代前期末葉期に位置づけられよう。

J VIII-202焼土遺構（図版 203c）

この遺構は、遣り方座標 S 101～102・E 94～95の範囲内に位置し、基本層序Ⅲ層上面から検出された。南東縁でJ VIII-57ピットと近接したあり方を示すが、その中間部に木根による攪乱が認められるため、両者の具体的な重複関係については明らかではない。

現地性焼土は径37cm±の範囲に形成されているが、全体に木根による攪乱をうけており残存状況はよくない。このため、周辺の火山灰層上面とほぼ同じレベルにある使用面より下位の観察はできなかった。この遺構に伴う出土遺物はない。

(5) 土器埋設遺構

JⅧ区

JⅧ—251土器埋設遺構（図版203bd；写真図版253abc・254abcde・256a）

この遺構は、遣り方座標S95～98・E91～93の範囲内に位置し、不規則な間隔を計りながらもほぼ南北の方向に分布する4基の埋設土器群によって構成される。検出時に記されたField Cardによれば、この遺構を覆う埋土は多量の土器片を含む暗褐色土層で構成されていたと述べられていることから、この遺構の検出面は周辺部一帯に形成された遺物包含層下位の層準と考えられる。

4基の埋設土器はいずれも縄文時代前期末葉期に位置づけられる深鉢形土器で、それぞれ基本層序Ⅲ層に相当する火山灰層に大半の部分を埋設された状況で検出された。周辺のいわゆる“地山”相当面は北から南に緩かに傾き、全体に比較的堅くしまったものとなっている。

位置的にみると、この遺構はJⅧ—201焼土遺構の西側に極めて近接したあり方を示す。また、検出面も同じ層準にとらえられることから、両者は共伴関係にある同時期の遺構と考えられよう。ここでは、4基の埋設土器を北から順にA・B・C・Dと呼び、以下それぞれについて述べていくことにする。

Aは口縁部を欠く1個体の土器と内接する状況で埋設されているもう1個体の大形破片で構成されている。下半部を11cm±の深さまで直立の状態に埋設されている。埋設に伴う掘り方や土器内部の埋土については明らかではない。

BはAの南側約25cm±離れた部分に位置する。1個体の完形土器で構成され、その下半部を27cm±の深さまで直立の状態に埋設されている。掘り方や土器内部の埋土については明らかではない。

CはBの南東方向に約15cm±離れた部分に位置する。1個体の底部付近の大形破片で構成され、南側に開口する斜位の状態で6cm±の深さまで埋設されている。掘り方や土器内部の埋土については明らかではない。

DはCの南側約95cm±離れた部分に位置する。口縁部を欠く1個体の土器で構成され、下半部を15cm±の深さまで直立の状態に埋設されている。掘り方や土器内部の埋土については明らかではない。

K VIII区

K VIII—251土器埋設遺構（図版203a）

この遺構は、遣り方座標 S 127～128・E 100～102の範囲内に位置する。検出面は基本層序III層上部である。検出時の不手際から、埋設土器は上部に削剝をうけ、僅かに底部付近しか残存していない。残存状況についてみれば、土器はこの遺構に伴う掘り方の内部に直立する状況で存在し、周辺のいわゆる“地山”相当面から5cm±の深さに埋設されている。

この遺構の周辺から、P₁（径20cm±・深さ23cm±）・P₂（径32cm±・深さ32cm±）・P₃（径40cm±・深さ4cm±）・P₄（径29cm±・深さ19cm±）・P₅（径20cm±・深さ40cm±）・P₆（径18cm±・深さ12cm±）・P₇（径25cm±・深さ29cm±）・P₈（径20cm±・深さ40cm±）・P₉（径21cm±・深さ4cm±）・P₁₀（径22cm±・深さ43cm±）・P₁₁（径25cm±・深さ45cm±）・P₁₂（径43cm±・深さ46cm±）など12個のピット群や粒径42cm±を計る安山岩類亜角礫が検出されているが、それらの性格およびこの遺構との関係については明らかではない。

（佐藤 勝）

(6) 溝 址

丘陵頂面から南側崖線に連なる緩斜面を調査したところ、遣り方座標 S 51～73・W 41～51の範囲から、ほぼ南北の方向に弧状に分布する大小6条の溝が検出された。

6条の溝の分布する範囲を俯瞰すると、これらの溝はそれぞれ斜面に沿って多方向に延長する分布状況を示しながらも、基本的には「Y」字状に展開する規模の大きな溝址（H III—301溝址・H III—302溝址）とそれらに接続する4条の規模の小さい溝址（H III—303溝址・H III—304溝址・H III—305溝址・I III—301溝址）から構成される在り方を示している。

これらの溝の形成要因については、人工的なものと捉える見方と自然の営力によって形成されたという、相異なる立場からの考え方が可能であり、その性格については明らかではない。そこで、本稿では個々のものについて事実記載し、そのあとでそれらの関係についてまとめて触れることにする。

H III—301溝址（図版204ab；写真図版50ab・52a・53bc）

この溝址は他の5条と比較して最も長大な規模をもつ。遣り方座標 S 51～71・W 43～47の範囲内に位置し、弧状に展開する在り方を示している。断面形は不整な皿形を呈する。底面は堅く、北縁部は平滑な状況を呈し、南縁部では起伏に富むものとなっている。検出面は、北縁部が基本層序 I c 層下位～II層下位、南縁部が遺物包含層あるいはII層下位となっている。

遣り方座標上の各地点における計測値は、S 55地点(上幅146cm±・下幅27cm±・深さ25cm±)・S 60地点(上幅90cm±・下幅15cm±・深さ20cm±)・S 65地点(上幅170cm±・下幅17cm±・深さ48cm±)・S 70地点(上幅85cm±・下幅17cm±・深さ17cm±)を計る。また、斜面上部にある底面北端と斜面下位にある底面南端との比高は4.13m±を計る。

他の溝址との係りについてみると、遣り方座標S 61～63・W46～47の部分でHⅢ-303・304溝址がその南縁で接続する状況にある。また、HⅢ-302溝址とは、S 66～69・W44～45の地点で接続し、さらにS 70～71・W44～45地点でIⅢ-301溝址と接続する在り方を示している。

溝址以外の遺構との位置関係についてみれば、北縁の消滅して平地化する部分はHⅢ-12住居址群の床面(低位面)と近接する状況にある。遺物包含層との層位関係については、S 60付近からその直下に潜る関係にある。

HⅢ-302溝址(図版204ab; 写真図版50ab・52a・53bc)

この溝址は、規模に関してはHⅢ-301溝址に次ぐものである。遣り方座標S 52～69・W41～45の範囲内に位置し、HⅢ-301溝址の東側を平行に巡り、南縁で同溝址と接続する在り方を示す。溝址群の全体の分布状況にあって、「Y」字の東側半分に相当する部分を構成している。断面形は不整な皿形～U字状に近い形状を呈する。底面の状況は、HⅢ-301溝址と同様に、北縁部が平滑で南縁部ほど凹凸のみられる堅いものとなっている。検出面もHⅢ-301溝址と同じで、北縁部が基本層序I c層下位、南縁部がII層あるいは遺物包含層直下にある。

遣り方座標上の各地点における計測値は、S 55地点(上幅155cm±・下幅12cm±・深さ25cm±)・S 60地点(上幅100cm±・下幅20cm±・深さ14cm±)・S 66地点(上幅129cm±・下幅18cm±・深さ13cm±)を計る。また、斜面上部にある底面北端と斜面下位にある底面南端との比高は3.43m±を計る。

HⅢ-301溝址との関係については前述したとおりであるが、遣り方座標S 61～63・W45付近でHⅢ-305溝址と交叉する状況にある。溝址以外の遺構との位置関係については、北端部でHⅢ-301溝址と同様、HⅢ-12住居址群床面(低位面)と近接する状況にある。層位的にはS 60付近から遺物包含層に覆われる状況にある。

HⅢ-303溝址(図版204ab; 写真図版51ab・52a・53b)

この遺構は、HⅢ-301溝址から北東方向に枝状に延びるあり方を示し、西縁でHⅢ-304溝址と接続する状況にある。遣り方座標S 58～63・W46～50の範囲内に位置する。

断面形は皿形を呈し、底面は僅かに凹凸のみられる堅いものとなっている。この遺構の大部分が遺物包含層によって直接覆われる状況にある。遣り方座標上の各地点における計測値は、W49地点(上幅120cm±・下幅25cm±・深さ10cm±)・S 61地点(上幅85cm±・下幅20cm±・深さ20cm±)を計る。斜面上方に位置する底面北端と斜面下方に位置する底面南端との比高は0.9

m土を計る。

HIII-304溝址と接続する地点は、遣り方座標S58~60・W49~50にある。HIII-301溝址と接続する地点は、S61~62・W46~47である。分布状況においてHIII-301・304溝址と接続し、層位的に遺物包含層下位に存在する以外、他の遺構との重複あるいは近接するような関係は認められない。

HIII-304溝址（図版204ab；写真図版51ab・52a・53b）

遣り方座標S59~63・W46~50の範囲内に位置する。この溝址もHIII-303溝址と同様にHIII-301溝址から北東の方向に枝状に延びる在り方を示す。位置的には大部分がHIII-303溝址の西側にあるが、同遺構とは遣り方座標S59~60・W49~50の地点で接続する。また、HIII-301溝址とは、遣り方座標S62~63・W46~47の地点で接続する。

この遺構はほぼ全体が遺物包含層に覆われる状況にあり、検出面は基本層序II層下位である。断面形は皿形を呈し、底面は僅かに凹凸のみられる堅いものとなっている。遣り方座標上の各地点における計測値は、S60地点（上幅50cm±・下幅10cm±・深さ5cm±）・S62地点（上幅90cm±・下幅15cm±・深さ13cm±）を計る。斜面上方に位置する底面北端と斜面下方に位置する底面南端との比高は1.02m土を計る。

HIII-301・303溝址と接続し、層位的に遺物包含層によってほぼ全面を覆われる関係にある以外、他の遺構との重複関係は認められない。

HIII-305溝址（図版204ab；写真図版51ab・52a）

この溝址は、遣り方座標S59~66・W44~46の範囲内にあって、HIII-302溝址と遣り方座標S61~64・W44~46の地点で交叉する在り方を示す。僅かに北端部付近を除いて、この溝址は遺物包含層に覆われる層位的な重複を示し、検出面は基本層序II層下位に求められる。断面形は皿形を呈し、底面は凹凸の認められる堅緻なものとなっている。

遣り方座標上の各地点における計測値は、S61地点（上幅65cm±・下幅15cm±・深さ17cm±）・S64地点（上幅40cm±・下幅10cm±・深さ10cm±）を計る。斜面上方に位置する底面北端と斜面下方に位置する底面南端との比高は0.85m土を計る。HIII-302溝址と交叉する両者の底面は同じレベルにある。

HIII-302溝址と交叉し、層位的に遺物包含層を載せる状況にある以外、他の遺構との重複は認められない。

I III-301溝址（図版204a；写真図版52a）

この溝址は、遣り方座標S68~73・W42~44の範囲内に位置し、HIII-301溝址とは遣り方座標S70~72・W44付近で接続する在り方を示す。ほぼ全体が遺物包含層に覆われる状況にあり、検出面は基本層序II層下位である。断面形は皿形を呈し、底面は凹凸が認められる堅いものと

なっている。

遣り方座標上の各地点における計測値は、S70地点(上幅149cm±・下幅22cm±・深さ15cm±)・S72地点(上幅120cm±・下幅19cm±・深さ18cm±)を計る。斜面上方に位置する底面北端と斜面下方の底面南端との比高は0.74m±を計る。HⅢ-301溝址と接続し、層位的に遺物包含層を載せる状況にある以外、他の遺構との重複関係は認められない。

この溝址は、他の5条の溝址群よりも南縁に位置し、その南端部は斜面下位の巨岩塊群から湧出するB湧泉まで水平距離で約35m離れた位置にある。

以上、個々の溝址について述べてきた。これらの溝址群の共通性についてまとめてみると、

(i) 溝址群は丘陵頂部から南側崖線に続く斜面に位置する、(ii) 溝址群は6条で構成され、南北に約21m、東西に約10m、高低差約4.7mを計る範囲の斜面に位置する、(iii) それぞれの溝址は他のいずれかの溝址と接続するあり方を示し、単独に離れて存在していない、(iv) 溝址の大部分がⅡ層下位に検出面をもち、遣り方座標S60以南の部分は遺物包含層に覆われる状況にあった、(v) 溝址の横断面形は皿形～U字状を呈し、底面は平滑な部分と凹凸の認められる部分に別れるが、いずれも堅いものとなっている、ということである。

(iv) からみて、溝址群の形成時期が縄文時代前期前半期あるいはそれ以前に位置づけられることについては問題はあるまい。なぜなら、溝址群全体の南半部を覆う遺物包含層から出土した遺物の大半が、膨大な量の縄文時代前期前半期に位置づけられる深鉢形土器の大形破片類であり、遺物包含層の形成時期がその時期に位置づけられるからである。さらに、Ⅱ層は『遺構編Ⅰ』の地形・地質の項(高橋;1980)で述べられているように、縄文時代前期前半期まで形成時期が求められ、遺物包含層とは同時異相の関係にあるからである。

ここで問題となるのは、溝址の形成をめぐって、それが人工のものかあるいは自然のものかということであろう。

人工的なものと捉えた場合、その最大の理由は、形成時期とほぼ同時期と考えられる住居址群が周辺の丘陵頂面一帯(FⅢ区・FⅣ区・GⅢ区・GⅣ区・HⅢ区など)に存在し、溝址群がこれらの住居址群とB湧泉を結ぶその中間に位置することによる。とりわけ、これらの溝址群のうちで規模の大きいHⅢ-301・302溝址がHⅢ-12住居址群の中で最終期に位置づけられる住居址床面の南縁付近から検出され、B湧泉の位置する南側の方向に底面が平滑な状況を呈して延長するあり方を見せることから考えれば、(i)～(v)は溝址群が住居址群とB湧泉を結ぶ途上にあつて斜面部に形成された「道状遺構」の痕跡を示すものではないかと推定できる。

これに対し、溝址群が自然の営力によって形成されたと捉えた場合の大きな理由は、形成要因を「ガリ侵蝕」に求められることである。ガリ侵蝕によって形成されたと見れば、(i)は地形的に発生を促し、(iv)は形成される以前の地表面がⅢ層上面であり、発生を容易ならしめ、

さらに (ii)・(iii)・(v) は各溝址間の争奪、あるいは洗掘の痕跡を示すものとして考えられ、どの項目も形成要因をガリ侵蝕として捉えるのに十分な要件として認定できる可能性を含むものとなっている。つまり、より具体的に類推すると、III層上部の Soft part が地表面であったとすれば、溝址群の諸特徴のうち、斜面に対して直交するに近い分布状況からガリ侵蝕の発生が容易であったと思われ、規模の大きい2条 (H III-301・302溝址) が他の規模の小さい溝 (H III-303・304・305溝址・I III-301溝址) よりも斜面上方から発生し、重力・流水などの諸点で卓越した結果、「Y」字状を形成したと考えられるのである。

だが、それ以外にも形成要因が存在することも考えられる。その一つは、形成を自然+人工の複合形態として捉える考え方である。それは、縄文時代前期前半期あるいはそれ以前にガリ侵蝕によって形成された溝を結果的には、「道」として再利用したという考え方である。この立場からすれば、(i)～(v)の項目は決して否定されるものではなく、高低差があるにも拘わらず近似した横断面形を呈することも、流水の侵蝕が比較的弱いとみられる上端部底面が堅く、平滑なことも十分に考えられる。また、人工的な立場から形成要因をみた場合の「道状遺構」としての存在に成因的には異なるが結びつくものではないかと考えられる。

その二つめは、人口+自然の考え方である。基本的には人工的な意図のもとに形成されたと考えても否定できないが、「Y」字状に分布する溝址は、斜面上方から人為的に発生された、流水によって結果的にはガリ侵蝕と同じような痕跡を残すに至ったという捉え方である。つまり、枝状に延長する溝群の北端部付近から相当量の水と廃棄(排水)すれば細流が発生し、何度かの廃棄行為を重ねたのち、ガリ侵蝕と結果的には同じ状況を示すものと考えられるのである。II層が、土器類・石器類・礫・焼土・炭化物を含み、複合的廃棄によって形成された人為堆積相を示すことや、遺物包含層が多量に廃棄された遺物と土によって埋積形成されたものと考えられることから、位置的に見てもそれ以外の水を対象とした廃棄行為があったとしても、想像に難くない。この場合、溝址群は「排水溝」などとしての性格をもつと考えられよう。

このように、6条の溝址群の性格については、その形成要因を人工と自然という相異なる立場に加えて、今述べた二点のような複合的な立場からの想定が可能であり、現在のところ明らかではないが、今後検討を加え、さらに多くの類例の出現を待つて解決に努めて行きたい。

(佐藤 勝)

(7) 遺物包含層

2ヶ年にわたる調査の中で、丘陵頂面から南に下る緩斜面あるいは南側崖線にかけて、大量の遺物を包含する2つの区或の存在が明らかになった。2つの区域は地形的に丘陵南辺を南方

に開析する谷を中心にして西側と東側に分布するあり方を示している。

本稿では、これらの大量に遺物を包含する部分について遺物包含層（註4）という用語を使用して述べ、分布上の区別から、まず西側の区域について西側遺物包含層、東側の区域を東側遺物包含層と呼称する。以下、それぞれについて記載する。

西側遺物包含層（図版206）

この遺物包含層は、調査区域の中で西側に寄った丘陵頂面から南側崖線沿いに分布する。形成された範囲は、遣り方座標 S 59～102・W 8～75の範囲にあり、崖線沿いの傾斜変換線を挟んで高低差約14mを計る斜面に位置する。分布範囲は、小規模な谷を挟んで北に開口する「凹」字状の平面形を呈し、水平距離で南北に約43m、東西に約67mの広汎な規模を計る。

このような分布範囲の中で、特に遺物が密集して出土した区域は、全体の平面形をさらに縮小した形状を呈し、遣り方座標 S 66～96・W 6～69の範囲に認められる。この遺物密集区における単位面積あたりの遺物出土量は全体の平均値を大きく上回るものとなっている。

層位的には、この遺物包含層の層準は基本層序Ic層とIII層以下に挟まれたII層に求められる。層厚は不定であるが、S 81～87・W 18～21の地点では、30cm±～55cm±を計るものとなっている。

分布する範囲の周辺を見ると、この遺物包含層の北側の丘陵頂面には縄文時代前期前半期の住居址群が存在し、南側の斜面下方には巨岩塊群およびそこから湧出するB湧泉が認められる。また、分布範囲の北西縁で溝址群（H III—301～305溝址・I III—301溝址）と層位的な重複関係にあり、遣り方座標 S 60付近から南側で、溝址群の南半部を直接覆う状況にある。さらに、分布範囲の南端付近では、巨岩塊群の一部を覆う状況にある。この部分については、埋積している層準の下位からIc層に相当する黒色～黒褐色土層が認められているため、この包含層自体の再堆積部分と考えられている。

この遺物包含層の層中には、土器・石器などの遺物のほかに礫・焼土・炭化物なども多量に含まれており、層相はこれらの土器・石器類などの「物」とこれらを包含する暗褐色～黒褐色土の「土」で構成される複合廃棄相を示している。このような遺存する含有物の中で量的に最も多いのが、縄文時代前期前半期に位置づけられる深鉢形土器とその破片類となっている。

出土量を土器・石器類に限って収納したビニール袋（タテ32.3cm±×ヨコ25.2cm±のもの）の数（単位＝個）で表すと、この包含層全域からの出土量は約3200個を数える。これを分布範囲の面積から概算すると、1㎡あたりの出土量は約2個を数えることになる。遺物密集区ではもちろん量的に増加し、たとえば遣り方座標 S 84・W 21付近では1㎡あたり約16個という出土量を示している。

分布範囲において出土量の寡多は認められるが、遺物の出土状況には規則性は認められず、雑然とした重積状況を示している。したがって、廃棄方法について推定すれば、土器片類に限っ

てみると、斜面上方から「投げ捨て」に近い状況で廃棄（または投棄）されたものと考えられる。土器片類以外についても同様のことが言えるであろう。

この遺物包含層の形成時期については、こうした土器片類の存在から、縄文時代前期前半期内と考えられる。

東側遺物包含層（図版205）

この遺物包含層は、調査区域の中で東に寄った丘陵頂面から南側緩斜面上部にかけて分布する。分布が認められたのは、遣り方座標S 92～135・E 80～104の範囲で、調査区外に連続するあり方をみせる。調査区外東側に約70m～80m離れた数ヶ所の露頭や盗掘坑などにも同時期の土器片類が包含されていることから、この包含層の分布範囲はさらに東方に延長するとみられ、今回調査された分布範囲はその西縁に該当する部分と考えられる。

層位的には、この遺物包含層は基本層序Ic層とIII層の間のII層の層準に形成され、II層とは同時異相の関係にある。層厚は不定であるが、J VII-25住居址やJ VII-26住居址などの埋土断面では層厚30cm±～52cm±を計るものとなっている。

分布する範囲をみると、この遺物包含層は分布範囲内に位置する縄文時代前期末葉期に位置づけられる住居址などの遺構群を覆う状況で形成されている。この遺物包含層の層中にも、土器片類のほかには石器類・焼土・炭化物・礫なども多く含まれており、層相はこれらの「物」とこれらを包含する暗褐色～黒褐色土の「土」で構成される複合廃棄相を示している。

このような含有物の中で量的に最も多いのは、縄文時代前期末葉期に位置づけられる土器群である。遺物の出土量を西側包含層同様に遺物を収納したビニール袋の数で表すと、分布範囲での総計は約410個を数える。調査上の不手際から層位的に重複する遺構上部に埋積した遺物については、その遺構ごとに一括遺物として収納したため、この数は分布範囲内において検出された遺構外に埋積した遺物の総数となっている。したがって、面積比から概算して分布範囲全体からの出土量の実数については、倍加するに近い数値を示すものと推定される。

分布範囲内の1㎡あたりの出土量は、それでも約0.9袋という数値を示す。出土量の疎密の状況からみると、東側の調査区境界線に寄るほど増加する傾向にあり、この遺物包含層自体の遺物密集区が、さらに東側に存在するものと推定される。

出土量の最も多い深鉢形土器の破片類の出土状況に限ってみると、雑然とした重積状況を呈し、廃棄のされ方について規則性は認められない。また、他の含有物も同じような産状を呈している。このことから、廃棄方法について推定すれば、これらの「物」および「土」は周辺部から、西側包含層と同様に雑然と廃棄されたものと考えられる。

この遺物包含層の形成時期については、量的に最も多い土器群の存在から縄文時代前期末葉期の期間内に位置づけられよう。

以上、西側包含層と東側包含層について個別に述べてきたが、次にこの2つの区域に認められた遺物包含層について記載された内容から類似または相異なる点を拾ってみることにする。

まず、両者に共通することからについて列記してみると、(ア)両者とも基本層序II層と同時異相の関係にある、(イ)いずれも土器類に限らず、石器類・礫・焼土・炭化物とそれらを包含する暗褐色～黒褐色土によって構成される複合廃棄相を示している、(ウ)土器類を中心にした出土状況をみると、廃棄方法は量的な寡多はあるにしても規則性をもたない雑然とした出土状況から、無造作に投げ捨てたものと考えられる、(エ)それぞれの分布状況が、同時期に認められる住居址群の位置から近接した丘陵の南側緩斜面付近に求められること、などがあげられよう。

これに対し、異なる点は、(オ)形成された時期が、西側遺物包含層が縄文時代前期前半期であるのに対し、東側遺物包含層が縄文時代前期末葉期に位置する、(カ)分布上の位置的なちがいはともかく、西側包含層が溝址群（HⅢ—301～305溝址・IⅢ—301溝址）を除けばほとんど遺構の存在しない緩斜面から崖線付近であるのに、東側遺物包含層は同時期に位置づけられる住居址群を覆う層位的な重複をみせていることなどであろう。

こうした(ア～カ)の諸点はたしかに、2つの区域がそれぞれの時期に集中的に、かつ複合的に廃棄され、同時期の住居址群から近接した位置に形成された、占地上の特殊性をみせるものの、本質的にはどちらの包含層も同時異相の関係にあるII層の形成から捉えられるべきものであろう。II層の形成については、『遺構編Ⅰ』における地形・地質の項（高橋；1980）や『都南村 湯沢遺跡』（三浦；1978）などで述べられている。

この遺物包含層の位置づけについては、II層の形成と関連して、廃棄形態あるいは廃棄行動などの点からより具体的に述べるべきところであるが、『遺物編』の考察中でふれるため、ここでは事実記載だけにとどめる。

（佐藤 勝）

（8）巨岩塊群（図版207；写真図版250）

丘陵頂面から南側崖線付近に分布する西側遺物包含層（II層）の精査に付随して、その下方のIc層あるいはII層下位の層準から熔岩流起源の丘陵構成層ととらえられる巨岩塊群が検出された。この巨岩塊群は紫蘇輝石安山岩からなり、そのうち最も大きいものは粒径約400cmを計る。検出された範囲は、遣り方座標S 92～115・W36～54である。

巨岩塊群の南端部からは、清冽なB湧泉が湧出している。湧出した流水は、沖積新期面を南流したのち堤沢の支流に注ぐ。

巨岩塊群上部に埋積した土層は、基本層序II層以上の層準に比定される。このうち、Ia層およ

び Ic層 upper の堆積が厚く、ことに Ia層は再堆積部ととらえられ、十和田 a 降下火山灰を含む数枚のラミナの発達が見られる。斜面上方から堆積に連続性が認められる遺物包含層は S 90 付近では消滅するあり方を示している。したがって巨岩塊群は北縁部を除いて、大部分が Ic層に被覆される状況にある。

巨岩塊群の一部を覆う遺物包含層から得られた遺物群を除いて、巨岩塊間を直接覆う Ic 層から数地点にわたって出土した遺物群がある。調査上の不手際から全部の出土地点を確定できないため、ここでは①～③の地点にだけ限って述べることにする。

①の地点は、巨岩塊群全体からみれば、北東縁付近にあたり、遣り方座標 S 96～97・W42～43 に位置する。出土した遺物は、縄文時代晩期前半期に位置づけられる壺形土器で、礫間に埋積している黒褐色土 (Ic層) から直立の状況で出土した。

②の地点は、巨岩塊群全体のほぼ中央付近で、遣り方座標 S 102～103・W43～44 に位置する。出土したのは、縄文時代後期前半期に位置づけられる壺形土器で、礫に寄りかかるような状況で出土している。

③の地点は、他の 2 つの地点よりも B 湧泉に近く、巨岩塊群全体からみると南西縁に位置する。遣り方座標上の位置は S 104～105・W47～48 である。出土遺物は、石皿と磨石で、礫間のすき間から近接して斜位の状態で出土している。

このほか、①と②の周辺からは、縄文時代後期中葉期～晩期前半期に位置づけられる壺形土器や鉢形土器などの土器類のほかに、磨製石斧も出土している。

以上、巨岩塊群についての観察結果を記載してきたが、これらのことがらを要約すると次のような推定が可能となろう。

- (1) 巨岩塊群上部に堆積している土層が、II層あるいは Ic層以上の層準にある土層で構成され、形成時期が『遺構編 I』地形・地質の項 (高橋; 1980) で述べられたように縄文時代前期前半期以降に求められることから、巨岩塊群は II層が形成される以前は、今回の調査で最終的に検出された範囲に近い状態で地表面にあらわれていたと考えられ、Ic層の堆積が始まったころについても、II層の分布を除く部分は露出していたであろう。
- (2) 岩塊と岩塊の間から出土した遺物は、埋積した Ic層の形成時期の期間内に位置づけられるものであり、破損の少ないほぼ完形の状態で出土し、特に石皿と磨石が「セット」の状態で出土したことは、これらの遺物が、斜面上方の遺物包含層に廃棄されたのち、斜面を転落して岩塊と岩塊の間に偶然陥入したものではなく、むしろ、Ic層の形成時期の期間内に当時の人間によって出土した位置に埋納されたものと捉えられよう。

このような推定に基いて巨岩塊群についてまとめる前に、類例を紹介すると、湧泉付近の巨岩塊から遺物が出土した例として、崩石遺跡 (四井; 1980) の報告がある。報告の中で四井

は、遺物の出土状況について、「……人為的にその場所に廃棄あるいは埋納された可能性が強いように思われる……」と述べ、前述した(2)と同じような見解を示している。

最後に、これまで述べてきた観察結果や推定から当遺跡で今回調査された、巨岩塊群についてまとめてみると、巨岩塊が検出された範囲は、出土遺物のあり方や層位的な同時性から、少なくとも縄文時代後期前半期～縄文時代晩期前半期まではB湧泉と関連する縄文人の活動の場であったと考えられ、調査範囲内では遺構の検出例が少なかった同時期の活動の痕跡を残すものとして捉えられよう。

(佐藤 勝)

(9) 長者屋敷パターン (図版208)

地形面区分上、丘陵頂面にあつて、東側調査区境界線に寄つた緩斜面一帯から基本層序Ⅲ層起源の火山灰層の分布が認められた。分布が認められたのは、調査区(30m×30m)としてみればHVⅦ～HVⅧ区に相当し、遣り方座標S 35～48・E 72～85の範囲である。

分布状況は北東から南西の方向に延長する帯状を呈し、その規模は幅2.7m±～5.5m±・長さ約16mを計るものとなっている。この火山灰層は、Ⅱ層中に堆積し、上下を焼土・炭化物・土器片と含む暗褐色～黒褐色土層によって挟まれる状況で埋積している。土色は褐色～黄褐色土を呈し、層中には遺物などの含有がまったく認められない新鮮な層相を示している。層厚は不定であるが、S 42・E 73～77に設けられた土層断面観察用畦では10cm±～35cm±を計り、斜面下位で消滅する状況にある。

周辺部についてみると、この火山灰層が分布する斜面上方および下方には、縄文時代中期末葉期に位置づけられる住居址群(HVⅦ-1～5・18～20住居址群)や大型ピット群(HVⅦ-65～69・87フラスコ形ピット)が多く検出されている。

以上のような分布あるいは堆積状況について検討すると、この火山灰層は層準からみて、自然地形面での分布が認められないところから人為的に形成されたものと考えられる。そして、Ⅱ層内にあつて、新鮮な状態で堆積していることから、明らかに「土」だけを対象として廃棄された結果、形成された単純廃棄相を示すものと考えられる。そして、Ⅱ層とは同時異相の関係にあるものと考えられる。

形成時期は、層位的にこの火山灰層を切る関係にあるHVⅦ-2住居址や被覆されるHVⅦ-17住居址を手がかりとすれば、いずれの住居址も縄文時代中期末葉期に位置するところから、同時期内に比定できよう。

さらに、ここで廃棄の対象となった「土」(火山灰層)の出所について推定すると、斜面上方

に検出された大型ピット類などの遺構の掘削または構築に成因を求められるのではないかと推定される。

このように、「土」だけを対象として、遺構外に廃棄したと考えられる例については、当遺跡内では前年度調査された中でもFIV区～FV区における例があり、「長者屋敷パターン」として定義されている。また、遺構外を対象地として「長者屋敷パターン」に対して、廃絶された住居址などの凹地を対象地として「土」を廃棄した場合については「湯沢パターン」の提示がある。

ここで述べられた「長者屋敷パターン」はいずれII層の形成と密接な関係にあり、今後検討を加えたうえで『遺物編』でふれる予定のため、これ以上の記述を避けるが、本質的には遺物包含層などと共に丘陵頂面から南側崖線一帯に展開された複数の廃棄行為の一部として認識され、さらに縄文人の日常生活の一側面としての廃棄行動という観点からとらえられなければならない問題と考えられる。

(佐藤 勝)

註

- (1) 「周溝」を「壁溝」と訂正した。したがって、内容は「遺構編Ⅰ」と同じものを指す。
- (2) この用語の使用については、まだその性格について不明な点が多いところから検討中である。このピット群は、HⅢ-12住居址群で見ると、柱穴と認められるものよりも小規模な数値を計測し、壁際に沿って連続性をもって点在する分布状況を示している。
こうしたことから、このピットの性格について推定してみると、構造的にとらえた場合、住居の上部構造を支える柱穴とは異った機能をもち、壁際にあつて壁の自然崩壊を防ぐ lining 施設あるいは住居の周囲を巡るように構築された施設の痕跡をとどめるものかもしれない。
- (3) 大型ピット類の性格および構造について不明な点が多く、この語の使用についても今後の検討を待たねばならないが、ここではフラスコ形ピットなどの底部から検出されたピットについて暫定的に使用した。推測の域を出るものではないが、筆者はこのようなピットを底部にもつフラスコ形ピットは、その使用に伴って内部を塞ぐ施設を上部に施されたものと考え、このピットはそれを内部からささえる状況で存在した杭などの痕跡をとどめるものではないかと思っている。
- (4) この用語は、本来層中に遺物を含む土層と解釈され、遺物を含むあらゆる土層に対して使用が可能であると考えられる。したがって、この用語の使用については適格性を欠く部分もあると思うが、本稿では調査範囲内において特に集中する状態で遺物が検出された区域の基本層序Ⅱ層に対して、同時異相という観点からこの語を使用した。

参考引用文献

- 梅宮 茂 (1960)：飯野白山住居跡調査報告 福島県文化財調査報告書第8集
- 大池昭二(1972)：十和田火山東麓における完新世テフラの編年、第四紀研究、Vol.11 p.228—235
- (1973)：十和田火山東麓の火山灰、東北の土壌と農業 p.170—177 日本土壌肥料学会大会運営委員会
- (1974)：十和田火山は生きている—まぼろしの有史時代噴火を追って—、国土と教育 Vol.5 p.50—55 築地書館
- 鈴木孝志 (1958)：岩手県岩手郡 松尾村水切場遺跡調査概報 上代文化第28輯
- 佐藤 勝 (1980)：松尾村長者屋敷遺跡Ⅰ (財)岩手県埋蔵文化財センター

(6) その他の遺構 p.116

高橋信雄 (1979) : 長者屋敷遺跡現地説明会資料 (財) 岩手県埋蔵文化財センター

———(1980) : 長者屋敷遺跡 I (財) 岩手県埋蔵文化財センター IV地形・地質
p.14—19

高橋文夫 (1977) : 都南村 湯沢遺跡現地説明会資料 (財) 岩手県埋蔵文化財センター

———(1978) : 都南村 湯沢遺跡 (財) 岩手県埋蔵文化財センター

———(1980) : 長者屋敷遺跡 I (財) 岩手県埋蔵文化財センター (1) 竪穴住居址 p.
91—92

中川久夫・石田琢二・佐藤二郎・松山 力・七崎 修 (1963) : 北上川上流域沿岸の第四系お
よび地形 地質学雑誌 Vol.69 p.164—170

三浦謙一 (1978) : 都南村 湯沢遺跡 (財) 岩手県埋蔵文化財センター V考察 p.182—186

四井謙吉 (1980) : 東北縦貫自動車道関連遺跡 発掘調査報告書 西根町 崩石遺跡 (財)
岩手県埋蔵文化財センター p.107—108

あとがき

地元の古老の話によれば、すでに50年以上も前から長者屋敷遺跡の存在は知られており、当時から積極的に遺物の採集がなされていたという。現在でもこの遺跡と一連の丘陵上の畑地の地表面には、主に縄文時代前期～晩期に含まれる時期を中心とする遺物群が濃密に分布している。また、包含層の形成されている崖線沿いの雑木林中には、新旧とり混ぜた盗掘坑の痕跡をいくつも見出すことができる。2ヵ年に及ぶ調査の中で検出された遺構群も、長者屋敷遺跡の全体的な規模からみれば、ほんの一部を構成しているものにすぎないのであろう。

遺跡の載る地形面は、北側の高嶺沢および南側の堤沢とその支流によって挟まれた、丘陵・低位段丘・沖積古期面である。1978・1979年の調査によって、この遺跡からは、縄文時代前期～晩期にかけての住居址群・フラスコ形ピット群・陥し穴状遺構・配石遺構や平安時代に位置する住居址群などが多数検出されている。これらの遺構群はそれぞれの時代・時期毎に、上記の開析谷や3ヵ所の湧泉（A₁・A₂・B）に強い関連をもちながら、各地形面上に立地しているものと考えられる。

少なくとも調査地内に関するかぎり、長者屋敷遺跡において大規模な集落の形成が認められるのは、縄文時代前期前半期からである。この時期にはB湧泉を中心に集落が形成されたものとみられ、住居址群はそれを取り巻いて配置される在り方を示している。この時期には、大型住居系列に属するものをはじめ住居址の形態も多種多様なものが出現し、また、住居址内にはすでに屋内炉の定着もみられる。前期末葉期になると、占地面で集落はにわかには拡大化の傾向をみせ、丘陵と低位段丘の一部が居住地として利用されるとともに、河川と湧泉との関係も複数的なものに移行していったのではないかと考えられる。住居址群の配置からみて、中期前葉～末葉期の集落も基本的には前期末葉期とほぼ一致した在り方を示しているものであろう。

後期集落については資料が僅かなものにすぎず、その実態は不明である。晩期の時期になると、堤沢沿いの沖積古期面がはじめて居住地として利用されるようになる。このことから、少なくともこの時期には、沖積古期面は安定した状態を呈していたものと考えられる。

平安時代の集落は高嶺沢に沿って形成されている。この対岸にみられる同時代の住居址の存在から考えて、この時代には、高嶺沢の両岸に集落が営まれていたものであろう。

縄文時代の住居址群の重複関係には注目すべきものがある。この時代の住居址群の中では、同じ時期に属する同系列・異系列の住居址間や、時期の異なる住居址群間において、数多くの重複関係を示している事例が観察されている。これらの重複状態は、いくつかの要素の組み合わせ（同時期・異時期、同系列・異系列、部分・完全）から、数形態のものに分類することが

可能である。同時期の住居址群の重複関係内では、壁・床面（貼り床も含む）・柱穴・炉などの再利用形態の存在も知られている。このような中でももっとも問題となるのは、同時期に属する同系列の住居址が、全形を完全に重複させているという事例であろう。長者屋敷遺跡では、このような重複形態が数多く見い出されている。この種の重複関係は、単に住居址の拡張や縮小の概念では捉えきれない問題を多く含むものであると言えよう。

縄文時代の遺物包含層の主体を占めるのはいわば人工遺物であるが、長者屋敷遺跡ではこれらと対極的な関係にある“湯沢パターン”や“長者屋敷パターン”など、「土」を主体にした単純廃棄物がいくつかの地点で確認されている。また、遺物群を多く含む住居址やピット内の堆積物は、マトリックスとしての埋土の層相・起源・堆積過程の検討の結果、その多くは複合廃棄物的な諸様相を呈しているものであることがほぼ明らかにされた。つまり、縄文時代における廃棄の様相は、土器や石器類だけに代表されるものではなく、土・礫・焼土・炭化物（長者屋敷遺跡では見い出されていないが、これらに有機質物が加えられよう）などのユニットから成る廃棄物が、複数組み合って生じているのが一般的な状態ではないかと考えられる。人工遺物が主体を占める遺物包含層も、このような複合的な廃棄物によってそのマトリックス部分が形成されているものであろう。

平安時代では、その中期と考えられる時期に、山間部に集落の形成がみられるようになる。岩手県内では、松尾村や安代町をはじめとして、すでにそのような集落が複数例調査されている。ここで主に問題となるのは、そのような山間部集落の基本的生業形態はどのようなものであったか、という点であろう。筆者らの検討によれば、この時期にはすでに胆沢平野を中心とする内陸部に、散村的な形態を示す集落が出現しはじめるようになる。おそらく、農耕地の拡大と社会構造の変化が、散村集落の形成を促したものであろう。内陸部にこのような変化が徐々に進行していた同時期に、山間部に集落が形成された背景には、基本的生業形態は何かという問題とも関連して、いくつかの大きな意味があるものと考えられる。それは中世社会に移行する胎動と無縁なものではあるまい。

以上、あとがきにかえて、多少、考察めいたことを述べてみた。

（高橋 文夫）

岩手県埋文センター文化財報告書第20集

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書
松尾村長者屋敷遺跡 (Ⅱ)

(本文編Ⅱ)

昭和56年3月20日 印刷

昭和56年3月25日 発行

発行 (財)岩手県埋蔵文化財センター
〒020 岩手県盛岡市向中野字向中野39-1
TEL. (0196) 35-6622

印刷 河北印刷株式会社
〒020 岩手県盛岡市本町通2丁目8番7号
TEL. (0196) 23-4256

© 岩手県埋文センター 1981
